

PeopleSoft®

EnterpriseOne 8.9
エンタープライズ・レポート・ライティング
PeopleBook

2003 年 9 月

PeopleSoft EnterpriseOne 8.9
エンタープライズ・レポート・ライティング PeopleBook
SKU AC89JOR0309

Copyright 2003 PeopleSoft, Inc. All rights reserved.

本書に含まれるすべての内容は、PeopleSoft, Inc. (以下、「ピープルソフト」) が財産権を有する機密情報です。すべての内容は著作権法により保護されており、該当するピープルソフトとの機密保持契約の対象となります。本書のいかなる部分も、ピープルソフトの書面による事前の許可なく複製、コピー、転載することを禁じます。これには電子媒体、画像、複写物、その他あらゆる記録手段を含みます。

本書の内容は予告なく変更される場合があります。ピープルソフトは本書の内容の正確性について責任を負いません。本書で見つかった誤りは書面にてピープルソフトまでお知らせください。

本書に記載されているソフトウェアは著作権によって保護されており、このソフトウェアの使用許諾契約書に基づいてのみ使用が許諾されます。この使用許諾契約書には、開示情報を含むソフトウェアと本書の使用条件が記載されていますのでよくお読みください。

PeopleSoft、PeopleTools、PS/nVision、PeopleCode、PeopleBooks、PeopleTalk、Vantiveはピープルソフトの登録商標です。Pure Internet Architecture、Intelligent Context Manager、The Real-Time Enterpriseはピープルソフトの商標です。その他すべての会社名および製品名は、それぞれの所有者の商標である場合があります。ここに含まれている内容は予告なく変更されることがあります。

オープンソースの開示

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェアが含まれています。Copyright (c) 1999–2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved. このソフトウェアは「現状のまま」提供されるものとし、特定の目的に対する商品性および適格性の黙示保証を含む、いかなる明示または黙示の保証も行いません。Apache Software Foundationおよびその供給業者は、損害の発生原因を問わず、責任の根拠が契約、厳格責任、不法行為（過失および故意を含む）のいずれであっても、また損害の可能性が事前に知らされていたとしても、このソフトウェアの使用によって生じたいかなる直接的損害、間接的損害、付随的損害、特別損害、懲罰的損害、結果的損害に関しても一切責任を負いません。これらの損害には、商品またはサービスの代用調達、使用機会の喪失、データまたは利益の損失、事業の中断が含まれますがこれらに限らないものとします。

ピープルソフトは、いかなるオープンソースまたはシェアウェアのソフトウェアおよび文書の使用または頒布に関しても一切責任を負わず、これらのソフトウェアや文書の使用によって生じたいかなる損害についても保証しません。

目次

エンタープライズ・レポート・ライティングの概要	1
レポート設計ツール	1
レポート・ガイド	2
レポート処理	2
出力管理	2
レポートのコンポーネント	2
レポート・オブジェクト	2
レポート・テンプレート	3
バッチ・バージョン	3
レポート・セクション	3
レポート設計	11
J.D. Edwards の命名規則	14
J.D. Edwards の命名規則の理解	14
バッチ・アプリケーションのオブジェクト命名規則	18
レポート・オブジェクト	22
レポートのデフォルト設定	22
レポート・オブジェクトの作成	22
レポート・オブジェクトの削除	28
既存のレポートを開く	29
詳細セクションの作成	30
詳細セクションの追加	30
ビジネス・ビューの選択	30
詳細セクションへのビジネス・ビュー・カラムの追加	32
セクション・データ順序設定の定義	35
ソート・プロパティの定義	36
セクション・データ選択の定義	38
Report Design Director(レポート設計ディレクタ)	41
カラム・レポートの作成	41
Director による作成結果の検討	53
例: Director を使用したカラム・レポートの作成	53
グループ・レポートの作成	56
Director による作成結果の検討	68
例: Director を使用したグループ・レポートの作成	68
表レポートの作成	71
Director による作成結果の検討	83
例: Director を使用した表レポートの作成	83
Director を使用したアプリケーション・レポートの作成	86

Director による作成結果の検討	108
基本レポート拡張	109
Report Design でのレポートのプレビュー	109
添付ファイルまたはコメントの追加	110
レポート・セクション、フィールド、カラム、ローのプロパティの表示	112
設計ワークスペースのカスタマイズ	116
スマート・フィールドの追加	119
ヘッダー/フッター・セクションの作成	120
レベル区切りヘッダー/フッター・セクションの処理	125
例: 詳細セクションへのレベル区切りの追加	131
サブセクションの結合	134
レポート・セクションのオブジェクトの処理	137
ビジネス・ビュー・カラムの処理	138
データ・フィールドの理解	138
10 進位取りの変更	144
表セクションの処理	145
レポート・オブジェクトの外観の修正	160
詳細セクションの記述の変更	160
レポート・セクションの非表示	161
レポート・セクション内または全体にわたるフィールド/カラムの位置合せ	162
フィールドの長さおよびカラム幅の変更	164
カラム/ローの間隔の変更	166
フォント・プロパティの変更	167
テキスト位置揃えの変更	178
数値フォーマットの変更	178
ラインとボックスの関連付け	179
ページ区切りの挿入	180
上級レポート拡張	182
イベント・ルールの処理	183
テキスト変数の追加および添付	189
システム関数のイベントへの添付	193
イベント・ルール変数の作成	196
カラム組込みと Do Section イベント・ルール	198
カスタム・セクションの作成	200
財務レポート用の日付タイトルの処理	202
財務レポートへの日付タイトルの追加	203
日付タイトルのカスタマイズ	206
会計期間のカラム見出しへの割当て	209
ドリル・ダウン機能の処理	210

ドリル・ダウン機能の使用	210
監査証跡の検討	213
ドリルダウン・ワークテーブルの除去	215
ビジネス・ビューのお気に入りとしての設定	216
お気に入りフォルダまたはサブフォルダの作成	216
ビジネス・ビューのお気に入りフォルダまたはサブフォルダへの追加	218
お気に入り、フォルダ、サブフォルダへの注記の追加	219
お気に入り記述の翻訳	221
処理オプション・テンプレートの処理	222
処理オプション・テンプレートの設計	223
処理オプション・テンプレートのレポートへの添付	227
ディレクタ・テンプレートの処理	229
スマート・フィールド・テンプレートの処理	229
ディレクタ・テンプレートの追加または修正	232
レポートへのテキスト添付の追加	236
レポート・プロパティの処理	241
ダイナミックな配置	244
サーバー/クライアントにおけるダイナミックな配置の使用	244
フォント置換の定義	245
レポートのフォント置換の有効化/無効化	246
レポート・テンプレートへのフォント置換の適用	246
財務ロー・レポートでのビジネス・ビューV8300005 の使用	247

レポート用バッチ・バージョン	248
バッチ・バージョンの特徴	248
Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成	249
バッチ・バージョンの処理	249
バッチ・バージョンの実行	250
バッチ・バージョンの処理フォームへのアクセス	251
バッチ・バージョンの設計変更	251
バッチ・バージョンに対する処理オプションの変更	254
バッチ・バージョン用データ選択およびデータ順序設定へのアクセス	257
処理オプションのレポート作成	259
テーブル変換バージョンのプロパティへのアクセス	260
バッチ・バージョン用バージョン詳細の処理	261
バッチ・バージョンのコピー	263
バッチ・バージョンの作成	264
バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン	267
バージョンのチェックアウト・レコードの消去	268
バッチ・バージョン(P98305)の処理オプションの変更	268
バッチ・バージョン・スペックのエンタープライズ・サーバーへの移動	269
バージョン・スペックの一時変更	270
レポートまたはバージョン用の BrowsER へのアクセス	271
データベース出力の理解	273
レポート処理	279
バッチ処理の理解	280
レポート・セクション	280
セクション処理の理解	283
グループ・セクションおよびカラム・セクションの処理	283
表セクションの処理	285
結合セクションへのロジックの添付	287
データ選択および順序設定	287
カスタム・セクションの理解	288
レベル区切り処理の理解	289
Level-Break Section イベント	291
バッチ・イベントの理解	292
Do_Section イベント	292
その他のバッチ・イベント	293
バッチ・イベント内のシステム関数	297
バッチ・ランタイム処理の理解	298

使用可能なオブジェクト	298
グループ・セクションの一般的なイベントのフロー	299
レポート出力	308
レポート設計の印刷プロパティ	308
指定プリンタの一時変更	308
用紙タイプの選択	309
印刷の向きの指定	310
CSV(カンマ区切り)形式ファイルへのエクスポート	311
K2DoInitPrinter システム関数の使用	313
レポート投入時の印刷プロパティ	313
プリンタの指定	313
用紙タイプの選択	314
印刷の向きの指定	314
[すぐに印刷]オプションの使用	314
SavePDL ファイル・オプションの使用	314
CSV(カンマ区切り)形式ファイルへのエクスポート	315
プリンタ情報の保管および受渡し	315
クライアント上でのジョブ投入	316
レポート投入	317
レポートの投入	317
レポートのバッチ投入	317
処理オプションの定義	321
データ選択およびデータ順序設定の一時変更	322
上級オプション一時変更の使用	324
コマンド行からのジョブ投入	326
投入済みレポートの処理	329
レポート状況のチェック	329
レポートの表示および印刷	331
エラーの検討	333
待ち行列でのレポートの保留およびリリース	333
レポート出力の処理	334
サブシステム・ジョブの理解	335
サブシステム・ジョブの定義	337
サブシステム・テーブルへの API レコードの追加	338
例: サブシステム・ジョブ・ヘッダー・ファイル	339
レポートの印刷管理	342
印刷の理解	342
サーバーでのレポート実行	343
ワークステーションでのレポート実行	343
印刷時の特徴	343
ワークステーション jde.ini での印刷設定	344
プリンタ定義プログラムの処理	344

レポート・ログの生成および取込み	363
ヌル・パススルー印刷フィルタの設定	365
ライン・プリンタで実行するレポートの設計	366
バーコード・フォントを使用するためのプリンタの設定	369

追加情報 371

編集コード・テーブル	371
イベント	373
イベントおよびセクション・タイプ	373
使用可能なオブジェクト	377
サンプル・レポート	387
レポートの例	387
情報リストの印刷	412
特定フィールドでグループ化した情報リストの印刷	415
合計の印刷および数字データの監査	418
レポート設計による仕訳の作成	421
J.D. Edwards のレポート	424
一般会計	424
人事管理および給与管理	425
在庫管理	425
製造データ管理 - 組立製造	426
スマート・フィールド	426
スマート・フィールドの作成	427
スマート・フィールド・テンプレートの作成	441
レポート・ディレクタ・テンプレートの作成	444
スマート・フィールドを使用した新規レポートの作成	448
レポートの理解	454
OSA (Output Stream Access/出力ストリーム・アクセス)	455
OSA インターフェイスの作成と関連付け	456
OSA ライブラリの作成	459

エンタープライズ・レポート・ライティングの概要

J.D. Edwards のソフトウェアは、企業全体の情報を管理するため、統合されたアプリケーション環境を提供しています。管理する情報には、従業員データ、売掛データ、買掛データ、その他の会計データなどがあります。J.D. Edwards のソフトウェアを使用すると、この情報を検討してビジネスの収益性を向上するために重要な決定を行うことができます。また、このデータを株主や従業員、ビジネス・コンサルタントなど関係者に配布することもできます。

J.D. Edwards ソフトウェアが提供するレポートを使用すると、これらのデータをオンラインでも印刷した紙の上でも整った使いやすいフォーマットで表示することができます。J.D. Edwards のソフトウェアには、レポート・テンプレートが含まれており、一般的な用途に使用することができます。ただし、レポートにはユーザー独自の目的に作成するものもあります。このような目的や条件を満たすために、ビジネスに重要な情報を抽出して説明できるレポートを設計する必要があります。レポート設計ツールを使用すると、レポート・テンプレートを設計またはカスタマイズすることができます。

J.D. Edwards のレポート・ライティングのソリューションにはレポート設計ツールがあり、レポートやバッチ処理、処理用のバッチ・エンジン、および情報を出力する出力管理システムを作成できます。

レポート設計ツール

レポート設計ツールを使用すると、さまざまなレポートを作成できます。〈Report Design (レポート設計)〉のインターフェイスは簡単でわかりやすく、プログラミングの知識がなくても使用できると同時に、複雑なレポートも作成できます。〈Report Design〉を使用すると、バッチ・アプリケーションやレポートを作成できます。

〈Report Design〉では〈Report Design Director (レポート設計ディレクタ)〉=〈Director (ディレクタ)〉を使用し、ユーザーがステップに従ってレポートを作成できるように指示していきます。財務レポートなどの特定のレポートも含め、さまざまなタイプのレポートを作成できます。さらに、〈Director〉は、条件や目的に応じる多種多様なレポートを作成できるように設定することもできます。

〈Director〉を使用して最初のレポートを作成した後で、次のことを行ってレポートを修正することができます。

- レポート・セクションの追加
- フォーマット
- 配置
- ビジネス・ロジックの処理
- カラム計算および比較

〈Report Design〉を使用することにより、〈Report Design〉フォーム上のワークスペースに対する優先情報を設定することもできます。設計ワークスペースは、ユーザー・オプションを変更したり、ツールバーを選択したり、縮小したウィンドウを移動することによって環境設定することができます。

〈Report Design〉はターミナル・サーバーでも使用できます。ただし、ターミナル・サーバーでレポート・テンプレートをチェックアウトすると、別のターミナル・サーバーのユーザーは、テンプレートにアクセスすることができなくなります。

レポート・ガイド

J.D. Edwards では、会計、人事管理、流通とロジスティクス、および製造など、300 以上のレポートを提供しています。これらのアプリケーション・レポートは簡単に生成でき、オンラインまたは Adobe Acrobat で表示できます。これらのレポートは、スプレッドシート・プログラムなど他のソフトウェア・アプリケーションで表示することもできます。J.D. Edwards のレポートは、新規作成せずに、コピーして特定の条件に合うようにカスタマイズできます。

参照

- 特定のアプリケーションのサンプル・リストについては「サンプル・レポート」

レポート処理

レポートの処理はバッチ処理の 1 種です。設計して処理に投入されたレポートはバッチ処理となります。いったん投入すると、バッチは実行し続けます。設計して処理に投入されたレポートはバッチ処理となります。

バッチ処理が起動すると、バッチ処理内でのロジックのフローは制御できません。ロジックのフローを変更する場合は、〈Report Design〉を使って変更し、そのレポートを再投入する必要があります。

出力管理

通常、レポートが作成されると出力して確認します。レポートは異なるファイル・タイプ、プリンタ、フォーム、および用紙サイズで作成できます。J.D. Edwards ソフトウェアでは、簡単な出力処理（オンラインによる作成か、プリンタに出力するか）の他にも、複雑な出力処理（バッチ処理を実行して同じレポートを 3 つの異なるバージョンで 3 つの異なるプリンタに出力する）をサポートしています。

レポートのコンポーネント

レポートは J.D. Edwards のソフトウェアに含まれており、ソフトウェアが識別して処理できるコンポーネントの集まりです。1 つのテンプレートに基づいて、さまざまなレポートを作成します。レポート作成の最初のステップとして、J.D. Edwards ソフトウェアにレポート・オブジェクトを作成します。作成するレポートは、追加のバージョンが作成される基となるテンプレートとなります。

各レポートは、1 つまたは複数のセクションから構成されます。レポート・セクションとはレポートの構成ブロックです。テンプレートのレポート・セクションの追加、削除、再編成はいつでも行うことができます。

レポート・オブジェクト

J.D. Edwards のソフトウェアは、オブジェクト・ベースのアプリケーションです。各レポートは〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で UBE（ユニバーサル・バッチ・エンジン）オブジェクトとして定義されています。レポート・オブジェクトを追加するときには、レポートの名称と記述などの情報を含むヘッダー・レコードが作成されます。ヘッダー・レコードは、オブジェクト・ライブラリアン・マスター(F9860)に保管されます。

レポート・テンプレート

レポート・テンプレートには、マスター・スペックが保存されており、マスター・スペックは〈Report Design〉を使用して追加します。スペックには、データの選択、ソート、整理、フォーマット方法などの情報が含まれます。テンプレートは、レポートの全バージョンの基準となります。

バッチ・バージョン

多くのテンプレートのプロパティはバージョン・レベルで一時変更できます。プロパティにはデータ選択、データ順序、イベント・ルール、レイアウトなどが含まれます。バッチ・バージョンでは、テンプレートの整合性が保たれます。各バージョンにテンプレートを作成する代わりに、1つのテンプレートを基に異なるバージョンをいくつか作成することができます。たとえば、会社全体の合計を表示した月次差異レポートを設計するとします。西部地域のデータのみを表示する四半期差異レポートを出力する場合、月次差異レポートのバージョンを作成すると、西部地域のみに関する四半期差異レポートを簡単に作成できます。

各バッチ・バージョンは、特定のレポート・テンプレートを基準としています。通常、バッチ・バージョンでは、表示するデータまたは処理オプションが基準のレポート・テンプレートとは異なります。バッチ・バージョンにより、テンプレートで指定されているスペックが処理され、バージョンで一時変更された変更も処理されます。バッチ・バージョンを追加する場合は、既存のバッチ・バージョンをコピーします。

レポート・セクション

レポート・セクションとは、レポートの基本的なコンポーネントです。ほとんどのレポートには1つまたは複数のセクションがあります。セクションは、他のセクションに関連付けることも、計算や合計などの特別な目的に使用することもできます。レポート・セクションは次のとおりです。

- ヘッダー・セクション
- フッター・セクション

ヘッダー/フッター・セクションは、ページやレポートの一番上または下に表示されます。固定情報および変数データ・フィールドが使用されます。

- 詳細セクション

詳細セクションには、レポートの作成目的となる情報が含まれます。詳細セクションには、3つのタイプがあります。

- Columnar(カラム)
- Group(グループ)
- Tabular(表)

詳細セクションに表示されるデータはビジネス・ビューに基づきます。ビジネス・ビューは、データベース・テーブルのデータにアクセスするのに使用されます。ビジネス・ビューとは、レポートでデータが使用される1つまたは複数の特定のテーブルのカラムを選択する方法を表します。ビジネス・ビューからデータ・フィールドを選択することにより、データベースのデータと作成しているレポートがリンクされます。

ビジネス・ビュー・カラムを選択してレポート・セクションを作成する他に、固定情報や変数などのデータ・フィールドを定義して追加できます。

レポートで「同じレベル」とは、フィールドの 1 つに同じ値を持つレコードセットのことをいいます。たとえば、電話番号によってソートしたレポートの場合、同じ市外局番を持つすべてのレコードは同じレベルにあります。そのフィールドの値が変化すると、「レベル区切り」が発生します。レベル区切りは、発生すると処理を追加できるため便利です。セクション・タイプには、レベル区切りヘッダーとレベル区切りフッターという 2 つのレポート・セクションがあります。

- レベル区切りヘッダー・セクション
- レベル区切りフッター・セクション

カラム・セクションの特徴

Columnar (カラム) セクションは、カラム見出しとその下にリストされた関連する値で構成されています。各データ・フィールドはカラムとして、各レコードはローとして表示されます。カラム見出しは、カラム・データとリンクしており、レポートでは切り離せません。どちらかが削除されると、もう一方も同じように削除されます。カラム・フォーマットは変更できないため、カラム・セクションは最も柔軟性の少ない詳細セクションです。

次の例はカラム・セクションを表しています。

カラム・セクション

住所番号	名称	地域コード	検索タイプ
1001	ABC事務機器	DEN	C
1556	XYZ Manufacturing	NYC	C
1785	Abbot, Dominique	TOR	E
3452	Paper Suppliers, Inc.	CHI	V

カラム・セクションでは、次の処理を行うことができます。

- ビジネス・ビューを添付する。
- ビジネス・ビューのデータ・フィールドに基づいてデータ順序を設定し、レベル区切りを指示する。
- 指定した条件に基づくデータを選択する。
- レベル区切りセクションを使ってカラムを合計する。
- イベント・ルール (作成した後レポート・オブジェクトに添付するロジック宣言) を添付する。
- ビジネス関数 (ロジック宣言に関連する集まり) を呼び出す。

- システム関数を呼び出す。システム関数とは ERP オブジェクトでの操作を行うロジックで、ワークフローなどがあります。
- サブセクションの結合を使用する。
- セクション条件を作る(特定の条件が真の場合のみ処理を行うようにする)。

レポートには複数のカラム・セクションを組み込むことができます。

レベル区切りヘッダーと合計をカラム・レポートに印刷するには、レベル区切りヘッダー・セクションとレベル区切りフッター・セクションが必要です。レベル区切りが発生すると、カラム見出しの上にレベル区切りヘッダーが印刷されます。

参照

次のトピックを参照してください。

- イベント・ルールの作成については「イベント・ルールの処理」
- システム関数については「システム関数のイベントへの添付」
- サブセクションの結合については「サブセクションの結合」

カラム・セクションを使用する場合

カラム・セクションを使用するかどうかの基準は次のとおりです。

- カラムのレイアウトが適している。
- レポートの合計レベルのほとんどが静的であり、実行時に変更されない。
- セクションを結合する必要がある。
- セクションに条件が必要である。

グループ・セクションの特徴

Group (グループ) セクションはレイアウトが自由で、標準カラムおよびローのレイアウトに制限されません。このセクション・タイプは、フィールドをグループ・セクション内のどの位置にも置くことができるので、最も柔軟性があります。グループ・セクションのデータ・フィールドはデータベース・グループと呼ばれます。データベース・グループは固定情報と変数から構成されます。最初はデータベース・グループの固定情報と変数は連結されていますが、レポートの条件や目的に合わせて切り離すことができます。グループ・セクションは自由形式レイアウトであるため、通常、レベル区切りヘッダーおよびレベル区切りフッター・セクションに使用されます。

次の例はグループ・セクションを表しています。

グループ・セクション

1001	ABC事務機器 DEN
1556	XYZ製作所 NYC
1785	Abbot, Dominique TOR
3452	製紙株式会社 CHI

グループ・セクションでは、次の処理を行うことができます。

- ビジネス・ビューを添付する。
- ビジネス・ビューのデータ・フィールドに基づいてデータ順序を設定し、レベル区切りを指示する。
- 指定した条件に基づくデータを選択する。
- レベル区切りセクションを使ってカラムを合計する。
- イベント・ルール(作成した後レポート・オブジェクトに添付するロジック宣言)を添付する。
- ビジネス関数(ロジック宣言に関連する集まり)を呼び出す。
- システム関数を呼び出す。システム関数とは ERP オブジェクトでの操作を行うロジックで、ワークフローなどがあります。
- サブセクションの結合を追加する。
- セクション条件を作る(特定の条件が真の場合のみ処理を行うようにする)。

1 つのレポートに対して複数のグループ・セクションを使用することができます。グループ内の記述または見出しは、各ローごとに印刷されます。

レベル区切りヘッダーおよび合計をグループ・レポートに印刷するには、レベル区切りヘッダー・セクションとレベル区切りフッター・セクションが必要です。

参照

次のトピックを参照してください。

- イベント・ルールの作成については「イベント・ルールの処理」
- システム関数については「システム関数のイベントへの添付」
- サブセクションの結合については「サブセクションの結合」

グループ・セクションを使用する場合

グループ・セクションを使用するかどうかを判断する基準は次のとおりです。

- 自由形式のレイアウトが適している。
- レポートの合計レベルのほとんどが静的であり、実行時に変更されない。
- セクションを結合する必要がある。
- セクションに条件が必要である。

表セクションの特徴

Tabular(表)セクションはカラム・セクションと同じようにカラム/ローフォーマットで表示されますが、スプレッドシート機能が組み込まれる点に特徴があります。このため、表セクションは、小計と合計で集計する数字データを表示するのに最適です。

次の例は表セクションを表しています。

表セクション

勘定科目名	6月転記額
収益	376,697
売上原価	272,091
売上総利益	104,606
経費	63,911
当期利益	168,517

表セクションでは、次の処理を行うことができます。

- ビジネス・ビューを添付する。
- ビジネス・ビューのデータ・フィールドに基づいてデータ順序を設定し、レベル区切りを指示する。
- 指定した条件に基づくデータを選択する。
- 合計を計算する。
- イベント・ルール(作成した後レポート・オブジェクトに添付するロジック宣言)を添付する。
- ビジネス関数(ロジック宣言に関連する集まり)を呼び出す。
- システム関数を呼び出す。システム関数とは ERP オブジェクトでの操作を行うロジックで、ワークフローなどがあります。
- カラム・レベルでデータを選択する。
- ドリルダウン機能を使用する(レポート出力データと関連アプリケーション間のリンクを作成して、レポート内の値を検索することができる)。

1 つのレポートには複数の表セクションを組み込むことができます。レベル区切りフィールドが変更されると、このセクションが処理されます。

表セクションは、自動的に[記述]カラムを含みます。このカラムには、データ順序設定およびレベル区切りフィールドに基づいてローの記述が表示されます。

表セクションにおいては、集計は動的に行われます。カラムに集計が必要でない場合は、集計機能をオフにしておくことができます。集計ロジックは表セクションに組み込まれているため、合計に対してレベル区切りヘッダー/フッターを使用する必要はありません。そのため、レポートを再設計せずに集計を変更できます。

参照

次のトピックを参照してください。

- 「イベント・ルールの処理」
- 「システム関数のイベントへの添付」
- 「サブセクションの結合」
- 「ドリル・ダウン機能の処理」

表セクションの利点

表レポートには次の利点があります。

- 集計を自動的に行う。
- 監査証跡をドリル・ダウン機能で作成できる。
- レベル区切りを指定することで、集計レベルを簡単に変更できる。
- [記述]カラムに複数の記述を表示できる。

表セクションを使用する場合

表セクションを使用するかどうかを判断する基準は次のとおりです。

- ロー・レベルの処理が必要である(計算ローなど)。
- 個々のセルのプロパティを変更する。
- レポートの集計を行う。
- 集計レベルを頻繁に変更する。
- カラム、ロー、セル・レベルでデータ選択を行う。
- 合計を計算する。
- ドリルダウン機能を行う。

レポート・ヘッダー・セクションの特徴

レポートの開始部分にはヘッダーを1つだけ入れることができます。レポート・ヘッダーにはレポート・タイトル、レポートを処理した日付、およびレポートを受け取ったユーザーの名前を含むことができます。通常、レポート・ヘッダーには、固定情報フィールド、固定情報や実行時フィールド、名称、数字、およびデータ変数などが含まれます。

次の例は、レポートに表示されるレポート・ヘッダーを表しています。

レポート・ヘッダー

XYZ製造会社 第四四半期財務レポート
期間終了2005/12/31 内部使用のみ

ページ・フッター・セクションの特徴

フッターは、レポート・ページの終りの部分に 1 つ入れることができます。たとえば、ページ・フッターには、そのレポートの記載項目についての記述などを入れることができます。通常、固定情報フィールド、テキスト、数字、日付変数などが、レポート・フッターに含まれます。

次の例は、レポートに表示されるページ・フッターを表しています。

ページ・フッター

このページには、単一地域または事業所の収益情報が反映されています。

レポート設計

レポートを作成するには、まずレポートが機能的で使いやすいように設計する必要があります。
〈Report Design〉では、質問形式によりレポートのモデル作成、レポートに含めるセクションの指定などを行っています。

考慮事項

ユーザーの必要とするレポートを作成するためには、次の点を明確にしておく必要があります。

- レポートの目的は何か。
- レポートを使用するのは誰か。
- レポートで求められるものは何か。
- レポートのどの情報がデータベースから直接取り込まれたもので、どの情報を計算する必要があるか。
- 使用に最も適したビジネス・ビューは何か。
- レポートに表示するデータ・フィールドおよびレコードは何か。
- データの表示順序は何か。
- 情報を表示するフォーマットとして最も適切なものはどれか。
- 現在この情報を作成するのにどのレポートが使用されているか。
- コピー、修正して使用できる既存のレポートがあるか。
- 既存レポートの新しいバージョンがユーザーのニーズに合うか。
- レポートはどの程度の頻繁で実行するか。
- レポートの結果を OSA(出力ストリーム・アクセス)や CSV(カンマ区切り)形式で別のソフトウェアにエクスポートする必要があるか。

レポート・モデルの作成

ユーザーのニーズをすべて明確にしたら、レポート・モデルを作成します。レポート・モデルにより、データをどのようにフォーマットするか、どのセクション・タイプが最適化かわかりやすくなります。

たとえば、請求書や受注用のレポートを作成するとします。レポート・モデルのサンプルは次のようになります。

レポートのコンポーネント

R09450 34四半期収益 12/31/96 09:15:54 ページ: 1					ページ・ヘッダー・セクション
ABC事務用品-1244					レベル区切りヘッダー (グループ・セクション)
伝票タイプ	伝票番号	支払期日	金額		カラム・セクション
PV PV	101 102	07/31/96	100.00		
		07/31/96	150.00		
			合計収益	250.00	レベル区切りフッター (グループ・セクション)
XYZ製造会社-8856					
伝票タイプ	伝票番号	支払期日	金額		
PV PV	505 506	07/31/96	225.00		
		08/15/97	225.00		
			合計収益	450.00	
			総合計	700.00	合計 (グループ・セクション)

レポート・セクションの決定

モデルについてユーザーと合意したら、レポートのセクションを決定します。前の例では、レポートには、一般情報を提供するページ・ヘッダー・セクション、勘定科目情報と小計を表示するレベル区切りヘッダー/フッター(グループ・セクション)、データをカラム・フォーマットで表示するカラム・セクション、合計を表示するグループ・セクションを含めることを決定しました。

レポートに含めるセクションを決定するには、次の点を明確にしておく必要があります。

- 情報をより明確にするためのレポート・ヘッダーがレポートの最初に必要かどうか。
- レポートの機能などを目立たせるためのレポート・フッターがレポートの最後に必要かどうか。
- レポートの各ページに情報を表示するためのページ・ヘッダーが必要かどうか。
- レポートの各ページに重要な情報を表示するためのページ・フッターが必要かどうか。
- レポートに必要なデータ・フィールドを含んだ既存のビジネス・ビューがあるかどうか。
- サブセクションを結合する必要があるか。
- 情報の表示に最適なフォーマットはどれか。
 - 自由形式のグループ・セクションにするかどうか。
 - カラム形式のカラム・セクションと表セクションのどちらを使用するか。
 - レポートにローを作成するために表セクションの柔軟性が必要かどうか。
- グループまたはカラム・セクションを使用する場合、レベル区切りヘッダーや集計目的のためのレベル区切りフッターを追加する必要があるかどうか。
- 表セクションの自動集計機能は、レポートに対して最適な選択かどうか。
- 特定のアプリケーション・レポートを作成するのに役立つディレクタ・テンプレートが存在するかどうか。
- ディレクタ・テンプレートを修正して使用するか、それとも新規に作成するか。
- ビジネス・ビューからのデータ・フィールドおよびレコードはどのように順序設定するか。
- ビジネス・ビューからのローはどのようにソートするか。
- レポートをより使いやすくするためには、レポート・オブジェクトにどのような拡張を加えたらよいのか。たとえば、あるカラムの情報を強調するためにカラム・スペース設定を変更したり、情報を目立たせるためにカラム内容のフォント・サイズを変更する、などがあります。
- レポートに条件、計算、その他のロジックを定義するイベント・ルールが必要かどうか。
- 監査証跡が必要かどうか。

レポートを設計したら、実際に<Report Design Director>でレポートを作成することができます。

参照

次のトピックを参照してください。

- 各セクション・タイプの特徴と、セクション・タイプの選択基準については、「レポート・セクション」
- このツールを使ったレポートの作成については「Report Design Director (Report Design Director (レポート設計ディレクタ))」
- レポートの外観および動作を修正するには「レポートの基本拡張」
- レポートの外観および動作を修正するには「レポートの上級拡張」
- バッチ・バージョンの作成および修正については「レポートのバッチ・バージョン」
- データと処理オプションの選択方法、およびレポートの表示/印刷方法については「レポートの投入」

J.D. Edwards の命名規則

開発者およびユーザーに一貫性を提供するために、すべての J.D. Edwards オブジェクトは標準の命名規則に従っています。命名規則では、テーブルやレポート、対話型アプリケーションなどの各オブジェクトには固有名を指定する必要があります。命名規則に従うと、オブジェクトのタイプを識別して、重複する名前のオブジェクトを作成しないように防ぐことができます。

J.D. Edwards の命名規則の理解

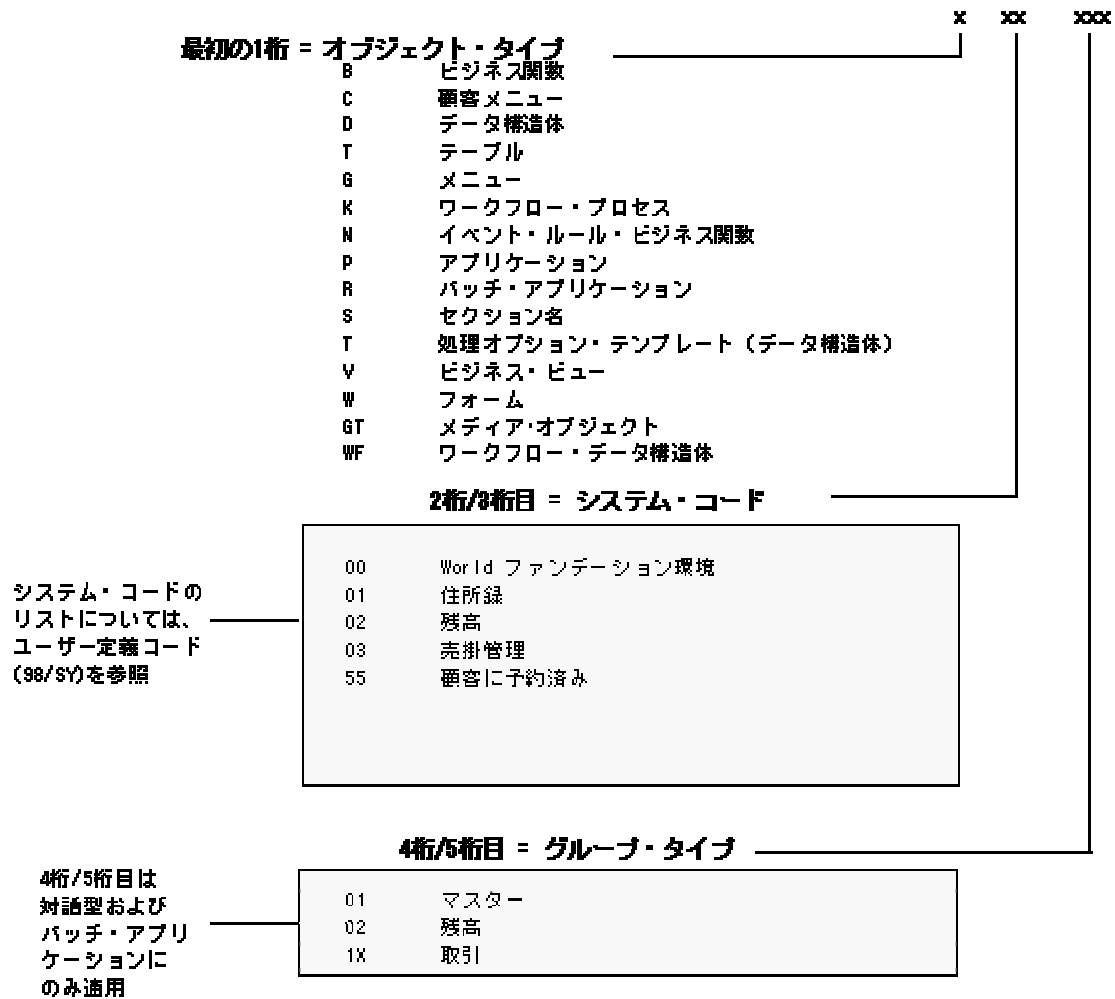
J.D. Edwards アプリケーションは複数のオブジェクトから構成されています。オブジェクト内では特性を定義することができます。たとえばテーブルを作成する際に、テーブル内で複数のテーブルから構成されるキーを指定できます。テーブルのインデックスを作成する際には、標準に従ってインデックスを命名します。

新しいオブジェクトを作成する際は、オブジェクトに名前を付けて説明を加えてください。命名規則を使用すると、作成する各オブジェクト・タイプの標準を使用できます。

オブジェクトの命名規則

次の図は、オブジェクトに名前を付ける際のステップを示しています。

オブジェクトの命名規則



BとMはビジネス関数名を表します。これらの関数は自動採番を使用します。

Dはデータ構造体（ビジネス関数と共に使用される）を表します。ビジネス関数に使用されるデータ構造体と同じ命名規則を使用してください。テーブル変換にはR889*を使用してください。

システム・コード

システム・コードはオブジェクト名に含まれています。J.D. Edwards のシステム・コードについては UDC テーブル(98/SY)を参照してください。

J.D. Edwards カスタム・ワークを実行している場合は、システム・コード 60 から 69 を使用してください。

レポート・フッター・セクションの特徴

Report Footer(レポート・フッター)は、レポートに 1 つだけ含めることができ、レポートの最後に印刷されます。たとえば、レポート・フッターには、このレポートが社内用であることを示す覚え書を含むこともできます。通常、固定情報フィールド、テキスト、数字、日付変数などが、レポート・フッターに含まれます。

次の例は、レポートに表示されるレポート・ヘッダーを表しています。

レポート・フッター

このレポートに記載された情報は、すべて弊社の独占財産です。

ページ・ヘッダー・セクションの特徴

レポートのページ開始部分にはページ・ヘッダーを 1 つだけ入れることができます。たとえば、ページ・ヘッダーには、会社名、タイトル、ページ番号、日付を入れることができます。ページ・ヘッダーは、通常、システムにより作成されます。ただし、ユーザーが独自のページ・ヘッダーを作成して、固定情報フィールド、テキスト、数字/日付変数、ランタイム・フィールドを表示することも可能です。

次の図は、レポートに表示されるページ・ヘッダーを表しています。

ページ・ヘッダー

R09450

XYZ製作所

12/31/98 09:15:54

四半期収益

ページ 1

図では、テーブル、フォーム、およびアプリケーションの命名規則の例を示しています。

テーブル	F	09	01
勘定科目マスター	F	09	01
オブジェクト・タイプ TBLE			
システム・コード (一般会計)			
オブジェクト・グループ・タイプ (マスター)			

フォーム	F	09	01
オブジェクト・プレフィックスのWはフォームに自動的に割り当てられます。	F	09	01
システム・コード (一般会計)			
オブジェクト・グループ (ファイル管理)			

アプリケーション	P	09	01
オブジェクト・タイプ APPL	P	09	01
システム・コード (一般会計)			
オブジェクト・グループ・タイプ (ファイル管理)			

テーブル変換	R	89	3111
オブジェクト・タイプ	R	89	3111
システム・コード すべてのテーブル変換はシステム・コード89にあります。			
変換されるテーブル			

J.D. Edwards ソフトウェアでは、異なる用語や言語を使用できるように、フォームやレポートのテキストを一時変更することができます。ただし、一時変更する場合は次の点に注意してください。

- データ辞書では、アプリケーション一時変更を使用してシステム全体のテキストを一時変更できますが、〈フォーム設計ツール〉や〈レポート設計ツール〉でテキストを再度一時変更する場合は、アプリケーション一時変更用語は表示されません。
- テキスト変数を使って、異なる条件で別のテキストを表示することができます。ただしこの場合、フォームやレポートに翻訳するのに必要なスペースがあるかどうか判断しにくくなります。

バッチ・アプリケーションのオブジェクト命名規則

オブジェクト命名規則により、一貫性を維持し、バッチ・アプリケーションを検索しやすくします。

バッチ・アプリケーション

オブジェクト命名規則により、一貫性を維持し、バッチ・アプリケーションを検索しやすくします。バッチ・アプリケーションの命名規則は、8 文字以下で Rxyyyyy のように指定します。(例: R09800、R30440)

R = バッチ(レポート)アプリケーション

xx = システム・コード

yyyyy = AS/400 と同じ命名規則に従ってください。

[Function Use(関数の使用)]フィールドでは、AS/400 と同じ命名規則に従います。

130-139 = バッチ・プロセス

160-169 = レポート

レポート・カテゴリ・コードはフォーム設計と同じ命名規則に従ってください。

セクション名

レポート内のセクション名は、10 文字以下で SzzzzzzzzA のように指定します。(例: S09800A、S30440B)

S = レポート・セクション名

zzzzzzzz = プログラム名

A = 順番に割り当てられた文字

ツール・セットでは自動採番が使用され、自動的にセクション名が割り当てられます。S1、S2、S3 などがあります。

セクション記述には、バッチ合計セクション、支払レベル区切りヘッダー・セクションなどの、セクション・タイプが含まれます。

レポートの取込時には、セクションは論理的に並んでいる必要があります。

テーブルの除去プログラム

テーブル変換バッチ削除は J.D. Edwards ソフトウェアの汎用的な除去プログラムで、選択したレコードをテーブルから削除し、バックアップ・ファイルに保管します。このバッチ・プログラムをしてテーブルを除去するには、新規バージョンを作成せずに、まずオブジェクト管理ワークベンチ(OMW)でテーブル変換を作成する必要があります。

除去テーブル変換名は 8 文字以下で指定します。(例:Pxxxxxpx)

P = 除去テーブル

xxxxxpx = テーブル(ファイル)名

注:

WorldSoftware で除去プログラムを使用すると、選択したレコードが削除され、指定されたバックアップに保管されます。除去される各ファイルには、新しい基本テーブルで新しいバージョンが作成されます。新しいバージョンはシステムにより作成されるものではなく、テーブル変換を作成する必要があります。

参照

- バッチ・バージョンについては「バッチ・バージョンの作成」
- レポートの保存については「レポートを保存するには」

バージョン

バージョンの目的を示すには、60 字以下で説明を入力してください。説明では、そのバージョンの処理オプションの設定を参照してレポートが実行する内容を説明します。

注:

XJDE バージョンは、デモに使用し、通常バッチ・アプリケーションです。

メニューから呼び出されると、バッチ・アプリケーションにバージョン・リストが表示され、顧客は本稼働のバージョンを作成できます。

インストール中は、XJDE バージョンは J.D. Edwards により所有されるため、上書きされることがあります。

ZJDE バージョンはデフォルトとして使用され、通常、別のアプリケーションから呼び出される対話型アプリケーションまたはバージョンです。これらのバージョンは通常、メニューに添付されています。クライアントはこれらのバージョンを設定できます。

メニューから呼び出されると、事前定義された処理オプション値に基づいて、対話型アプリケーションが処理オプションのプロンプトなしで実行されます。

B73.3 より前のリリースでは、ZJDE バージョンは J.D. Edwards により所有されています。B73.3 以降では、ZJDE バージョンは顧客が所有するため、インストール中に上書きされることはありません。

インストールを行うと、既存のバージョンがマスター・バージョンで置き換えられます。

参照

- 「バッチ・バージョンの作成」

変数

ある条件が真になるまで、1つの値を持つ変数を定義します。この場合、変数の値を変更します。変数を使用して、関数または宣言文の流れを制御します。関数が進行する間に特定の条件を確認できます。

バッチ・イベント・ルール変数

レポート内のイベント・ルール変数名は、xxx_yyzzzzzz_AAAA のように指定します。

xxx = スコープに応じて、システムが自動的に割り当てるプレフィックス。たとえば次のような例があります。

evt_(イベント・スコープ)

rpt_(レポート・スコープ)

sec_(セクション)

yy = C 変数のハンガリー語によるコメント。次の例があります。

c - 文字

mn - 数字

sz - 文字列

jd - ユリウス日

id - ポインタ

zzzzzz = プログラムにより指定される変数名各用語は大文字で入力します。

AAAA = データ辞書エイリアス(すべて大文字)

たとえば、項目イベント・ルール変数は、rpt_mnItemNumber_ITM となります。スペースは入れないでください。

レポート・グローバル変数を使用する場合、グローバル変数は呼び出されない条件付きのグループ・セクションで定義されます。このセクションは「定義済みグローバル変数」と呼ばれます。グローバル変数は、論理グループでのセクションに配置されています。固定情報を使用すると、グローバル変数の使用にコメントを加えることができます。

イベント・ルール変数

イベント・ルール変数には、C 変数と同様の名前を設定し、xxx_yyzzzzzz_AAAA という形式にします。

xxx = スコープに応じて、OneWorld が自動的に割り当てるプレフィックスシステムにより自動的にプレフィックスが割り当てられます。たとえば次の例があります。

frm_(フォーム・スコープ)

evt_(イベント・スコープ)

yy = C 変数のハンガリー語によるコメント。次の例があります。

c - 文字

h - ハンドル要求

mn - 数字

sz - 文字列

jd - ユリウス日

id - ポインタ

zzzzzz = プログラムにより指定される変数名各用語の最初の文字は大文字にします。

AAAA = データ辞書エイリアス(すべて大文字)

たとえば、Branch/Plant(事業所) イベント・ルール変数は、evt_szBranchPlant_MCU という名前になります。スペースは入れないでください。

テキスト変数

システムにより TVzzzzzzzz というフォーマットで自動的に割り当てられます。

TV = テキスト変数

zzzzzz = プログラムにより指定される変数名

参照

- 『開発ツール』ガイドの「イベント・ルール変数の処理」

レポート・オブジェクト

レポートは、必ずオブジェクト・ライブラリ・マスター(F9860)で UBE タイプのオブジェクトとして定義されている必要があります。レポート・オブジェクトには少なくとも、名称、記述、およびオブジェクトの属するシステム・コードが必要です。レポート・オブジェクトを作成したら、それを保存して、後でレポート・フォーマットなどその他のスペックを付け加えることができます。

レポートのデフォルト設定

レポートやバッチ・アプリケーションを新しく作成する場合は、システムによりある一定の標準が適用されます。J.D. Edwards 開発ツールセットを使用すると、次の標準が自動的に設定されます。

フォント	7pt、Arial、標準フォント
レポート名	レポート・ヘッダーの左上に表示されます(例:R09800)。
実際の実行日付/時刻の値	レポート・ヘッダーの 1 番目および 2 番目の行の右側に表示されません。
ラベル・ページ(ページ番号の次)	レポート・ヘッダーの右上に表示されます。
レポート・タイトル	レポート・ヘッダーの上で中央揃えで表示されます。
会社名	レポート・ヘッダーでレポート・タイトルの最初の行に表示されます。

レポート・オブジェクトの作成

レポート・オブジェクトには、レポート・テンプレートとバッチ・バージョンの 2 種類があります。

レポート・オブジェクトは、レポート設計ツールおよびオブジェクト管理ワークベンチの 2 つの方法により作成することができます。バッチ・バージョンは、バッチ・バージョン・ツールによっても作成できます。さらにレポート・テンプレートを作成する際に、レポート設計ツールを使用すると、オプションでバッチ・バージョンも作成できます。ただし、レポート設計ツールを使ってバッチ・バージョンが作成できるのは、レポート・テンプレートの作成直後だけです。それ以外の場合は、OMW かバッチ・バージョン・ツールを使用する必要があります。

OMW を使ってレポート・テンプレートを作成することもできます。OMW は、既存のテンプレートに基づいてテンプレートまたはバッチ・バージョンを作成できる変更管理ツールです。

参照

- OMW の使用方法については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」
- バッチ・バージョン・ツールを使用してバッチ・バージョンを作成する方法については「レポート用バッチ・バージョン」

▶ レポート設計ツールを使用してレポート・オブジェクトを作成するには

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design (レポート設計)〉で、[New] をクリックします。
2. 〈新規レポートの作成〉で、次のフィールドに値を入力して [OK] をクリックします。
 - レポート名
デフォルトでは、[レポート名] に入力したオブジェクト ID は、レポートのページ・ヘッダーの左端角に表示されます。J.D. Edwards が使用している命名規則では、レポート名には必ず最初の文字に R、次にシステム・コードを続け、最後に固有の識別子を指定します。
 - 記述
入力したレポート記述は、レポート上でページ・ヘッダーの会社名の下に表示されます。[バッチ別 G/L - カラム] のように意味のある識別子を使用することをお勧めします。
 - システム・コード
システム・コード 55~59 は、ユーザー用に確保されています。ソフトウェアのアップグレードにより影響を受けないように、このシステム・コードを使用してください。

〈Report Design Director (レポート設計ディレクタ)〉が起動します。

3. 〈Report Design Director〉の指示に従ってレポートを設計します。作成したレポート・テンプレートに基づくバージョンを作成するオプションは、〈Report Design Director〉の最後のフォームで表示されます。

注:

バージョンを作成する際は、システムでは現在のレポート・レベルの値が使用されます。バージョンを作成した後でレポート・レベルを変更する場合は、新しいレポート・レベルの値はバージョンに反映されません。

▶ OMW を使用してレポート・テンプレートを作成するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー (GH902) から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム (P98220) を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索] をクリックします。
2. 新しいレポート・オブジェクトを追加するプロジェクトを選び、[追加] をクリックします。
3. 〈OW オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[バッチ・アプリケーション] オプションを選んで [OK] をクリックします。

4. 〈オブジェクトの追加〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - オブジェクト名
 オブジェクト名とはレポートのプログラム ID のことです。デフォルトでは、[レポート名]に入力したオブジェクト ID は、レポートのページ・ヘッダーの左端角に表示されます。J.D. Edwards が使用している命名規則では、レポート名には必ず最初の文字に R、次にシステム・コードを続け、最後に固有の識別子を指定します。
 - 記述
 入力したレポート記述は、レポート上でページ・ヘッダーの会社名の下に表示されます。[バッチ別 G/L - カラム]のように意味のある識別子を使用することをお勧めします。
 - システム・コード
 システム・コード 55～59 は、ユーザー用に確保されています。ソフトウェアのアップグレードにより影響を受けないように、このシステム・コードを使用してください。
 - 製品システム・コード
 レポートまたはビジネス・ビューのシステム・コードを使用します。
 - オブジェクト使用
 レポートの使用方法に応じて、分類コード 160～166 を使用することをお勧めします。
5. 〈Batch Application Design (バッチ・アプリケーションの設計)〉で、[Design Tools (設計ツール)]タブを開いて[Start Report Design Aid (設計ツールの開始)]をクリックします。
 〈Report Design Director〉の指示に従ってレポートの設計を開始します。

フィールド記述

記述	用語解説
オブジェクト名	<p>システム・オブジェクトを識別する名前。J.D. Edwards ERP アーキテクチャはオブジェクト指向です。ソフトウェアの個々のオブジェクトはすべてのアプリケーションのビルディング・ブロックとなっており、複数のアプリケーションでオブジェクトを再使用できます。各オブジェクトは、オブジェクト・ライブラリアンで管理されます。オブジェクトの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ バッチ・アプリケーション (レポートなど) ◦ 対話型アプリケーション ◦ ビジネス・ビュー ◦ ビジネス関数 ◦ ビジネス関数データ構造体 ◦ イベント・ルール ◦ メディア・オブジェクト・データ構造体
記述	<p>ソフトウェア・バージョン・リポジトリ・ファイル内のレコード記述。 メンバ記述は基本メンバの記述と一致させてください。</p>

システム・コード	システム・コードを示すユーザー定義コード(98/SY)
製品システム・コード	レポートおよびアプリケーション一時変更のシステム番号を示すユーザー定義コード(98/SY)。
オブジェクト使用	<p>オブジェクトの使用を指定します。たとえば、オブジェクトはプログラム、マスターファイル、または取引仕訳を作成するのに使用されます。</p> <p>UDC 98/FU を参照してください。</p>

▶ OMW をコピーしてレポート・テンプレートを作成するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックします。
2. レポート・リストで、コピーするレポートをハイライトして[コピー]をクリックします。
3. 〈オブジェクトのコピー〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - [コピー先]
レポートの名前。デフォルトでは、[レポート名]に入力したオブジェクト ID は、レポートのページ・ヘッダーの左端角に表示されます。J.D. Edwards が使用している命名規則では、レポート名には必ず最初の文字に R、次にシステム・コードを続け、最後に固有の識別子を指定します。
 - 記述
入力したレポート記述は、レポート上でページ・ヘッダーの会社名の下に表示されます。[バッチ別 G/L - カラム]のように意味のある識別子を使用することをお勧めします。
 - システム・コード
システム・コード 55~59 は、ユーザー用に確保されています。ソフトウェアのアップグレードにより影響を受けないように、このシステム・コードを使用してください。
 - 製品システム・コード
レポートまたはビジネス・ビューのシステム・コードを使用します。
 - オブジェクト使用
レポートの使用方法に応じて、分類コード 160~166 を使用することをお勧めします。
4. 〈Batch Application Design (バッチ・アプリケーションの設計)〉で、[Design Tools (設計ツール)]タブを開いて[Start Report Design Aid (設計ツールの開始)]をクリックします。
〈Report Design Director〉の指示に従ってレポートの設計を開始します。

▶ OMW を使用してバッチ・バージョンを作成するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックします。
2. 新しいレポート・オブジェクトを追加するプロジェクトを選び、[追加]をクリックします。
3. 〈OW オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[バッチ・バージョン]オプションを選んで [OK]をクリックします。
4. 〈バージョンの追加〉で、レポート・テンプレート名を入力するか、[検索]ボタンをクリックしてレポート・テンプレートを検索して、[OK]をクリックします。
5. 〈バージョンの追加〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- 表紙印刷
- バージョン ID
- バージョン・タイトル
- プロンプト・オプション

レポート・テンプレートに処理オプションが関連付けられていない場合は、このフィールドは無効になります。

- セキュリティ
- ジョブ待ち行列
- バージョン詳細

フィールド記述

記述	用語解説
表紙印刷	使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。
バージョン ID	アプリケーションやレポートの実行方法の指定に使用するユーザー定義のスペックです。バージョンを使用することで、ユーザー定義の処理オプション値やデータ選択、順序オプションなどをグループ化して保存します。対話型バージョンは(通常、タスク・レベルで)アプリケーションと関連付けられています。バッチバージョンはバッチ・プログラムまたはレポートと関連付けられています。バッチ・プログラムを実行する場合はバージョンを選択する必要があります。
バージョン・タイトル	バージョン番号の横に表示されるバージョンの記述。バージョン・タイトルとレポート・タイトルは異なります。このフィールドでは、バージョンの用途を記述します。たとえば、ピッキング・リストを作成するアプリケーションのバージョンの1つは[ピッキング・リスト - 会計]、もう1つは[ピッキング・リスト - 在庫管理]とすることができます。
プロンプト・オプション	プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/CR)に定義されています。 ブランク = 処理オプションを無効にする 1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行) 2 = 処理オプションを表示する

セキュリティ	このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。
	<p>0</p> <p>セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。</p>
	<p>1</p> <p>中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。</p>
	<p>2</p> <p>中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。</p>
	<p>3</p> <p>完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。</p>
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。
バージョン詳細	<p>基本レポートスペックとバージョンレベル・レポート・スペックの一時変更スペックや機能の違いを入力するフィールド。バージョンの開発者は、入力された情報を参照することによって、このバージョンと基本レポートの機能の違いを容易に理解できます。基本レポートには存在しないセクションをバージョンに追加した場合の追加内容などを入力してください。また、基本レポートとは異なる処理を行うように変更した内容も入力してください。たとえば、データ順序設定やデータ選択に基本レポートとは異なる基準を使用している処理を入力します。</p>

▶ OMW を使ってバッチ・バージョンをコピーするには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックします。
2. プロジェクト・リストで、コピーするバッチ・バージョンを選択して[コピー]をクリックします。
3. 〈バージョンのコピー〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 新しいバージョン
 - セキュリティ
 - バージョン・タイトル
4. 〈バッチ・バージョンの設計〉で、[ツール]タブを表示して[レポート設計]をクリックします。
〈レポート設計〉を使用してバージョンを設計します。

レポート・オブジェクトの削除

システムからレポート・オブジェクトを削除する必要がある場合は、バッチ・バージョンとレポート・テンプレートのいずれも削除できます。レポート・テンプレートを削除すると、それに基づくバッチ・バージョンはすべて自動的に削除されます。

レポート・オブジェクトの削除は、3つのレベルで行うことができます。

- チェックイン・サーバーから削除する。
- ローカル環境からのみ削除する。
- システムから完全に削除する。

注:

レポート・オブジェクトは、オブジェクトがチェックインされており、かつユーザーに削除する役割と権限がある場合に限り削除できます。詳しくは『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」を参照してください。

参照

- レポート・オブジェクト、ロール、および許可については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

▶ レポート・オブジェクトを削除するには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックします。
2. 削除するオブジェクトを選び、[削除]をクリックします。
3. 〈削除対象〉で、次のいずれかを選択します。
 - サーバーからオブジェクトを削除
 - ローカル・オブジェクトの削除
 - すべてのロケーションからオブジェクトを削除
4. [OK]をクリックします。

完全に削除するようにマークされたオブジェクトは、プロジェクト表示ウィンドウで太字でハイライトされます。これらはプログラムを終了した時点で削除されます。

フィールド記述

記述	用語解説
サーバーからオブジェクトを削除	サーバーのロケーションからオブジェクトを削除するかどうか指定します。オブジェクトライブラリアンのオブジェクトは、プライマリ・チェックイン・ロケーションから削除されます。オブジェクト・ライブラリアン以外のオブジェクトは、サインオンした環境から削除されます。
ローカルオブジェクトの削除	オブジェクトのローカルスペックを削除するかどうか指定するオプション
すべてのロケーションからオブジェクトを削除	イベントの処理タイプを示すオプション。

既存のレポートを開く

既存のレポート名がわかっている場合は、そのレポートを開いて〈Report Design〉を使用して変更できます。ただし、最初にレポートを開くとき、そのレポートが使用中のワークステーションに存在しないというエラー・メッセージが表示されることがあります。この場合、レポートにアクセスする前にサーバーからレポート・スペックを取得する必要があります。

既存のレポート・テンプレートまたはバッチ・バージョンのいずれも開くことができます。レポート・テンプレートを開いて変更した場合、その変更はバッチ・バージョンの一時変更で禁止されていない限り、そのテンプレートに基づいているすべてのバッチ・バージョンに反映されます。バッチ・バージョンを変更するには、バッチ・バージョンを開きます。

既存のレポートを開く場合、〈Director(ディレクタ)〉は使用できません。その代わりに、レポート・テンプレートまたはレポート・バージョンが自動的に〈Report Design〉に表示されます。レポート・オブジェクトは、レポート設計ツールでもオブジェクト管理ワークベンチ(OMW)でも開くことができます。

参照

- レポート・スペックの取得については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

▶ OMW を使用してレポート・テンプレートを開くには

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[検索]をクリックします。
2. レポート・オブジェクトを選んで、中央の[Design(設計)]アイコンをクリックします。

レポートがプロジェクト・リストにない場合は、アクセスする前にそのレポートをプロジェクトに追加する必要があります。

レポート・テンプレートを選んだ場合は、〈バッチ・アプリケーション設計〉で、[設計ツール]タブを開いて[レポート設計ツールの開始]をクリックします。

バッチ・バージョンを選んだ場合は、〈バッチ・バージョン設計〉で、[ツール]タブを開いて[レポート設計]をクリックします。

参照

- プロジェクトへのオブジェクトの追加については『開発ツール』ガイドの「Object Management Workbench オブジェクト管理ワークベンチ」

詳細セクションの作成

〈Director (ディレクタ)〉により、ステップに従って詳細セクションを作成できます。ただし、既存のセクションの変更やカラム、グループ、表セクションの追加が必要になる場合があります。〈Report Design〉には、これらのタスクを処理するための機能が備わっています。

〈Report Design〉を使用してセクションを追加するには、〈Director〉で表示されるフォームと類似したフォームがセクション設計に役立ちます。このトピックでは、レポートへの詳細セクションの追加方法を説明します。

詳細セクションの追加

〈Report Design〉では、レポートの必要に応じて詳細セクションを追加できます。詳細セクションは、ビジネス・ビューを選択してから個々のデータ・フィールドを追加することにより設計できます。

▶ 詳細セクションを追加するには

1. 〈Report Design〉で、[Section]メニューから[Create (作成)]を選択します。
2. [Create]からサブメニューで次のいずれかを選択します。
 - Group (グループ)
 - Columnar (カラム)
 - Tabular (表)

〈Report Director〉が表示されたら、フォームを使用してビジネス・ビューを選択します。

3. 新規セクションを作成するには、表示されるディレクタ・フォームに従ってプロセスを進めます。

参照

- Report Design (レポート設計) のフォーム使用については「Report Design Director レポート設計ディレクタ」

ビジネス・ビューの選択

ビジネス・ビューとは、レポートとテーブルのリンクです。ビジネス・ビューは、レポートで使用されるテーブルのデータ・フィールドを定義したものです。〈Report Design〉を使用して、レポートに必要なフィールドだけに限定します。

▶ ビジネス・ビューを選択するには

1. 〈Report Design〉で、詳細セクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Select Business View(ビジネス・ビューの選択)]を選択します。
3. 〈Business View Director(ビジネス・ビュー・ディレクタ)〉で、次のいずれかのタブを選択して続行してください。
 - ビジネス・ビューの選択
 - Favorite Business Views(お気に入りビジネス・ビュー)

参照

次のトピックを参照してください。

- [Select Business View(ビジネス・ビューの選択)]タブを使用してビジネス・ビューを検索するには
- [Favorite Business View(お気に入りビジネス・ビュー)]タブを使用してビジネス・ビューを検索するには

▶ [Select Business View(ビジネス・ビューの選択)]タブを使用してビジネス・ビューを検索するには

1. 〈Business View Director〉で、[Select Business View]タブをクリックします。
2. 〈Select Business View〉で、[Find]をクリックしてから[Enter]キーを押します。
使用可能なビジネス・ビューがフォームにすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると、検索対象を絞り込むことができます。次のような命名規則を使用してビジネス・ビューを検索します。

ビジネス・ビューの名称は、V で始まり 10 文字以内で指定します。(例: VxxzzzzzzzA)
 - xx = システム・コード(55-59 はユーザー用に予約済み)
 - zzzzzzz = 基本テーブルの文字
 - A = ビューを示す文字。たとえば、「V0101A」はテーブル F0101 の最初のビュー、「V0101B」は同じテーブルの 2 番目のビューをそれぞれ表します。
3. ビジネス・ビューを選択して[OK]をクリックします。

参照

- ビジネス・ビューについては『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」

▶ **[Favorite Business View(お気に入りビジネス・ビュー)]タブを使用してビジネス・ビューを検索するには**

1. 〈Business View Director〉で、[Favorite Business Views]タブをクリックします。
2. [Favorites(お気に入り)]フォルダの下から、詳細セクションに使用するビジネス・ビューを含むフォルダの[+]をクリックします。該当するビジネス・ビューが表示されるまで[+]アイコンをクリックし、ツリーを展開してください。
3. [Description(記述)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューの簡単な説明が表示されます。
4. [Columns(カラム)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューに含まれるデータ・フィールドが表示されます。
5. 使用するビジネス・ビューを選択したら、[OK]をクリックします。

[Select Business View]と[Favorite Business Views]のどちらのタブを使用しても、〈Report Tree(レポート・ツリー)〉と〈Report View(レポート・ビュー)〉ウィンドウのタイトル・バーには選択したビジネス・ビューが反映されます。

参照

- このリストに独自のビジネス・ビューを追加する方法については、「ビジネス・ビューをお気に入りとして設定する」

詳細セクションへのビジネス・ビュー・カラムの追加

ビジネス・ビューとは、レポートとテーブルのリンクです。ビジネス・ビューは、レポートで使用されるテーブルのデータ・フィールドを定義したものです。〈Report Design〉を使用して、レポートに必要なフィールドだけに限定します。

選択したビジネス・ビューに基づいて、新しいビジネス・ビュー・カラムをレポートの詳細セクションに追加します。

▶ **詳細セクションにビジネス・ビュー・カラムを追加するには**

1. 〈Report Design〉で、関連するビジネス・ビューを持つ詳細セクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Quick Section(クイック・セクション)]を選択します。
〈Quick Section(クイック・セクション)〉フォームが表示されます。

ビジネス・ビュー・カラム 1

ビジネス・ビュー・カラム 3

ビジネス・ビュー・カラム 5

ビジネス・ビュー・カラム 2

ビジネス・ビュー・カラム 4

ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 2

ビジネス・ビュー・カラム 1

ビジネス・ビュー・カラム 4

ビジネス・ビュー・カラム 2

ビジネス・ビュー・カラム 5

ビジネス・ビュー・カラム 3

ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 3

3. 〈Quick Section〉で、[Available Business View Columns(使用可能なビジネス・ビュー・カラム)]からカラムを選択して、次のいずれかを実行します。
 - 右向き(→)矢印をクリックして、カラムを[Selected Columns]に移動する。
 - カラムを[Selected Columns]にドラッグする。
 - 右向き 2 重矢印をクリックして、すべてのカラムを[Selected Columns]に移動する。
4. レポートからカラムを削除するには、[Selected Columns]リストからカラムを選んで次のいずれかを実行します。
 - 左向き(←)矢印をクリックするか、[Delete]キーを押して、選択したオブジェクトのみを削除する。
 - 右向き 2 重矢印をクリックして、すべてのカラムを削除する。
5. レポートでのカラムの順序を変更するには、[Selected Columns]リストからカラムを選択して次のいずれかの処理を実行します。
 - 上向き(↑)か下向き(↓)矢印をクリックして、選択したカラムをリストで上下にひとつ移動する。
 - カラムをドラッグして順序を変える。
 - 上向きか下向きの 2 重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動する。

グループ・セクションを作成している場合、[Available Business View Columns]リストの下に [Number of Columns(カラム数)]フィールドが表示されます。〈Report Design〉がセクションで作成するブロックの数をこのフィールドで指定して、フィールドの整理方法を確定します。たとえば、6つのビジネス・ビュー・カラムを選んで[Number of Columns]の値を2にすると、カラムは2つのブロックに分けられ、それぞれに3つのカラムの階層が作成されます。最初の3つのカラムは最初のブロックに、残り3つのカラムはもう片方のブロックにそれぞれ降順で表示されます。同じ状況で[Number of Columns]を3に設定すると、ビジネス・ビュー・カラムは横に3つ、縦に2つのブロックに分けて表示されます。デフォルトの値は2です。

ビジネス・ビュー・カラム 1	ビジネス・ビュー・カラム 3	ビジネス・ビュー・カラム 5
ビジネス・ビュー・カラム 2	ビジネス・ビュー・カラム 4	ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 3

ビジネス・ビュー・カラム 1	ビジネス・ビュー・カラム 4
ビジネス・ビュー・カラム 2	ビジネス・ビュー・カラム 5
ビジネス・ビュー・カラム 3	ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 2

表セクションを作成している場合、[Description(記述)]カラムが自動的にレポートに追加されます。このカラムは、〈Section Layout(セクション・レイアウト)〉フォームの[Selected Columns]リストに表示され、レポートでは最初のカラムになります。

6. セクションのレイアウトが完了したら、[OK]をクリックします。

参照

- スマート・フィールドの定義については「アプリケーション・レポートへのスマート・フィールドの追加」
- 計算の定義については「表セクションのカラムの処理」

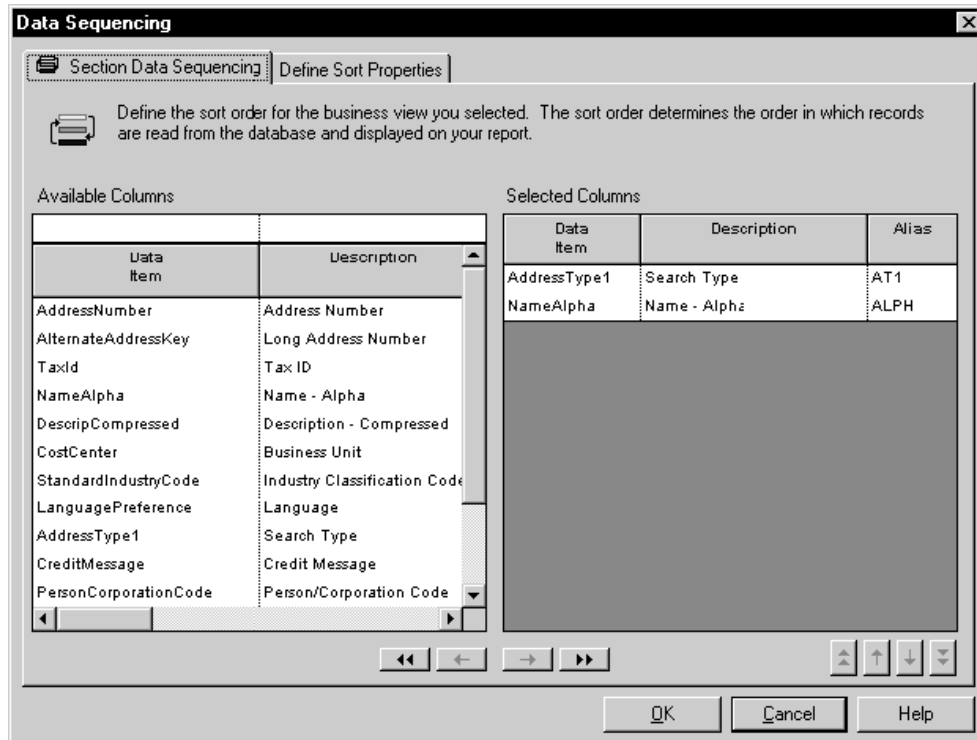
セクション・データ順序設定の定義

データ順序設定を使用すると、レコードをデータベースから読み込む順序、およびレポートで表示する順序を指定できます。たとえば、住所番号、名前の順に指定することができます。

J.D. Edwards のソフトウェアでは、どのカラムを使用してもレポート上のレコードをソートすることができるため、このタスクで選んだデータ順序設定カラムは必ずしも〈Section Layout〉で選択したビジネス・ビューのカラムと一致する必要はありません。

▶ セクション・データ順序を定義するには

1. 〈Report Design〉で、前のタスクでレイアウトを作成した詳細セクションをクリックします。
2. [Section(セクション)]メニューから[Define Data Sequence(データ順序の定義)]を選択します。



3. [Section Data Sequencing(セクション・データ順序設定)]タブをクリックします。
4. データ順序を設定するカラムを選択するには、[Available Columns(使用可能なカラム)]リストからカラムを選び、次のいずれかの処理を実行します。
 - 右向き(→)矢印をクリックして、カラムを[Selected Columns]に移動する。
 - カラムを[Selected Columns]にドラッグする。
 - 右向き 2 重矢印をクリックして、すべてのカラムを移動する。

5. [Selected Columns]リストからカラムを削除するには、カラムを選択して次のいずれかを実行します。
 - 左向き(←)矢印をクリックするか、[Delete]キーを押して、選択したオブジェクトのみを削除する。
 - 右向き 2 重矢印をクリックして、すべてのカラムを削除する。

注意:

データ順序設定カラムをレベル区切りまたはページ区切りとして定義(次のタスクで説明)する場合は、[Selected Columns]リストから[Available Columns]にそのカラムを戻さないでください。

6. レポートでのビジネス・ビュー・カラムの順序を変更するには、[Selected Columns]リストからカラムを選択して次のいずれかを実行します。
 - 上向き(↑)か下向き(↓)矢印をクリックして、選択したカラムをリストで上下にひとつ移動する。
 - カラムをドラッグして順序を変える。
 - 上向きか下向きの 2 重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動する。

詳細セクションの順序設定が終了したら、ソート順序の定義を始めることができます。

ソート・プロパティの定義

データ順序設定用に使用するデータ・フィールドを選択したら、そのデータ・フィールドに対するソート・プロパティを定義します。このプロパティによって、ローは昇順/降順のどちらでソートするか、レベル区切りが発生するかどうか、レベル区切りによってページ区切りが発生するかどうかを確定します。たとえば、[検索タイプ]は昇順でソートしてレベル区切りとして[検索タイプ]を指定し、[検索タイプ]ごとに新規のページを始めることができます。

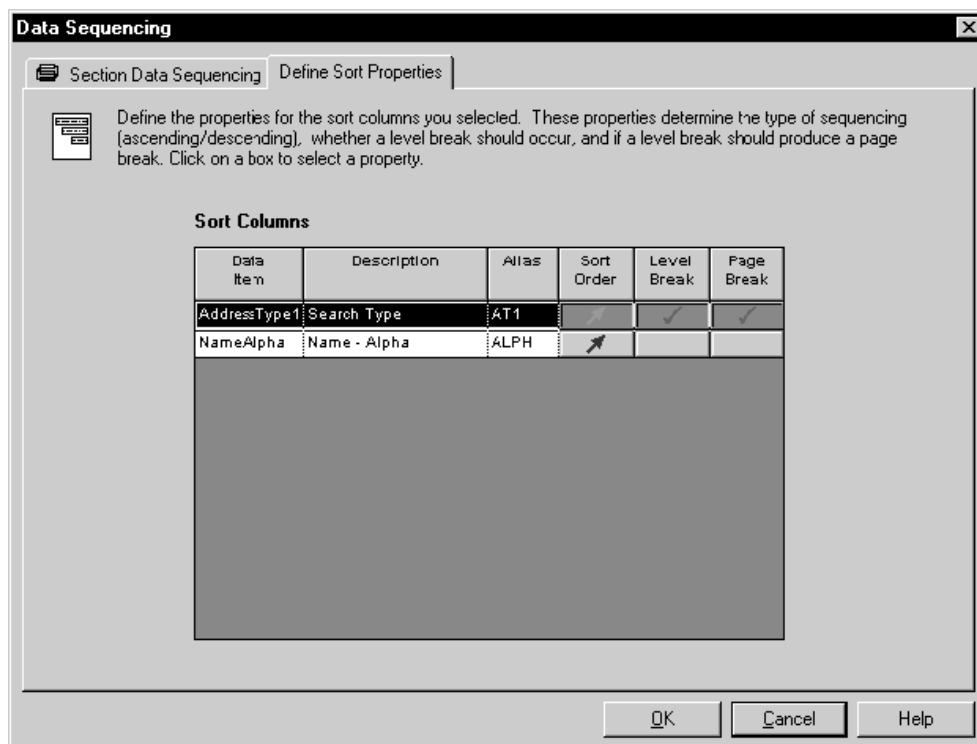
参照

- レベル区切りの処理については「レベル区切りヘッダーおよびフッター・セクションの処理」

▶ ソート・プロパティを定義するには

[Section(セクション)]メニューから[Define Data Sequence(データ順序の定義)]を選択します。

1. <Data Sequencing>フォームで、[Define Sort Properties (ソート・プロパティの定義)]タブをクリックします。



2. [Define Sort Properties (ソート順序の定義)] タブで、次のフィールドに値を入力して [OK] をクリックします。

- Sort Order (ソート順序)
- Level Break (レベル区切り)
- Page Break (ページ区切り)

注:

オブジェクトをページ区切りとして設定するには、まずそのオブジェクトをレベル区切りとして設定する必要があります。

フィールド記述

記述

ソート順序-昇順

用語解説

オブジェクトは各セクションにおいて昇順でソートできます。

レベル区切り

オブジェクトがレベル区切り識別子として機能できるようにします。レベル区切りでは、セクションの結合、合計の計算、レベル区切りヘッダーセクションのトリガーを実行できます。

注:オブジェクトをページ区切りとして選択する前に、レベル区切りとして選択してください。

セクション・データ選択の定義

レポートに組み込むレコードの条件を定義するには、セクション・データ選択を使います。

〈Section Data Selection〉フォームにより指定できるのは、1つの詳細セクションに対してのみです。レポートに詳細セクションが1つしかない場合、このフォームに入力した条件と一致するレコードだけがレポートに表示されます。別の詳細セクションをレポートに追加する場合は、セクションごとにデータ選択を定義する必要があります。

テーブルから取り込むレコードを絞り込むには、次の項目を比較してデータ選択を指定します。

- テーブルのデータ・フィールド
- 元帳タイプ、検索タイプ、勘定科目番号など、データ・フィールド内のデータを定義する値

▶ セクション・データ選択を定義するには

1. 〈Report Design〉で、セクション・データ順序およびソート・プロパティを定義した詳細セクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Define Data Selection(データ選択の定義)]を選択します。
3. 〈Section Data Selection〉では、最初の条件に使用する[Operator(演算子)]カラムに対するデフォルト値は「Where」です。

後に続く条件文では、「And」および「Or」が[Operator]カラムで使用できるようになり、該当する方をダブルクリックして選択できます。

4. [Left Operand(左オペランド)]カラムをクリックして使用可能なオブジェクトを表示し、次のいずれかの処理を実行します。
 - リストをスクロールして使用するオブジェクトを探し、ダブルクリックして[Left Operand]カラムに入力する。
 - [Left Operand]フィールドにオブジェクト名の最初の文字をタイプし、リストにオブジェクトを表示させてから、ハイライトされたオブジェクトをダブルクリックする。

[Left Operand]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Comparison]カラムのリストが自動表示されます。

5. 次のいずれかの比較演算子を選択します。

- is equal to(等しい)
- is greater than(より大きい)
- is greater than or equal to(～以上)
- is less than(より小さい)
- is less than or equal to(～以下)
- is not equal to(等しくない)

6. [Right Operand(右オペランド)]カラムをクリックして、使用可能なオブジェクト、特殊な値、変数リストを表示します。このカラムに表示される項目は、[Comparison]カラムでの選択項目によって変わります。次のオプションが使用できる場合もあります。

Blank	Blank(スペース)を自動的に入力
Literal	ユーザーが特定の値を入力(特定の値の入力については次のステップを参照)
Null (ヌル)	このフィールドと関連する値がない
Zero (ゼロ)	ゼロが自動的に入力
BC	このレポートのビジネス・ビュー・カラム
FI	フォーム・インターコネクトからこのレポートに読み込まれる値
PC	前のビジネス・ビュー・カラム値
PO	このレポートの処理オプションの値
PV	変数の前の値
RC	このレポートの固定情報
RV	このレポートのバージョン
SV	システム変数
SL	システムによるリテラル入力
VA	イベント・ルール変数

7. [Right Operand]カラムで「Literal(リテラル)」を選択した場合、自動的に表示されるフォームで次の項目を入力できます。

- Single value(単一値)
単一値を入力して[OK]をクリックします。たとえば、特定の会社を指定する値などです。
- Range of values(範囲指定)
値の範囲を入力してから[OK]をクリックします。たとえば、00001 から 00060 までの会社の値を範囲指定します。値範囲を使用する際に有効な論理演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- List of values(値のリスト)
リストに値を追加したり、リストから値を削除するには、次の処理を行います。

- フィールドに各値をタイプして、[Enter]キーを押すか、フォームの上部にある [Add]ボタンをクリックします。
- この処理を繰り返して、値のリストを完成します。たとえば、値のリストには顧客の C、従業員の E、仕入先の V など検索タイプ用のユーザー定義コードなどが含まれることがあります。値リストを使用する際に有効な論理演算子は「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- 値を削除するには、値を選択してフォーム上部の [Delete (削除)] ボタンをクリックします。
- 終了したら [OK] をクリックします。

8. 〈Section Data Selection〉で条件行を削除するには、ロー見出しをクリックしてローをハイライトしてから、フォーム上部の [Delete (削除)] ボタンをクリックします。
9. 条件の順序を変更するには、ロー見出しを選択して上または下方向のボタンをクリックします。

Report Design Director(レポート設計ディレクタ)

〈Report Design Director(レポート設計ディレクタ)〉=〈Director(ディレクタ)〉を使用すると、ウィザードに従ってレポートの基本的な要素が設定され、レポートが簡単に作成できます。〈Director〉に従うと、ヘッダーやフッター・セクション、詳細セクションのタイプ、データ選択が基にするビジネス・ビュー、レポートに含むカラム、レコードの順序設定やソート方法などに答えていくことができます。〈Director〉はこれらの質問への回答を基にレポートを設定し、〈Report Design(レポート設計)〉で該当するレポートを開きます。次に〈Report Design〉で、レポートのフォーマット設定、機能拡張を行い、〈Director〉で設定した項目を必要に応じて変更します。

〈Director〉には、アプリケーション・レポートの作成に役立つディレクタ・テンプレートも含まれています。これらのテンプレートには、ビジネス・ビュー、スマート・フィールド・リスト、データ選択、データ順序設定オプションなどのデフォルト条件が含まれています。〈Director〉でテンプレートを選択すると、プログラムが(テーブルに保存されている)テンプレート・スペックを読み込み、〈Director〉フォーム上で、そのデフォルト条件を表示します。ディレクタ・テンプレートのいくつかは、J.D. Edwards のソフトウェアに組み込まれています。また、〈スマート・フィールド・テンプレート〉プログラム(P91420)および〈レポート・ディレクタ・テンプレート〉プログラム(P91400)を使用して、独自のテンプレートを作成することもできます。

〈Director〉を使用せずにレポートを設計する場合、[完了]または[Cancel(キャンセル)]をクリックして、〈Report Design〉内でセクションごとにレポートを作成します。

参照

- レポート・ディレクタ・テンプレートの修正および追加については「ディレクタ・テンプレートの処理」
- 〈Director〉ではなく〈Report Design〉を使用したセクション作成については、「Report Design(レポート設計)を使用した詳細セクションの追加または修正」

カラム・レポートの作成

カラム・レポートは、Report Design Director を使用して作成するレポートのうち、最も簡単なレポートです。カラムでビジネス・ビューの情報を表示します。各データ・フィールドはカラムとして、各レコードはローとして表示されます。

〈Director〉を使用してカラム・レポートを設計します。〈Director〉で質問されるレポートの構成や内容について答えていくことにより、カラム・レポートを作成することができます。グループ・レポートを作成した後は、〈Report Design〉を使って、レポート機能を拡張することもできます。

参照

次のトピックを参照してください。

- カラム・セクションの概要と使用条件については「カラム・セクションの特徴」
- レポート設計および〈Director〉については「レポート・オブジェクトの作成」

はじめる前に

- レポート・オブジェクトを作成します。レポート・オブジェクト作成の最終ステップを完了すると、〈Report Design Director〉が自動的に起動します。レポート・オブジェクトの作成については「レポート・オブジェクトの作成」を参照してください。

▶ カラム・レポートに含めるレポート・セクションを選択するには

注:

レポート・オブジェクトを作成すると、Report Design Director の〈Welcome〉フォームが表示されます。〈Director〉には、レポート作成プロセス上の各ステップ間を移動するための〈Navigation Assistant (ナビゲーション・アシスタント)〉が組み込まれており、今どこのプロセスを処理しているかがわかります。〈Navigation Assistant〉をクリックして[Hide]を選ぶと、表示しないでおくこともできます。



1. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、レポートに含める次のヘッダーおよびフッターをクリックします。
 - レポートヘッダー
 - ページヘッダー
 - ページフッター
 - レポートフッター

2. カラム・レポートの作成を選び、[次へ]をクリックします。

ページ・ヘッダーを選択すると、〈Page Header Details (ページ・ヘッダー詳細)〉フォームが表示されます。

注:

ページ・ヘッダーを選ばない場合は、〈Business View Selection Option (ビジネス・ビュー選択オプション)〉フォームが表示されます。「お気に入りビジネス・ビュー・リストから選択するには」または「Select Business View (ビジネス・ビューの選択) フォームを使用してビジネス・ビューを検索するには」のいずれかに進んでください。

3. 〈Page Header Details〉で次のオプションのいずれかを選択すると、次の標準データ・フィールドが自動的に含まれます。

- 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
- 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。

注:

〈Director〉のプロセスが完了したら、〈Report Design〉を使用してページ・ヘッダーにフィールドを追加したり削除したりすることができます。

上のどちらのオプションも選択しない場合は、〈Director〉により空のページ・ヘッダーが作成されます。〈Report Design〉フォームの[Section]メニューから、手作業でページ・ヘッダーにフィールドを追加することもできます。

4. [次へ]をクリックします。

〈Business View Selection Options (ビジネス・ビュー選択オプション)〉フォームが表示されます。

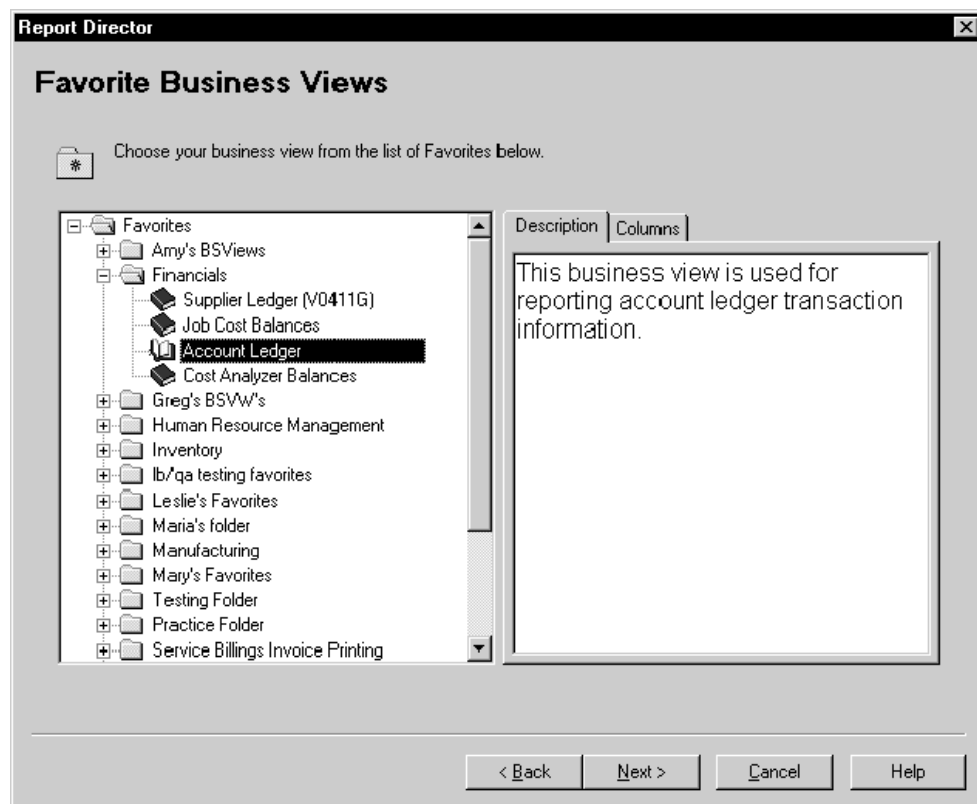
フィールド記述

記述	用語解説
レポートヘッダー	法的な通知あるいはレポートに表示される情報の簡単な記述など、ユーザー定義情報を含むレポートの最初に1度だけ表示されるヘッダー。
ページヘッダー	会社名およびレポートの見出しなどのユーザー定義情報を含む、レポートの各ページの上に表示されるヘッダー。
ページフッター	レポートの各ページの終りに表示されるフッター。ページフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。
レポートフッター	レポートの終りに表示されるフッター。レポートフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。

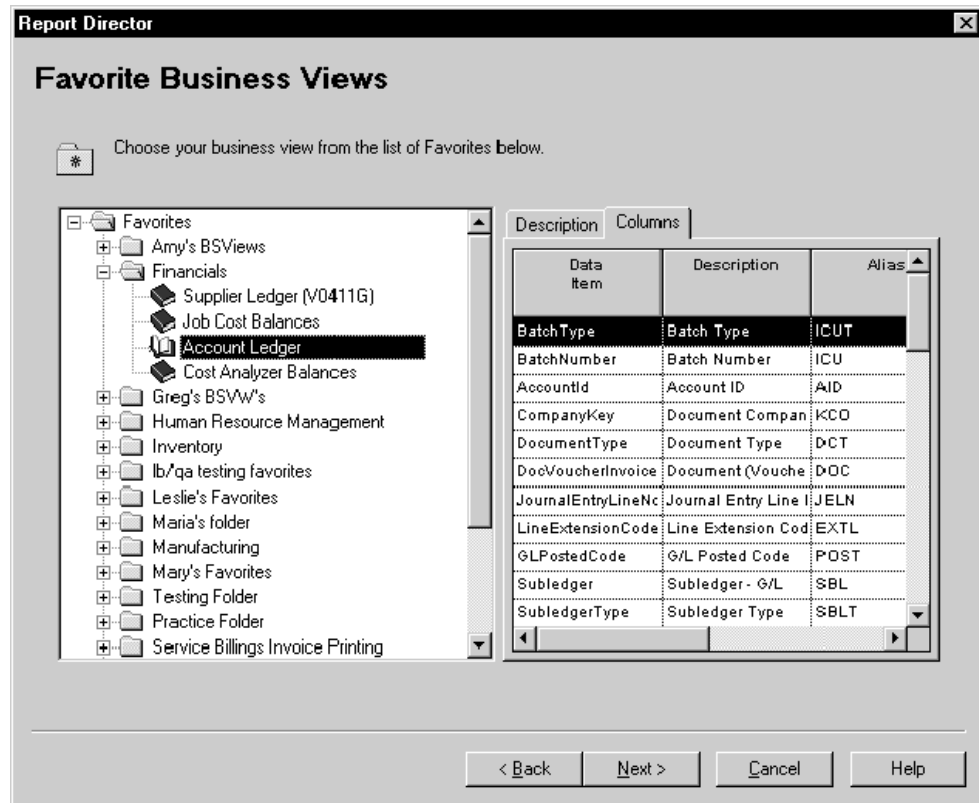
▶ お気に入りビジネス・ビュー・リストから選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'd like help finding an appropriate business view]を選択して[次へ]をクリックします。
2. 〈Favorite Business Views〉で、レポート・セクションに使用するビジネス・ビューを含むフォルダを開きます。該当するビジネス・ビューが表示されるまで[+]アイコンをクリックし、フォルダを展開してください。
3. [Description(記述)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューの簡単な説明が表示されます。



4. [Columns(カラム)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューに含まれるデータ・フィールドが表示されます。



5. 使用するビジネス・ビューを選択したら、[次へ]をクリックします。

参照

- このリストに独自のビジネス・ビューを追加する方法については、「ビジネス・ビューをお気に入りとして設定する」

▶ Select Business View(ビジネス・ビューの選択)フォームを使用してビジネス・ビューを選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックします。
2. [次へ]をクリックします。
3. 〈Select Business View〉で、[Find]をクリックしてから[Enter]キーを押します。

使用可能なビジネス・ビューがフォームにすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると検索対象を絞ることができます。

4. ビジネス・ビューを選択して[次へ]をクリックします。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」

▶ ビジネス・ビュー・カラムをセクションに追加するには

ビジネス・ビューを選択すると、〈Section Layout〉フォームが表示されます。

1. [Available Business View Columns]リストからレポートに含めるカラムを選び、右矢印をクリックして選択したカラム・リストに移動します。

または、各カラムを[Selected Columns(選択したカラム)]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Business View Columns]から[Selected Columns]へすべてのカラムを移動させることもできます。

リストに移動した最初の項目は、レポートの左側からこの順に表示されます。

2. レポートからカラムを移動させるには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Business View Columns]リストへ移動させます。

または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Business View Columns]リストへ、すべてのカラムを移動させることもできます。

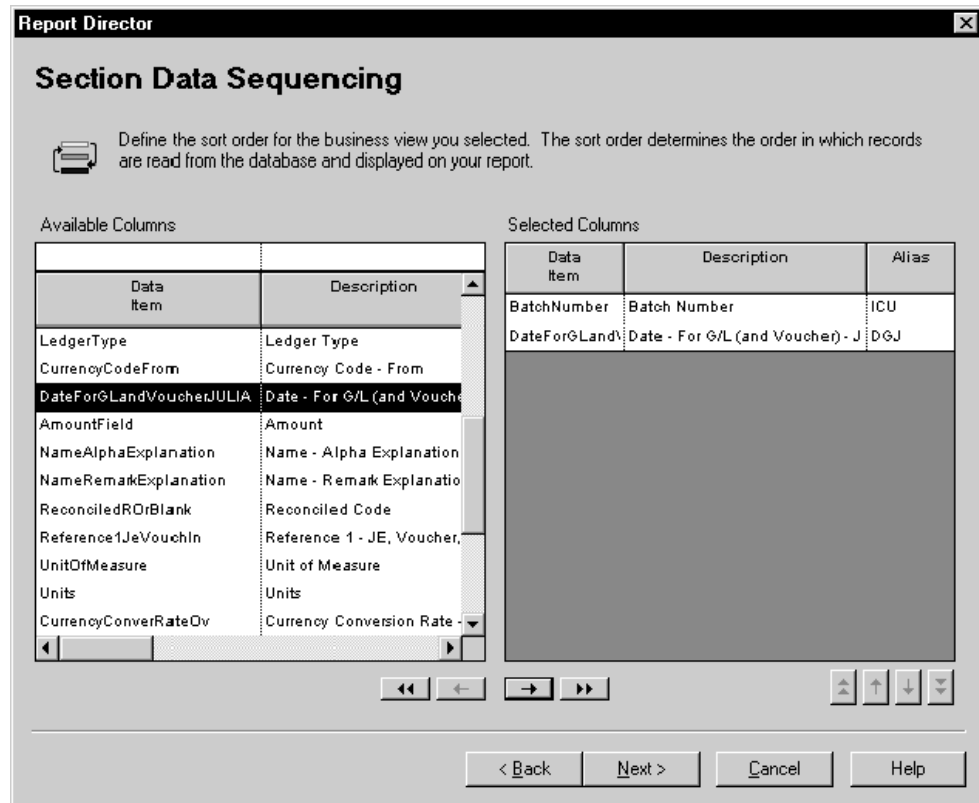
3. レポートで表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。

または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。

4. セクションのレイアウトが完了して[次へ]をクリックすると、〈Section Data Sequencing(セクション・データ順序設定)〉が表示されます。

▶ セクションのデータ順序設定を定義するには

前のタスクに従ってビジネス・ビューを選択すると、〈Section Data Sequencing〉フォームが表示されます。



1. データ順序を設定するカラムを選択するには、[Available Columns]リストからカラムを選択し、右矢印をクリックして[Selected Columns]リストに移動します。
または、各カラムを[Selected Columns]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Columns]リストから[Selected Columns]リストへすべてのカラムを移動させることもできます。

注:

次のタスクでソート・プロパティを定義するには、このタスクでソートするカラムを選択してください。

2. レポートからカラムを削除するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Columns]リストへ移動させます。
または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Columns]リストへ、すべてのカラムを移動させることもできます。
3. 表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。
または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。
4. レポート用のデータ順序設定が終了したら、[次へ]をクリックします。

参照

- レベル区切りの処理については「レベル区切りヘッダーおよびフッター・セクションの処理」

▶ セクションのソート・プロパティを定義するには

前のタスクに従ってデータ順序を定義すると、〈Define Sort Properties〉フォームが表示されます。

Data Item	Description	Alias	Sort Order	Level Break	Page Break
BatchNumber	Batch Number	ICU	↗		
DateForGLand	Date - For G/L (and Vou	DGJ	↗		

1. 〈Define Sort Properties〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - ソート順序
2. レベル区切りやページ区切りを指定する場合は、次のフィールドに値を入力してください。
 - レベル区切り

注意:

データ順序設定カラムをレベル区切りとして定義する場合（次のタスクで説明）、[Selected Columns]リストから[Available Columns]にそのカラムを戻すと、予期しない結果となることがあります。

- ページ区切り
3. 完了したら[次へ]をクリックします。〈Section Data Selection (セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

フィールド記述

記述	用語解説
ソート順序	ソート順序を昇順／降順のどちらにするか指定します。
レベル区切り	オブジェクトがレベル区切り識別子として機能できるようにします。 レベル区切りでは、セクションの結合、合計の計算、レベル区切りヘッダーセクションのトリガーを実行できます。
ページ区切り	オブジェクトがページ区切りとして機能できるようにします。 注:オブジェクトをページ区切りとして選択する前に、レベル区切りとして選択してください。

▶ セクションに含めるレコードを選択するには

前のタスクに従ってソート・プロパティを定義すると、〈Section Data Selection〉フォームが表示されます。

Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
Where	BC Amount (F0911)	is greater than	"1,000.00"

1. 〈Section Data Selection〉で、[Operator]カラムをクリックして演算子を選択します。

最初の条件に使用する[Operator]カラムでのデフォルト値は「Where」です。続く条件文では、「And」および「Or」が[Operator]カラムで使用できるようになり、該当するものをダブルクリックすると選択されます。

2. [Left Operand]カラムをクリックして使用可能なオブジェクトを表示し、次のいずれかの処理を実行します。

- リストをスクロールして使用するオブジェクトを探し、ダブルクリックして[Left Operand]カラムに入力する。
- [Left Operand]フィールドでオブジェクト名の最初の文字を入力し、リスト上のオブジェクトを表示させてから、ハイライトされたオブジェクトをダブルクリックする。

[Left Operand]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Comparison]カラムのリストが自動表示されます。

3. 次の演算子のいずれかをダブルクリックして選択します。

- is equal to(等しい)
- is greater than(より大きい)
- is greater than or equal to(～以上)
- is less than(より小さい)
- is less than or equal to(～以下)
- is not equal to(等しくない)

[Comparison]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Right Operand]カラムにリストが自動表示されます。使用可能なオブジェクト、特殊の値、および変数は、選択したオペランドによって異なります。

4. [Right Operand]カラムでリストの値をクリックして選択します。

このカラムに表示される項目は、[Comparison]カラムでの選択項目によって変わります。次のオプションが使用できる場合もあります。

ブランク	ブランク(スペース)を自動的に入力
リテラル	ユーザーが特定の値を入力
Null (ヌル)	このフィールドと関連する値がない
Zero (ゼロ)	ゼロが自動的に入力
BC	このレポートのビジネス・ビュー・カラム
FI	フォーム・インターコネクトからこのレポートに読み込まれる値
PC	前のビジネス・ビュー・カラム値
PO	このレポートの処理オプションの値
PV	変数の前の値
RC	このレポートの固定情報

RV	このレポートのバージョン
SV	システム変数
SL	システムによるリテラル入力
TV	テキスト変数
VA	イベント・ルール変数

[Right Operand]カラムの[Literal]を選ぶと、次の説明する値を入力するためのフォームが表示されます。

5. 次のタブのいずれかを選択して値を定義し、[OK]をクリックします。

- Single value (単一値)

単一値を入力して[OK]をクリックします。たとえば、特定の会社の住所番号を入力できます。

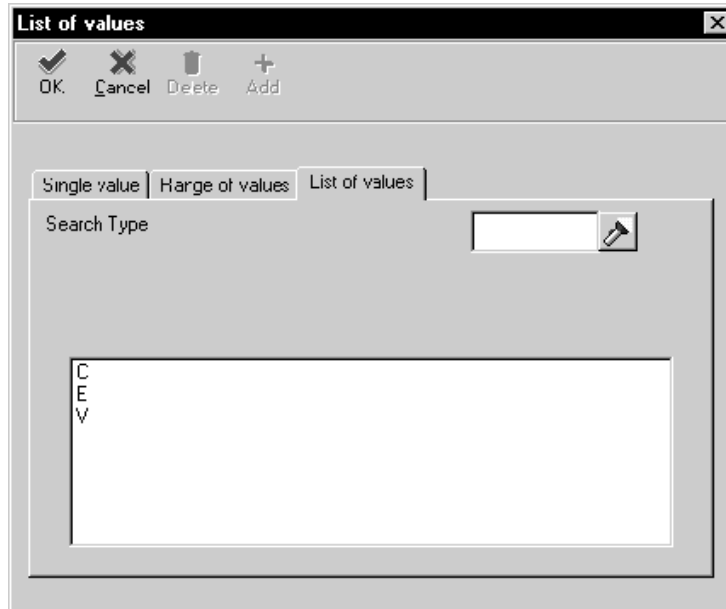
- Range of values (範囲指定)

値の範囲を入力してから[OK]をクリックします。たとえば、00001 から 00060 までの会社の値を範囲指定します。値範囲を使用する際に有効な論理演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。

- List of values (値のリスト)

リストに値を追加したり、リストから値を削除するには、次の処理を行います。

- フィールドに各値をタイプして、[Enter]キーを押すか、フォームの上部にある[Add]ボタンをクリックします。
- この処理を繰り返して、値のリストを完成します。たとえば、値のリストには顧客のC、従業員のE、仕入先のVなど検索タイプ用のユーザー定義コードなどが含まれることがあります。値のリストを使用する際に有効な演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- 値を削除するには、対象となる値を選択してからフォームの上部にある[Delete]ボタンをクリックします。



6. 必要に応じて、ステップの 1 から 5 を繰り返し、選択基準を定義します。
7. 〈Section Data Selection〉で、条件行を削除するには、ロー見出しをクリックしてローをハイライトしてから、フォーム上部の [Delete (削除)] ボタンをクリックします。
8. 条件の順序を変更するには、ロー見出しを選択して上または下方向のボタンをクリックします。
9. 完了したら [次へ] をクリックします。

▶ レポートのバッチ・バージョンを作成するには

セクションのデータ選択を定義すると、〈Director〉の完了フォームが表示されます。

1. 〈Finish (完了)〉フォームで [Yes] をクリックすると、テンプレートのバッチ・バージョンが自動的に作成されます。
2. [Yes, create a version of this report.] の下のフィールドにバージョン名を入力します。
3. 〈Finish〉フォームで、選択を検討するには [戻る] をクリックして 〈Director〉フォーム内を移動するか、検討するフォームを 〈Navigation Assistant〉でクリックします。
4. 問題がない場合は [完了] をクリックします。

注意:

[完了] をクリックした後は、このレポート用には 〈Director〉にアクセスできなくなります。[完了] をクリックする前に、手順 3 にあるように、再度 〈Director〉のすべてのフォーム上の選択項目を検討してください。

〈Report Design - Report View〉フォームが表示されます。

参照

- OMWを使ったバッチ・バージョンの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」
- バッチ・バージョンの作成については「レポート用バッチ・バージョン」

▶ レポートを保存するには

〈Director〉の完了フォームで[Finish]をクリックすると、〈Report Design〉フォームが表示されます。

〈Report Design〉で、次のいずれかを実行します。

- [File(ファイル)]メニューから[Save]を選択する。
- ツールバーで[Save]ボタンをクリックする。

参照

- レポートのチェックインについては『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

Report Design を使用したレポートの変更や拡張については次のトピックを参照してください。

- 「基本レポート拡張」
- 「上級レポート拡張」

Director による作成結果の検討

[完了]をクリックすると、〈Director〉処理が完了します。処理中に選択した項目に基づいて、レポートのセクションおよびレポートに組み込んだデータ・フィールドが〈Report Design〉に表示されます。各セクションには次の内容が含まれます。

- セクション・タイプを表すアイコン
- セクション内の各フィールドをまとめたブラケット
- タイトル記述

レポートの主要詳細セクションのタイトルには、他のレポート・セクションのタイトルと区別するために太字のフォントが使用されています。

例: Director を使用したカラム・レポートの作成

サンプルのカラム・レポート(年俸の検討)は、〈Director〉で作成しました。ビジネス・ビューV060116A〈従業員マスター〉に基づいており、そのビジネス・ビューには次のカラムを使用しています。

- Address Number(住所番号)
- Name - Alpha(名称)
- Business Unit - Home(所属ビジネスユニット)
- Pay Class (H/S/P)(支払クラス)
- Date - Original Employment(雇用開始日付)
- Rate - Salary, Annual(年棒)

B5807COL		J. B. Edwards & Company			02/09/10 13:25:57	
		Annual Employee Salary Review			Page - 1	
住所 No.	名称	所属 ビザ(社名)	職呼 P73	元々 開始	年間 給与	
6002	Abbott, Dominique	9	S	98/04/10	36,000.00	
6044	Abram, Brooke	9	S	98/04/18	60,000.00	
6079	Aiken, Gena	9	H	03/03/02		
6001	Allen, Kay	9	S	98/08/15	75,000.00	
8014	Anderson, Jeanette	9	S	98/02/01	53,000.00	
6832	Ata, Connie	9	S	97/02/15	38,250.00	
4803	Beck, Jeremy	6100	H	00/03/22	45,000.80	
7703	Bellus, Debbie	7071	S	97/03/15	52,000.00	
8446	Bennett, Jody	M50	H	97/12/13	31,200.00	
4801	Bretton, Josephine	6100	H	04/11/30	31,200.00	
8447	Brown, Harvey J.	M50	P	97/06/02	41,600.00	
5056	Carachael, Bradley P.	5100	S	03/09/05	45,000.00	
7564	Chamberlain, Carol K.	9	S	04/05/07	32,000.00	
106207	Chavez Gomez, Rafael	80380102	H	98/06/16		
9200	Dobson, Jane	9	S	04/07/27	55,750.00	
6033	Danovan, Andrew	3	H	98/04/18	13,520.00	
5127	Dibb, Chester	9	S	03/03/15	42,000.00	
8012	Edwards, Angela	9	S	98/02/01	56,000.00	
2479	Ellis, Jody A.	9	H	04/06/29	18,720.00	
106209	Escalante Jimenez, Jorge Alberto	80380102	H	00/01/01		
2428	Escalante, George	9	H	04/03/15	13,520.00	
6080	Fleming, Susan	9	S	95/02/10	48,000.00	
4802	Fraser, Carol	6100	H	04/06/01	37,440.00	
7550	Fuentes, Jason	5100	H	99/03/20	55,120.00	
6036	Galligan, Shawn	9	S	02/01/01	56,000.00	
106205	Garcia Garcia, Ernesto	80380102	H	98/12/15		
6079	Glass, Kendra	9	H	05/02/15	38,230.40	
4804	Guerrero, Joe	6100	P	02/05/12	26,000.00	
9400	Hawkins, Jack	30	S	03/01/15	31,500.00	
7701	Holmes, Anthony	7071	H	03/06/01	23,400.00	

このレポートにはカラム・レポートのフォーマットが選択されています。わかりやすいだけでなく、ローヤカラムのデータも最適に表示されます。

▶ カラム・レポートの例を作成するには

1. 〈レポート設計〉を起動します。
2. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択します。
3. 〈新規レポートの作成〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- レポート名
- 記述
- システム・コード

[レポート名]フィールドに入力したテキストはページ・ヘッダーの左側に表示され、[記述]フィールドのテキストは会社名の下でページ・ヘッダーの中央に表示されます。

4. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、ページ・ヘッダーとカラムを選び、[次へ]をクリックします。
5. 〈Page Header Details〉フォームで、[次へ]をクリックします。
6. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックして[次へ]をクリックします。
7. 〈Select Business View〉フォームで、V060116A - Employee Master (従業員マスター)ビューを検索して選択し、[次へ]をクリックします。

8. 〈Section Layout〉フォームで、右または左のボタンを使用し、次のカラムを選択して [Selected Columns] に移動させます。
 - Address Number (住所番号)
 - Name - Alpha (名称)
 - Business Unit - Home (所属ビジネスユニット)
 - Pay Class (H/S/P) (支払クラス)
 - Date - Original Employment (雇用開始日付)
 - Rate - Salary, Annual (年棒)
9. カラムの順序が例のように正しく表示されているかどうか確認してください。選択したビューの順序を変更するには、上または下向きのボタンを使用します。

注:

このフォームのカラムの順序とレポートの実例のカラムの順序には関連があります。

10. 選択したカラムの順序を調整したら、[次へ] をクリックします。
11. 〈Section Data Sequencing〉フォームで、右または左の矢印ボタンを押し、[Name - Alpha] カラムを [Selected Columns] カラムに移動させ、[次へ] をクリックします。
12. 〈Define Sort Properties〉フォームで、ソート矢印が上を向いている (名前順に昇順でレポートを表示) ことを確認し、[次へ] をクリックします。
13. 〈Section Data Selection〉で、[次へ] をクリックします。

この例にはデータ選択が定義されていません。
14. 〈Director〉の完了フォームでバージョン名を入力します。
15. [Finish (完了)] をクリックします。
16. [Save] をクリックして、レポートを保存します。
17. [Preview] タブをクリックします。
18. 〈Report Preview〉で、[Yes] をクリックします。
19. [File] メニューから [Exit] を選択して 〈Report Design〉を終了します。

グループ・レポートの作成

グループ・レポートでは、レポートのデータを編成して表示できます。レポートの各グループは、あるレコードのデータを表しています。ラベルの付いたデータ・フィールドのグループにあるデータ(データ項目)を表します。各データ項目にはビジネス・ビュー・カラムのデータが表示されます。

次のグループ化を行う前に、選択したデータ項目を横にいくつリスト表示するか指定できます。デフォルトの値は2です。たとえば、ビジネス・ビューを6つ選択すると、2つが横に3つが縦に表示されます。値を“3”に変更すると、カラムには3つが横に2つが縦に表示されます。

ビジネス・ビュー・カラム 1

ビジネス・ビュー・カラム 4

ビジネス・ビュー・カラム 2

ビジネス・ビュー・カラム 5

ビジネス・ビュー・カラム 3

ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 2

ビジネス・ビュー・カラム 1

ビジネス・ビュー・カラム 3

ビジネス・ビュー・カラム 5

ビジネス・ビュー・カラム 2

ビジネス・ビュー・カラム 4

ビジネス・ビュー・カラム 6

カラム数 = 3

注:

グループ・セクションはカラム形式ではありません。「ビジネス・ビュー・カラム」という用語の意味に気をつけてください。ビジネス・ビュー・カラムはフィールドであり、カラムではありません。ビジネス・ビュー・カラムのデータは、カラムや表セクションで表示されるようにカラム・フォーマットで表示されるか、グループ・セクションで表示されるように他に依存しないフィールドで表示されます。

新規レポート・オブジェクトを作成した後は、〈Director〉を使用してグループ・レポートを設計します。〈Director〉では、レポートの構成や内容について質問と応答の形式をとります。質問に答えていくとグループ・レポートが作成できます。グループ・レポートを作成した後は、〈Report Design〉を使って、レポート機能を拡張することもできます。

参照

- グループ・セクションの概要と使用条件については「グループ・セクションの特徴」

はじめる前に

- レポート・オブジェクトを作成します。レポート・オブジェクト作成の最終ステップを完了すると、〈Report Design Director〉が自動的に起動します。レポート設計および〈Director〉については「レポート・オブジェクトの作成」を参照してください。

▶ グループ・レポートに含めるレポート・セクションを選択するには

レポート・オブジェクトを作成すると、〈Director〉の〈Welcome〉フォームが表示されます。

〈Director〉には、レポート作成プロセス上の各ステップ間を移動するための〈Navigation Assistant (ナビゲーション・アシスタント)〉が組み込まれており、今どこのプロセスを処理しているかがわかります。〈Navigation Assistant〉をクリックして[Hide]を選ぶと、表示しないでおくこともできます。



1. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、レポートに含める次のヘッダーおよびフッターをクリックします。

- レポートヘッダー
- ページヘッダー
- ページフッター
- レポートフッター

2. グループ・オプションをクリックして[次へ]をクリックします。

ページ・ヘッダーを選択すると、〈Page Header Details〉フォームが表示されます。

ページ・ヘッダーを選ばない場合は、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。次のタスクへ進んでビジネス・ビューを選択します。

3. 〈Page Header Details〉で次のオプションのいずれかを選択すると、次の標準データ・フィールドが自動的に含まれます。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。

注記

〈Director〉のプロセスが完了したら、〈Report Design〉を使用してページ・ヘッダーにフィールドを追加したり削除したりすることができます。

このオプションをオフにすると、ページ・ヘッダーはブランクになります。〈Report Design〉フォームで、手作業でページ・ヘッダーにフィールドを追加することもできます。

4. [次へ]をクリックすると、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

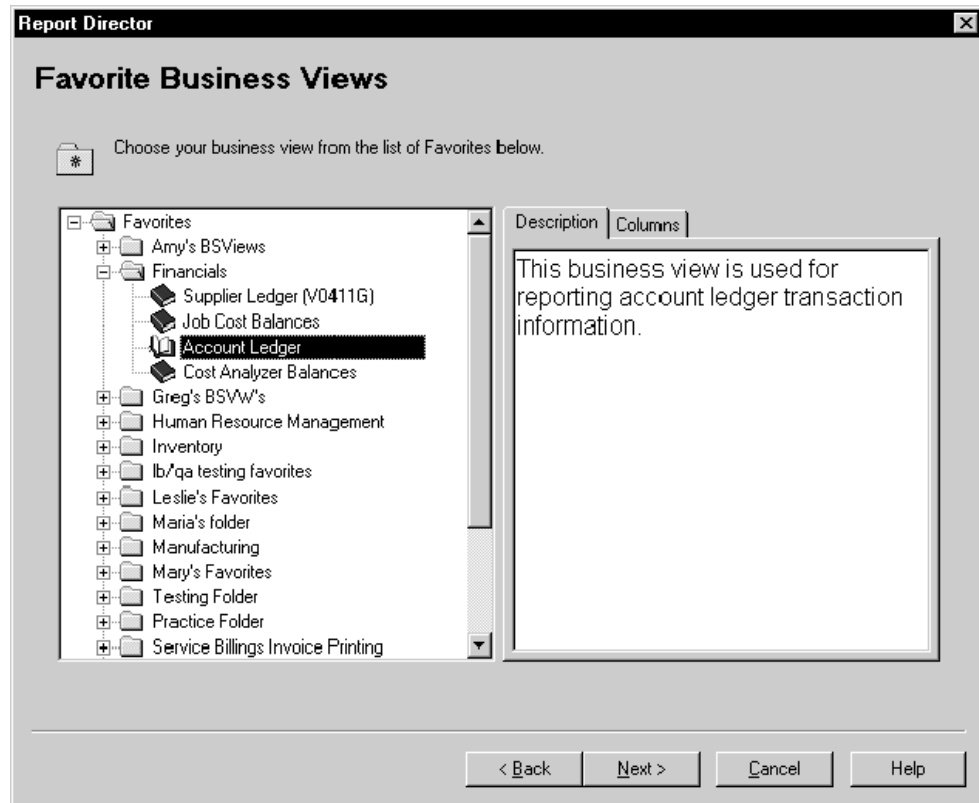
フィールド記述

記述	用語解説
レポートヘッダー	法的な通知あるいはレポートに表示される情報の簡単な記述など、ユーザー定義情報を含むレポートの最初に1度だけ表示されるヘッダー。
ページヘッダー	会社名およびレポートの見出しなどのユーザー定義情報を含む、レポートの各ページの上に表示されるヘッダー。
ページフッター	レポートの各ページの終りに表示されるフッター。ページフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。
レポートフッター	レポートの終りに表示されるフッター。レポートフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。

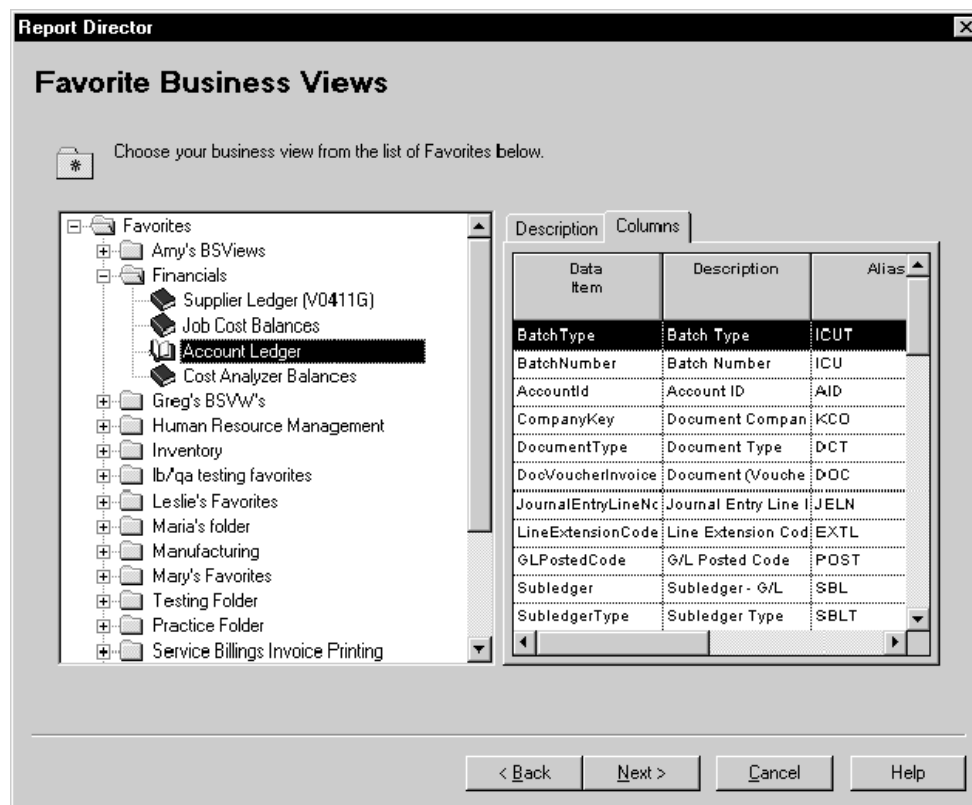
▶ お気に入りビジネス・ビュー・リストから選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'd like help finding an appropriate business view]を選択して[次へ]をクリックします。
2. 〈Favorite Business Views〉で、レポート・セクションに使用するビジネス・ビューを含むフォルダを開きます。該当するビジネス・ビューが表示されるまで[+]アイコンをクリックし、フォルダを展開してください。
3. [Description(記述)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューの簡単な説明が表示されます。



4. [Columns(カラム)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューに含まれるデータ・フィールドが表示されます。



5. 使用するビジネス・ビューを選択したら、[次へ]をクリックします。

参照

- このリストに独自のビジネス・ビューを追加する方法については、「ビジネス・ビューをお気に入りとして設定する」

▶ 〈Select Business View (ビジネス・ビューの選択)〉フォームを使用してビジネス・ビューを検索するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックします。
2. [次へ]をクリックします。
3. 〈Select Business View〉で、[Find]をクリックしてから[Enter]キーを押します。

使用可能なビジネス・ビューがフォームにすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると検索対象を絞ることができます。

4. ビジネス・ビューを選択してから、[次へ]をクリックします。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」

▶ ビジネス・ビュー・カラムをグループ・セクションに追加するには

ビジネス・ビューを選択すると、〈Section Layout〉フォームが表示されます。

Report Director

Section Layout

Place columns from the list of available business view columns on the left to the selected columns list on the right. These selected columns will be included in the report section you are defining.

Available Business View Columns		Selected Columns		
Data Item	Description	Data Item	Description	Alias
ReportCodeAddBook007	Category Code - Address B	BatchNumber	Batch Number	ICU
AddressNumberSentTo	Address Number - Approver	AddressNumber	Address Number	AN8
Century	Century	AmountOpen	Amount Open	AAP
FiscalYear1	Fiscal Year	ObjectAccount	Object Account	OBJ
PeriodNoGeneralLedge	Period Number - General L	Subledger	Subledger - G/L	SBL
AccountModeGL	Account Mode - G/L			
AccountId2	Account ID			
SubledgerType	Subledger Type			
Subledger	Subledger - G/L			
OriginalDocumentNo	Document - Original			
OriginalDocumentType	Document Type - Original			

Number of Columns: 2

< Back Next > Cancel Help

1. [Available Business View Columns]リストからレポートに含めるカラムを選び、右矢印をクリックして選択したカラム・リストに移動します。

または、各カラムを[Selected Columns]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Columns]リストから[Selected Columns]リストへすべてのカラムを移動させることもできます。

リストに移動した最初の項目は、レポートの左側からこの順に表示されます。

2. レポートからカラムを移動させるには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Business View Columns]リストへ移動させます。

または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Business View Columns]リストへ、すべてのカラムを移動させることもできます。

3. 表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。

または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。

4. レポートの最初の番号の横グループを変更するには、[Number of Columns(カラム数)]に数を入力します。

5. セクションのレイアウトが完了して[次へ]をクリックすると、〈Section Data Sequencing〉が表示されます。

▶ セクションのデータ順序設定を定義するには

前のタスクに従ってビジネス・ビューを選択すると、〈Section Data Sequencing〉フォームが表示されます。

Report Director

Section Data Sequencing

Define the sort order for the business view you selected. The sort order determines the order in which records are read from the database and displayed on your report.

Available Columns

Data Item	Description
LedgerType	Ledger Type
CurrencyCodeFrom	Currency Code - From
DateForGLandVoucherJULIA	Date - For G/L (and Voucher)
AmountField	Amount
NameAlphaExplanation	Name - Alpha Explanation
NameRemarkExplanation	Name - Remark Explanation
ReconciledROrBlank	Reconciled Code
Reference1JeVouchIn	Reference 1 - JE, Voucher,
UnitOfMeasure	Unit of Measure
Units	Units
CurrencyConverRateOv	Currency Conversion Rate -

Selected Columns

Data Item	Description	Alias
BatchNumber	Batch Number	ICU
DateForGLandV	Date - For G/L (and Voucher) - J	DGLJ

< Back Next > Cancel Help

1. データ順序設定のコラムを選択するには、[Available Columns]リストからコラムを選択し、右矢印をクリックして[Selected Columns]リストに移動します。

または、各コラムを[Selected Columns]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Columns]リストから[Selected Columns]リストへすべてのコラムを移動させることもできます。

注:

次のタスクでソート・プロパティを定義するには、このタスクでソートするコラムを選択してください。

2. レポートからコラムを削除させるには、[Selected Columns]リストのコラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Columns]リストへ移動させます。

または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Columns]リストへ、すべてのコラムを移動させることもできます。

- 表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。
または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。
- レポート用のデータ順序設定が終了したら、[次へ]をクリックします。

▶ セクションのソート・プロパティを定義するには

前のタスクに従ってデータ順序を定義すると、〈Define Sort Properties〉フォームが表示されます。

Report Director

Define Sort Properties

Define the properties for the sort columns you selected. These properties determine the type of sequencing (ascending/descending), whether a level break should occur, and if a level break should produce a page break. Click on a box to select a property.

Sort Columns

Data Item	Description	Alias	Sort Order	Level Break	Page Break
BatchNumber	Batch Number	ICU	↕		
DateForGLand	Date - For G/L (and Vou	DGL	↕		

< Back **Next >** Cancel Help

- 〈Define Sort Properties〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - ソート順序
- レベル区切りやページ区切りを指定する場合は、次のフィールドに値を入力してください。
 - レベル区切り

注意:

データ順序設定カラムをレベル区切りとして定義する場合(次のタスクで説明)、[Selected Columns]リストから[Available Columns]にそのカラムを戻すと、予期しない結果となることがあります。

- ページ区切り
- 完了したら[次へ]をクリックします。〈Section Data Selection(セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

フィールド記述

記述	用語解説
ソート順序	ソート順序を昇順／降順のどちらにするか指定します。
レベル区切り	オブジェクトがレベル区切り識別子として機能できるようにします。 レベル区切りでは、セクションの結合、合計の計算、レベル区切りヘッダーセクションのトリガーを実行できます。
ページ区切り	オブジェクトがページ区切りとして機能できるようにします。 注:オブジェクトをページ区切りとして選択する前に、レベル区切りとして選択してください。

▶ セクションに含めるレコードを選択するには

前のタスクに従ってソート・プロパティを定義すると、〈Section Data Selection〉フォームが表示されます。

Report Director

Section Data Selection

Define the subset of data your report will use when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that your report only processes certain records.

Icons: [Trash], [Magnifying Glass], [Down Arrow]

Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
Where	BC Amount (F0911)	is greater than	"1,000.00"

Buttons: < Back, Next >, Cancel, Help

1. 〈Section Data Selection〉で、[Operator]カラムをクリックして演算子を選択します。
最初の条件に使用する[Operator]カラムでのデフォルト値は「Where」です。続く条件文では、「And」および「Or」が[Operator]カラムで使用できるようになり、該当するものをダブルクリックすると選択されます。
2. [Left Operand]カラムをクリックして使用可能なオブジェクトを表示し、次のいずれかの処理を実行します。
 - リストをスクロールして使用するオブジェクトを探し、ダブルクリックして[Left Operand]カラムに入力する。
 - [Left Operand]フィールドでオブジェクト名の最初の文字を入力し、リスト上のオブジェクトを表示させてから、ハイライトされたオブジェクトをダブルクリックする。

[Left Operand]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Comparison]カラムのリストが自動表示されます。
3. 次の演算子のいずれかをダブルクリックして選択します。
 - is equal to(等しい)
 - is greater than(より大きい)
 - is greater than or equal to(～以上)
 - is less than(より小さい)
 - is less than or equal to(～以下)
 - is not equal to(等しくない)

[Comparison]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Right Operand]カラムにリストが自動表示されます。使用可能なオブジェクト、特殊の値、および変数は、選択したオペランドによって異なります。
4. [Right Operand]カラムでリストの値をクリックして選択します。
このカラムに表示される項目は、[Comparison]カラムでの選択項目によって変わります。次のオプションが使用できる場合もあります。

Blank	Blank(スペース)を自動的に入力
Literal	ユーザーが特定の値を入力
Null (ヌル)	このフィールドと関連する値がない
Zero (ゼロ)	ゼロが自動的に入力
BC	このレポートのビジネス・ビュー・カラム
FI	フォーム・インターコネクトからこのレポートに読み込まれる値
PC	前のビジネス・ビュー・カラム値

PO	このレポートの処理オプションの値
PV	変数の前の値
RC	このレポートの固定情報
RV	このレポートのバージョン
SV	システム変数
SL	システムによるリテラル入力
TV	テキスト変数
VA	イベント・ルール変数

[Right Operand]カラムの[Literal]を選ぶと、次の説明する値を入力するためのフォームが表示されます。

5. 次のタブのいずれかを選択して値を定義し、[OK]をクリックします。

- Single value (単一値)

単一値を入力して[OK]をクリックします。たとえば、特定の会社の住所番号を入力できます。

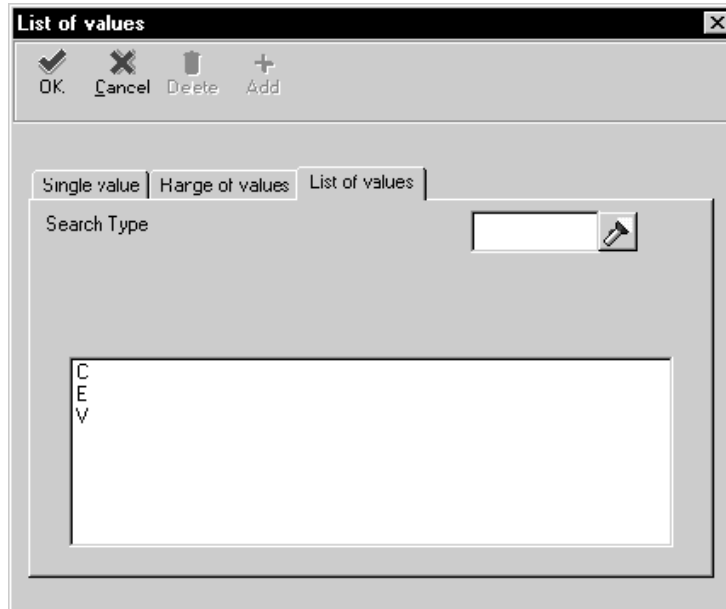
- Range of values (範囲指定)

値の範囲を入力してから[OK]をクリックします。たとえば、00001 から 00060 までの会社の値を範囲指定します。値範囲を使用する際に有効な論理演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。

- List of values (値のリスト)

リストに値を追加したり、リストから値を削除するには、次の処理を行います。

- フィールドに各値をタイプして、[Enter]キーを押すか、フォームの上部にある[Add]ボタンをクリックします。
- この処理を繰り返して、値のリストを完成します。たとえば、値のリストには顧客のC、従業員のE、仕入先のVなど検索タイプ用のユーザー定義コードなどが含まれることがあります。値のリストを使用する際に有効な演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- 値を削除するには、対象となる値を選択してからフォームの上部にある[Delete]ボタンをクリックします。



6. 必要に応じて、ステップの 1 から 5 を繰り返し、選択基準を定義します。
7. 〈Section Data Selection〉で、条件行を削除するには、ロー見出しをクリックしてローをハイライトしてから、フォーム上部の [Delete (削除)] ボタンをクリックします。
8. 条件の順序を変更するには、ロー見出しを選択して上または下方向のボタンをクリックします。
9. 完了したら [次へ] をクリックします。

参照

- レベル区切りの処理については「レベル区切りヘッダーおよびフッター・セクションの処理」

▶ レポートのバッチ・バージョンを作成するには

セクションのデータ選択を定義すると、〈Director〉の完了フォームが表示されます。

1. 〈Finish (完了)〉フォームで、[Yes] をクリックすると、テンプレートのバッチ・バージョンが自動的に作成されます。
2. [Yes, create a version of this report.] の下のフィールドにバージョン名を入力します。
3. 〈Finish〉フォームで、選択を検討するには、[戻る] をクリックして〈Director〉フォーム内を移動するか、〈Navigation Assistant〉で検討するフォームをクリックします。
4. 問題がない場合は [完了] をクリックします。

注意:

[完了] をクリックした後は、このレポート用には〈Director〉にアクセスできなくなります。[完了] をクリックする前に、手順 3 にあるように、再度〈Director〉のすべてのフォーム上の選択項目を検討してください。

〈Report Design – Report View〉フォームが表示されます。

参照

- OMW を使ったバッチ・バージョンの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」
- バッチ・バージョンの作成については「レポート用バッチ・バージョン」

▶ レポートを保存するには

〈Director〉の完了フォームで、[Finish]をクリックすると、〈Report Design〉フォームが表示されます。

〈Report Design〉で、次のいずれかを実行します。

- [File]メニューから[Save]を選択する。
- ツールバーで[Save]ボタンをクリックする。

参照

- レポートの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

レポートの変更や拡張については次のトピックを参照してください。

- 「基本レポート拡張」
- 「上級レポート拡張」

Director による作成結果の検討

[完了]をクリックすると、〈Director〉処理が完了します。処理中に選択した項目に基づいて、レポートのセクションおよびレポートに組み込んだデータ・フィールドが〈Report Design〉に表示されます。各セクションには次の内容が含まれます。

- セクション・タイプを表すアイコン
- セクション内の各フィールドをまとめたブラケット
- タイトル記述

レポートの主要詳細セクションのタイトルには、他のレポート・セクションのタイトルと区別するために太字のフォントが使用されています。

例: Director を使用したグループ・レポートの作成

このサンプル・レポートは、〈Director〉を使用して作成しています。ビジネス・ビューV41021E〈品目の保管場所〉および〈品目マスターの結合〉に基づいており、そのビジネス・ビューには次のカラムを使用しています。

- Location(保管場所)
- Item Number – Short(品目番号 – 略式)
- Primary Location(基本保管場所)
- Category G/L(元帳カテゴリ G/L)

- Quantity on Hand – Primary units(手持数量 – 基本数量)
- Quantity on Backorder(バックオーダー数量)
- Business Unit(ビジネスユニット)

レポートではビジネスユニット 27 のみを表示しています。

K0641110			J. D. Edwards & Company		2003/08/26 9:00:31
			Inventory by Location		Page - 1
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60011	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60020	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60038	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60062	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60071	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60177	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60222	手持数量			
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60222	手持数量	170		
基本保管場所 (P/S)		バックオーダー数量			
保管場所		元帳クラス	IN00	ビジネスユニット	27
略式品目No. #	60222	手持数量	140		

▶ グループ・レポートの例を作成するには

1. 〈レポート設計〉を起動します。
2. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択します。
3. 〈新規レポートの作成〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - レポート名
 - 記述
 - システム・コード

[レポート名]フィールドに入力したテキストはページ・ヘッダーの左側に表示され、[記述]フィールドのテキストは会社名の下でページ・ヘッダーの中央に表示されます。
4. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、ページ・ヘッダーとグループを選び、[次へ]をクリックします。
5. 〈Page Header Details〉フォームで、[次へ]をクリックします。
6. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックして[次へ]をクリックします。
7. 〈Select Business View〉フォームで、V41021E – 品目の保管場所、品目の結合のビジネス・ビューを検索して選択し、[次へ]をクリックします。

8. 〈Section Layout〉フォームで、右または左のボタンを使用し、次のカラムを選択して [Selected Columns] に移動させます。
- Location (保管場所)
 - Item Number – Short (品目番号 – 略式)
 - Primary Location (基本保管場所)
 - Category G/L (元帳カテゴリ G/L)
 - Quantity on Hand – Primary units (手持数量 – 基本数量)
 - Quantity on Backorder (バックオーダー数量)
 - ビジネスユニット
9. カラムの順序が例のように正しく表示されているかどうか確認してください。選択したビジネス・ビュー・カラムの順序を変更するには、上または下向きのボタンを使用します。

注:

フォーム上でのカラムの順序とレポートの実例のカラムの順序には関連があります。

10. 選択したカラムが図のように表示されたら、[Number of Columns] に“3”と入力し、[次へ] をクリックします。
11. 〈Section Data Sequencing〉フォームで、右または左の矢印ボタンを押し、[Location and Item Number – Short (保管場所および品目番号 – 略式)] カラムを [Selected Columns] カラムに移動させ、[次へ] をクリックします。
12. カラムが図のように [Selected Columns] に表示されているかどうか確認してください。このようにすると、レポートの品目がまず保管場所でソートされ、次に品目番号でソートされます。
13. 選択したカラムの順序を調整したら、[次へ] をクリックします。
14. 〈Define Sort Properties〉フォームで、ソート矢印が上を向いている (両方のカテゴリでアルファベット順に昇順でレポートがソートされている) ことを確認し、[次へ] をクリックします。

注:

手順 15 および 16 を実行すると、ビジネス・ビュー 27 にのみ関連するレコードが表示されます。

15. 〈Section Data Selection〉で、次のようにグリッドのフィールドに情報を入力します。
- 演算子 – Where
 - 左オペランド – BC ビジネスユニット (F41021) (MCU) (BC)
 - 比較 – 等しい(=)
 - 右オペランド – 〈リテラル〉
〈リテラル〉をダブルクリックすると、〈Single value (単一値)〉フォームが表示されます。
16. [単一値] タブをクリックして、[ビジネスユニット] フィールドに“27”を入力して、[OK] をクリックします。

17. 〈Section Data Selection〉で、[次へ]をクリックします。
18. 〈Finish〉フォームで、バージョン名を入力します。
19. [完了]をクリックします。
20. [Save]をクリックして、レポートを保存します。
21. [Preview]タブをクリックします。
22. 〈Report Preview〉で、[Yes]をクリックします。
このセクションの最初にあるレポートの実例と同じような外観になります。
23. [File]メニューから[Exit]を選択して〈Report Design〉を終了します。

表レポートの作成

表レポートはカラム・レポートのように見えますが、その他にも機能があります。表レポートは自動的にカラムの合計を計算します。カラムのデータにデータベースのデータをリンクさせ、レポートを表示しているユーザーがデータをクリックしてデータベースのエントリを見ることができるようにします。このプロセスは、金額がどのようにして取り込まれたかを監査人や他のユーザーが確認する場合に便利です。この機能はドリルダウン機能と呼ばれます。

新規レポート・オブジェクトを作成した後は、〈Director〉を使用して表レポートを設計します。〈Director〉では、レポートの構成や内容について質問と応答の形式をとります。質問に答えていくと、表レポートが作成できます。グループ・レポートを作成した後は、〈Report Design〉を使って、レポート機能を拡張することもできます。

はじめる前に

- レポート・オブジェクトを作成します。レポート・オブジェクト作成の最終ステップを完了すると、〈Report Design Director〉が自動的に起動します。レポート・オブジェクトの作成については「レポート・オブジェクトの作成」を参照してください。

参照

- 表セクションの概要と使用条件については「表セクションの特徴」

▶ 表レポートに含めるレポート・セクションを選択するには

レポート・オブジェクトを作成すると、〈Director〉の〈Welcome〉フォームが表示されます。

〈Director〉には、レポート作成プロセス上の各ステップ間を移動するための〈Navigation Assistant (ナビゲーション・アシスタント)〉が組み込まれており、今どこのプロセスを処理しているかがわかります。〈Navigation Assistant〉をクリックして[Hide]を選ぶと、表示しないでおくこともできます。



1. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、レポートに含める次のヘッダーおよびフッターをクリックします。
 - レポートヘッダー
 - ページヘッダー
 - ページフッター
 - レポートフッター

2. 表レポートの作成を選び、[次へ]をクリックします。

ページ・ヘッダーを選択すると、〈Page Header Details〉フォームが表示されます。

ページ・ヘッダーを選ばない場合は、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。次のタスクに進みます。

3. 〈Page Header Detail〉で次のいずれかを選択します。

- 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
- 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。

注記:

〈Director〉のプロセスが完了したら、〈Report Design〉を使用してページ・ヘッダーにフィールドを追加したり削除したりすることができます。

このオプションをオフにすると、ページ・ヘッダーはブランクになります。〈Report Design〉フォームの[Section]メニューから、手作業でページ・ヘッダーにフィールドを追加することもできます。

4. [次へ]をクリックすると、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

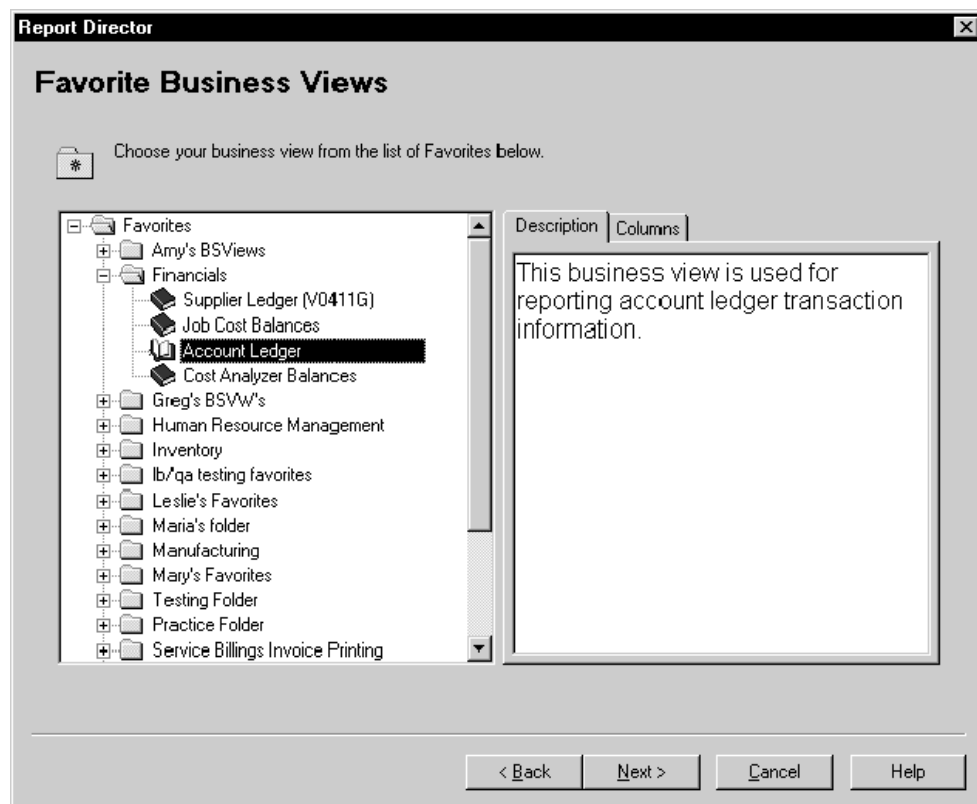
フィールド記述

記述	用語解説
レポートヘッダー	法的な通知あるいはレポートに表示される情報の簡単な記述など、ユーザー定義情報を含むレポートの最初に1度だけ表示されるヘッダー。
ページヘッダー	会社名およびレポートの見出しなどのユーザー定義情報を含む、レポートの各ページの上に表示されるヘッダー。
ページフッター	レポートの各ページの終りに表示されるフッター。ページフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。
レポートフッター	レポートの終りに表示されるフッター。レポートフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。

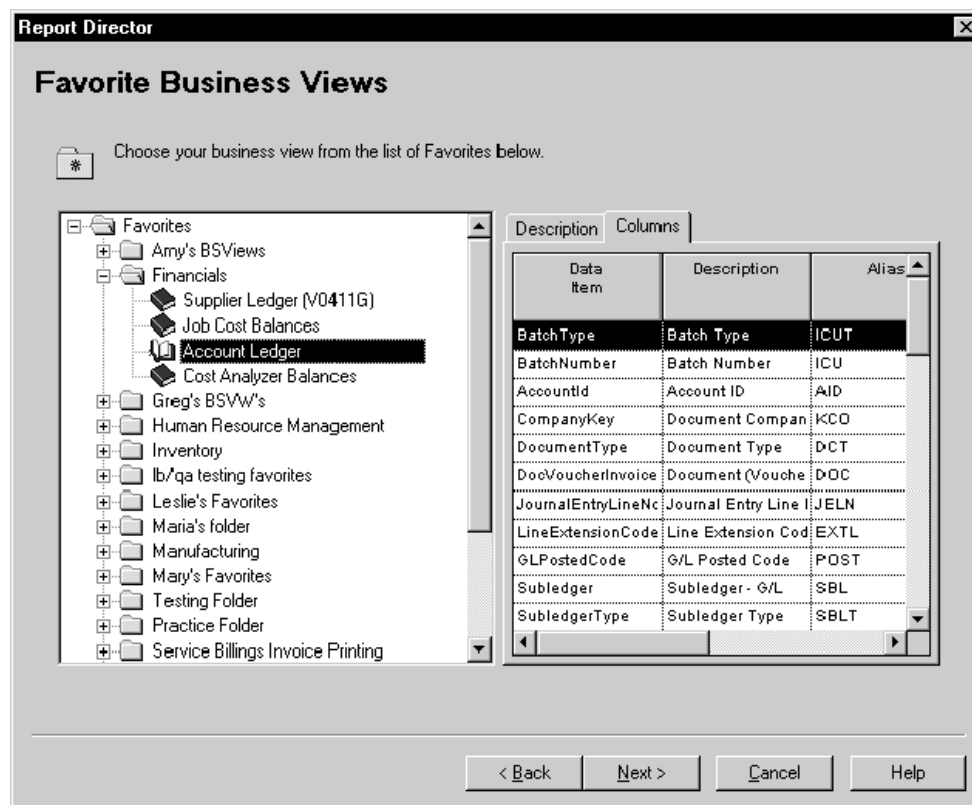
▶ お気に入りビジネス・ビュー・リストから選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'd like help finding an appropriate business view]を選択して[次へ]をクリックします。
2. 〈Favorite Business Views〉で、レポート・セクションに使用するビジネス・ビューを含むフォルダを開きます。該当するビジネス・ビューが表示されるまで[+]アイコンをクリックし、フォルダを展開してください。
3. [Description(記述)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューの簡単な説明が表示されます。



4. [Columns(カラム)]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューに含まれるデータ・フィールドが表示されます。



5. 使用するビジネス・ビューを選択したら、[次へ]をクリックします。

参照

- このリストに独自のビジネス・ビューを追加する方法については、「ビジネス・ビューをお気に入りとして設定する」

▶ Select Business View(ビジネス・ビューの選択)フォームを使用してビジネス・ビューを選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックします。
2. [次へ]をクリックします。
3. 〈Select Business View〉で、[Find]をクリックしてから[Enter]キーを押します。

使用可能なビジネス・ビューがフォームにすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると検索対象を絞ることができます。

4. ビジネス・ビューを選択してから、[次へ]をクリックします。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」

▶ ビジネス・ビュー・カラムをセクションに追加するには

ビジネス・ビューを選択すると、〈Section Layout〉フォームが表示されます。

1. [Available Business View Columns]リストからレポートに含めるカラムを選び、右矢印をクリックして選択したカラム・リストに移動します。

または、各カラムを[Selected Columns(選択したカラム)]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Business View Columns]から[Selected Columns]へすべてのカラムを移動させることもできます。

リストに移動した最初の項目は、レポートの左側からこの順に表示されます。

2. レポートからカラムを移動させるには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Business View Columns]リストへ移動させます。

または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Business View Columns]リストへ、すべてのカラムを移動させることもできます。

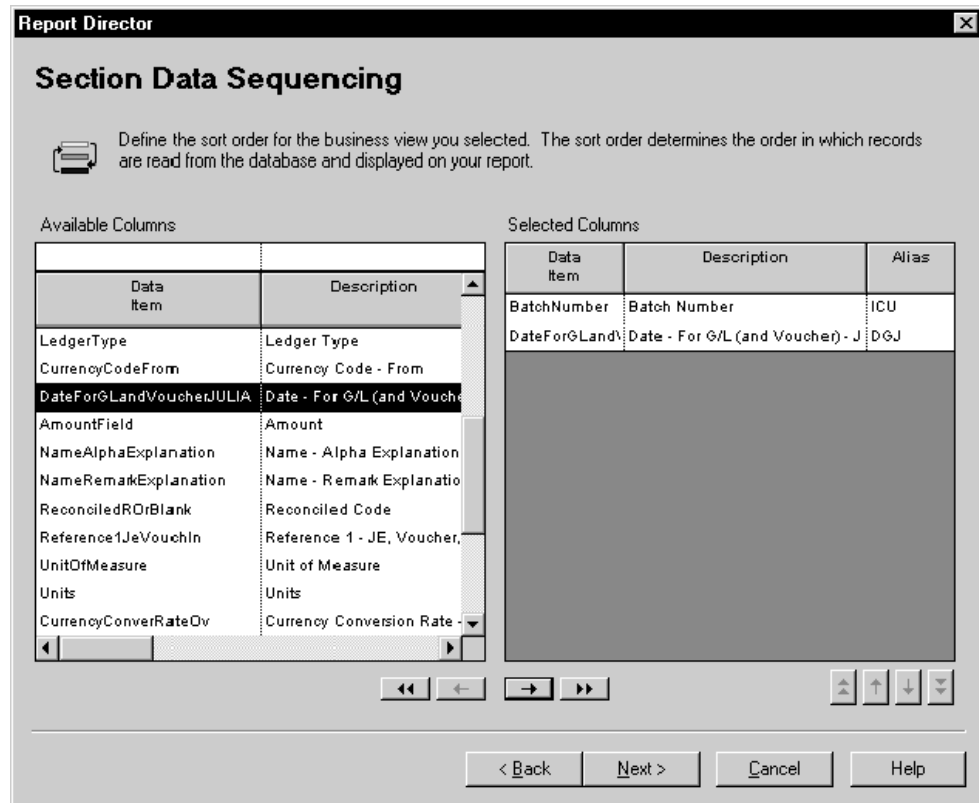
3. レポートで表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。

または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。

4. セクションのレイアウトが完了して[次へ]をクリックすると、〈Section Data Sequencing(セクション・データ順序設定)〉が表示されます。

▶ セクションのデータ順序設定を定義するには

前のタスクに従ってビジネス・ビューを選択すると、〈Section Data Sequencing〉フォームが表示されます。



1. データ順序設定の列を選択するには、[Available Columns]リストから列を選択し、右矢印をクリックして[Selected Columns]リストに移動します。
または、各列を[Selected Columns]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Columns]リストから[Selected Columns]リストへすべての列を移動させることもできます。

注:

次のタスクでソート・プロパティを定義するには、このタスクでソートする列を選択してください。

2. レポートから列を削除させるには、[Selected Columns]リストの列を選択し、左矢印をクリックして[Available Columns]リストへ移動させます。
または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Columns]リストへ、すべての列を移動させることもできます。
3. 表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストの列を選択し、上下矢印をクリックして選択した列をリスト内で1行ずつ上下に移動させます。
または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択した列をリストの一番上か下に移動させます。
4. レポート用のデータ順序設定が終了したら、[次へ]をクリックします。

▶ セクションのソート・プロパティを定義するには

前のタスクに従ってデータ順序を定義すると、〈Define Sort Properties〉フォームが表示されます。

Report Director

Define Sort Properties

Define the properties for the sort columns you selected. These properties determine the type of sequencing (ascending/descending), whether a level break should occur, and if a level break should produce a page break. Click on a box to select a property.

Sort Columns

Data Item	Description	Alias	Sort Order	Level Break	Page Break
BatchNumber	Batch Number	ICU	↗		
DateForGLand	Date - For G/L (and Vou	DGL	↗		

< Back Next > Cancel Help

1. 〈Define Sort Properties〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - ソート順序
2. レベル区切りやページ区切りを指定する場合は、次のフィールドに値を入力してください。
 - レベル区切り

注意:

データ順序設定カラムをレベル区切りとして定義する場合(次のタスクで説明)、[Selected Columns]リストから[Available Columns]にそのカラムを戻すと、予期しない結果となることがあります。

- ページ区切り
3. 完了したら[次へ]をクリックします。〈Section Data Selection(セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

参照

- レベル区切りの処理については「レベル区切りヘッダーおよびフッター・セクションの処理」

フィールド記述

記述	用語解説
ソート順序	ソート順序を昇順／降順のどちらにするか指定します。
レベル区切り	オブジェクトがレベル区切り識別子として機能できるようにします。 レベル区切りでは、セクションの結合、合計の計算、レベル区切りヘッダーセクションのトリガーを実行できます。
ページ区切り	オブジェクトがページ区切りとして機能できるようにします。 注:オブジェクトをページ区切りとして選択する前に、レベル区切りとして選択してください。

▶ セクションに含めるレコードを選択するには

前のタスクに従ってソート・プロパティを定義すると、〈Section Data Selection〉フォームが表示されます。

Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
Where	BC Amount (F0911)	is greater than	"1,000.00"

1. 〈Section Data Selection〉で、[Operator]カラムをクリックして演算子を選択します。

最初の条件に使用する[Operator]カラムでのデフォルト値は「Where」です。続く条件文では「And」および「Or」が[Operator]カラムで使用できるようになり、該当するものをダブルクリックすると選択されます。

2. [Left Operand]カラムをクリックして使用可能なオブジェクトを表示し、次のいずれかの処理を実行します。

- リストをスクロールして使用するオブジェクトを探し、ダブルクリックして[Left Operand]カラムに入力する。
- [Left Operand]フィールドでオブジェクト名の最初の文字を入力し、リスト上のオブジェクトを表示させてから、ハイライトされたオブジェクトをダブルクリックする。

[Left Operand]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Comparison]カラムのリストが自動表示されます。

3. 次の演算子のいずれかをダブルクリックして選択します。

- is equal to(等しい)
- is greater than(より大きい)
- is greater than or equal to(～以上)
- is less than(より小さい)
- is less than or equal to(～以下)
- is not equal to(等しくない)

[Comparison]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Right Operand]カラムにリストが自動表示されます。使用可能なオブジェクト、特殊の値、および変数は、選択したオペランドによって異なります。

4. [Right Operand]カラムでリストの値をクリックして選択します。

このカラムに表示される項目は、[Comparison]カラムでの選択項目によって変わります。次のオプションが使用できる場合もあります。

Blank	Blank(スペース)を自動的に入力
Literal	ユーザーが特定の値を入力
Null (ヌル)	このフィールドと関連する値がない
Zero (ゼロ)	ゼロが自動的に入力
BC	このレポートのビジネス・ビュー・カラム
FI	フォーム・インターコネクトからこのレポートに読み込まれる値
PC	前のビジネス・ビュー・カラム値
PO	このレポートの処理オプションの値
PV	変数の前の値
RC	このレポートの固定情報

RV	このレポートのバージョン
SV	システム変数
SL	システムによるリテラル入力
TV	テキスト変数
VA	イベント・ルール変数

[Right Operand]カラムの[Literal]を選ぶと、次の説明する値を入力するためのフォームが表示されます。

5. 次のタブのいずれかを選択して値を定義し、[OK]をクリックします。

- Single value (単一値)

単一値を入力して[OK]をクリックします。たとえば、特定の会社の住所番号を入力できます。

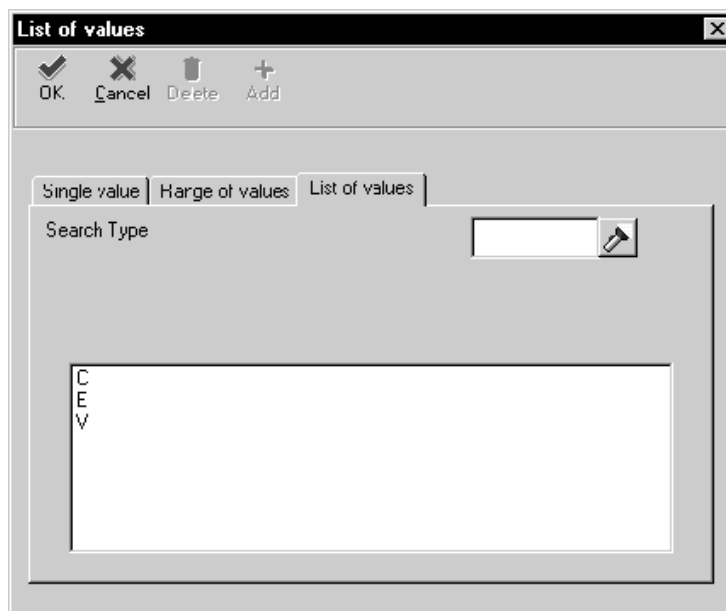
- Range of values (範囲指定)

値の範囲を入力してから[OK]をクリックします。たとえば、00001 から 00060 までの会社の値を範囲指定します。値範囲を使用する際に有効な論理演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。

- List of values (値のリスト)

リストに値を追加したり、リストから値を削除するには、次の処理を行います。

- フィールドに各値をタイプして、[Enter]キーを押すか、フォームの上部にある[Add]ボタンをクリックします。
- この処理を繰り返して、値のリストを完成します。たとえば、値のリストには顧客のC、従業員のE、仕入先のVなど検索タイプ用のユーザー定義コードなどが含まれることがあります。値のリストを使用する際に有効な演算子は、「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- 値を削除するには、対象となる値を選択してからフォームの上部にある[Delete]ボタンをクリックします。



6. 必要に応じて、ステップの 1 から 5 を繰り返し、選択基準を定義します。
7. 〈Section Data Selection〉で、条件行を削除するには、ロー見出しをクリックしてローをハイライトしてから、フォーム上部の [Delete (削除)] ボタンをクリックします。
8. 条件の順序を変更するには、ロー見出しを選択して上または下方向のボタンをクリックします。
9. 完了したら [次へ] をクリックします。

▶ レポートのバッチ・バージョンを作成するには

セクションのデータ選択を定義すると、〈Director〉の完了フォームが表示されます。

1. 〈Finish (完了)〉フォームで [Yes] をクリックすると、テンプレートのバッチ・バージョンが自動的に作成されます。
2. [Yes, create a version of this report.] の下のフィールドにバージョン名を入力します。
3. 〈Finish〉フォームで、選択を検討するには、[戻る] をクリックして〈Director〉フォーム内を移動するか、〈Navigation Assistant〉で検討するフォームをクリックします。
4. 問題がない場合は [完了] をクリックします。

注意:

[完了] をクリックした後は、このレポート用には〈Director〉にアクセスできなくなります。[完了] をクリックする前に、手順 3 にあるように、再度〈Director〉のすべてのフォーム上の選択項目を検討してください。

〈Report Design – Report View〉フォームが表示されます。

参照

- OMWを使ったバッチ・バージョンの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」
- バッチ・バージョンの作成については「レポート用バッチ・バージョン」

▶ レポートを保存するには

〈Director〉の完了フォームで[Finish]をクリックすると、〈Report Design〉フォームが表示されます。

〈Report Design〉で、次のいずれかを実行します。

- [File]メニューから[Save]を選択する。
- ツールバーで[保存]ボタンをクリックする。

参照

- レポートの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

レポートの変更や拡張については次のトピックを参照してください。

- 「基本レポート拡張」
- 「上級レポート拡張」

Director による作成結果の検討

[完了]をクリックすると、〈Director〉処理が完了します。処理中に選択した項目に基づいて、レポートのセクションおよびレポートに組み込んだデータ・フィールドが〈Report Design〉に表示されます。各セクションには次の内容が含まれます。

- セクション・タイプを表すアイコン
- セクション内の各フィールドをまとめたブラケット
- タイトル記述

レポートの主要詳細セクションのタイトルには、他のレポート・セクションのタイトルと区別するために太字のフォントが使用されています。

例: Director を使用した表レポートの作成

このサンプル・グループ・レポートは、〈Director〉を使用して作成しています。会社の各ビジネスユニットの未処理の購買オーダーの合計金額を示します。ビジネス・ビューV4311A〈購買オーダー詳細表示〉に基づいており、そのビジネス・ビューには次のカラムを使用しています。

- Business Unit (ビジネスユニット)
- Order Type (オーダー・タイプ)
- Amount Open (未決済金額)

レポートは会社別に系統立てられており、品目名を表示します。また、残高があり終了していない在庫部品の購買オーダーのみを表示するようフィルタ処理されます。レポートを設計する際には、このフィルタ処理を計画して定義しておく必要があります。

HS843P00			J. B. Edwards & Company	02/09/18 17:31:49
			Purchase Order Detail	Page - 1
記述	ユニット	サイズ	金額	
Financial/Distribution Costs				
Bike Rack - Trunk Mount	30	00	32.10	
Cro-Moly Frame, Red	30	00	5,000.00	
Cro-Moly Frame, Two Tone	30	00	30,000.00	
Cro-Moly Frame, Green	30	00	75,000.00	
Chain, Std	30	00	550.00	
Seat	40	00	1,305.40	
Mountain Bike, Red	40	00	614,916.00	
Tire Pump	40	00	380.00	
Touring Bike, Green	20	00	16,500.00	
Youth Sport Bike	20	00	9,632.00	
Lid	30	00	150.00	
Bottle	30	00	450.00	
Bike Accessory Kit	30	00	10,000.00	
Helmet	40	00	1,197.92	
Helmet - Hi Flow	30	00	1,800.00	
Tire Repair Kit	30	00	625.00	
Clothing Pannier - Black	30	00	1,192.50	
Logic Board	30	00	832.40	
25 mm Cro-Moly Tubing	30	00	140.00	
50 mm Cro-Moly Tubing	30	00	144.00	

このレポートには、自動集計および表レポートの表示カラム機能のため、表レポート・フォーマットが選択されています。

▶ 表レポートの例を作成するには

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択します。
2. 〈新規レポートの作成〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- レポート名
- 記述
- システム・コード

[レポート名]フィールドに入力したテキストはページ・ヘッダーの左側に表示され、[記述]フィールドのテキストは会社名の下でページ・ヘッダーの中央に表示されます。

3. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、ページ・ヘッダーと表を選び、[次へ]をクリックします。
4. 〈Page Header Details〉フォームで、[次へ]をクリックします。
5. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックします。
6. 〈Select Business View〉フォームで、V4311A (購買オーダーの詳細表示) のビジネス・ビューを検索して選択し、[次へ]をクリックします。

〈Director〉で[Description]カラムが追加されます。

7. 〈Section Layout〉フォームで、右または左のボタンを使用し、次のカラムを選択して[Selected Columns]に移動させます。
 - Business Unit (ビジネスユニット)
 - Order Type (オーダー・タイプ)

- Amount – Open(未決済金額)
8. カラムの順序が上のように表示されているかどうか確認してください。選択したビジネス・ビュー・カラムの順序を変更するには、上または下向きのボタンを使用します。

注:

フォーム上でのカラムの順序とレポートの実例のカラムの順序には関連があります。

9. 選択したカラムの順序を調整したら、[次へ]をクリックします。
10. 〈Section Data Sequencing〉フォームで、右または左の矢印ボタンを押し、テーブル F4311 の[Order Company(オーダー会社)]および[2nd item Number(第 2 品目番号)]カラムを[Selected Columns]カラムに移動させ、[次へ]をクリックします。カラムの順序が下のように表示されているかどうか確認してください。

注:

このレポートは、表示用にこのレポートに含まれていないビジネス・ビュー・カラムでソートされています。

11. 〈Define Sort Properties〉フォームで、ソート矢印が上を向いていて、レベル区切りが両方のビジネス・ビュー・カラムに選択されていることを確認して、[次へ]をクリックします。

これらの 2 つのカラム・レベル区切りを作成すると、記述カラムが正しく表示され、システムが新しいレコードを表示するたびに手配済みオーダーの合計が表示されます。

12. 〈Section Data Selection〉で、次のようにレポートに表示されるデータをフィルタ処理して、[次へ]をクリックしてください。フィルタの各行は And 演算子に関係します。この場合、レポートに含めるには各データ項目がすべての基準に一致する必要があるため、And を使用してください。

- 残高のある購買オーダーのみを含むには
 - 左オペランド – 金額 – オープン(F4311)
金額 – オープン(F4311)を選択しても、品目は BC 金額 – オープン(F4311)として表示されます。BC は、品目がビジネスカラムであることを示すコードです。
 - 比較 – より大きい(>)
 - 右オペランド – <ゼロ>
ゼロはリテラルとして入力できません。
- 購買オーダー品目のみを含む場合 (F4311 テーブルの購買オーダーはコード PO で示されます)
 - 演算子 – And
 - 左オペランド – オーダー・タイプ(F4311)
 - 比較 – 等しい(=)
 - 右オペランド – OP

OP はリテラル値です。挿入するには<Literal>を選択します。<Single value (単一値)>フォームが表示されます。[単一値]タブをクリックして、[ビジネスユニット]フィールドに“OP”を入力し、[OK]をクリックします。

- 発注残(F4311 で 999 以外の任意のコードで表示)のみを含めるには
 - 演算子 - And
 - 左オペランド - 状況コード - 次へ(F4311)
 - 比較 - 同等(=)ではない
 - 右オペランド - 999999 はリテラル値です。
 - 在庫品目(F4311 テーブルでコード S)のみを含めるには
 - 演算子 - And
 - 左オペランド - 行タイプ(F4311)
 - 比較 - 等しい(=)
 - 右オペランド - SS はリテラル値です。
13. <Director>の完了フォームで、[No, I will create a version of this report later]を選択して[完了]をクリックします。
14. [Save]をクリックして、レポートを保存します。
15. [Preview]タブをクリックします。
16. [File]メニューから[Exit]を選択して<Report Design>を終了します。

Director を使用したアプリケーション・レポートの作成

アプリケーション・レポートは、<Director>を使用してのみ作成できます。ディレクタ・テンプレートは、会計や固定資産、作業原価など J.D. Edwards ソフトウェアに固有のレポートを作成するのに便利です。J.D. Edwards には、作成されるレポートのタイプに共通するデフォルトの条件に一致するディレクタ・テンプレートが備わっています。<Director>でテンプレートを選択すると、テーブルに保存されているテンプレートのスペックが読み込まれ、<Director>フォーム上で、そのデフォルト条件が表示されます。テンプレートを修正するか、または独自のテンプレートを作成できます。

<Director>ではスマート・フィールドを使用できます。スマート・フィールドとは、J.D. Edwards ソフトウェアの特定のテーブル・データを読み込んで操作するためのデータ辞書項目(用語解説グループ K)のことです。たとえば、[FINRPTAB-勘定残高]というスマート・フィールドをレポートに追加すると、特定の会計期間および会計年度を基準とした勘定残高を計算するカラムを作成できます。

スマート・フィールドは、ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数を呼び出します。ビジネス関数とはデータ構造体を使用するプログラムで、次の処理を実行します。

- J.D. Edwards ソフトウェアのテーブルから特定のデータを要求する。
- データ構造体の確立したパラメータにデータを戻す。
- データについて計算やその他の操作を行う。

- カラム見出しや複雑な計算などの情報をレポートに送る。

イベント・ルール・ビジネス関数とは、イベント・ルール用のスクリプト言語を使用して作成させるビジネス関数のことです。このスクリプト言語はプラットフォーム独立型で、J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトとしてデータベースに保管されます。

スマート・フィールドは既に作成済みのため、プログラミングせずに複雑なロジックをレポートに組み込めます。

レポートに追加する各スマート・フィールドについて、表示される一連のフォームを使用して、そのスマート・フィールドに特有のパラメータを定義してください。フォームの数と内容はスマート・フィールドによって異なりますが、処理は次の順序で発生します。

1. 最初にレポートでのカラムの表示形式を定義します。
 2. 次に、会計期間や仕訳金額、会計年度といったパラメータを定義します。パラメータが1つしかなく、このステップで表示されるフォームが1つのみの場合もあります。それ以外の場合は、一連のフォームにより複数のパラメータを定義します。
- 続いて、レポートから戻されるデータをデータ選択で限定します。

アプリケーション・レポートを実行すると、計算カラムを定義することもできます。計算カラムには、複数のスマート・フィールド・カラム間での計算結果が含まれます。また、計算カラム間での計算も実行できます。ディレクタ・テンプレートに基づいたレポートでは、〈Director〉がテンプレートに添付されたスマート・フィールドしか認識しないため、ビジネス・ビューに組み込まれたデータ・フィールドは計算に使用できません。〈Director〉処理を終了したら、〈Report Design〉を使用して、レポートのその他のカラムに基づいて計算カラムを追加できます。

注:

計算カラムの値はデータ・テーブルでの保管方法ではなく、レポートでの表示形式に依存します。

さらに、プロパティを追加して設定することもできます。追加プロパティは、Tabular(表)セクション・プロパティと同じ機能を持ちます。この情報により、レポートの実行方法とデータの表示形式を制御します。たとえば、データベース・テーブルと同じ形式でマイナス(-)の収益やプラス(+)の経費の表示を避ける場合には、どちらの値もプラスで表示するように選択できます。選択できる追加プロパティは、〈Report Director Templates(レポート・ディレクタ・テンプレート)〉プログラムの選択項目に基づいて異なります。

アプリケーション・レポート・テンプレートはカスタマイズされるため、下のタスクで説明するフォームの中には表示されないものもあります。また、選択したレポート・テンプレートに対応しないものもあります。

参照

次のトピックを参照してください。

- アプリケーション・レポート作成に使用するテンプレートの設定については「ディレクタ・テンプレートの処理」
- レポート設計および〈Director〉については「レポート・オブジェクトの作成」

はじめる前に

- レポート・オブジェクトを作成します。レポート・オブジェクト作成の最終ステップを完了すると、〈Report Design Director〉が自動的に起動します。レポート・オブジェクトの作成については「レポート・オブジェクトの作成」

▶ アプリケーション・レポート・テンプレートを選択するには

レポート・オブジェクトを作成すると、〈Director〉の〈Welcome〉フォームが表示されます。

〈Director〉には、レポート作成プロセス上の各ステップ間を移動するための〈Navigation Assistant (ナビゲーション・アシスタント)〉が組み込まれており、今どこのプロセスを処理しているかがわかります。〈Navigation Assistant〉をクリックして[Hide]を選ぶと、表示しないでおくこともできます。



1. 〈Director〉の〈Welcome〉フォームで、レポートに含める次のヘッダーおよびフッターをクリックします。
 - レポートヘッダー
 - ページヘッダー
 - ページフッター
 - レポートフッター
2. [Application Reports(アプリケーション・レポート)]見出しの下で下向き矢印をクリックして、使用可能なディレクトリ・テンプレートを表示します。

3. 作成するレポートのタイプに最適なテンプレートを選択して、[次へ]をクリックしてください。
ページ・ヘッダーを選択すると、〈Page Header Details〉フォームが表示されます。

ページ・ヘッダーを選ばない場合は、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。次のタスクへ進みます。

4. 〈Page Header Detail〉で、次のいずれかを選択します。
- 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。

注記

〈Director〉のプロセスが完了したら、〈Report Design〉を使用してページ・ヘッダーにフィールドを追加したり削除したりすることができます。

このオプションをオフにすると、ページ・ヘッダーはブランクになります。〈Report Design〉フォームの[Section]メニューから、手作業でページ・ヘッダーにフィールドを追加することもできます。

5. [次へ]をクリックすると、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

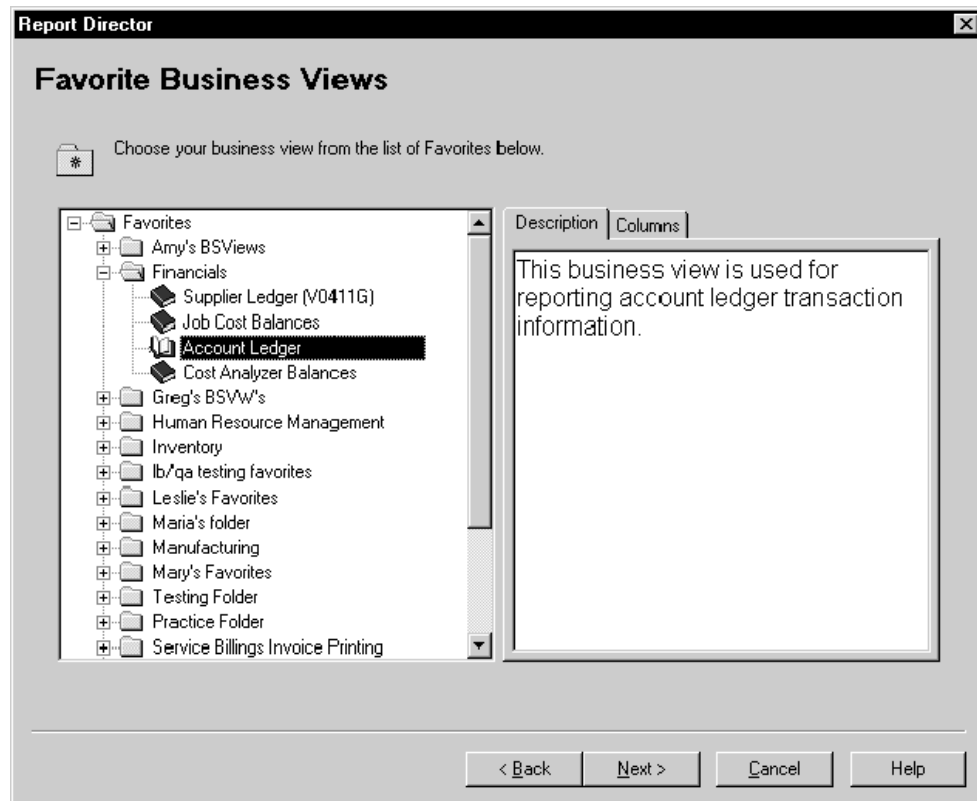
フィールド記述

記述	用語解説
レポートヘッダー	法的な通知あるいはレポートに表示される情報の簡単な記述など、ユーザー定義情報を含むレポートの最初に1度だけ表示されるヘッダー。
ページヘッダー	会社名およびレポートの見出しなどのユーザー定義情報を含む、レポートの各ページの上に表示されるヘッダー。
ページフッター	レポートの各ページの終りに表示されるフッター。ページフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。
レポートフッター	レポートの終りに表示されるフッター。レポートフッターには、レポートに関するユーザー定義情報が含まれます。

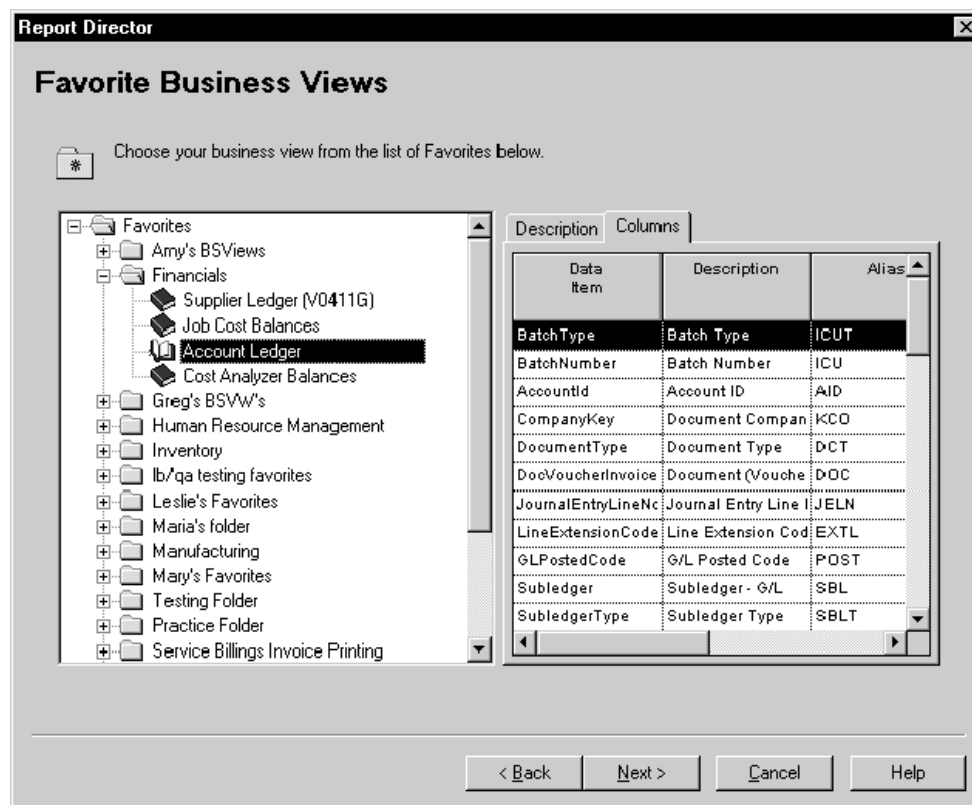
▶ お気に入りビジネス・ビュー・リストから選択するには

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'd like help finding an appropriate business view]を選択して[次へ]をクリックします。
2. 〈Favorite Business Views〉で、レポート・セクションに使用するビジネス・ビューを含むフォルダを開きます。該当するビジネス・ビューが表示されるまで[+]アイコンをクリックし、フォルダを展開してください。



3. [Description]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューの簡単な説明が表示されます。
4. [Columns]タブをクリックすると、選択したビジネス・ビューに含まれるデータ・フィールドが表示されます。



5. 使用するビジネス・ビューを選択したら、[次へ]をクリックします。

注意:

次のタスク(アプリケーション・レポートにスマート・フィールドを追加するには)で説明するスマート・フィールドは、アプリケーション・レポートに関連付けられたデフォルトのビジネス・ビューのビジネス・ビュー・コラムに依存します。デフォルト以外のビジネス・ビューを選択する場合、後で選択するスマート・フィールドで必要なビジネス・ビュー・コラムを含むものを選んでください。ビジネス・ビューを正しく選択しないと、スマート・フィールドが正しく機能しません。

参照

- 独自のビジネス・ビューの作成については、『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」
- よく使用するビジネス・ビュー用のフォルダの設定については「ビジネス・ビューをお気に入りとして設定」

▶ **Select Business View(ビジネス・ビューの選択)フォームを使用してビジネス・ビューを選択するには**

レポートのレポート・セクションを選ぶと、〈Business View Selection Option〉フォームが表示されます。

1. 〈Business View Selection Option〉フォームで、[I'll find a business view myself]をクリックします。
2. 〈Select Business View〉で、[Find]をクリックしてから[Enter]キーを押します。

使用可能なビジネス・ビューがフォームにすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると検索対象を絞ることができます。

3. ビジネス・ビューを選択してから、[次へ]をクリックします。

注意:

次のタスク(アプリケーション・レポートにスマート・フィールドを追加するには)で説明するスマート・フィールドは、アプリケーション・レポートに関連付けられたデフォルトのビジネス・ビューのビジネス・ビュー・カラムに依存します。デフォルト以外のビジネス・ビューを選択する場合、後で選択するスマート・フィールドで必要なビジネス・ビュー・カラムを含むものを選んでください。ビジネス・ビューを正しく選択しないと、スマート・フィールドが正しく機能しません。

〈Select Columns〉フォームが表示されます。


参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」

▶ **アプリケーション・レポートにスマート・フィールドを追加するには**

前のタスクの説明に従ってビジネス・ビューを選択すると、〈Select Columns〉フォームが表示されます。

Select Columns

 Drag and drop columns from the list of available smart fields on the left to the selected columns list on the right. The selected columns will be included in the report section you are defining.



Available Smart Fields

Data Item	Description
FINRPTAB	Account Balance
FINRPTBA	Approved Budget
FINRPTBO	Final Budget
FINRPTBR	Requested Budget
FINRPTIC	Inception to Date through Current Period
FINRPTIY	Inception to Date Year End
FINRPTJE	Create Journal Entry
FINRPTPA	Period Activity

Columns in Report Section

Data Item	Description	Alias
Description	Description	DESC

◀◀ ◀
▶ ▶▶
⬆ ⬇ ⬇ ⬆

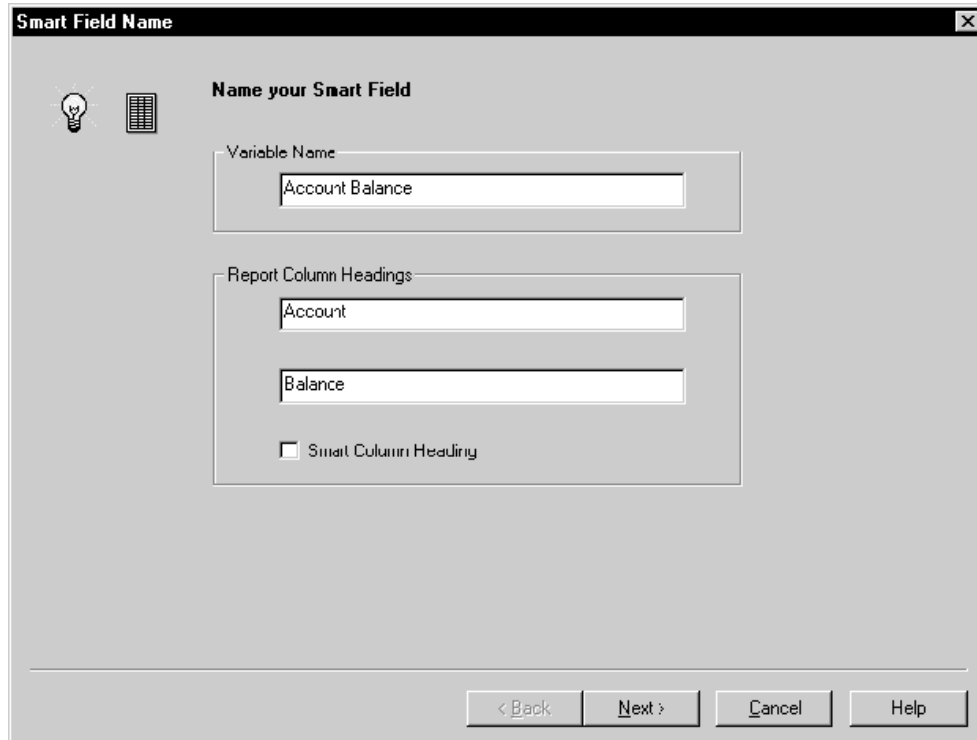
 Define Calculation
 Define Smartfield

< Back
Next >
Cancel
Help

〈Director〉は、[Description]カラムを自動的に組み込みます。〈Director〉処理を終了したら、〈Report Design〉を使用してサイズ、カラム見出し、名称、レポート上の位置を変更できます。

1. [Available Smart Fields(使用可能なスマート・フィールド)]リストから[Comunm in Report Section(レポート・セクションのカラム)]リストに該当するフィールドをドラッグします。

〈Smart Field Name(スマート・フィールド名)〉フォームが表示されます。このフォームからスマート・フィールド用のデータ定義を開始します。



The image shows a dialog box titled "Smart Field Name". It contains two main sections. The first section, "Name your Smart Field", has a "Variable Name" input field with the text "Account Balance". The second section, "Report Column Headings", has two input fields: "Account" and "Balance". Below these is a checkbox labeled "Smart Column Heading" which is currently unchecked. At the bottom right, there are four buttons: "< Back", "Next >", "Cancel", and "Help".

2. 次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。

- Variable Name(変数名)
スマート・フィールドに固有の変数名を付けてください。このレポートにイベント・ルールを添付してこのカラムをイベントまたは計算に表示させると、フィールドに表示されるデータによってカラムを識別できます。
- Report Column Headings(レポート・カラム見出し)
[Report Column Headings]を使うと、スマート・フィールドにわかりやすいタイトルをつけることができます。これはレポートにも表示されます。
- Smart Column Heading(スマート・カラム見出し)
このオプションがオンの場合は、〈Smart Field Parameter – Column Heading(スマート・フィールド・パラメータ – カラム見出し)〉フォームに入力した特定の値に対応する名称がレポート上に表示されます。会計用スマート・フィールドでは、これは「6 月」などの期間名称となる場合があります。このオプションがオフの場合、[Report Column Headings]で指定した記述がレポート上に表示されます。

スマート・フィールド用のデータ入力の第 2 ステップでは、複数の〈Smart Field Parameters〉フォームが表示されることがあります。

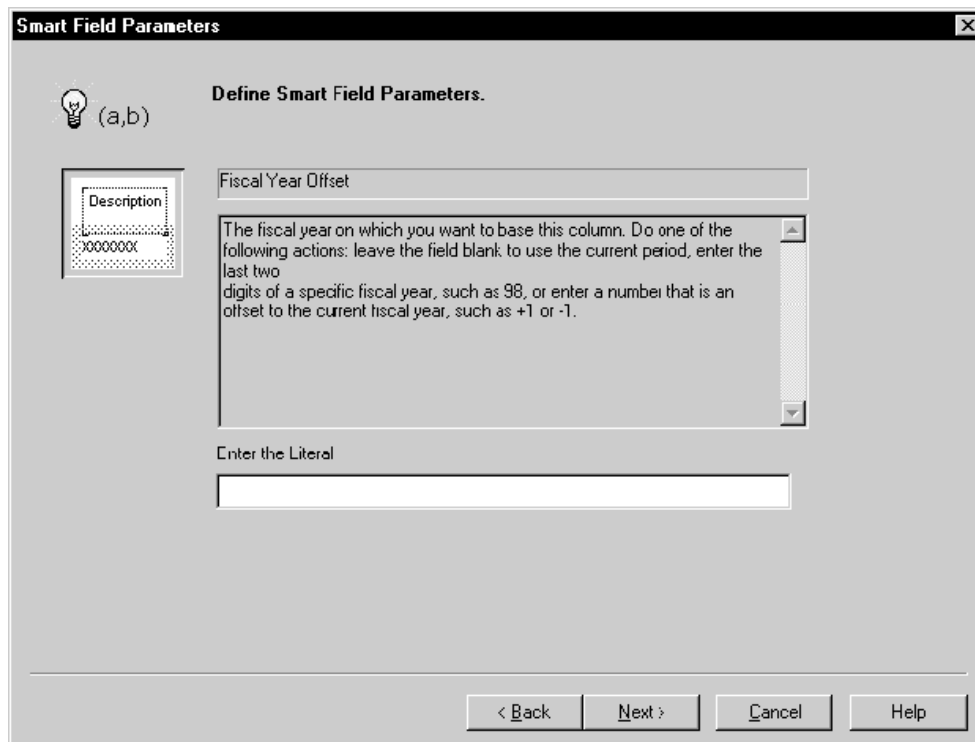
注:

〈Smart Field Parameter〉フォームは、組み込むスマート・フィールドによって異なります。たとえば、FINRPTAB スマート・フィールドを選択した場合、〈Smart Field Parameters〉フォームは次のように表示されます。


3. 次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。

- Enter the Literal(リテラル入力)

現行年度を使用するにはフィールドをブランクにします。または特定の期間か、現行会計期間から遡る期間数を入力してください。たとえば“6”と入力すると、会計期間 6 のデータが取り込まれます。“-1”と入力すると、現行会計期間の 1 ヶ月前のデータが取り込まれます。



Smart Field Parameters

 (a,b)

Define Smart Field Parameters.

Description
XXXXXXXX

Fiscal Year Offset

The fiscal year on which you want to base this column. Do one of the following actions: leave the field blank to use the current period, enter the last two digits of a specific fiscal year, such as 98, or enter a number that is an offset to the current fiscal year, such as +1 or -1.

Enter the Literal

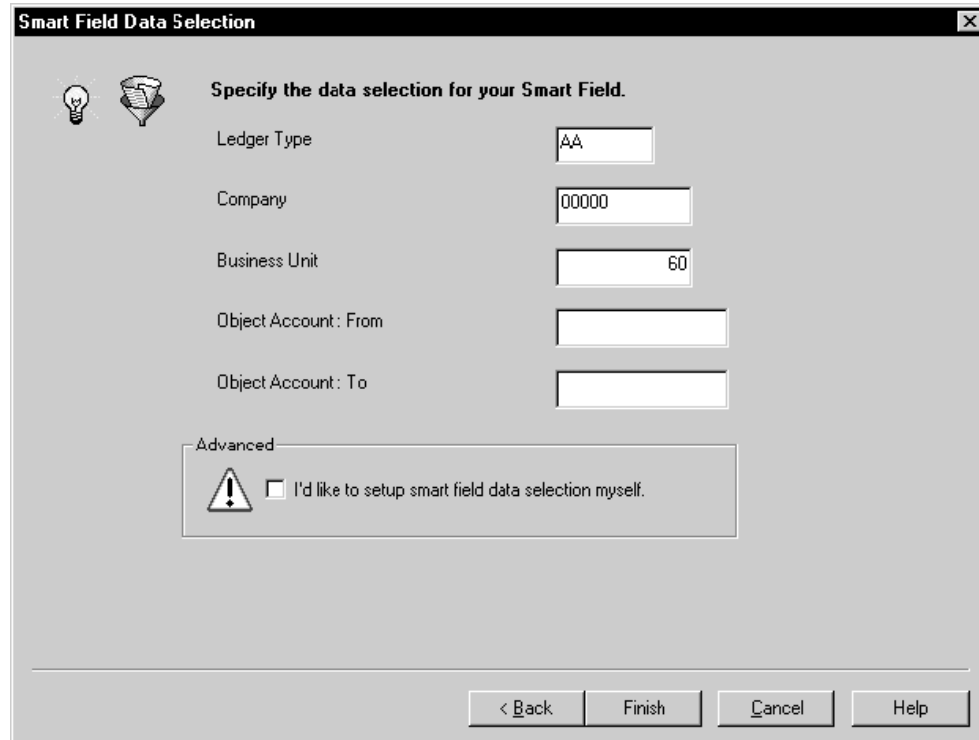
< Back Next > Cancel Help

4. 〈Smart Field Parameters[会計年度相殺]〉フォームで、次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。



- Enter the Literal(リテラル入力)

現行年度を使用するにはフィールドをブランクにします。または特定の年度の西暦下 2 桁 (98 など) か、現行年度から遡る年数または先へ進む年数 (+1、-1 など) を入力してください。

〈Smart Field Data Selection(スマート・フィールド・データ選択)〉フォームで表示されるフィールドは、使用しているディレクタのテンプレートによって異なります。このフォームが、スマート・フィールド用のデータ入力の第 3 ステップです。



Smart Field Data Selection

  **Specify the data selection for your Smart Field.**

Ledger Type:


Company:

Business Unit:

Object Account: From:

Object Account: To:

Advanced

 ☐ I'd like to setup smart field data selection myself.




< Back Finish Cancel Help

5. フィールドに値を入力して、スマート・フィールド・カラムに読み込むデータを定義し、[完了]をクリックしてください。

表示されたフィールドがデータ選択の条件に一致しない場合は、[Advanced(上級)]オプションをクリックして独自のデータを選択できます。[次へ]をクリックすると、<Column Data Selection(カラム・データ選択)>フォームが表示されます。このフォームからレポートに組み込むレコードの条件を定義できます。

Column Data Selection

Define the subset of data to be included in the column when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that the column only processes certain records.

	Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
	Where	BC Ledger Type (F0902)	is equal to	"AA"
	And	BC Business Unit (F0901)	is equal to	" 80"

< Back Finish Cancel Help

- レポートに組み込む各スマート・フィールド・カラムについて、1 から 5 までのステップを繰り返します。

〈Define Smartfields(スマート・フィールドの定義)〉フォームで[Define Smartfields(スマート・フィールドの定義)]ボタンをクリックすると、スマート・フィールドについて選択した項目を改訂できます。

参照

次のトピックを参照してください。

- このカラムについての詳細は「記述カラムの理解」
- セクション・データ選択フォームの使用については「手作業によるデータ選択」

▶ 計算カラムを作成するには

- 〈Select Columns〉で、[Define Calculation(計算の定義)]をクリックします。
- 〈Define Calculation(計算の定義)〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - Calculation Name(計算名)
これはカラム見出しとしてレポートに表示されます。
- 次のいずれかの計算タイプを選択します。
 - Difference between(差異)
 - Percent variance between(差異パーセント)
 - Undefined(未定義)

- Total of(合計)
 - Product of(積)
4. 計算カラムの Operand(オペランド)を定義するには、次のいずれかを実行して[完了]をクリックしてください。
 - 「Difference between(差異)」、「Percent variance between(差異パーセント)」、または「Product of(積)」を選択した場合、次の処理を実行します。
 - [Operand(オペランド)]で、最初のオペランド・フィールドの下向き矢印をクリックして既存カラムを表示し、計算式の最初のカラムとして使用するカラムを選択します。
 - 次に、2 番目のオペランド・フィールドの下向き矢印をクリックして既存のカラムを表示し、計算式の最初のカラムとして使用するカラムを選択してください。
 - <Calculation Type(計算タイプ)>で[Total of(合計)]を選択した場合は、計算に組み込むカラムを選びます。

複数カラムを選択するには、使用する各カラムをクリックしてください。

合計計算からカラムを除外するには、カラムをクリックして選択を解除します。
[Calculation Name]フィールドで表示されなくなります。

 - [Undefined(未定義)]を選択すると、計算を実行せずにパーセント・カラムが作成されます。カラムのパーセント計算式は、ディレクタのステップを終了してローが作成された後に定義できます。
 5. 計算カラムを作成するには、各カラムにつきステップ 1～4 を繰り返します。
 6. レポート用にすべての計算カラムを定義し終わったら、<Select Columns>で[次へ]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
計算式名	使用する数値計算の名称。
未定義	計算せずに数値カラムを作成します。ディレクターの手順を完了し、レポートでローを作成したら、カラムの計算ができます。

参照

- 「パーセント計算式の定義」

▶ Advanced(上級)オプションをオフにしてセクション・データ順序設定を定義するには

<Select Columns>フォームでスマート・フィールドまたは計算を選択すると、<Director>に従ってスマート・フィールドまたは計算を設定していくことができます。

スマート・フィールドまたは計算を設定して[完了]をクリックすると、<Select Columns>フォームが表示されます。

1. <Select Columns>フォームで、[次へ]をクリックします。
2. <Data Sequencing Help>で、レポートの順序を指定するのに使用するグループを選択して[次へ]をクリックします。

注:

〈Help with Section Data Selection〉フォームが表示されたら、「Selecting Records to Include in an Application Report (アプリケーション・レポートに組み込むレコードの選択)」タスクを実行してください。このフォームは、[Report Director Templates Revision – Properties (レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂 – プロパティ)] タブの [Display Financial Criteria (財務条件の表示)] オプションを選択した場合に表示されます。

〈Section Data Selection〉フォームが表示されたら、レポートに組み込むレコードの条件を定義できます。このフォームは、[Report Director Templates Revision – Properties] タブの [Display Generic Criteria (汎用条件の表示)] オプションを選択した場合に表示されます。タスク「手作業でデータ選択を実行するには」に進んでください。

参照

次のトピックを参照してください。

- [Display Financial Criteria] および [Display Generic Criteria] オプションについては、「ディレクタ・テンプレートの追加および修正」
- セクション・データ選択フォームの使用については「手作業によるデータ選択」

► Advanced (上級) オプションをオンにしてセクション・データ順序設定を定義するには

〈Select Columns〉フォームでスマート・フィールドまたは計算を選択すると、〈Director〉に従ってスマート・フィールドまたは計算を設定していくことができます。

スマート・フィールドまたは計算を設定して [完了] をクリックすると、〈Select Columns〉フォームが表示されます。

1. 〈Select Columns〉フォームで、[次へ] をクリックします。
2. 次のいずれかを実行します。
 - [Advanced] オプションをオンにして、[Report Grouping] または [Report Detail (レポート詳細)] フィールドに対してさらにデータ順序設定を定義する。
 - [Advanced] オプションをオンにして、[Report Grouping] または [Report Detail] リストのフィールドの選択を解除し、独自のデータ順序設定およびレベル区切りを選択する。
3. [次へ] をクリックします。

Section Data Sequencing

Define the sort order for the business view you selected. The sort order determines the order in which records are read from the database and displayed on your report.

Available Columns

Data Item	Description
AccountId	Account ID
Company	Company
CostCenter	Business Unit
ObjectAccount	Object Account
Subsidiary	Subsidiary
AccountNumber3rd	Account Number - 3rd
LevelOfDetailAcctCde	Account Level of Detail
BudgetPatternCode	Budget Pattern Code
PostingEdit	Posting Edit
CategoryCodeG1001	Category Code - G/L 001
CategoryCodeG1002	Category Code - G/L 002

Selected Columns

Data Item	Description	Alias
Company	Company	CO
ObjectAccount	Object Account	OBJ
Subsidiary	Subsidiary	SUB

◀◀ ◀ ▶ ▶▶
⬆ ⬇ ⬆ ⬇

< Back
Next >
Cancel
Help

4. <Section Data Sequencing>でデータ順序設定のカラムを選択するには、[Available Columns]リストからカラムを選択し、右矢印をクリックして[Selected Columns]リストに移動します。
 または、各カラムを[Selected Columns]リストにドラッグするか、2重の右矢印をクリックして[Available Columns]リストから[Selected Columns]リストへすべてのカラムを移動させることもできます。
5. レポートからカラムを削除させるには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、左矢印をクリックして[Available Columns]リストへ移動させます。
 または、2重の左矢印をクリックして、[Selected Columns]リストから[Available Columns]リストへすべてのカラムを移動させることもできます。
6. 表示する順序を変更するには、[Selected Columns]リストのカラムを選択し、上下矢印をクリックして選択したカラムをリスト内で1行ずつ上下に移動させます。
 または、上向きか下向きの2重矢印をクリックして、選択したカラムをリストの一番上か下に移動させます。
7. レポート用のデータ順序設定が終了したら[次へ]をクリックします。
 デフォルト以外にカラムを選択した場合は、<Define Sort Properties>フォームが表示されます。

Define Sort Properties

Define the properties for the sort columns you selected. These properties determine the type of sequencing (ascending/descending), whether a level break should occur, and if a level break should produce a page break. Click on a box to select a property.

Sort Columns

Data Item	Description	Alias	Sort Order	Level Break	Page Break
Company	Company	CO	↑		
ObjectAccount	Object Account	OBJ	↗	✓	
Subsidiary	Subsidiary	SUB	↗	✓	

< Back **Next >** Cancel Help

8. 〈Define Sort Properties〉で、次のフィールドに値を入力してから[次へ]をクリックします。

- ソート順序
- レベル区切り

システムが生成した記述カラムが含まれるレポートの場合は、2 つ以上のカラムを基準にソートしてください。最初の 2 つのカラムをレベル区切りとして設定する必要があります。それ以外の場合は、記述カラムが正しく表示されます。

- ページ区切り

注:

〈Help with Section Data Selection〉フォームが表示されたら、「Selecting Records to Include in an Application Report (アプリケーション・レポートに組み込むレコードの選択)」タスクを実行してください。このフォームは、[Report Director Templates Revision - Properties (レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂 - プロパティ)] タブの [Display Financial Criteria (財務条件の表示)] オプションを選択した場合に表示されます。

〈Section Data Selection〉フォームが表示されたら、レポートに組み込むレコードの条件を定義できます。このフォームは、[Report Director Templates Revision - Properties] タブの [Display Generic Criteria] オプションを選択した場合に表示されます。タスク「手作業でデータ選択を実行するには」に進んでください。

フィールド記述

記述	用語解説
ソート順序	ソート順序を昇順／降順のどちらにするか指定します。
レベル区切り	オブジェクトがレベル区切り識別子として機能できるようにします。 レベル区切りでは、セクションの結合、合計の計算、レベル区切りヘッダーセクションのトリガーを実行できます。
ページ区切り	オブジェクトがページ区切りとして機能できるようにします。 注:オブジェクトをページ区切りとして選択する前に、レベル区切りとして選択してください。

参照

次のトピックを参照してください。

- [Display Financial Criteria]および[Display Generic Criteria]オプションについては、「ディレクタ・テンプレートの追加および修正」
- データ選択については「アプリケーション・レポートに組み込むレコードを選択するには」

▶ アプリケーション・レポートに組み込むレコードを選択するには

〈Data Sequencing Help〉または〈Section Data Sequencing〉に従ってセクション・データ順序を定義すると、〈Help with Section Data Selection〉フォームが表示されます。このフォームは、[Report Director Templates Revision – Properties]タブの[Display Generic Criteria]オプションを選択した場合に表示されます。

〈Data Sequencing Help〉または〈Section Data Sequencing〉で、[次へ]をクリックします。

〈Help with Section Data Selection〉で、次のいずれかのタスクを実行して[次へ]をクリックしてください。

- 貸借対照表の勘定科目からのデータのみを選択するには、[Select only BALANCE SHEET accounts from the automatic accounting instruction (AAI から貸借対照表勘定のみを選択する)]をクリックします。これにより、貸借対照表に適切なデータ・フィールド(一般目的用の AAI(GLGxx)の勘定科目範囲)が組み込まれます。

〈Additional Properties (追加プロパティ)〉フォームが表示されます。

- 損益計算書の勘定科目からのデータのみを選ぶには、[Select only INCOME STATEMENT accounts from the automatic accounting instructions (AAI から損益計算書勘定のみを選択する)] オプションを選択します。これにより、損益計算書に適切なデータ・フィールド(一般目的用の AAI(GLGxx)の勘定科目範囲)が組み込まれます。

〈Additional Properties (追加プロパティ)〉フォームが表示されます。

- デフォルトの貸借対照表をデータ選択の基準にして自分で条件を追加するには、[Select only BALANCE SHEET accounts from the automatic accounting instructions]を選択し、続いて[I'll add my own data selection to the above balance sheet or income statement criteria (上記の貸借対照表または損益計算書条件に独自の選択項目を追加する)]をクリックしてください。これにより、貸借対照表勘定を組み込むための条件に加えて、追加条件を設定できます。

〈Section Data Selection(セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

- デフォルトの損益計算書をデータ選択の基準にするには、[Select only INCOME STATEMENT accounts from the automatic accounting instructions]を選択し、続いて[I'll add my own data selection to the above balance sheet or income statement criteria]をクリックしてください。これにより、損益計算書勘定を組み込むための条件に加えて、追加条件を設定できます。

〈Section Data Selection(セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

- データ選択を手作業で設定するには、[Set up data selection manually(データ選択を手作業で設定する)]をクリックします。このオプションを選択すると、レポートに表示されるレコードの条件を定義することができます。

〈Section Data Selection(セクション・データ選択)〉フォームが表示されます。

参照

- 〈Section Data Selection〉の使い方については「手作業でデータ選択を実行するには」
- AAIについては『一般会計』ガイドの「AAI の理解」

▶ 手作業でデータ選択を実行するには

1. 〈Section Data Selection〉で、[Operator]カラムをクリックして演算子を選択します。
最初の条件に使用する[Operator]カラムでのデフォルト値は「Where」です。続く条件文では、「And」および「Or」が[Operator]カラムで使用できるようになり、該当するものをダブルクリックすると選択されます。
2. [Left Operand]カラムをクリックして使用可能なオブジェクトを表示し、次のいずれかの処理を実行します。
 - リストをスクロールして使用するオブジェクトを探し、ダブルクリックして[Left Operand]カラムに入力する。
 - [Left Operand]フィールドでオブジェクト名の最初の文字を入力し、リスト上のオブジェクトを表示させてから、ハイライトされたオブジェクトをダブルクリックする。[Left Operand]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Comparison]カラムのリストが自動表示されます。
3. 次の演算子のいずれかをダブルクリックして選択します。
 - is equal to(等しい)
 - is greater than(より大きい)
 - is greater than or equal to(～以上)
 - is less than(より小さい)
 - is less than or equal to(～以下)
 - is not equal to(等しくない)[Comparison]カラムのオブジェクトをダブルクリックすると、[Right Operand]カラムにリストが自動表示されます。使用可能なオブジェクト、特殊の値、および変数は、選択したオペランドによって異なります。

4. [Right Operand]カラムでリストの値をクリックして選択します。

このカラムに表示される項目は、[Comparison]カラムでの選択項目によって変わります。
次のオプションが使用できる場合もあります。

Blank	Blank(スペース)を自動的に入力
Literal	ユーザーが特定の値を入力
Null (ヌル)	このフィールドと関連する値がない
Zero (ゼロ)	ゼロが自動的に入力
BC	このレポートのビジネス・ビュー・カラム
FI	フォーム・インターコネクトからこのレポートに読み込まれる値
PC	前のビジネス・ビュー・カラム値
PO	このレポートの処理オプションの値
PV	変数の前の値
RC	このレポートの固定情報
RV	このレポートのバージョン
SV	システム変数
SL	システムによるリテラル入力
TV	テキスト変数
VA	イベント・ルール変数

5. [Right Operand]カラムの[Literal]を選んだ場合は、次のいずれかのタブをクリックしてください。

- Single value(単一値)

単一値を入力して[OK]をクリックします。たとえば、特定の会社の住所番号を入力できます。

- Range of values(範囲指定)

値の範囲を入力してから[OK]をクリックします。たとえば、00001 から 00060 までの会社の値を範囲指定します。値範囲に有効な論理演算子は「is equal to」と「is not equal to」のみです。

- List of values(値のリスト)

リストに値を追加したり、リストから値を削除するには、次の処理を行います。

- フィールドに各値を入力して、[Enter]キーを押すかフォームの上部にある[Add]ボタンをクリックします。
- この処理を繰り返して、値のリストを完成させます。たとえば、値のリストには顧客の C、従業員の E、仕入先の V など検索タイプ用のユーザー定義コードなどが含まれることがあります。値のリストに有効な演算子は「is equal to」と「is not equal to」のみです。
- 値を削除するには、対象となる値を選択してからフォームの上部にある[Delete]ボタンをクリックします。

6. [OK]をクリックします。
7. 必要に応じて、ステップの 1 から 6 を繰り返して選択基準を定義します。
8. 〈Section Data Selection〉で条件行を削除するには、ロー見出しをクリックしてローをハイライトしてから、フォーム上部の[Delete(削除)]ボタンをクリックします。
9. 条件の順序を変更するには、ロー見出しを選択して上または下方向のボタンをクリックします。
10. 完了したら[次へ]をクリックします。

▶ アプリケーション・レポート用の追加プロパティを定義するには

〈Help With Section Data Selection〉または〈Section Data Selection〉を使ってデータ選択を定義したら、[次へ]をクリックします。

1. 〈Additional Properties〉で、必要に応じて次のオプションを選択します。
 - AAI Subtotaling(自動仕訳小計)– AAI 項目の FSxx(財務諸表)を基準とする
 - Reverse Sign For(符号反転)
 - Account Level of Detail Rollup(詳細積上げレベル)

- Drill Down(ドリルダウン)
- Zero Row Suppression(ゼロ・ローの非表示)

[Suppress Zero Detail Rows Only(ゼロ・ローの非表示)]を選択すると、明細勘定の残高がゼロの場合も見出し勘定科目が印刷されます。

2. [次へ]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
AAI 小計計算の実行	このプロパティは、オブジェクト勘定科目値に従い、勘定科目の合計の実行を含む追加の会計行を挿入します。最終正味損益は、ビジネスユニットまたは会社に対 して合計されます。
符号反転	プラス記号とマイナス記号を互いに変換します。
詳細積上げレベル	勘定科目のインデントを表示し、詳細レベル値に依存する人工レベル区切りを 導入するためにこのフラグを ON にします。詳細レベルの実際値は、 処理オプションでのみ入力可能です。
ドリルダウン	レポートディレクタで[ドリルダウン]プロパティを表示するか どうか指定します。アプリケーション、フォーム、および実行する バージョンを指定してください。実際のレポートでドリルダウンを 有効にするには、レポートディレクタでレポートをデザインする 際に、このオプションもオンになっている必要があります。
ゼロ・ローの非表示	次のオプションを使用して、表セクションのローの印刷を制御します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ゼロローを印刷しない ・ ゼロ詳細ローを印刷する ・ すべてのゼロローを印刷する

参照

- AAI については『一般会計』ガイドの「AAI の理解」

次のトピックを参照してください。

- 表セクション・プロパティについては「レポート・セクションのオブジェクトの処理」
- 追加プロパティの全表示、部分表示、非表示については「ディレクタ・テンプレートの追加または修正」

▶ レポートのバッチ・バージョンを作成するには

セクションのデータ選択を定義すると、〈Director〉の完了フォームが表示されます。

1. 〈Finish(完了)〉フォームで[Yes]をクリックすると、テンプレートのバッチ・バージョンが自動的に作成されます。

2. [Yes, create a version of this report.]の下フィールドにバージョン名を入力します。
3. 〈Finish〉フォームで、選択を検討するには、[戻る]をクリックして〈Director〉フォーム内を移動するか、〈Navigation Assistant〉で検討するフォームをクリックします。
4. 問題がない場合は[完了]をクリックします。

注意:

[完了]をクリックした後は、このレポート用には〈Director〉にアクセスできなくなります。[完了]をクリックする前に、手順 3 にあるように、再度〈Director〉のすべてのフォーム上の選択項目を検討してください。

〈Report Design – Report View〉フォームが表示されます。

参照

- OMW を使ったバッチ・バージョンの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」
- バッチ・バージョンの作成については「レポート用バッチ・バージョン」

▶ **レポートを保存するには**

〈Director〉の完了フォームで[Finish]をクリックすると、〈Report Design〉フォームが表示されます。

〈Report Design〉で、次のいずれかを実行します。

- [File]メニューから[Save]を選択する。
- ツールバーで[Save]ボタンをクリックする。

参照

- レポートの作成については『開発ツール』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ」

レポートの変更や拡張については次のトピックを参照してください。

- 「基本レポート拡張」
- 「上級レポート拡張」

Director による作成結果の検討

[完了]をクリックすると、〈Director〉処理が完了します。処理中に選択した項目に基づいて、レポートのセクションおよびレポートに組み込んだデータ・フィールドが〈Report Design〉に表示されます。各セクションには次の内容が含まれます。

- セクション・タイプを表すアイコン
- セクション内の各フィールドをまとめたブラケット
- タイトル記述

レポートの主要詳細セクションのタイトルには、他のレポート・セクションのタイトルと区別するために太字のフォントが使用されています。

基本レポート拡張

手作業または〈Report Design Director(レポート設計ディレクタ)〉を使用してレポートを作成した後は、〈Report Design(レポート設計)〉の多くの機能により、レポートのデータや構造、外観をさらに細かく調整することができます。レポート・セクションやデータ・フィールドの追加、セクション全体のプロパティおよび各データ・フィールドの修正、カラムやローの追加や移動、削除、計算の実行などが可能です。また、変更を加えている間も〈Report Design〉フォームでレポートのプレビューを表示できます。

〈Report Design〉のユーザー・インターフェイスは、レポートやオブジェクトを異なる形式で表示したり、オブジェクト作成用のツールや、設計用のワークスペースを調整するためのツールとなります。具体的には次のとおりです。

- レポートのプレビュー
- 添付ファイルまたはコメントの追加
- レポート・セクション、フィールド、カラム、ローのプロパティの表示
- 設計ワークスペースのカスタマイズ
- スマート・フィールドの追加
- ヘッダー/フッター・セクションの作成
- レベル区切りヘッダー/フッター・セクションの処理
- サブセクションの結合
- レポート・セクションのオブジェクトの処理
- レポート・オブジェクトの外観の修正

Report Design でのレポートのプレビュー

[Preview(プレビュー)]タブでは、印刷するレポートを設計モードの段階で見ることができます。設計を変更する際は、プレビュー機能を使用して内容およびフォーマットをチェックしてください。

▶ Report Design からレポートをプレビューするには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックしてレポート・テンプレートを表示します。

1. [Preview(プレビュー)]タブをクリックします。

〈Report Preview(レポート・プレビュー)〉フォームが表示され、プレビューを実行するかどうかを聞いてきます。

レポートをプレビューする前にこのフォームを表示しないようにするには、[View(表示)]メニューから[User Options(ユーザー・オプション)]を選択します。[Prompt before Running Preview(プレビューの前にプロンプトを表示する)]オプションをオフにします。

2. 〈Report Preview〉で[Yes]をクリックします。

前回レポートを保存してから変更を加えた場合、〈Report Design〉でレポートをプレビューする前に保存するようプロンプトが表示されます。

3. [Yes]をクリックして変更を保存します。
〈Report Design〉は、Adobe Acrobat Reader を使用してプレビューを表示します。Acrobat Reader の機能をフルに使用してレポートを参照できます。
4. レポートを変更するたびに、プレビューをリフレッシュする必要があります。プレビューをリフレッシュするには、次のいずれかを実行します。
 - [View]メニューから[Refresh Preview Window(プレビューのリフレッシュ)]を選択する。
 - View のツールバーが表示されている場合、[Refresh Preview Window]ボタンをクリックする。
 - [F5]キーを押す。
5. 処理するレコード数を変更してプレビュー・モードで表示するには、[View]メニューから[User Options]を選択します。
6. 次のフィールドに値を入力して、プレビュー・モードで処理するテーブル・レコード数を指示してください。
 - Rows to preview(プレビューするロー数)

添付ファイルまたはコメントの追加

レポートおよびバージョンにはメディア・オブジェクトを添付できます。メディア・オブジェクトとは、OLE 標準に適合するテキスト、イメージ、ショートカットなどの各種ファイルです。たとえば、レポートに汎用ヘルプ・テキストを添付して、アプリケーション・レポートが会社に固有のものとなるよう調整できます。添付ファイルはレポートと同時に印刷できませんが、〈Report Design〉では参照できます。

レポートへ添付ファイルを追加するだけでなく、レポート上の各データ・フィールドにテキストのみによるコメントも添付できます。

▶ レポートに添付ファイルを追加または削除するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックしてレポート・テンプレートを表示します。

1. [Attachments(添付)]タブをクリックします。
ワークスペースは 2 つのパネルに分割されています。左のパネルはアイコン・パネルで、右のパネルはビューア・パネルです。
2. テキストを追加するには、ビューア・パネルにテキストをタイプします。
ビューア・パネルの上部にあるフォーマット・ツールを使用すると、注テキストのフォーマットを調整できます。
3. テキスト以外のオブジェクトを追加する場合、アイコン・パネルを右クリックします。
4. ポップアップ・メニューから[新規]を選択して、次のいずれかを選びます。
 - イメージ
 - OLE
 - ショートカット
 - URL/ファイル

- オブジェクトを削除するには、アイコン・パネルのオブジェクト・アイコンを右クリックして、ポップアップ・メニューから[削除]を選択してください。

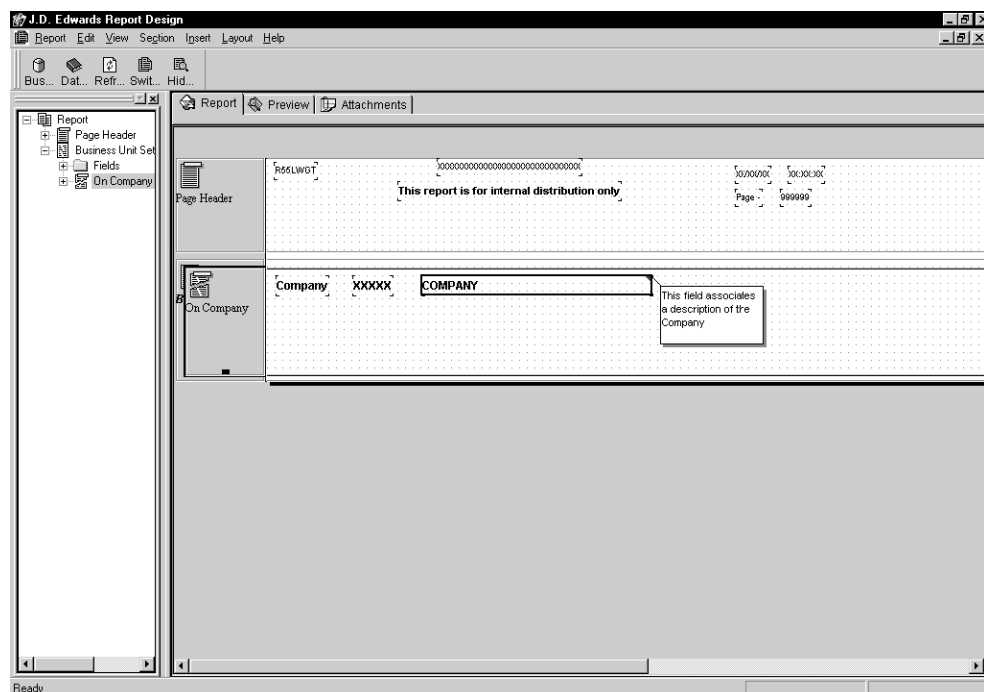
参照

- イメージ、OLE、およびショートカットの添付については『基本操作』ガイドの「メディア・オブジェクトの処理」

▶ データ・フィールドのコメントを追加、修正、削除するには

〈Report Design〉で、[Report(レポート)]タブをクリックします。バージョンを設計している場合は[Version(バージョン)]タブをクリックしてください。

- コメントを添付するオブジェクトを右クリックして、[Insert Comment(コメントの挿入)]を選びます。



- テキストを入力し、設計ワークスペースをクリックしてテキスト・ウィンドウを閉じます。
オブジェクトの右上に赤いフラグが表示され、このオブジェクトにコメントが添付されたことを示します。
- コメントを編集、削除、表示、または非表示にするには、オブジェクトを右クリックしてポップアップ・メニューから該当するオプションを選択します。

レポート・セクション、フィールド、カラム、ローのプロパティの表示

〈Report Design〉を使って、セクション、フィールド、カラム、またはローのプロパティを表示できます。

- 表示できるセクション・プロパティには、[General(一般)]、[Font/Color(フォント/色)]、[Fields(フィールド)]、および[Advanced(上級)]があります。セクション・プロパティはメニューから、またはダブルクリックで選ぶことができます。
- フィールド・プロパティには、一般的なプロパティ、フォント、色、スタイル、表示、オプション、および上級のプロパティを表示できます。データ・フィールド・プロパティはレポート・セクションから、またはダブルクリックで選ぶことができます。
- 〈Report Design〉カラムでは(見出しも変数のどちらとも)フィールドとして処理されるので、カラム・プロパティもフィールド・プロパティを表示するときと同じようにして表示できます。さらに、カラム・プロパティは[Column(カラム)]タブをクリックして参照することもできます。
- ローは Tabular(表)セクションにのみ存在します。ロー・プロパティは、レポート・セクションまたはロー・タブを使用して表示できます。

この章の残りの部分では、〈Section(セクション)〉または〈Properties(プロパティ)〉フォームにアクセスする場合にダブルクリックを使います。ダブルクリック以外の方法でもアクセスできます。

▶ メニューを使用してレポート・セクションのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックします。

1. プロパティを表示するセクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Section Properties]を選択する

セクション・タイプに応じて、該当するセクション・フォームが表示されます。

▶ ダブルクリックによりレポート・セクションのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックします。

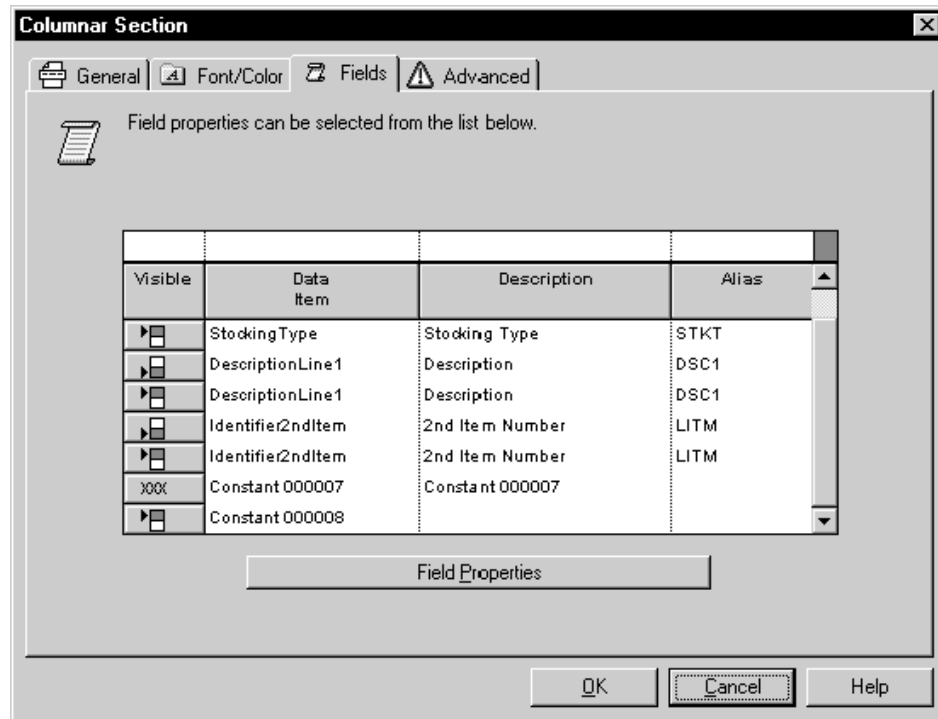
プロパティを表示するセクションをダブルクリックします。

セクション・タイプに応じて、該当するセクション・フォームが表示されます。

▶ レポート・セクションからデータ・フィールドのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックします。

1. プロパティを表示するデータ・フィールドを含むセクションをダブルクリックします。
- セクション・タイプに応じて、該当するセクション・フォームが表示されます。



2. [Fields(フィールド)]タブをクリックします。

[Fields]タブには、セクションのすべてのデータ・フィールドがリスト表示されます。[Visible (可視)]カラムのアイコンは、さまざまなフィールド・タイプを表します。詳細は次のとおりです。

- XXX。このアイコンは固定情報フィールドです。
- 白と黒の2色からなるボックス形のアイコン。このアイコンはカラム・オブジェクトを示します。矢印が上のボックスを指している場合、カラム見出しを示します。矢印が下のボックスを指している場合、カラム変数を示します。
- グレー、黒、白のダイヤモンドの絵のアイコン。このアイコンは、レポート日付やレポート時刻、ページ番号、会社名、レポート・タイトルなどのランタイム・フィールドを表します。
- 複数の色がついたダイヤモンド型のアイコン。グループ・セクション内の変数を表します。

いずれの場合も、データ・フィールドが非表示のときは、中央に線の通った丸いマークがアイコンの横に表示されます。プロパティの表示/非表示を切り替えるには、アイコンをダブルクリックします。

注:

カラム見出しが不可視の場合は、関連するカラム変数も同様に不可視になります。

3. プロパティを表示するデータ・フィールドを選択して、[Field Properties(フィールド・プロパティ)]をクリックします。

フィールド・タイプに応じて、該当するプロパティのフォームが表示されます。

▶ ダブルクリックによりデータ・フィールドのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックします。

プロパティを表示するデータ・フィールドをダブルクリックします。

データ・フィールドは、〈Report Design〉と〈Report Tree (レポート・ツリー)〉のどちらのフォームでもダブルクリックできます。

フィールド・タイプに応じて、該当するプロパティのフォームが表示されます。

▶ カラム・タブにプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、カラム・プロパティを表示する表セクションをクリックします。

1. [Columns (カラム)]タブをクリックします。

	A	B	C	D	E	F	G	H
Heading 1	First	Constant 000016	Constant 000012	Constant 000014	Description	Order Date	Quantity Shipped	Extended Price
Heading 2	Quarter							
Smart Headings	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Name	First Quarter	Constant 000016	Constant 000012	Constant 000014	Description	Order Date	Quantity Shipped	Extended F
Font	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial
Line Style	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Und
Format	9,999,999,999,999.99	Constant 000011	Constant 000011	Constant 000011	Constant 000011	Constant 000011	Constant 000011	Constant 000011
Font	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial
Type	Smart Field	Variable	Constant	Variable	Variable	Variable	Variable	Variable
Name	First Quarter	Variable 000015	Constant 000011	Variable 000013	Description	Order Date	Quantity Shipped	Extended F
Data Item Name	RINRPTQ1				DESC	TRDJ	SOOS	AEXP
Calc								
Data Selection	Yes	No		No	No	No	No	No
Display Length	15	15	15	30	30	6	15	15
Display Decimals	2	2		0	0	0	0	2
Justification	Right	Right	Left	Left	Left	Left	Right	Right
Space Before	7	7	7	7	7	7	7	7
Data Type	Number	Number	String	String	String	Date	Number	Number
Line Style	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines
Visible	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Global Variable	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Suppress At Totals	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Total	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Aggregate Type	None	None		None	None	None	None	None
Print On Change	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

2. 〈Column (カラム)〉フォームのグリッド域で右クリックします。
3. [Field Selection (フィールド選択)]をクリックします。
4. 〈Object Design Properties〉で、[Basic]または[Advanced]タブを使用して、デフォルト・フィールドのオプションをオンまたはオフにして[OK]をクリックします。
これにより、〈Column〉フォームのグリッドに表示されるフィールドを確定します。
5. プロパティを変更するには、[Column]フォームのグリッドでフィールドをダブルクリックします。
変更するプロパティに応じて、該当するコントロールが表示されます。

▶ レポート・セクションからローのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Report]タブをクリックします。

1. プロパティを表示するローを含む[Tabular(表)]セクションをダブルクリックします。
2. 〈Tabular Section(表セクション)〉フォームで、[Row List(ロー・リスト)]タブをクリックします。

[Row List]タブには、セクションのすべてのローがリスト表示されます。[Visible(可視)]カラムのアイコンは、さまざまなフィールド・タイプを表します。

いずれの場合も、ローが非表示のときは、中央に線の通った丸のマークがアイコンの横に表示されます。プロパティの表示/非表示を切り替えるには、アイコンをダブルクリックします。

3. プロパティを表示するローを選択して、[Row Properties(ロー・プロパティ)]をクリックします。
ローのタイプに応じて、該当するプロパティのフォームが表示されます。

▶ ロー・タブを使用してローのプロパティを表示するには

〈Report Design〉で、[Row(ロー)]タブをクリックします。

	Name	Description	Type	Calc	Data Selection	Data Selection	Reverse Sign	Visible	Page Break	Font Override
1	Revenue	Revenue	Text		No	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
2	Object Sales	Object Sales	Inclusion		Yes	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
3	Direct Costs	Direct Costs	Text		No	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
4	Gross Margin	Revenue - Direct Costs	Calculation	[R2]+[TR Object Coss]	No	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
5	Object Costs	Object Costs	Inclusion		Yes	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
6	Sum 000024	Sum Calculation	Revenue - Revenue		No	10	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
7	Underline 000025	Underline			No	6	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

1. 〈Row〉フォームのグリッドで右クリックします。
2. [Field Selection]を選択します。
3. 〈Object Design Properties〉で、[Basic]または[Advanced]タブを使用して、デフォルト・フィールドのオプションをオンまたはオフにして[OK]をクリックします。

これにより、[Row]タブのグリッドに表示されるフィールドを決定します。

[Row]タブのグリッドには、[Display Decimals(表示小数点以下桁数)]および[Display Length(表示桁数)]などのフィールドが表示され、カラム・プロパティを一時変更します。これらのフィールドがカラム・レベルで設定されたデータを一時変更しない場合は、フィールドにデータは表示されません。

4. プロパティを変更するには、[Row]タブのグリッドでフィールドをダブルクリックします。変更するプロパティに応じて、該当するコントロールが表示されます。

設計ワークスペースのカスタマイズ

〈Report Design〉には、設計ワークスペースをカスタマイズするための方法が数多く用意されています。〈Report Design〉を使用すると、次のタスクを実行できます。

- ユーザー・オプションの設定
ユーザー・オプションでは、ルーラーやタブなどのユーザー・インターフェイスの要素を表示するかどうかを指定します。また、プレビューの際に処理するローの数も設定できます。
- グリッド揃えの設定
- 表示ツリーの表示/非表示
表示ツリーとは、〈Report Design〉のドッキング可能なウィンドウで、階層ツリーでレポートのフィールドを表示します。
- ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザの表示/非表示
ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザとは、〈Report Design〉のドッキング可能なウィンドウで、レポートで使用可能なビジネス・ビュー・カラムを表示します。
- データ辞書ブラウザの表示/非表示
データ辞書ブラウザとは、〈Report Design〉のドッキング可能なウィンドウで、レポートで使用可能なデータ辞書フィールドを表示します。

▶ ユーザー・オプションを設定するには

〈Report Design〉で、[View]メニューから[User Options]を選択します。

1. 〈User Options〉で、[General(一般)]見出しの下にある次のいずれかのオプションをクリックして[適用]をクリックすると、すぐにその変更が反映されます。
 - Show Invisible Sections at Startup(スタート時に不可視セクションを表示)
 - Show Section Titles(セクション・タイトルを表示)
このオプションでは、各セクションの左にセクション・タイトルが表示されます。
 - Show Right Margin(右マージンを表示)
右マージンを表示すると、レポートの方向を変える際にページにフィールドが収まるかどうかを確認できるため便利です。

- Show Tabs(タブを表示)
このオプションでは、設計ワークスペースの上にレポート、プレビュー、添付、その他のタブが表示されます。
 - Show Navigation Assistant(ナビゲーション・アシスタントを表示)
ナビゲーション・アシスタントを非表示にすると現在のレポートについてのみナビゲーション・アシスタントが非表示になりますが、ここでナビゲーション・アシスタントをオフにした場合、これから作成するレポートすべてについてこの機能がオフになります。
 - Show Data Dictionary Text Overrides(データ辞書テキストの一時変更を表示)
このオプションを選択すると、表示される名称がデータ辞書と違う場合にフィールドの右下に小さい三角のマークが表示されます。このマークは〈Report Design〉でのみ表示され、印刷はされません。
 - Allow Smart Field Template Selection(スマート・フィールド・テンプレート・セクションの許可)
2. ルーラーをレポートの上と横に表示するには、[Ruler(ルーラー)]見出しの下にある次のオプションをクリックします。
 - Show Rulers(ルーラーを表示)
 3. [Show Rulers]を選択した場合は、次のフィールドに値を入力します。
 - Ruler Units(ルーラーの単位)
 4. プレビューを実行する前にプロンプトを表示する場合は、[Preview(プレビュー)]見出しの下にある次のオプションをクリックします。
 - Prompt before Running Preview(プレビューの前にプロンプトを表示する)
 5. [Prompt Before Running Preview]を選択した場合は、次のフィールドに値を入力します。
 - Rows to preview(プレビューするロー数)
 6. [OK]をクリックします。

参照

- レポートのプレビューについては「Report Design でのレポートのプレビュー」

▶ グリッドの配置を設定するには

〈Report Design〉で、[Layout(レイアウト)]メニューから[Grid Alignment(グリッドの配置)]を選択します。

1. 〈Alignment Grid(グリッドの配置)〉フォームで、次のフィールドの値を変更します。
 - Horizontal(水平)

注:

〈プリンタの設定〉フォームでレポートを CSV (カンマ区切り) 形式のファイルにエクスポートする場合、水平 (Horizontal) の間隔を 52 に設定するようお勧めします。この数値は、Microsoft Excel のデフォルト・カラム幅に対応します。[Snap to Grid (グリッド位置合せ)] オプションもオンにしてください。

- Vertical (垂直)

この値は、〈Report Design〉で使用するワークステーションでのピクセルの値を表します。この値は、保存時に、ワークステーションに影響を受けない測定法に換算されます。このため、レポートを別のワークステーションで表示しても同じレイアウトを維持できます。

2. 次のオプションを選択します。

- Display Grid (グリッドの表示)

ワークスペースにグリッド行を表示します。

- Snap to Grid (グリッド位置合せ)

最も近いグリッド行にオブジェクトの位置を合わせます。このオプションは、グリッド行の可視/不可視にかかわらず機能します。

3. [OK] をクリックします。

参照

- CSV ファイルへのエクスポートについては「CSV (カンマ区切り) 形式ファイルにエクスポートするには」

▶ 表示ツリーを表示/非表示にするには

〈Report Design〉で、[Report] タブをクリックしてレポートを表示します。

1. 〈Report Design〉でツリーのオンとオフを切り替えるには、[View] メニューから [Report Tree View (レポート・ツリー表示)] を選択します。

このツリーには、レポートのセクションの他、各セクションに関連するオブジェクトも含まれます。ツリーには通常は表示されないフィールドも表示されます。ツリーの一番上には、レポート名が表示されます。レポート名の下には、最初に作成したセクションが表示されます。各コンポーネントの横には、プラス (+) とマイナス (-) のアイコンがあります。

2. プラス (+) をクリックすると展開され、マイナス (-) は元に戻ります。

最初のセクションを展開すると、Fields というフォルダが表示されます。このフォルダを開くと、このセクションに含まれるオブジェクトのリストが表示されます。レポート・ツリーにはローとセルは表示されません。詳細セクションとその [Fields (フィールド)] フォルダを展開すると、各フィールドに 2 つの項目が表示されます。一方の項目 (フィールドの見出し部分) は固定情報を、もう一方 (フィールドのデータ部分) は変数を表します。

3. オブジェクトのプロパティを表示または変更するには、ツリー上のオブジェクトをダブルクリックします。

注:

レポート・ツリーにはレポートの構造が表示されますが、これはレポートの処理の流れを示すものではありません。[Preview]タブを使用すれば、レポートのフォーマットを確認できます。

▶ **ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザを表示または非表示にするには**

〈Report Design〉で、レポートの詳細セクションをクリックします。

1. ブラウザのオン/オフを切り替えるには、[View]メニューから[Business View Column Browser(ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザ)]を選択します。

注:

ビジネス・ビュー・カラムは詳細セクションにのみ追加可能なため、詳細セクションがアクティブでないとビジネス・ビュー・カラム・ブラウザにはアクセスできません。

2. レポートにビジネス・ビュー・カラムを追加するには、ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザからドラッグして希望の場所に移動します。

▶ **データ辞書ブラウザを表示または非表示にするには**

〈Report Design〉で、レポートの詳細セクションをクリックします。

1. ブラウザのオン/オフを切り替えるには、[View]メニューから[Data Dictionary Browser(データ辞書ブラウザ)]を選択します。
2. レポートにデータ辞書項目を追加するには、データ辞書ブラウザからドラッグして希望の場所に移動します。

スマート・フィールドの追加

レポートの1つまたは複数の詳細セクションにスマート・フィールドを追加できます。スマート・フィールドにより、レポートに複雑で、再利用可能な計算式を追加できます。スマート・フィールドは、スマート・フィールド・テンプレートごとにグループ化されています。このため、スマート・フィールドを追加する前に、スマート・フィールド・テンプレートの詳細セクションに追加する必要があります。

スマート・フィールド・テンプレートは特定のビジネス・ビューに基づいています。スマート・フィールド・テンプレートをセクションに添付して、そのセクションのビジネス・ビューがテンプレートに必要なものと違った場合はビジネス・ビューを変更できます。

注意:

セクションに添付されたビジネス・ビューがスマート・フィールド・テンプレートで必要とされるビジネス・ビューと同じでない場合、スマート・フィールドをセクションに追加しても正しく機能しないことがあります。

参照

- スマート・フィールド・ディレクタについては「アプリケーション・レポートへのスマート・フィールドの追加」

▶ スマート・フィールド・テンプレートを選択するには

〈Report Design〉で、[View(表示)]メニューから[User Options(ユーザー・オプション)]を選択します。

1. 〈User Options〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - スマート・フィールド・テンプレート選択の許可
2. 〈Report Design〉で、スマート・フィールドを追加する詳細セクションをクリックします。
3. [Section]メニューから[Section Properties]を選択します。
4. セクションのフォームで、[General(一般)]タブをクリックします。
5. [Smart Field Template(スマート・フィールド・テンプレート)]フィールドで、テンプレートを選択して[OK]をクリックします。

▶ スマート・フィールドを追加するには

1. 〈Report Design〉で、[Insert(挿入)]メニューから[Smart Field(スマート・フィールド)]を選択します。
2. 〈Create New Smart Field(新規スマート・フィールドの作成)〉で、スマート・フィールドを選択します。
3. 〈Smart Field Director(スマート・フィールド・ディレクタ)〉に従って、スマート・フィールドを設定します。

ヘッダー/フッター・セクションの作成

レポート・ヘッダー/フッター・セクションおよびページ・ヘッダー/フッター・セクションは、固定情報と変数、ランタイム・フィールドを含む特殊な目的を持ったセクションです。ヘッダー/フッターに挿入する一般的な情報には、会社名やレポート名、レポート印刷日付、ページ番号などがあります。ヘッダー/フッター・セクションには通常、テーブルからのデータではなくコメントやシステム関連の情報が入るため、ビジネス・ビューとは関連しません。

作成したヘッダー/フッター・セクションは、〈Report Design〉のレポート・ビューの下に追加されます。ただし、これらのセクションはレポートを印刷するときには、指定したセクション・タイプに基づいて適切な順序で印刷されます。

レポートには、レポートの開始時に1度だけ印刷されるレポート・ヘッダーを1つだけ設定できます。レポート・ヘッダーには、レポート名やその他の特別な説明を表示します。

レポート・フッターはレポートに1つだけ含めることができ、レポートの終わりに印刷されます。レポート・フッターには、免責事項に関する記述やその他の結びのテキストを入れることができます。

レポートのページ開始部分にはページ・ヘッダーを1つだけ入れることができます。ページ・ヘッダーには、会社名や日付タイトル、ページ番号、日付などのデータを入れることができます。

フッターは、レポート・ページの終わりの部分に1つ入れることができます。ページ・フッターには、たとえばそのレポートの記載項目についての記述などを表示することができます。

レポート・ヘッダー/フッターおよびページ・ヘッダー/フッターのプロパティはグループ・セクションのプロパティと似ています。

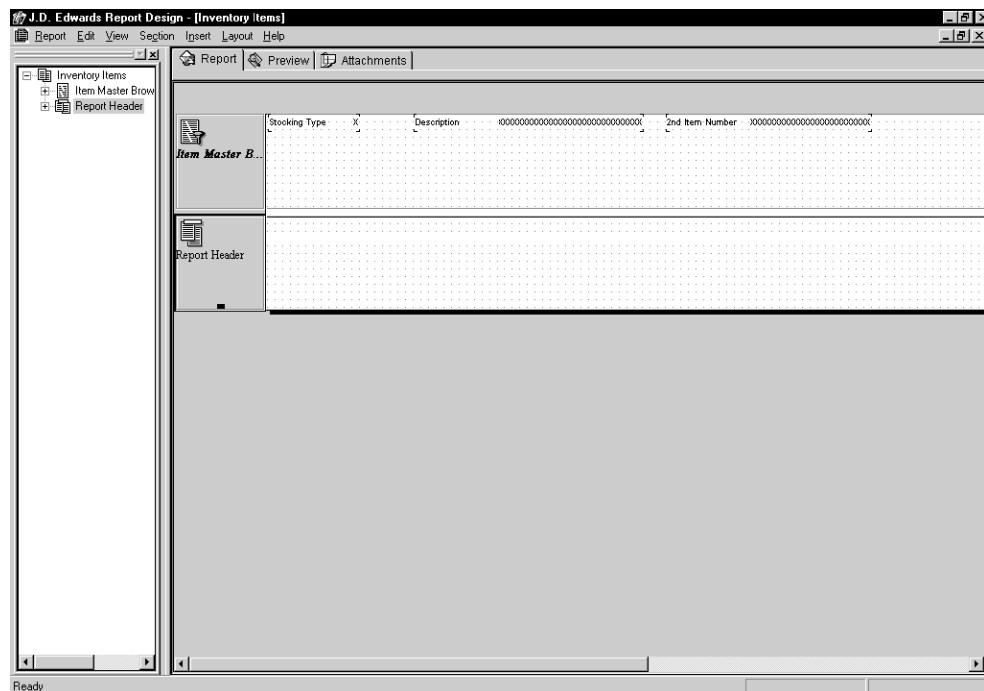
参照

- セクションへのデータ・フィールドの追加とプロパティの変更については「レポート・セクションでのオブジェクトの処理」

▶ レポート・ヘッダーを作成するには

〈Report Design〉で、[Section]メニューから[Create(作成)]を選択し、[Headers and Footers(ヘッダー/フッター)]から[Report Header(レポート・ヘッダー)]を選択します。

[Report Tree]ウィンドウのツリーにはアイコンが追加され、[Report View]ウィンドウにはレポート・ヘッダー用のフレームが追加されます。



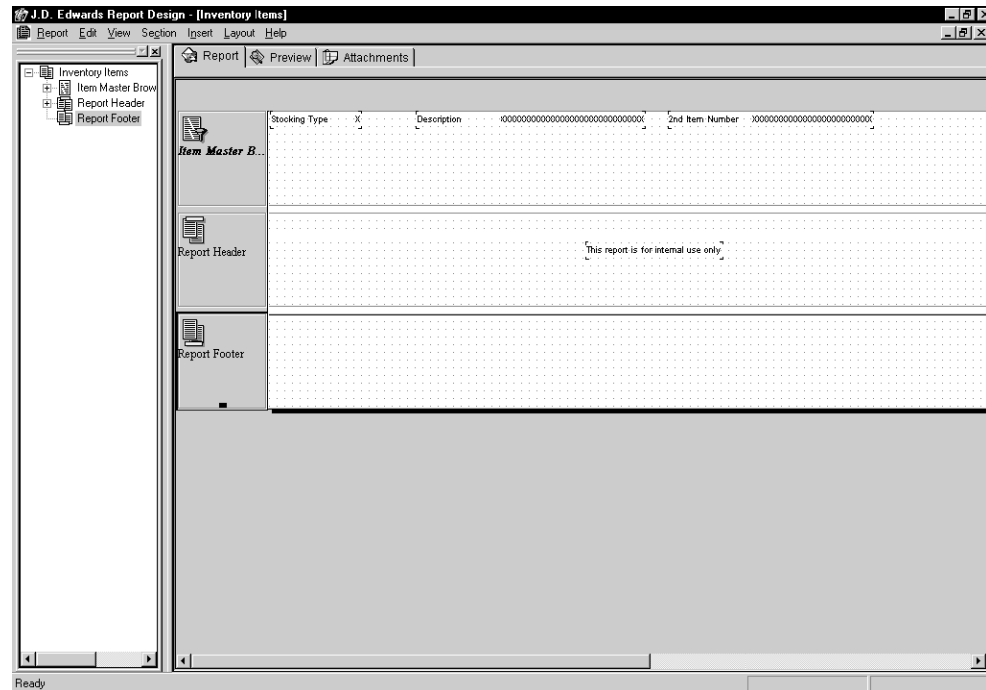
1. レポート・ヘッダーをクリックします。
2. [Insert]メニューから必要なフィールドを選択して、マウス・カーソルをそのページ・ヘッダー上にドロップします。ビジネス・ビュー・カラム以外のすべてのタイプのデータ・フィールドが追加できます。ビジネス・ビュー・カラムが追加できないのは、このセクションにビジネス・ビューが関連付けられていないためです。
3. [Section]メニューから[Section Properties]を選択するか、[Report Header(レポート・ヘッダー)]セクションをダブルクリックして、〈Report Header(レポート・ヘッダー)〉フォームを開きます。

〈Report Header〉フォームが表示されます。

▶ レポート・フッターを作成するには

〈Report Design〉で、[Section]メニューから[Create (作成)]を選択し、[Headers and Footers (ヘッダー/フッター)]から[Report Footer (レポート・フッター)]を選択します。

[Report Tree]ウィンドウのツリーにはアイコンが追加され、[Report View]ウィンドウにはレポート・フッター用のフレームが追加されます。



1. レポート・フッターをクリックします。
2. [Insert]メニューから必要なフィールドを選択して、マウス・カーソルをそのページ・ヘッダー上にドロップします。ビジネス・ビュー・カラム以外のすべてのタイプのデータ・フィールドが追加できます。ビジネス・ビュー・カラムが追加できないのは、このセクションにビジネス・ビューが関連付けられていないためです。
3. [Section]メニューから[Section Properties]を選択するか、[Report Footer (レポート・フッター)]セクションをダブルクリックして、〈Report Footer (レポート・フッター)〉フォームを開きます。

▶ ページ・ヘッダーを作成するには

〈Report Design〉で、[Section]メニューから[Create]を選択し、[Headers and Footers]から[Page Header(ページ・ヘッダー)]を選択して、次のいずれかのオプションを選びます。

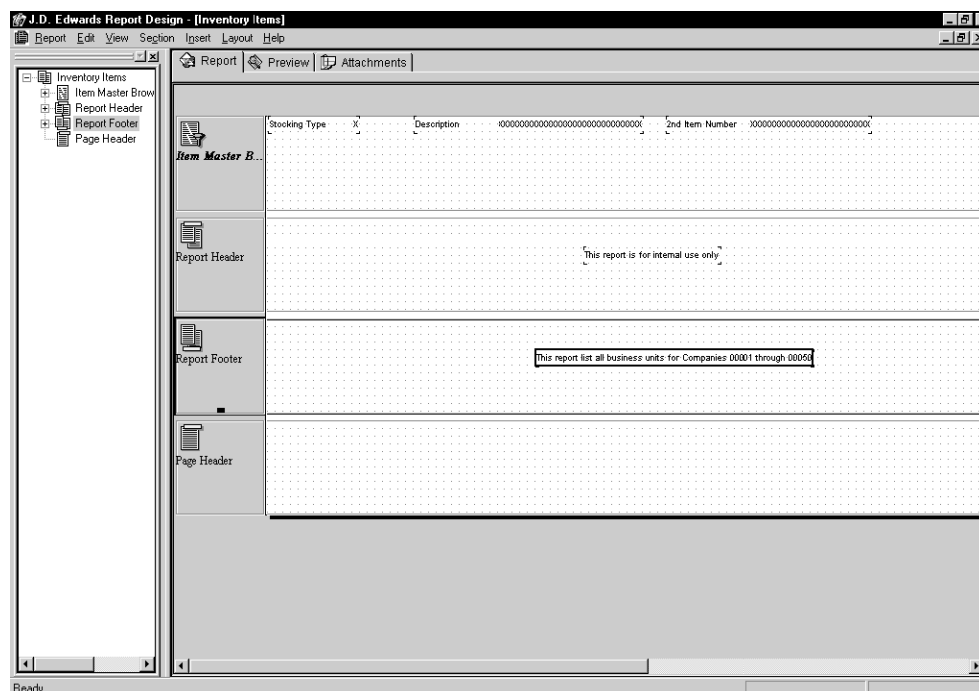
- Section Only(セクションのみ)

フィールドなしのページ・ヘッダーが作成されます。

- Auto Create(自動作成)

システム日付、ページ番号、会社名、タイトル、レポート名などのフィールドが組み込まれたページ・ヘッダーが作成されます。

[Report Tree]ウィンドウのツリーにはアイコンが追加され、[Report View]ウィンドウにはページ・ヘッダー用のフレームが追加されます。



1. ページ・ヘッダーをクリックします。
2. [Insert]メニューから必要なフィールドを選択して、マウス・カーソルをそのページ・ヘッダー上にドロップします。ビジネス・ビュー・コラム以外のすべてのタイプのデータ・フィールドが追加できます。ビジネス・ビュー・コラムが追加できないのは、このセクションにビジネス・ビューが関連付けられていないためです。
3. [Section]メニューから[Section Properties]を選択するか、[Page Header(ページ・ヘッダー)]セクションをダブルクリックして、〈Page Header(ページ・ヘッダー)〉フォームを開きます。
〈Page Header〉フォームが表示されます。

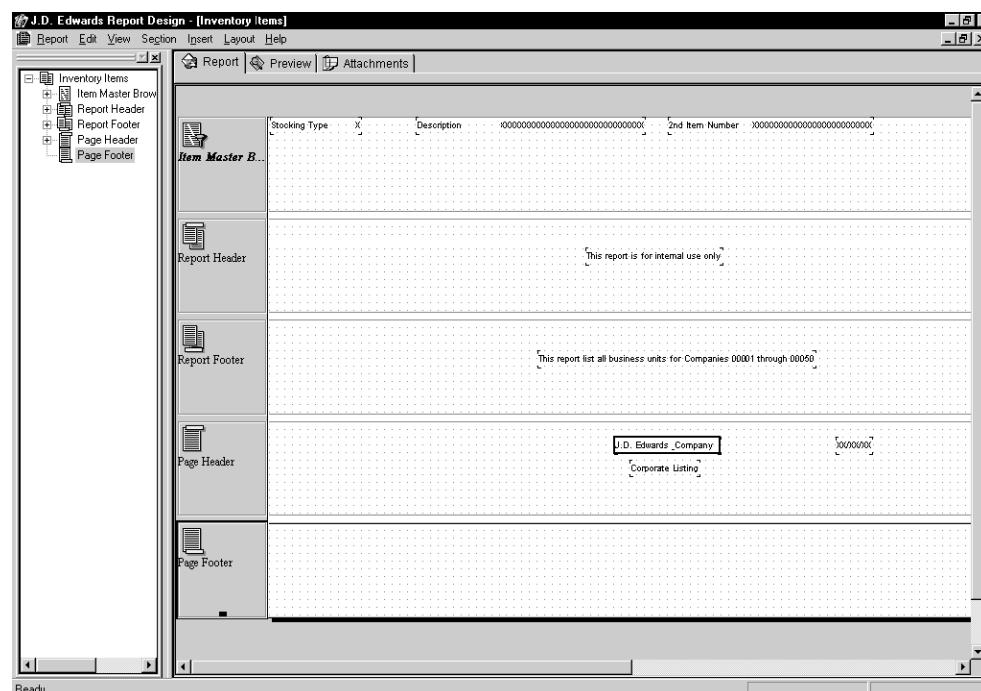
注:

ブランクの固定情報フィールドをヘッダー・テキストの下に入れると、レポートの本体とヘッダーの間に追加のスペースを挿入できます。

▶ ページ・フッターを作成するには

〈Report Design〉で、[Section]メニューから[Create]を選択し、[Headers and Footers]から[Page Footer(ページ・フッター)]を選択します。

[Report Tree]ウィンドウのツリーにはアイコンが追加され、[Report View]ウィンドウにはページ・フッター用のフレームが追加されます。



1. ページ・フッターをクリックします。
2. [Insert]メニューから必要なフィールドを選択して、マウス・カーソルをそのページ・ヘッダー上にドロップします。ビジネス・ビュー・コラム以外のすべてのタイプのデータ・フィールドが追加できます。ビジネス・ビュー・コラムが追加できないのは、このセクションにビジネス・ビューが関連付けられていないためです。
3. [Section]メニューから[Section Properties]を選択するか、[Page Footer(ページ・フッター)]セクションをダブルクリックして、〈Page Footer(ページ・フッター)〉フォームを開きます。

注:

ブランクの固定情報フィールドをフッター・テキストの上に入れると、レポートの本体とフッターの間に追加のスペースを挿入できます。

レベル区切りヘッダー/フッター・セクションの処理

レポートでは、同じフィールドについて同じ値を持つレコードを「同じレベル」といいます。たとえば、電話番号によってソートしたレポートの場合、同じ市外局番を持つすべてのレコードは同じレベルにあります。そのフィールドの値が変わることを、「level break(レベル区切り)」といいます。

レベル区切りは、発生すると処理を追加できるため便利です。セクション・タイプには、レベル区切りヘッダーとレベル区切りフッターという2つのレポート・セクションがあり、レベル区切りに簡単に処理を追加できます。

レベル区切りヘッダーおよびフッターは詳細セクションに関連付けられており、多くのレコードを小さく扱いやすい単位にまとめる場合に使用します。どのデータ・フィールドでもレベル区切りとして定義することができます。レポート実行時にレベル区切りがあると、そこで見出しや合計の表示といったイベント処理を実行できます。

また、レベル区切りをページ区切りのトリガーとして指定することもできます。たとえば、[Company(会社)]をレベル区切りフィールドとして指定し、このフィールドの値が変更されるたびに新しいページを始めるように指定できます。

レベル区切りヘッダーは詳細セクションのレベルの開始部分に表示され、詳細セクション内のデータを定義します。レベル区切りが電話番号に関連する場合、レベル区切りヘッダーを使って同じ市外局番のグループごとの名称などを明記できます。

レベル区切りフッターは、前のレベルのレベル区切りより後のデータを定義します。たとえば従業員リストで、部署ごとの給与合計を表示する際にレベル区切りフッターを使用できます。

また、レベル区切りヘッダーやフッターに条件を設定して、処理オプションで指示した場合にだけ表示されるようにすることも可能です。たとえば、イベント・ルールのレベル区切りヘッダーやフッターに、Hide Section(セクションを非表示にする)システム関数を添付して、呼び出した時にだけ合計が表示されるレポートを作成できます。そして、「Initialize Section」のイベントで処理オプションのイベント・ルールを追加して、設定に応じてセクションが表示または非表示になるようにできます。

〈Report Design〉を使うと、次のことができます。

- レベル区切りヘッダーの追加

レベル区切りヘッダーは説明を記載する見出しで、レコード・レベルの先頭に表示されます。たとえば、[Company(会社)]フィールドがレベル区切りのレポートでは、各会社レベルの先頭にレベル区切りヘッダーとして会社番号とその記述を表示できます。グループ・セクションは自由形式のため、レベル区切りヘッダーに使用されます。

- レベル区切りヘッダーの非表示

レベル区切りヘッダーを追加すると、レベル区切りのセクション([Display selected columns as part of this section]オプションをオンにした場合)と詳細セクションの両方に同じデータ・フィールドが表示されます。この場合、両方のセクションに同じフィールドが印刷されないようにするには、詳細セクションのデータ・フィールドを表示しないように設定します。

- 記述とレベル区切りヘッダーの関連付け

レベル区切りヘッダーのフィールドに記述を付け加えると、レポートをよりわかりやすくできます。記述を関連付けると、読み込まれるレベル区切りヘッダーのレコードの記述がレポートに表示されます。たとえば、会社 00060 には「財務報告用会社」という記述が関連付けられている場合があります。レベル区切りヘッダーが処理される際、この記述は[会社 No.]と一っしょに表示されます。

- レベル区切りフッターの追加

レベル区切りフッターは、レベル区切りの後に表示される情報を表します。レベル区切りフッターのフィールドは、合計としてよく使用されます。レベル区切りフッターを合計として使用する場合、フィールドの値はレポート実行時に計算されます。

- レベル区切りフッターへの記述の挿入

レベル区切りフッターのフィールドに記述を付け加えて、レポートをよりわかりやすくできます。

レベル区切りヘッダーやフッターを作成した後で、そのプロパティを変更できます。レベル区切りヘッダーは、常にグループ・セクションです。レベル区切りフッターは、グループまたはカラム・セクションのどちらかです。

参照

- セクション・プロパティの変更については「レポート・セクションのオブジェクトの処理」

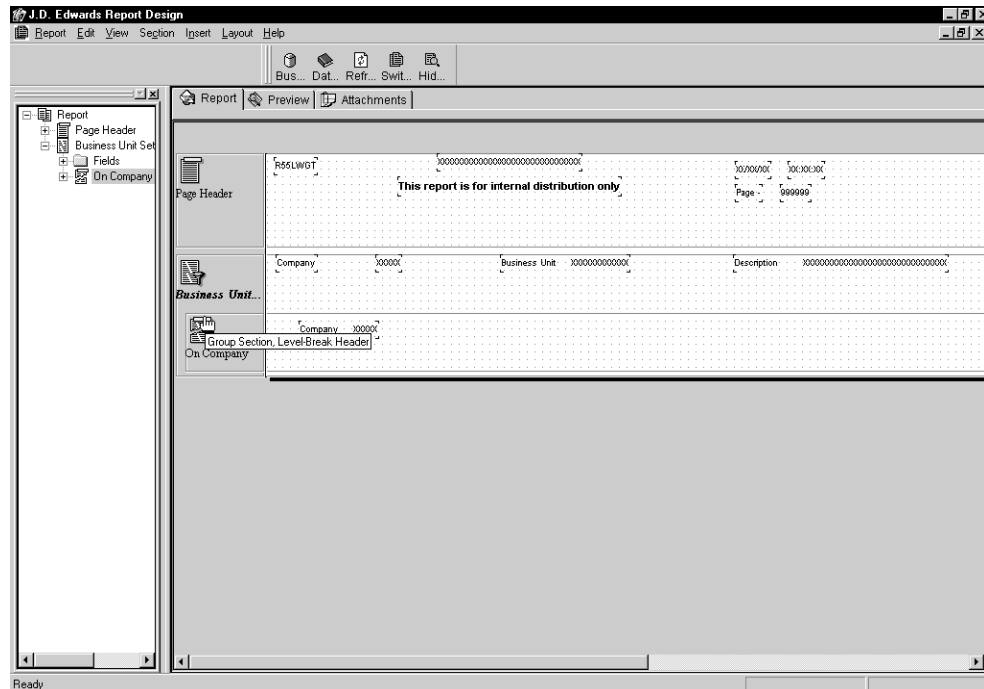
▶ レベル区切りヘッダーを作成するには

〈Report Design〉で、レベル区切りヘッダーを添付する詳細セクションをクリックします。

1. [Section]メニューから[Create] - [Level Break Header(レベル区切りヘッダー)]を選択します。
2. 〈Level Break〉の[Show(表示)]見出しで、次のいずれかのオプションを選択します。
 - all columns(すべてのカラム)
このオプションを選択すると、作成した詳細セクションと関連するビジネス・ビューの使用可能なフィールドがすべてリスト表示されます。
 - only existing sort columns(既存のソート・カラムのみ)
このオプションを選択すると、詳細セクションを作成する際にデータ順序設定フィールドとして選択したフィールドが表示されます。
3. フィールドを 1 つ選択して、レベル区切りフィールドとして指定します。
4. レベル区切りとして指定したフィールドを、レポートのレベル区切りヘッダーに表示したい場合、[Display selected column as part of this section(選択したカラムをこのセクションの一部として表示する)]オプションをオンにします。
5. [完了]をクリックします。

レベル区切りヘッダーのセクション・プロパティを修正することにより、別のフィールドをレベル区切りフィールドとして指定できます。

レポート・ツリーでは、レベル区切りヘッダーは添付先セクションの 1 つ下に表示されます。レポート・ビューでは、詳細セクション内に表示されます。レベル区切りヘッダーの名称は通常「On...」で始まり、レベル区切りに関連するセクションのフィールドを示します。



▶ 詳細セクションのレベル区切りフィールドを非表示にするには

〈Report Design〉で、非表示にするレベル区切りフィールドを含む詳細セクションを選択します。

1. レベル区切りフィールドの変数またはカラム変数部分をクリックします。
2. 〈Variable Properties (変数プロパティ)〉または〈Column Variable Properties (カラム変数プロパティ)〉で、[Visible (可視)] オプションをオフにします。

このフィールドを再度表示させるには、オブジェクトをダブルクリックして [Visible] オプションをオンにしてください。詳細セクションをダブルクリックして [Fields] タブをクリックし、[Visible] を有効にして〈Section Properties〉フォームを表示することもできます。

参照

- レポート・ツリー・ウィンドウについては「設計ワークスペースのカスタマイズ」

▶ 記述とレベル区切りヘッダーを関連付けるには

〈Report Design〉で、レベル区切りヘッダー・フィールドの変数の部分をクリックします。

1. [Edit]メニューから[Associate] - [Description]を選びます。
カーソルが変化し、レベル区切りヘッダーに記述を追加できるようになります。
2. レベル区切りヘッダー内の任意の位置に[Description]フィールドを置きます。他のフィールドと同様、このフィールドも新しい位置にドラッグできます。
3. このフィールドのプロパティを変更するには、フィールドをダブルクリックしてください。
4. 〈Associated Description Properties(関連記述プロパティ)〉フォームで、必要に応じてオプションを変更します。

▶ レベル区切りフッターを作成するには

〈Report Design〉で、レベル区切りフッターを添付する詳細セクションをクリックします。

1. [Section]メニューから[Create] - [Level Break Footer(レベル区切りフッター)]を選択します。
2. 〈Level Break Footer〉で、次のいずれかのオプションを選んで[OK]をクリックします。
 - Group Section(グループ・セクション)
 - Columnar Section(カラム・セクション)
3. 〈Level Break〉の[Show(表示)]見出しで、次のいずれかのオプションを選択します。
 - all columns(すべてのカラム)
このオプションを選択すると、作成した詳細セクションと関連するビジネス・ビューの使用可能なフィールドがすべてリスト表示されます。
 - only existing sort columns(既存のソート・カラムのみ)
このオプションを選択すると、詳細セクションを作成する際にデータ順序設定フィールドとして選択したフィールドが表示されます。
4. フィールドを1つ選択して、レベル区切りフィールドとして指定します。
5. [次へ]をクリックします。

Aggregations

Define aggregations

Select operations and columns which you wish to aggregate

Operator	Operand
Average of Count of Maximum of Minimum of Total of	

Item display style

☐ Single overline 9999
☐ Double underline 9999

☐ Reprint section at page break

集計オブジェクトとは、他のフィールドにある値の計算結果を含むオブジェクトのことです。計算結果には、たとえば、値の合計や平均値、レコード数などが考えられます。レベル区切りフッターを追加して、レベル区切りフッター内の集計オブジェクトに集計条件を割り当てた後でも、集計条件は変更できます。

6. <Aggregations>で、[Operator(演算子)]および[Operand(オペランド)]を指定します。

選択する[Operator]ロジックにより[Operand]が決まります。次の Operators(演算子)のいずれかを選択してください。

Average of(平均値)	カラム内のすべての金額の平均
Count of(数)	カラム内の項目またはレコード数
Maximum of(最大値)	カラム内のレポートの最大金額
Minimum of(最小値)	カラム内のレポートの最小金額
Total of(合計)	カラムの値の合計

7. [Item display style(項目表示スタイル)]見出しの下にあるオプションから 1 つ選んでクリックします。
 - Single overline(1 重上線)
 - Double underline(2 重下線)
8. 必要に応じて、[Reprint section at page break(ページ区切りでセクションを再印刷する)]オプションをクリックします。

このオプションを選択すると、前のページの最終行が次のページの 1 行目として印刷されます。

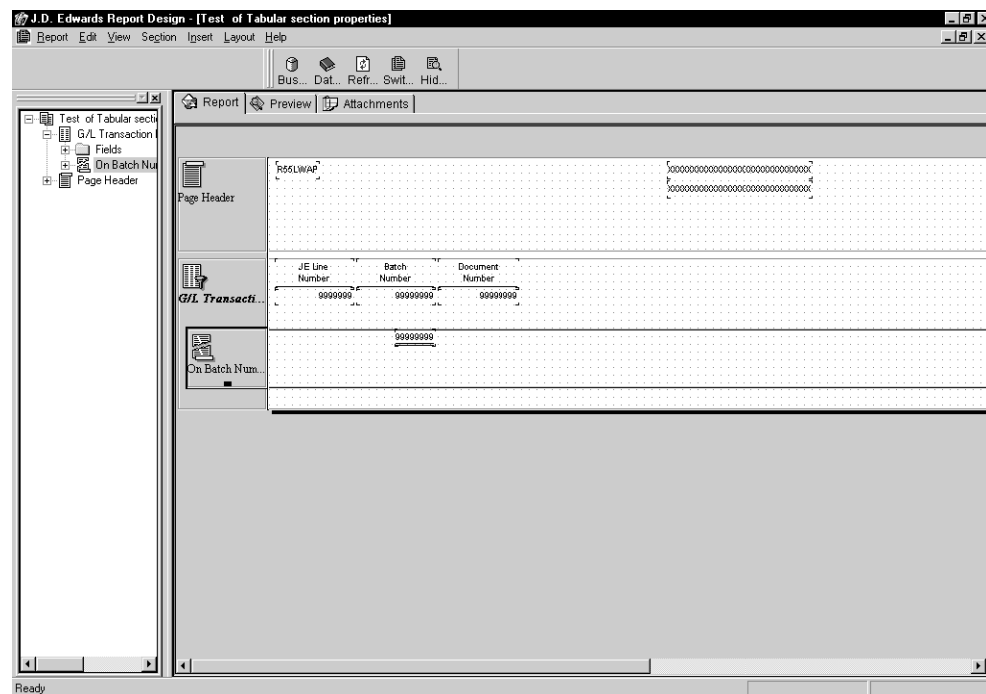
9. [完了]をクリックします。

レベル区切りフッターをクリックして[Section(セクション)]メニューから[Add Aggregates(集計を追加)]を選択すると、後からでも集計オブジェクトを修正できます。

〈Report Design〉では、集計オブジェクトにカーソルを合わせてください。集計計算の基準となっている詳細セクションのフィールドの色が変わります。

レベル区切りフッターは、レポート・ツリーでは添付先セクションのひとつ下に表示されます。レポート・ビューでは、レベル区切りフッターは詳細セクションに表示されます。レベル区切りヘッダーの名称は通常「On...」で始まり、レベル区切りに関連するセクションのフィールドを示します。

[Level-break footer(レベル区切りフッター)]フィールドが、集計中のカラムの下に表示されます。



参照

- 詳細セクションのレベル区切りフィールドの位置揃えについては「セクション内または全体にわたってフィールド/カラムの位置を合わせるには」

▶ レベル区切りフッターに記述を挿入するには

〈Report Design〉で、レベル区切りフッター・セクションをクリックします。

1. [Insert]メニューから[Constant Field]を選択します。
2. オブジェクトを表示するレベル区切りフッターをクリックして、固定情報フィールドを挿入します。
3. 固定情報をダブルクリックします。
4. 〈Constant Properties (固定情報)〉フォームで、[Variable Name]フィールドをわかりやすい名称に変更します。

参照

- オブジェクトの関連テキスト記述の変更については「レポート・セクションのオブジェクトの処理」

例: 詳細セクションへのレベル区切りの追加

この例では、既存のレポートにレベル区切りヘッダー/フッターを追加する例を示しています。

注:

この例では「カラム・レポートの作成」で使用したレポートを修正します。基本レポートの作成については「カラム・レポートの作成」を参照してください。次に示すレポートは、レベル区切りヘッダーとフッターがビジネスユニットのフィールドに関連付けられている点で、前述のレポートとは異なります。

カラムで給与が集計されていますが、そのフィールドはレベル区切りとして指定されていません。フッターのレベル区切りはビジネスユニットで、これは各ビジネスユニットの給与総額が計算されるためです。

E560701		J. D. Edwards & Company		2003/06/26 10:26:20	
				Page ~ 1	
所属ビジネスユニット	9 Corporate Administration				
住所	名称	給与	当初	年齢	
No.		751	開始		
0002 Abbott, Dominique		5	1999/04/10		38,000.00
0044 Abrams, Brooke		5	1999/04/18		60,000.00
0078 Allen, Gwen		8	2005/03/02		
0001 Allen, Ray		5	1999/06/16		75,000.00
0014 Anderson, Jeanette		5	1999/02/01		63,040.00
0832 Ato, Connie		5	1997/02/16		36,250.00
					264,290.00
所属ビジネスユニット	6100 Protective Services				
0053 Beck, Jeremy		8	2005/03/22		45,000.00
					45,000.00
所属ビジネスユニット	7071 Corporate Administration				
7703 Bellas, Debbie		5	1997/03/16		63,000.00
					63,000.00
所属ビジネスユニット	8000 Eastern Manufacturing Center				
0466 Bennett, Jody		8	1997/12/13		31,200.00
					31,200.00
所属ビジネスユニット	6100 Protective Services				
0051 Breen, Josephine		8	2004/11/30		31,200.00
					31,200.00
所属ビジネスユニット	7071 Corporate Administration				
7708 Brown, Daniel		5	1999/09/16		63,000.00
					63,000.00
所属ビジネスユニット	8000 Eastern Manufacturing Center				
0447 Brown, Harvey J.		8	1997/06/02		41,600.00
					41,600.00
所属ビジネスユニット	6100 Potomac Hotel				
0066 Carmichael, Bradley P.		5	2003/06/06		45,000.00
					45,000.00
所属ビジネスユニット	9 Corporate Administration				

▶ 詳細セクションにレベル区切りを追加するには

〈Report Design〉を起動して、レポート(R5607COL)を開きます。

1. レベル区切りヘッダーを作成するには、[Section]メニューから[Create] - [Level Break Header(レベル区切りヘッダー)]を選択します。
2. 〈Level Break〉で、[Business Unit - Home]を選択してヘッダーにデータ・フィールドを表示し、[完了]をクリックします。

カラム・セクションにヘッダー・セクションが表示されます。

サンプル・レポートには、「Business Unit - Home」の番号および記述が表示されます。

3. 記述を取り込むには、[Business Unit - Home]フィールドの変数の部分をクリックして、[Edit]メニューから[Associate Description(関連記述)]を選択します。
4. ヘッダー・セクションをクリックして記述フィールドを配置し、次にそれを[Business Unit - Home]フィールドのとなりに移動します。

サンプル・レポートのカラム・セクションには[Business Unit - Home]カラムは繰り返し表示されません。

5. フィールドを非表示にするには、カラム・セクションの[Home Business Unit]をダブルクリックします。表示されるプロパティ・フォームの[Advanced]タブをクリックしてから、フィールドを非表示にしてください。
6. [OK]をクリックします。
7. レベル区切りフッターを作成するには、カラム・セクションをクリックして[Section]メニューから[Create] - [Level Break Footer]を選択します。

〈Level Break Footer(レベル区切りフッター)〉フォームが表示されます。

8. カラム・セクションが可視で、この例では給与合計が給与カラムと共にリストされるため、[Group Section(グループ・セクション)]を選択して[OK]をクリックします。
9. 〈Level Break〉で、[Business Unit - Home]を選択して[次へ]をクリックします。

〈Aggregations〉フォームが表示されます。

Aggregations

Define aggregations

Select operations and columns which you wish to aggregate

Operator	Operand
Total of	Rate - Salary, Annual

Item display style

☒ Single overline 9999

☐ Double underline 9999

☐ Reprint section at page break

< Back Finish Cancel Help

10. ビジネスユニットごとに年間給与合計を集計するには、演算子(Operator)を「Total of」、オペランド(Operand)を「Rate - Salary, Annual」に設定します。

11. [Single overline]を選択して[完了]をクリックします。

カラム・セクションにフッター・セクションが表示されます。

注:

レポート・ウィンドウのカラム・セクション内でのヘッダーおよびフッター・セクションの順序は、レポートでの表示には影響しません。

- 2つの既存の詳細セクションの結合

ビジネス・ビュー・フィールドを共有する詳細セクションがレポート上に既に2つある場合、これらをサブセクションとして結合することができます。

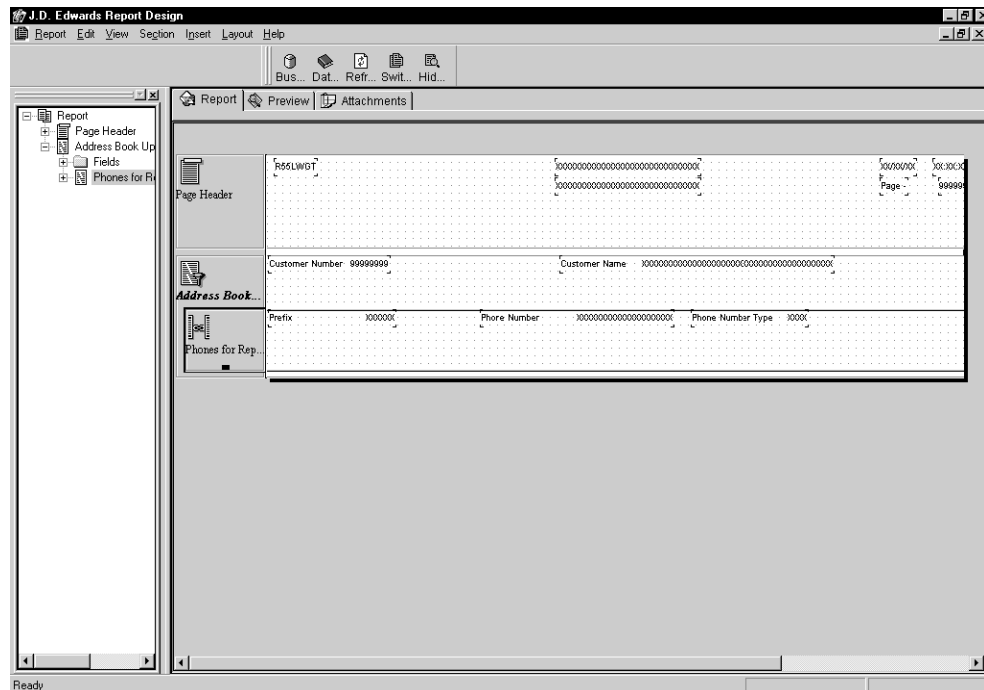
はじめる前に

- 本書では、親として使用する詳細セクションが作成済みであることを前提とします。親セクションの作成については「詳細セクションの作成」を参照してください。

▶ サブセクション結合を作成するには

〈Report Design〉で、親セクションとして使用するカラムまたはグループ・セクションをクリックします。

1. 〈Section〉メニューで、[Create]から[Sub-Section Join(サブセクション結合)]を選択します。
 - Group(グループ)
 - Columnar(カラム)
2. [Business View Selection]オプションで、詳細セクションの場合と同じ方法で、子セクション用にビジネス・ビューを選択して[次へ]をクリックします。
 子セクション用に選択するビジネス・ビューは、親セクション用のビジネス・ビューと共通のフィールドを少なくとも1つ持つ必要があります。
3. 〈Favorite Business Views〉で、ビジネス・ビューを選択して[次へ]をクリックすると〈Section Layout〉フォームが表示されます。
4. 〈Section Layout〉で、子セクションに組み込むビジネス・ビュー・カラムを選択して[次へ]を選択します。
5. 〈Sub Section Join〉で、[Parent(親)]見出しの下の次のフィールドをクリックして、結合する親セクションを選択します。
 - Join to(結合先)
6. [Child columns(子カラム)]のリスト・ボックスから、[Parent columns and variables(親カラムと変数)]のビジネス・ビュー・カラムに共通するビジネス・ビュー・カラムを選択します。
7. 必要に応じて次のオプションをクリックします。
 - Join only at level breaks defined in the parent section(親セクションで定義したレベル区切りでのみ結合)
 このオプションを選択すると、親セクションに定義したレベル区切りのレコードがすべて処理された後に、子セクションのレコードが処理されますこれは、明細テーブルと取引テーブルなどのように、対応するレコードを多数持つテーブルを結合する場合に重要です。
8. 親セクションと結合する子セクションのカラムを指定し終わったら、[完了]をクリックします。



9. 子セクションにチェーンのアイコンが表示され、このセクションが結合されて親セクションの境界内にあることを示します。
10. 必要に応じて、次の処理を実行して子セクションのデータ順序設定を定義します。
 - 子セクションをクリックします。
 - [Section(セクション)]メニューから[Define Data Sequence(データ順序の定義)]を選択します。
 - <Data Sequencing(データ順序設定)>フォームから、レポートの順序設定に使用するデータ・フィールドを選択します。
 - [OK]をクリックします。
11. 必要に応じて、子セクションのフィールドを修正してレポートの外観を調整します。

参照

- ビジネス・ビューの検索については「ビジネス・ビューを選択するには」

▶ サブセクション結合を修正または切り離すには

次のいずれかのナビゲーションを使用します。

<Report Design>でサブセクション結合を修正するには、子セクションをダブルクリックします。

[Section]メニューから[Section Properties]を選択します。

子セクションの作成に使用したセクション・タイプに応じて、<Columnar Section(カラム・セクション)>フォームまたは<Group Section(グループ・セクション)>フォームが表示されます。

1. [Sub Section Join(サブセクション結合)]タブで、必要に応じて修正を加えます。

2. 結合を切り離すには、[Sub Section Join]タブをクリックして、[No Join(結合なし)]をクリックしてください。
3. [OK]をクリックします。

これで、子セクションは親セクションから切り離されます。

▶ 2つの既存の詳細セクションを結合するには

〈Report Design〉で、結合する詳細セクションをクリックします。

このセクションが子セクションになります。

1. [Section]メニューから[Sub-Section Join(サブセクション結合)]を選択します。
2. 〈Define Sub-Section Join〉フォームで、[Parent(親)]見出しの下の次のフィールドをクリックして、結合する親セクションを選択します。
 - Join To(結合先)
3. [Child columns](子セクションのビジネス・ビューのデータ・フィールド)のリスト・ボックスから、[Parent columns and variables](親セクションのビジネス・ビューのデータ・フィールド)のカラムと共通するカラムを選択します。
4. 必要に応じて、次のオプションを選択します。
 - Join only at level breaks defined in the parent section(親セクションで定義したレベル区切りでのみ結合)

このオプションを選択すると、親セクションに定義したレベル区切りのレコードがすべて処理された後に、子セクションのレコードが処理されますこれは、明細テーブルと取引テーブルなどのように、対応するレコードを多数持つテーブルを結合する場合に重要です。
5. 親セクションと結合する子セクションにカラムを入力し終わったら、[OK]をクリックします。
6. 子セクションにチェーンのアイコンが表示され、このセクションが結合されて親セクションの境界内にあることを示します。

レポート・セクションのオブジェクトの処理

レポート・セクションには多数のレポート・オブジェクトが含まれます。これらのオブジェクトはデータ・フィールドです。カラムは特殊なデータ・フィールドです。ここでは、さまざまなレポート・オブジェクトの機能面のプロパティについて説明します。

- ビジネス・ビュー・カラム
- データ・フィールド
- 表セクション

参照

- データのサイズやフォント、色などの変更については「レポート・オブジェクトの外観の変更」

ビジネス・ビュー・カラムの処理

関連するビジネス・ビューを持つ詳細セクションであれば、ビジネス・ビュー・カラムの追加および削除が可能です。

▶ 詳細セクションにビジネス・ビュー・カラムを追加または削除するには

〈Report Design〉で、詳細セクションをクリックします。

1. [View]メニューから[Business View Columns Browser(ビジネス・ビュー・カラム・ブラウザ)]を選択します。

表示されるフォームには、このセクションに関連するビジネス・ビューのカラムがリストされます。

2. 必要なカラムを詳細セクションにドラッグします。
3. 〈Business View Columns Browser〉を閉じるには、[View]メニューの[Business View Columns Browser]をクリックします。

または、フォームのタイトル・バーの[X(閉じる)]ボタンをクリックします。

4. カラムを移動するには、新しい位置にドラッグします。
5. カラムを削除するには、ヘッダーか本文を選択して[Edit(編集)]メニューから[Delete(削除)]を選びます。

データ・フィールドの理解

データ・フィールドはレポート・セクションに位置し、個々にデータが入ります。ページ番号や日付、レポート名はデータ・フィールドです。データ・フィールドはどのタイプのレポート・セクションにも追加できますが、レポート・セクションのタイプとデータ・フィールドのタイプに組合せによっては追加できないものもあります。レポート名や日付などのデータ・フィールドは、レポート作成時に追加されていることもあります。

レポートの作成後、次の処理を実行することができます。

- データ・フィールドの追加
- データ・フィールドの削除
- データ・フィールドの変数名の変更
- カラム・ヘッダー・テキストの変更
- グループ・セクションの変数からの固定情報テキストの切離し

記述テキストとその変数を切り離すことがよくあります。たとえば、レポートに「Business Unit」と「Description」というデータ・フィールドがあるとします。この2つの固定情報を変更して、それぞれ「Business Unit Number」と「Name」とすると、レポートがわかりやすくなります。テキストを変数から切り離すと、テーブルから「Business Unit」のデータを読み込む機能はそのまま、よりわかりやすい説明をつけてデータを提示できます。

- セクション内の集計

カラム計算を実行するほとんどの場合、合計をわかりやすいフォーマットに直して表示します。このときに、通常はレベル区切りフッターで計算を実行します。状況によっては、計算結果の表示方法が重要でないこともあります。たとえば、非表示のカラムで計算を実行して、その結果を別のカラムで使用する場合などです。表示のフォーマット設定が重要でないときには、セクション内で計算を実行すると簡単です。合計や総合計が計算できます。

- 10 進位取りの変更

10 進位取りを使用して、桁の大きい数字の表示形式を簡単にできます。表セクションの単一フィールド、すべてのフィールド、またはすべての詳細セクションのすべてのフィールドの10 進位取りを変更することができます。

直接挿入が可能なデータ・フィールドの説明は次のとおりです。

Constant Field (固定情報フィールド)	ページ・ヘッダーの会社名など、文字列を表示する固定の項目。どのレポート・セクションにも挿入できます。
Alpha Variable (アルファ変数)	イベント・ルールにより定義される英数字データ用のフィールド。どのレポート・セクションにも挿入できます。
Numeric Variable (変数 - 数字)	通常は計算カラムと共に使用する、数字用のフィールド。どのレポート・セクションにも挿入できます。
Date Variable (日付変数)	日付用のフィールド。どのレポート・セクションにも挿入できます。
Report Date (レポート日付)	レポートの実行日付に対して使用するランタイム・フィールド。このフィールドは、カラムおよび表以外のどのレポート・セクションにも挿入できます。
Report Time (レポート時刻)	レポートの実行時刻に対して使用するランタイム・フィールド。このフィールドは、カラムおよび表以外のどのレポート・セクションにも挿入できます。
Page Number (ページ番号)	現行のレポート・ページ番号に使用するランタイム・フィールド。このフィールドは、カラムおよび表以外のどのレポート・セクションにも挿入できます。
Page n of Total (ページ数合計)	「Page 4 of 10」などのように、ページ数合計と現行のページ番号に使用するランタイム・フィールド。ページ・ヘッダーとフッターにのみ挿入できます。
Company Title (会社タイトル)	デフォルト会社(会社 00000)名用のランタイム・フィールド。このフィールドは、カラムおよび表以外のどのレポート・セクションにも挿入できます。
Report Title (レポート・タイトル)	レポートのタイトル用のランタイム・フィールド。このフィールドは、カラムおよび表以外のどのレポート・セクションにも挿入できます。
Data Dictionary Field (データ辞書フィールド)	データ辞書からのフィールド。どのレポート・セクションにも挿入できます。
テキスト変数	テキスト用のフィールド。どのレポート・セクションにも挿入できます。

カラムおよび表セクションに挿入したデータ・フィールドは、カラム形式で表示されます。ヘッダーは固定情報で、本文は変数です。ヘッダーと本文はリンクしており、どちらかを移動または削除すると、もう一方も〈Report Design〉により移動または削除されます。

グループ・セクションではデータ・フィールドは最初にカラム形式ではなく横に並んで表示されますが、固定情報と変数部分から構成されます。ただし、カラムや表セクションとは異なり、2 つを独立して移動することができます。さらに、2 つを切り離すことで、固定情報を変数から分離し、変数を削除せずに固定情報だけを削除できます。

データ・フィールドの外観は、ヘッダーを移動または削除したり、サイズやフォント、色を変更したり、行やボックスを関連付けることで修正できます。また、イベント・ルールと関連付けると、データ・フィールドの機能を変更することができます。

参照

次のトピックを参照してください。

- データのサイズやフォント、色などの変更については「レポート・オブジェクトの外観の変更」
- イベント・ルールの作成およびデータ・フィールドとの関連付けについては「イベント・ルールの処理」

▶ レポート・セクションでデータ・フィールドを追加または削除するには

〈Report Design〉で、修正するレポート・セクションをクリックします。

1. [Insert (挿入)] メニューから追加するフィールドを選択します。

選択するデータ・フィールドは、選んだレポート・セクションによって異なります。

カラムと表セクションでは、データ・フィールドはクリックしたカラムの右に自動的に挿入されます。特定のカラムをクリックしなかった場合、フィールドは最初のカラムの左に挿入されます。

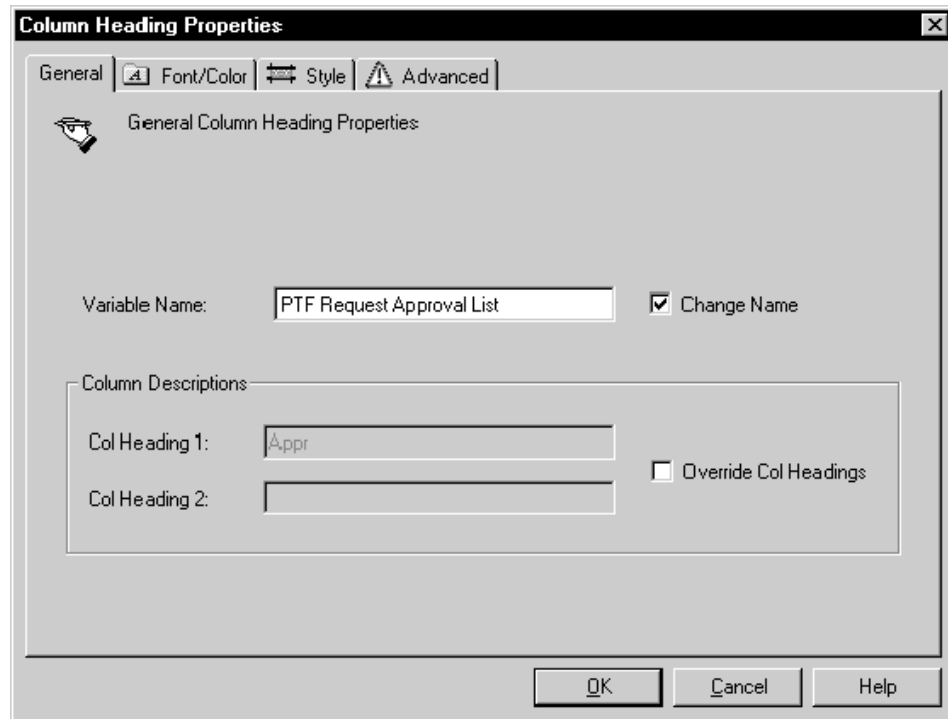
グループ・セクションでは、[Insert] メニューからデータ・フィールドを選択した後で、セクションをクリックしてフィールドを配置する必要があります。

2. フィールドやカラムを移動するには、新しい位置にドラッグします。
3. データ・フィールドを削除するには、クリックして [Edit] メニューから [Delete] を選択します。

▶ データ・フィールドの変数名を変更するには

〈Report Design〉で、変更するデータ・フィールドをダブルクリックします。

プロパティ・フォームが表示されます。



1. データ・フィールドがビジネス・ビュー・カラムに基づく場合は、次のいずれかのオプションをクリックしてビジネス・ビュー・カラム名を変更する必要があります。

- Change Name (名前変更)
- Override Name (名前の一時変更)

[Variable Name (変数名)] フィールドは、[Change Name or Override Name] オプションをクリックすると入力できるようになります。

2. [Variable Name] フィールドを変更して [OK] をクリックします。

注:

カラムと表以外のセクションにある固定情報フィールドの変数名を変更すると、その変更はレポートにも反映されます。その他の変数名を変更しても、データ・フィールドの外観には直接影響しません。あるデータ・フィールドの変数名を変更したら、セットになっているもう一方の変数名も変更してください。こうすると、後でイベント・ルールを添付する場合などに、データ・フィールドの管理が容易になります。

▶ カラム・ヘッダー・テキストを変更するには

〈Report Design〉で、変更するカラム・ヘッダーをダブルクリックします。

〈Column Heading Properties (カラム見出しプロパティ)〉フォームが表示されます。

The screenshot shows the 'Column Heading Properties' dialog box with the following details:

- General** tab is active.
- Variable Name:** Batch Type
- Change Name:** ☐
- Column Descriptions:**
 - Col Heading 1:** Bth
 - Col Heading 2:** Ty
- Override Col Headings:** ☒
- Buttons:** OK, Cancel, Help

1. カラムがビジネス・ビュー・カラムに基づく場合は、次のオプションをクリックしてビジネス・ビュー・カラム名を変更する必要があります。

- Override Col Headings (カラム見出しの一時変更)

[Column Description (カラム記述)] フィールドは、[Override Col Headings] を再度クリックするまで入力できません。

2. [Col Heading 1 (カラム見出し 1)] と [Col Heading 2 (カラム見出し 2)] フィールドのテキストを変更して、[OK] をクリックします。

カラムには 2 行からなる見出しを付けられます。[Col Heading 1] はカラム見出しの上の行に、[Col Heading 2] は下の行に対応しています。

注:

カラム名を変更したら、データ・フィールドの変数名も合わせて変更してください。後でイベント・ルールを添付する場合に、データ・フィールドが管理しやすくなります。

▶ グループ・セクションの変数から固定情報テキストを切り離すには

注意:

固定情報テキストを変数から切り離すと、レポートで再び結合することはできません。必要な場合は、切り離したテキストと変数を削除して、ビジネス・ビューのカラムをレポートに配置してください。新しいデータ・フィールドが前と同じように表示され、固定情報フィールドと変数はリンクしています。

固定情報または関連する変数をクリックします。

1. [Edit]メニューから[Disconnect(切離し)]を選択します。
2. これで、テキストと変数の移動やフォーマット、削除が別々に実行できます。

▶ セクション内の集計を実行するには

〈Report Design〉で、[File]メニューから[Report Properties]を選択します。

1. 〈Properties〉で、[Report Properties]タブをクリックします。
2. 必要に応じて次のフィールドに値を入力し、[OK]をクリックします。
 - 合計のみ印刷
 - 総合計の印刷
3. 合計を計算する数字カラムの変数部分をダブルクリックします。

注:

数値カラムの変数部分は、“9”を使って“99.999.99-”のように表されます。

4. [Column Variable Properties(カラム変数プロパティ)]で、[Totaling(集計)]タブをクリックします。
5. 次のオプションの1つまたは両方を選択します。
 - Total(合計)
 - Grand Total(総合計)

これらの2つのオプションは、ステップ2で選んだオプションに対応しています。〈Properties(プロパティ)〉フォームで[Print Totals Only(合計のみ印刷)]を選択しないと、合計計算は正常に機能しません。同様に、〈Properties〉フォームで[Print Grand Totals(総計を印刷)]を選択しないと、総合計は正しく計算されません。

6. 集計関数を選んで[OK]をクリックします。

選択したオプションに応じて、セクションの区切りの前の各カラムの一番下に行が1つか2つ追加されます。[Total]と[Grand Total]の両方を選択した場合、総計の前に合計行が表示されます。これらの行には名称は付きません。合計を表示するカラムを除いて、各カラムの情報は合計行に繰り返して表示されます。

フィールドを合計しない場合や、この行に合計を表示しない場合は、合計を非表示にすることができます。

10 進位取りの変更

10 進位取りを使用すると、レポートに大きな数字を簡易化して表示することができます。たとえば、単位を 1000 にした場合は次のように表示されます。

当初の値	表示される値
100,000.42	100
10,041.62	10
1,021.75	1
1,512.69	1.5

▶ 表セクションのフィールドの 10 進位取りを変更するには

〈Report Design〉で、変更するカラムを含む表セクションをクリックします。

1. 変更する数値カラムの変数部分をダブルクリックします。
2. 〈Column Variable Properties〉で、[Decimal Scaling(10 進位取り)]タブをクリックして、10 進位取りのオプションを選択します。

セクションのすべてのフィールドをデフォルトに戻すには、[Defaults(デフォルト)]をクリックします。

3. 完了したら[OK]をクリックします。

▶ 表セクションの全フィールドの 10 進位取りを変更するには

〈Report Design〉で、変更する表セクションをダブルクリックするか、セクションをクリックして [Section] メニューから [Section Properties] を選択します。

1. 〈Section〉フォームで、[Decimal Scaling(10 進位取り)]タブをクリックして、10 進位取りのレベルを選択します。

セクションのすべてのフィールドをデフォルトに戻すには、[Defaults(デフォルト)]をクリックします。

このフォームでの変更内容は、個別に変更したフィールド以外のすべてのセクションの値に影響します。個々の設定を一時変更して変更内容をセクションのすべてのフィールドに適用するには、[Apply settings to all Objects]を選択します。

2. 完了したら[OK]をクリックします。

▶ レポートのすべての詳細セクションで全フィールドの 10 進位取りを変更するには

〈Report Design〉で、[File]メニューから[Report Properties]を選択します。

1. 〈Properties〉で、[Decimal Scaling(10 進位取り)]タブをクリックして 10 進位取りのレベルを選択します。

レポートのすべてのフィールドをデフォルトの 10 進位取り設定に戻すには、[Defaults]をクリックします。

このフォームでの変更内容は、個別に変更したフィールドを除くレポートのすべての値に影響します。個々の設定を一時変更して変更内容をレポートのすべてのフィールドに適用するには、[Apply settings to all Objects]を選択します。

2. 完了したら[OK]をクリックします。

注:

レポート・レベルでのプロパティへの変更は、レポートの既存のバッチ・バージョンには反映されません。

表セクションの処理

表セクションは特殊なタイプのカラム・セクションで、レポート・データをカラム、ロー、セルを使って表示します。数値を表示するデータ・フィールドを組み込むと、表セクションではフィールド値が自動的に合計されます。たとえば、[未決済金額]を表示するオブジェクトを組み込むと、表セクションにある[未決済金額]合計が計算されます。

表セクションを作成するときは、カラム、ロー、セルについて次のガイドラインに従ってください。

カラムのみ定義 テーブルのデータだけをレポートに使用する場合、カラムを定義します。カラムのみを定義するときは、ユーザーによるデータ選択、順序設定、レベル区切りの条件に基づいてローが作成されます。

カラムおよびローの定義 ローの情報はレポートに横方向に設定されます。下線やスペース、ブランク行、中間合計といった特殊な計算を含める場合は、カラムだけでなくローも定義します。表セクションは、ローを定義する唯一の詳細セクションです。

カラム、ロー、セルの定義 セルとは、カラムとローが交差する部分を指します。カラムとローで定義された個別のセル情報を一時変更するには、セルを定義します。

表セクションのカラムの処理

カラム・セクションと表セクションはどちらもカラム・データを含みますが、表セクションは特殊な用途のさまざまなカラムを持つ点で、カラム・セクションとは異なります。これらのカラムには、スマート・フィールド・カラム、計算カラム、記述カラム、およびパーセント計算カラムが含まれます。

スマート・フィールド・カラムの作成

スマート・フィールドとは、J.D. Edwards ソフトウェアの特定のテーブル・データを読み込んで操作するためのデータ辞書項目（用語解説グループ K）のことです。たとえば、[FINRPTAB - 勘定残高]というスマート・フィールドをレポートに追加すると、特定の会計期間および会計年度を基準とした勘定残高を計算するカラムを作成できます。

スマート・フィールドは、ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数を呼び出します。ビジネス関数とはデータ構造を使用するプログラムで、次の処理を実行します。

- J.D. Edwards ソフトウェアのテーブルの特定のデータを要求する。
- データ構造体の設定済みパラメータにデータを戻す。
- データについて計算やその他の操作を行う。
- カラム見出しや複雑な計算などの情報をレポートに送る。

イベント・ルール・ビジネス関数とは、イベント・ルール用のスクリプト言語を使用して作成されるビジネス関数です。このスクリプト言語はプラットフォームに依存しません。J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトとしてデータベースに保管されます。

スマート・フィールドは既に作成済みのため、プログラミングせずに複雑なロジックをレポートに組み込めます。

[Column(カラム)]メニューからスマート・フィールドの作成を選択すると、スマート・フィールド・ディレクトタによってスマート・フィールドのパラメータや値を設定するための一連のフォームが表示されます。スマート・フィールドのカラムを作成するオプションは、添付されたビジネス・ビューに関連付けられたスマート・フィールドがなければ表示されません。

▶ スマート・フィールドのカラムを作成または削除するには

〈Report Design〉で、変更する表セクションをクリックします。

注:

スマート・フィールドを作成する際は、スマート・フィールドが使用されるセクションのタイプを定義します。変更するセクションのタイプに応じたスマート・フィールドを作成していないと、[Create]メニューのスマート・フィールド・オプションは使用できません。アプリケーション・レポート用に事前定義されたスマート・フィールドがいくつかあるので、スマート・フィールドをアプリケーション・レポートのメイン・セクションにいつでも使用できます。スマート・フィールドの定義については、「スマート・フィールドの追加」を参照してください。

1. [Column]メニューから[Create] - [Smart Field]を選びます。
〈Create New Smart Field(新規スマート・フィールドの作成)〉フォームが表示され、セクションに関連するテンプレートに含まれるスマート・フィールドがリストされます。
2. 処理するスマート・フィールドを選択して、[次へ]をクリックします。
3. 作成するスマート・フィールド・カラムごとに、1 から 4 を繰り返します。
4. カラムを移動するには、新しい位置にドラッグします。
5. カラムを削除するには、クリックして[Edit]メニューから[Delete]を選択します。

参照

- スマート・フィールド・ディレクタについては「アプリケーション・レポートへのスマート・フィールドの追加」

計算カラムの定義

計算カラムには計算の結果が含まれます。計算にはカラムを必要な数だけ組み込んだり、すべて除外することもできます。計算を実行するカラムには、スマート・フィールドやその他の計算を含むカラムなど、ビジネス・ビューのどのようなカラムも含むことができます。

注意:

計算カラムは、実際の金額(借方や貸方)ではなく、レポートに表示される金額記号に基づいています。

次のタスクでは以下の内容について説明します。

- 計算カラムの定義
- カラム計算の削除

▶ 計算カラムを定義するには

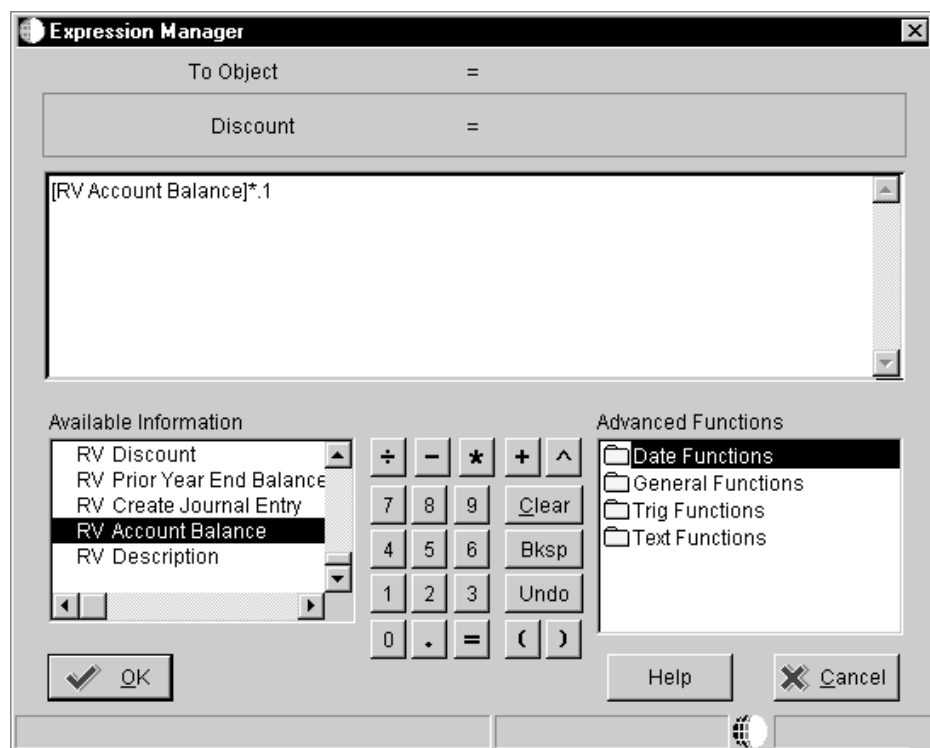
〈Report Design〉で、計算カラムを追加する表セクションを選択します。

1. 詳細セクションに、フィールド(通常、データ辞書または数字変数フィールド)を挿入します。

注:

変数フィールドの追加については「レポート・セクションのデータ・フィールドを追加または削除するには」を参照してください。

2. カラムを移動するには、新しい位置にドラッグします。
3. 新しく作成したカラムをクリックします。
4. [Column]メニューから[Define Calculation(計算の定義)]を選択します。



5. 〈Expression Manager〉で、次の手順に従って計算を定義してから[OK]をクリックします。
 - a. [Available Information(使用可能な情報)]リストのフィールドをダブルクリックする。
 - b. 電卓機能をクリックして計算式を作成する。
 - c. 計算式が完成するまでこれを繰り返す。

▶ カラム計算を削除するには

〈Report Design〉で、計算式が添付されているカラム変数をクリックします。

1. [Column]メニューから[Remove Calculation(計算の削除)]を選択します。
 〈Remove Calculation(計算の削除)〉フォームが表示され、このカラムの計算を削除するかどうかを尋ねられます。
2. [はい]をクリックします。

参照

- カラムへの計算の添付については「イベント・ルール割当ての作成」

記述カラムの理解

表セクションを使用してレポートを作成すると、[Description(記述)]カラムが自動的に組み込まれます。レポートを出力する際は、このフィールドのデータはレベル区切りフィールドとして指定したフィールドが基準になります。フィールドの記述が読み込まれない場合(フィールドにはデータ辞書のトリガーが必須)、フィールドのキーが表示されます。たとえば、レベル区切りフィールドが「会社 00001」の場合、トリガーが存在すれば「Financial Reporting Company」という記述が表示されます。それ以外の場合、キーの「00001」が表示されます。

下記の場合を除いて、表セクションの一番下のレベル区切りの部分ではこのカラムがロー記述となります。上位のレベル区切りでは、記述カラムはレベル区切り見出しまたはフッター・テキストです。

補助科目やコスト・オブジェクト、主科目・補助科目のフィールドに関連するレベル区切りについては、記述カラムには特殊な機能があります。次のいずれかのフィールドによるレベル区切りの結果として表セクションのローが表示されると、記述ローが自動的に表示されます。

- 補助元帳および補助元帳タイプ
- コスト・オブジェクトおよびコスト・オブジェクト・タイプ
- 主科目・補助科目および主科目・補助科目タイプ

▶ 記述カラムを手作業で作成するには

〈Report Design〉で、記述カラムを追加する表セクションを選択します。

[Column]メニューから[Create] - [Row Description Column(ロー記述カラム)]を選びます。

[Description]カラムが表示されます。カラムを移動するには、新しい位置にドラッグします。

▶ 記述カラムを削除するには

〈Report Design〉で、[Description]カラムを選択します。

[Edit]メニューから[Delete(削除)]をクリックします。

パーセント計算の定義

場合によっては、別のカラムの合計パーセントが必要となります。この方法はレポート全般について使われますが、頻度が最も高いのは損益計算書です。損益計算書の場合は、利益率などにパーセント計算値が使用されます。

次の図では、ローと収益率のカラムがレポートでどのように表示されるかを示します。

The screenshot shows the J.D. Edwards Report Design interface. The report title is 'Percent of Revenue Report'. It displays a table with three columns: 'Description', 'Account Balance', and 'Percent of Revenue'. The data is as follows:

Description	Account Balance	Percent of Revenue
Revenue		
Class 1	955,000.00	78.86
Class 2	256,000.00	21.14
Total Revenue	1,211,000.00	100.00

はじめる前に

- 次のいずれかを実行します。
 - 〈Director(ディレクタ)〉で、パーセント計算カラムを作成する。たとえば、勘定残高に基づいて財務レポートを作成する場合は、「収益に占める割合」というカラムを作成してください。カラムの作成については「表セクションのカラムの処理」を参照してください。
 - 〈Report Design〉で、数値変数カラムを作成する。数値変数カラムの作成については「データ・フィールドの理解」を参照してください。
- レポートにローを追加してください。分母として使用する 100%セルを作成するには、この処理が必要です。たとえば、売上上のローと売上合計のローを追加します。

▶ パーセント計算を定義するには

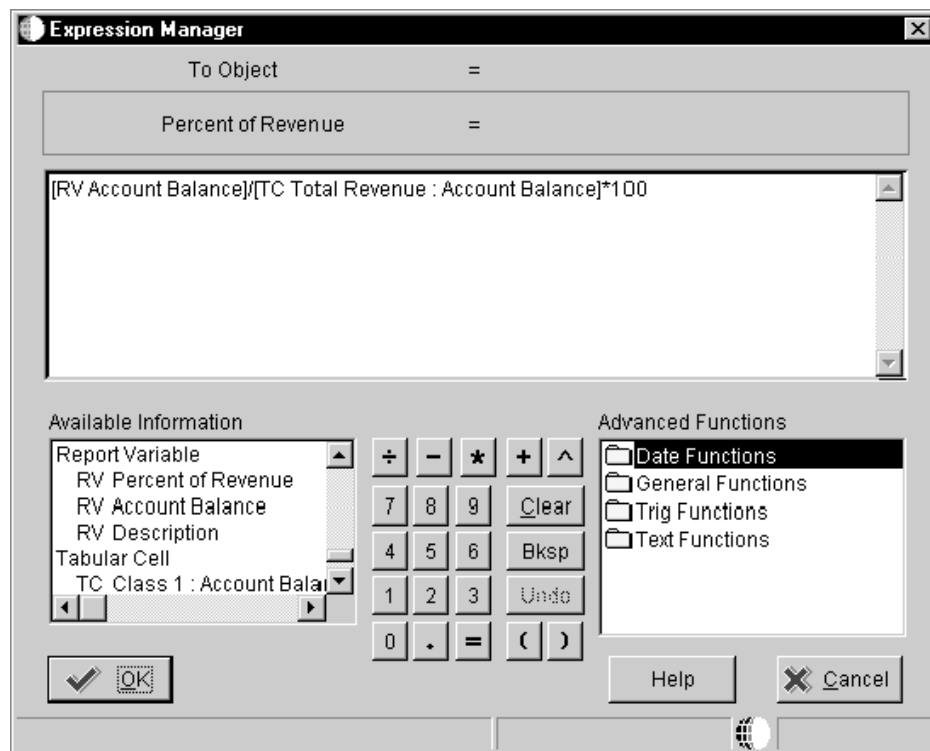
〈Report Design〉で、表セクションに適切なローを追加してから、パーセント計算用に作成したカラムをクリックします。

この例では[Percent of Revenue(収益に占める割合)]カラムという名前です。

1. [Column]メニューから[Define Calculation(計算の定義)]を選択します。
2. 〈Expression Manager〉で、パーセント計算を定義します。

たとえば、各収益に占める勘定残高の割合を計算するには、レポート変数(RV)の[Account Balance(勘定残高)]を表のセル[tabular cell (TC) Total Revenue: Account Balance *100]で割ります。

この計算式を下に示します。



3. [OK]をクリックします。

表セクションのローの処理

表セクションでは、ローは横方向のデータから構成されます。通常、ローには各データベース・レコードから読み込まれたデータが入りますが、ローを追加して下線やブランク行、特殊な計算などの詳細をレポートに加えることもできます。表セクションは、ローを定義できる唯一の詳細セクションです。どの場合も、ローを作成した後で必要な場所にドラッグすればローを移動できます。また、クリックして [Edit] メニューから [Delete] を選択すると、ローを削除することができます。

〈Report Design〉を使うと、次のタイプのローを追加できます。

- データ・ロー

データ・ローには、J.D. Edwards ソフトウェア・テーブルからのデータが含まれます。これは、カラム金額に関連付けられたデータ・フィールドのグループを表します。たとえば、ある範囲の項目についての収益を表すデータ・ローなどです。さらに、別のフィールド範囲の直接原価を表すローを加える場合もあります。ローを定義して、ローに入力するビジネス・ビューのデータを特定する必要があります。

- 計算ロー

計算ローには、他のローからの計算値が入ります。たとえば、収益および直接原価ローの粗利益の計算などです。

- 合計ロー

合計ローでは、特殊な計算を定義します。この計算では、ある範囲にあるローのすべての数値カラムを合計します。この合計は、合計計算範囲にあるローがそれ自体計算ローである場合に、これらのローを含んだり、除外する場合があります。

- 下線ロー

下線ローにより、下線を作成してレポートのさまざまなローを区別できます。

- 固定情報ロー

固定情報ローは、テキストのみを含みます。これは、ロー・グループの識別情報など、レポート上の情報を記述したり名前を付けるときに使用します。

- 自動生成されたロー

表セクションでは、ビジネスユニットの勘定科目表を定義するローや、複数のビジネスユニットからの勘定科目を合わせたローを生成することができます。さらに、さまざまな詳細レベルで勘定科目積上合計を計算するためのローを作成するオプションもあります。たとえば、ローを自動生成して、会社の現行月および前年度の勘定残高を基にした貸借対照表レポートを作成できます。

▶ データ・ローを追加するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Row(ロー)]メニューから[Create] - [Data(データ)]を選びます。
2. 〈Data Row Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)

Name(名称)は、〈Sum Row Properties(合計ロー・プロパティ)〉フォームの[Tabular Section - Row List(表セクション - ロー・リスト)]タブの[Name(名称)]フィールドに表示されます。
 - Description(記述)

記述は、レポートの[Tabular Section - Row List(表セクション - ロー・リスト)]タブの[Description]フィールドか、〈Sum Row Properties〉フォームの[Description]フィールドに表示されます。このテキストは、複数行にして記述を必要なだけ入力できます。レポートをインデントするには、テキストの前にスペースを入力してください。
3. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。
4. 〈Data Selection〉で、データ・ローに適用する特定の条件を定義して[OK]をクリックします。

ローをクリックして、[Row]メニューから[Define Data Selection(データ選択の定義)]を選択すると、データ選択を修正できます。
5. 必要に応じてデータ・ローを追加します。

処理した最後のローの下にローを直接追加するには、レポート・セクションで最後のローを選択してください。選択していることは黒い枠で示されます。

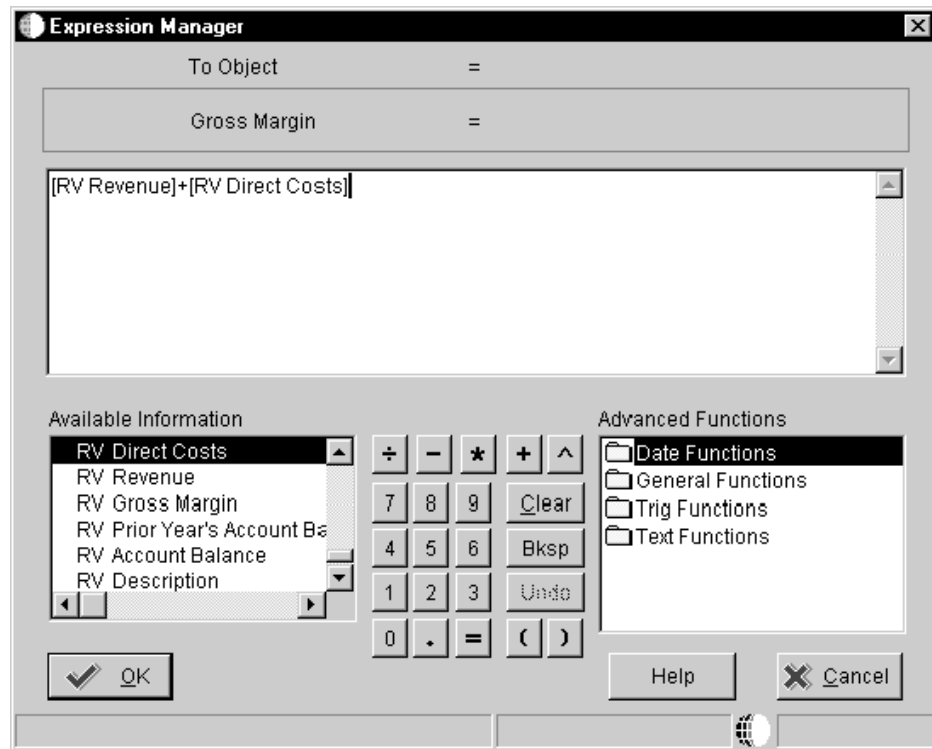
参照

- データの選択については「セクションに含めるレコードを選択するには」

▶ 計算ローを追加するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Row]メニューから[Create] - [Calculation]を選びます。
2. 〈Calculation Row Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
3. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。



4. 〈Expression Manager〉で、計算を定義して[OK]をクリックします。
5. 必要に応じて、計算ローを追加します。

処理した最後のローの下にローを直接追加するには、レポート・セクションで最後のローを選択してください。選択していることは黒い枠で示されます。

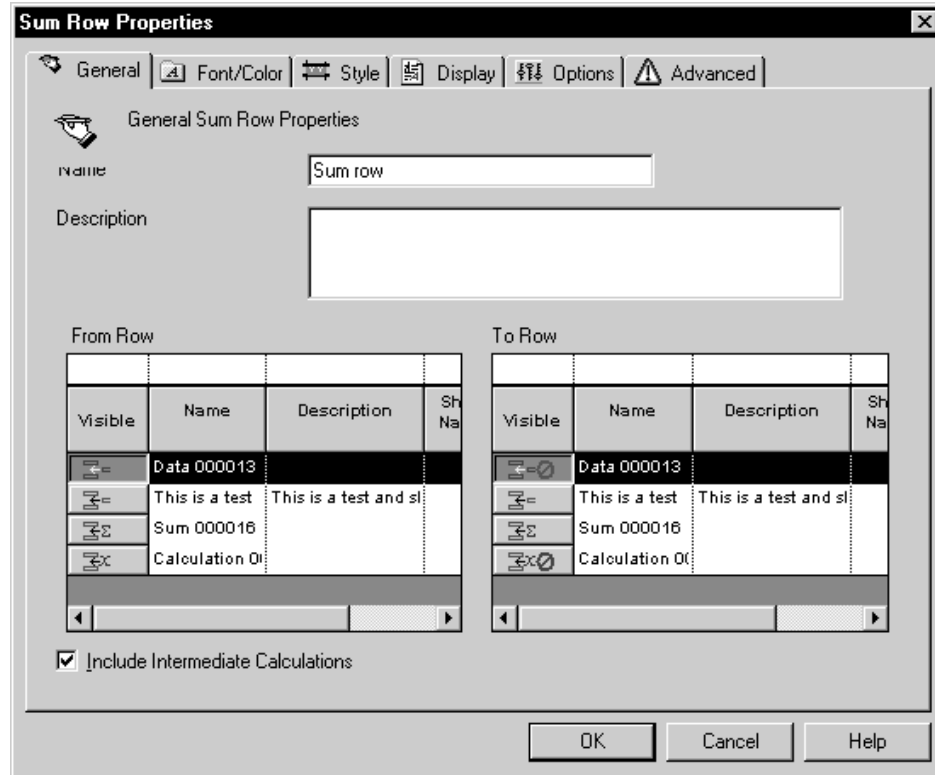
参照

- 計算ローへの計算の添付については「イベント・ルール割当てを作成するには」

▶ 合計ローを追加するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Row]メニューから[Create] - [Sum Row(合計ロー)]を選びます。



The image shows the 'Sum Row Properties' dialog box. It has a title bar with a close button. Below the title bar is a tabbed interface with tabs for 'General', 'Font/Color', 'Style', 'Display', 'Options', and 'Advanced'. The 'General' tab is selected. Inside the 'General' tab, there is a 'Name' field with the text 'Sum row' and a 'Description' field which is empty. Below these fields are two tables, 'From Row' and 'To Row'. Each table has four columns: 'Visible', 'Name', 'Description', and 'Sh Na'. The 'From Row' table contains four rows: 'Data 000013', 'This is a test', 'Sum 000016', and 'Calculation 0'. The 'To Row' table contains the same four rows. At the bottom of the dialog, there is a checkbox labeled 'Include Intermediate Calculations' which is checked. At the very bottom are three buttons: 'OK', 'Cancel', and 'Help'.

Visible	Name	Description	Sh Na
	Data 000013		
	This is a test	This is a test and sl	
	Sum 000016		
	Calculation 0		

Visible	Name	Description	Sh Na
	Data 000013		
	This is a test	This is a test and sl	
	Sum 000016		
	Calculation 0		

2. 〈Sum Row Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。

- Name(名称)
- Description(記述)

記述がレポートに表示されます。このテキストは、複数行にして記述を必要なだけ入力できます。レポートをインデントするには、テキストの前にスペースを入力してください。

- From Row(開始ロー)
ロー範囲の開始ローとして使用できるローのリスト。
- To Row(終了ロー)
ロー範囲の終了ローとして使用できるローのリスト。
- Include Intermediate Calculation(中間計算を含む)
中間計算ローを合計に入れるかどうかを選択します。

3. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。

4. 必要に応じて、合計ローを追加します。

処理した最後のローの下にローを直接追加するには、レポート・セクションで最後のローを選択してください。選択していることは黒い枠で示されます。

▶ 下線ローを追加するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Row]メニューから[Create] - [Underline(下線)]を選びます。
2. 〈Underline Row Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
3. 必要に応じてその他のプロパティを設定します。下線の色は[Font/Color(フォント/色)]タブで、幅や間隔は[Options(オプション)]タブでそれぞれ調整してください。
4. 必要に応じて下線ローを追加します。

処理した最後のローの下にローを直接追加するには、レポート・セクションで最後のローを選択してください。選択していることは黒い枠で示されます。
5. [OK]をクリックします。

▶ 固定情報ローを追加するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Row]メニューから[Create] - [Constant(固定情報)]を選びます。
2. 〈Constant Row Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
3. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。
4. 必要に応じて固定情報ローを追加します。

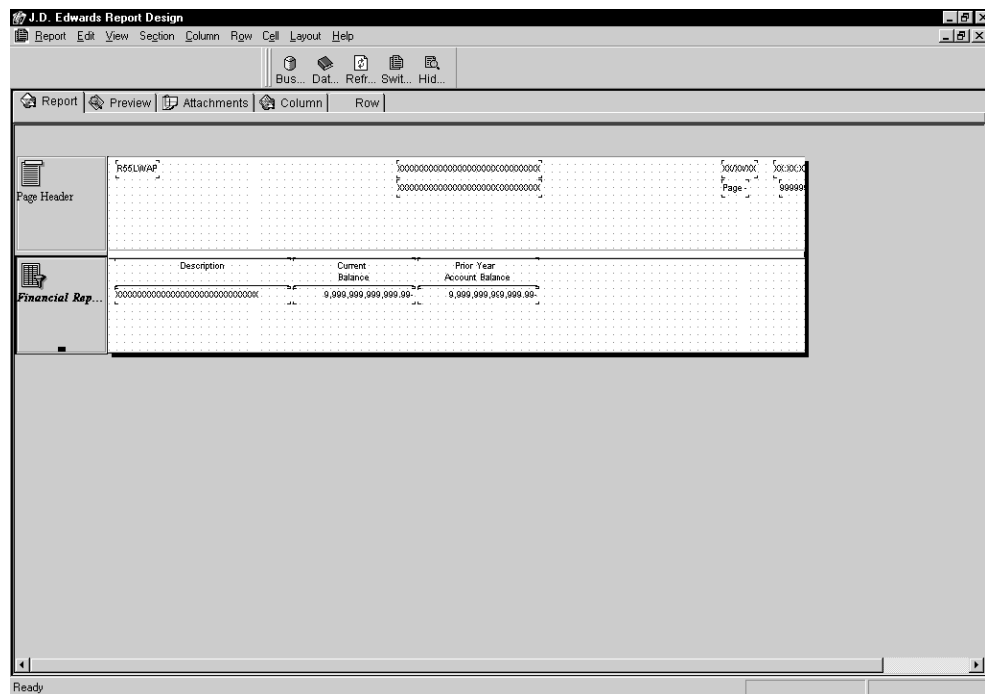
処理した最後のローの下にローを直接追加するには、レポート・セクションで最後のローを選択してください。選択していることは黒い枠で示されます。

▶ ローを自動生成するには

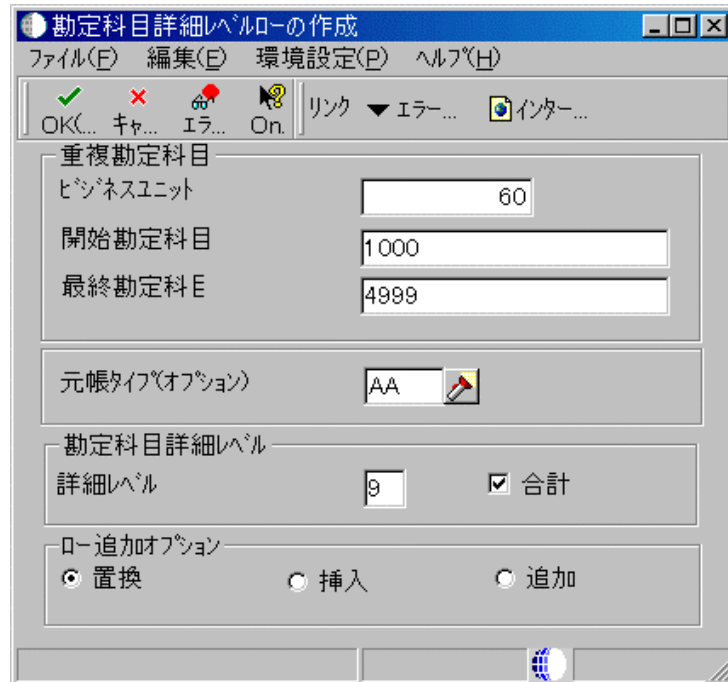
〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

注:

この例は、FINRPTAB(勘定残高)および FINRPTPC(前年度の勘定残高)に基づいた2つのスマート・フィールド・カラムが組み込まれた財務レポートを示しています。



1. [Row]メニューから[Automatic Row Generation(ローの自動作成)]を選択します。



2. 〈Financial Account Level of Detail Row Generation〉で、次のフィールドに入力して[OK]をクリックしてください。セクションの設計によっては、フォームで一部のフィールドが表示されないこともあります。
 - ビジネスユニット
ビジネスユニットと勘定科目範囲を入力できます。ビジネスユニット用の勘定科目表に基づいて、その勘定科目範囲内のすべてのロー・スベックが生成されます。
 - 開始勘定科目
[開始勘定科目]フィールドをブランクにすると、勘定科目は生成されません。
 - 終了勘定科目
[最終勘定科目]フィールドをブランクにすると、勘定科目は生成されません。
 - 元帳タイプ(オプション)
元帳タイプの指定がある場合、そのローのデータ選択に組み込まれます。
 - 詳細レベル
詳細レベル区切りの部分で、任意の勘定科目詳細レベル・ローを生成できます。デフォルトでは合計ローが生成されます。ローの金額は、条件設定で指定した勘定科目範囲に基づきます。
 - 合計
3. [Add Row Options]見出しで、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 置換
 - 挿入
 - 追加

生成されたローは、既存のローの下端に添付されるか、選択したローの後に挿入されます。そうでない場合は定義済みのローがすべて生成されたローに置き換わります。デフォルトでは、既存のローが置き換えられます。添付および挿入オプションは、複数の異なるビジネスユニットから構成される勘定科目構造を作成するのに便利です。

フィールド記述

記述	用語解説
開始勘定科目	勘定科目範囲の開始主科目。この範囲内にある勘定科目に転記された金額のみが配賦されます。
終了勘定科目	勘定科目範囲における終了主勘定科目を識別します。この範囲内の勘定科目に転記された金額のみが配賦されます。
元帳タイプ(オプション)	AA(実績金額)、BA(予算金額) AU(実績数量)などのレコードの属性(元帳タイプ)を示すユーザー定義コード(09/LT)。1つの取引に対して数量と金額、国内通貨と外貨など、元帳タイプ別に複数のレコードを持つことができるため、柔軟に取引を照会できます。

詳細レベル

総勘定元帳の勘定科目を詳細レベル別に集計して分類する番号。最も詳細度が高いのがレベルが 9 で、最も詳細度が低いのが レベル 1 です。レベル 1 と 2 は会社とビジネスユニット合計用に予約されています。レベル 8 と 9 は、作業原価システムの作業原価転記勘定に予約されています。これ以外に次のレベルがあります。

- 3 資産、負債、収益、費用
- 4 流動資産、固定資産、流動負債など
- 5 現金、売掛債権、棚卸資産、給与など
- 6 小口現金、銀行預金、売掛金など
- 7 小口現金 - 西日本支社、小口現金 - 九州支社など
- 8 さらに詳細なレベル
- 9 さらに詳細なレベル

詳細レベルの間をあけて勘定科目にレベルを割り当てないでください。詳細レベルが連続していないと、集計エラーを起こして正確な財務レポートが作成されない場合があります。

個々のセルのプロパティの一時変更

セルには、カラムとローが交差する部分の情報が入ります。セルの一時変更を定義して、そのセルのカラムおよびロー・スペックの結果であるセルのデータを一時変更できます。たとえば、特定のセルの情報を強調する場合、プロパティを一時変更したり、フォント・サイズを大きくしたり太字にできます。

〈Report Design〉では、一時変更が可能なセルは点線で囲まれています。次のロー・タイプの変数セルは一時変更できます。

- データ・ロー
- 計算ロー
- 固定情報ロー
- 下線ロー

▶ データ・ロー変数を一時変更するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Cell]メニューから[Cell Mode]を選択します。

[Cell Mode]がオンの場合、変数をクリックするとセルが黒い枠で囲まれます。[Cell Mode]がオフの場合、変数をクリックするとロー全体が黒いボックスで囲まれます。

2. 一時変更するデータ・ロー変数を含むセルをクリックします。
3. [Cell]メニューから[Create Override(一時変更の作成)] - [Data(データ)]を選択します。
4. 〈Cell Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
5. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。
6. 〈Data Selection〉で、データ一時変更に適用する条件を定義します。

7. [OK]をクリックして、表セクションのローを更新します。
セルを囲む点線は、一時変更を示します。

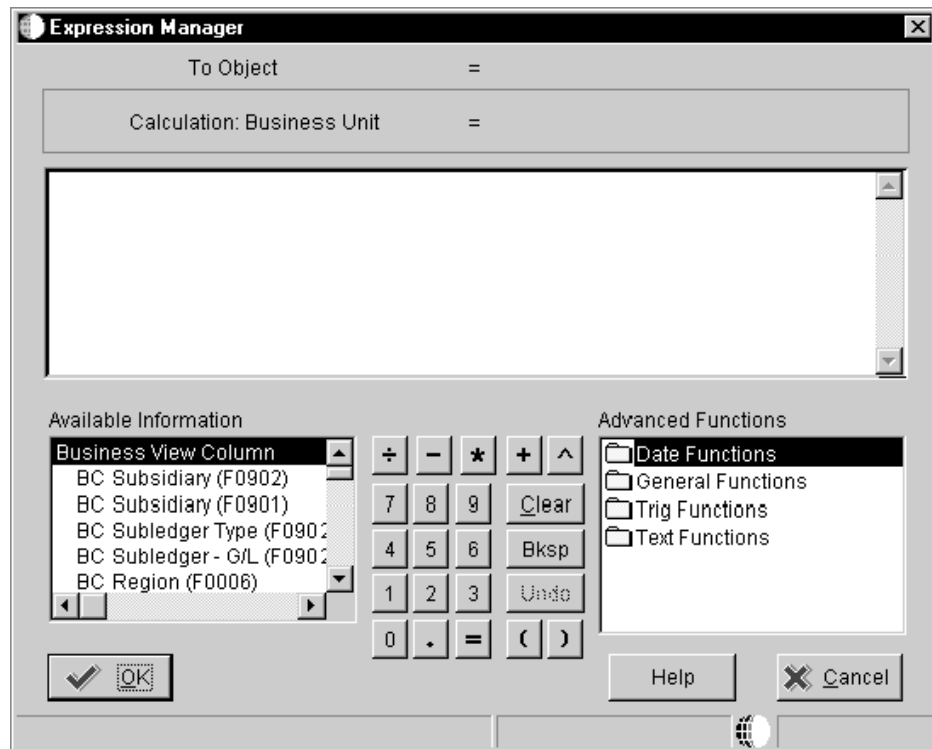
参照

- 「セクション・データ選択の定義」

▶ 計算ロー変数を一時変更するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Cell]メニューから[Cell Mode]を選択します。
2. 一時変更する計算ロー変数を含むセルをクリックします。
3. [Cell]メニューから[Create Override(一時変更の作成)] - [Calculation(計算)]を選択します。
4. 〈Cell Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
5. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。



6. 〈Expression Manager〉で、次の手順に従って計算を定義してから[OK]をクリックします。
 - [Available Information(使用可能な情報)]リストのフィールドをダブルクリックする。
 - 電卓機能をクリックして計算式を作成する。

- 計算式が完成するまでこれを繰り返す。

▶ 固定情報ロー変数を一時変更するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Cell]メニューから[Cell Mode]を選択します。
2. 一時変更する固定情報ロー変数のセルをクリックします。
3. [Cell]メニューから[Create Override] - [Constant(固定情報)]を選択します。
4. 〈Cell Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
5. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。

▶ 下線ロー変数を一時変更するには

〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。

1. [Cell]メニューから[Cell Mode]を選択します。
2. 一時変更する下線ロー変数を含むセルをクリックします。
3. [Cell]メニューから[Create Override] - [Underline(下線)]を選択します。
4. 〈Cell Properties〉の[General]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。
 - Name(名称)
 - Description(記述)
5. 必要に応じてその他のプロパティを設定して、[OK]をクリックします。

レポート・オブジェクトの外観の修正

セクションやカラム見出し、カラム変数、ランタイム・フィールド、固定情報など、レポート内のオブジェクトはそれぞれ独自のプロパティを持っています。オブジェクトの外観や機能を修正するには、プロパティを変更します。たとえば、カラム見出しのフォント・サイズを変更したり、特殊な会社の用語に合わせてテキストを変更できます。また、カラムやローの間隔、オブジェクトの配置を変更して、レポートのフォーマットも修正できます。

詳細セクションの記述の変更

〈Report Design〉の[Section Title]タブに表示される詳細セクションの名称は変更できます。

▶ 詳細セクションの記述を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、変更するレポートを表示します。

2. 変更する詳細セクションをダブルクリックします。
3. 〈Columnar Section〉の[General]タブで、[Description]フィールドに新しい名称を入力して[OK]をクリックします。

レポート・セクションの非表示

レポート・セクション全体を非表示にしたり、表示することができます。また、特定の条件によって詳細セクションの表示/非表示が切り替わるように設定することもできます。〈Report Design〉でレポート・セクションの表示/非表示を切り替えるには、[View(表示)]メニューから[Hide/Show Invisible Sections(不可視セクションの表示/非表示)]を選択します。これは出力するレポートには影響しません。

参照

- イベント・ルールの作成については「イベント・ルールの処理」

▶ 条件なしでレポート・セクションを表示/非表示にするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、セクションの表示/非表示を切り替えるレポートを表示します。
2. 変更するレポート・セクションをダブルクリックします。
〈Section〉フォームが表示されます。フォームとその名前は、選択したセクションのタイプによって異なる場合があります。
3. [Advanced]タブをクリックします。
4. [Visible(表示)]オプションを選択してレポート・セクションを表示するか、選択を解除してレポート・セクションを非表示にします。
5. [OK]をクリックします。

▶ 条件付きで詳細セクションを表示するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、詳細セクションを非表示または表示するレポートを表示します。
2. 条件付きのセクションを起動するセクションをクリックして、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。
3. 下向き矢印をクリックしてツールバーのプルダウン・メニューを開き、[Do Section]イベント・ルールを選択します。
4. [Insert]メニューから[IF/While]を選択して、条件付きセクションを表示する条件を定義します。
5. [If/While]ステートメントの下にカーソルを置いて、[Insert]メニューから[System Function]を選択します。
6. [Function Selection]タブで、[Section]フォルダから[Do Custom]セクションを選択します。
[Parameter Mapping(パラメータ・マッピング)]タブが表示されます。

7. レポート・セクションをダブルクリックして、条件付きで表示します。
[Parameters]テーブルの[Values]カラムでセクションが表示されます。
8. イベント・ルールを保存します。
9. 〈Report Design〉で、条件付きのセクションにするレポート・セクションをダブルクリックします。
セクション・タイプに応じて、該当するセクションのフォームが表示されます。
10. [Advanced]タブをクリックします。
11. [Conditional(条件付き)]を選択して、[OK]をクリックします。

レポート・セクション内または全体にわたるフィールド/カラムの位置合せ

レポート・セクションを作成する際、データ・フィールドまたはカラムが整列していない場合があります。〈Report Design〉プログラム(P00890)の位置合せオプションを使用すると、レポート出力の外観を調整できます。

データ・フィールドを整列させるには、次のガイドラインに従ってください。

- 位置揃えを行うオブジェクトを選択する前に、すべてのセクションをクリアする。
- 他のオブジェクトの整列基準となるオブジェクトを1つ指定する。この基準オブジェクトは黒の境界線、その他のオブジェクトはグレーの境界線で示されます。
- 黒の境界線は、現在選択しているデータ・フィールドを示す。
- 整列させる場合は、固定情報テキストや変数だけでなくオブジェクト全体を選択する。
- 切り離した固定情報または変数オブジェクトも基準オブジェクトとして使用できる。
- オブジェクトは同じセクション内か、複数のセクションにわたって選択できる。
- フィールドは位置合せの対象になるが、フィールド内のテキストは対象でない。フィールドを中央に揃える場合、オブジェクトはフィールド内のテキストの長さではなく、フィールドの長さによってセンタリングされるため注意してください。
- 整列処理は表セクションのローには使用できない。

他のカラムやデータ・フィールドに合わせてカラムを整列させる際には、次のガイドラインに従ってください。

- 表セクションやカラム・セクションのカラムをグループ・セクション・オブジェクトに合わせて整列するには、表セクションやカラム・セクション内のカラムを基準にする。
- 表セクションやカラム・セクションのカラムを、他の表セクションやカラム・セクション内のカラムに合わせて整列する場合、整列させるカラムは各表セクションまたはカラム・セクションにつき1つしか選択できない。

参照

- データ・フィールドのテキスト位置揃えについては「レポート・オブジェクトのテキスト位置揃えを変更するには」

▶ セクション内または複数のセクションにわたってフィールド/カラムの位置を合わせるには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フィールドまたはカラムの位置を揃えるレポートを表示します。
2. 位置を揃えるオブジェクトを選択します。
3. [Ctrl]キーを押した状態で、整列させるオブジェクトをクリックします。
選択したオブジェクトは、グレーまたは黒の境界線で表示されます。黒の境界線を持つオブジェクトが基準となります。最後にクリックしたオブジェクトが基準オブジェクトです。
4. [Layout(レイアウト)]メニューから[Align(整列)]を選択します。
5. [Align Objects]で、[Left to Right]見出しにある次のいずれかのオプションをクリックします。
 - Left Edges(左端)
 - Center(中心)
 - Right Edges(右端)
 - No Changes(変更なし)
6. [Top to Bottom]見出しで、次のオプションのうち 1 つをクリックします。
 - Top Edges(上端)
 - Middle(中央)
 - Bottom Edges(下端)
 - No Changes(変更なし)

注:

次のオプションは、[Apply to(適用先)]の[Current Section(現在のセクション)]を選択した場合にのみ表示されます。

7. [Apply to]見出しで、次のオプションのうち 1 つをクリックします。
 - Current Section(現在のセクション)
 - All Sections(すべてのセクション)
8. [Apply]をクリックします。
変更はその場で表示されます。
9. 〈Align Objects(オブジェクトの整列)〉を開けた状態で、完全に要望を満たすまで様々なオプションをクリックして[Apply(適用)]をクリックします。
10. オブジェクトを整列できたら[OK]をクリックします。

フィールドの長さおよびカラム幅の変更

レポートの変数フィールドおよびシステム・フィールドの多くは、長さを変更できます。また、カラム見出しおよび関連する変数の幅も変えられます。どのような場合も、テキストはデフォルトで折り返されます。つまり、フィールドの長さがテキストよりも短いときには可能な字数分が表示され、残りは次の行に折り返されます。この機能をオフにして、フィールドの長さにかかわらず、テキストをすべて 1 行に表示することもできます。

フィールドの長さは、カラム幅と同じようには変更できません。フィールドの長さを変更するとは、バッチ・エンジンによりそのフィールドに入る文字数を変更することです。カラム幅を変更するとは、表示する間隔の値を変更することです。フィールドの長さが 30 でカラム幅が非常に小さい場合、表示される文字が 5、6 文字ということもあります。しかし、そのフィールドにはバッチ・エンジンにより 30 文字が入ります。逆にフィールドの長さが 5 でカラム幅がとても大きい場合は、5 文字だけが表示されてその後にスペースが大量に入ります。

▶ フィールドの長さを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フィールドの長さを変更するレポートを表示します。
2. 変更するフィールドをダブルクリックします。
3. プロパティのフォームで、[Display] タブをクリックします。

プロパティ・フォームに [Display] タブがない場合は、フィールドの長さは変更できません。

4. [Display Length (表示する長さ)] フィールドに値を入力するか、矢印ボタンを使用して長さを調整します。
5. [OK] をクリックします。

▶ カラム幅を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フィールドの長さを変更するレポートを表示します。
2. カラム上部をクリックします。

注:

選択範囲の右端に小さな黒いボックスがあれば、そのオブジェクトのサイズを手作業で変更できます。

3. カーソルを黒いボックスの上に合わせると、カーソルの形が左右両方に矢印のついた線になります。
4. ボックスをドラッグしてカラムが適切なサイズになったら、マウス・ボタンを放します。

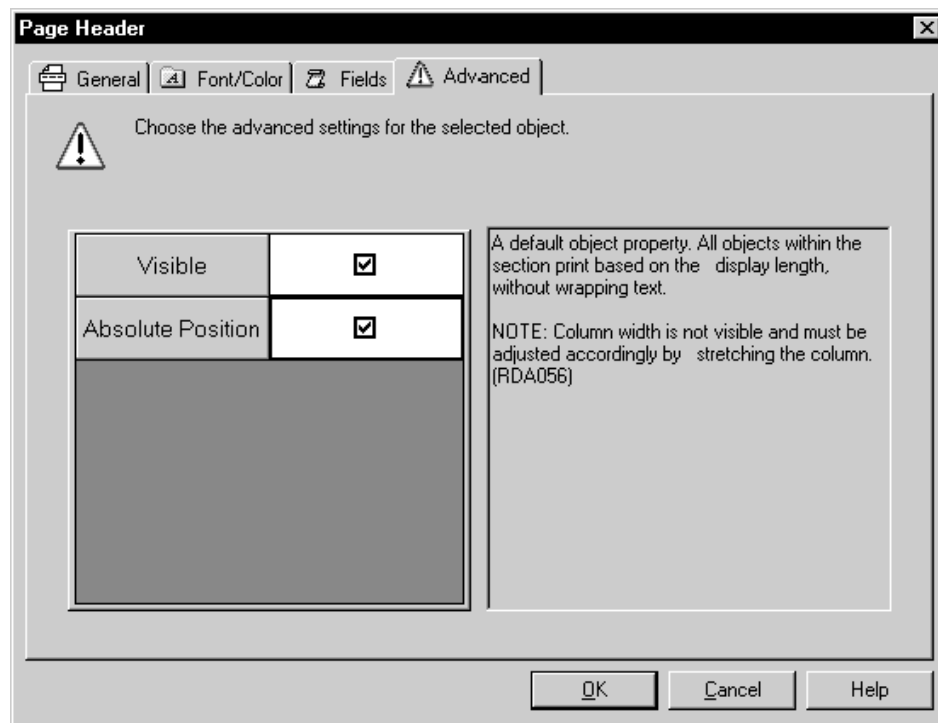
▶ テキスト折返しをオン/オフにするには(絶対位置)

注:

個々のフィールドに対してテキスト折返し機能をオン/オフにはできませんが、レポート・セクション全体についてはオン/オフの切替えが必須です。また、カラムにはテキスト折返しを適用できません。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フィールドの長さを変更するレポートを表示します。
2. テキスト折返し機能を設定するセクションをダブルクリックします。



3. セクションのフォームで、[Advanced]タブをクリックします。
4. [Absolute Position]オプションを選択または解除して、テキスト折返しを無効または有効にします。

[Advanced]タブに[Absolute Position]がない場合は、そのセクションについてはテキスト折返しをオフにできません。
5. [OK]をクリックします。

カラム/ローの間隔の変更

すべてのカラム間のスペースを調整したり、個々のカラム(論理データ・グループ)の間に目に付くように隙間を入れることができます。

ロー間隔を変更すると、レポートを見やすくなります。

▶ カラム間隔を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、カラム間隔を変更するレポートを表示します。
2. カラムのプロパティを変更するカラム・セクションまたは表セクションをクリックします。
3. [Layout]メニューから[Spacing(間隔設定)]を選択します。
選択したセクションに応じて、該当するセクション間隔設定フォームが表示されます。
4. [Column Spacing(カラム間隔)]タブをクリックし、次のいずれかを実行してカラムの間隔を設定します。
 - [Select All Columns(すべてのカラムを選択)]ボタンをクリックして、セクション内の全カラムにスペース設定を適用する。
 - 間隔を設定する特定のカラムをグリッドから選択する。
5. [Space before selected columns(選択カラムの前の間隔)]フィールドで、カラムの前に表示するスペース数を設定します。デフォルトは 5 スペースです。
6. [OK]をクリックします。

▶ カラム・セクションのロー間隔を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、ロー間隔を変更するレポートを表示します。
2. 〈Report Design〉で、変更するカラム・セクションを選択します。
3. [Layout]メニューから[Spacing]を選択します。
4. 〈Columnar Section Spacing(カラム・セクション間隔設定)〉フォームで、[Header to Detail(見出し - 詳細間)]または[Detail to Detail(詳細 - 詳細間)]オプションをクリックします。
 - Single(1 行)
 - Single + Half(1.5 行)
 - Double(2 行)

注:

CSV(カンマ区切り)形式のファイルでは、1行分のスペースしか入れられません。ライン・プリンタを使用する場合は、1行および2行分のスペースのみ選択できます。CSV形式のファイルおよびライン・プリンタによる印刷については「レポートの投入および印刷」を参照してください。

- Single(1行)
- Single + Half(1.5行)
- Double(2行)

5. [Apply]をクリックして[OK]をクリックします。

▶ **追加ローのある表セクションのロー間隔を変更するには**

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、ロー間隔を変更するレポートを表示します。
2. 上部に間隔を空けたい表セクション中のローをダブルクリックします。
3. [Row Properties]で、[Options]タブをクリックします。
4. [Space Before]フィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

フォント・プロパティの変更

フォントとは、印刷用文字のセットのことで、Courier New や Arial などのフォントがあります。通常、フォントのセットには太字や斜体なども含まれます。位置揃えや間隔設定といったプロパティは、フォントの一部とは見なされず、個別にレポートのテキストに適用できます。1つのレポートに複数のフォントを使用できます。一部のフォントは PDF や PostScript、PCL フォーマットのファイルに変換できます。ライン・プリンタでは、使用できるフォント・タイプが限られます。

大きく分けて2種類のフォントがあります。

- プロポーショナル・フォント
- 非プロポーショナル・フォント

プロポーショナル・フォントとは、文字によってピッチ(幅)が異なるフォントです。文字の間隔がプロポーショナルになっている場合、「l」は「q」よりも幅が小さく、「m」は「I」よりも幅が大きくなります。プロポーショナル・フォントには、Arial および Times New Roman があります。これらのフォントでは見た目の美しい書類が作成できますが、文字幅がそれぞれ異なるために位置揃えが難しくなることもあります。

非プロポーショナル・フォントとは、すべての文字幅が同じフォントです。タイプライターやライン・プリンタのほとんどが、固定幅のフォントを使用します。非プロポーショナル・フォントには、Courier New および MS Gothic (MS ゴシック)などがあります。

非プロポーショナル・フォント W i n d o w s

プロポーショナル・フォント W i n d o w s

PDF ファイルの生成、PostScript、および PCL 変換ではどのフォント・サイズもサポートしています。ライン・プリンタの場合は、サイズ 10 の非プロポーショナル・フォントで PDF ファイルを生成するようお勧めします。

〈Report Design〉がサポートする 14 種類の基本フォントを次の表に示します。「X」はサポート対象で、ブランクはサポートしていません。

フォント	Postscript	PCL	ライン・ プリンタ	PDF
Courier New	X		X	X
Courier New - 太字	X			X
Courier New - 斜体				
Courier New - 太字・斜体				
Arial	X	X		X
Arial - 太字	X			X
Arial - 斜体				
Arial - 太字・斜体				
Symbol				X
Times New Roman	X	X		X
Times New Roman - 太字	X			X
Times New Roman - 斜体				
Times New Roman - 太字・斜体				
ZapfDingbats				X

〈Report Design〉がサポートする 14 の基本フォント、および有効なプリンタのタイプは次のとおりです。

フォント	Postscript	PCL	ライン・プリンタ	PDF
Courier New	X		X	X
Courier New – 太字	X			
Courier New – 斜体				
Arial				
Arial – 太字	X			X
Arial – 斜体				
Arial – 太字・斜体				
Symbol				X
Times New Roman	X	X		X
Times New Roman – 太字	X			X
Times New Roman – 斜体				
Times New Roman – 太字・斜体				
Zapf Dingbats:				X

ダブル・バイト・フォント

ダブル・バイト環境では、UBE(ユニバーサル・バッチ・エンジン)および Output Management(出力管理)で、フォントに特殊な処理が実行されます。〈Report Design〉では、システムで使用可能な任意のフォントを選択して、レポートやセクション、オブジェクト・レベルに割り当てることができます。簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語については、PDF でサポートしているのは 1 種類のフォントのみですがフォント・サイズは変えられます。ただし、ダブル・バイト環境では PDF ファイル作成時に次のフォントのみがサポートされます。

言語	フォント名
簡体字中国語	STSong-Light-Acro
繁体字中国語	Mhei-Medium-Acro
韓国語	HYGothic-Medium-Acro
日本語	HeiseiMin-W3-Acro、MS Gothic (TrueType フォント)

日本語、簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語では PCL はサポートしていません。

バーコード・フォント

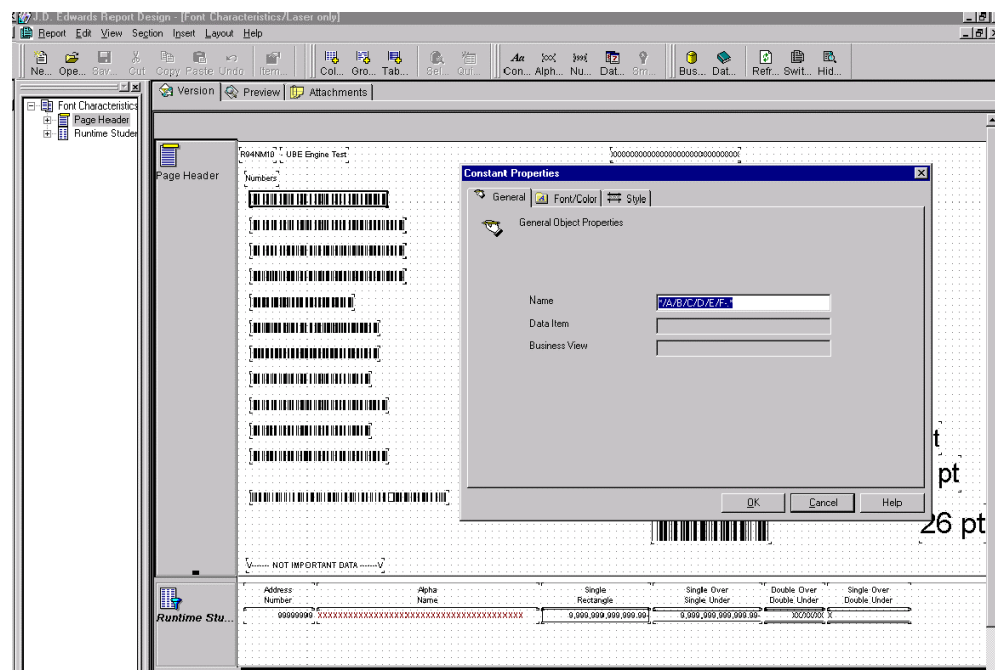
〈Report Design〉は、PCL と PostScript 変換について Code 39 のフォントをサポートしています。TrueType フォント名は、「BC C39 3 to 1 Medium」です。バーコード・フォントは〈Report Design〉で表示したり、プレビューして印刷できます。サイズを変更できる PCL フォントは販売されていないため、PCL ではサイズ固定のフォントのみが使用できます。

PostScript の推奨フォント・サイズは 8 ポイントから 24 ポイントです。

バーコードの処理

バーコード・フォントを使用して、レポートにバーコードを作成できます。〈Report Design〉には、レポートおよびバッチ・ジョブ出力用に基準バーコード機能があります。TrueType のバーコード・フォントをすべて使用できます。バーコードは PCL またはポストスクリプト対応プリンタで印刷します。

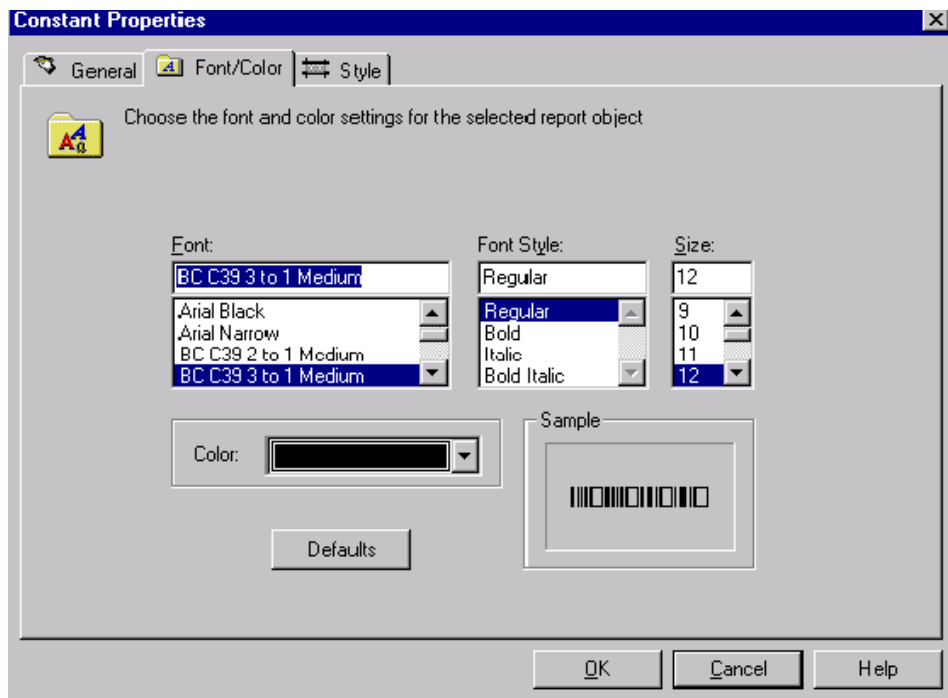
バーコードを指定するには、固定情報プロパティにそのバーコードのエンコーディング情報を入力します。エンコーディングは*(アスタリスク)とその後に続く文字と数字からなり、システムにこの情報がバーコードであることを知らせます。



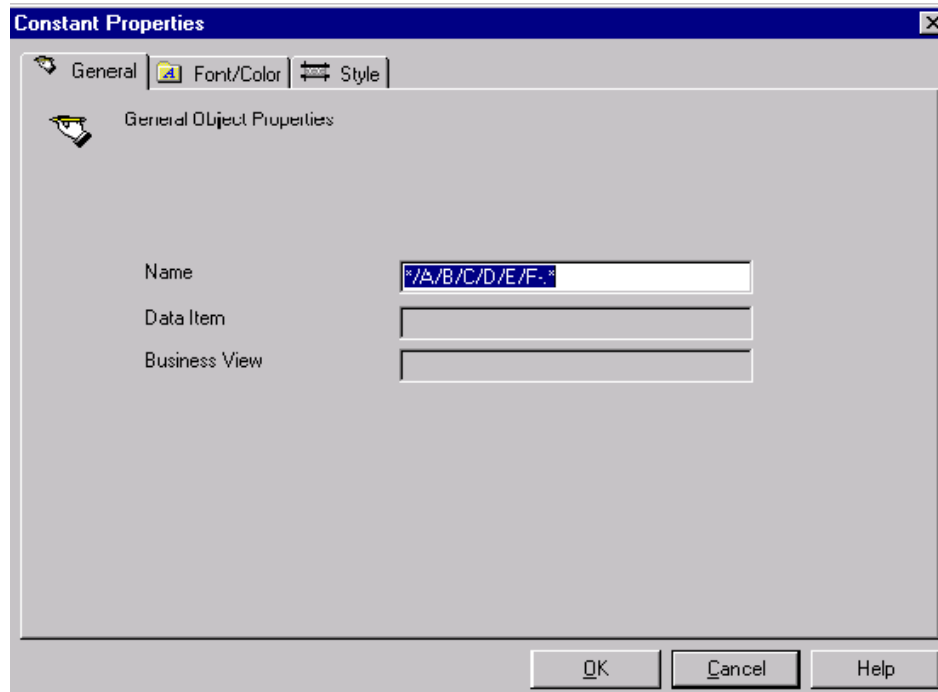
▶ バーコード・フォントを使用してオブジェクトを作成するには

〈Report Design〉で、固定情報をダブルクリックします。

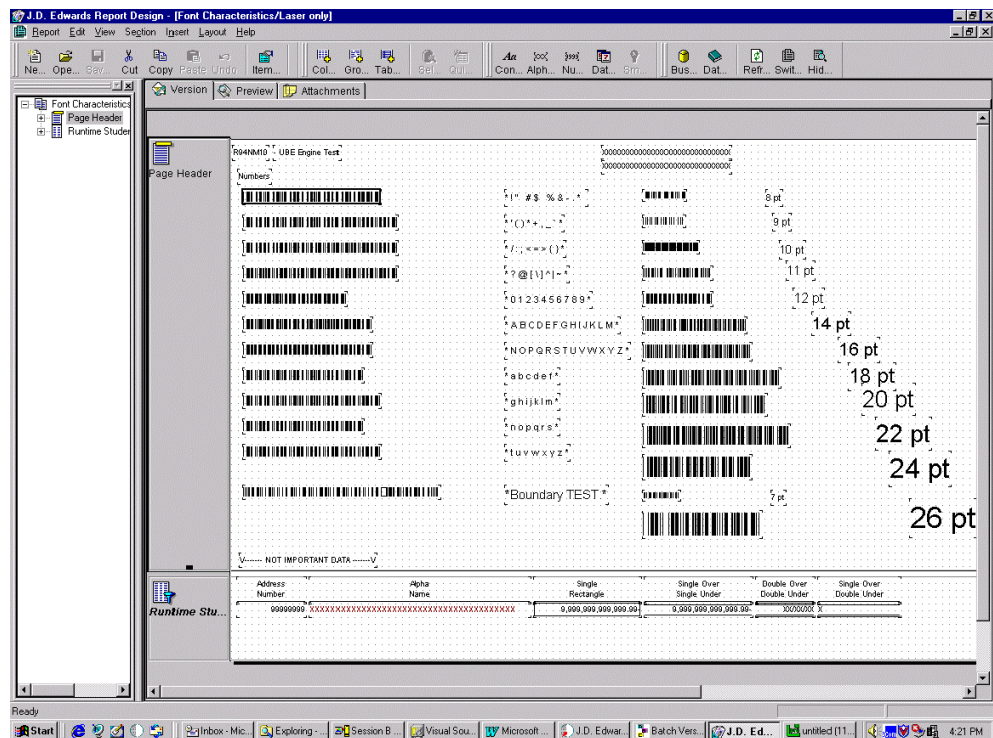
1. 〈Constant Properties〉で、[Font/Color]タブをクリックします。
2. 次のフィールドに値を入力します。
 - Font(フォント)
「BC C39 3 to 1 Medium」など、バーコード・フォント名を入力します。
 - Font Style(フォント・スタイル)
 - Size(サイズ)
変更が必要な場合には、フォントの表示サンプルを確認できます。



3. [General(一般)]タブをクリックします。

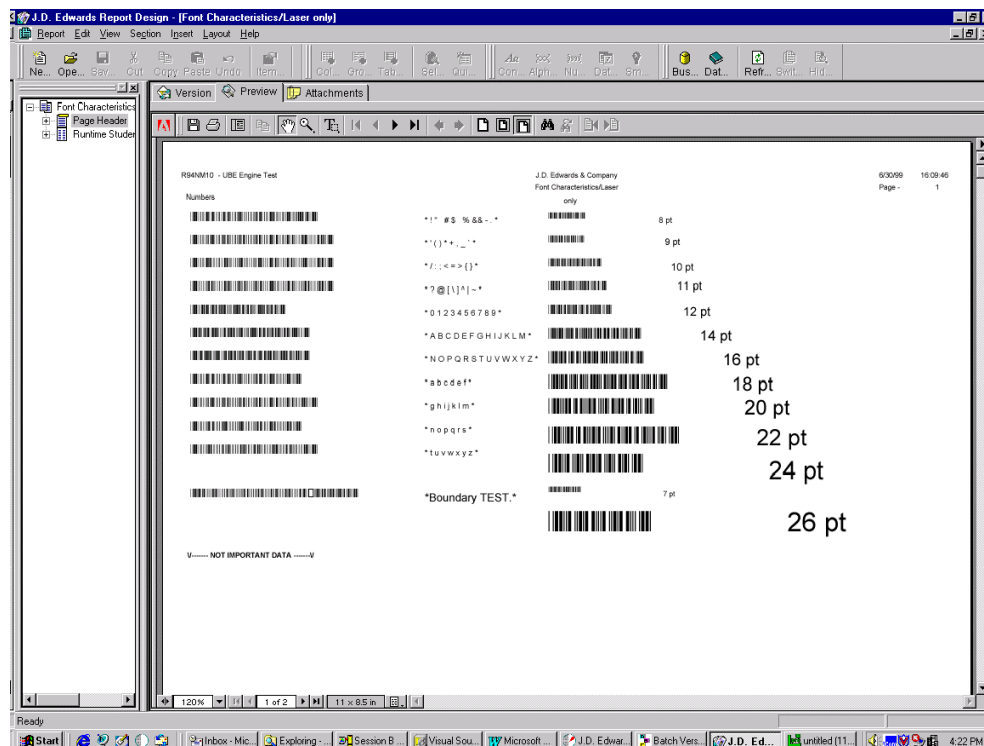


4. バーコード用の正しいエンコーディングの順序を次のフィールドに入力して[OK]をクリックします。
 - Name(名称)
〈Report Design〉でバーコードを参照できます。次の図のようになります。



5. プレビュー・モードで PDF ファイルを参照してバーコードを表示します。

ジョブを投入すると、〈Job Submission(ジョブの投入)〉フォームにバーコードが表示されます。



レポートにバーコードを設定したら、ポストスクリプトまたは PCL プリンタで印刷する前に、プリンタのフォント名と TrueType フォント名を〈バーコード・サポート〉プログラムを使用して実在のプリンタに関連付ける必要があります。

6. 〈バッチ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコードのサポート〉を選択して、次のフィールドに値を入力します。

- プリンタ名
- TrueType フォント名
- プリンタ・フォント名

プリンタ・フォント名は、「Code39Three」などフォント・ベンダーが付けた名称です。

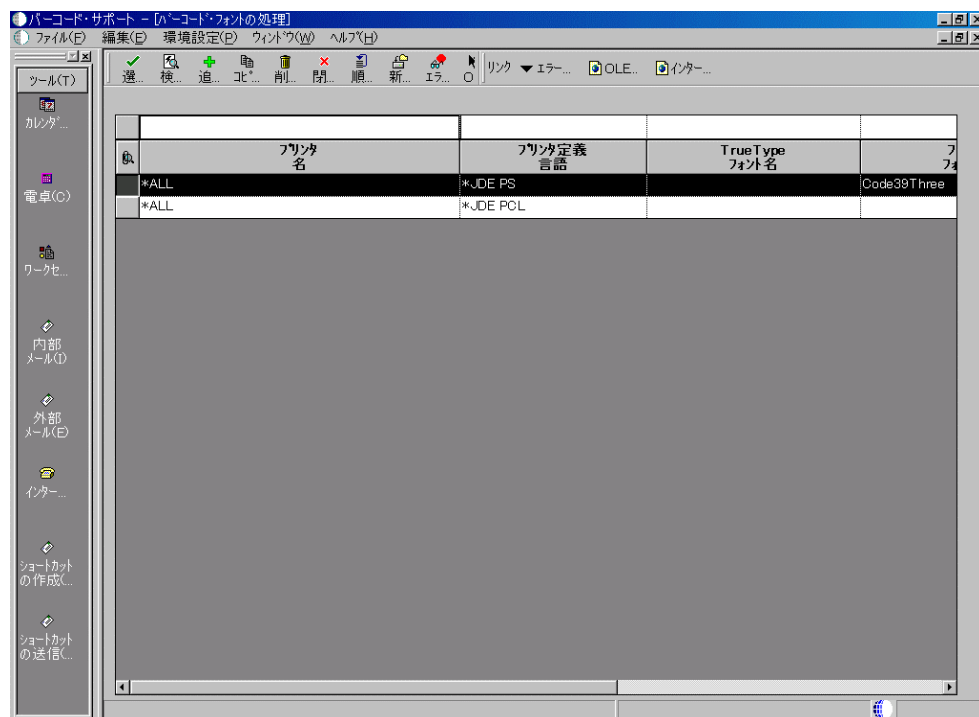
- プリンタ定義言語

PCL プリンタで印刷する場合は、次のフィールドに値を入力してください。

- Symbol Set ID(記号設定 ID)

注:

サイズ変更が可能な PCL の TrueType のバーコード・フォントは販売されていないため、PCL ではサイズ固定のフォントのみ使用できます。ポストスクリプトの場合、フォント・サイズは 8 から 24 までを使用してください。



バーコードの設定を終えたら、スキャナを使用してバーコードをテストできます。

色

表示用にはフォントのダイアログから自由に色を選択できますが、印刷の場合は PCL で 8 色、PostScript で 16 色、ライン・プリンタで黒のみをサポートしています。PostScript と PDF の生成では RGB モデル、PCL ではシンプル・カラー RGB モデル(8 色のみ)をそれぞれ使用します。

サポートされる色については次の表を参照してください。X がサポートしている色で、ブランクはサポートしていないことを示します。

フォント色	PostScript	PCL	ライン・プリンタ	PDF
Black(黒)	X	X	X	X
Blue(青)	X	X		X
Cyan(水色)	X	X		X
Dark Blue(濃い青)	X			X
Dark Cyan(濃い水色)	X			X
Dark Green(濃い緑)	X			X
Dark Gray(濃い灰色)	X			X

Dark Magenta (濃い紫)	X		X
Dark Red (濃い赤)	X		X
Green (緑)	X	X	X
Light Gray (明るい灰色)	X		X
Magenta (紫)	X	X	X
Olive Green (オリーブ)	X		X
Red (赤)	X	X	X
Yellow (黄)	X	X	X
White (白)	X	X	X

▶ フィールドのフォント・プロパティを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを表示して変更するフィールドを選択します。
2. 変更するフィールドを右クリックしてポップアップ・メニューから [Properties (プロパティ)] を選択します。

フィールド・タイプに応じて、該当するプロパティのフォームが表示されます。

3. [Font/Color] タブをクリックして、次の見出しのいずれかを選択します。

- Font (フォント)
- Font Style (フォント・スタイル)
- Size (サイズ)
- Color (色)

セクションの全フィールドのフォント設定をデフォルトに戻すには、[Defaults] をクリックします。

4. すべての項目を選択したら [OK] をクリックします。

▶ レポート・セクションの全フィールドのフォント・プロパティを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを表示して変更するレポート・セクションをダブルクリックするか、セクションをクリックして[Section]メニューから[Section Properties]を選択します。
2. 選択フォームで、[Font/Color]タブをクリックして次のいずれかの見出しのオプションを選択します。

- Font(フォント)
- Font Style(フォント・スタイル)
- Size(サイズ)
- Color(色)

セクションの全フィールドのフォント設定をデフォルトに戻すには、[Defaults]をクリックします。

このフォームでの変更内容は、個別に変更したセクションのフィールド以外のすべてのテキストに影響します。個々の設定を一時変更して変更内容をセクションのすべてのフィールドに適用するには、[Apply settings to all Objects]を選択します。

3. すべての項目を選択したら[OK]をクリックします。

▶ レポートの全フィールドのフォント・プロパティを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを表示し、[File]メニューから[Report Properties]を選択します。
2. 〈Properteies〉で、[Font/Color]タブをクリックして次のいずれかの見出しのオプションを選択します。

- Font(フォント)
- Font Style(フォント・スタイル)
- Size(サイズ)
- Color(色)

レポートの全フィールドのフォント設定をデフォルトに戻すには、[Defaults]をクリックします。

このフォームでの変更内容は、個別に変更したレポートのフィールド以外のすべてのテキストに影響します。個々の設定を一時変更して変更内容をレポートのすべてのフィールドに適用するには、[Apply settings to all Objects]を選択します。

3. すべての項目を選択したら[OK]をクリックします。

テキスト位置揃えの変更

位置揃えとは、テキスト行を縦にどのように並べるかという意味です。カラムおよびほとんどの変数内のテキストの位置を調整できます。ただし、固定情報についてはテキストの位置を揃えることはできません。〈Report Design〉では、次の 3 つの方法の 1 つを選択してテキストの位置を揃えることができます。

- Right alignment (右揃え)
- Left alignment (左揃え)
- Center alignment (中央揃え)

位置揃えはオブジェクトのフレームを基準に行われます。たとえば、テキストを中央に揃える場合、ページの中央ではなくフレームの中央が基準になります。パッチ・エンジンは、すべてのフォントと言語について左揃えと中央揃えをサポートしています。

中国語、日本語、韓国語の中で、右揃えに対応しているのは日本語のサイズ 7、8、9 の MS Gothic (MS ゴシック) のみです。中国語と韓国語は右揃えに対応していません。

〈Report Design〉では、バーコードは左揃えにする必要があります。

参照

- レポート・オブジェクトの位置合せについては「レポート・セクション内または複数のレポート・セクションにまたがったフィールド/カラムの位置合せ」

▶ テキスト位置揃えを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを選択して、テキストの位置揃えを指定するフィールドをダブルクリックします。
2. プロパティのフォームで、[Display] タブをクリックします。
3. スタイルを選択するか、[Defaults] をクリックして設定をデフォルトに戻し、[OK] をクリックします。

数値フォーマットの変更

〈Report Design〉では、表示する小数部の桁数を設定できます。編集コードを使用して、カンマの使用やプラス/マイナスの値の表示、金額の表示形式を設定することができます。

注:

プラス/マイナスの値の表示は、処理オプションを使って設定することもできます。処理オプションを設定すると、〈Report Design〉を使った設定が一時変更されます。

参照

- 10 進位取りの変更については「10 進位取りの変更」

▶ 数値の表示形式を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを選択して、数値の設定を変更するフィールドをダブルクリックします。
2. プロパティのフォームで、[Display]タブをクリックします。
3. [Display Length]フィールドに桁数を入力するか、矢印ボタンを使用して桁数を調整します。

注:

通貨の設定がシステムで有効になっている場合は、表示小数点以下桁数の設定は機能しません。

4. [編集コード]フィールドが表示されている場合は、ビジュアル・アシストを使用してフォーマット設定を選択します。
5. オブジェクトの設定をデフォルトに戻すには、[Defaults]をクリックします。
6. すべての項目を選択したら[OK]をクリックします。

参照

- 編集コード・フィールドの記述については「編集コード・テーブル」

ラインとボックスの関連付け

ほとんどのフィールドはボックスとして囲むことができます。1 重線か 2 重線をフィールドの上または下に引くこともできます。カラムまたはレポート・セクション全体をボックスで囲むことはできません。

▶ ラインとボックスを関連付けるには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを選択し、ボックスで囲むか、ラインを引くフィールドをダブルクリックします。
2. プロパティのフォームで、[Style]タブをクリックします。
3. フォームのその他のオプションを選択可能にするには、[No Lines(ラインなし)]の選択を解除します。
4. フィールドをボックスで囲むには、[Single Rectangle(1 重線ボックス)]を選択します。それ以外の場合、希望するラインのスタイルを選択してください。

選択した内容はフォームに表示されます。

5. 選択を終えたら[OK]をクリックします。

ページ区切りの挿入

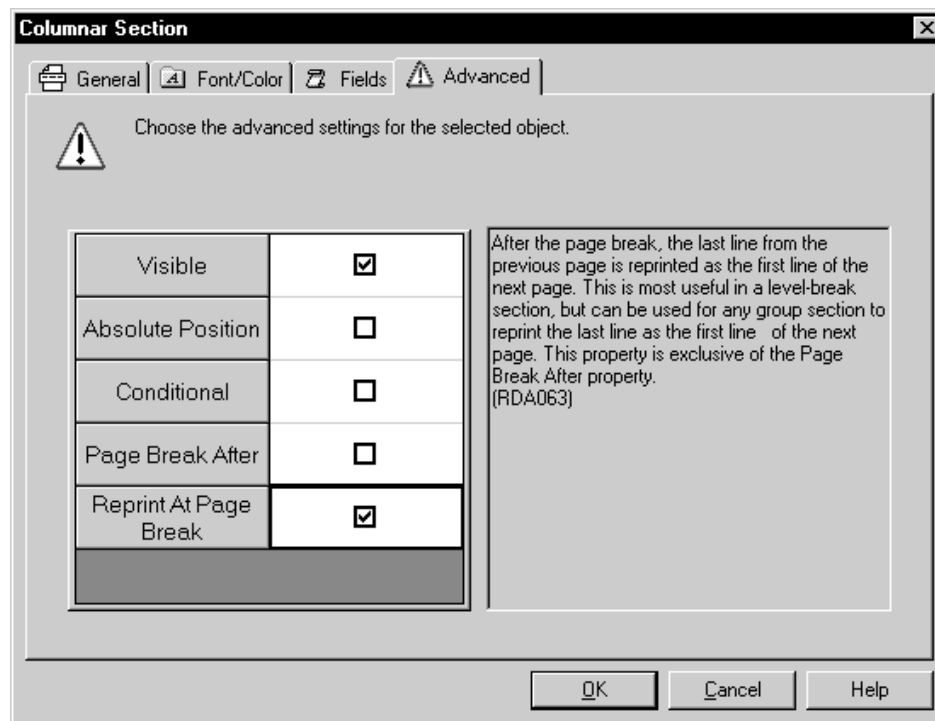
カラムおよびグループ・セクションについては、ページの最終行を次のページに再印刷できます。

手作業でページ区切りを詳細セクションおよびレポート・ヘッダーの後に挿入することができます。こうすると、現在のページが終わったところで印刷を停止し、次のページから再開します。ただし、この2つの機能は同時には使用できません。

▶ ページの最終行を次のページの1行目に印刷するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを選択して、設定するグループまたはカラム・セクションをダブルクリックします。

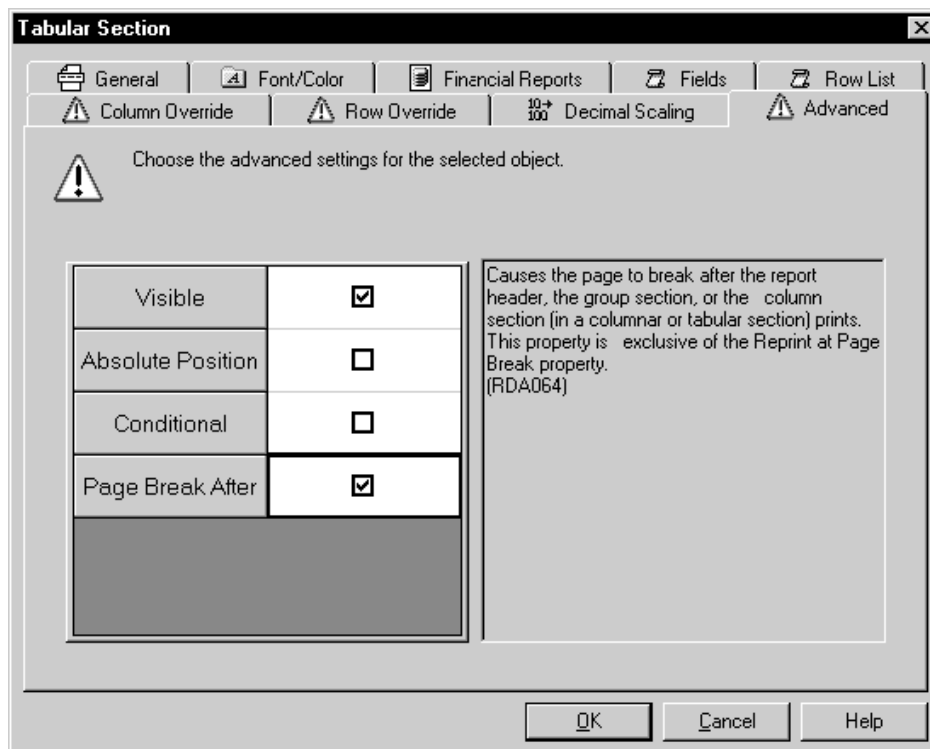


2. セクションのフォームで、[Advanced]タブをクリックします。
3. [Reprint At Page Break(ページ区切りで再印刷)]を選択して、[OK]をクリックします。

▶ 手作業によりページ区切りを挿入するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを選択して、設定する詳細またはレポート・ヘッダー・セクションをダブルクリックします。



2. [Advanced]タブをクリックします。
3. [Page Break After(印刷後ページ区切り)]を選択して[OK]をクリックします。

上級レポート拡張

〈Report Design(レポート設計)〉の基本機能に加えて、上級機能を使用するとさらに詳細な情報や機能を持ったレポートを作成できます。使用可能な上級機能は次のとおりです。

イベント・ルール	イベント・ルールにより、次のような論理操作を実行できます。 <ul style="list-style-type: none">条件文の処理オブジェクトへの値の代入、またはオブジェクト間での値の受渡し計算および複雑な計算式の実行既存のビジネス関数またはシステム関数の添付
日付タイトル	財務レポートでは、ページ・ヘッダーに日付タイトルがあるとさらに理解しやすくなります。J.D. Edwards ソフトウェアには、よく使用する日付タイトルが組み込まれています。日付タイトル・ビジネス関数により、レポートに表示する日付のタイプを選択できます。
ドリル・ダウン	ドリル・ダウン機能を使用すると、対話型アプリケーション間にリンクを作成できます。Adobe Acrobat Reader を使用してレポートを表示する際、レポート・ビューア上の値をクリックするとレポートのデータの明細情報画面に直接アクセスできます。
お気に入り	お気に入りを使用すると簡単に情報にアクセスできます。〈Report Design〉では、お気に入りを使用してレポートに必要なビジネス・ビューのみを含むディレクトリを作成できます。
処理オプション・テンプレート	処理オプションにより、レポートや他のバッチ・アプリケーションのデータ処理方法を制御します。処理オプションはバージョン別に設定できるため、同じアプリケーションでもバージョンが違う場合は処理オプションを異なる設定にできます。
ディレクタ・テンプレート	〈Director(ディレクタ)〉では、アプリケーション・レポートの作成に役立つディレクタ・テンプレートを使用します。これらのテンプレートは J.D. Edwards ソフトウェアに組み込まれており、デフォルト条件を含みます。ユーザーは、J.D. Edwards テンプレートを修正することも、独自のテンプレートを作成することもできます。
テキスト添付	J.D. Edwards の対話型アプリケーションからのレコードにテキストを添付することができます。さらに、レコード用のテキストが添付されたレポートを設計できます。
レポート・プロパティ	〈Report Design〉でレポート・プロパティを変更すると、レポートおよびバージョンの出力を修正できます。

参照

- 「スマート・フィールド」

『開発ツール』ガイドの次のトピックを参照してください。

- 「レポートのデータ構造の変更」
- 「ビジネス関数の処理」
- 「テーブル I/O(入出力制御) イベント・ルールの作成」
- 「レポート・インターコネクトの作成」

イベント・ルールの処理

レポートの処理中に、ランタイム・エンジンが一時的に停止して添付されたロジックを処理することがあります。ランタイム・エンジンが停止するこれらのポイントを「イベント」と呼びます。イベントを使用して処理用のカスタム・ロジックを挿入します。イベント・ルールとは、ほとんどのプログラミング言語に必要な難解なシンタックスを使わずに作成してイベントに添付できるロジック・ステートメントのことです。イベント・ルールは、ページ区切りなどのイベントが発生した時点で処理されます。イベントは、変数や固定情報、セクション、レポートなどのコントロールに添付されます。

イベント・ルールを添付するイベントは、イベント・ルールの目的およびイベントが発生するセクションのタイプによって異なります。たとえば、カラムやグループ・セクションにイベント・ルールを追加する場合、[Do Section(セクション実行)]イベントにそのイベント・ルールを添付することがあります。表セクションでは、[Do Tabular Break(表区切りの実行)]、[Do Balance Auditor(残高照会機能の実行)]、「Column Inclusion(カラム組込み)」イベントにイベント・ルールを添付します。スマート・フィールドは、[Column Inclusion(カラム組込み)]イベント・ルールに自動的に添付されます。イベント・ルールを変数に添付する場合、通常は[Do Variable(変数実行)]イベントを選択します。

ほとんどのイベント・ルールは次の 2 つから構成されます。

- If/While ステートメント
- 割当て

割当てが発生すると、If/While ステートメントが条件を宣言します。条件には、is equal to(等しい)、is less than(より小さい)、is not equal to(等しくない)、is greater than(より大きい)、およびこれらを組合せたものがあります。

割当ては、If/While ステートメントの条件が合ったときに実行される操作を宣言します。すべてのステートメントは、フォームまたは“X equals Statement”(X は値を割り当てられる変数、Statement は変数に割り当てられる値)の形をとります。ステートメントには簡単な値または計算を設定できます。

例

C チームは従業員に対して他のチームと異なるレート・スケールを使用します。チーム間で従業員を比較するには、C チームの従業員レートに 10 をかける必要があります。If/While ステートメントでは次のようになります。

チームが C の場合は次のようになります。

“is equal to”(に等しい)が条件です。

割当ては次のようになります。

レートは、古いレートに 10 をかけたものとなります。

“レート”は、値に割り当てられる値です。古いレートに 10 をかけたものは、値が計算されたステートメントです。

参照

『開発ツール』ガイドの次のトピックを参照してください。

- 事前定義済みのイベントについては「イベント・ルールの理解」

- イベント・ルールの設計およびイベント・ルール・ボタンの処理については「イベント・ルール設計」
- 他のレポートを実行するためにレポートを利用する場合のイベント・ルールの使用については「レポート・インターコネクトの作成」

次のトピックを参照してください。

- セクションに使用できるイベント・ルールについては「イベント」
- 〈Criteria Design〉フォームでのデータ選択については「データ選択の定義」

はじめる前に

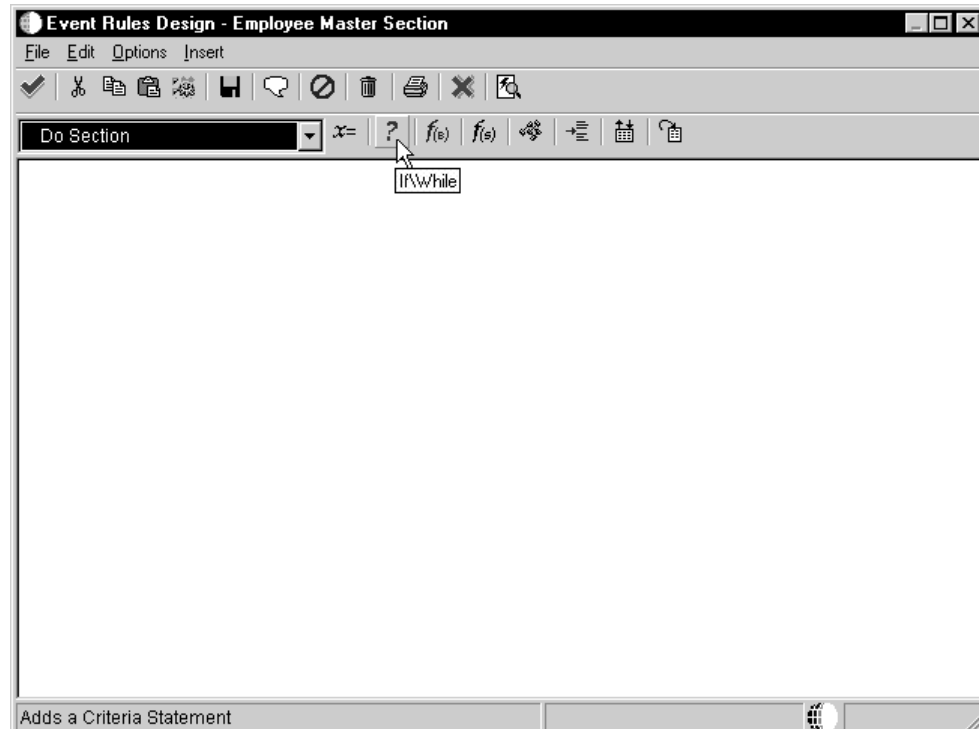
- If/While ステートメントを作成する前に、イベント・ルールの結果を表示するフィールドをレポートに挿入する必要があります。イベント・ルールの実行結果がテキストの場合、テキスト変数のフィールドが必要になります。イベント・ルールが計算式であれば、変数(数字)とデータ辞書のどちらかを使用します。テキスト変数については「テキスト変数の追加および添付」を参照してください。

▶ イベント・ルールに If/While ステートメントを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、If/While ステートメントを作成するレポートを選択します。
2. セクションまたはデータ・フィールドの変数部分をクリックします。
3. [Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。

または、マウスを右クリックして[Event Rules]を選択します。



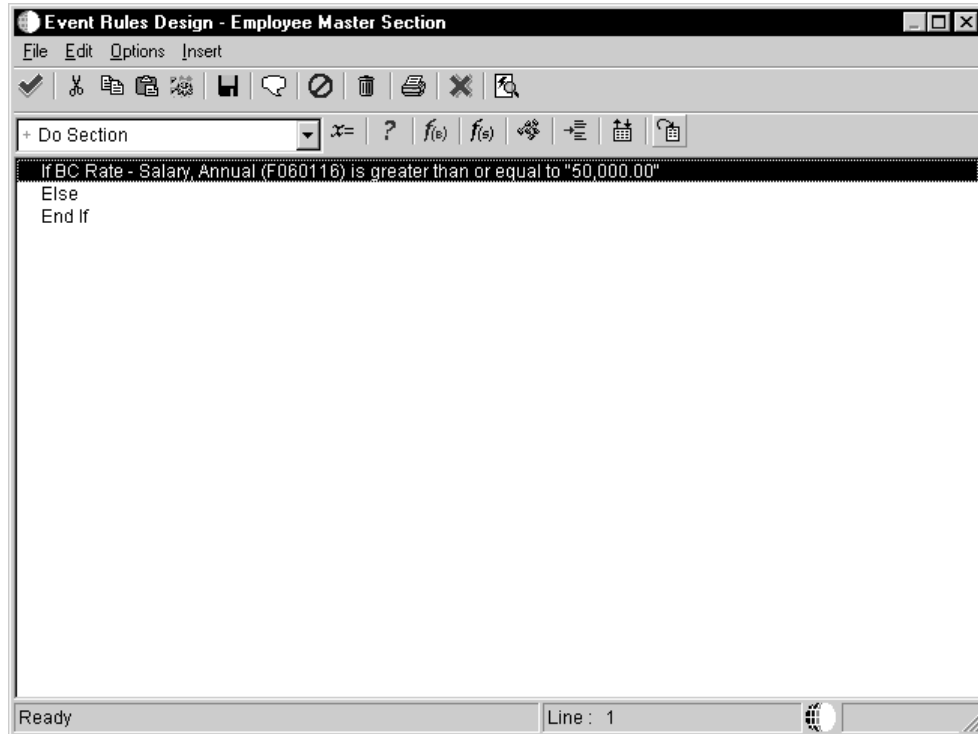
4. 〈Event Rules Design〉で、イベント・リストのプルダウン・メニューからイベントを選択します。
たとえば、[Do Section] イベントを選択します。このイベントは、グループまたはカラム・セクションで最もよく使用するため、例に挙げてあります。[Do Section] でカラムまたはグループ・セクションについてイベント・ルールが書き込まれると、そのセクションの複数のフィールドに対して、割当てまたは計算式が付いた複数の If ステートメントが書き込まれます。
5. [Insert] メニューから [If/While] を選択します。
または、ツールバーで [If/While] ボタンをクリックすることもできます。

Criteria Design

Enter condition by selecting from the options provided in each cell of the template below. You may either use the mouse or type the initial characters to select an option.

	Operator	Left operand	Comparison	Right operand
	If	BC Rate - Salary, Annual (F060116)	is greater than or equal to	"50,000.00"

6. 〈Criteria Design(条件設定)〉で、このイベント・ルールに適用する条件を定義します。
7. [OK] をクリックして操作を保存し、〈Event Rules Design〉に戻ります。
〈Event Rules Design〉フォームに If ステートメントが表示されます。



If ステートメントを作成した後で、If ステートメントにイベント・ルール割当てを添付できます。

イベント・ルール行をハイライトしてドラッグすると、別の場所に移動できます。

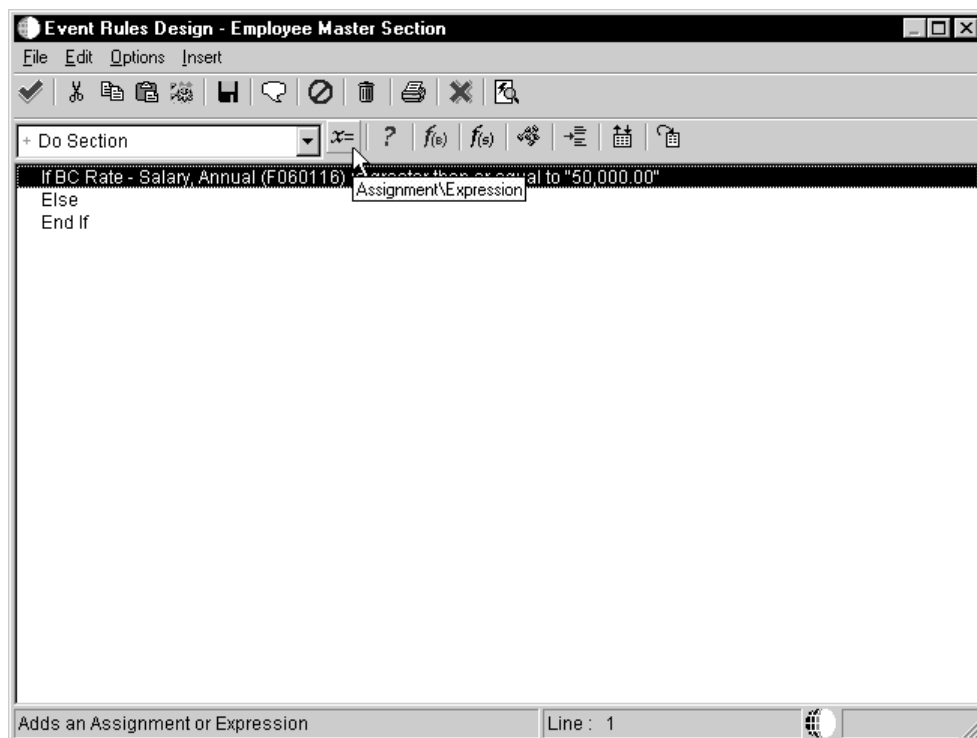
注:

イベント・ルールのステートメントの順序を変更すると、シンタクスが不適切になる可能性があります。シンタクス・エラーが発生した場合、イベント・ルールを無効にして続行するか、イベント・ルールを編集してエラーを取り除いてください。

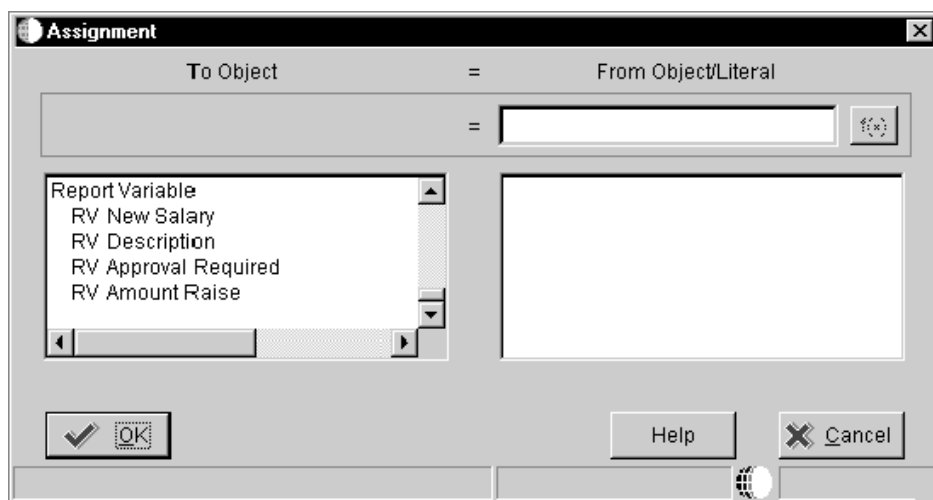
▶ イベント・ルール割当てを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、イベント・ルール割当てを作成するレポートを開きます。
2. [Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。



3. <Event Rule Design>で、割当て条件を割り当てる[If]、[Else]、[End If]ステートメントをクリックし、[Insert]メニューから[Assignment/Expression]を選択します。



4. <Assignment>で、[To Object(割当先オブジェクト)]見出しの下にあるリストから使用可能なフィールドをクリックして、割当先オブジェクトを選択します。たとえば、割当先オブジェクト

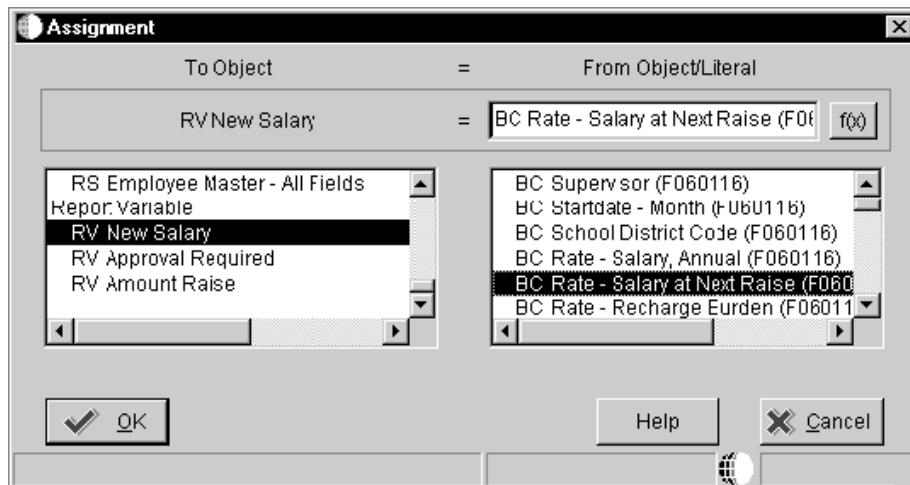
5. は、この値を入れるためにレポートに挿入したカラムのレポート変数(RV)などです。

使用可能フィールドは2文字のアルファベット・コードで表され、データ・ソースを識別すると同時にアプリケーション実行時にフィールド・データがどう使用されるかを確定します。使用可能フィールドには、次のプレフィックスが使用されます。

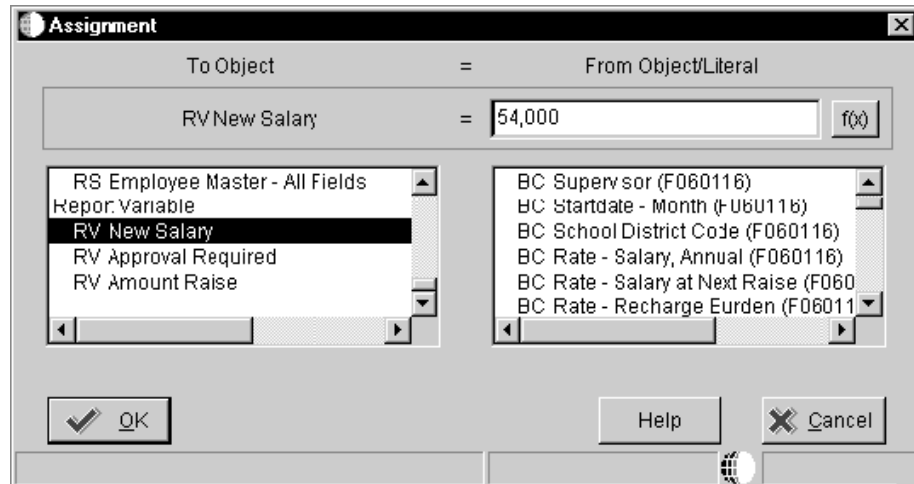
- BC** ビジネス・ビュー内のカラム。これらのカラムには、取込みが行われた時点のデータベースからの値が入ります。追加または更新時にデータベースに保存された値です。
- PO** 処理オプションから読み込まれた値
- VA** イベント・ルール変数。これらのオブジェクトは、イベント・ルールに設定された変数を表します。システムではこれらのオブジェクトを操作しません。
- RC** レポート固定情報
- RV** レポート変数
- RS** レポート・セクション。イベント・ルールの割当てを作成する際には、この値は使用しません。

選択したフィールドは、[To Object]見出しの下にあるグレーの部分に表示されます。このフィールドには、割り当てた値が読み込まれます。

6. 論理ステートメントを作成するには、右側の[From Object/Literal(割当元オブジェクト/リテラル)]リストからオブジェクトを選択します。



7. 英字変数に対してリテラル・ステートメントを割り当てるには、[From Object/Literal]にリテラル計算式(数字やテキストなど)を入力します。



8. 数値変数の計算式または関数を作成するには、[f(x)]ボタンをクリックします。
9. 〈Expression Manager〉で、式を入力して[OK]をクリックします。
10. 〈Event Rules Design〉で、[File]メニューから[Save]を選択します。

または、ツールバーでチェック・マーク・ボタンをクリックすることもできます。

テキスト変数の追加および添付

イベント・ルール割当てでは、テキスト変数(プレフィックス TV)が必要となる場合があります。テキスト変数は文字列として保管され、イベント・ルールを使用してレポートに添付されます。これは、割当てにおいてハードコード化されたテキスト文字列の代わりに使用されます。テキスト変数はハードコード化されていないため、イベント・ルールを比較的容易に保守管理できます。テキストがある各イベント・ルールを変更する代わりに、テキスト変数を変更するだけで済みます。

テキスト変数を使用するには、まずテキスト変数を追加し、イベント・ルールに添付します。

次の図は、レポート上にテキスト変数がどのように表示されるかを表しています。[Required Approval(必須承認)]カラムのテキスト文字列はテキスト変数です。[Amount of Raise(昇給金額)]カラムの値に基づいて、[Director Approval(取締役承認)]または[Manager Approval(管理者承認)]の値が自動入力されます。

J.D. Edwards Report Design - [test for columnar/text variables]

Report Edit View Section Insert Layout Help

Ne... Ope... Sav... Cut Copy Paste Undo Item... Cre... Cre... Cre... Sel... Gui... Con... Alph... Nu... Dat... Sm... Bus... Dat... Refr... Swit... Hid...

Report Preview Attachments

test for columnar/text variables

Page - 1

Ready

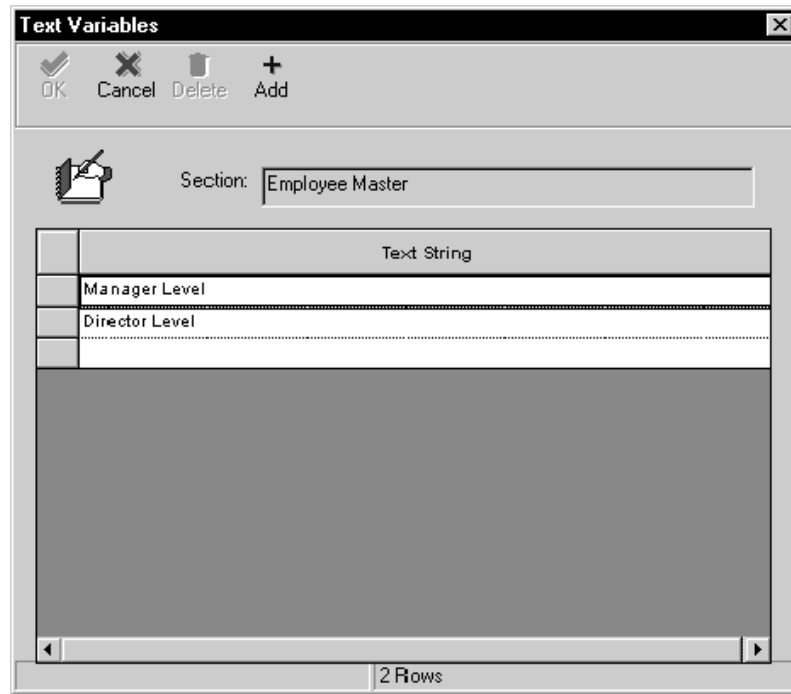
Alpha Name	Annual Salary	New Salary	Amount of Raise	Required Approval
Abbott, Dominique	38,000.00	40,280.00	2,280.00	"Director Approval"
Allen, Ray	75,000.00	78,000.00	3,000.00	"Director Approval"
Chamberlain, Carol M.	32,000.00	33,920.00	1,920.00	"Manager Approval"
Dobson, Jane	55,750.00	57,960.00	2,230.00	"Director Approval"
Ebby, Chester	25,000.00	26,500.00	1,500.00	"Manager Approval"
Ellis, Jody A.	29,640.00	31,418.40	1,778.40	"Manager Approval"
Escalante, George	28,808.00	30,536.48	1,728.48	"Manager Approval"
Ingram, Paul	22,250.00	23,585.00	1,335.00	"Manager Approval"
McDougle, Cathy	50,000.00	53,000.00	3,000.00	"Director Approval"
McLind, Rod	27,500.00	29,150.00	1,650.00	"Manager Approval"
Meads, Jane	35,250.00	37,365.00	2,115.00	"Director Approval"
Moralez, Jesus	23,504.00	24,914.24	1,410.24	"Manager Approval"
Walters, Annette	35,500.00	35,510.00	2,010.00	"Director Approval"
Hawkins, Jack	34,750.00	36,835.00	2,085.00	"Director Approval"
Nguyen, Daniel	33,175.00	35,165.50	1,990.50	"Manager Approval"

Page 1 of 1 150% 11 x 8.5 in

▶ テキスト変数を追加するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、テキスト変数を追加するレポートを選択します。
2. テキスト変数を追加する詳細セクションをクリックして、[Section]メニューから[Text Variables]を選択します。
3. 〈Text Variables〉で、[Text Variables]見出しの下に、レポートに表示するテキストを入力します。

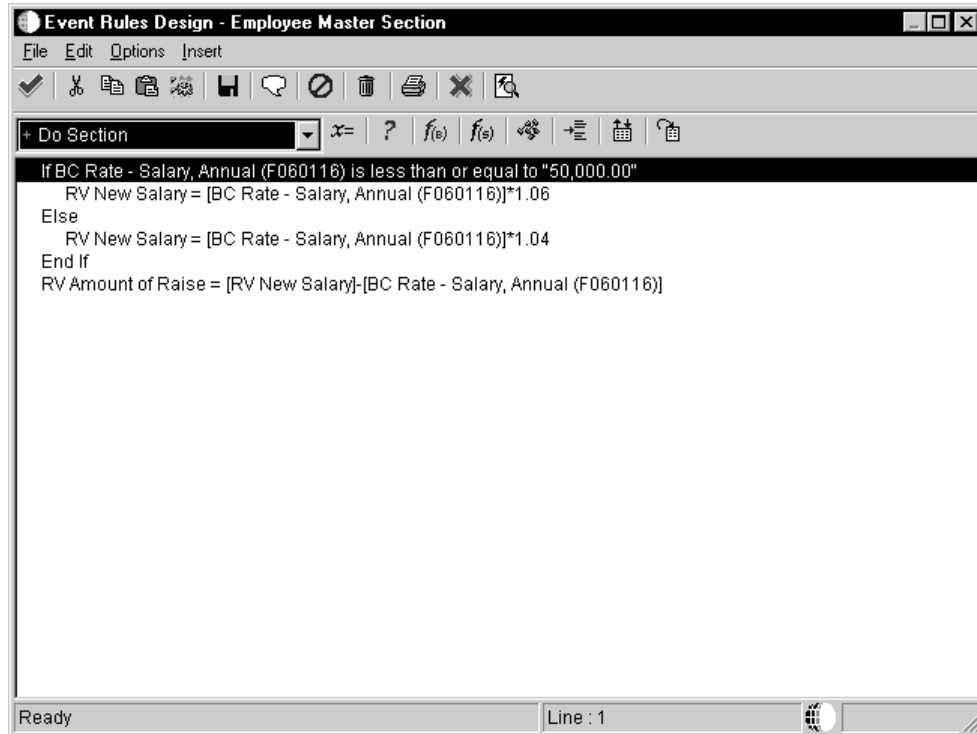


4. [Enter]キーを押すか、[Add(追加)]をクリックします。
 <Report Design>ツールでは、入力するたびに[Enter]キーを押して内容を認識させる必要があります。[Enter]キーを押すと、ブランク行がもう1行表示されます。
5. レポートに必要なテキスト文字列の分だけ手順3と4を繰り返し、[OK]をクリックします。

▶ テキスト変数をイベント・ルールに添付するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

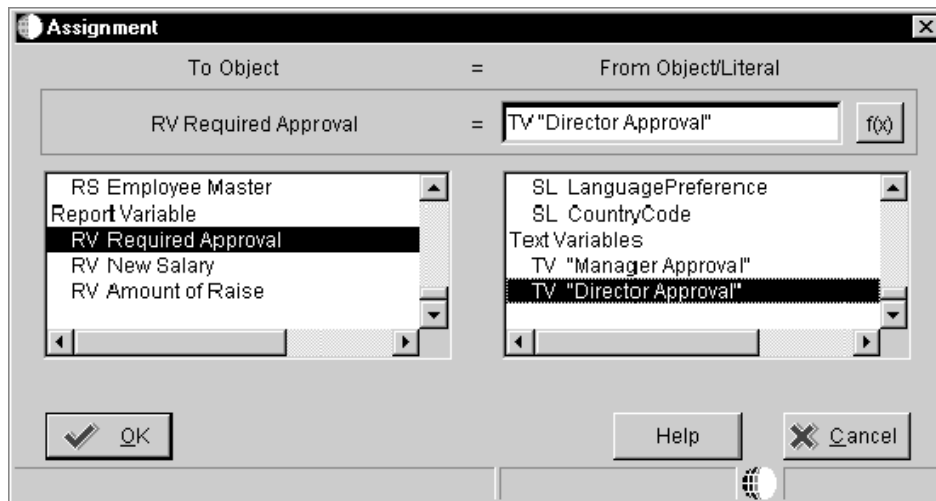
1. <Report Design>で、イベント・ルールにテキスト変数を添付するレポートを表示します。
2. テキスト変数を追加する詳細セクションをクリックして、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。
 または、マウスを右クリックして[Event Rules]を選択します。
3. <Event Rules Design>で、プルダウン・イベント・リストからテキスト変数を添付するイベントを選択します。
 ここでは例として[Do Section]イベントを使用します。



関連したイベント・ルールがあるイベントには、緑色のプラス記号(+)が表示されます。

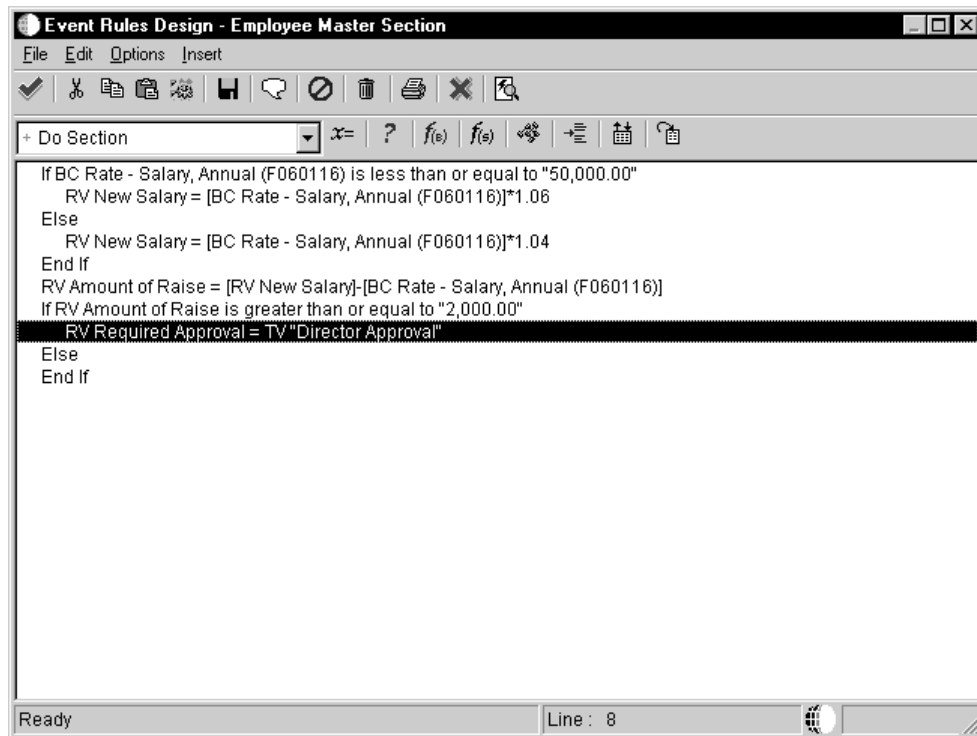
4. テキスト変数の条件を適用する[If]、[Else]、[End If]ステートメントをクリックして、[Insert]メニューから[Assignment/Expression]を選択します。

または、ツールバーで[X]ボタンをクリックすることもできます。



5. 〈Assignment〉で、[To Object] 見出しの下にあるリストからフィールドをクリックして、テキスト変数を受け取る [To Object] フィールドを選択します。たとえば、「RV 必須承認」を選択できます。
6. [From Object/Literal] 見出しの下にあるリストからプレフィックスが TV (テキスト変数) のフィールドをクリックして、[From Object/Literal] フィールドを選択します。たとえば、[TV `Director Approval' (TV 取締役承認)] を選択します。
7. [OK] をクリックします。

〈Event Rules Design〉が表示され、この時点では If ステートメントにはテキスト変数に関する条件が含まれます。



8. 手順 4 から 7 を繰り返して、イベント・ルールにテキスト変数を追加し、ツールバーのチェックマークをクリックして保存し、[Event Rules Design] を終了します。

システム関数のイベントへの添付

割当てを使用する代わりに、If/While ステートメントが条件に合った場合は、J.D. Edwards システム関数を使用しなければならない場合があります。システム関数は事前定義されており、コードを追加せずに複雑な計算を実行することができます。

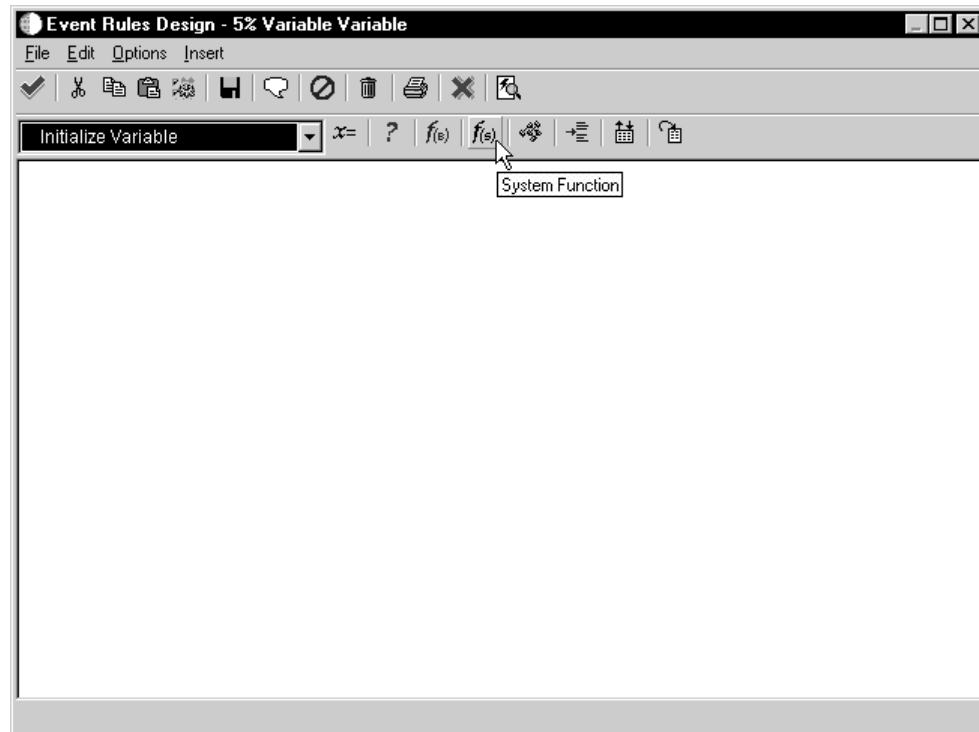
たとえば、レポートであるカラムを非表示にする場合があります。この処理は、オブジェクトを非表示にするシステム関数をイベント・ルールに添付すれば実行できます。

► システム関数をイベントに添付するには

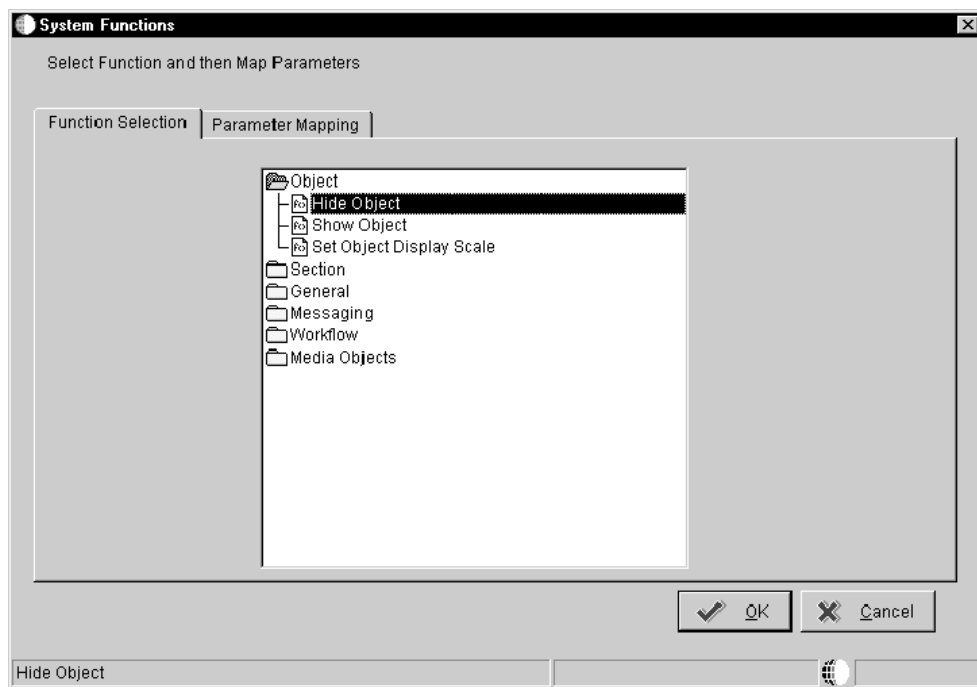
J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、システム関数を添付するレポートを表示します。
2. セクションまたはデータ・フィールドの変数部分をクリックして、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。

または、マウスを右クリックして[Event Rules]を選択します。

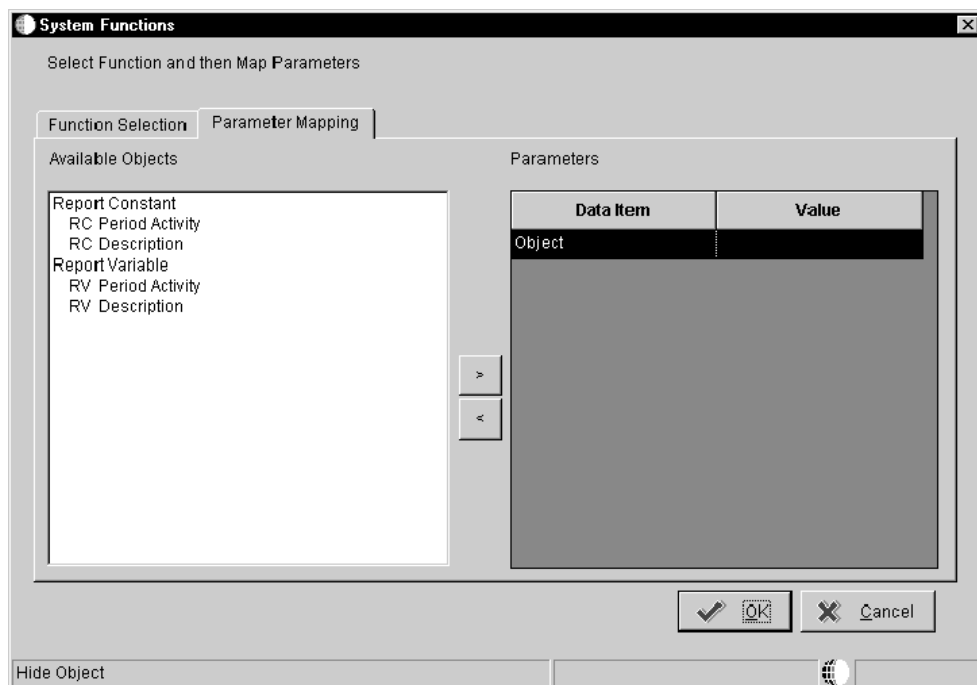


3. 〈Event Rules Design〉で、イベント・リストからイベントを選択します。
4. [Insert]メニューから[System Function]を選択します。
または、[f]ボタンをクリックします。



5. 〈System Functions〉フォームで、[Function Selection]タブにあるシステム関数の横のフォルダのアイコンをダブルクリックし、そのカテゴリで使える関数を表示して選択します。
6. パラメータを定義するには[Parameter Mapping(パラメータ・マッピング)]タブをクリックします。

たとえば、あるオブジェクトを非表示にする場合は[Object(オブジェクト)]フォルダを開いて、[Hide Object(オブジェクトの非表示)]というシステム関数を選択します。



7. [Parameter Mapping]タブで[Available Objects(使用可能なオブジェクト)]のリストからフィールドを選択し、右向き矢印でこの値を[Parameters]の[Value]カラムに移動します。
この例では、非表示にするカラムを選択します。
8. [OK]をクリックして<Event Rules Design>に戻ります。
9. <Event Rules Design>でチェックマークをクリックして保存し、<Report Design>に戻ります。

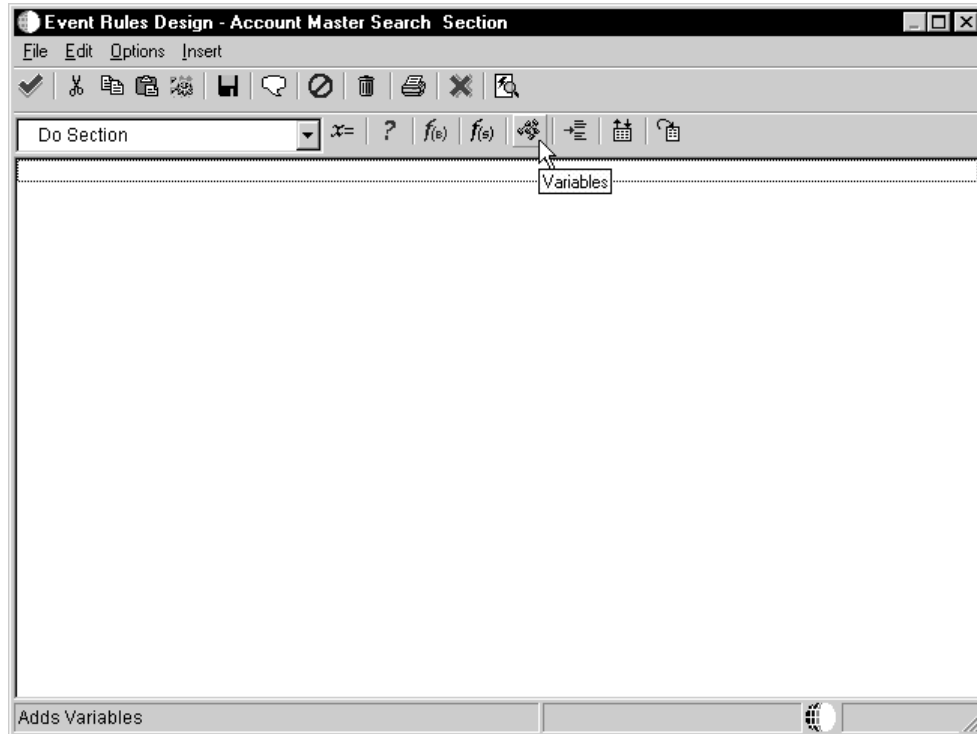
イベント・ルール変数の作成

イベント・ルール変数(プレフィックス VA)はユーザーが作成するオブジェクトで、選択したデータ辞書フィールドの属性をそのまま引き継ぎます。ただし、変数はデータ辞書には保管されません。各変数は、それが作成されたレポート内のみに存在します。変数が特定のイベントまたはセクション、レポート全体に対して使用できるかどうかを決定してください。変数を作成すると、イベント・ルール作成に使用されるフィールドのリストにその変数が追加されます。

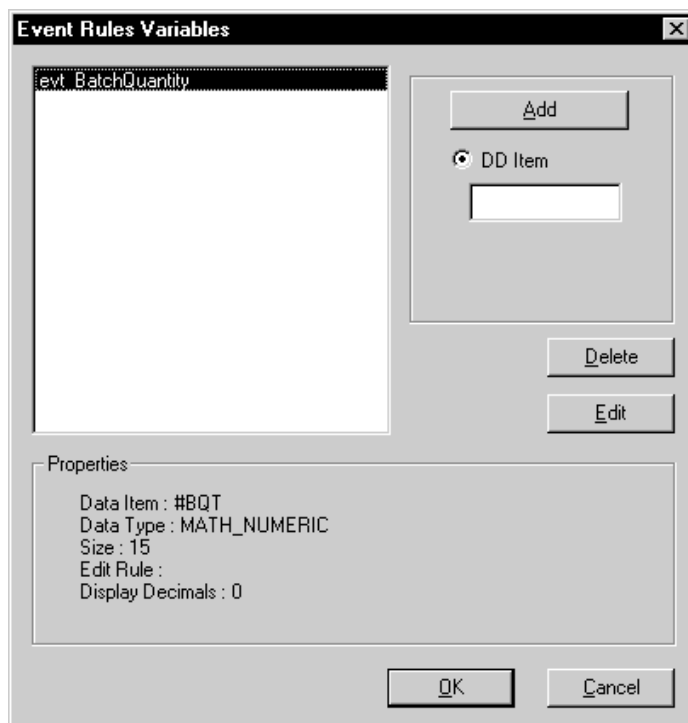
▶ イベント・ルール変数を作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

1. <Report Design>で、イベント・ルール変数を作成するレポートを選択します。
2. イベント・ルール変数を添付するセクションをクリックして、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。



3. 〈Event Rules Design〉で、イベント・リストからイベントを選択します。
 4. [Insert]メニューから[Variables]を選択します。または、[Variables]ボタンをクリックします。
 5. 〈Event Rules Variables〉で、[Add]をクリックします。
 6. [Variable Item Selection]で、次のいずれかを実行します。
 - [Find]をクリックして有効なデータ辞書フィールドを表示する。
 - QBE 行を使用して検索対象を絞り込み、[Find]をクリックする。
 7. 変数に継承させる特徴を持ったデータ項目を選択したら、[次へ]をクリックします。
 8. 〈Variable Options Selection〉で、変数の作成目的に応じて次の[Scope(スコープ)]オプションのいずれかを選択します。たとえば、レポート全体でレポート変数を参照するか、セクション変数としてセクション内でのみ参照するか、またはイベント変数が作成されたイベント内のイベント変数として参照するかを指定できます。
 - Section(セクション)
 - Report(レポート)
 - Event(イベント)
 9. 該当するフィールドに名称を入力して[完了]をクリックします。
- 〈Event Rules Variables〉フォームに、作成したイベント・ルール変数が表示されます。



指定したスコープにより、次のプレフィックスのうち 1 つが変数に割り当てられます。

- evt_(イベント)
- rpt_(レポート)
- sec_(セクション)

一度追加したイベント・ルールは修正できません。ただし、削除して新規にイベント・ルール変数を作成することはできます。

10. [OK]をクリックして〈Event Rules Design〉に戻ります。

11. 〈Event Rules Design〉でチェックマークをクリックして保存し、〈Report Design〉に戻ります。

カラム組込みと Do Section イベント・ルール

表セクションで最もよく使用するのが[Column Inclusion(カラム組込み)]イベント・ルールです。グループまたはカラム・セクションでは[Do Section]が最もよく使用されます。グループまたはカラム・セクションでデータを処理する際、レコードが取り込まれるたびに[Do Section]イベントが発生します。レベル区切りで自動的に合計が計算されるため、表セクションの処理は異なります。表セクションでは、[Do Section]のイベントは各レベル区切りでのみ処理されます。このため、表セクションでは[Column Inclusion]イベントを使用して、レベル区切りまで待たずに各レコードが取り込まれるごとにデータが処理されます。

差異の計算など、カラム間で計算を実行したり、カラム内の変数間で計算を実行するときは、セクション・タイプにかかわらず[Column Inclusion]イベント・ルールは使用しないでください。この場合は[Do Section]イベントを使用します。

[Column Inclusion] イベント・ルールを使用する際、ロジックを添付する先のセクションの各カラムについて個別にイベント・ルールを添付する必要があります。

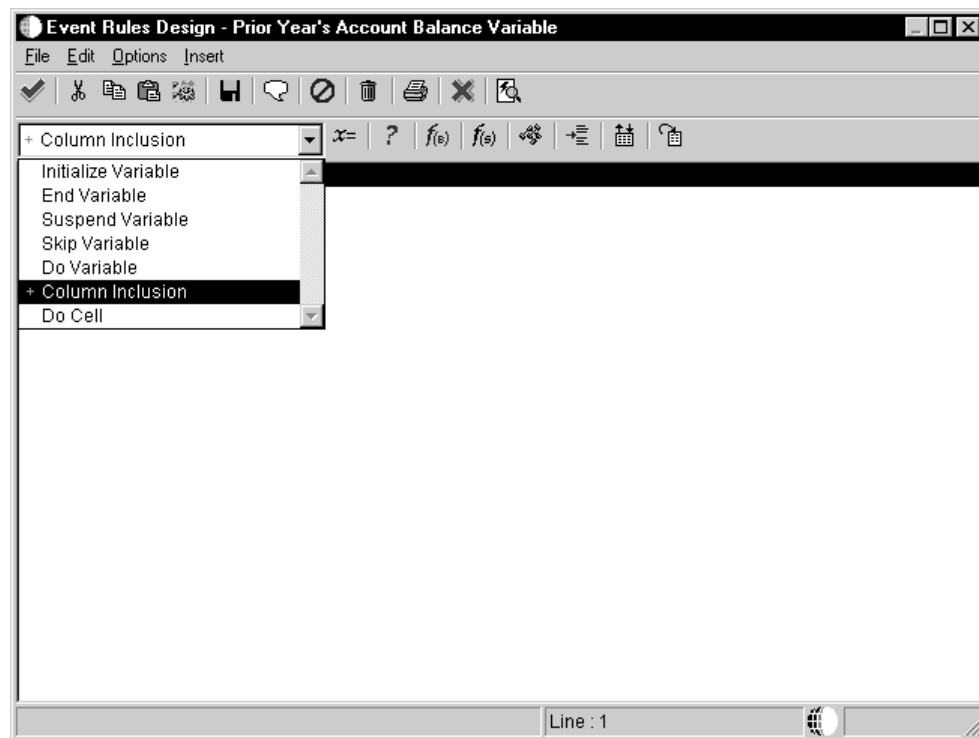
参照

- 「計算カラムの作成」

▶ カラム組込みイベント・ルールを使用するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、イベント・ルールを使用するレポートにアクセスします。
2. イベント・ルールを添付する先の表セクションでカラムをクリックします。
見出しではなくカラム自体をクリックするようにしてください。
3. [Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。



4. 〈Event Rules Design〉で、イベント・リストから[Column Inclusion]を選択します。
スマート・フィールド・カラムを処理している場合、このイベントに緑色のプラス記号(+)が表示されます。これは、イベント・ルールがこのカラムに既に存在することを示します。
5. 作成するイベント・ルールのタイプに応じて、選択するボタンが決定されます。
たとえば、If/While ステートメントを作成する場合は、[Insert]メニューから[If/While]を選択します。

6. イベントを追加する各カラムについて手順 1～5 を実行して、チェックマークをクリックして保存し、〈Report Design〉に戻ります。

カスタム・セクションの作成

カスタム・セクションをイベント・ルールと共に使用すると、レポートに印刷するデータを制御できます。オブジェクトのないカスタム・セクションを作成して、そのセクション・プロパティで[Page Break After Print(ページ区切りの後に印刷)]を選択すると、強制的にページ区切りが挿入されます。また、変数テキストを印刷したり、同じデータはあるがフォーマットの異なるセクションなどにカスタム・セクションを利用できます。たとえば、異なる 2 つのモジュールに存在するカスタム・セクションをレポートで使用し、必要に応じてモジュール特有のデータを表示する別のセクションを呼び出せます。

また、他の例としては特定の条件に基づいた追加情報を印刷する場合などがあります。顧客の支払実績を示す売掛レポートで、支払の遅延がある顧客について追加情報をバッチ・エンジンにより印刷する、といったケースです。この場合、カスタム・セクションを作成して顧客の支払期限の超過日数を表示し、そのカスタム・セクションを呼び出す処理オプションを添付できます。添付した処理オプションを有効にすると、バッチ・エンジンが期限超過の情報を含むレコードを見つけるたびに、そのカスタム・セクションが印刷されます。支払期限超過のレコードがなければ、カスタム・セクションは印刷されません。

カラムやグループ、表セクションで DO_CUSTOM_SECTION(カスタム・セクションの実行)システム関数を使用してカスタム・セクションを呼び出せます。レポートで利用できるカスタム・セクションの数は無制限です。カスタム・セクションは、第 2 レベルのセクションと同じように割り当てられ処理されます。

カスタム・セクションにはビジネス・ビュー・フィールドや変数、データ辞書フィールドを含むことができます。含まれるオブジェクトには関係なく、レポートは同じように処理されます。

カスタム・セクションへのロジックの添付

カスタム・セクションは、イベント・ルール内のシステム関数により起動します。カスタム・セクションのロジックを、先行するセクションに添付します。カラム・セクションより先にカスタム・セクションの処理を開始するには、カラム・セクションの DO_SECTION イベントから DO_CUSTOM_SECTION システム関数を使用してカスタム・セクションを呼び出します。同様に、レベル区切りフッターより先にカスタム・セクションでの処理を開始するには、INIT_LEVEL_BRK_FOOTER イベントから DO_CUSTOM_SECTION システム関数を使用してカスタム・セクションを呼び出します。

カスタム・セクション・イベントはどのセクションからも呼び出せます。さらに、If や While ステートメント、ビジネス関数、テーブル I/O などのイベント・ルールもカスタム・セクションと共に使用できます。

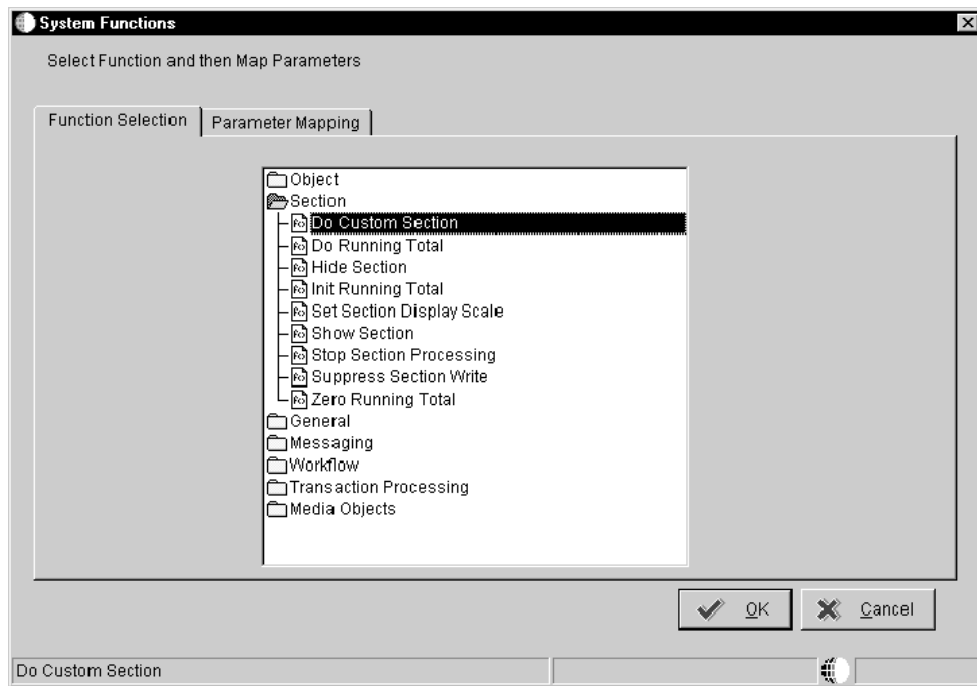
カスタム・セクションは、INIT_Section 以外のどのイベント・ルールからも呼び出せます。INIT_Section を使用してカスタム・セクションを呼び出そうとしても、レポートは処理されません。

カスタム・セクションを使用する際は、セクション・プロパティで“Conditional(条件付き)”を指定します。そして、システム関数イベント・ルール DO_CUSTOM_SECTION を、そのセクションの前にあるカスタム・セクションに添付してください。

▶ カスタム・セクションを使用するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

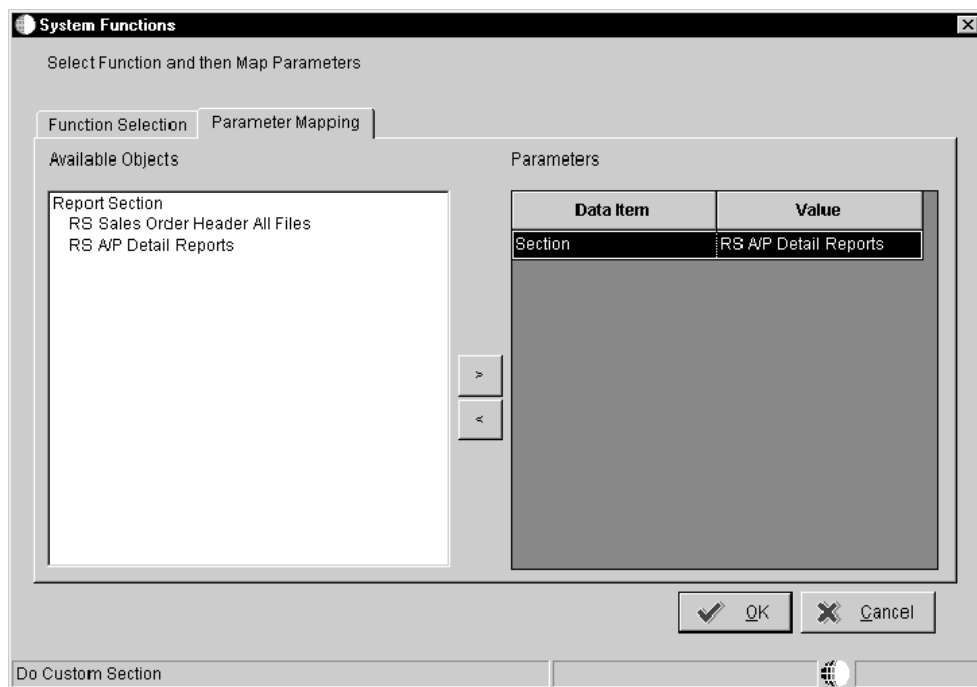
1. 〈Report Design〉で、カスタム・セクションを使用するレポートを開きます。
2. カスタム・セクションを呼び出すセクションをクリックして、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。
3. カスタム・セクションを処理する時点のイベントを選択します。
4. [System Functions]ボタンをクリックします。
5. [System Functions]で、システム関数のツリーからセクションを選んで[Do Custom Section]を選択します。



[Available Objects]ウィンドウにレポートのセクションが自動的に読み込まれます。

[Available Objects]には条件付きと指定したセクションだけでなく、レポートのすべてのセクションが表示されます。

6. [Parameter Mapping]タブをクリックし、カスタム・セクションとして定義する条件付きセクションを選択します。続いて、右矢印をクリックして選択したセクションを[Parameters]ウィンドウの下に移動させます。



7. [OK]をクリックします。

財務レポート用の日付タイトルの処理

財務レポートでは、ページ・ヘッダーに日付タイトルがあるとさらに理解しやすくなります。J.D. Edwards ソフトウェアには、よく使用する日付タイトルが組み込まれています。事前定義済みの日付タイトルにより日付タイトルを容易に追加できますが、自社のレポートの目的に合わないこともあります。そのため、会社固有の日付タイトルも追加できます。[User Defined Date Title (ユーザー定義日付タイトル)] ビジネス関数(B8300007)を呼び出すことにより、レポートに日付タイトルを追加するか、レポートの必要性に合った独自の日付タイトルを作成できます。

はじめる前に

- 財務レポート用テンプレートによるレポート作成および日付タイトルの追加については「Director を使用したアプリケーション・レポートの作成」を参照してください。

財務レポートへの日付タイトルの追加

J.D. Edwards ソフトウェアには次の日付タイトルが組み込まれています。

A(基準日)	例: 2005/3/31 付
B(貸借対照表)	例: 2005 年 3 月 31 日付
P(損益計算書)	例: 2005 年 1 月 1 日～2005 年 3 月 31 日
S(単一期間)	例: 2005 年 3 月 31 日で終わる月

[User Defined Date Title]ビジネス関数(B8300007)では、会社番号を使用して会計年度が決定されます。また、会社番号は、レポート月および年度の処理オプション値がブランクの場合、デフォルト・レポート期間の確定にも使用されます。

▶ 日付タイトルを財務レポートへ追加するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、日付タイトルを追加するレポートにアクセスします。
2. [Page Header]セクションで、[Insert]メニューから[Alpha Variable(文字変数)]を選択します。
3. フィールドをクリックして、[Page Header(ページ・ヘッダー)]を挿入します。
4. 挿入した英字変数フィールドをダブルクリックします。
5. 〈Variable Properties〉で、[Description]タブの次のフィールドに値を入力します。
 - Variable Name(変数名)
変数に「日付タイトル」などの名称をつけて識別しやすいようにします。
6. [Display(表示)]タブをクリックして、次の項目を修正します。
 - Justification(位置調整)
[Center(中央揃え)]をクリックします。
 - Display Length(表示する長さ)
日付タイトルが 100 文字より長い場合、スペースに合わせて途中で表示が切れます。
7. [Advanced(上級)]タブをクリックして次のオプションを選択します。
 - Global Variable(グローバル変数)
このオプションを選択すると、その変数が定義された場所以外のセクションでも [Available Objects]リストに変数が表示されます。
8. [OK]をクリックします。
9. セクションの他のオブジェクト内のオブジェクトを整列させます。
10. レポートの詳細セクションをクリックします。ページ・ヘッダー・セクションをクリックしないようにしてください。続いて[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。

11. [Event Rule Design]で、[Yes]をクリックして変更を保存します。
12. <Event Rules Design>で、イベント・リストから[Before Level Break]を選択します。
13. [Insert]メニューから[Business Function]を選択します。または、[f(b)] (ビジネス関数) ボタンをクリックします。
14. <ビジネス関数の検索>で、QBE の[ソース・モジュール]フィールドに"B8300007"と入力して[Enter]キーを押すか、[検索]をクリックします。
15. [選択]をクリックします。

<Business Functions(ビジネス関数)>フォームが表示されます。データ構造体の各データ項目に値を割り当てる必要があります。これ以降のステップでは、これらの値の割当方法について説明します。次の図で[User Defined Date Title]の完全なデータ構造体を確認してください。

Function Name : UserDefinedDateTitle
Function Description : User Defined Date Title
Source Module : B8300007 Data Structure : D8300007

Transaction Processing
☐ Include in Transaction

Available Objects

Special Values
<Literal>
<Blank>
Business View Column
BC Work Order Freeze Code (F4211)
BC Transfer/Direct Ship/Intercompany FI
BC Temporary Price (Y/N) (F4211)
BC Substitutes Allowed (Y/N) (F4211)
BC Substitute Item Indicator (F4211)
BC Subledger Type (F4211)

Data Structure

Value	Dir	Data Item
<NOT Assigned>	→	cDateTitleType
<NOT Assigned>	→	szLanguagePreference
<NOT Assigned>	→	szCompany
<NOT Assigned>	→	mnPOPeriodNumber
<NOT Assigned>	→	szPOFiscalYear
<NOT Assigned>	←	szDateTitle

Business Function Notes Structure Notes Parameter Notes

Optional Input OK Cancel

16. データ項目「cDateTitleType」の横の[Value]カラムをクリックし、[Available Objects]リストの[Literal]をダブルクリックします。
17. <Single value>で、ビジュアル・アシストをクリックします。
18. <日付タイトルの検索>で、値を選択して[選択]をクリックします。
19. <Single value>で、[OK]をクリックします。選択した値が[Value]リストに表示されます。
[Directional] 矢印は自動的に設定されます。
20. データ項目「szLanguagePreference」の横にある[Value]カラムをクリックします。

21. 日付タイトルをユーザーの使用言語で印刷するには、[Available Objects]リストから[SL Language Preference(使用言語)](ユーザー・プロファイルの使用言語システム値)をダブルクリックします。言語を設定しない場合は、ステップ 24 に進んでください。
22. レポートを実行するユーザーの環境設定とは関係なく、日付タイトルを特定の言語で印刷するには、[Available Objects]リストで<Literal>をダブルクリックします。
23. <Single value>で、ビジュアル・アシストをクリックします。
24. 値を選んで[選択]をクリックします。
25. <Single value>で、[OK]をクリックします。選択した値が[Value]リストに表示されます。
[Directional]矢印は自動的に設定されます。
26. データ項目「szCompany」の横の[Value]カラムをクリックし、[Available Object]リストの[Literal]をダブルクリックします。
27. <Single value>で会社番号を入力するか、またはビジュアル・アシストをクリックして入力する会社番号を検索します。
28. <Single value>で、[OK]をクリックします。
入力した会社番号は[Value]カラムに表示され、これにより会計期間パターンが確定します。
[Directional]矢印は自動的に設定されます。
29. [mnPOPeriodNumber]の横の[Value]フィールドをクリックしてから[Available Object]リストの[PO PeriodNoGeneralLedger]をダブルクリックし、[Value]カラムにオブジェクトをコピーします。
これは、[財務レポート]の処理オプション(T83PO)で指定した期間です。この処理オプションは実行時に自動的に表示されるので、そのときに値を入力します。
[Directional]矢印は自動的に設定されます。
30. [szPOFiscalYear]の横の[Value(値)]カラムをクリックしてから[Available Object]リストの[szFiscalYear]をダブルクリックし、[Value]カラムにオブジェクトをコピーします。
これは、[財務レポート]の処理オプション(T83PO)で指定した期間です。この処理オプションは実行時に自動的に表示されるので、そのときに値を入力します。
[Directional]矢印は自動的に設定されます。
31. [szDateTitle]の横の[Value]カラムをクリックしてからレポート変数(RV)名(ページ・ヘッダーに挿入した英字変数に割り当てた名称)をダブルクリックし、[Value]カラムにオブジェクトをコピーします。
[Directional]矢印は自動的に設定されます。

[szDateTitle]パラメータを入力すると、[Value and Data Item(値およびデータ項目)]リストのパラメータが使用され、<Business Functions>フォームの入力が完了します。

Business Functions

Function Name : UserDefinedDateTitle
Function Description : User Defined Date Title
Source Module : B8300007 Data Structure : D8300007

Transaction Processing
☐ Include in Transaction

Available Objects

Report Constant
RC Prior Year End Balance Forward
RC Discount
RC Description1
RC Create Journal Entry
RC Account Balance1
Report Variable
RV Description
RV DateTitle

Data Structure

Value	Dir	Data Item
P	→	cDateTitleType
<NOT Assigned>	→	szLanguagePreference
00060	→	szCompany
PO PeriodNoGeneralL	→	mnPOPeriodNumber
PO szFiscalYear	→	szPOFiscalYear
RV DateTitle	←	szDateTitle

Business Function Notes Structure Notes Parameter Notes

Optional / Output

32. 〈Business Functions〉で、[OK]をクリックします。
33. 〈Event Rules Design〉で、チェックマークをクリックしてユーザー定義の日付タイトルのイベント・ルールを保存して〈Report Design〉に戻ります。

参照

- セクション内のオブジェクトの位置揃えについては、「セクション内または全体にわたってフィールド/カラムの位置を合わせるには」

日付タイトルのカスタマイズ

事前定義済みの日付タイトルは便利ですが、会社固有の日付タイトルの方が適している場合もあります。その場合、目的に合うようにパラメータを定義して、日付タイトルをカスタマイズできます。また、同じ日付タイトルを複数の言語で作成することもできます。日付タイトルのパラメータは、日付タイトル・テーブル(F83100)に保管されます。

参照

- 期間名の定義については「会計期間をカラム見出しへ割り当てるには」

▶ カスタム日付タイトルを設定するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈日付タイトル〉を選択します。

1. 〈日付タイトルの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈日付タイトルの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。

- 日付タイトルタイプ
- 記述
- 言語

3. [要素]フィールドに値を入力します。

日付タイトルの長さは最大 100 文字です。

要素は 14 まであり、リテラル・テキスト文字列かテキスト置換パラメータのいずれかを指定できます。次のリストは、使用できるテキスト置換パラメータ(ユーザー定義コード・リスト 83/TS)です。これらのパラメータは、ランタイム時に読み込まれます。

- @1: 期間名

この値は、会計期間パターンの期間名称を定義すると割り当てられます。これは通常、期間と関連する月の名称です。この情報は日付タイトル・テーブル(F83110)に保存されています。

- @2: 期間終了日付

この値は会計期間パターン・テーブル(F0008)から読み込まれます。たとえば、このパラメータは 31 日に終了する期間に対しては"31"となります。

- @3: 世紀および年

たとえば、2005(レポートの基準年度)などです。

- @4: 年

たとえば、05(レポートの基準年度)などです。

- @5: 期間番号のテキスト

この値は、ユーザー定義コード・リスト(83/PT)に保存され、ここから読み込まれます。この UDC では、現行会計期間の期間番号のテキストが保管されます。たとえば、期間 2 の場合は"two"というテキストが取り込まれます。

- @6: 日付(06/30/05)

4. 期間番号(@5)の値のテキストを改訂するには、[Form]メニューから[Period Text]を選びます。
5. 〈日付タイトルの改訂〉で、[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
日付タイトルタイプ	日付タイトルの種類
記述	記述、備考、名称、または住所
言語	フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード (01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。

▶ カスタム日付タイトルをプレビューするには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈日付タイトル〉を選択します。

1. 〈日付タイトルの処理〉で、[検索]をクリックして有効な日付タイトル・タイプのリストを表示します。
2. プレビューする日付タイトルを選択して、[ロー]メニューから[プレビュー]を選択します。
3. 〈日付タイトルのプレビュー〉で、次のフィールドの値を変更するか、値を入力します。

- 日付タイトル・タイプ
- 言語
- 会社
- 期間

このフィールドをブランクにした場合、値は〈Company(会社)〉アプリケーションの [Financial Reporting Date(財務レポート日付)] から取り込まれます。

- 会計年度

このフィールドをブランクにした場合、値は〈Company(会社)〉アプリケーションの [Financial Reporting Date(財務レポート日付)] から取り込まれます。

4. [フォーム]メニューから[プレビューの実行]を選びます。

レポートに表示されるのと同じフォーマットで、日付タイトルがフォームに表示されます。

日付タイトルが 100 文字より長い場合はエラーが表示され、入りきらない部分は切り捨てられます。

日付タイトルの指定言語のバージョンが見つからない場合、日付タイトルはデフォルトの言語で表示されます。

5. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
日付タイトルタイプ	日付タイトルの種類
言語	フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード(01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。
会社	伝票番号、伝票タイプ、および元帳日付を使って、請求書、伝票、仕訳などの当初伝票を識別する番号。 「会社/会計年度別自動採番」を使用する場合は、自動採番プログラム(X0010)で伝票会社を使ってその会社の正しい自動採番が取り込まれます。2つ以上の当初伝票に同じ伝票番号および伝票タイプが存在する場合は、伝票会社を使って伝票を検索できます。
期間	現行の会計期間。会社固定情報(F0010)と一般会計固定情報(F0009)の2つのテーブルで設定すると、14 期間まで定義することができます。 元帳日付を参照してください。この会計期間によって、過去期間/未来期間への転記に対して警告メッセージが表示されます。また、財務諸表等のレポート作成時のデフォルト会計期間になります。
会計年度	会計年度を表す 4 桁の数字。ブランクの場合、現行の会計年度を示します。 現行の会計年度は(会社番号および名称)フォームで指定します。ここには最終会計期間の年度ではなく、最初の会計期間の終了日付の年度を指定してください。たとえば、2005 年 10 月 1 日から 2006 年 9 月 30 日を会計年度とする場合、2006 ではなく 2005 を指定します。

会計期間のカラム見出しへの割当て

会計期間パターン・タイプの各期間には名称が割り当てられます。たとえば、6 月が期間 1 となる場合もあります。期間に割り当てられた名称は、[日付タイトル]およびスマート・フィールドと関連した[スマート・フィールド・カラム見出し]で使用されます。[会計期間パターン]には、会社固有の会計期間パターンに合った独自の期間名を割り当てることができます。たとえば、通常の会計期間パターンでは期間 1 が 1 月というカラム見出しを持つのにに対し、10 月から始まる会計期間パターンでは期間 1 に「10 月」というカラム見出しを付ける場合もあります。

参照

- スマート・カラム見出しについては「スマート・フィールド」

▶ 会計期間をカラム見出しへ割り当てるには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈カラム見出し〉を選択します。

1. 〈カラム見出しの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈カラム見出しの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して会計期間パターン・タイプを設定し、[OK]をクリックします。
 - 会計期間パターン
 - 言語
 - 期間 1 - 14

フィールド記述

記述	用語解説
会計期間パターン	会計期間/パターンを指定するコード。15 種類のコードから 1 つを選択します。13 期間会計用の 4-4-5 のパターンや業務環境に固有の期間パターンには、A から N までの特殊なコードを設定する必要があります。デフォルト値の“R”では、通常のカレンダーパターンが使用されます。
言語	フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード (01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。
期間名 01	期間 1 に関連する記述

ドリル・ダウン機能の処理

集計を表示するレポート、特に財務レポートでは集計情報に留まらず、情報のソースとなる詳細まで調べる必要がでできます。たとえば、顧客の未払残高についてのレポートの場合、明細である未払の請求書を検討できれば便利です。ドリル・ダウン機能を持ったレポートを設計すると、レポートのデータを J.D. Edwards の対話型アプリケーションに関連付けることができます。オンラインでレポートを参照する際、レポートのデータをクリックすると J.D. Edwards アプリケーションを起動できます。

アプリケーションが開くと、監査証跡が作成され、レポート・データの詳細が表示されます。監査証跡レコードは静的なデータであり、監査証跡の情報が監査中のレコードにあるものとは異なる場合があります。たとえば、レポートを実行して新しい監査証跡データを作成した後に他のユーザーが取引を転記した場合、変更はテーブルにはすぐに反映されますが監査証跡には反映されません。ローまたはセル・スペック、計算フィールドを含む表レポートに対しては監査証跡は作成できません。

注意:

ドリル・ダウン機能には十分なシステム・リソースが必要なため、必要な場合にのみ使用してください。さらに、残高監査ワークテーブル(F83UI001)は自動的に除去されないため、処理時間を節約するためにワークテーブルを定期的に除去する必要があります。〈ドリル・ダウン〉プログラム(P83001)は、〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から選択できます。

ドリル・ダウン機能の使用

ドリル・ダウン機能は、次の処理を実行中に使用できます。

- 〈Report Design〉を使用してレポートを編集または改訂する場合。この方法は次のタスクで説明します。
- 〈Report Design Director(レポート設計ディレクタ)〉を使用してレポートを作成する場合
- 〈レポート・ディレクタ・テンプレート〉を使用してレポートを修正または作成する場合

参照

- 「アプリケーション・レポート用の追加プロパティを定義するには」
- ドリル・ダウン機能の使用については「ディレクタ・テンプレートの追加または修正」

はじめる前に

- バッチ・バージョンでドリル・ダウン機能を使用する場合、セクション・レイアウトおよびイベント・ルールのスペックを先に一時変更してください。スペックの一時変更については「バージョン・スペックを一時変更するには」を参照してください。

▶ ドリル・ダウン機能を使用可能にするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、ドリル・ダウン機能を有効にするレポートを開きます。
2. ドリル・ダウン機能を使用可能にする表レポート・セクションをクリックします。
3. [Section]メニューから[Section Properties (セクション・プロパティ)]を選択します。
4. 〈Tabular Secion〉で、[Financial (財務)]タブまたはディレクタ・テンプレートに関連したタブ ([Financial Report (財務レポート)]など)をクリックします。
5. 次のオプションをクリックしてから[Define (定義)]をクリックします。

- Drill Down (ドリル・ダウン)

6. 〈アプリケーションの処理〉で[検索]をクリックします。

このフォームには、使用可能なアプリケーションがすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると、検索対象を絞ることができます。

7. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。

レポートから呼び出されるアプリケーションを選択します。これが、残高を調べる際に起動するアプリケーションとなります。

8. 〈フォームの処理〉で、フォームを選んで[選択]をクリックします。

J.D. Edwards のアプリケーションの多くは複数のフォームで構成されています。ドリル・ダウン機能でアプリケーションを起動する際に表示するフォームを選択してください。

フォームおよびアプリケーションに複数のバージョンがある場合は、〈バージョンの処理〉フォームが表示されます。

9. 〈バージョンの処理〉で、次のいずれかを実行します。

- バージョンを選んで[選択]をクリックします。
- 特定のバージョンを指定しない場合は、[閉じる]をクリックします。

レポートに添付の処理オプションがある場合は、パラメータを入力するようプロンプトが表示されます。

Form Interconnections

Form Interconnect Name: Call(App:P83001, Form: W83001A)

Version Name: XJDE0001

Available Objects

- Special Values
 - <Literal>
 - <Zero>
- Processing Option
 - PO PeriodNoGeneralLedg
- System Value
 - SL SectionNumber
 - SL ReverseSign
 - SL CurrentRow**
 - SL CurrentColumn
 - SL AgingDaysAR00G

Data Structure

Value	Dir	Data Item
SL ReportName	→	szProgramID
SL VersionName	→	szVersionID
SL SectionNumber	→	mnSectionNumber
SL CurrentColumn	→	mnColumnNumber
SL CurrentRow	→	mnRowNumber

Structure Notes Parameter Notes

OK Cancel

10. 〈Form Interconnections〉で、[Available Objects(使用可能なオブジェクト)]カラムから[Value(値)]カラムに送るオブジェクトを[Available Objects]リスト上でダブルクリックします。
指定したアプリケーションからデータ項目が読み込まれます。

11. [Directional] 矢印が右向きの矢印アイコン(データがソースからターゲットに送られることを示す)に切り替わるまでクリックします。

12. オブジェクトのパラメータの定義を続けます。

データ構造体の次のフィールドまでカーソルを下方に動かしてから。次のオブジェクトを選択するようにしてください。

注:

使用可能なオブジェクトはフィールド・タイプによって異なります。

13. 〈Form Interconnections〉のパラメータを定義し終わったら、[OK]をクリックします。

14. 〈Tabular Section〉で、[OK]をクリックして〈Report Design〉フォームに戻ります。

「監査証跡の検討」タスクに進んでください。

フィールド記述

記述	用語解説
使用可能なオブジェクト	<p>次の対象となるオブジェクトを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 値を割り当てる・ ビジネス関数中でデータを渡す・ レポート、またはフォーム相互接続にデータを渡す <p>レポート、または1つのフォームから別のフォームにデータを渡すには、両方のレポートまたはフォームのデータ構造に同じオブジェクトが含まれている必要があります。たとえば、検索／表示フォームから修正／検査フォームに住所番号を渡す場合、各フォームのデータ構造に住所番号が含まれている必要があります。レポートまたはフォーム用のデータ構造に特定のオブジェクトが含まれていない場合、フォーム設計ツールまたはレポート設計支援を使用してデータ構造を修正します。</p>
移動ボタン	<p>項目を移動するには、項目を選択し、一重矢印ボタンをクリックします。複数項目を移動するには、シフトキーを押しながら項目をクリックします。該当する場合は、二重矢印を使用すると、グリッド内に表示された全項目が移動できます。</p>
データフロー矢印	<p>値とデータ項目データ構造カラム間のデータのフローの方向を指示します。指示矢印をクリックすると、次の4つのオプションに切り替わります。</p> <ul style="list-style-type: none">・ ソースフォームからターゲットフォームへ。・ ターゲットフォームからソースフォームへ。・ ソースフォームからターゲットフォームへ。ターゲットフォームを終了すると、データフローはソースフォームに戻る。・ データフローなし。データを送信せずに他のフォームへ接続する。

監査証跡の検討

ドリルダウン機能を持つレポートをオンライン表示している場合、レポートのデータをクリックするとアプリケーションを自動的に起動できます。これにより監査証跡が確立され、レポート・データの詳細を参照できます。

はじめる前に

- レポートを実行してオンラインで参照してください。レポートの実行/画面への出力については、「レポートをバッチ投入するには」を参照してください。

▶ 監査証拠を検討するには

レポートをオンラインで表示します。

1. レポートをオンラインで参照中に、検討したいレコードの上にカーソルを合わせ、カーソルが人差し指の形になるまで待ってクリックします。
アプリケーションを起動するかどうかの確認メッセージが Acrobat Reader から表示されます。
2. 調査するアプリケーション・フォームを開くには[Yes]をクリックします。
このレポートに関連付けられたフォームがそのレコードについて表示されます。

The screenshot shows a software window with a menu bar (File, Edit, Environment, Forms, Report, Window, Help) and a toolbar. Below the toolbar, there is a section for 'Report Amount' with a value of 23,281.68. The main area contains a table with the following data:

勘定科目No.	勘定科目名	金額	会計年度
601800	Prepaid Expense	23,281.68	
	TOTAL	23,281.68	

Below the table is a large empty gray area, likely for detailed information or a linked form. The status bar at the bottom shows 'Page 1'.

3. 詳細を表示するレコードを選んで[Select]をクリックします。
4. このレポートと関連するフォームと共に、調査しているレコードの詳細が表示されます。

P83001 W83001A - [取引明細の処理]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ロー(R) レポート(O) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

選択() 検索() 閉じる... 順序() 新しい... エラー... J.D.E. リンク ▼ 仮定通... OLEオブ... インター...

勘定科目No. 601800 Prepaid Expense

元帳タイプ1 AA USD 実績金額 開始日付 2005/01/01

元帳タイプ2 終了日付 2005/06/30

補助元帳/タイプ 通貨コード *

☒ 転記済み ☐ 未転記 ☐ すべて 年累計 1,294.00 累計 23,281.68

伝票 タイプ	伝票 No.	伝票 会社	元帳 日付	摘要	元帳タイプ1 金額
JE	1004	00060	2005/01/31	January Entries	2,106.00
JE	1009	00060	2005/02/28	February Monthly Activity	1,000.00
JE	1010	00060	2005/03/31	March Monthly Activity	3,900.00
JE	3223	00060	2005/06/15	Prepaid insurance	1,500.00
				カラム合計	1,294.00
				元帳合計	1,294.00

5. フォームを検討し終わったら、[Close(閉じる)]をクリックします。
6. レコードの検討を終えたら、表セクションの[Financial]タブで[Drill Down]オプションをオフにします。

アプリケーション・レポートを作成している場合、タブはディレクタ・テンプレートと同じ名称になります。たとえば、〈Director〉で「Financial Reports (財務レポート)」という名称を選択した場合、タブの名称も[Financial Reports]になります。

ドリルダウン・ワークテーブルの除去

監査証跡の検討のためにドリル・ダウン機能をアクティブにすると、ワークテーブルがそのたびに作成されます。ワークテーブルは除去するまでシステムに残ります。通常はシステム管理者がドリル・ダウン・ワークテーブルを除去します。

▶ ドリル・ダウン・ワークテーブルを除去するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈ドリル・ダウン・テーブルの除去〉を選択します。

1. 〈財務レポート・ワークテーブルの除去〉で、[検索]をクリックします。
既存のドリル・ダウン・テーブルがすべてグリッドに表示されます。
2. テーブルを選んで[削除]をクリックします。

ビジネス・ビューのお気に入りとしての設定

ビジネス・ビューの「お気に入り」を使用すると、情報に簡単にアクセスできます。〈Report Design〉では、「お気に入り」を使用して目的に合ったビジネス・ビューだけを含むフォルダを作成できます。ビジネス・ビューをグループ別に分類することで、ビジネス・ビューを簡単に選択できます。たとえば、共通の機能や使用頻度別にレポート・システムをグループ化できます。

レポート作成中、〈Director〉でお気に入りディレクトリの中からビジネス・ビューを選択できますが、〈Director〉のインターフェイスは読み込み専用です。お気に入りを変更するには〈お気に入り〉プログラムを使用する必要があります。このプログラムには〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)からアクセスできます。

お気に入りを設定する際は、ツリー構造を作成してください。ツリー構造は、フォルダとサブフォルダからなり、ユーザーがお気に入りとして指定したビジネス・ビューを論理的に分類できます。ツリー構造はフォームの左側に、お気に入りに添付された注記はフォームの右側に表示されます。事前定義済みのフォルダの中に直接サブフォルダを作成することができます。〈お気に入りの処理〉フォームには、リスト作成者のユーザーIDに基づいてお気に入りリストの情報が表示されます。

お気に入りリスト項目の注記テキストを表示する言語を選択することもできます。

お気に入りフォルダまたはサブフォルダの作成

フォルダは、お気に入りリストの最上部レベルに位置します。ツリー構造の中で、ユーザーのフォルダは[Favorites(お気に入り)]見出しの下に表示されます。フォルダの中に直接お気に入りを置いたり、さらにサブフォルダを作成してそのフォルダの中にお気に入りを分類することもできます。

▶ お気に入りフォルダを作成するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

1. 〈お気に入りの処理〉で、[Add(追加)]をクリックします。
2. 〈オブジェクト・フォルダの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - フォルダ
 - 記述
 - フォルダ所有者
 - カテゴリ・コード 1
 - カテゴリ・コード 2
 - カテゴリ・コード 3
 - カテゴリ・コード 4
 - カテゴリ・コード 5
 - カテゴリ・コード 6

フィールド記述

記述	用語解説
フォルダ所有者	よく使用するフォルダを所有する個人の住所番号
記述	お気に入りのシステムオブジェクトを含むフォルダ
カテゴリ・コード 1	「お気に入り」フォルダを分類するのに使用するコード

▶ お気に入りサブフォルダを作成するには

注:

サブフォルダはフォルダの中にあるため、サブフォルダを追加する前にフォルダを先に作成しておいてください。

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

1. 〈お気に入りの処理〉で、サブフォルダを追加するフォルダをクリックして、[ロー]メニューから[サブフォルダの追加]を選択します。

お気に入り - [オブジェクトフォルダの改訂]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... キャンセル... エラー... On... リンク ▼ エラー... OLE... インサート...

フォルダ: Acc Rec

記述: Accounts Receivable

親: FIN

Financials

☒ サブフォルダ

フォルダ所有者: 7392 Accounts Receivable Department

カテゴリ・コード 1:

カテゴリ・コード 2:

カテゴリ・コード 3:

カテゴリ・コード 4:

カテゴリ・コード 5:

カテゴリ・コード 6:

2. 〈オブジェクト・フォルダの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。

- フォルダ
- 記述
- フォルダ所有者
- カテゴリ・コード 1
- カテゴリ・コード 2
- カテゴリ・コード 3
- カテゴリ・コード 4
- カテゴリ・コード 5
- カテゴリ・コード 6

3. [サブフォルダ]オプションを選択し、[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
記述	お気に入りのシステムオブジェクトを含むフォルダ
フォルダ所有者	よく使用するフォルダを所有する個人の住所番号
カテゴリ・コード 1	「お気に入り」フォルダを分類するのに使用するコード

ビジネス・ビューのお気に入りフォルダまたはサブフォルダへの追加

お気に入りリストにフォルダを追加したら、そのフォルダにお気に入りビジネス・ビューを追加できます。お気に入りリスト内のフォルダの下にサブフォルダを作成する場合、これらのサブフォルダの下にビジネス・ビューを追加することもできます。

▶ ビジネス・ビューをお気に入りフォルダまたはサブフォルダへ追加するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

1. 〈お気に入りの処理〉で、フォルダまたはサブフォルダを選択します。
2. [ロー]メニューから[お気に入りの改訂]を選択します。
3. 〈お気に入りの改訂〉で、[オブジェクト名]フィールドをクリックしてビジュアル・アシストをクリックします。
4. 〈オブジェクトの検索〉で、[検索]をクリックして使用可能なビジネス・ビューのリストを表示します。
QBEに検索条件を入力すると検索対象を絞り込むことができます。
5. グリッドでビジネス・ビューを選び、[選択]をクリックします。
6. 手順 3～5 を繰り返して、必要なビジネス・ビューをフォルダまたはサブフォルダに追加し終わったら[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
オブジェクト名	<p>システム・オブジェクトを識別する名前。J.D. Edwards ERP アーキテクチャはオブジェクト指向です。ソフトウェアの個々のオブジェクトはすべてのアプリケーションのビルディング・ブロックとなっており、複数のアプリケーションでオブジェクトを再使用できます。各オブジェクトは、オブジェクト・ライブラリアンで管理されます。オブジェクトの例は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">○ バッチ・アプリケーション(レポートなど)○ 対話型アプリケーション○ ビジネス・ビュー○ ビジネス関数○ ビジネス関数データ構造体○ イベント・ルール○ メディア・オブジェクト・データ構造体

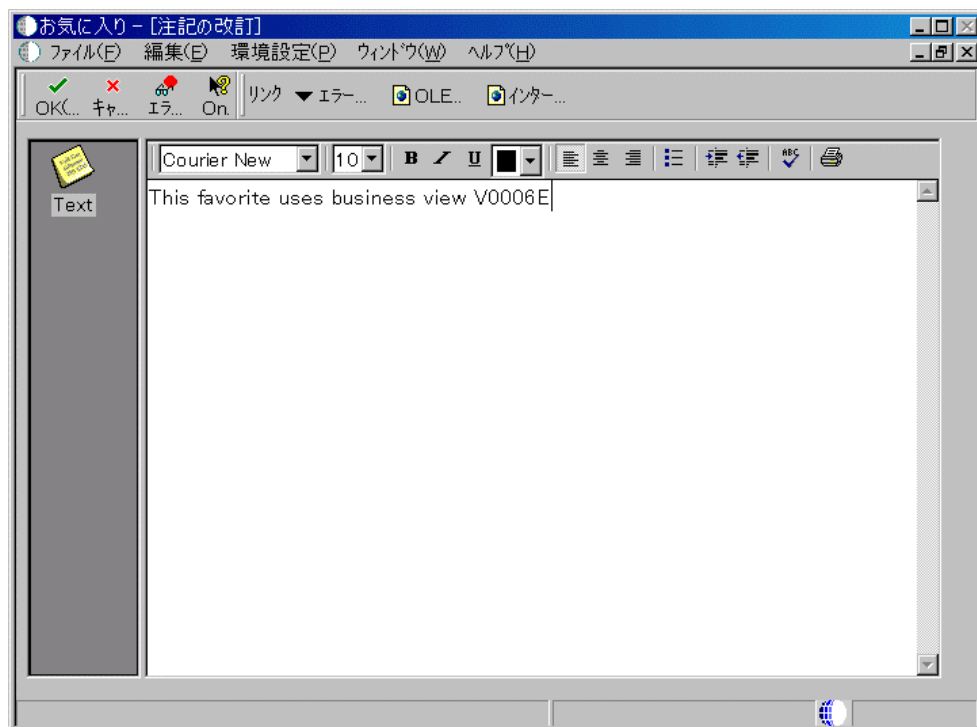
お気に入り、フォルダ、サブフォルダへの注記の追加

お気に入りやフォルダに注記を加えて、その用途や内容を記述できます。たとえば、どういう場合に特定のビジネス・ビューを使用するかや、ビジネス・ビューの名前を示すテキストを添付できます。

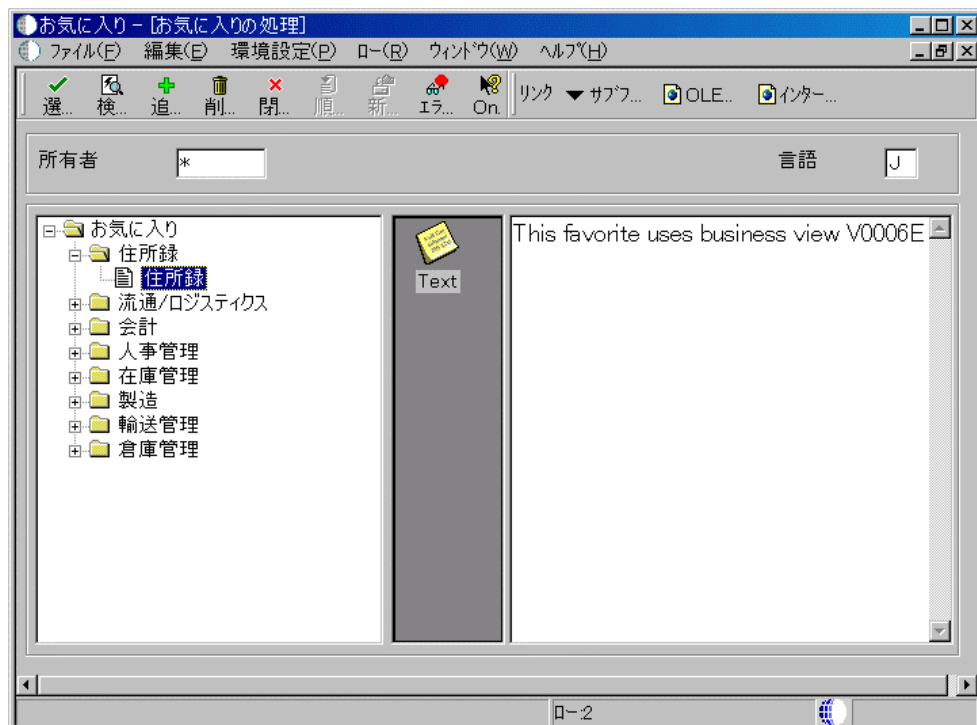
▶ お気に入り、フォルダ、サブフォルダへ注記を追加するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

1. 〈お気に入りの処理〉で、お気に入り、フォルダ、サブフォルダのいずれかを選択します。
2. [ロー]メニューから[注記の改訂]を選択します。



3. 〈注記の改訂〉で、注記を入力して[OK]をクリックします。



4. 〈お気に入りの処理〉で、項目を選択してフォームの右側に注釈が表示されることを確認します。

▶ お気に入り、フォルダ、サブフォルダから注記を削除するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

1. 〈お気に入りの処理〉で、お気に入り、フォルダ、サブフォルダのいずれかを選択します。
2. [ロー]メニューから[注記の改訂]を選択します。
3. 〈注記の改訂〉で、テキストを削除して注記を入力し、[OK]をクリックします。

お気に入り記述の翻訳

複数言語を取り扱うようにシステムを設定する必要がある場合は、お気に入りに翻訳した記述を入力することによって対応します。〈お気に入り記述の翻訳〉プログラム(P91100)を使用して、お気に入りリストに表示される項目に対する翻訳を入れられます。

▶ お気に入り記述翻訳を設定するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り記述の翻訳〉を選択します。

1. 〈お気に入り記述の翻訳〉で、グリッドから翻訳先の言語を選んで[選択]をクリックします。

お気に入り	記述	翻訳記述
FIN	Financials	
HRM	Human Resource Management	
DIS	Distribution / Logistics	
MFG	Manufacturing	
V3102C	Work Order Variances	
V4801C	Manufacturing Work Order Headr	
V3002P	Bill of Material Report	
V3003I	Routing Master Report	
V30006C	Work Center Master Report	

2. 〈お気に入り記述翻訳の改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。
 - スキップ先のお気に入り

3. 翻訳するお気に入りのグリッドに代替記述を入力し、[OK]をクリックします。

▶ お気に入りリストを代替記述と共に表示するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈お気に入り〉を選択します。

〈お気に入りの処理〉で、次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- 言語

お気に入りの指定の言語で存在する場合、その言語で表示されます。そうでない場合は国内言語で表示されます。

注記は翻訳先の言語で入力できるよう空白になっています。

処理オプション・テンプレートの処理

処理オプションを使用して、レポートやバッチ・アプリケーションのデータ処理方法が制御されます。処理オプション値はバージョンごとに指定するため、同じレポートの異なるバージョンに対して別々の処理オプション値を指定できます。レポート投入時に処理オプションが自動的に表示されるように設定することで、ユーザーに値の入力を求めることができます。処理オプションを使用する目的は次のとおりです。

- レポートのデータ処理方法の制御
- デフォルト値の設定
- 異なる会社やユーザーに対するアプリケーションのカスタマイズ
- レポート・フォーマットの制御
- レポート用ページ区切りの制御
- レポート用集計の制御

処理オプション・テンプレートには、1 つまたは複数の処理オプションがあります。各処理オプションはテンプレート内のローに表示され、タイトルによって定義されます。タイトルには有効な値が含まれます。

処理オプション・テンプレートの作成および使用方法に関する概要は、次のとおりです。

1. 「テンプレート」と呼ばれるパラメータ・リストを作成し、処理オプションを作成します。
2. このテンプレートをレポートに添付し、レポートに対するイベント・ルールを作成してこの値を利用します。
3. レポートのバージョンを作成します。
4. バージョンごとに異なる処理オプション値を指定することにより、ランタイム時の処理オプションの取扱方法を指定します。

5. ランタイム時に、処理オプション・テンプレートには「ページ」と呼ばれる部分に一連のタブが表示されます。各タブは処理オプションのカテゴリを示します。タブをクリックするとページが変わり、そのカテゴリの処理オプションが表示されます。ランタイム時には、レポートの設定に応じて次のようなことが起こります。
 - 値を入力できるように処理オプションが表示される。
 - バージョン・リストが表示される。各バージョンには事前に選択された処理オプション値が入力されています。
 - データ選択やデータ順序設定などの事前に選択したオプションと、処理オプション値によってレポートが実行される。

このセクションでは、上の概要の手順 1 と 2 について詳しく説明します。

参照

次のトピックを参照してください。

- レポートのバージョン作成については「バッチ・バージョンを作成するには」
- 実行時の処理オプションの指定方法については「バッチ・バージョン用の処理オプションを変更するには」
- レポートの実行について「レポートをバッチ投入するには」

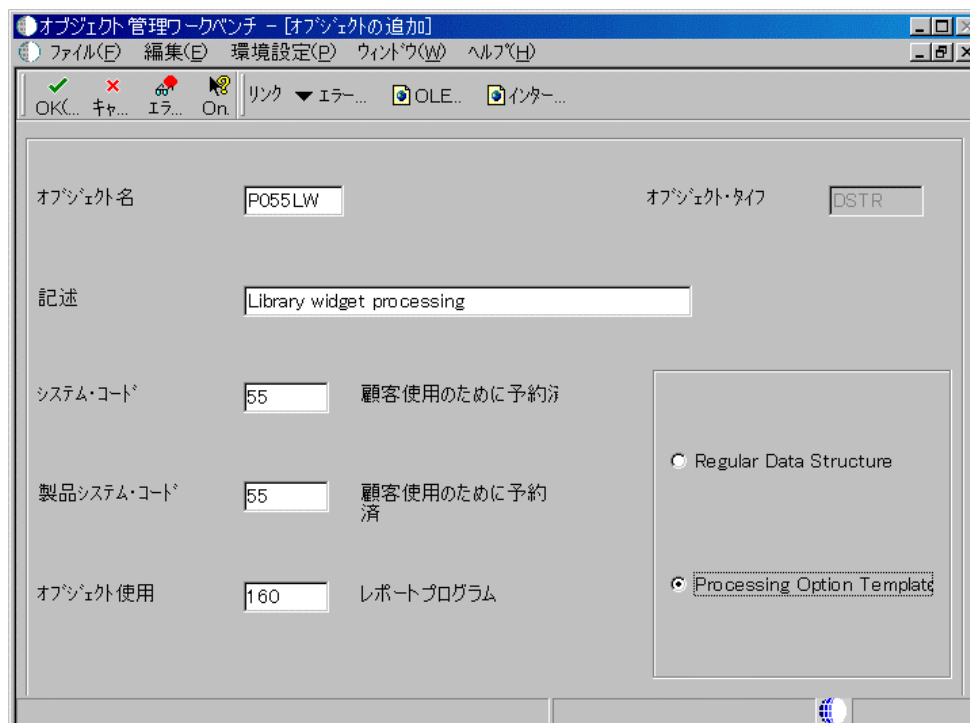
処理オプション・テンプレートの設計

ランタイム時にレポートに読み込まれるデータ項目の値をリストした処理オプション・テンプレートを作成できます。処理オプションのテンプレートにはタブを追加することもできます。

▶ 処理オプション・テンプレートを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、略式コマンドで“OMW”と入力します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈J.D. Edwards オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、次のオプションを選んで[OK]をクリックします。
 - データ構造体



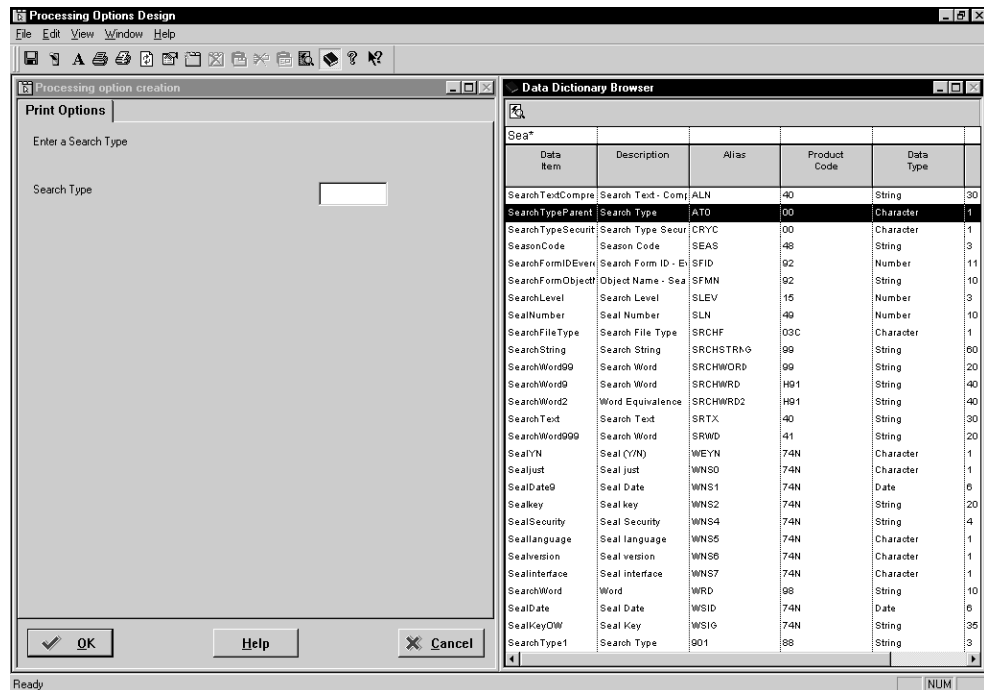
3. 〈オブジェクトの追加〉で、次のフィールドに値を入力します。

- オブジェクト名
- 記述
- システム・コード
- 製品システム・コード
- オブジェクト使用

[オブジェクト使用]フィールドには、作成中のオブジェクトが反映されます。このフィールドで独自の有効な値を作成することもできます。値を作成するには、ビジュアル・アシストをクリックして[ロー]メニューから[改訂]を選択してください。〈ユーザー定義コードの処理〉で、[追加]をクリックします。〈ユーザー定義コード〉のグリッドの最後にあるブランクのローまでスクロールして新しいコードと記述を入力します。

4. [Processing Option Template (処理オプション・テンプレート)] オプションを選択して、[OK] をクリックします。
5. 〈Processing Option Design (処理オプション設計)〉で、[Design Tools (設計ツール)] タブをクリックし、[Start the Processing Option Design Aid (処理オプション設計ツールの起動)] をクリックします。
6. 〈Processing Options Design〉で、[New Tab] を右クリックしてポップアップ・メニューから [Current Tab Properties] を選択します。
7. 〈Tab Properties〉で、次のフィールドに値を入力して [OK] をクリックします。
 - Short Name (略式名称)
 - Long Name (詳細名称)

8. <Data Dictionary Browser(データ辞書ブラウザ)>フォームにデータ辞書項目を表示するには、次のいずれかの処理を実行します。
 - [Data Dictionary Browser]見出しのすぐ下にある[Search(検索)]アイコンをクリックする。
 - このフォームを右クリックして[検索]を選択する。
 - QBE に値を入力して[Enter]キーを押す。



9. 処理オプションに追加する項目を選択するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - <Data Dictionary Browser>で項目をダブルクリックする。タブの下、フォームの左側に項目が表示されます。
 - <Data Dictionary Browser>から、項目をタブ上の希望する位置にドラッグする。
10. タブの項目を移動するには、項目をクリックして新しい位置にドラッグします。
データ項目のサイズと位置が、タブの幅に合うように自動的に調整されます。
11. 項目のテキスト部分を削除または上書きするには、その部分をダブルクリックします。
12. データ項目を右クリックして、ポップアップ・メニューから<Properties(プロパティ)>を選択します。

13. 〈JDE.DataItem のプロパティ〉で、[General(一般)]タブで必要に応じて[Alias(エイリアス)]フィールドを変更します。

[Alias]の記述は固有である必要があります。

14. [Help Override Data Item(ヘルプ一時変更データ項目)]タブをクリックし、必要に応じて次のフィールドを修正します。

- Data Item Help Override Name(データ項目ヘルプ一時変更名)

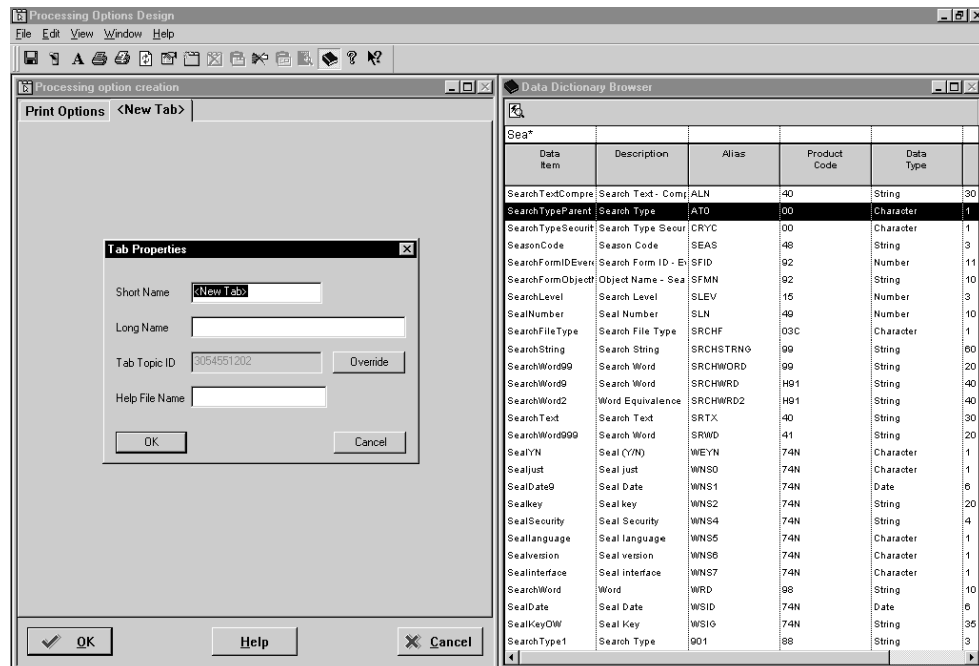
15. [OK]をクリックします。

▶ 処理オプション・テンプレートにタブを追加するには

J.D. Edwards の Wiindows 環境では、略式コマンドで“OMW”と入力します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈OW オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、次のオプションを選んで[OK]をクリックします。
 - データ構造体
3. 〈Add Object〉で、以下のフィールドに入力し、[OK]をクリックします。
 - オブジェクト名
 - 記述
 - システム・コード
 - 製品システム・コード
 - オブジェクト使用
4. 〈Processing Option Design(処理オプション設計)〉で、[Design Tools(設計ツール)]タブをクリックし、[Start the Processing Option Design Aid(処理オプション設計ツールの起動)]をクリックします。
5. 〈Processing Options Design〉で、[New Tab]を右クリックしてポップアップ・メニューから[New Tab]を選択します。

2 番目の〈New Tab〉がフォームに追加され、〈Tab Properties(タブ・プロパティ)〉フォームが表示されます。



6. 〈Tab Properties〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - Short Name (略式名称)
 - Long Name (詳細名称)
7. 処理オプション設定後に[Edit (編集)]メニューから[Test (テスト)]を選択すると、実際にどう表示されるかを確認できます。
 テスト中にビジュアル・アシストをクリックして、正しいデータ項目を選択したかどうかを確認することができます。終了する前に変更を保存してください。

処理オプション・テンプレートのレポートへの添付

ランタイム時に処理オプションの機能を使用するには、処理オプション・テンプレートをレポートに添付する必要があります。テンプレートは別のオブジェクトとして存在するため、同じオブジェクトを複数のレポートに添付できます。

▶ 処理オプション・テンプレートをレポートに添付するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、処理オプション・テンプレートを添付するレポートを開きます。
2. [File]メニューから[Select Processing Options (処理オプションの選択)]を選択します。
3. 〈Select Processing Option Template〉で、使用するテンプレートを選択して[OK]をクリックします。

[File]メニューの[Select Processing Options]の横にチェックマークが付き、処理オプション・テンプレートがこのレポートに添付されたことを示します。

4. レポートに正しい処理オプション・テンプレートが添付されたかどうか確認するには、
[Report]メニューから[Report Properties(レポート・プロパティ)]を選択します。

[Processing Options(処理オプション)]フィールドに、レポートに添付された処理オプションが表示されます。
5. 既存の処理オプション・テンプレートを削除するには、[File]メニューから[Select Processing Options]を選択します。
6. 〈Select Processing Option Template〉で、eport テンプレートを選択して[Remove(削除)]をクリックします。

ディレクタ・テンプレートの処理

〈Report Design Director〉は、レポート・オブジェクトの作成をサポートし、設計プロセスを段階ごとにガイドすることにより、レポートの設計を容易にします。グループ、カラム、表セクションを作成できるだけでなく、〈Director〉ではディレクタ・テンプレートを使用して財務レポート、固定資産、作業原価などのアプリケーションのレポートを作成できます。これらのテンプレートは J.D. Edwards ソフトウェアに組み込まれており、デフォルトの条件が設定されています。〈Director〉でテンプレートを選択すると、(テーブルに保存されている)テンプレート・スペックが読み込まれ、〈Director〉のフォームにそのデフォルト条件が表示されます。また、〈スマート・フィールド・テンプレート〉プログラム(P91420)および〈レポート・ディレクタ・テンプレートの処理〉プログラム(P91400)を使用して、独自のテンプレートを作成することもできます。作成する各ディレクタ・テンプレートについて、次のスペックを指定する必要があります。

- デフォルト・ビューとして使用するビジネス・ビュー
- レポートに添付する処理オプション
- 表示する〈Director〉フォーム
- カラム選択用に表示するスマート・フィールド
- 優先スマート・フィールド・データ選択
- 優先データ順序設定
- 組み込む追加プロパティ

テンプレート・スペックは、次のテーブル OneWorld テーブルに保管されています。

レポート・ディレクタ・テンプレート (F91400)	このテーブルには、デフォルトのビジネス・ビューと処理オプション情報が保管されます。
レポート・ディレクタ・テンプレート 順序項目(F91410)	優先データ順序設定についての情報が保管されます。
レポート・ディレクタ・テンプレートのスマート・フィールドのアクティブ化(F91420)	どのスマート・フィールドを表示するかについての情報が保管されます。
スマート・フィールド・テンプレート条件 (F91430)	スマート・フィールドのデータ選択についての情報が保管されます。

スマート・フィールド・テンプレートの処理

スマート・フィールド・テンプレートを使用してスマート・フィールドをグループ化し、ディレクタ・テンプレートにまとめて組み込むことができます。たとえば、「S09001-財務レポート」というスマート・フィールドには、財務レポート用のスマート・フィールドがすべて組み込まれています。J.D. Edwards のソフトウェアには事前定義済みのスマート・フィールド・テンプレートがあります。〈スマート・フィールド・テンプレート〉プログラム(P91420)を使用して、目的に合うように新しいスマート・フィールド・テンプレートを追加したり、既存のスマート・フィールド・テンプレートを修正できます。

ディレクタ・テンプレートを作成する際、スマート・フィールド・テンプレートをディレクタ・テンプレートに添付する必要があります。スマート・フィールド・テンプレートに含まれるスマート・フィールドおよびデータ・フィールドによって、どのテンプレートを添付するかが決まります。たとえば、財務レポートを作成しているとき、「S09001 - 財務レポート」というスマート・フィールドには必要なスマート・フィールドまたはデータ・フィールドがすべて組み込まれます。したがって、ディレクタ・テンプレートに添付するスマート・フィールド・テンプレートとして S09001 を指定できます。ディレクタ・テンプレートを使ってレポートを作成する場合、指定したテンプレートのスマート・フィールドが〈Director〉の〈Select Column (カラムの選択)〉フォームで [Available Smart Fields (使用可能なスマート・フィールド)] に表示されます。このフォームでレポートに組み込むフィールドを選択できます。

また、テンプレートに組み込むスマート・フィールドを指定するだけでなく、スマート・フィールド・カラム内のデータ選択に使用されるフィールドも選択できます。選択したフィールドは〈Director (ディレクタ)〉の〈Smart Field Data Selection (スマート・フィールドのデータ選択)〉フォームに表示されます。

はじめる前に

- スマート・フィールド・テンプレートを作成する前に、そのテンプレートに組み込むスマート・フィールドが既に存在している必要があります。スマート・フィールドの作成方法については『開発ツール』ガイドの「スマート・フィールド・トリガーの添付」を参照してください。

▶ 新規スマート・フィールド・テンプレートを作成するには

〈上級レポート設定〉メニュー (GH9141) から〈スマート・フィールド・テンプレート〉を選択します。

1. 〈スマート・フィールド・テンプレートの処理〉で、[追加] をクリックします。
2. 〈スマート・フィールド・テンプレートの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - スマート・フィールド・テンプレート
 - 記述
3. [データ項目] フィールドをクリックして、ビジュアル・アシストを表示します。
4. 〈スマート・フィールドの検索/選択〉フォームが表示されます。
 - スマート・フィールド
5. [検索] をクリックして、使用可能な [スマート・フィールド] をすべて表示します。

検索対象を絞り込むには QBE を使用します。
6. スマート・フィールドを選んで [選択] をクリックします。
7. 手順 3 から 7 を繰り返して、スマート・フィールド・テンプレートに組み込むスマート・フィールドをすべて追加します。
8. 〈スマート・フィールド・テンプレートの改訂〉で、[OK] をクリックします。

〈スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂〉フォームが表示されます。このフォームで、スマート・フィールド・データ選択を確定します。
9. 〈スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂〉で、[データ項目] フィールドでビジュアル・アシストをクリックします。

注:

この検索フォームでは、システムにあるすべてのデータ項目を選択できます。使用するビジネス・ビューに適した項目だけを選択するようにしてください。

10. 〈エイリアス別データ辞書の検索/選択〉フォームで、[検索]をクリックして使用可能なデータ項目を表示します。

検索対象を絞り込むには QBE を使用してください。

11. データ項目を選んで[選択]をクリックします。
12. 〈スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂〉で、選択したデータ項目のローの次のフィールドに値を入力します。

- 値範囲

“0”を入力すると、データ項目が単一値のみになります。データ項目に「開始勘定科目から最終勘定科目まで」といった値の範囲を設定するには、“1”を入力します。これらのデータ項目は、〈Director〉の〈Smart Field Data Selection〉フォームに表示されます。

13. 手順 9 から 12 を繰り返してスマート・フィールド・データ選択のデータ項目をすべて選択したら、[OK]をクリックします。

注:

入力できるデータ項目は 5 つまでです。値の範囲の指定には、2 つのデータ項目を使用することになります。

14. 〈Director〉を使用してアプリケーションを作成する場合、〈Smart Field Data Selection〉フォームに表示するデータ項目の順序を確定するには、〈Display Sequences (順序の表示)〉を使用します。

スマート・フィールド・テンプレートを使用するには、ディレクタ・テンプレートに添付する必要があります。

参照

- スマート・フィールド・テンプレートをディレクタ・テンプレートに添付する方法については「ディレクタ・テンプレートの追加または修正」

▶ 既存のスマート・フィールド・テンプレートを修正するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈スマート・フィールド・テンプレート〉を選択します。

1. 〈スマート・フィールド・テンプレートの処理〉で、修正するテンプレートを選んで[選択]をクリックします。
2. 〈スマート・フィールド・テンプレートの改訂〉で、スマート・フィールドを追加または削除して[OK]をクリックします。
3. 〈スマート・フィールド・テンプレートの処理〉で、このテンプレートのスマート・フィールド・データ選択を変更するには、[ロー]メニューから[テンプレート条件]を選択します。

4. 〈スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂〉で、[データ項目]フィールドでビジュアル・アシストをクリックします。
5. 〈エイリアス別データ辞書の検索/選択〉フォームで、[検索]をクリックして使用可能なデータ項目を表示します。
検索対象を絞り込むには QBE を使用してください。
6. データ項目を選んで[選択]をクリックします。
7. 〈スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂〉で、選択したデータ項目のローの次のフィールドに値を入力します。
 - 値範囲
"0"を入力すると、データ項目が単一値のみになります。データ項目に「開始勘定科目から最終勘定科目まで」といった値の範囲を設定するには、"1"を入力します。これらのデータ項目は、〈Director〉の〈Smart Field Data Selection〉フォームに表示されます。
8. 手順 4 から 7 を繰り返してスマート・フィールド・データ選択のデータ項目をすべて選択したら、[OK]をクリックします。

注:

入力できるデータ項目は 5 つまでです。値の範囲の指定には、2 つのデータ項目を使用することになります。

9. 〈Director〉を使用してアプリケーションを作成する場合、〈Smart Field Data Selection〉フォームに表示するデータ項目の順序を確定するには、〈Display Sequences (順序の表示)〉を使用します。

スマート・フィールド・テンプレートを使用するには、ディレクタ・テンプレートに添付する必要があります。

参照

- スマート・フィールド・テンプレートをディレクタ・テンプレートに添付する方法については「ディレクタ・テンプレートの追加または修正」

ディレクタ・テンプレートの追加または修正

このセクションでは、ディレクタ・テンプレートの作成および修正のための〈レポート・ディレクタ・テンプレートの処理〉プログラム(P91400)の使用方法を説明します。テンプレートを作成または修正すると、〈Director〉の〈Welcome (ようこそ)〉フォームで使用できるようになります。

注意:

ディレクタ・テンプレートに関連するスマート・フィールドは、テンプレートに関連するビジネス・ビューのビジネス・ビュー・カラムを基準とします。異なるビジネス・ビューを選択したり変更した場合は、関連するスマート・フィールドが正しく機能しないこともあります。変更を加える前に、スマート・フィールドにどのビジネス・ビュー・カラムが必要かを把握してください。

参照

次のトピックを参照してください。

- 〈Director〉の〈Welcome〉フォーム上での記述の表示については「アプリケーション・レポート・テンプレートを選択するには」
- 〈Director〉の〈Data Sequencing Help〉フォームについては、「Advanced(上級)オプションをオフにしてセクション・データ順序設定を定義するには」と「Advanced(上級)オプションをオンにしてセクション・データ順序設定を定義するには」

はじめる前に

- ディレクタ・テンプレートを追加する際、スマート・フィールド・テンプレートの名称を指定する必要があります。既存のスマート・フィールド・テンプレートに必要なスマート・フィールドがない場合、アプリケーションに合うスマート・フィールドを作成する必要があります。スマート・フィールド・テンプレートの追加または修正については「スマート・フィールド・テンプレートの処理」を参照してください。

▶ ディレクタ・テンプレートを追加または修正するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈レポート・ディレクタ・テンプレート〉を選択します。

1. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの処理〉フォームで、[追加]をクリックしてディレクタ・テンプレートを追加します。

既存のディレクタ・テンプレートを修正するには、[検索]をクリックして修正するテンプレートを選択します。

2. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。

- レポートテンプレート/記述

〈Director〉の〈Welcome〉フォームで下向き矢印をクリックするとこの記述が表示されます。

3. [ブロックの作成]タブをクリックして、次のフィールドに値を入力します。

- セクションタイプ
- ビジネス・ビュー
- 処理オプション
- スマート・フィールド・テンプレート

このフィールドは、表セクション・タイプの作成を選択した場合のみアクティブになります。

4. [デフォルトの順序およびレベル区切り]カラムの下にある[データ項目]フィールドをクリックして、ビジュアル・アシストを表示します。
5. ビジュアル・アシストをクリックします。
6. 〈エイリアス別データ辞書の検索/選択〉フォームで、[検索]をクリックして使用可能なデータ項目を表示します。

検索対象を絞り込むには QBE を使用してください。

7. グリッドでデータ項目を選び、[選択]をクリックします。

8. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉で、次のローにある[データ項目]フィールドをクリックします。

7 で選択したデータ項目に対して、[記述]と[表示順序]が自動的に表示されます。
9. レポートに組み込む各データ項目について手順 4 から 8 を繰り返します。

グリッドにリスト表示された最初の 2 つのデータ項目記述は、〈Director〉の〈Data Sequencing Help (データ順序設定ヘルプ)〉フォームの[Report Grouping (レポート・グループ)]カラムに反映され、続くデータ項目記述は[Report Detail (レポート詳細)]カラムに反映されます。
10. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉で、[プロパティ]タブをクリックします。
11. 必要に応じて次のオプションをクリックします。
 - 財務記述の使用
 - 詳細レベルの表示
 - AAI 小計の表示
 - 調整サインの表示
 - 非表示ゼロ・ローの表示
 - 汎用条件の表示
 - 財務データ条件の表示
12. [ドリル・ダウン]タブをクリックします。

[ドリル・ダウン]オプションをオンにすると、〈Director〉の〈Additional Properties (追加プロパティ)〉に表示されます。〈Director〉を使用してレポートを設計した後で、ディレクタ・テンプレートで指定したアプリケーションやフォーム、バージョンを起動してレポートに表示されるデータの詳細を参照できます。
13. 〈アプリケーションの処理〉で、レポートのデータを調べる場合に起動するアプリケーションを検索して選択します。
14. [選択]をクリックします。
15. 〈フォームの処理〉で、フォームを選んで[選択]をクリックします。

フォームおよびアプリケーションに複数のバージョンが存在する場合、〈バージョンの処理〉フォームが表示されます。
16. 〈バージョンの処理〉で、バージョンを選んで[選択]をクリックします。
17. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉で、[OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
レポートテンプレート/記述	レポートに使用する事前定義されたスペックのセット
セクションタイプ	レポートディレクタ・テンプレートでメインセクションに使用するセクションタイプ
ビジネス・ビュー	レポートディレクタ・テンプレートに関連するデフォルトビジネスビュー
処理オプション	レポートディレクタ・テンプレートに関連する処理オプションテンプレート
スマート・フィールド・プレート	スマートフィールドテンプレートを検索するには、ビジュアルアシストを使うと便利です。スマートフィールドテンプレートは、ONEWORLD またはカスタムテンプレートとともに出荷されることがあります。
財務記述の使用	主科目の正しい記述を表示します。有効にすると、レポートディレクタで財務諸表用に[表セクション]プロパティがオンに設定されます。
詳細レベルの表示	[詳細レベル表示]により、ディレクターの〈追加プロパティ〉フォームに[勘定科目詳細レベルの積上げ]プロパティを表示するかどうか決定されます。詳細勘定科目レベルの積上げは、勘定科目表の詳細レベルセットに基づいた主科目の集計方法です。
AAI 小計の表示	AAI の小計プロパティをレポートディレクターの〈プロパティ〉フォームに表示するかどうか指定します。AAI の小計を使用すると、AAI の財務諸表に基づいて小計が挿入されます。
調整サインの表示	レポートディレクターの追加プロパティ・フォームに調整符号プロパティを表示するかどうかを決定するプロパティ。借方/貸方の符号を変更するために使用します。
非表示ゼロ・ローの表示	<p>[ゼロ・ローの非表示]プロパティをレポートディレクタの〈その他のプロパティ〉フォームに表示するかどうか指定します。次のオプションを使用して、表セクションのローの印刷を制御します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ゼロ・ローを印刷する ・ ゼロ詳細ローのみを印刷しないようにする ・ すべてのゼロ・ローを印刷しないようにする
財務データ条件の表示	<p>選択すると、レポートディレクタで[セクションデータ選択]フォームが表示されます。</p> <p>[財務基準の表示]を選択すると、レポートディレクタで[データ選択]ヘルプのフォームが表示されます。貸借対照表または損益計算書に基づいて勘定科目が選択できます。</p>

レポートへのテキスト添付の追加

J.D. Edwards ソフトウェアでは、テキストをデータベース内のレコードに添付することができます。たとえば、「顧客から 1999 年 2 月 1 日に支払を送付したという通知あり」などの、取引について説明するコメントを添付することができます。J.D. Edwards の対話型アプリケーションからのレコードにテキストを添付することができます。

レコードの添付テキストが表示されるようにレポートを設計できます。こうすると、対話型アプリケーションの場合と同じように添付テキストを表示できます。

次の図は、レポートで「備考」見出しの下にテキストがどのように表示されるかを示します。

R55LWGT	J.D. Edwards & Company				99/2/1 15:49:26
	伝票明細				Page - 1
伝票番号	伝票タイプ	請求書日付	総額	備考	
1564	PV	05/6/5	1,500.00	99/2/1 付で 支払通知あり	
伝票番号	伝票タイプ	請求書日付	総額	備考	
1565	PVC	05/6/15	2,500.00	伝票 G9870 承認済み	

参照

- If/While 条件の作成については「イベント・ルールでの If/While ステートメントの作成」

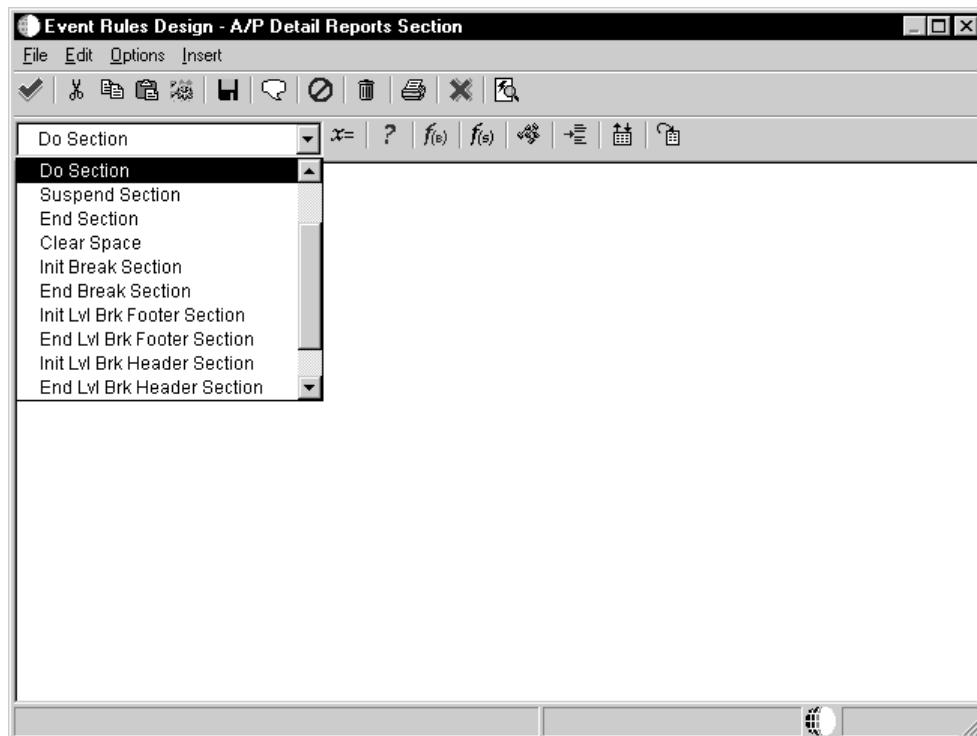
はじめる前に

- ここでは、レポートに組み込まれるレコードに既に添付テキストがあると仮定します。テキスト添付の追加について、『基本操作』ガイドの「メディア・オブジェクトの添付」を参照してください。
- 既存のレポートにアクセスするか、テキストを添付したレコードが印刷される新規レポートを作成します。既存のレポートの呼出し、および新規レポート設計の作成については「レポート・オブジェクトの作成」か「レポート設計」を参照してください。
- J.D. Edwards では、データ構造体を使用してレポートをその添付テキストに関連付けます。このタスクでは、対話型アプリケーションがレコードと添付テキストの関連付けに使用するデータ構造体の名称を指定してください。〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を使用すると、すべてのメディア・オブジェクト・データ構造体(オブジェクト・タイプ GT)のリストを表示できます。メディア・オブジェクト・データ構造体については『開発ツール』ガイドの「メディア・オブジェクト・データ構造体の作成」を参照してください。

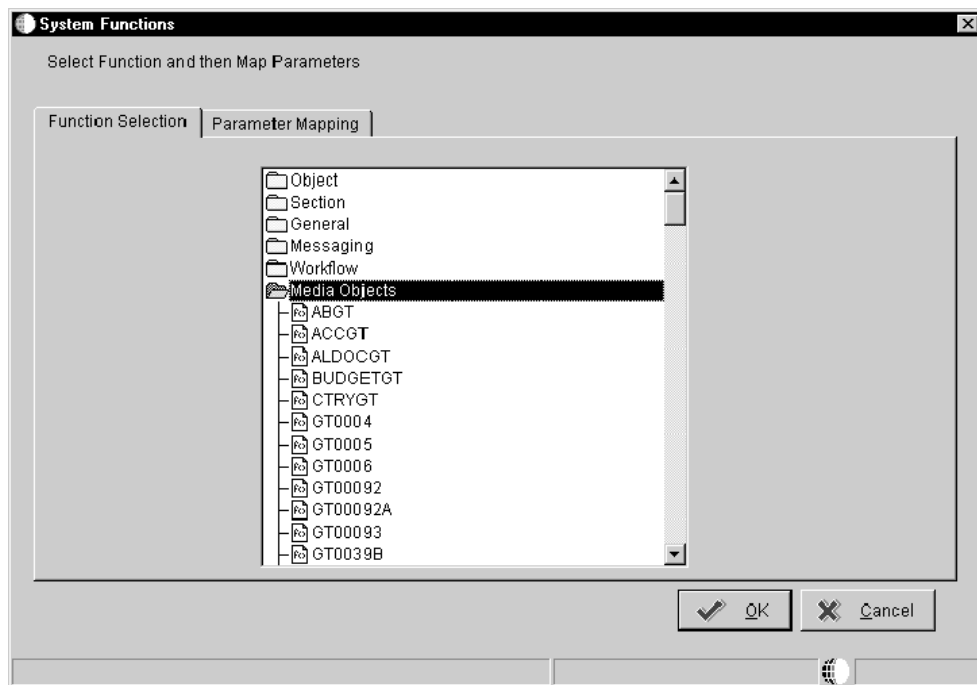
▶ レポートにテキスト添付ファイルを追加するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

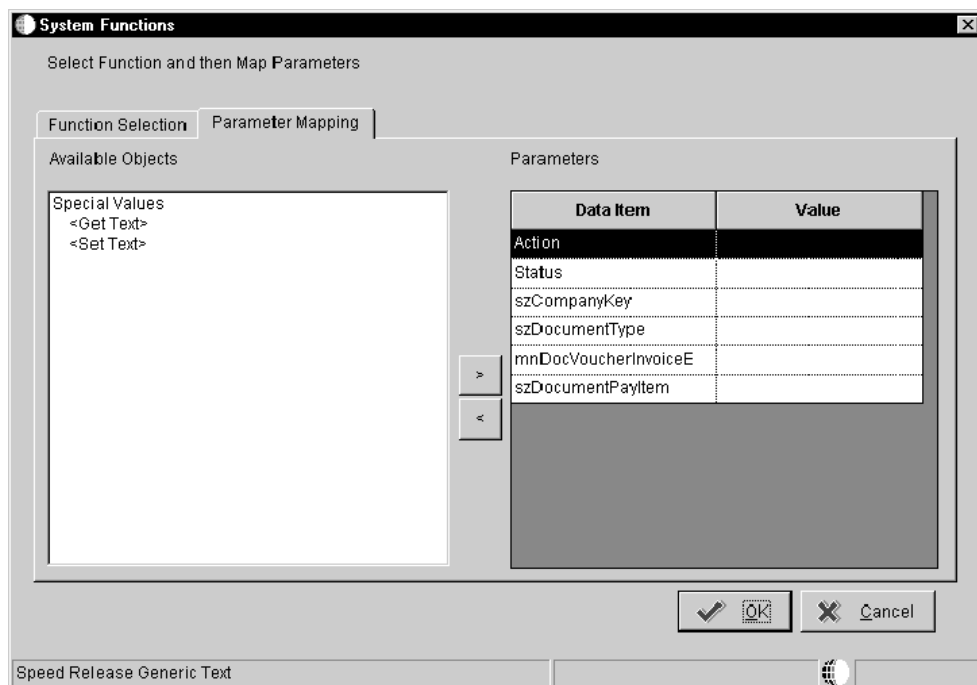
1. 〈Report Design〉で、レポートを選択し、テキスト添付を追加する詳細セクションを選択します。
2. [Insert(挿入)]メニューから[Alpha Variable(英字変数)]を選択します。
3. 詳細セクションに変数を挿入します。
4. 挿入した英字変数フィールドのヘッダーではなく本体の方をダブルクリックします。
該当するプロパティ・フォームが表示されます。
5. [Description(記述)]タブをクリックして、次のフィールドを変更します。
 - Variable Name(変数名)
コラムまたは変数プロパティを「備考」などの名称に変更します。
6. [Display(表示)]タブをクリックして、次のフィールドをそのフィールドに表示される添付テキストの長さに修正します。テキストが表示桁数より長い場合、テキストは折り返されます。
 - Display Length(表示する長さ)
7. [OK]をクリックします。
8. レポートの詳細セクションをクリックして新規作成した英字変数の選択を解除し、[Edit]メニューから[Event Rules]を選択します。
9. 〈Event Rules Design〉で、イベント・リストから[Do Section]イベントを選択します。



10. [Insert]メニューから[System Function]を選択します。



11. 〈System Functions〉フォームの[Function Selection(関数選択)]タブで、[Media Object(メディア・オブジェクト)]フォルダをダブルクリックして、使用可能な関数をすべて表示します。
12. 元のアプリケーションに添付されていたメディア・オブジェクト・データ構造体を選択します。
13. [Parameter Mapping]タブをクリックします。



Action(処理)と Status(状況)を除いて、この画面に表示されるパラメータは設定した条件によって異なります。

14. 次の2つのパラメータを定義します。

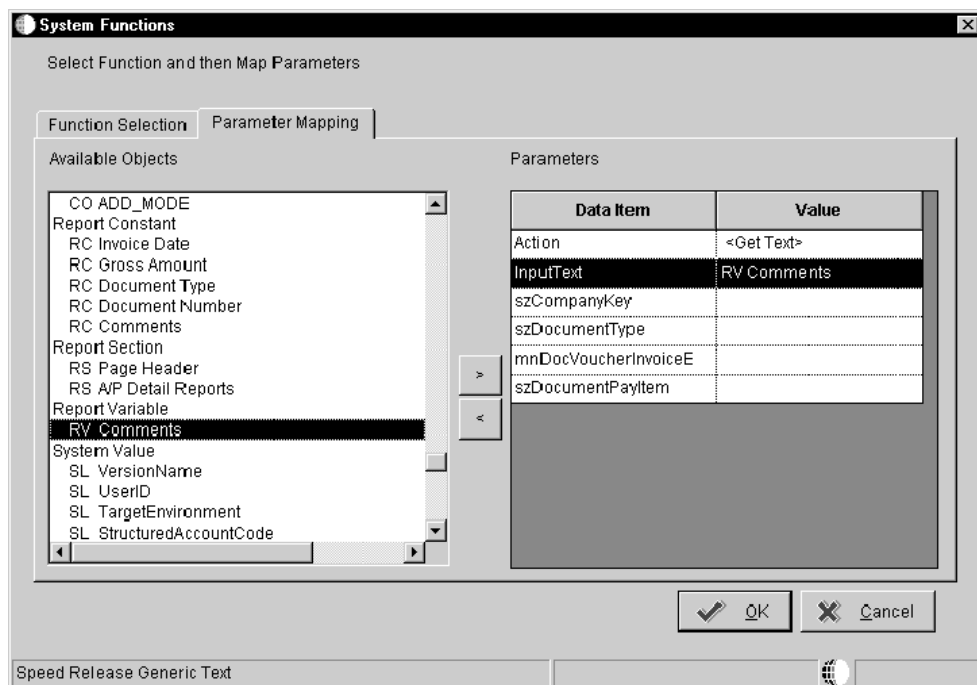
- Action(処理)

[Available Objects]から<Get Text(テキストの取得)>を選択します。この処理により関数が呼び出され、主要パラメータに関連付けられた汎用テキストが取り込まれます。

- Status(状況)

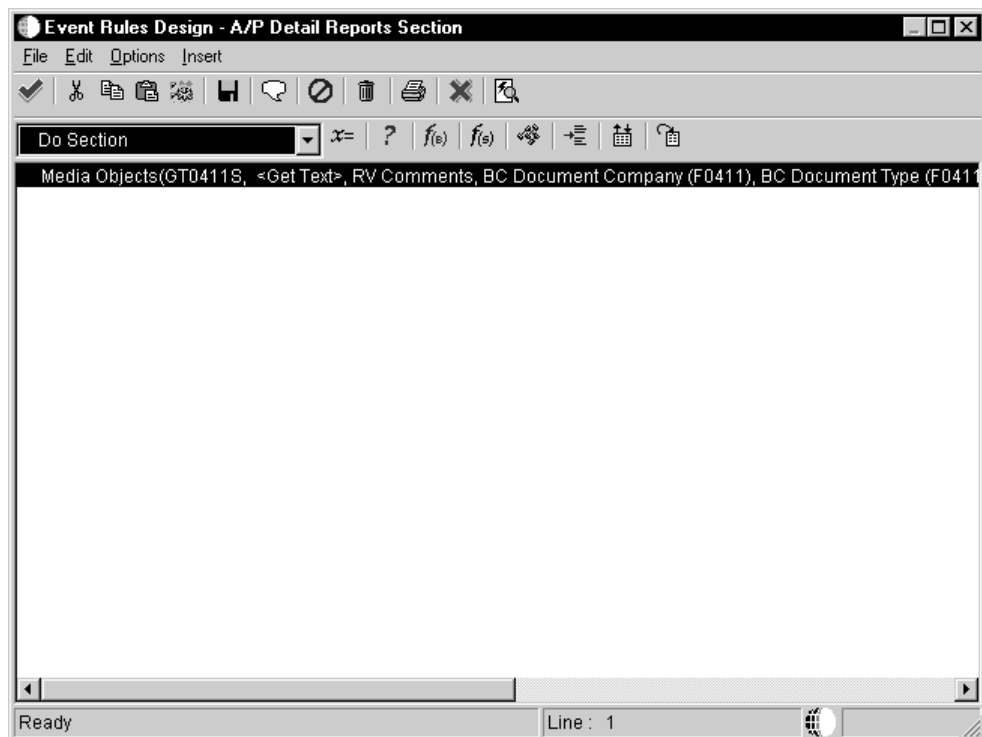
[Action]に対して<Get Text>を選択すると、このデータ項目は[Input Text(入力テキスト)]に自動的に変わります。[Input Text(入力テキスト)]には、取り込んだテキストを入力する変数が示されます。

[Available Objects]から[RV Comments]を選択します。



15. [Available Business View(使用可能なビジネス・ビュー)]カラムを使用して、他のすべてのパラメータを定義してから[OK]をクリックします。

次の図と同じようなイベント・ルールが、〈Event Rule Design〉フォームに表示されます。イベント・ルールは入力した条件によって異なります。



16. 〈Event Rules Design〉でチェックマークをクリックして保存し、〈Report Design〉に戻ります。

17. レポートをプレビューまたは実行します。

汎用テキストが添付されたレコードについては、英字変数の位置にテキストが表示されます。

特定のレコードに対する汎用テキストを表示するには、If/While 条件を設定してください。レコードに汎用テキストがないか、If/While 条件によってレコードが除外されている場合は、英字変数の位置にテキストは表示されません。

レポート・プロパティの処理

〈Report Design〉でレポート・プロパティを変更すると、レポートおよびバージョンの出力を修正できます。レポート・プロパティには、フォーマットや表示されるレコード数、フォント・タイプ、色、上級プロパティなどの詳細が含まれます。

レポートを修正して、カスタマイズしたフォーム・タイプに対応することもできます。たとえば、宛名ラベルや税用のフォーム、事前印刷済みの小切手に情報を印刷する場合、レポートのプロパティを設定してハード・コピーのサイズに合わせることも可能です。また、ライン・プリンタで正しく印刷できるように、レポートのフォントを変更することもできます。

修正できるプロパティは、レポート・フォーマット、表示レコード数、デフォルト・フォントおよび色、表紙オプション、十進法、上級プロパティなどレポート全体に及びます。

参照

- このオプションの使用については『開発ツール』ガイドの「トランザクション処理」

▶ レポート・プロパティを処理するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Report Properties]を選択します。
2. 〈Properties(プロパティ)〉フォームで、[Report Properties(レポート・プロパティ)]タブをクリックし、必要に応じて次のオプションをクリックします。
 - Print Totals Only(合計のみ印刷)
 - Print Grand Totals(総合計の印刷)
 - Suppress All Output(全出力の非表示)
 - Limit Number of Primary Table Rows(基本テーブル・ロー数の制限)
3. [Font/Color(フォント/色)]タブをクリックします。
4. [Apply settings to all Objects(設定を全オブジェクトに適用)]を選択して、[Default(デフォルト)]をクリックするか、他のオプションを変更します。

[Apply settings to all Objects]を選択すると、個々のフィールドで選択したフォントおよび色は一時変更されます。

5. [Cover Page Options(表紙オプション)]タブをクリックします。

6. 必要に応じて次のオプションをクリックします。

- Print Cover Page(表紙の印刷)

表紙には、レポート・プロパティやシステム・プロパティ、プリンタ・プロパティ、処理オプションなど、レポートまたはバッチ処理に関する情報が記載されます。さらに、セクション・プロパティやオブジェクト・プロパティ、データ選択および順序設定、ロー・プロパティなど、セクション・レベルでも情報が表示されます。これらのプロパティについて、表紙に表示される詳細のレベルを選択できます。

レポート・テンプレートの[Properties]の[Cover Page Options]タブで[Print Cover Page]オプションを選択すると、レポートのそのバージョンでは表紙は印刷されません。あるバージョンについて表紙を指定する場合、〈Version Detail(バージョン詳細)〉または〈Advanced Version Detail(上級バージョン詳細)〉を使用してこのオプションをオンにする必要があります。

- Report Properties(レポート・プロパティ)
- System Properties(システム・プロパティ)
- Printer Properties(プリンタ・プロパティ)
- Processing Options(処理オプション)
- Section Properties(セクション・プロパティ)
- Data Selection(データ選択)
- Data Sequencint(データ順序の設定)
- Object Properties(オブジェクトのプロパティ)

7. [Decimal Scaling(十進法)]タブをクリックして、次のオプションのいずれかを選択します。

- No Scaling(十進法なし)
- Scaling from 1 – 1,000,000,000(1 から 10 億までの十進法)
- Apply settings to all Objects(設定を全オブジェクトに適用)

8. [Advanced(上級)]タブをクリックしてから、必要に応じて次のオプションを選択して変更します。

- Subsystem(サブシステム)
- Wait Time(待ち時間)(ms)
- Custom(カスタム)
- Enabled(有効)
- Target(ターゲット)
- Source(ソース)
- Prompt for overrides at runtime(実行時にプロンプト表示)

9. [OK]をクリックして変更内容を保存します。

フィールド記述

記述	用語解説
合計のみ印刷	合計を付き集計レポートのみを作成します。
総合計の印刷	レポートの最後に総計の印刷ができます。
全出力を非表示	チェックすると、このレポートには PDF ファイルは作成されません。
ロー数の制限	レポートが処理するデータのローの数を制限するには、ここをクリックしてください。
ロー数の制限 - 入力	<p>レポートの基本テーブルから選択および処理を行うデータのローの数を設定してください。</p> <p>注:これは新しいレポートのテストに役立ちます。</p>
表紙印刷	使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。
サブシステム	サブシステムジョブとして定義するバッチアプリケーションを使用可能にします。
待ち時間	次のサブシステムデータを照会する前にサブシステムがスリープの状態である時間。単位はミリ秒。
環境の一時変更	<p>ソース環境の一時変更の場合: レポートは、選択された環境を使用します。</p> <p>ターゲット環境の一時変更の場合: レポートは、データベース出力用に選択された環境を使用します。</p> <p>ソース環境／ターゲット環境を選択するには、ブラウザをクリックします。</p>
実行時にプロンプト表示	レポートの実行時に、データソース名または環境名を指定するようにユーザーにプロンプトを表示します。
専用フォーム	特別サイズのフォームを使用するレポートを指定します。
トランザクション処理	この処理またはレポートに対する取引処理を可能にします。コミットコマンドが発行されるまで計算が待ち行列に保存されるよう、取引処理は指定された取引境界内で行われます。

ダイナミックな配置

ダイナミックな配置には次の機能があります。

- ライン・プリンタまたは英語以外の言語でレポートを印刷する場合に、新しいフォントを自動的に適用するように指定できます。
- レポートでオブジェクトの幅を自動的に調節し、フォントの置換時に重複しないようにします。

この機能は、レポートを複数の言語で印刷する場合に便利です。たとえば、レポートを英語、ギリシャ語、中国語で印刷するとします。レポートはそれぞれ、英語を Arial で、ギリシャ語を Haettenschweiler で、中国語を SimSun で印刷するとします。ギリシャ語と中国語のフォントは英語のフォントより広いため、レポートのオブジェクトが自動的に再配置され、重複を防ぐことができます。

ダイナミックな配置は、レポートを大量にライン・プリンタで出力する場合や異なるフォントで表示して読みやすくしたい場合などに便利です。レポートをライン・プリンタに送る場合は、プロポーショナル・フォント以外のフォントを指定してください。

ダイナミックな配置では、フォントを置換する際にレポート・オブジェクトの高さに対して調節されません。レポートにフォント置換を使用する場合は、異なる行にあるレポート・オブジェクトにスペースを設けてください。

ダイナミックな配置を使用するには、次の処理を実行してください。

- レポートが処理されるマシンでダイナミックな配置を有効にする。
- 言語とライン・プリンタにフォント置換を定義する。

マシンでダイナミックな配置を無効にした後は、無効にしないでください。ただし、個々のレポートにはダイナミックな配置を無効にすることができます。

フォント置換を適用したレポートを表示することもできます。

サーバー/クライアントにおけるダイナミックな配置の使用

サーバーまたはクライアントでレポートを処理する際にダイナミックな配置を使用可能にするには、jde.ini ファイルに行を挿入する必要があります。複数のマシンでレポートを実行してダイナミックな配置を適用する場合、ダイナミックな配置を各マシンで有効にする必要があります。

一度ダイナミックな配置を有効にした後は、マシン・レベルでは無効にしないでください。個々のレポートに対してはダイナミックな配置を一時変更できます。

▶ サーバー/クライアントでダイナミックな配置を有効にするには

Notepad を使って、jde.ini を開きます。

1. [UBE]セクションで、次の行を入力します。

UBEDynamicPositioning=1

2. jde.ini ファイルを保存して閉じます。

フォント置換の定義

バーコード・フォント・サポート・テーブル(G986166)を使用して、レポートの処理時にどのフォントを置換するかを指示します。たとえば、Arial フォントを使用してレポートが作成されているが、Times Roman で印刷したい場合、フォント置換テーブルにこの置換を入力します。

フォントの置換は次の場合に最も便利です。

- レポートをライン・プリンタに送信する際に使用するフォントを定義する。
- レポートを外国語で印刷する際に使用するフォントを定義する。

フォント置換テーブルを使用すると、フォント・サイズではなく新しいフォントを指定できます。フォントが置換されると、ダイナミックな配置により自動的にレポートの項目の位置が調整され、新しいフォントの幅に適応します。レポートの項目の高さはそのままです。

▶ 言語タイプ別にフォントの置換を表示するには

〈バッチ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈言語タイプ別のフォント代替〉を選択します。

〈言語タイプ別のフォント代替の処理〉フォームで、QBE に言語タイプを入力して[検索]をクリックします。

入力した言語タイプについて定義されているすべてのフォント置換に表示されます。

▶ 言語またはライン・プリンタにフォント置換を定義するには

〈バッチ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈言語タイプ別のフォント代替〉を選択します。

1. 〈言語タイプ別のフォント代替の処理〉フォームで、[追加]をクリックします。
2. 〈言語別フォント置換の改訂〉で、次のフィールドに入力して[OK]をクリックします。

- 言語タイプ

ライン・プリンタにフォント置換を定義する場合、このフィールドはブランクのままにして英語を選択します。

- 元のフォント名

ライン・プリンタには"*JDE LINE"と入力します。

- 新しいフォント名

ライン・プリンタには、プロポーショナル・フォント以外のフォント(Courier New)などを指定してください。

▶ 言語タイプ別にフォントの置換を変更するには

〈バッチ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈言語タイプ別のフォント代替〉を選択します。

1. 〈言語タイプ別フォント置換の処理〉で、置換を変更するフォントをダブルクリックします。
2. 〈言語タイプ別フォント置換の改訂〉で、次のフィールドに入力して[OK]をクリックします。
 - 新しいフォント名

レポートのフォント置換の有効化/無効化

使用するフォントがレポートで既に使われている場合は、一時変更を選択してフォント置換を無効にすることができます。フォント置換を無効にしてレポートを保存すると、レポートのフォント置換は無効のままになります。後でフォント置換を使用する場合は、一時変更を解除してフォント置換を再度有効にする必要があります。

▶ 個々のレポートでフォント置換を有効/無効にするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フォント置換を有効/無効にするレポートを選択します。
2. [File]メニューから[Report Properties]を選択します。
3. 〈Properties〉で、[Advanced(上級)]タブをクリックします。
4. [System Language Font(システム言語フォント)]で、[Override(一時変更)]を選択します。
[Override]が選択されている場合、フォント置換は無効です。[Override]が選択されていない場合、フォント置換は有効です。
5. [OK]をクリックします。

一旦[Override]を有効にすると、レポートに対してフォント置換は適用されなくなります。

レポート・テンプレートへのフォント置換の適用

レポートを処理する前に、レポートにおける新しいフォントの表示を確認するために、レポート・テンプレートにフォント置換を適用することができます。

フォント置換テーブルで置換リストに新しいフォントが既に含まれている場合は、レポートの処理時に置換されます。たとえば、フォント置換テーブルで Arial は Times New Roman に、Times New Roman は Courier で置き換えられると定義されていて、Arial のレポートにフォント置換を実行した場合、このレポート・テンプレートでレポートは Times New Roman で表示されます。レポートを印刷すると、システムによりフォントが Times New Roman から Courier に置き換えられます。この置換を行わないようにするには、使用したいフォントでレポートが表示された後でフォント置換を無効にしてください。

▶ レポート・テンプレートにフォント置換を適用するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、フォント置換を適用するレポート・テンプレートを選択します。
2. [File]メニューから[Report Properties]を選択します。
3. 〈Properties〉で、[Advanced(上級)]タブをクリックします。
4. [System Language Font(システム言語フォント)]セクションで、[Use System Language Font(システム言語フォントの使用)]をクリックします。

レポートで現在使用しているフォントにフォント置換が定義されている場合、システムにより現在のフォントが置換され、レポートの項目がダイナミックに配置されて新しいフォントに適応します。

財務ロー・レポートでのビジネス・ビューV8300005 の使用

ERP 9.0 では、財務ロー・レポートのシステム・パフォーマンスを向上させるために、新しいビジネス・ビュー(V8300005)が追加されました。V8300005 は、F0901、F0902、および F0006 テーブルを結合したものです。このビジネス・ビューを使用したレポートを出力すると、残高のある勘定科目のみ表示されます。ヘッダーやタイトル勘定科目は表示されません。このビジネス・ビューは、各ローが個々に定義されている財務ロー・レポートで使用してください。

ERP 9.0 の一部としては V830005 が含まれていないが、ESU の一部として受け取っている場合は、財務ロー・レポートのレポート・ディレクタ・テンプレートを手作業で変更して新しいビジネス・ビューを使用してください。

▶ ビジネス・ビューV830005 を使用するように財務ロー・レポート・ディレクタ・テンプレートを変更するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈レポート・ディレクタ・テンプレート〉を選択します。

1. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの処理〉で、[検索]をクリックしてレポート・ディレクタ・テンプレートのリストを表示します。
2. S09003(財務ロー・レポート)を選んで[選択]をクリックします。
3. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉の[ブロックの作成]タブで、ビジネス・ビューの値を V8300001 から V8300005 に変更して[OK]をクリックします。

レポート用バッチ・バージョン

バッチ・バージョンとはユーザー定義による一連のスペックを意味します。これらのスペックはバッチ処理を制御します。通常、バッチ・バージョンはレポートまたはバッチ処理と関連しており、J.D. Edwards のエンタープライズ・サーバー上でバッチ・ジョブとして実行されます。

レポート用バッチ・バージョンは、基本レポート(またはバッチ・スペック)とは別のファイルに含まれる事前定義済みのスペックを表します。これらのスペックはレポートのロジック機能と外観を制御します。バージョンには処理オプションのデフォルト値およびレポート設計に関する追加設定が含まれます。アプリケーションのセキュリティの割り当て方によっては、ユーザーが目的に応じて異なるバージョンを選択したり作成したりできます。

バージョンは、レポート機能を修正する有効で便利な方法です。通常、最初のバッチ・バージョンは管理者によって制御、作成、修正、検索されます。バッチ・バージョンは、J.D. Edwards ソフトウェアや特定のアプリケーションを新しいリリース・レベルにアップグレードしても、修正なしでそのまま適用できます。

バッチ・アプリケーションを実行する(バッチ・ジョブを投入する)には、バッチ・バージョンを使用する必要があります。レポートの設計によっては、そのバージョンの処理オプションを一時変更するオプションがあります。この他、データ順序設定およびデータ選択の実行、デフォルト・ロケーションの一時変更、基本レポートの基本レイアウトの一時変更を行うこともできます。

たとえば、同じ会計情報をアメリカとフランスの 2 つの子会社用に作成すると仮定します。まずアメリカ用バージョンを作成して、特定の期間の会計情報をドルで表示し、アメリカ用の用紙サイズに合わせてレポートのフォーマットを設定します。次にフランス用バージョンを作成して、異なる期間に対して会計情報を仏フランで表示し、ヨーロッパの用紙サイズに合わせてレポートのフォーマットを設定できます。フランスの子会社に対しては、フランス用バージョンにデータ項目を加えることにより、追加情報を表示することもできます。

バッチ・バージョンの特徴

バッチ・バージョンには、次のような特徴があります。

- バージョン・レベルでのデータ順序。たとえば小切手の場合、日付または小切手番号順にソートすることができます。住所録レコードの場合は、従業員が得意先別にソートしたり、アルファベット順にソートすることができます。
- バージョン・レベルでのデータ選択。たとえば、ビジネスユニット 10～30 および 70、カテゴリが「1 = 北」であるすべての住所録レコードなど、どのレコードを取り込むかを指定できます。
- バージョン・セクション・レベルでの追加または一時変更。レポート設計者は、バージョン・セクション・レベルで、基本レポート・セクションの機能を追加したり一時変更したりできます。これらのセクション・レベル一時変更は、個々のセクションにのみ適用される点でバージョン・レベルの一時変更とは異なります。セクション・レベルでは、セクション・レイアウト、データ選択、データ順序設定、イベント・ルール、データベース出力を一時変更できます。基本レポートにある機能は削除できません。
- 特定の処理オプション値。たとえば、処理オプションを設定し、〈仕訳の転記〉を実行してデフォルトとは異なる勘定科目コード形式で印刷することができます。

バッチ・バージョンの処理オプションには、次のような機能があります。

- 機能の変更。たとえば、レポートを実行してから、レコードを実績ファイルに除去するよう、処理オプションを設定することができます。
- 入力パラメータの変更。処理オプションを設定し、レポートの処理に使用するカテゴリ・コードを指定できます。
- 日付の定義。処理オプションを設定し、レポートを実行する会計年度を定義できます。
[売掛金経過計算]レポートでの経過日数を定義することもできます。

Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成

Web クライアントを使用する場合は、Web クライアントで〈バッチ・バージョンの処理 – 使用可能なバージョン〉フォームで[追加]または[コピー]オプションを使用して、新しいレポートのバッチ・バージョンを作成します。新しいバッチ・バージョンは Web のみであることが示されます。Web のみのバージョンでデータ選択や、順序、処理オプションを変更するには、[ロー]メニューから[データ選択]、[データ順序設定]、または[処理オプション]を選択します。

Web クライアント以外の環境で Web のみのバージョンを実行するには、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を使用してバージョンをチェックアウトしてから、標準クライアントでチェックインします。〈オブジェクト管理ワークベンチ〉により自動的に、標準クライアントで動作するように Web のみのバージョンが変換されます。

Web のみのフラグを完全に削除するには、eGenerator ツールを使用してバッチ・バージョンを作成してください。eGenerator ツールが実行されるマシンにはスペックが必要なため、eGenerator ツールを実行する同じマシンで変換プロセスを実行するか、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で[取得]を使用して、eGenerator ツールを実行しているクライアントにスペックを取り込みます。

Web のみのフラグが付いている場合、バッチ・バージョンはコピーできません。

参照

- eGenerator の使用については、『Web サーバー・インストール』ガイドの「ERP のシリアル化されたオブジェクトの生成」

バッチ・バージョンの処理

バッチ・バージョンの場合も、チェックインやチェックアウトを実行したり、バージョン用にチェックアウトしたものを消去したりするのに、オブジェクト・ライブラリアンと同じ処理が使用されます。このツールを使用して、ワークステーションとサーバー間の移動を制御します。バッチ・バージョンはバッチ・アプリケーションから直接投入されます。

バッチ・バージョンを作成すると、基本レポート・スペックと同様に、そのバージョンに対するスペック・レコードは、ユーザーのワークステーションにのみ存在します。バージョンを他のユーザーが使用できるようにするには、そのバージョンをサーバーにチェックインする必要があります。バージョンをチェックインすると、バージョン・スペック・レコードが、現行環境のパス・コードに従ってセントラル・オブジェクト・データソース(サーバー)にコピーされます。

バージョンにはチェックインした後でも、一定の変更を加えることができます。たとえば、処理オプションを変更すると、ローカル・バージョンをチェックインしなくても変更が反映されて、すぐに有効となります。これは、バージョンの処理オプションが、サーバーのバージョン・リスト・テーブル(F983051)に保存されたバージョン・レコードに、フィールドとして直接保管されているためです。

バッチ・バージョンをセントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)にチェックインすると、そのバージョンをインストールしたユーザーは最新のバージョンにアクセスできます。複数ユーザーが同じバージョンを同時にチェックアウトすることはできません。〈バージョン詳細〉フォームには、バージョンをチェックアウトしたユーザー名が表示されます。

新規バッチ・バージョンは、既存バージョンを使用せずに作成することができます。たとえば、既存バージョンのレイアウトまたはデータ選択を使用しないために新規バージョンを作成する場合などがあります。新規バージョンを作成する際は、基本レポートによるスペックを使用します。

基本(テンプレート)レポートを変更した場合は、一時変更を含むバージョンを作成しない限り、基本レポート用に存在するすべてのバージョンに対してその変更が「プッシュ」されます。

バージョンをコピーすると、コピーしたバージョンには既存バージョンと同じデータ選択およびデータ順序が継承されます。

参照

- 一時変更については「バッチ・バージョンの設計変更」

バッチ・バージョンの実行

バッチ・バージョンがフォームに関連付けられている場合、フォームの[レポート]メニューからアクセスして、表示および印刷することができます。基本レポートおよびレポート・バージョンは、メニュー上にアイコンとして表示されます。

ほとんどの場合、バッチ・バージョンは処理が効率的に行われるようにエンタープライズ・サーバーに投入します。バッチ・バージョンはデフォルトではサインオンした環境で実行されますが、投入時にもこのロケーションを一時変更することができます。バッチ・ジョブをエンタープライズ・サーバーに投入すると、レポートをプレビューでき、〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を使用して、待ち行列にあるジョブの実行状況をモニタリングすることもできます。

エンタープライズ・サーバーにレポートを投入する際に、そのレポートが現在使用しているワークステーションにない場合は、そのスペックを使用するワークステーションに転送するために、セントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)は、最初に JITI(ジャスト・イン・タイム・インストール)を実行します。JITI 実行後、ワークステーションはエンタープライズ・サーバーへの投入を続行し、ローカル・バージョン・スペック(バージョンに加えた変更)がエンタープライズ・サーバーに転送されます。

バッチ・バージョンに Web のみのフラグが付いている場合や、ファット・クライアント上でバッチ・バージョンを実行している場合は、ファット・クライアント・バージョンに変換してから実行してください。Web のみのバッチ・バージョンを変換するには、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を実行してバージョンをチェックイン/チェックアウトしてください。

参照

- バッチ・バージョンの実行については「レポートの投入」
- 〈サーバーの処理〉フォームについては「Configuration Planning and Setup(構成設定プランニングおよびセットアップ)」のパッケージに含まれる『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サーバー・プログラムの処理」

バッチ・バージョンの処理フォームへのアクセス

〈バッチ・バージョンの処理〉フォームは、バッチ・バージョンを管理する際のエントリ・ポイントで、さまざまな方法でアクセスすることができます。

▶ バッチ・バージョンの処理フォームにアクセスするには

J.D. Edwards Solution Explorer を開きます。

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈バッチ・バージョン〉プログラム (P98305) を選択します。

〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームが表示されます。

関連タスク

〈バッチ・バージョンの処理〉にアクセスするには次の方法もあります。

- バッチ・アプリケーションのメニューをハイライトして、[編集]メニューから[プロンプト] - [バージョン]を選択します。
- バッチ・アプリケーションを右クリックして、表示されるプルダウン・メニューから[プロンプト] - [バージョン]を選択します。バッチ・アプリケーションに関連するバージョンがない場合、そのバッチ・アプリケーションにバージョンをコピーまたは追加して、バージョンを実行する必要があります。
- 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈バッチ・バージョン〉プログラム (P98305) を選択します。

バッチ・バージョンの設計変更

バッチ・バージョン用のスペックを変更する場合、基本 (テンプレート) レポートを変更する必要はありません。スペックはバージョン・レベルで一時変更できます。バッチ・バージョンに加えたスペック変更は、その基本レポートに基づいた他のバージョンには影響しません。また、基本レポート・レベルでスペックを変更しても、その変更はユーザーが一時変更したバージョン・スペックには反映されません。

バージョン・レベルでスペックを変更する場合、〈バージョン詳細〉フォームの[バージョン詳細]フィールドに、修正内容を記入しておきます。記述欄には、基本レポートのスペックとバージョンのスペックの違いを記述しておくことをお勧めします。

レポート・バージョンでは次の項目を変更できます。

- Section Layout (セクション・レイアウト)
- Section Data Selection (セクション・データ選択)
- Section Event Rules (セクション・イベント・ルール)
- Section Database Output (プリンター時変更)
- Section Sort Sequence (セクション・ソート順序)

注:

Web クライアントを使用している場合、バージョンに Web のみのフラグが付いていなければ、バージョンにはランタイム変更のみ行うことができます。ランタイム変更は維持されません。

参照

- 「バッチ・バージョン用バージョン詳細の処理」

はじめる前に

- スペックの一時変更は、バージョン・レベルでのみ行います。一時変更用バージョンをコピーまたは作成するには、「バッチ・バージョンのコピー」または「バッチ・バージョンの作成」を参照してください。
- 一時変更用バージョンを作成するには、〈Report Design(レポート設計)〉にアクセスする前にバージョンをチェックアウトします。詳しくは「バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン」を参照してください。
- レポート設計ツールが開いている場合は閉じてください。

▶ バッチ・バージョンの設計を変更するには

〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を実行してレポートのバージョンを検索/実行します。また、バージョン詳細情報、データ選択、データ順序も修正できます。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、次のフィールドに値を入力します。

- バッチ・プログラム ID

たとえば、〈One Line Per Address〉プログラムのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。

2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。

- 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
- マイ・バージョン(作成したバージョン)
- すべてのバージョン(バッチ・アプリケーションに存在)

すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

Web クライアントを使用していない限り、どのバージョンでも削除できます(アプリケーションやユーザー・セキュリティによって異なります)。Web クライアントを使用している場合は、Web のみのフラグが付いたバージョンのみ削除できます。ただし、マシンにないバージョンを削除しようとすると、警告メッセージが表示されます。

4. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
5. [ロー]メニューから[上級]を選択します。

注:

次のステップを実行する前に、バッチ・バージョンをチェックアウトしておく必要があります。

6. [上級]オプションで、[ロー]メニューから[バージョン設計]を選択します。
〈Report Design〉が開き、そのバージョンのレポート・スペックが表示されます。
7. 〈Report Design〉で、セクションをクリックして、[Section]メニューから[Override Version Specifications]を選択します。
〈バージョン・スペックの一時変更〉にアクセスして変更する一時変更を選択するまで、セクションに変更を加えることはできません。

セクションへの一時変更は、そのセクションに対してのみ有効です。他のセクションは、別に一時変更する必要があります。

8. いずれかの一時変更を選び、[OK]をクリックします。

注:

バージョン・スペックを一時変更する場合、基本(テンプレート)レポートでそれらのスペックを変更しても、このバージョンには反映されません。たとえば、[Section Data Selection (セクション・データ選択)]をオンにしてバージョンのデータ選択を変更し、後で基本レポートのデータ選択を変更しても、バージョン・レベルでのデータ選択にはその変更は反映されません。

- Section Layout (セクション・レイアウト)
バッチ・バージョンでカラムを削除、追加、またはカラム見出しを変更する場合、この一時変更を選択します。
- Section Data Selection (セクション・データ選択)
顧客情報のみまたは従業員情報のみを表示するバージョンなど、特定のデータ選択を行うバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。
- Section Event Rules (セクション・イベント・ルール)
指定パーセント以上の昇給のあった社員を表示するバージョンなど、特定のイベント・ルールを使用したバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。
- Section Database Output (プリンター時変更)
デフォルト・プリンタ以外のプリンタから印刷するバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。ページ・ヘッダーなどのセクションをこのプリンタから印刷する場合、それらの各セクションのスペックも同様に一時変更する必要があります。

- Section Sort Sequence (セクション・ソート順序)

基本レポートとは異なるソート条件を持つバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。たとえば、住所番号ではなく名称でバージョンをソートすることができます。

9. 変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- 「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- 「チェックアウトしたバージョン・レコードの消去」

バッチ・バージョンに対する処理オプションの変更

既存のバッチ・バージョンの処理オプションは、必要に応じて変更することができます。たとえば、処理オプションを変更して、フィールドの表示/非表示を切り替えたり、オーダー処理順序定義を変更することができます。ただし、処理オプションのないバッチ・バージョンもあります。住所リストの出力などのように、特殊プロンプト処理が不要な場合がその例です。

処理オプションを変更すると、変更は各 UBE の実行用に保管されます。バージョンに対するその他の変更とは異なり、処理オプションを変更するのにバージョンのチェックインおよびチェックアウトは必要ありません。処理オプション値を変更しても、その変更はそのバージョンを使用する他のユーザーには適用されません。

Web クライアントを使用している場合、Web のみのバージョンの処理オプションは、実行時とバージョン・スペック内のどちらでも変更できます。バージョンが Web のみでない場合、処理オプションは実行時にのみ変更できます。実行時の変更は維持されません。

注:

ZJDE または XJDE のプレフィックスを含む J.D. Edwards デモ・バージョンは変更できません。バージョン番号、バージョン・タイトル、オプションのプロンプト表示、セキュリティ、および処理オプションの値を変更するには、これらのバージョンをコピーするか、または新規バージョンを作成する必要があります。

はじめる前に

- 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームの[ロー]メニューの処理オプションからアクセスする場合、使用するマシン用にバージョンをチェックアウトする必要があります。「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

フィールド記述

記述	用語解説
プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>
ユーザーID	アプリケーションまたはバージョンを最後に修正したユーザーのユーザーIDを示します。
前回修正日付	アプリケーションまたはバージョンが最後に変更された日付。
セキュリティ	<p>このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。</p> <p>0 セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。</p> <p>1 中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。</p> <p>2 中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。</p> <p>3 完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。</p>

バージョン ID	アプリケーションやレポートの実行方法の指定に使用するユーザー定義のスペックです。バージョンを使用することで、ユーザー定義の処理オプション値やデータ選択、順序オプションなどをグループ化して保存します。対話型バージョンは(通常、タスク・レベルで)アプリケーションと関連付けられています。バッチバージョンはバッチ・プログラムまたはレポートと関連付けられています。バッチ・プログラムを実行する場合はバージョンを選択する必要があります。
チェックイン・パスコード	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。
ロケーション	ロケーションあるいはマシンキーは、ネットワーク(サーバーまたはワークステーション)上のマシン名を示します。
パス・コード	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。
チェックアウト済み	バージョンのチェックアウトが可能かを示します。1 人のユーザーのみがそのバージョンをチェックアウトすることができます。 Y 現在バージョンはチェックアウトされている。 N 現在バージョンはチェックアウトされていない。
サーバー使用の可否	バッチ・バージョンをサーバーからインストール可能かどうかを示します。 Y = サーバーからインストール可能 N = サーバーからインストール不可
サーバー前回更新日付	アプリケーションまたはバージョンがサーバーにチェックインされた日付。

▶ バッチ・バージョン用の処理オプションを変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。
たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
または、[フォーム]メニューから[表示]を選んで次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン
ワークステーションで使用可能なすべてのバージョンが表示されます。
 - マイ・バージョン
作成したバージョンのみ表示されます。

- すべてのバージョン

バッチ・アプリケーションに存在するすべてのバージョンが表示されます。すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。

〈バッチ・バージョンの処理〉フォームには、ローカルで作成したバージョンを含めて、使用しているワークステーションで利用できるバージョンのみが表示されます。別のマシンで作成されたバージョンは、セントラル・オブジェクト・データ・ソース (サーバー) にチェックインすると、このフォームに表示されます。

4. [ロー]メニューから[処理オプション]を選択します。

このバージョンに処理オプションがない場合、または処理オプションを変更できないようにセキュリティが設定されている場合は、そのようにメッセージ・ボックスが表示されます。そうでない場合は、そのアプリケーションに関する〈Processing Options (処理オプション)〉フォームが表示されます。このフォームでは、レポートの処理方法を制御する値を定義することができます。

〈Processing Options〉フォームへは、次のような方法でもアクセスできます。

1. J.D. Edwards Solution Explorer の [編集] メニューから [プロンプト] - [処理オプション] を選択する。
2. J.D. Edwards Solution Explorer でバッチ・アプリケーション名を右クリックして、表示されるプルダウン・メニューから [プロンプト] - [処理オプション] を選択する。
5. 各タブをクリックして、タブの情報を表示/変更します。

タブの数が多く、一度に全部を画面に表示できない場合、左右の矢印ボタンがフォームに表示されます。他のタブを参照するには、この矢印ボタンをクリックしてください。フォームの端をポイントしドラッグして〈Processing Options〉フォームのサイズを変更するか、またはスクロールバーを使って、他のタブにある処理オプションを表示します。

6. 必要に応じて処理オプションの値を変更し、をクリックします。

バッチ・バージョン用データ選択およびデータ順序設定へのアクセス

レポートのレコードを限定するために条件を指定することができます。たとえば、ニューヨークの顧客だけを表示するように選択できます。また、レポート上のデータ表示順序を設定することもできます。たとえば、最初に検索タイプ、次に住所番号、そして従業員名という順でレコードをソートすることができます。

データ選択およびデータ順序を設定する場合、〈バッチ・バージョンの処理〉フォーム (ここでの説明を参照)、または〈バージョン・プロンプト〉フォームから処理することができます。

Web クライアントを使用している場合、Web のみのバージョンのデータ選択およびデータ順序設定は、実行時とバージョン・スペック内のどちらでも変更できます。Web のみのバージョンでは、実行時にのみデータ選択およびデータ順序を変更できます。実行時の変更は維持されません。

参照

- 「レポートの投入」

はじめる前に

- 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームの[ロー]メニューからデータ選択およびデータ順序にアクセスする場合、使用するマシンにバージョンがチェックアウトされている必要があります。「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

▶ バッチ・バージョン用のデータ選択およびデータ順序設定にアクセスするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
または、[フォーム]メニューから[表示]を選んで次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン
ワークステーションで使用可能なすべてのバージョンが表示されます。
 - マイ・バージョン
作成したバージョンのみ表示されます。
 - すべてのバージョン
バッチ・アプリケーションに存在するすべてのバージョンが表示されます。すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー]メニューから次のうち 1 つを選択してください。
 - Data Selection(データ選択)
〈Data Selection(データ選択)〉フォームが表示されます。
 - Data Sequencing(データ順序の設定)
〈Data Sequencing(データ順序設定)〉フォームが表示されます。

テーブル変換バッチ・アプリケーションを処理する際に、[データ選択]および[データ順序設定]メニュー選択がグレー表示されますが、これはこの 2 つがテーブル変換には適用されないためです。
5. これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。

変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- 「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- 「チェックアウトしたバージョン・レコードの消去」

処理オプションのレポート作成

このタスクでは、対話型およびバッチ・アプリケーション用の処理オプションに関するレポートの作成方法を説明します。このレポートには、各バージョンで設定された処理オプションのタブ、テキストと共に値が表示されます。バージョンによっては処理オプションのないものもあります。

注意:

この処理はローカル(使用するワークステーション)だけで実行してください。

▶ 処理オプションのレポートを作成するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉または〈対話型バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドまたは[対話型アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈General Journal by Batch(仕訳帳(バッチ別))〉レポートのバージョンを検索する場合は、“R09301”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 次のいずれかを実行します。
 - [ロー]メニューから[処理オプション]を選択し、バージョンのデフォルト値を表示します。
 - [ロー]メニューから[印刷オプション]を選択します。
 - バージョンを選択せずに、[フォーム]メニューから[PO(処理オプション)の印刷]を選択します。
4. 〈レポート出力先〉で、次のオプションのいずれかを選んで[OK]をクリックします。
 - 画面
 - プリンタ
 - CSV へエクスポート
5. 次のオプションを選んで、関連付けられたフィールドに値を入力してください。
 - OSA インターフェイス名
6. [OK]をクリックします。
レポートが表示されます。

テーブル変換バージョンのプロパティへのアクセス

この操作は、テーブル変換プログラムにのみ該当します。バージョンのプロパティには〈テーブル変換プロンプト〉フォームからアクセスすることができます。また、〈バッチ・バージョンの処理〉フォームからプロパティに直接アクセスすることもできます。

参照

- 〈テーブル変換プロンプト〉フォームについては『テーブル・コンバージョン』ガイドの「テーブル・コンバージョンの投入」

▶ テーブル変換バージョン用プロパティにアクセスするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から 〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション] フィールドにアプリケーション ID を入力します。
2. [検索] をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム] メニューから次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン (ワークステーションで使用可能)
 - マイ・バージョン (作成したバージョン)
 - すべてのバージョン (バッチ・アプリケーションに存在)すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー] メニューで [プロパティ] をクリックします。このメニュー項目は、テーブル変換プログラム・バージョンでのみ使用することができます。
〈プロパティ〉フォームが表示されます。
5. 変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- テーブル変換プロパティの変更については『テーブル・コンバージョン』ガイドの「テーブル変換の投入」
- バージョンのチェックインについては「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- チェックアウト・レコードの消去については「バージョンのチェックアウト・レコードの消去」

バッチ・バージョン用バージョン詳細の処理

バージョン詳細を使用して、タイトル、プロンプト・オプションまたはセキュリティ・レベルなどのバージョンに関する情報を検討します。レポートに表紙を印刷するかどうかも指定できます。

はじめる前に

- バージョン詳細を処理する前に、バージョンをチェックアウトします。「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

▶ バッチ・バージョンのバージョン詳細を処理するには

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション] フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021” と入力します。
2. [検索] をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム] メニューから次のいずれかを選択します。

- 使用可能なバージョン (ワークステーションで使用可能)
- マイ・バージョン (作成したバージョン)
- すべてのバージョン (バッチ・アプリケーションに存在)

すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー] メニューから [バージョン詳細] を選択します。

このフォームでは、バージョンのタイトル、バージョンによる処理オプションの使用、バージョンのセキュリティ・レベルなどの情報を変更することができます。また、レポートに関する監査情報も検討することができます。

5. 〈バージョン詳細〉では、次の情報を変更できます。

- バージョン・タイトル
- プロンプト・オプション

このバージョンに処理オプションがついている場合にのみ、次の情報を修正または実行してください。

- セキュリティ
- バージョン詳細
- 表紙印刷
- ジョブ待ち行列

[ジョブ待ち行列]フィールドをブランクにした場合、エンタープライズ・サーバーの jde.ini の設定が読み込まれます。ジョブを AS/400 に投入した場合、ユーザー・プロファイルを基にチェックしてジョブ待ち行列を選定します。

- クライアント・プラットフォーム
6. 必要に応じて、フォームに表示されるその他の情報を検討します。
 7. [OK]をクリックします。
 8. このバージョンをチェックインして、他のユーザーも使用できるようにします。

参照

- 「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
バージョン・タイトル	バージョン番号の横に表示されるバージョンの記述。バージョン・タイトルとレポート・タイトルは異なります。このフィールドでは、バージョンの用途を記述します。たとえば、ピッキング・リストを作成するアプリケーションのバージョンの1つは[ピッキング・リスト - 会計]、もう1つは[ピッキング・リスト - 在庫管理]とすることができます。
プロンプト・オプション	プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/CR)に定義されています。 ブランク = 処理オプションを無効にする 1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行) 2 = 処理オプションを表示する
セキュリティ	このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。 0 セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。 1 中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。 2 中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。 3 完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。

バージョン詳細	基本レポートスペックとバージョンレベル・レポート・スペックの一時変更スペックや機能の違いを入力するフィールド。バージョンの開発者は、入力された情報を参照することによって、このバージョンと基本レポートの機能の違いを容易に理解できます。基本レポートには存在しないセクションをバージョンに追加した場合の追加内容などを入力してください。また、基本レポートとは異なる処理を行うように変更した内容も入力してください。たとえば、データ順序設定やデータ選択に基本レポートとは異なる基準を使用している処理を入力します。
表紙印刷	使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。

バッチ・バージョンのコピー

既存のバージョンをコピーして、その設定を目的に応じて修正することができます。コピーしたバージョンには、基本レポートのプロパティおよびコピー元のバージョンのプロパティが継承されます。Web クライアントを使用したりバージョンをコピーする場合、新しく作成するバージョンには Web のみのフラグが付きます。Web のみのバージョンはコピーできません。

バッチ・バージョンをコピーする際、新規バージョンにはセキュリティを設定する必要があります。セキュリティ設定には「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前回行ったユーザーのみがそのバージョンを修正し、実行することができます。バージョン・セキュリティは「セキュリティ・ワークベンチ」とは異なります。セキュリティ・ワークベンチは、アプリケーションなどの J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトに対してセキュリティを設定する場合に使用します。

参照

- セキュリティ・ワークベンチについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「システムのセキュリティ」

▶ バッチ・バージョンをコピーするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。

- 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
- マイ・バージョン(作成したバージョン)
- すべてのバージョン(バッチ・アプリケーションに存在)

すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
4. ツールバーの[コピー]をクリックします。
5. 〈バージョンのコピー〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 新しいバージョン
 - セキュリティ
 - バージョン・タイトル
6. [OK]をクリックします。
 〈バッチ・バージョン設計〉フォームが表示されます。このフォームでは、[バージョン詳細]を選択してバージョン情報を変更するか、[実行]を選択して新しいバージョンを実行することができます。
7. 〈バッチ・バージョンの設計〉で、[OK]をクリックしてバージョンをクリックします。
 バッチ・バージョンを保存するために[OK]をクリックすると、そのバージョン・スペックが現在使用しているワークステーションにない場合は、そのスペックをワークステーションに転送するために、セントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)で最初に JITI(ジャスト・イン・タイム・インストレーション)が実行されます。
8. 新しいバージョンをチェックインして、他のユーザーがこのバージョンを使用できるようにします。

参照

- 「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
新しいバージョン	バージョンを識別する ID。プログラムに複数のバージョンを設定する場合、この ID により各バージョンを識別します。

バッチ・バージョンの作成

レポート・テンプレートのスペックを使用せずに、新規にバッチ・バージョンを作成することができます。コピーの場合と異なり、新規バッチ・バージョンを作成する際は新規バージョンにセキュリティを追加してください。

Web クライアントを使用して新しくバッチ・バージョンを作成する場合、新しく作成したバージョンには Web 専用フラグが付きます。

バッチ・バージョンを作成する際、新規バージョンにセキュリティを追加してください。セキュリティ設定には「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前に行ったユーザーのみがそのバージョンを修正し、実行することができます。詳しくは、セキュリティ・フィールド記述を参照してください。バージョン・セキュリティは〈セキュリティ・ワークベンチ〉とは異なります。セキュリティ・ワークベンチは、アプリケーションなどの J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトに対してセキュリティを設定する場合に使用します。

参照

- セキュリティ・ワークベンチについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「システムのセキュリティ」
- Web のみのバージョンについては「Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成」

▶ バッチ・バージョンを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームのバッチ・アプリケーション・フィールドで、新しいバッチ・バージョンの基となるバッチ・アプリケーションを入力します。
 - バッチ・プログラム ID
2. [追加]をクリックして、新しいバージョンを作成します。
3. 〈バージョンの追加〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - バージョン ID
 - バージョン・タイトル
 - プロンプト・オプション

バージョンの基本となるバッチ・アプリケーションに処理オプションがない場合、[プロンプト・オプション]フィールドは無効となります。処理オプションの添付は、バッチ・アプリケーション・テンプレートに対してのみ可能です。これは、〈Report Design〉で実行できます。

 - セキュリティ
 - ジョブ待ち行列
 - バージョン詳細
4. 必要に応じて次のオプションを選択します。
 - 表紙印刷
5. [OK]をクリックしてバージョンを保存します。
6. 新しいバージョンをチェックインして、他のユーザーがこのバージョンを使用できるようにします。

参照

- 「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>
バージョン ID	<p>アプリケーションやレポートの実行方法の指定に使用するユーザー定義のスペックです。バージョンを使用することで、ユーザー定義の処理オプション値やデータ選択、順序オプションなどをグループ化して保存します。対話型バージョンは(通常、タスク・レベルで)アプリケーションと関連付けられています。バッチバージョンはバッチ・プログラムまたはレポートと関連付けられています。バッチ・プログラムを実行する場合はバージョンを選択する必要があります。</p>
プロンプト・オプション	<p>プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/OR)に定義されています。</p> <p>ブランク = 処理オプションを無効にする</p> <p>1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行)</p> <p>2 = 処理オプションを表示する</p>
表紙印刷	<p>使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。</p>

バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン

〈Report Design〉を使用してバッチ・バージョンを修正したり、データ選択およびデータ順序を[ロー]メニューのオプションで設定するには、最初にそのレポートをチェックアウトする必要があります。チェックアウトすることによって、セントラル・オブジェクト・ロケーションからワークステーションにスペック・レコードがコピーされます。これはユーザーのパス・コードに基づいて行われます。表示されるのは、そのセントラル・オブジェクト・パス・コードにあるバージョンのみです。バージョンをチェックアウトするまでは、〈Report Design〉にアクセスできません。複数ユーザーが同時に同じバージョンをチェックアウトすることもできません。

バージョンをチェックアウトしても変更しない場合は、他のユーザーがそのバージョンをチェックアウトできるように、チェックアウト・レコードを消去してください。基本(テンプレート)レポートに対して一時変更となる変更を加えるには、バージョンをチェックアウトする必要があります。バージョンの実行時に、データ選択、データ順序設定、一時変更ロケーション、処理オプション値の変更を行う場合は、バージョンをチェックアウトする必要はありません。ただし、〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームでデータ選択またはデータ順序設定を変更する場合は、チェックアウトおよびチェックインを行って、変更を保存し、他のユーザーがその変更を使用できるようにする必要があります。

バージョンをチェックインする前に、バージョンに対して恒久的な変更を加えていいかどうかを確認してください。バージョンをチェックインすると、バージョンのスペックがセントラル・オブジェクト・ロケーションにコピーされます。それまでのバージョンのスペックは、新しいスペックに変更されます。ワークステーションにあるバージョンのスペックはそのままです。

Web のみのバージョンを変換して Web クライアント以外のクライアントで実行するには、バージョンをチェックインして再度チェックアウトしてください。Web のみのインジケータを完全に削除するには、eGenerator ツールを使用してバッチ・バージョンを作成してください。

バッチ・バージョンのチェックインまたはチェックアウトは、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)または〈バッチ・バージョンの処理〉プログラム(P98305)で行うことができます(次のタスクで説明)。

参照

- eGenerate の使用については『Web サーバー・インストール』ガイド

▶ バージョンをチェックアウト/チェックインするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して[検索]をクリックします。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
3. [ロー]メニューから[上級]を選択します。

〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンのチェックインおよびチェックアウト、バージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。

4. 〈上級操作〉フォームで、バージョンを選択してチェックアウト/チェックインします。

5. [ロー]メニューから[バージョンのチェックアウト]または[バージョンのチェックイン]を選択します。
6. [OK]をクリックします。

バージョンのチェックアウト・レコードの消去

バッチ・バージョンをチェックアウトできるのは、一度に 1 ユーザーのみです。チェックアウトしたユーザーがチェックアウト・レコードを消去すると、別のユーザーがバージョンをチェックアウトできるようになります。バージョンのチェックアウト・レコードを消去すると、そのバージョンはチェックインできません。ただし、ワークステーションにチェックアウトしてあるレポート・スペックはそのまま使用できます。

チェックアウトの消去を実行すると、サーバー側のチェックインおよびチェックアウト・レコードの状況が変更されます。バージョンのチェックアウトを消去すると、バージョン・リスト・テーブル(F983051)の[チェックアウト]フィールドが Y から N へ更新されます。また、このバージョンの[ロケーション]フィールドの値は、バージョンをチェックアウトしたワークステーションからセントラル・オブジェクト・サーバー一名に変更されます。

バッチ・バージョンのチェックインまたはチェックアウトは、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)または〈バッチ・バージョンの処理〉プログラム(P98305)で行うことができます(次のタスクで説明)。

▶ バージョンのチェックアウト・レコードを消去するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して[検索]をクリックします。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
3. [ロー]メニューから[上級]を選択します。

〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンのチェックインおよびチェックアウト、バージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。

4. 〈上級操作〉で、消去するチェックアウト・レコードを選択します。
5. [ロー]メニューから[チェックアウトの消去]を選択します。

バッチ・バージョン(P98305)の処理オプションの変更

このタスクでは、〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)の処理オプションを変更する方法について説明します。

処理オプションを変更すると、変更は各 UBE の実行用に保管されます。バージョンに対するその他の変更とは異なり、処理オプションを変更するのにバージョンのチェックインおよびチェックアウトは必要ありません。処理オプション値を変更しても、その変更はそのバージョンを使用する他のユーザーには適用されません。

参照

- バッチ・バージョンの処理オプションの変更については「バッチ・バージョン用処理オプションの変更」

▶ バッチ・バージョン・プログラム(P98305)の処理オプションを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境で、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択して、[プロンプト] - [処理オプション]を選択します。

1. 〈Processing Options〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。

- 確認ボックス

ローカル・スペックの上書き/削除確認ボックスを使用可能にするには“Y”または“1”を、使用不可にするには“N”または“0”を入力します。確認メッセージを使用できるようにすると、ローカル・マシンでスペックを上書きまたは削除する際に確認メッセージが表示されます。たとえば、使用可能に設定しておく、バッチ・バージョンのチェックアウト時に確認ボックスが表示されます。

- ジョブ・スケジュール

バッチ・バージョンの実行時(投入後すぐにバッチ・バージョンが実行される)にユーザーがそのスケジューリングをできないようにするには“0”(またはブランク)を、スケジューリングできるようにするには“1”を、どのような場合もバッチ・バージョンをスケジューリングさせる場合には“2”を入力します。

2. [OK]をクリックします。

参照

- バッチ・バージョンのスケジュール方法に関する完全な情報については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ジョブのスケジューリング」

バッチ・バージョン・スペックのエンタープライズ・サーバーへの移動

バッチ・バージョン・スペックは、バッチ・バージョンを実行しなくてもエンタープライズ・サーバーに移動することができます。これを行うのは、別のバッチ・バージョンに呼び出されるバッチ・バージョンを修正した場合のみです。バージョンを修正したら、このオプションを使って、そのバッチ・バージョンを呼び出すバッチ・バージョンと同じロケーションにスペックを移動します。このようにするとバッチ・バージョンの実行時に、古いスペックではなく更新されたスペックを呼び出すようになります。

▶ バッチ・バージョン・スペックをエンタープライズ・サーバーへ移動するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、必要に応じて次のフィールドに値を入力します。

- バッチ・プログラム ID

2. [バッチ・アプリケーション]フィールドにバッチ・アプリケーションの ID を入力してから、〈検索〉をクリックしてそのバージョン・リストを表示します。

3. 投入するバッチ・バージョンを選び、[選択]をクリックします。
4. 〈バージョン・プロンプト〉で、[フォーム]メニューから[上級]を選択します。
5. 〈上級バージョン・プロンプト〉で、次のオプションをチェックして[OK]をクリックします。
 - バージョン・スペックのみを投入
バッチ・バージョン・スペックを指定したエンタープライズ・サーバーに移動するには、このオプションをオンにしてください。
 - ロケーション一時変更
〈JDE データ・ソース〉フォームにアクセスし、バッチ・バージョン・スペックをエンタープライズ・サーバーのどのロケーションに移動するかを指定するには、このオプションをオンにしてください。
6. 〈バージョン・プロンプト〉で、[投入]をクリックします。
7. 〈JDE データ・ソース〉で、バッチ・バージョン・スペックを移動する先のエンタープライズ・サーバーを選択し、[選択]をクリックします。

指示したバッチ・バージョンは実行されずに、指定したエンタープライズ・サーバーにこのバッチ・バージョンのスペックだけが移動されます。〈サーバーの処理〉フォームを使用すると、待ち行列のジョブ進捗状況をモニタリングすることができます。

参照

- 〈サーバーの処理〉フォームについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サーバー・プログラムの処理」

フィールド記述

記述	用語解説
バージョン・スペックのみを投入	<p>ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにバッチ・アプリケーション・バージョンのすべてのスペックをコピーするかどうか指定するオプション。[一時変更ロケーション]オプションを使用すると、エンタープライズ・サーバーを指定できます。</p> <p>データ選択およびデータ順序設定にはこのオプションを使ってバージョン・スペックを投入しないでください。既存のバージョンのデータ選択やデータ順序設定以外に新しいバージョンを作成したり修正した場合は、エンタープライズ・サーバーでバージョンを実行する際に新規または修正したスペックを使用するには、ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにバージョンのすべてのスペックを投入してください。</p>

バージョン・スペックの一時変更

レポート・バージョンを実行する場合、バージョン・スペックによりレポート・テンプレート・スペックが一時変更されます。ときどきレポート・テンプレート・スペックでバージョン・スペックを一時変更することをお勧めします。

レポート・テンプレートでバージョン・スペックを一時変更するタイミングは、たとえばレポート・テンプレートを変更した後でバージョン・レベルに変更をプッシュ・ダウンする場合などがあります。バージョン・スペックを一時変更しなかった場合は、バージョン・レベルの変更は無視されます。

注意:

レポート・テンプレートに表示されない情報がバージョンに含まれている場合、バージョン・スペックを一時変更するとこの情報は表示されません。

▶ バージョン・スペックを一時変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈レポート設計〉で、バージョン・スペックを一時変更するレポートのセクションを選択します。
2. [Section(セクション)]メニューから[Override Version Specifications(バージョン・スペックの一時変更)]を選択します。

セクション・タイプに応じて、該当するセクション・フォームが表示されます。

3. 次のオプションを選び、[OK]をクリックします。

- セクション・レイアウト
- セクション・データ選択
- セクション・イベント・ルール
- セクション・データベース出力
- セクション・ソート順序

テンプレート・スペックによりバージョン・スペックが上書きされます。

レポートまたはバージョン用の BrowsER へのアクセス

〈BrowsER〉は、レポートやバージョンのイベント・ルールを表示し、レイアウトを設計するためのアプリケーションです。〈BrowsER〉には、バッチ・アプリケーション内のセクション構造が表示されます。セクションは、各セクションのイベントおよびイベント・ルールと共に階層型構造で表示されます。設計ツールで追加作業をしなくても、イベント・ルールを使用可能にしたり、使用不可にしたりできます。これは、特定のイベント・ルールをデバッグする際に便利です。

参照

- 〈BrowseER〉の使用については『開発ツール』ガイドの「BrowseER」

▶ レポートまたはバージョン用に BrowsER にアクセスするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。

表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。

- 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
- マイ・バージョン(作成したバージョン)
- すべてのバージョン(パッチ・アプリケーションに存在)

すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。

4. [ロー]メニューから[上級]を選択します。

〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンやレポートのチェックインとチェックアウト、およびバージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。

5. 〈上級操作〉で、[フォーム]メニューから[レポートとブラウズ ER]または[バージョン・ブラウズ ER]を選択します。

[レポート BrowsER]を選択すると、レポート用のイベント・ルールを使用可能/不可にすることができます。[バージョン BrowsER]を選択すると、レポートの特定バージョンでイベント・ルールを使用可能または不可にすることができます。テーブル変換/パッチ・アプリケーションの場合、[バージョン BrowsER]ボタンはグレー表示されますが、これはテーブル変換に適用されないためです。

データベース出力の理解

データベース出力を使用して、レポート生成と同時にデータベースを更新することができます。ビジネス・ビューに基づいているレポート・セクションには、データベース出力スペックを添付することができます。ただし、データベース出力スペックはレポート/ページのヘッダー/フッターには添付できません。

〈Report Design (レポート設計)〉のデータベース出力機能を使用すると、テーブルまたはテキスト・ファイルのレコードを更新、挿入、削除することができます。「Insert or Update (挿入または更新)」といわれる特別な操作を行うこともできます。「挿入または更新」は、まずレコードをテーブルに挿入しようします。同じ基本キーを持つレコードが見つかったら、挿入は失敗して既存レコードが更新されます。

データベース出力を使用して、データをテーブルまたはテキスト・ファイルに出力することができます。テキスト・ファイルに出力する場合は、カンマ区切りレコードか固定長テキスト・レコードを指定します。カンマ区切り形式は、スプレッドシートに簡単に読み込むことができます。

J.D. Edwards ソフトウェアには、バッチ・データベース管理に使用するツールがいくつか提供されています。

テーブル変換	テーブルからテーブルへの高速 SQL 処理を使用します。J.D. Edwards ソフトウェア以外のテーブルにはアクセスできません。レポートはありません。
データベース出力	データベース出力とレポート出力は同時に行う必要があります。ソース・テーブルとターゲット・テーブルは、異なる環境にあってもかまいません。テキスト・ファイルへの出力も可能です。
テーブル I/O (イベント・ルール)	データベース出力とレポート出力は同時に行う必要があります。入力データは、出力される前に変換する必要があります。

データベース出力は、セクションで処理されるデータに対して 1 行ごとに行われます。すべてのデータベース操作は、J.D. Edwards の標準ミドルウェアである JDE Base (ベース) の API を使用して行われます。

データベース出力の定義では、出力を定義してから特定環境を一時変更します。

▶ データベース出力を定義するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉のレポート・セクションを選んで、[Section (セクション)] メニューから [Database Output (データベース出力)] を選択します。

Mapping Targets

Select the OneWorld table or define flat files you want perform some type of table operation on.

Operation	Type	Name	Description
Insert only	OneWorld tab	F0006	Business Unit Master
Insert only			

< Back Next > Cancel Help

2. <Mapping Targets(ターゲット・マッピング)>フォームで、次のフィールドを入力して、出力テーブルまたは出力ファイル(ターゲット)のリストを定義します。

- 作業

J.D. Edwards ソフトウェアのテーブルを操作する場合、「Insert(挿入)」、「Update(更新)」、「Delete(削除)」、「Insert or Update(更新または追加)」の 4 つが使用可能です。ターゲットがテキスト・ファイルの場合は、有効なのは「Insert」のみが有効となります。

- Type(タイプ)

「J.D. Edwards table(J.D. Edwards ソフトウェアのテーブル)」、「Comma delimited file(カンマ区切りファイル)」、「Fixed length record file(固定長レコード・ファイル)」があります。

- Name(名称)


有効な J.D. Edwards ソフトウェアのテーブル名、またはテキスト・ファイル出力に使用する有効なファイル名を入力します。

各フィールドをダブルクリックすると選択可能な値がリストされます。使用する値をダブルクリックすると、フィールドに入力されます。

同じソースに対して異なる操作を別々に行うことができます。

3. [次へ]をクリックします。

Mappings

 Edit assignments of source objects to target columns/fields.

Select the target table or file.

Double-click in the Source Section and Object columns to select the object whose value will be assigned to the Target Column.


Target Column	Source Section	Source Object	Dictionary override
Business Unit			<input type="checkbox"/>
Type Business Unit			<input type="checkbox"/>
Description - Compres:			<input type="checkbox"/>
Level of Detail			<input type="checkbox"/>
Company			<input type="checkbox"/>
Address Number			<input type="checkbox"/>
Owner/Receivable Ad			<input type="checkbox"/>
County			<input type="checkbox"/>
State			<input type="checkbox"/>
Model Account/Consol			<input type="checkbox"/>

4. 〈Mappings〉で、各ターゲットに対して、どのセクション・カラムまたは変数をターゲットのどのカラムにマップするかを指定します。

[Source Section(ソース・セクション)]または[Source Object(ソース・オブジェクト)]セルをダブルクリックすると選択可能なオプションが表示されます。

データ辞書一時変更はオンにしたりオフにしたりできます。

Mappings

 Edit assignments of source objects to target columns/fields.

Select the target table or file.

F0006


Double-click in the Source Section and Object columns to select the object whose value will be assigned to the Target Column. Map Same

Target Column	Source Section	Source Object	Dictionary override
Business Unit	Job Cost Master		<input type="checkbox"/>
Type Business Unit	Job Cost Master	[DC] Business Unit	<input checked="" type="checkbox"/>
Description - Compres:			<input type="checkbox"/>
Level of Detail			<input type="checkbox"/>
Company			<input type="checkbox"/>
Address Number			<input type="checkbox"/>
Owner/Receivable Ad			<input type="checkbox"/>
County			<input type="checkbox"/>
State			<input type="checkbox"/>
Model Account/Consol			<input type="checkbox"/>

< Back Finish Cancel Help

5. すべてのカラムをマップする場合は、〈Mappings〉で[Map Same(同等マップ)]をクリックします。

Mappings

 Edit assignments of source objects to target columns/fields.

Select the target table or file.

F0006

Double-click in the Source Section and Object columns to select the object whose value will be assigned to the Target Column. Map Same

Target Column	Source Section	Source Object	Dictionary override
Business Unit	Job Cost Master	[BC] Business Unit	<input type="checkbox"/>
Type Business Unit	Job Cost Master	[DC] Business Unit Type	<input type="checkbox"/>
Description - Compres:		[BC] Description - Com	<input type="checkbox"/>
Level of Detail	Job Cost Master	[BC] Level of Detail - Bi	<input type="checkbox"/>
Company	Job Cost Master	[BC] Company	<input type="checkbox"/>
Address Number	Job Cost Master	[BC] Address Number	<input type="checkbox"/>
Owner/Receivable Ad	Job Cost Master	[BC] Address Number	<input type="checkbox"/>
County			<input type="checkbox"/>
State	Job Cost Master	[BC] State	<input type="checkbox"/>
Model Account/Consol	Job Cost Master	[BC] Model Accounts a	<input type="checkbox"/>

< Back Finish Cancel Help

6. マッピングが完了したら[完了]をクリックします。

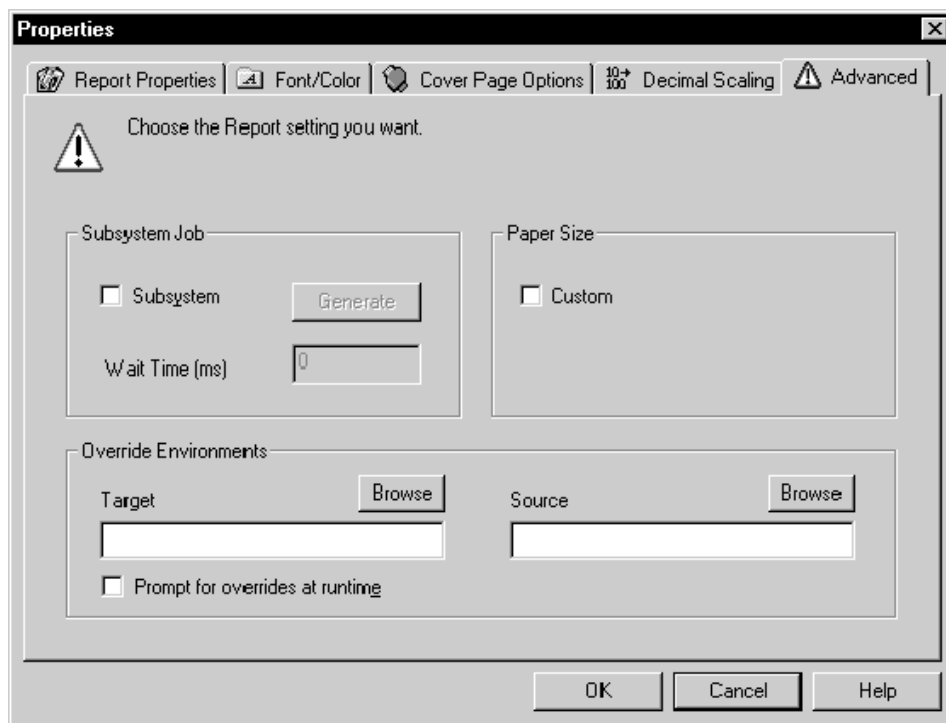
参照

- データ辞書トリガーを一時変更および無効にする方法については『開発ツール』ガイドの「設計時のデータ辞書トリガーの一時変更」

▶ データベース出力用の環境を一時変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Report Properties]を選択します。
2. 〈Properties〉で、[Advanced(上級)]タブをクリックします。



3. 次のフィールドに値を入力するか、[Browse(参照)]をクリックしてソース環境を選択します。
 - Source(ソース)
4. 〈Properties〉で、[Prompt for overrides at runtime(実行時に一時変更をプロンプトする)]をオンにすることができます。
5. 次のフィールドに値を入力するか、[Browse(参照)]をクリックしてターゲット環境を選択します。
 - Target(ターゲット)

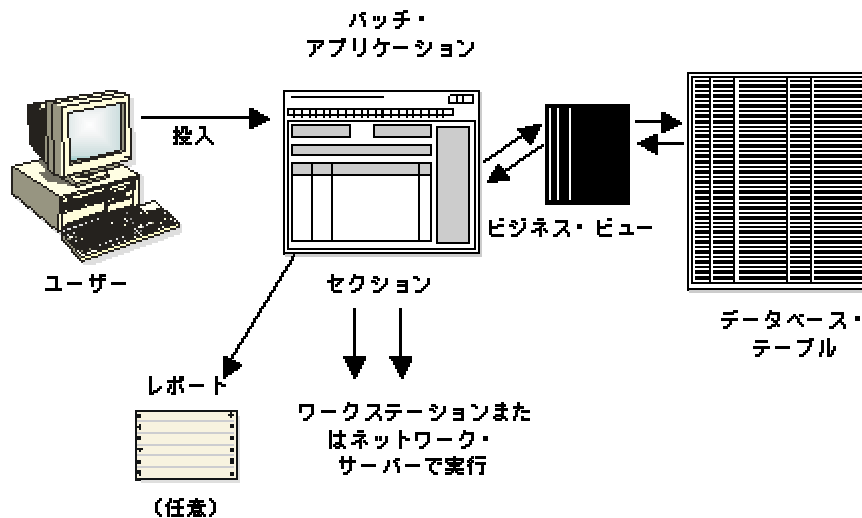
6. データベースに出力しないようにするには、次の 2 つの方法があります。
 - レポート全体でデータベースに出力しない場合は、バージョンでデータベース出力を一時変更し、マッピング・レコードを削除します。
 - 特定ローをデータベースに出力しない場合は、[Suppress Section Write]システム関数を使用します。このシステム関数は、印刷だけでなくデータベースマッピングも行いません。
7. [OK]をクリックします。

レポート処理

レポートはバッチにより処理されます。バッチとは、ユーザーからの指示を必要とせずに自動的に処理を実行するアプリケーションのことです。

次の図ではバッチ処理の流れを説明します。

バッチ処理の流れ



対話型の処理は特定の時点で中断し、ユーザーからの指示が必要になります。ユーザーの指示に基づいてプログラムの次の処理が決まります。バッチ処理にはユーザーとのやりとりはありません。バッチ・エンジンがレポートやプロセスのイベントに添付されたロジックを実行します。バッチ処理が始まると、処理中のロジックのフローは制御できません。処理やレポートのロジックのフローを変更する場合は、〈Report Design(レポート設計)〉を使用します。

バッチ処理の例には、レポートやサブシステム・ジョブ、データベース出力、テーブル・コンバージョンなどがあります。

サブシステム・ジョブではバッチ処理がバックグラウンドで継続的に進み、システム・リソースへの負荷を軽減します。また、サブシステム・ジョブを使用してワークフローのエスカレーション・プロセスのようにプロセス上で処理を進めることもできます。この処理では一定の時間が経過すると、あるユーザーから別のユーザーに未回答のメッセージが移動します。

〈Report Design〉のデータベース出力機能では、テーブルのレコードを挿入したり更新できます。テーブル・コンバージョンを実行すると、別のテーブルにデータを転送して J.D. Edwards テーブルのデータや概要を変更したり、単一のビジネス・ビューから 1 つまたは複数のテーブルにデータを転送することができます。

このセクションではバッチおよびレポート処理に関連する上級機能と、それらの機能の動作について説明します。

バッチ処理の理解

レポートおよびバッチ処理は〈Report Design〉を使用して作成し、J.D. Edwards Solution Explorer を使ってレポートにアクセスします。個々のレポートとバッチ処理は、適切なメニューと関連付けることもできます。バッチ処理とレポートの違いは、バッチ処理によって常にレポートが作成されるわけではない点にあります。バッチ処理はテーブルの更新に使用できます。また、バッチ処理を作成して処理の結果を表示するレポートを出力することもできます。

レポートには、セクションやフィールドのレイアウト、ビジネス・ビュー、イベント・ルール、データ選択、順序、データベース出力などレポートのスペックがすべて含まれます。レポートには固有の ID が付きます。

各レポートには 1 つまたは複数のセクションが含まれます。セクションは〈Report Design〉で作成します。セクションは独立した要素で、レポートのコンポーネントとして使用されます。セクションどうしを関連付けたり、独立したレポートとして使用できます。また、セクションはヘッダーやフッターなどの特殊な目的にも利用できます。

レポート・セクション

セクションは、ヘッダーやフッター、詳細セクション(カラム、グループ、表)から構成されます。

独立したセクション(レベル 1)には次のものがあります。

- グループ
- カラム
- 表

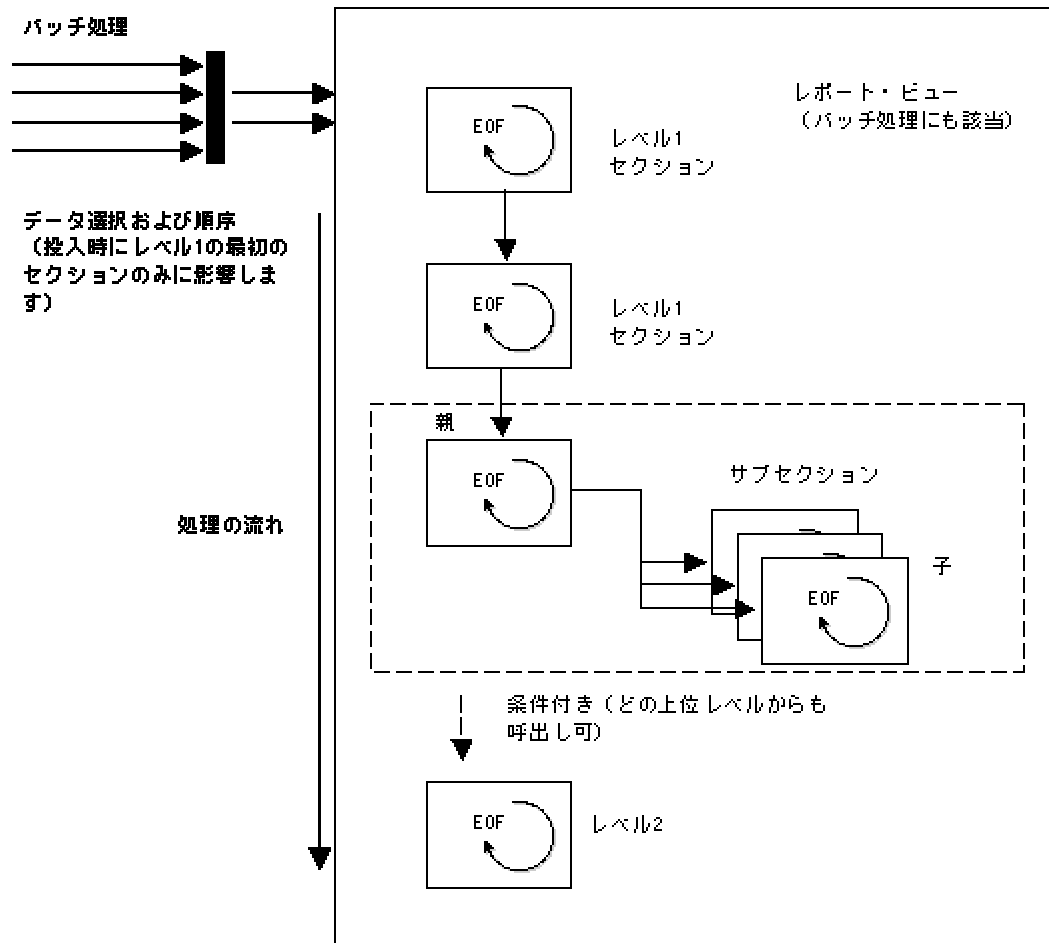
レベル 1 のセクションは親セクションにもなれます。

独立セクション(レベル 2)には次のものがあります。

- レベル区切りヘッダー
- レベル区切りフッター
- 合計セクション(表レポート以外で使用)
- サブセクション
- カスタム

次の図は、バッチ・エンジンによるレポート内のセクションの処理を示します。

バッチ・エンジン処理



〈Report Design〉のレポート・ビューでレポートのフローが決まります。たとえば、レポートにレベル 1 のセクションが複数あってそれぞれが異なるビジネス・ビューを持つ場合、最初のレベル 1 のセクション (V0101E など) は、次のレベル 1 のセクション (V4211A など) よりも先に実行されます。レベル 1 のセクションの間に存在するレベル 2 のセクションは、いずれも、レベル 1 のセクションに呼び出されるか、または接続される場合に処理されます。レベル 1 セクションの後に結合されたセクション (親/子セクション) があると、親/子セクションは最初の 2 つのセクションとは無関係に処理されます。子セクションは結合サブセクションにあります。

システムはデータ選択に応じて、セクション内のすべてのレコードを読み込んで最初から最後まで処理します。データ選択を指定しないと、テーブルのすべてのレコードがファイルの最後 (EOF) まで読み込まれます。

レベル 1 セクションの後に結合されたセクション (親/子セクション) があると、親/子セクションは最初のセクションとは無関係に処理されます。

図の中心にある親/子セクションは、結合されたセクションの流れを説明しています。親/子セクションは、プロセス・フローのどの時点でも呼び出せます。セクションの結合の方法(1 対 1、1 対複数セクションなど)に従って、該当する親レコードについて子のビジネス・ビューからレコードが取り込まれます。親レコードの処理がすべて終了すると、システムは次のセクションに移動します。最初のセクションで V0101 ビジネス・ビューについてデータベースの更新があった場合、その変更は親/子の結合セクション用のレコードが取り込まれたときに反映されます。

図の最後のセクション(条件付き)は、システム関数の DO_Custom_Section を利用して前述のどのセクションからも呼び出すことができます。条件付きセクションは別のセクションから条件付きセクションを呼び出さなければならないため、レベル 2 のセクションとみなされます。メモリの割当てはセクションの開始部分で実行されるため、必要に応じてセクションのオブジェクトを表示または非表示にしてください。メモリの割当てと解放はセクションを呼び出すたびにではなく、1 度しか実行されません。条件ロジックを INIT_SECTION または END_SECTION イベントに添付して、オブジェクトを表示/非表示にできます。

表セクションを除いて、すべてのセクションを同じ方法で処理します。表セクションはレベル区切りが発生したときだけレポートに出力されます。表セクションでは、システムは各レコードについて DO_Section を初期化するわけではありません。レコードは一番下のレベル区切りのレベルで集計されます。表セクションとレベル区切りは、レポートへの出力がレベル区切りヘッダー・セクションに似ているという点で共通しています。

レポート・セクションおよびバッチ処理のフローは、〈Report Design〉のレポート・ビューでのセクションの設定によって異なります。レポート・ビューではセクション間を上下に移動できますが、そのセクションの実行順序が影響を受けることがあります。レベル 1 のセクションを移動すると、実行順序に影響します。レポート処理では、システムは表示される順番にレベル 1 のセクションを処理します。条件付きのセクションやサブセクション、レベル区切りセクション、ページ・ヘッダー/フッター、レポート・ヘッダーを動かしても、実行順序には影響ありません。レポートは上のセクションから下のセクションに向かって実行されます。同じセクション内のオブジェクトについては、左から右に処理が進みます。

レベル 2 のセクションの処理はすべてレベル 1 のセクションに依存します。カスタム・セクションはレポート・ビューではレベル 1 のセクションとして表示されますが、DO_Custom_Section システム関数で指定しない限りは処理されません。

セクションの中に同じセクションが入っている場合、そのセクションはレポートまたはバッチ処理の一種と見なされます。セクションはそれぞれ独自のビジネス・ビューを含むことができます。他のセクションには別のビジネス・ビューが含まれる可能性があるため、〈Report Design〉を使用して各セクションのテンプレートにデータ選択および順序を追加する必要があります。

注:

ランタイムにバッチ処理でデータ選択と順序を設定すると、レポートまたはバッチ処理の最初のセクションにしか影響しません。このため、レポートやバッチ処理を設計する際はユーザーへの影響を考慮してください。他のセクションのデータ選択および順序が変更できなくなることがあります。

添付のビジネス・ビューがあるかどうかに関係なく、レベル 1 のセクションは最低 1 回は実行されます。これは、特殊なイベント・ルール・ロジックを実行してそのセクションの DO_Section イベントに添付する場合に重要です。

参照

- サブシステム・ジョブの作成については「サブシステム・ジョブの理解」
- データベース出力機能については「データベース出力の理解」
- ツールを使用したテーブル・コンバージョンの作成については『テーブル・コンバージョン』ガイド
- カスタム・セクションについては「カスタム・セクションの作成」

セクション処理の理解

レポートが処理されるとイベントが発生します。これらのイベントにロジックを添付できます。ロジックは、特定のイベントの前後に生じる結果に影響を受けます。

バッチ処理またはレポートが実行されると、複数のイベントが発生します。プロセスのどの時点でロジックを添付するかはユーザーが決定します。ロジックは特定のイベントの前後で生じる結果に影響を受けるためです。

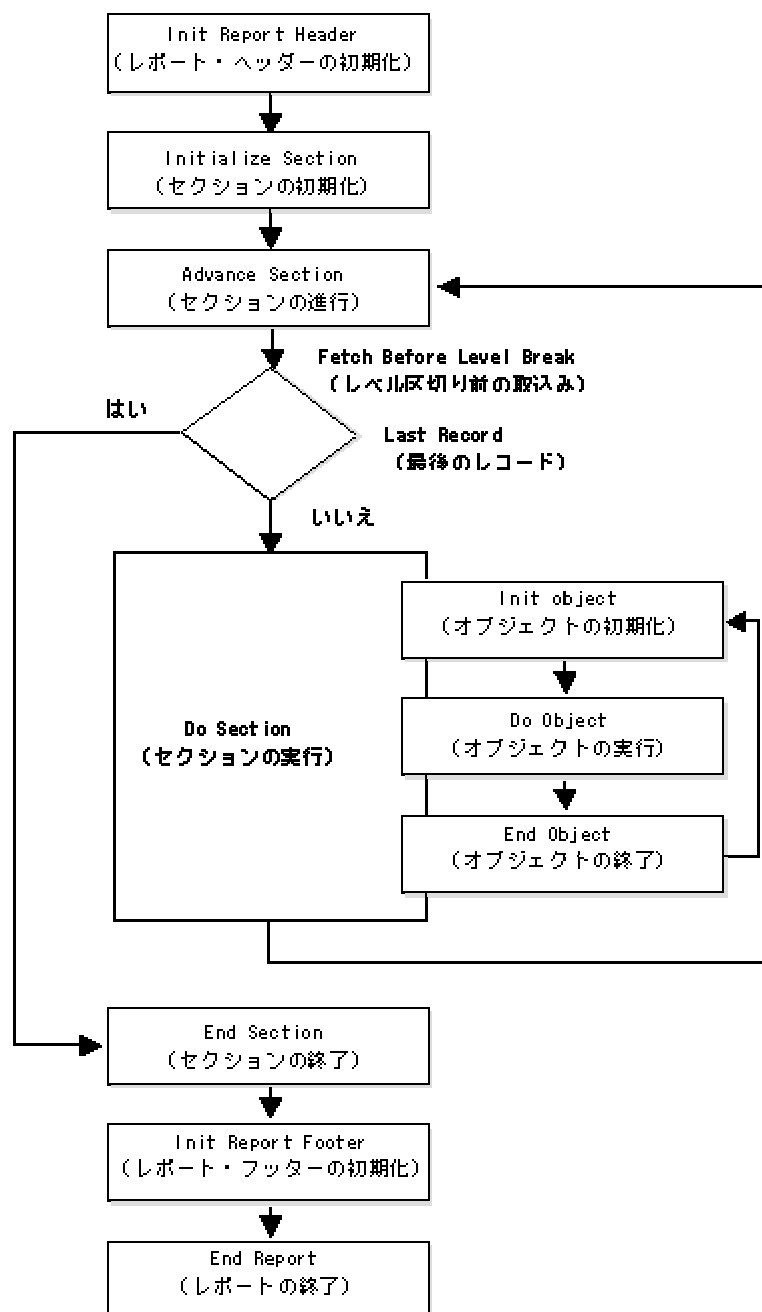
レポート・ヘッダーはセクションより先に処理され、レベル 1 のセクションは INIT_Section によって初期化されます。INIT_Section の後で、システムは ADV_Section やページ・フッター、ページ・ヘッダーなどを処理します。レベル 1 の最初のセクションおよびそれに依存する関連セクションの処理が終わると、システムはレベル 1 の次のセクションについて同じプロセスを繰り返します。

グループ・セクションおよびカラム・セクションの処理

グループ・セクションとカラム・セクションの処理は類似しています。レベル区切りがあるときにだけ出力として取り込まれる表セクションとは異なり、この 2 つのセクションは各レコードが読み込まれるたびに取り込まれます。この出力はそのセクションのデータ順序設定によって決まります。

次の図では、グループ・セクションおよびカラム・セクションの一般的なイベントのフローについて説明しています。

グループのイベント・フロー

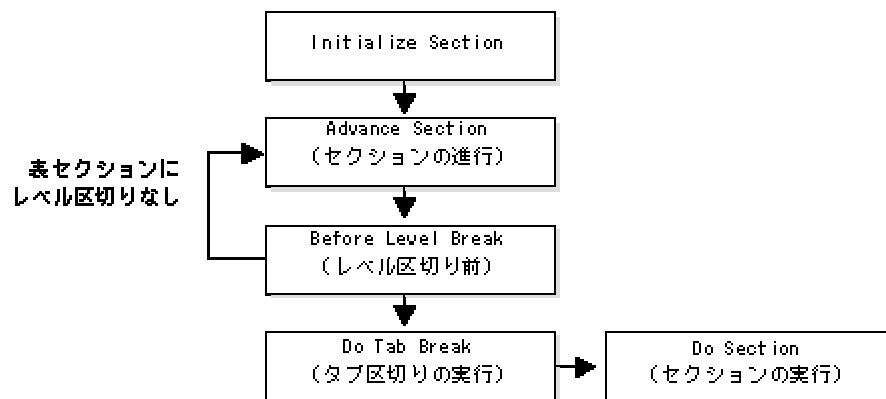


表セクションの処理

表セクションはカラムとロー、セルから構成されます。カラム、ローおよびセルに入れるデータを定義するには、組込規則か計算式を定義します。組込規則とは、そのローまたはカラムについての条件やビジネス関数、イベント・ルール・ビジネス関数の組合せを指します。表セクションの利点は、グループ・セクションやカラム・セクションの場合のようにレベル区切りロジックや処理について補足のセクションを定義する必要がない点です。ただし、セクションのレベル区切りの部分はデータ順序に依存するため、データ順序を正しく設定してください。

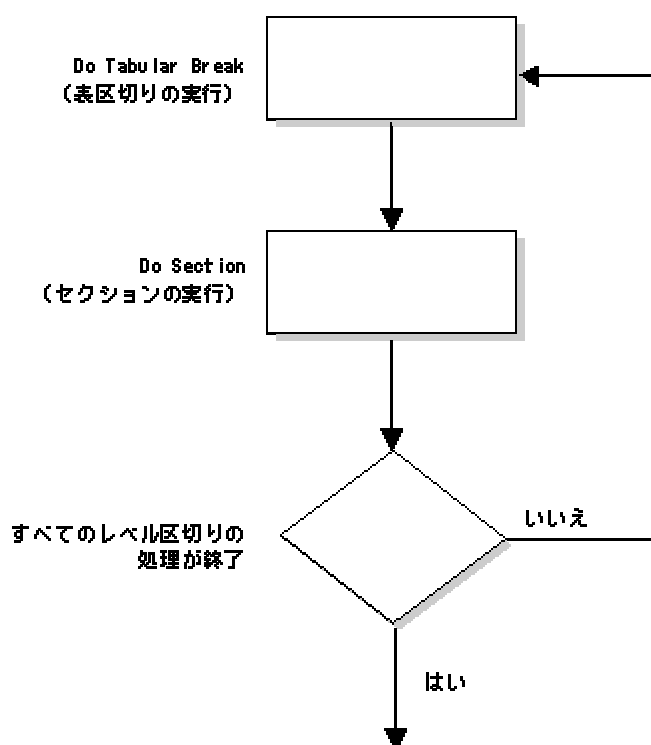
次の図は、表セクションの一般的なイベント・フローを説明しています。

表セクションのイベント・フロー



次の図に示すように、表セクションはレベル区切りがあるときにだけデータを集計して出力します。レベル区切りはデータ順序に依存するため、データ順序を細かく設定するほどレポートも詳細になります。たとえば、レポートにオブジェクトとして主科目と補助科目があるときに、表セクションのデータを会社だけ基準にしてソートするとします。会社だけを基準にソートして2社のレコードしかない場合、表セクションには2つのレコードしか出力されません。会社と主科目を基準にしてソートすると、表セクションにはこの2つのデータが出力されます。同様に、会社と主科目、補助科目のすべてを基準にした場合、出力されるのはこの3つのオブジェクトすべてについてです。このため、順序設定するデータおよびレベル区切りの数が多いほど、レポートが詳細になります。

表セクション・レベル



表セクションの他の機能には、ドリルダウンや勘定科目レベル、集計機能、自動集計があります。ドリルダウン機能を使用すると、レポートを参照中に対話型アプリケーションを簡単に呼び出せます。対話型アプリケーションにより、参照中のレポートの残高明細を表示できます。最終オブジェクトの印刷後に集計機能を使用すると、セクションの処理が終わった後にロジックの出力または処理が可能です。自動集計機能は、タイプに関係なく数値を自動的に合算します。ただし、計算の対象に数値以外の値が含まれる可能性もあるため注意してください。ある特定のカラムを集計の対象から除外するには、そのカラムのプロパティで[Suppress Printing at Totals(集計結果を非表示にする)]オプションを選択します。項目によっては、集計されないようにデータ辞書レベルで定義済みの場合もあります。

複数のセクションや、グループおよびカラム・セクションの組合せを使用してレポートを処理することもあります。この場合、複数のセクションの代わりに 1 つの表セクションを使用できます。複数のセクションを 1 つの表セクションに置き換えると、呼び出すセクションの数が少なくなるためシステムのパフォーマンスが向上します。

参照

- Do_Section イベントについては「バッチ・イベントの理解」
- レベル区切りイベントについては「レベル区切り処理の理解」

結合セクションへのロジックの添付

結合したセクションにロジックを添付するには、INIT_Section イベントではなく Refresh Section イベントに添付する必要があります。このようにしないと、セクションが処理されるたびにロジックが処理されません。結合セクションが処理される際、システムは親/子セクションが最初に処理されるときに INIT_Section イベントを初期化します。次に、後に続く親/子セクションが処理されるごとに Refresh Section イベントが初期化されます。このため、INIT_Section にイベントを添付すると、ロジックは 1 度しか処理されません。Refresh Section イベントにロジックを添付した場合、そのセクションが処理されるたびにロジックが処理の対象になります。

データ選択および順序設定

レポートまたはバッチ処理に複数のセクションがあつて処理に時間がかかる場合は、それぞれのセクションのデータ選択を確認することもできます。指定がないとシステムはテーブルのすべてのレコードを処理するためです。レベル 1 のセクションに別のセクションのデータ選択および順序を適用するには、システム関数の Use Data Sel/SeqFromASection を使用します。このシステム関数は、データ選択および順序を他のセクションに適用します。この機能はレポートのレベル 1 のセクションにのみ影響します。

たとえば、〈ピッキング・リストの印刷〉プログラム(R42520)では、データ選択で受注明細テーブル(F4211)の多数のカラムから選択できます。1 番目のセクションは非表示で F4211 テーブルへのデータベース出力があるため、最初に「commitments(コミットメント)」を処理して F4211 テーブルにローを追加する必要があります。次のセクションでは修正および更新の終わった F4211 テーブルが表示され、コミットのレコードが記載される必要があります。これには、一時ファイルを使用するか、複数のセクションのデータ選択を変更することができます。この場合、Use Data Sel/SeqFromASection システム関数を使用して前のレベル 1 のセクションからデータ選択と順序を適用することもできます。

Use Data Sel/SeqFromASection システム関数は、同じレポートの別のセクションまたは異なるレポートのセクションからデータ選択と順序を適用する場合に使用します。ターゲット・セクションには、ソース・セクションからのデータ選択や順序設定を使用できます。ターゲット・セクションのスペック情報は、ソース・セクションのデータ選択および順序設定に置き換わります。

Use Data Sel/SeqFromASection システム関数を使用するには、ターゲット・セクションの Init_Section イベントのイベント・ルールにアクセスします。Init_Section イベントは、このシステム関数を呼び出す唯一のイベントです。General フォルダにアクセスして、Use Data Sel/SeqFromASection システム関数を選択してください。

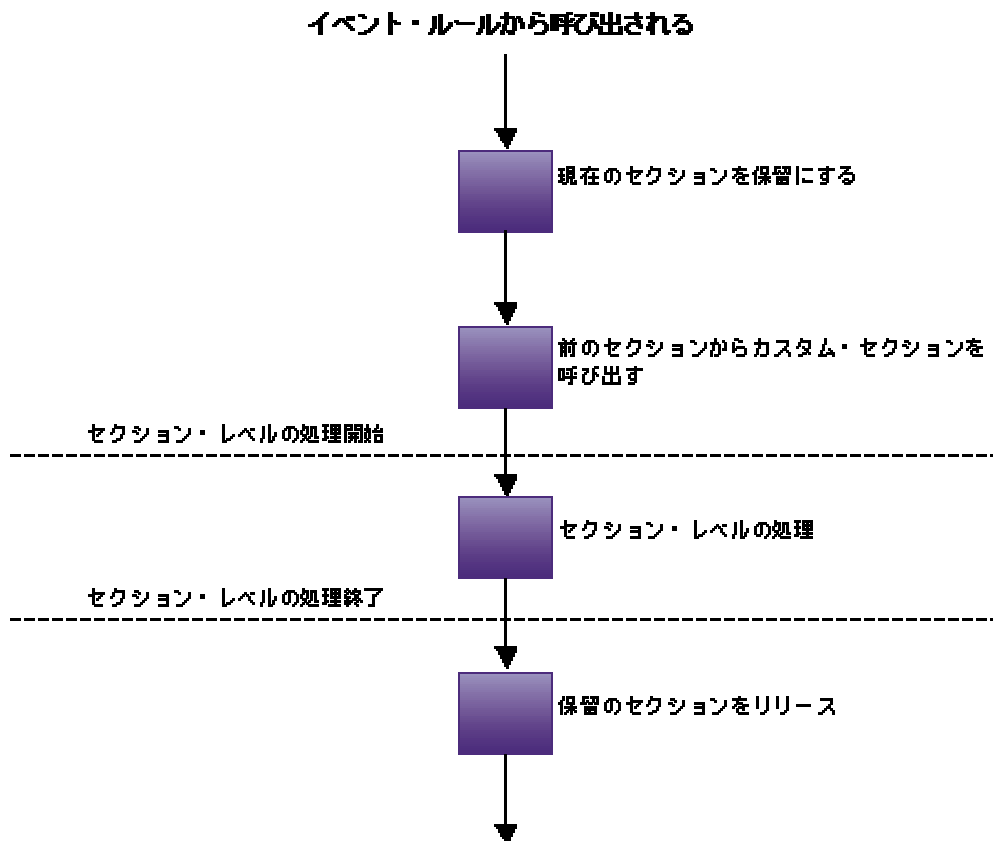
参照

- レベル区切りヘッダー/フッターおよびレベル区切りイベントについては「レベル区切り処理の理解」

カスタム・セクションの理解

カスタム・セクションをイベント・ルールと共に使用すると、レポートに印刷するデータを制御できます。オブジェクトのないカスタム・セクションを作成して、そのセクション・プロパティで[Page Break After Print(ページ区切りの後に印刷)]を選択すると、強制的にページ区切りを挿入できます。カスタム・セクションは変数テキストの印刷にも使用できます。また、カスタム・セクションは同じデータはあるがフォーマットの異なるセクションにも利用できます。たとえば、異なる2つのモジュールに存在するカスタム・セクションをレポートで使用し、必要に応じてモジュール特有のデータを表示する別のセクションを呼び出すことができます。

次の図はカスタム・セクションのプロセス・フローを説明しています。



カスタム・セクションに含まれるデータ呼出しが実行されると、バッチ・エンジンは現在のセクションの処理を停止します。カスタム・セクションの処理が終わると、保留になっているセクションに戻ります。

カスタム・セクションに含まれるデータ呼出しが実行されると、現在のセクションの処理が停止されます。カスタム・セクションの処理が終わると、保留になっているセクションに戻ります。

レポートを実行すると、バッチ・エンジンはカスタム・セクションのシステム関数が実行されるまで各セクションの呼出しおよび処理を続けます。次にカスタム・セクションからデータを読み込んで処理します。カスタム・セクションの処理が終わると、別のイベント・ルールにより指示がなければ元のセクションに戻ります。

カスタム・セクションは、Initialize Section 以外のイベント・ルールから呼び出すことができます。
Initialize Section を使用してカスタム・セクションを呼び出そうとしても、レポートは処理されません。

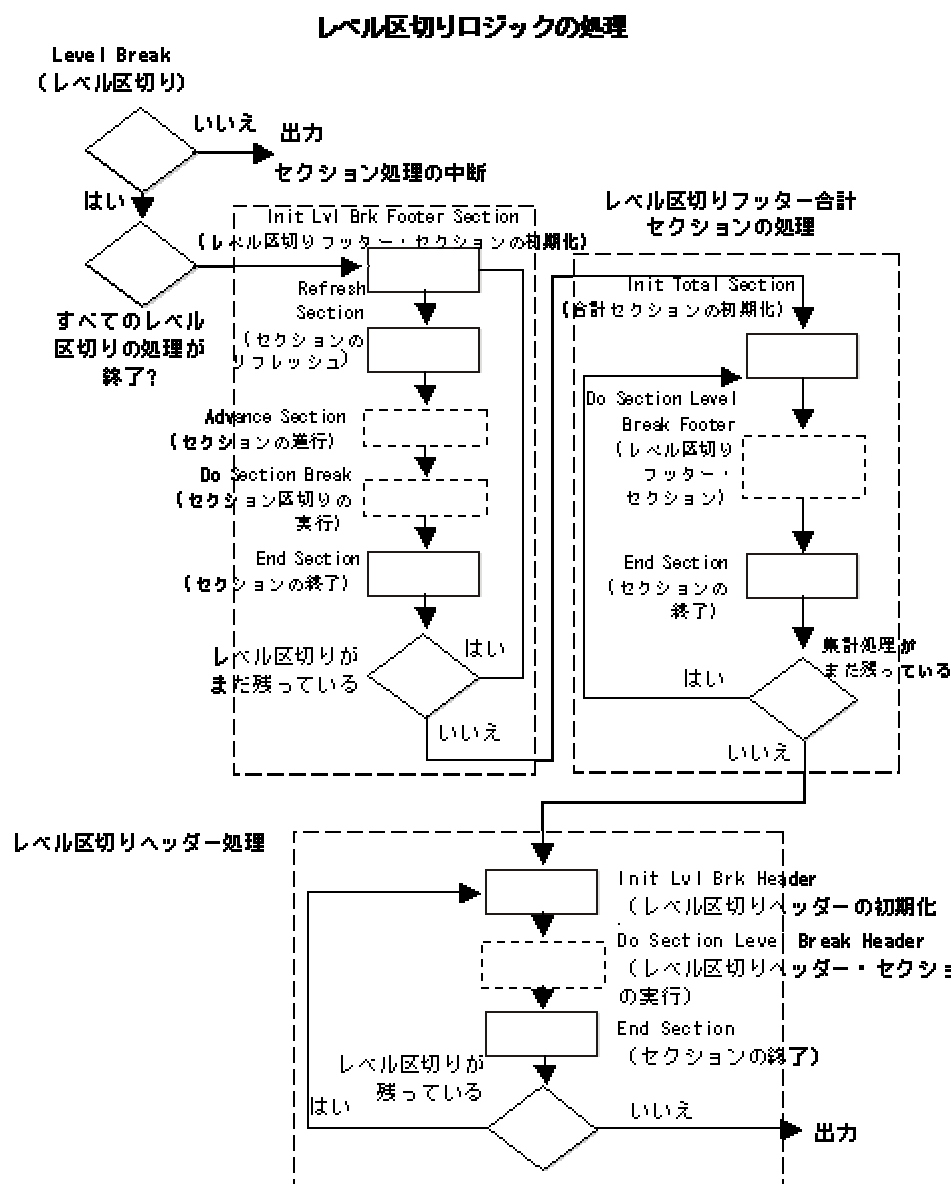
カスタム・セクションの処理フローは、グループやカラム、表などセクション・タイプで定義した順序と同じになります。

レベル区切り処理の理解

レベル区切りを使用すると、前回と現行のレコードを比較してレポートやバッチ処理のデータ変更を識別できます。レコードに変更があるとレベル区切りが発生します。レベル区切りは、大量にあるレポートのリスト項目を小さいグループに分類するときに使用します。たとえば、電話番号を市外局番ごとにグループ化したり、部署ごとに従業員をまとめる場合などがあります。レベル区切りを設定すると、ページ区切りや合計、ヘッダーやフッターを付けることができます。レベル区切りはビジネス・ビューにのみ添付でき、レポートのその他の変数には適用できません。

1 つのデータ項目にはレベル区切りヘッダーまたはフッターは 1 つしか添付できません。データ項目に複数のレベル区切りヘッダー/フッターを添付しようとする、添付された最初のヘッダー/フッターのみが処理され、その他のレベル区切りセクションは無視されます。

次の図では、レベル区切りロジックの処理について説明します。



レベル区切りヘッダー/フッターを処理する前に、バッチ・システムにより INIT_Break Section イベントが発生し、現在のセッションの処理が中断され、レベル区切りフッターへと移動します。レポートで指定している場合は、レベル区切りフッター・セッションの処理が終わった後にレベル区切りヘッダーが処理されます。

参照

- レベル区切りヘッダーおよびフッターの処理については「レベル区切りヘッダーおよびフッター・セッションの処理」

Level-Break Section イベント

レベル区切りヘッダーまたはフッターを含むレポートを処理する際、「INIT_Level Break Footer Section」か「INIT_Level Break Header Section」イベントが自動的に呼び出されます。これらのイベントにイベント・ルールを添付すると、バッチ・システムによるイベントの処理方法を制御できます。

たとえば、会社別にデータを集計したレポートを作成する場合、レベル区切りフッターを利用して詳細ファイルを読み込むようレポートを設計できます。「会社」というデータ項目にレベル区切りを設定すると、会社名が変わる部分でバッチ・システムがその詳細セクションのレベル区切りフッターを呼び出します。

レベル区切りセクション・イベントには、ビジネス関数やテーブルの出入力、その他のイベントを添付できます。

INIT_Level Break Footer Section イベント

バッチ・システムが INIT_Level Break Footer Section イベントを呼び出す際、前のセクションの値にアクセスして集計または合計計算を実行します。たとえば、レベル区切りフッターが会社の総売上を計算するように設定されている場合、レベル区切りフッターにより、前のセクションで処理されたすべてのレコードの下に合計が挿入されます。INIT_Level Break Footer Section イベントはレベル区切りフッター・セクションに添付されます。

同じレポートに複数のレベル区切りフッターを設定した場合、バッチ・システムは一番下のセクションから上に向かって処理を進めます。

レベル区切りフッターにロジックを添付するときは、End Section(セクションの終了)イベントではなく End Level Break Footer Section(レベル区切りフッター・セクションの終了)イベントに添付してください。

INIT_Level Break Header Section イベント

INIT_Level Break Header Section イベントは、前のセクションの処理の終了後に呼び出されます。INIT_Level Break Footer Section イベントを設定している場合は、その処理が終わった後にも呼び出されます。INIT_Level Break Header Section イベントは、現在のレベルに関連するヘッダー・セクションを検索し、レベル区切りヘッダーのデータを処理します。

たとえば、セクションの総合計を計算するようにレベル区切りフッターを設定した場合、次のセクションのレベル区切りヘッダーよりも前にレベル区切りフッターが処理されます。これは、次のセクションには別の会社の収益が含まれる可能性があるためです。ヘッダー・セクションでは前のセクションからの新規または異なるレコードが処理されます。

同じレポートに複数のレベル区切りヘッダーを設定した場合、バッチ・システムは一番上のセクションから下に向かって処理を進めます。

END_Level-Break Header Section/END_Level-Break Footer Section イベント

Initialize Level Break イベントの処理が終わると、END_Level Break Header Section イベントまたは END_Level Break Footer Section イベントが実行されます。これによりレベル区切りの処理が終了して、前のセクションに戻ります。End Level Break Section イベントには、カスタム・セクションを呼び出すロジックを添付できます。たとえば、レベル区切りフッターのデータの後に免責事項などのテキストを入れる場合があります。この場合、出力したいデータを含むカスタム・セクションを作成して、End Level Break Section イベントにカスタム・セクションのロジックを添付することができます。このレポートを処理する際、レベル区切りフッター・セクションの下に免責事項が表示されます。

バッチ・イベントの理解

レポートまたはバッチ・アプリケーションの処理中に、ランタイム・エンジンが一時的に停止して添付されたロジックを処理するときがあります。ランタイム・エンジンが停止するこれらのポイントを「イベント」と呼びます。イベントを使用して処理用のカスタム・ロジックを挿入します。J.D. Edwards では、定義済みのバッチ・イベントを用意しています。セクション内でのこれらのイベントの基本的な流れは Initialize (初期化する)、Do (実行)、End (終了) となります。

該当するタイプのセクションが存在する場合にのみ処理されるイベントもあります。たとえば、「INIT_Report Header」や「END_Report Header」はレポートにレポート・ヘッダー・セクションがあるときにだけ初期化されます。同様に、「INIT_Level Break Footer」と「END_Level Break Footer」はレベル区切りフッターがある場合에만処理されます。

Do_Section イベント

DO_Section イベントは、レポートのオブジェクトに新しい値が割り当てられた後で、セクション内のオブジェクトを処理する直前に呼び出されます。ほとんどの場合は、オブジェクトの処理前に発生する DO_Section イベントにロジックを添付します。この時点で添付したロジックは、オブジェクトに何らかの形で影響します。

システムが DO_Section イベントを処理する際はカラム見出しイベントが最初に処理され、続いて最初の行が読み込まれます。行の各オブジェクト(カラム)について、INIT_Object と DO_Object、End_Object が実行されます。最後のオブジェクトの処理が終わると、After_Last_Object_Printed が呼び出され、次の行を取り込み、プロセスが繰り返されます。すべての行がデータベースから取り込まれると End_Section が実行されます。

システムはカラム見出しを最初に処理し、続いて最初の行を取り込みます。行の各オブジェクト(カラム)について、INIT_Object と DO_Object、End_Object が実行されます。最後のオブジェクトの処理が終わると、システムは After_Last_Object_Printed を呼び出して次の行を取り込み、プロセスを繰り返します。すべてのオブジェクトがデータベースから取り込まれると、End_Section が実行されます。

オブジェクトがページに収まらないときは、バッチ・エンジンは Suspend Object を呼び出します。このイベントはオブジェクトを次のページに移動します。

オブジェクトが結合セクションのように子セクションの場合、システムはそのオブジェクトを初めて処理するときに INIT_Section を呼び出します。その後で子セクションが処理されるときは、バッチ・エンジンが Refresh Section を毎回呼び出します。

その他のバッチ・イベント

通常使用する基本的なバッチ・イベントに加えて、バッチ処理を柔軟に進めるためのその他のイベントがあります。これらのイベントは次のとおりです。

- レポート・レベル
- セクション・レベル
- ページ・ヘッダー・セクション
- ページ・フッター・セクション
- レポート・ヘッダー・セクション
- レポート・フッター・セクション
- 固定情報および変数

レポート・レベルのイベント

Do Initialize Printer
(プリンタ初期化の実行)

プリンタ名を決定して検証します。

Initialize Report
(レポートの初期化)

サブシステムでイベント・ポイントにイベント・ルールがない場合に、グローバル・レポート変数およびグローバル・イベント・ルール変数値をリセットします。それ以外の場合はグローバル変数の値を保管します。このイベントはレポートで1回しか実行されず、常にイベントの中で最初に処理されます。サブシステム・レポートの場合は、このイベントのイベント・ルールはサブシステム起動時にサブシステム・トリガーの処理よりも先に1度だけ実行されます。

End Report
(レポートの終了)

レポート処理の最後に1回実行され、常に最後に処理されます。サブシステム・レポートの場合は、このイベントのイベント・ルールはサブシステムの処理中または終了時に、サブシステム終了トリガーが処理された後で実行されます。

セクション・レベルのイベント

Advance Section
(セクションの進行)

データベースから取込みを実行するたびに発生します。取込みよりも前にオブジェクトの処理を実行する場合に使用してください。このセクションに添付のビジネス・ビューがない場合は、このイベントは1度だけ処理されます。

After Last Object Printed
(最後の
オブジェクトの印刷後)

ローが出力ファイルに出力された後で発生します。ローが出力された後にデータを処理するときに使用してください。

Before Level Break
(レベル区切り前)

取込みの後で、レベル区切りの処理前に処理を実行するときに使用します。

Do Balance Auditor
(残高監査の実行)

表セクションについてのみ有効です。ドリルダウン機能と共に使用します。

Do Section (セクションの実行)	Advance Section の後で、プリンタまたは出力ファイルへの値の割当てが終わってから発生します。このイベントは、現在のレコードのデータが PDF ファイルに書き込まれる前に発生します。Do Cell(表セクションがある場合)および Do Variable/Do Constant よりも前に発生します。
Do Tabular Break (表区切りの実行)	表セクションについてのみ有効です。レベル区切りとして設定したビジネス・ビュー・フィールドに変更があると発生します。レベル区切りフィールドの値の変更が必要となる処理を実行する際に使用します。
End Break Section (区切りセクションの終了)	レベル区切りが終了した後に発生します。レベル区切りの直後に処理を実行するときに使用します。
End Lvl Brk Footer Section(レベル区切りフッター・セクションの終了)	レベル区切りフッターの直後に処理を実行するときに使用します。
End Lvl Brk Header Section(レベル区切りヘッダー・セクションの終了)	レベル区切りヘッダーの直後に処理を実行するときに使用します。
End Section (セクションの終了)	バッチ・エンジンがセクション値の最後のセットを処理し終わった後に発生します。セクションの終了直後に処理を実行するときに使用してください。このイベントは最終レコードおよび最終ファイルのプロシージャに便利です。
Init Break Section(区切りセクションの初期化)	レベル区切り処理の開始後に発生します。このイベントは、レベル区切り上で親セクションに結合された子セクションを初期化します。
Init Lvl Brk Footer Section(レベル区切りフッター・セクションの初期化)	レベル区切りフッターの直前に処理を実行するときに使用します。
Init Lvl Brk Header Section(レベル区切りヘッダー・セクションの初期化)	レベル区切りヘッダーの直前に処理を実行するときに使用します。
Initialize Section (セクションの初期化)	バッチ・エンジンが最初にセクションを見つけたときに発生します。セクションの開始直前に処理を実行するときに使用します。グローバル変数の処理や、その他の手順の準備をしているときに便利です。条件付きセクションについては、セクションが呼び出されるたびにこのイベントが処理されます。
Refresh Section (セクションのリフレッシュ)	UBE が最初に子セクションを見つけると、Initialize Section イベントを実行します。その後は子セクションが処理されるごとにバッチ・エンジンはこのイベントを使用します。この時点では子セクションの内部構造およびポインタは確立されており、UBE は子セクションについて新しいレコード・グループを選択しようとしています。このロジックはレベル区切りセクションにも使用できます。このロジックを使用して、親セクションに基づいてレベル 2 のセクションのオブジェクト値を設定します。また、このイベントはセクションのデータ選択および順序設定のリセットまたは修正にも使用できます。
Suspend Section (セクションの一時停止)	データがページに収まりきらないときに発生します。このイベントはセクション処理を中断します。ページ区切りの発生した時点で処理を実行するときに使用します。

ページ・ヘッダー・セクション・レベルのイベント

Initialize Page Header (ページ・ヘッダーの初期化)	レポートの開始時点でレポート・ヘッダーのロジックより後で、最初にページ・ヘッダーのセクションが処理される前に発生します。また、ページ区切りのたびに処理されます。レポート・ヘッダーのロジック実行後でないと設定できない値を初期化するときに使用します。グループおよびカラム、表セクションの Init Section に似ていますが、ページ・ヘッダー・セクションでしか処理されない点が異なります。
End Page Header (ページ・ヘッダーの終了)	ページ・ヘッダーの処理の終了後に発生します。ページ・ヘッダーの直後に処理を実行するときに使用します。

ページ・フッター・セクション・レベルのイベント

Initialize Page Footer (ページ・フッターの初期化)	レポートの開始時点でレポート・ヘッダーのロジックより後で、最初にページ・ヘッダーのセクションが処理される前に発生します。現在のページ・フッター・セクションに印刷される値を初期化するときに使用します。通常これらの割当ては、そのページで既に処理されたデータに依存します。
End Page Footer (ページ・フッターの終了)	ページ・ヘッダーの処理の終了後に発生します。ページ・ヘッダーの直後に処理を実行するときに使用します。

レポート・ヘッダー・セクション・レベルのイベント

Initialize Report Header (レポート・ヘッダーの初期化)	レポート処理の最初に 1 度だけ処理されます。レポートの開始時点で値を初期化するときに使用します。グループおよびカラム、表セクションの Init Section に似ていますが、レポート・ヘッダー・セクションでしか処理されない点が異なります。
End Report Header (レポート・ヘッダーの終了)	レポート・ヘッダー処理の後に発生します。この後に、ページ・ヘッダーが処理されます。レポート・ヘッダーの直後に処理を実行するときに使用します。

レポート・フッター・セクション・レベルのイベント

Initialize Report Footer (レポート・フッターの初期化)	レポートですべての処理が終わった後で、レポート・フッターの印刷前に処理されます。レポート・フッターに印刷される値を初期化するときに使用します。
End Report Footer (レポート・フッターの終了)	レポート・フッター処理の後に発生します。このイベントの処理が終わると、レポート処理も終了します。レポート・フッターの直後に処理を実行するときに使用します。

固定情報および変数イベント

Do Column Heading(カラム見出しの実行(固定情報))	カラムが初期化されるときに発生します。このイベントを使用して、ビジネス関数に関連するイベント・ルールに基づいてカラム見出しに値が自動入力されます。
Do Variable 変数の実行)/ (固定情報の実行)	フォントおよび色を選択してからオブジェクトの値が印刷可能な文字列に変換され、ページに出力される前に発生します。オブジェクトの処理終了後に処理を実行するときに使用します。出力前に値を変更したり、オブジェクトの属性を表示することができるのはこれが最後です。
End Variable (変数の終了)/End Constant(固定情報の終了)	オブジェクトが処理された後に発生します。オブジェクトが不可視また非表示の場合でも同じです。オブジェクトの処理終了後に処理を実行するときに使用します。
Initialize Variable (変数の初期化) /Initialize Constant (固定情報の初期化)	レポート・オブジェクトまたは変数が処理される段階で発生します。オブジェクトの処理開始前に処理を実行するときに使用します。この段階ではオブジェクトのページ上の位置が決まっていないため、オブジェクトの位置の計算に影響する処理を実行する場合に便利です。
Skip Variable (変数のスキップ)/Skip Object(オブジェクトのスキップ(固定情報))	オブジェクトが現在のページに収まりきらないときに発生します。バッチ・エンジンはこのイベントを実行して、次のページ処理が始まるまでそのオブジェクトをバイパスします。ページ区切りのところでオブジェクトの値を変更する際に使用します。
Suspend Object (オブジェクトの一時停止(固定情報))	オブジェクトに複数のテキスト文字列やカラム見出しが必要で、オブジェクトの一部しかページに入りきらないときに、バッチ・エンジンは、このイベントを実行します。これにより、次のページが始まるまでこのオブジェクトの処理を中止します。ページ区切りで値を修正するときに使用します。オブジェクトの値は部分的に処理が終わっているため、この時点で値を変更しないことをお勧めします。
Column Inclusion (カラム組込み)	このイベントは表セクションについてのみの有効で、レコードがデータベースから取り込まれた後で発生します。計算を実行するときにこのイベントを使用します。
Do Cell (セルの実行(表))	セルの計算処理が終わった後で Object イベントの実行中に発生します。表示する前にセルのデータを変更するときに使用します。このイベントは、Do Variable/Do Constant イベントよりも前で、計算中に発生します。

バッチ・イベント内のシステム関数

バッチ・システム関数を使用すると、レポートを柔軟に処理でき、細かく調整することもできます。たとえば、バッチ・システム関数を使用してオブジェクトやセクションの表示/非表示を制御したり、メッセージを生成したりできます。

バッチ・システム関数は主に次のカテゴリから構成されます。

Object(オブジェクト)	オブジェクトの表示/非表示などに使用できます。
Section(セクション)	セクションの表示/非表示や合計の処理などに使用できます。
General(一般情報)	データ選択や順序設定の処理などに使用できます。
Messaging (メッセージ送受信)	メッセージの送信や更新、削除などに使用できます。
Workflow (ワークフロー)	ワークフロー・メッセージを使用して、プロセスの処理などが実行できます。
Transaction Processing(トランザ クション処理)	トランザクション処理のシステム関数を使用して、トランザクションの開始や引当て、戻しなどが実行できます。
Media Objects (メディア・オブジェク ト)	メディア・オブジェクトを処理できます。

一般的なバッチ・システム関数は次のとおりです。

Set Sequence Append Flag(順序 追加フラグの設定)	レポートの順序設定にセクションの順序設定を追加できます。
Stop Section Processing(セクショ ン処理の停止)	<p>現在のセクションの処理を中止して次のセクションに移動します。このシステム関数はこれから実行するイベント・ルール・ロジックが大量にある場合に、パフォーマンスを向上させるのに便利です。たとえば、与信限度がある金額を超える顧客がいなければ、システムはそのセクションの処理を中断して次のセクションに移動します。</p> <p>このシステム関数は、Suppress Section Write が現在のレコード処理のみを停止（セクションの書き込みを抑制）して、バッチ・エンジンは同じセクション内の次のレコードを処理する点で異なります。</p>
Hide Object (オブジェクトを隠す)	グループまたはカラム・セクションでイベント・ルールの Hide Object システム関数を使用してオブジェクトを非表示にする場合には、その行に 1 つしかオブジェクトがなくてもブランクの行が印刷されるので注意してください。その行に印刷する他のオブジェクトがあるかどうかは、システムには判断できません。システムがブランク行を印刷しないようにするには、オブジェクトを属する条件付きセクションに置き、Hide Object システム関数を使用してそのセクションを非表示にします。

参照

- 各レポート・セクションで利用できるイベント・リストと処理順序については「イベント」
- その他の関数については Knowledge Garden の「ERP 9.0 API」

バッチ・ランタイム処理の理解

「バッチ・ランタイム処理」とは、「セクションの初期化」などのイベントおよびそれに添付されたイベント・ルール・ロジックが実行時に評価されるかを意味します。

ランタイム構造体とはメモリ・ブロックのことで、データの読み込みや処理、データベースへの書き込みのたびにそこにデータが保存されます。

〈Report Design〉には複数の異なるフィールド・タイプと、ランタイム構造体に関連するイベント・ルールがあります。

使用可能なオブジェクト

使用可能なオブジェクトは 2 文字のアルファベット・コードで表され、データ・ソースを識別します。また、実行時にレポートやバッチ処理でオブジェクト・データがどう使用されるかを決定します。

ランタイム処理中には、データは内部データ構造体としてメモリに保存されます。データ構造体のフィールドによっては、実行時に必要な間だけ一時的にデータを保存する場合があります。この場合は別のレコードを処理するためにデータがクリアされる可能性があります。

次のオブジェクトはバッチ処理用に定義されています。

BC	ビジネス・ビュー内のカラム。このリストにはビジネス・ビュー・カラムが表示されます。これらのカラムには、取込みが行われた時点のデータベースからの値が入ります。追加または更新時にデータベースに保存された値です。
PO	処理オプションから読み込まれた値。この値はアプリケーション起動時にアプリケーションによって読み込まれ、そのアプリケーションのどのフォームからもアクセスできます。読み込まれる処理オプションの値は、ユーザーが入力したもののか、アプリケーションの特定のバージョンに設定済みのものです。
VA	イベント・ルール変数。開発者が設定したイベント・ルール上の変数です。システムではこれらのオブジェクトを操作しません。
SV	システム変数。このオブジェクトはイベント・ルールがアクセスできる環境変数です。
SL	システム・リテラル。このオブジェクトはイベント・ルールがアクセスできる固定のシステム値です。
TV	テキスト変数
RC	レポート固定情報(UBE)
RV	レポート変数(UBE)
PC	前回のビジネス・ビュー・カラム
PV	前回のレポート変数

グループ・セクションの一般的なイベントのフロー

ランタイム・エンジンは一定の順序でイベントを処理します。グループ・セクションの一般的なイベントおよびそれらの処理される順序について、次に説明します。

Initialize Section(セクションの初期化)

次のイベントが発生した後に、ランタイム構造体にある値を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)

この例では住所録レポートのグループ・セクションを使用します。

実行時の値の構造体

RO		BO	
AN8	住所番号	AN8	
ALPH	名称	ALPH	

Advance Section(セクションの進行)

次のイベントが発生した後に、ランタイム構造体にある値を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)

実行時の値の構造体

RO		BO	
AN8	住所番号	AN8	
ALPH	名称	ALPH	

Before Level Break(レベル区切り前)

次のイベントが発生した後に、ランタイム構造体にある値を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)

実行時の値の構造体

RC		BC	
ANS	住所番号	ANS	1
ALPH	名称	ALPH	会計/流通会社

Do Section(セクションの実行)

次のイベントが発生した後に、ランタイム構造体にある値を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)

実行時の値の構造体

RC		BC	
ANS	住所番号	ANS	1
ALPH	名称	ALPH	会計/流通会社

After Last Object(最後のオブジェクト後)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)

実行時の値の構造体

RO		BO	
AN8	住所番号	AN8	1
ALPH	名称	ALPH	会計/流通会社

レポート			
住所番号	名称	1	会計/流通会社

Advance Section(セクションの進行)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)

実行時の値の構造体

RC		BC	
AN8	住所番号	AN8	1
ALPH	名称	ALPH	会計/流通会社

レポート			
住所番号	名称	1	会計/流通会社

Before Level Break(レベル区切り前)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)

実行時の値の構造体

RC		BC	
AN8	住所番号	AN8	27
ALPH	名称	ALPH	東流通センター

レポート	
住所番号 名称	1 会計/流通会社

Do Section(セクションの実行)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)

実行時の値の構造体

RC		BC	
AN8	住所番号	AN8	27
ALPH	名称	ALPH	東部流通センター

レポート	
住所番号 名称	1 会計/流通会社

After Last Object(最後のオブジェクト後)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)

実行時の値の構造体

RC

ANS	住所番号
ALPH	名称

BC

ANS	27
ALPH	東部流通センター

レポート	
住所番号 名称	1 会計/流通会社
住所番号 名称	27 東部流通センター
住所番号	
名称番号	

Advance Section(セクションの進行)

次のイベントが発生した後にランタイム構造体にある値と、この時点でのレポートの外観を以下に説明します。

- Initialize Section(セクションの初期化)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)
- Before Level Break(レベル区切り前)
- Do Section(セクションの実行)
- After Last Object(最後のオブジェクト後)
- Advance Section(セクションの進行)

実行時の値の構造体

RC

AN8	住所番号
ALPH	名称

BC

AN8	27
ALPH	東部流通センター

レポート	
住所番号 名称	1 会計/流通会社
住所番号 名称	27 東部流通センター
住所番号	
名称番号	

レポート出力

レポートは〈レポート設計ツール〉を使用して作成されます。レポート設計では、出力に関する特定の印刷のプロパティが定義されます。レポートを作成して投入した後は、バッチ・エンジンによってさまざまなサーバーやクライアントでレポートを処理できます。レポートの処理が完了したら、出力管理機能で生成と印刷処理を行います。このトピックでは、レポート生成中に行う印刷プロパティを説明します。

レポート設計の印刷プロパティ

〈Report Design〉は、出力フォーマットに関連する印刷プロパティを統合します。すべての場合において、レポート設計の印刷プロパティは、指定されたデフォルトのプロパティをバッチ変更用に一時変更します。レポート・バージョンで印刷プロパティを設定すると、レポート・テンプレートで指定されたプロパティが一時変更されます。〈Report Design〉のプリンタ・プロパティは、投入時に一時変更されます。このトピックでは、次の内容を含めて〈Report Design〉でプロパティを設定する方法を説明します。

注:

レポート・テンプレートの印刷プロパティを変更しても、既存のバージョンの印刷プロパティには影響しません。

指定プリンタの一時変更

デフォルト・プリンタは、バッチ処理に関連付けられています。デフォルト・プリンタは、ユーザーに関連付けることもできます。ユーザーに関連付けられたプリンタはバッチ処理に関連付けられたプリンタを一時変更します。これらのプリンタは、〈Report Design〉でレポートを設計する際にプリンタを選択して一時変更できます。選択したプリンタはプリンタ・スペックに保管され、投入時に一時変更しない限り、常にそのプリンタで印刷されるようになります。

► 指定プリンタを一時変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Print Setup]を選択します。
2. 〈Print Setup〉で、[Printer Name(プリンタ名)]ボタンをクリックします。
3. 〈論理プリンタの検索および選択〉フォームで、レポートを印刷する先のプリンタをクリックして[選択]をクリックします。

Printer Setup

OneWorld Printer

Printer Name: \\MFGDST03\HP

Physical Printer: \\MFGDST03\HP

Printer Model: NT_LASER

Printer Location: UNION 9TH

☐ Export to CSV

Paper

Size: LETTER

☐ Custom Width: 8.50 Height: 11.00

Orientation

☒ Portrait

☐ Landscape

OK Cancel

4. 〈Print Setup〉フォームで、オプションを選択して[OK]をクリックします。

用紙タイプの選択

用紙タイプは、事前定義済みのグループから選択するか、用紙のサイズを入力できます。

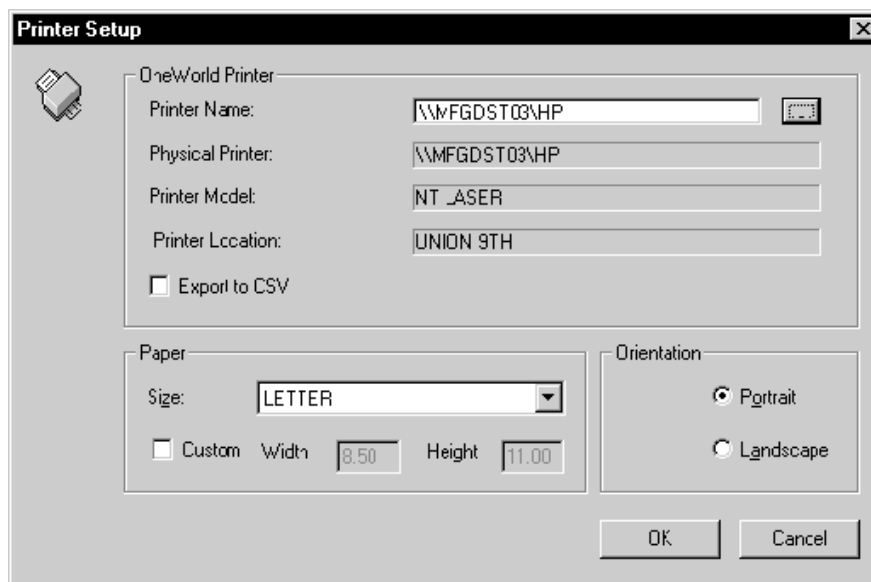
事前定義済みの標準的な用紙には A4、リーガル、レターがあります。レターがデフォルトの用紙タイプです。PDF の生成に使用される用紙サイズは、プリンタ定義テーブル(F986162)で事前定義されています。〈Report Design〉では、同じテーブルから用紙サイズが継承されます。事前定義済みのグループを変更するには、このテーブルを変更します。

用紙サイズは、幅と高さをインチで指定して定義することもできます。定義可能な最小幅は 2 インチ、最大幅は 21 インチです。定義可能な最小高は 2 インチ、最大高は 24 インチです。

▶ 用紙タイプを選択するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Print Setup]を選択します。



2. 〈Print Setup〉フォームで、[Size(用紙)]フィールドのドロップダウン・メニューから事前定義済みの用紙タイプを選択するか、[Custom]をクリックして用紙幅とサイズをインチで指定します。
3. 必要に応じてその他のオプションを選択して[OK]をクリックします。

印刷の向きの指定

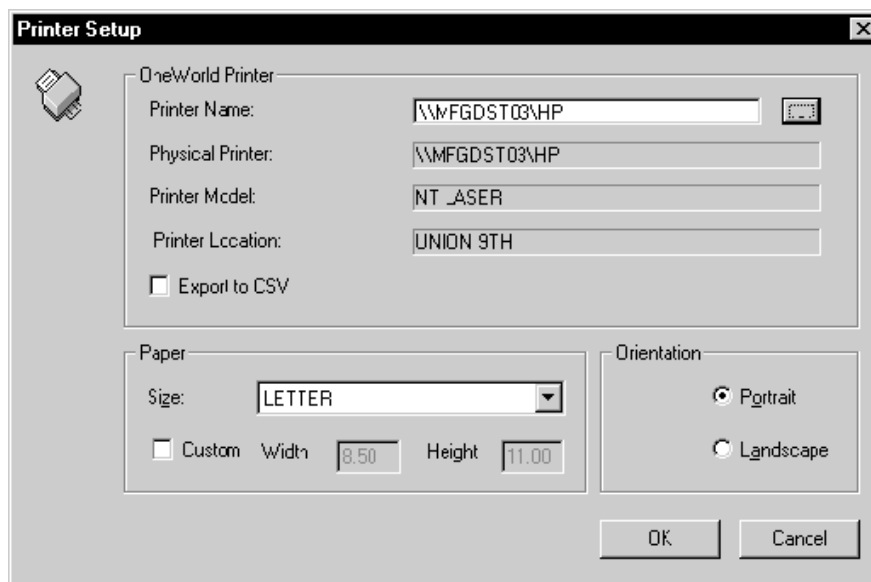
印刷の向きとは、印刷時に設定する用紙の方向を表します。垂直方向の用紙は縦長、水平方向の用紙は横長と呼ばれます。印刷の向きは事前定義済みの用紙サイズにのみ適用できます。このオプションは、ユーザー定義の用紙サイズには使用できません。

J.D. Edwards のソフトウェアでは、デフォルトの向きは横長です。ライン・プリンタに印刷する場合は、縦長の向きをお勧めします。用紙の向きは CSV の生成には適用しません。

▶ レポート設計で印刷の向きを指定するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Print Setup]を選択します。



2. 〈Print Setup〉フォームで、[Orientation(用紙の向き)]ボックスで指定する向きをクリックします。

[Custom(カスタム用紙)]サイズを選択すると、用紙方向のオプションが使用できなくなります。

3. 必要に応じてオプションを選択して[OK]をクリックします。

CSV(カンマ区切り)形式ファイルへのエクスポート

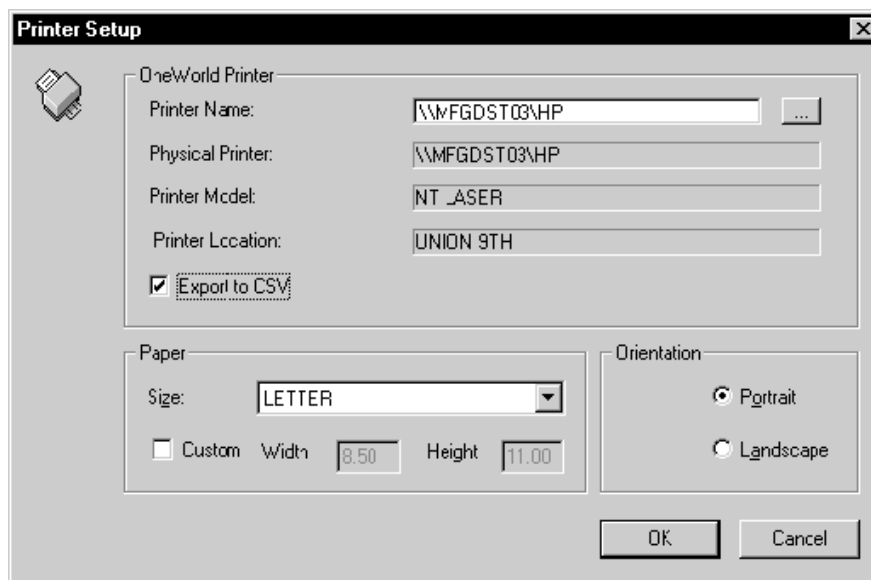
レポート・データを Excel や Lotus などの表計算(スプレッドシート)プログラムで表示するには、データを CSV ファイルにエクスポートする必要があります。エクスポートする前に、重複しているフィールドがなく、横のスペースが 52(Excel のデフォルトのカラム幅)に設定されているかどうか確認してください。グリッドの配置レイアウトで[Snap to Grid(グリッド位置合せ)]を設定してください。

CSV および PDF ファイルは、レポートが画面またはプリンタに投入されたときに印刷待ち行列ディレクトリで作成されます。シングル・スペースおよび用紙の向きが縦長の場合にのみ CSV ファイルがサポートされます。ドリル・ダウンは CSV の生成では無視されます。

▶ CSV(カンマ区切り)形式ファイルにエクスポートするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、エクスポートするレポートを選択します。
2. カラムやフィールドのレイアウトをチェックします。
重複するカラムやフィールドがないかどうか確認してください。
3. レポート・セクションをクリックし、[Layout(レイアウト)]メニューから[Grid Alignment(グリッドの配置)]を選択します。
4. 〈Alignment Grid(グリッド配置)〉フォームで、[Horizontal(水平方向)]のスペースを 52 に設定して[OK]をクリックします。
この値はレポート設計でレポート全体に適用されます。
5. [Report]メニューから[Print Setup]を選択します。



6. 〈Print Setup〉フォームで、用紙の向きを[Portrait(縦長)]に設定します。
7. [Export to CSV(CSV へエクスポート)]を選択して[OK]をクリックします。

参照

- フィールド長およびカラム幅の変更については「レポート・オブジェクトの外観の変更」

K2DoInitPrinter システム関数の使用

DO_INIT_PRINTER イベントを使用すると、バッチ・アプリケーションの処理時にプリンタを指定できます。このようにすると、指定した基準に基づいて、同じレポートを異なるプリンタに出力することができます。このイベントの ER(イベント・ルール)は、レポートが投入されるときに処理される最初の ER です。システム関数は、プリンタおよびバッチ・エンジンを解決して検証し、そのプリンタ名を使用してプリンタ・デバイス・コンテキストを取得します。このデバイスのコンテキストの一部は、レポート・スペックの特定のフラグが設定されている場合、一時変更できます。

レポート投入時の印刷プロパティ

レポートを投入するには、処理するレポートのバージョンを選択する必要があります。ジョブは次の 2 とおりの方法で投入できます。

- バージョンをローカルで投入する場合、J.D. Edwards ソフトウェアのクライアントは、UBE をすぐに実行し、出力結果を画面とプリンタのどちらに表示するか選ぶことができます。
- バージョンはエンタープライズ・サーバーにも投入できます。この場合、クライアントに投入するよりも効率がよくなります。バージョンがサーバーに投入されると、クライアントがバージョン・スペック、およびレポートの実行に必要なその他の情報(処理オプションの値、レポート・インターコネクトの値、プリンタ除法)をパックし、サーバーにこれらの情報を送信します。

ジョブがサーバーで投入される場合、次のいずれかの方法で開始できます。

- レポート・インターコネクトを使用して、別のレポートまたは対話型アプリケーションを使用する。レポート・インターコネクトは、ジョブをローカルで投入することもできます。
- コマンド行で RUNUBE を実行する。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「レポート・インターコネクトの作成」

プリンタの指定

クライアントまたはサーバー上でジョブを投入する場合は、次の方法で実行します。

- 指定した時刻にプリンタが選択される場合、プリンタ名はレポート・スペックに保管されています。クライアント上では、プリンタ名は[プリンタ選択]ダイアログ・ボックスに投入時に渡されます。
- このプリンタは一時変更できます。
- 指定した時刻にプリンタが選択されていない場合は、デフォルト・プリンタが使用されます。デフォルト・プリンタはユーザー、環境、およびホストによって選択されます。
- 選択したプリンタに応じて[詳細]タブで選ぶプリンタ定義言語がそれぞれ使用可能になります。

ジョブがレポート・インターコネクトを通して投入された場合、子レポートは親レポートからプリンタ名を継承します。印刷時には、ジョブが完了したら<サーバーの処理>プログラム(P986116)でプリンタを一時変更することができます。

ジョブが RUNUBE を通して投入される場合、プリンタ名がスペックに保管されていると、そのプリンタが印刷時に使用されます。そうでない場合は、デフォルト・プリンタが使用されます。印刷時には、ジョブが完了したら〈サーバーの処理〉でプリンタを一時変更することができます。

用紙タイプの選択

〈Report Design〉で、レポートの設計時に用紙サイズにカスタムを指定した場合、投入時には用紙タイプを変更できません。

ジョブの投入時には、プリンタに定義された用紙タイプが使用されます。用紙タイプは〈プリンタの選択〉フォームの[印刷のプロパティ]タブで変更できます。選択するプリンタに応じて、[用紙タイプ]フィールドにそのプリンタに設定されたデフォルト用紙タイプが自動入力されます。

印刷の向きの指定

〈Report Design〉で選択した印刷の向きはレポートのスペックに保存されます。スペックに保存されていた向きは投入時に〈プリンタ選択〉フォームの[印刷のプロパティ]タブに表示されます。投入時に（ローカルまたはサーバーで）印刷の向きを変更することはできません。

ただし、〈Report Design〉で用紙サイズにカスタムを選択していた場合は、〈プリンタの選択〉フォームでは印刷の向きを制御するオプションは使用できなくなります。ライン・プリンタの場合は、CPI、CPP、LPI、および LPP により印刷の向きが決定されます。

[すぐに印刷]オプションの使用

JDE.INI ファイルで[NETWORK QUEUE SETTINGS]セクションの PrintImmediate フラグを TRUE に設定し、ジョブをすぐに印刷するよう指定していると、サーバーでは次のような処理が行われます。

- 〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)で[印刷]オプションをクリックしなくても、ジョブは自動的に印刷されます。〈プリンタ選択〉ダイアログ・ボックスの[すぐに印刷]オプションは既にチェックされています。この設定は一時変更できます。

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

PrintImmediate=TRUE/FALSE

- レポート・インターコネクトでは、[すぐに印刷]オプションが使用可能になっていると、親から子レポートにオプションが継承されます。この場合、印刷は一時変更できません。
- RUNUBE を通してジョブを投入すると、PrintImmediate が引数としてコマンド行から渡されます。この場合、PrintImmediate オプションが TRUE に設定されていると、サーバーと同じようにジョブが自動的に印刷されます。

SavePDL ファイル・オプションの使用

JDE.INI ファイルで、NETWORK QUEUE SETTINGS の SavePDL オプションが TRUE に設定されている場合、投入時に〈プリンタの選択〉フォームにある[文書設定]タブで[プリンタ定義言語ファイル]オプションが使用可能になります。このオプションは投入時に変更可能です。

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

SavePDL=TRUE/FALSE

さらに、JDE.INI ファイルで[SavePDL(プリンタ定義言語ファイルの保存)]オプションが FALSE の場合、投入時にこのオプションを選択して、作成された中間ファイルを保存することができます。PDL ファイルは、印刷待ち行列ディレクトリに作成されます。ジョブがレポート・インターコネクトを通して投入された場合、子レポートは親からこのプロパティを継承します。

投入時には、[プリンタ定義言語ファイル]オプションを変更でき、このオプションに応じて PDF や PDL ファイルが特定のジョブに対してのみ作成されます。

CSV(カンマ区切り)形式ファイルへのエクスポート

クライアント側でジョブを投入する場合、CSV ファイルにエクスポートするよう選択していると、オプションはレポート・スペックに保存されます。スペックに保存されたこのオプションは[レポート出力定義]ダイアログに表示されます。オプションを変更してジョブの投入先をプリンタにしたり画面にしたりすることができます。

投入先をプリンタに指定すると、〈プリンタの選択〉フォームの[文書設定]タブで[CSV(カンマ区切り)]オプションを一時変更できます。CSV および PDF ファイルは、このオプションが選択されたときに印刷待ち行列ディレクトリで作成されます。

ジョブをサーバーに投入する際、指定した時刻にレポート・スペックに[CSV(カンマ区切り)]オプションが保存されていた場合、このオプションは〈サーバーの処理〉で変更できます。

ジョブがレポート・インターコネクトを通して投入された場合、親からこのオプションが子レポートに継承されます。子または親レポートに対してこのオプションを有効にするには、オプションは機能設計時に選択してください。

プリンタ情報の保管および受渡し

クライアントで UBE を実行すると、プリンタ情報は pUBEDs 構造に保管され、この情報はバッチ・エンジンに渡されます。

クライアントからサーバーにジョブを渡すため、〈プリンタの選択〉フォームで取得したプリンタ情報は F986110(ジョブ管理テーブル)に BLOB(2 進ラージ・オブジェクト)として保管されます。

レポート・インターコネクトを通してジョブを投入するために、子レポートのプリンタ情報が PRT_GetInfoFromPreviousReport API を通して継承されます。継承される値は、プリンタ名、すぐに印刷、プリンタ定義言語ファイル、用紙タイプ、プリンタ・フラグ、部数、および用紙トレイです。このスペックの子レポートに定義済みのプリンタ名やカスタム用紙タイプセットがある場合は、継承する値を一時変更することがあります。

RUNUBE を実行する場合、プリンタ情報は[すぐに印刷]および[プリンタ定義言語ファイル]と同じようにパックされ、ジョブ管理テーブル(F986110)に保管されます。

クライアント上でのジョブ投入

クライアント上でのジョブの投入は次の方法で行われます。

- プリンタ
- 画面 (PDF で表示)
- CSV ヘエクスポート
- OSA を利用してエクスポート

ジョブがプリンタに投入されると、〈プリンタの選択〉フォームが使用可能になり出力オプションを変更できるようになります。

ジョブを画面に投入するよう〈レポート出力定義〉フォームの [レポート出力先] オプションで指定すると、Acrobat Reader で PDF ファイルが表示されます。

[CSV ヘエクスポート] オプションを選択すると、デフォルトの CSV ビューア (Excel など) でレポートが自動的に表示されます。

[出力ストリーム・アクセス] の [OSA インターフェイス名] オプションを選択すると、OSA のインターフェイス機能により出力先が決定されます。たとえば、J.D. Edwards の XML インターフェイスにより、PDF と CSV 出力に使用する同じディレクトリに XML ファイルが作成されます。別の会社によって作成された OSA ライブラリは、OSA 出力を別のディレクトリに保管することもあります。

AS/400 上での IFS (統合ファイル・システム) の処理

AS/400 サーバーでバッチ・バージョンを印刷する場合、レポートは PDF フォーマットで IFS (統合ファイル・システム) に送られます。レポートには Windows エクスプローラを使ってマッピングできます。

デフォルトの PrintQueue ディレクトリは、インストール・ディレクトリの下にあります。PrintQueue ディレクトリを独自に作成する場合は、有効な IFS ファイル名を使用して PrintQueue を定義する必要があります。

► IFS の PrintQueue ディレクトリを定義するには

jde.ini ファイルを開きます。

1. [NETWORK QUEUE] で、OutputDirectory = system を変更します。system は PrintQueue のディレクトリ名です。
2. jde.ini ファイルを保存して閉じます。

レポート投入

レポートを投入する際、データ選択およびデータ順序設定を修正し、上級バージョン機能を選択することができます。また、レポートは画面に出力したり、プリンタで印刷したり、CSV(カンマ区切り)形式や OSA(出力ストリーム・アクセス)形式で他のソフトウェアにエクスポートすることができます。

レポートの投入

レポートを投入するには、レポートのバッチ・バージョンを選択する必要があります。使用するワークステーションでバッチ・バージョンを投入する場合、バージョンの投入時に次のいずれかを指定します。

- オンライン表示する。
レポートは PDF 形式で出力されるので、表示するには Adobe Acrobat Reader が必要です。
- 印刷する。
- CSV(カンマ区切り)形式でエクスポートする。
CSV ファイルをビューアで表示すると、データ・フィールドのカンマは表示されません。レポートを CSV ファイルにエクスポートした後は、Microsoft Excel や Lotus 1-2-3 などのデフォルト・ビューアで表示したり、加工したりできます。
- OSA(出力ストリーム・アクセス)経由で特定環境にエクスポートする。
OSA 出力では、CSV ファイルとは異なり、他のソフトウェアにバッチ処理中にデータを渡すため、後者のソフトウェアで同時にフォーマットを行うことができます。OSA インターフェイスは、実行前に定義しておく必要があります。

多くのビジネス環境においては、ワークステーションよりも処理効率のよいエンタープライズ・サーバーにバージョンを投入します。印刷レポートを自動的に処理/印刷するか待ち行列に保留にするかは、システム管理者が決定します。

バージョンをサーバーに投入すると、そのジョブは待ち行列に送られます。このとき、バージョン・スペックおよびバージョンの実行に必要な情報がワークステーションからサーバーに送られます。待ち行列で実行状況をモニタリングし、完了時にはバージョンをプレビューすることができます。

レポートのバッチ投入

レポートを投入するには次の方法があります。1) メニューからレポート・アイコンをダブルクリックする。2) 〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選ぶ。3) J.D. EdwardsSolution Explorer の[ツール]メニューから[レポート・バージョン]を選ぶ。次の手順では〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選ぶ方法を説明します。

▶ レポートをバッチ投入するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

ここで表示されるフォームは、レポート・バージョンをワークステーションとサーバーのどちらに投入するかによって異なります。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉の[バッチ・アプリケーション]にプログラム ID を入力して[検索]をクリックします。正確なプログラム ID がわからない場合は、ビジュアル・アシストが使用できます。

新しいレポート・バージョンがまだチェックインされていない場合は、他のユーザーはこのバージョンを実行することができません。バージョンを修正して実行した場合、ローカルの修正したバージョンが実行されます。修正したバージョンをサーバーで実行した場合、修正したバージョンがバージョン投入時に使用されます。

2. [選択]をクリックします。
3. 〈バージョン・プロンプト〉で、[投入]をクリックします。

バッチ・バージョンがワークステーションにしか存在しないのにサーバーに投入した場合、〈Install Specifications (スペックのインストール)〉フォームが表示されます。この場合、まずサーバーにバージョンとレポート・スペックをインストールする必要があります。

4. 〈Install Specifications〉で、[Yes]をクリックします。

〈Remote Job (リモート・ジョブ)〉フォームが表示されます。レポート・スペックとバージョン情報をバージョン投入するサーバーに置くには、パッケージ・インストールを実行する必要があります。

5. [OK]をクリックします。

通信エラー・メッセージが表示された場合、レポートをサーバーに再送信してください。続けて同じメッセージが表示されるようであれば、システム管理者に連絡してください。

ローカルで実行した場合は、〈レポート出力先〉フォームが表示されます。

6. 〈レポート出力定義〉で次のオプションのいずれかを選んで、[OK]をクリックします。

- 画面
- プリンタ
- CSV へエクスポート
- OSA インターフェイス名

注:

OSA は最初の 3 つのオプションのいずれかと合わせて動作するため、OSA インターフェイス名を選択する場合は、最初の 3 つのオプションから 1 つを同時に選択します。

バージョンおよびバージョン・スペックをサーバーにインストールした上でジョブをサーバーに投入した場合は、〈バッチ・バージョン - [プリンタ選択]〉フォームが表示されます。レポート処理用にデフォルトのプリンタを定義している場合は、〈バッチ・バージョン - [プリンタ選択]〉フォームにその情報が表示されます。レポートを指定する際に RDA で異なるプリンタを選択した場合は、レポート処理に定義したデフォルト・プリンタが一時変更されます。

7. 〈プリンタ選択〉フォームで、[プリンタ選択]タブをクリックし、印刷するレポートの部数を入力します。
8. [印刷のプロパティ]タブをクリックして、必要に応じて次の一時変更オプションを選択します。

- 縦
- 横
- 部数

ここには[プリンタ選択]タブで入力した部数が反映されます。デフォルト値は 1 です。この値を変更すると[プリンタ選択]タブの値も同じ値に変更されます。このオプションはポストスクリプト・プリンタとライン・プリンタにのみ有効です。PCL プリンタでは無効になります。

AS/400 ライン・プリンタに印刷する場合、この機能を有効にするには出力待ち行列記述を修正する必要があります。

- 用紙タイプ
- 用紙トレイ

デフォルト値と最大値は、〈プリンタの設定〉プログラムで定義します。このオプションはポストスクリプト・プリンタでのみ使用できます。PCL プリンタとライン・プリンタでは無効になります。

このフォームで選択したオプションは、レポートで指定した設定よりも優先されます。ただし、このバッチ処理に対してのみ有効です。

9. [文書設定]タブを開いて、次のオプションのうちいずれかを選択します。

- PDF
- プリンタ定義言語ファイル
- すぐに印刷
- CSV(カンマ区切り)
- OSA インターフェイス名

10. [上級]タブを開いて、次のオプションのうちいずれかを選択します。

- ポストスクリプト
- PCL
- ライン・プリンタ
- カスタム

11. [OK]をクリックします。

参照

次のトピックを参照してください。

- プリンタの追加情報については「プリンタ・アプリケーションの処理」
- 「データ選択およびデータ順序設定の一時変更」
- 「上級オプション一時変更の使用」
- 『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「AS/400 用プリンタの設定」

CSV(カンマ区切り)形式ファイル

CSV(カンマ区切り)形式でファイルをエクスポートすると次のことができます。

- 印刷待ち行列に CSV ファイルが作成されます。
- 印刷待ち行列に PDF ファイルが作成されます。
- ローカルで実行している場合は、CSV ファイルが Microsoft Excel に表示されます。サーバーで実行している場合は、〈サーバー・ジョブの処理〉プログラム(P986116)の〈投入済みジョブの検索〉で[ロー]メニューから[CSV ファイルの表示]を選択して、CSV ファイルを Excel に表示させることができます。

CSV ファイルは、他のアプリケーションでも使用できます。Microsoft Excel は、デフォルトで CSV ファイルを読み取ることができます。

レポートをローカルで実行しており、今回だけ CSV ファイルとしてエクスポートする場合は、次のいずれかを実行します。

- レポート投入時に[CSV ヘエクスポート]オプションを選択する。
- 〈プリンタの選択〉フォームの[文書設定]タブで[CSV(カンマ区切り)]を選択する。

常にレポートを CSV ファイルにエクスポートするには、〈プリンタ選択〉フォームの[文書設定]タブで[CSV(カンマ区切り)]を選択します。これにより、レポート・スペックが「CSV ファイルヘエクスポートする」に設定されます。

レポート・スペックで設定してあるが、今回だけ CSV ファイルとしてエクスポートしないようにする場合は、レポート投入時に[CSV ヘエクスポート]オプションを外します。

レポートは他のプログラムには完全にエクスポートできないことがあります。たとえば、グループ・セクションのデータが 1 文字のフィールドは修正が必要な場合があります。CSV ファイルにエクスポートする際には次の点に注意します。

- Microsoft Excel のカラム幅のデフォルトはレポート設計ツールの 52 ユニットに相当するので、設計時にこれに合わせます。[Layout(レイアウト)]-[Grid Alignment(グリッド配置)]を選び、〈Grid Alignment(グリッド配置)〉で[Horizontal]に“52”と入力し、[Snap to Grid(グリッド位置合せ)]をオンにします。

RDA で表示されるカラムが Excel のカラムと同じになります。各データ・フィールドの左端がカラムに収まるようにデータ・フィールドを配置します。データ・フィールドが次のカラムまで重なってしまっても、Excel では 1 つのカラムに入力されるので、テキストはセル内で折り返すことができます。不要なカラムは Excel で削除するなど、必要に応じて修正できます。

- データ・フィールドが縦に分かれている場合は、Excel ではデータが別のローに入力されます。縦横同じ場所に複数のデータ・フィールドがある場合、CSV ファイルには 1 つのデータしか出力されません。最初に出力されたデータが Excel に入ります。
- カンマは小数点として使用する国もあり、レポート出力時に小数点がカンマとして使用されます。この場合は、拡張子.txt のタブ区切りファイルが作成されます。Excel では、タブを除いて表示されます。

データはテキストとして出力されるので集計カラムの値もテキストとして表示されます。このため、計算式は Excel で設定する必要があります。

- Excel に問題なくエクスポートできるようにレポートを設計した後で、Excel のオート・フォーマット機能を使ってさらにレポートを整えることもできます。
- Excel では、レポートと同じ日付形式が使用されます。

出力ストリーム・アクセス(OSA) ファイル

OSA を使って出力する場合、他のプログラムにデータを渡して処理させます。OSA インターフェイスは、事前に定義しておく必要があります。レポート・タイプおよび必要な出力によって、1 つのプログラムに複数のインターフェイスが存在する場合があります。

OSA の利点は、CSV エクスポートのように出力後のフォーマット修正が不要な点と、出力先プログラムに処理を行わせることが可能な点です。

OSA は専用のコマンド・セットを使用することも、XML ライブラリを使用することもできます。多くの市販ソフトウェアが XML ライブラリを既に採用しているので、XML ライブラリを作成して使用することによりインターフェイスを簡素化することも可能です。

参照

- OSA インターフェイスとライブラリの定義については「OSA インターフェイスの作成と関連付け」

処理オプションの定義

処理オプションの値は、各バージョンごとにバージョン・リスト・テーブル(F983051)に保存されます。このテーブルはエンタープライズ・サーバーにあり、同一環境のすべてのユーザーがアクセスできます。処理オプションの変更は、即時に同じレポート・バージョンを使用するすべてのユーザーに影響します。クライアント・マシン上のジョブも、サーバー上のジョブもすべてこのテーブルにアクセスします。

バッチ投入時に指定した処理オプションは、実行時に使用されます。プロンプトが表示されなければ、投入時の処理オプション値が使用されます。バッチ投入時に入力した値はバージョン・リスト・テーブル(F983051)に保存され、そのバージョンを次回投入するときに表示されます。

ユーザーがレポート投入時に指定した処理オプションは、ユーザー別に保存されます。このため、各ユーザーが同じレポートから異なる処理オプションを使って、それぞれの必要に応じた出力結果を出すことが可能です。たとえば、ユーザーA が「ユーザー定義コードの印刷」レポート(R0005P)の処理オプションで「使用言語」を E(英語)にしてサーバー上で実行します。ジョブはサーバーの待ち行列に送られます。ユーザーB が同じレポートの処理オプションで「使用言語」を J(日本語)にしてサーバー上で実行します。このジョブもサーバーの待ち行列に送られます。ユーザーA のジョブが待ち行列の先頭になると、ユーザーB が「使用言語」に J(日本語)を指定したにもかかわらず、「使用言語」は E(英語)が使用されます。

次の例を参考にしてください。

- クライアントで投入、クライアントで実行

レポート投入時、データ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示されることがあります。ここで指定した値はメモリには保持されますが、ローカル RDASPEC ファイルには保存されません。メモリの値は次のジョブに渡されます。データ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示されない場合は、実行時にローカル RDASPEC ファイルからこれらの値がジョブにロードされます。

- クライアントで投入、サーバーで実行

開始時の処理は上の場合と同じですが、ジョブがサーバーに送られたときに処理オプションもサーバーに送られ、ジョブ制御状況マスター(F986110)に保存されます。ジョブの実行時に処理オプションは、バージョン・リスト(F983051)ではなく、ジョブ制御状況マスター(F986110)から読み込まれます。

データ選択およびデータ順序設定の一時変更

レポート用のデータ選択およびデータ順序を指定する場合は、〈バージョン・プロンプト〉で該当するチェックボックスをオンにします。クライアント・マシンには、各バージョンのコピーが置かれます。レポート・バージョンの変更はクライアント・マシンにあるバージョンのコピーにのみ保存されます。

データ選択およびデータ順序の指定は、レポート設計スペック(RDASPEC)ファイルに保存されます。このファイルは、サーバーとクライアントの両方に存在します。ターミナル・サーバー環境では、複数ユーザーが同じクライアント RDASPEC ファイルセットを使用するので、1 人のユーザーがスペックを変更するとその変更はすぐにそのターミナル・サーバーのユーザー全員に影響します。

バッチ投入時に指定した処理オプションは実行時に使用されますが、保存されないため次のレポート投入時も表示されません。データ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示されない場合は、実行時にローカルにある値が使用されます。〈バージョン・リスト〉または〈Report Design〉で入力した値は RDASPEC ファイルに保存されます。

次の例を参考にしてください。

- クライアントで投入/クライアントで実行

レポート投入時、データ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示されることがあります。ここで指定した値はメモリには保持されますが、ローカル RDASPEC ファイルには保存されません。メモリの値は次のジョブに渡されます。データ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示されない場合は、実行時にローカルの RDASPEC ファイルからこれらの値がジョブにロードされます。

- クライアントで投入/サーバーで実行

ジョブがサーバーに送られると、そのバージョンに関するすべてのスペックはファイルとしてパックされ、サーバーに送られます。サーバーでの処理時に、このパック・ファイルがサーバー上のスペックにマージされ、レポート処理に使用されます。サーバーでレポートを実行する場合は、各ユーザーごとにレポートのコピーが作成されます。

ジョブ投入時にデータ選択およびデータ順序を指定するフォームが表示された場合は、該当 RDASPEC 情報からではなく、メモリに記憶された値がパック・ファイルにコピーされます。この結果、ジョブの実行時にこれらの値が使用されます。

データ選択の変更

〈データの選択〉では、ブール論理を使用してレポートに取り込むレコードを確定します。ブール論理は「And」と「Or」などの演算子を使用します。

「And」を使用すると、2 つ以上のフィールドで共通するレコードのデータを含みます。たとえば、ニューヨークの顧客をリストしたい場合、[所在地]および[検索タイプ]の値を次のように指定します。

所在地 = ニューヨーク

And

検索タイプ = C(顧客)

「または」という条件指定が必要な場合は「Or」を使用します。たとえば、所在地がニューヨーク市の全レコード、または全域の顧客という条件のリストが必要な場合は、[所在地]と[検索タイプ]の条件指定を「Or」でつなぎます。

▶ データ選択を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 投入するバッチ・バージョンを選び、[選択]をクリックします。
4. 〈バージョン・プロンプト〉で、次のオプションをクリックします。
 - データ選択
5. [投入]をクリックします。
6. 〈データ選択〉で、バージョンで指定するデータ選択を変更します。
7. [OK]をクリックします。

ローカルで実行した場合は、〈レポート出力定義〉フォームが表示されます。

参照

- 「セクション・データ選択の定義」

データ順序の変更

レポート上でのデータの表示順序は変更することができます。

▶ データ順序を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 投入するバッチ・バージョンを選び、[選択]をクリックします。
4. 〈バージョン・プロンプト〉で次のオプションをクリックします。
 - データ順序設定
5. [投入]をクリックします。
6. 〈Section Data Sequencing(セクション・データ順序設定)〉で、バージョンで指定するデータ順序を変更します。
7. [OK]をクリックします。

ローカルで実行した場合は、〈レポート出力定義〉フォームが表示されます。

参照

- 「セクション・データ選択の定義」

上級オプション一時変更の使用

上級オプションでは、バッチ処理を行うマシン選択およびログ機能が使用できます。

▶ 上級オプション一時変更を使用するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 投入するバッチ・バージョンを選び、[選択]をクリックします。
4. 〈バージョン・プロンプト〉で、[フォーム]メニューから[上級]を選択します。

〈バージョン・プロンプト〉の上部にメニュー・バーが表示されない場合は、フォームを最大化してください。

5. 〈上級バージョン・プロンプト〉フォームで、必要に応じて次のフィールドに値を入力し、[OK]をクリックします。

- 一時変更ロケーション

ロケーションを一時変更するには、システム管理者からの承認が必要です。[ロケーションの一時変更]を選択した場合、〈バージョン・プロンプト〉で[投入]をクリックすると〈JDE データ・ソース〉フォームが表示されます。

このフォームでジョブを処理するエンタープライズ・サーバーを選んで[選択]をクリックし、先に進みます。

- ログの記録(JDE.log)
- トレース(JDEDEBUG.log)
- UBE ログ記録レベル

より技術的な情報を受け取るために高い値を選択すると、低い値に対する情報もすべて受け取ることになります。たとえば、“3”(オブジェクト・レベル・メッセージ)を入力すると、2(セクション・レベル・メッセージ)、1(情報メッセージ)、0(エラー・メッセージ)に対する情報も受け取ります。

- バージョン・スペックのみ投入

参照

- [バージョン・スペックのみ投入]オプションの処理については「バッチ・バージョン・スペックのエンタープライズ・サーバーへの移動」

フィールド記述

記述	用語解説
ロケーション一時変更	オンにすると、レポートのデータが存在したデータソースを変更します。
ログ(JDE.log)の記録	ユーザーがサーバーで実行されたジョブに対する JDE ログを表示することを可能にするコード。サーバーがログを表示するよう既に設定されている場合は、このコードにかかわらずログが表示されます。
トレース(JDEDEBUG.log)の記録	サーバーでバッチジョブを実行する時、このフィールドはジョブの実行についてトレースが可能かどうかを表示します。トレースを実行するようにサーバーがすでに設定されている場合、このフィールドの設定に関係なく、トレースは実行されます。
UBE ログ記録レベル	バッチジョブの実行時に発生するエラーログの詳細レベルを示します。次のリストでは異なるレベルを説明します。 <ul style="list-style-type: none">0. エラーメッセージ1. 情報メッセージおよびログ入力2. セクションレベルメッセージ3. オブジェクトレベルメッセージ4. イベントルールメッセージ5. データベースマッピングメッセージ6. UBE 内部関数コール、テキストアウト値

コマンド行からのジョブ投入

コマンド行からジョブを投入して、J.D. Edwards 以外のソフトウェアのアプリケーションの処理を J.D. Edwards ソフトウェアに実行させることができます。2 種類のコマンド行バッチ投入が使用できます。

- runube コマンドは、実行するレポート名およびバージョン名、使用するジョブ待ち行列名、待ち行列の制御方法、すぐに印刷するか保留にするのか、および出力先を直接指定できます。入力ファイルは必要ありません。このコマンドでは、クライアントで指定された処理オプション、データ選択、データ順序は変更できません。
- runubexml コマンドは、レポート処理方法を指定する XML 入力ファイルを使用します。このコマンドは直接バッチ処理を投入する runube コマンドと同等に柔軟性があり、処理オプション、データ選択、データ順序の設定を一時変更することができます。ただし、実行する各レポートの処理方法を指定する各バージョンごとに XML 入力ファイルを準備する必要があります。

runube コマンドの使用

runube コマンドの入力フォーマットは次のとおりです。

runube UID PWD ENV REP VER JQ B/I P/H S/D PTR

次に入力コマンドの各要素について説明します。

runube	ジョブを投入する実行ファイル名
UID	J.D. Edwards ユーザーID。実行するレポートへのアクセス権限が必要です。プリンタ・タイプを指定しないで印刷を要求した場合、このユーザーのデフォルト・プリンタが使用されます。
PWD	J.D. Edwards ユーザーID のパスワード
ENV	J.D. Edwards ソフトウェア環境
REP	レポート ID (例: R0006P)
VER	使用するバージョン名 (例: XJDE0001)。バージョンが必要です。レポート・テンプレートは使用できません。
JQ	バッチ・ジョブを送るジョブ待ち行列 (例: QBATCH)
B/I	実行モード。バッチ処理として実行するには B を指定します。この場合、ジョブを待ち行列に割り当てるのにジョブ・コントロール状況マスター(F986110)が使用されます。 対話型モードで実行するには I を指定します。この場合、レポートは待ち行列とは無関係にすぐに実行されます。
P/H	保留コード。ジョブ完了時にすぐにプリンタに印刷するには P を指定します。 すぐに印刷しないで保留にするには H を指定します。ジョブは、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)の〈サーバーの処理〉プログラムを使用して、後から印刷することができます。

S/D	保留コード。処理後にファイルを保存するには S を指定します。オプション D (削除する) は将来用に予約されています。現在は使用できません。
PTR	印刷する場合は、どのプリンタから印刷するかを指定します。プリンタ・タイプを指定しないで印刷を要求した場合、ユーザー ID と環境によりデフォルト・プリンタが決まります。

注意:

このコマンドを UNIX 環境から実行する場合は、UNIX システムにアクセスできるユーザーが、runube コマンド実行中にパスワードを含むコマンド行を表示できるというセキュリティ上の問題があります。

参照

- 〈バッチ処理の設定〉メニュー(G9013)の〈プリンタ〉プログラム(P98616)については「デフォルト・プリンタを定義するには」

runubexml コマンドの使用

runubexml コマンドを使用する場合、バッチ処理に関する指示を与える入力ファイルを作成する必要があります。同じレポートを同じオプションで定期的に出力する場合は、各レポート用の XML ファイルを作成しておくとう便利です。

ユーザー ID、パスワード、環境、レポート名、およびバージョン名を渡す XML ファイルを作成して投入すると、レポート・バージョンと保存された処理オプションが定義された新しい XML ファイルが出力されます。この入力ファイルを修正して、別の XML ファイルを作成することができます。

この入力ファイルは何度でも実行できます。入力ファイルを変更しても、保存されたレポート・バージョンは変更されません。入力ファイルはバッチ処理エンジンにデータを渡すだけで、XML 入力ファイルと実行したレポートとの間の関係は保存されません。レポートを変更し、その変更を XML 入力ファイルにも反映させたい場合は、XML 入力ファイルを変更するか、レポート変更後に XML 入力ファイルを再生成する必要があります。

レポートに基づいて XML 入力ファイルを生成するには、jdeRequest.xml というファイルを使用します。このファイルが存在しない場合は、次のコマンドを実行します。

```
runubexml G CREATE_XML jdeRequest.xml
```

このコマンドにより、次のような jdeRequest.xml ファイルが生成されます。

```
<?xml version='1.0' ?>
<jdeRequest type='ube' user='MYUNAME' pwd='MYPASS' environment='MYENV' session=''>
  <!--This document is automatically generated by the J.D. Edwards APIs-->
  <ACTION TYPE='CREATE_XML' TEMPLATE_TYPE='LAUNCH_JOB'>
    <REPORT_NAME VALUE='MYREPORT'/>
    <REPORT_VERSION VALUE='MYVERSION'/>
  </ACTION>
</jdeRequest>
```

```

        <JARGON_SYSTEM_CODE VALUE='1'/>
        <COMMENTS VALUE='1'/>

        <DATA_TYPING VALUE='1'/>

        <BUSINESS_VIEW VALUE='0'/>

        <!-- Note that Printer Information cannot be overridden at this time -->

        <PRINTER_INFORMATION VALUE='0'/>

        <POPULATED VALUE='1'/>

    </ACTION>
</jdeRequest>

```

次の説明に従って jdeRequest.xml ファイルを編集します。

user = 'MYUNAME'	MYUNAME を自分のユーザーID に変更します。
pwd = 'MYPASS'	MYPASS を自分のパスワードに変更します。パスワードはプレーンなテキストで入力する必要があるため、jdeRequest.xml ファイルはファイル・システム上で安全な場所に保管してください。
environment = 'MYENV'	MYENV を J.D. Edwards ソフトウェア環境に変更します。
REPORT_NAME VALUE = 'MYREPORT'	MYREPORT を、XML 入力ファイルのパラメータの基準としたり、R0006P などのレポートのシステム名に置き換えます。
REPORT_VERSION VALUE = 'MYVERSION'	MYVERSION を、XML 入力ファイルのパラメータの基準としたり、バッチ・バージョンの ID に置き換えます。この値は必須です。ただし、XJDE0001 のようなレポート・テンプレートを基に XML 入力ファイルを作成することはできません。
JARGON_SYSTEM_CODE VALUE	アプリケーション一時変更を使用する場合は“1”を入力します。使用しない場合は“0”を入力します。
COMMENTS VALUE	XML ファイルに XML コメントを表示する場合は“1”を入力します。表示しない場合は“0”を入力します。
DATA_TYPING VALUE	フィールドのデータ・タイプ(数字、英文字など)を表示する場合は“1”を入力します。表示しない場合は“0”を入力します。
BUSINESS_VIEW VALUE	レポート生成に使われているビジネス・ビュー・カラムを表示する場合は“1”を入力します。表示しない場合は“0”を入力します。
PRINTER INFORMATION VALUE	レポートを出力するプリンタ表示する場合は“1”を入力します。表示しない場合は“0”を入力します。
	注: プリンタ情報は jdeRequest.xml と XML 入力ファイルの両方に表示されますが、XML 入力ファイルのプリンタ情報は変更できません。
POPULATED VALUE	バッチ・バージョンで指定された設定およびオプションを XML 入力ファイルに出力する場合は“1”を入力します。ブランクの XML 入力ファイルを出力する場合は“0”を入力します。ほとんどの場合、“1”を入力します。

jdeRequest.xml を編集して保存した後で、次のコマンドを実行します。

```
runubexml S jdeRequest.xml Filename.xml
```

このコマンドにより jdeRequest.xml ファイルが処理され、バッチ・ジョブの実行に必要な XML 入力ファイルが出力されます。出力する XML 入力ファイルの名前を Filename に指定します。J.D. Edwards では、XML 入力ファイルの名前を、基となっているレポート名およびレポート・バージョンに因んだ名前(たとえば、R0006P_XJDE0001 など)に変更することをお勧めします。

この時点で、必要に応じて Filename.xml を編集できます。たとえば、処理オプション、データ選択、データ順序などを変更することができます。同じ XML 入力ファイルを基に処理オプションを変えたファイルを作成しておく、定期的に処理オプションの異なるレポートを実行する場合に時間が節約できます。

注意:

XML 入力ファイルは、J.D. Edwards ソフトウェアの入力仕様に合うように正確にフォーマットされているため、入力値の修正以外のフォーマット変更を行うと、実行時にエラーとなることがあります。

XML 入力ファイルを作成、修正、保存したら、次のコマンドを使用して XML 入力ファイルに定義されたバッチ・アプリケーションを実行します。

```
runubexml S Filename.xml jdeResponse.xml
```

このコマンドにより XML 入力ファイルが処理され、エラー・メッセージ出力を含む結果が jdeResponse.xml に返されます。

投入済みレポートの処理

〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)に実行すると、投入済みレポートの状況を参照することができます。ジョブの優先順位、プリンタ、およびジョブ待ち行列を変更することができます。

レポート状況のチェック

レポートを投入した後は、その状況を検討および修正することができます。

▶ レポート状況をチェックするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011)から〈サーバーの処理〉を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉で、[検索]をクリックして使用可能なサーバーの一覧を表示します。
サーバーを検索するために QBE の[データ・ソース]カラムを使用する場合、大文字でサーバー名をタイプする必要があります。大文字以外では、サーバーが認識されません。
2. サーバーを選んで[選択]をクリックします。

3. 〈投入済みジョブの検索〉で、次のフィールドにレポートの状況が表示されます。
 - 状況

システム管理者が、レポートを自動的に印刷するよう設定している場合があります。レポートが自動的に印刷されない場合、このフォームから自分で印刷するか、またはオンライン表示することができます。
4. 他のユーザーまたは別の待ち行列にあるレポートをチェックするには、次のうち 1 つまたは両方のフィールドを変更して[検索]をクリックします。
 - ユーザーID
 - ジョブ待ち行列
5. ジョブを検討するには、該当するジョブを選んで[選択]をクリックします。
6. 〈Job Maintenance(ジョブ管理)〉で、必要に応じて次のフィールドを変更します。
 - ジョブ優先度

適切な管理権限がある場合、ジョブが W(待ち) 状況にある間にジョブ待ち行列でジョブ優先度を変更することができます。優先度の高いジョブは、ジョブ待ち行列の上方に、低いものは下方に移動させます。
7. レポートの情報に関する次のフィールドを検討します。
 - ジョブ状況
 - ジョブ待ち行列
 - ホスト
 - 環境
 - サーバー・ジョブ番号
 - ユーザーID
 - サーバー処理 ID
 - 入力ホスト名
 - 日付 - ジョブ投入
 - ジョブ投入時間
 - 前回タスク日付
 - 時刻 - 前回タスク
8. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
状況	投入したジョブの現在の状況
ユーザーID	ユーザー・プロフィールを識別するコード。
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。

ジョブ優先度	投入されたジョブの優先順位。ジョブはこの優先順位に基づいて実行されます。有効な値は 0 から 9 までで、0 が最優先となります。
ジョブ状況	投入したジョブの現在の状況
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。
ホスト	サブスクライバのイベントを処理するサーバー名。
環境	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。
サーバー・ジョブ番号	ジョブに割り当てられた番号
ユーザーID	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
サーバー処理 ID	ジョブのプロセス ID
入力ホスト名	ジョブを投入する元のホスト名
日付 - ジョブ投入	ジョブを投入した日付。
ジョブ投入時間	ジョブを投入した時刻。
前回タスク日付 時刻 - 前回タスク	ジョブが最後にアクティブであった日付 ジョブが最後にアクティブであった時刻

レポートの表示および印刷

レポート・ジョブを投入し、すべての処理が完了したら〈投入済みジョブの検索〉フォームからレポート・バージョンを実行することができます。また、画面出力を選択すると、PDF(ポータブル・ドキュメント・フォーマット)で出力され、Adobe Acrobat Reader で表示されます。CSV(カンマ区切り)形式ファイルとしてエクスポートすると、デフォルト CSV ビューアで出力を表示および操作することができます。

印刷、画面表示、CSV エクスポート以外の方法として、出力ストリーム・アクセス(OSA)インターフェイスが使用できます。表示結果は、使用するプログラムへのデータ処理指示、およびそのプログラムがサポートする表示ツールに依存します。

サーバーにレポート・ジョブを投入し、すべての処理が完了した後に、〈投入済みジョブの検索〉フォームでレポートをオンライン表示することができます。

注:

AS/400 クライアントを使用している場合、PDF は jde.ini ファイルで定義した IFS のクライアントに保管されます。PDF の PrintQueue ディレクトリの定義については「AS/400 上での IFS(統合ファイル・システム)の処理」を参照してください。

はじめる前に

- ワークステーションに Adobe Acrobat Reader をインストールします。Adobe Acrobat Reader の使用法については、Adobe Acrobat Reader のオンライン・ヘルプを参照してください。
- CSV ファイルが表示可能なスプレッドシート・アプリケーション (Microsoft Excel や Lotus 1-2-3) をインストールします。CSV ファイルの表示方法については、使用するデフォルト CSV ビューアのオンライン・ヘルプを参照してください。

▶ レポートを表示および印刷するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈サーバーの処理〉を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉で、[検索] をクリックして使用可能なサーバーの一覧を表示します。

サーバーを検索するために QBE の [データ・ソース] カラムを使用する場合、大文字でサーバー名をタイプする必要があります。大文字以外では、サーバーが認識されません。

2. サーバーを選んで [選択] をクリックします。

3. 〈投入済みジョブの検索〉で表示または印刷するレポートを選び、[ロー] メニューから次のいずれかを選択します。

- 印刷

このオプションは、状況が E (処理中のエラー) または D (処理済み) であるジョブに対して使用してください。状況が E であるジョブを印刷すると、エラー・ログが印刷されトラブルシューティングに利用することができます。

[印刷] を選択すると、〈プリンタの選択〉フォームが表示されます。

- PDF ジョブの表示

このオプションを選択すると、PDF (ポータブル・ドキュメント・フォーマット) 出力がサーバーからダウンロードされます。レポートは、Adobe Acrobat Reader で表示されます。レポートの表示およびズームなどの Adobe Acrobat Reader のすべての機能が使用できます。

- CSV ジョブの表示

このオプションを使用するには、〈Report Design〉の〈Printer Setup (プリンタの設定)〉フォーム、または〈プリンタの選択〉フォームの [文書設定] タブで [CSV ヘエクスポート] を選択する必要があります。このオプションを選択すると、CSV 出力がサーバーからダウンロードされ、Microsoft Excel や Lotus 1-2-3 などのデフォルトの CSV ビューアにレポートが表示されます。

- OSA ジョブの表示

このオプションを選択すると、OSA 処理がレポート処理にされる場合は出力ファイルが生成されます。OSA 処理が出力ロケーションを渡す場合は、出力ファイルに関連付けられたソフトウェアプログラムが起動されます。そのプログラムが見つからない場合は、「出力できません」というエラー・メッセージが表示されます。

[印刷] オプションを選択すると、〈バッチ・バージョン - [プリンタの選択]〉フォームが表示されます。

参照

- トラブルシューティングとログの詳細については、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「ワークステーションのトラブルシューティング」と「エンタープライズ・サーバーのトラブルシューティング」
- 「プリンタ・アプリケーションの処理」
- 「レポートの投入」

エラーの検討

印刷ジョブの状況が E の場合、処理中にエラーが発生したことを示します。〈投入済みジョブの検索〉フォームで、エラーを印刷またはオンライン表示し、そのジョブを削除することもできます。状況が E であるジョブを印刷すると、トラブルシューティングに使用可能なエラー・ログが印刷されます。

待ち行列でのレポートの保留およびリリース

ジョブ待ち行列で待ち状況(W 状況)のレポートを投入した場合、それをリリース(解放)してさらに適切なタイミングで実行することができます。これは、レポートを実行することによりシステム・リソースに影響が出る場合に必要です。既に処理中(状況 P)のレポートを停止する場合は、レポートを終了する必要があります。[終了]オプションを選ぶと、ジョブは削除されずに状況が E に変更されます。

ジョブ待ち行列を変更する権限がない場合、システム管理者に連絡してください。

▶ エラーを検討するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011)から〈サーバーの処理〉を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉で、[検索]をクリックして使用可能なサーバーの一覧を表示します。
サーバーを検索するために QBE の[データ・ソース]カラムを使用する場合、大文字でサーバー名をタイプする必要があります。大文字以外では、サーバーが認識されません。
2. サーバーを選んで[選択]をクリックします。
3. 〈投入済みジョブの検索〉で、該当するジョブを選んで[選択]をクリックします。
4. レポートをチェックするために、印刷またはオンライン表示することができます。
5. 出力待ち行列からレコードおよびジョブを除去(削除)するには、[削除]ボタンをクリックします。

このオプションは、状況が E(エラー)または D(処理済み)のジョブに対してだけ使用できます。

▶ 待ち行列上でレポートを保留およびリリースするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈サーバーの処理〉を選択します。

1. 〈サーバーの処理〉で、[検索] をクリックして使用可能なサーバーの一覧を表示します。
サーバーを検索するために QBE の [データ・ソース] カラムを使用する場合、大文字でサーバー名をタイプする必要があります。大文字以外では、サーバーが認識されません。
2. サーバーを選んで [選択] をクリックします。
3. 〈投入済みジョブの検索〉で、該当するジョブを選んで [選択] をクリックします。
4. [ロー] メニューから [保留] を選択します。
状況が「H(保留)」に変わります。
5. ジョブをリリースするには、[ロー] メニューから [リリース] を選択します。
H(保留) 状況が解除され、ジョブが待ち行列に転送されます。

レポート出力の処理

PDF レポート出力は、電子メールの添付ファイルとして送信したり、Web ページに掲載することができます。J.D. Edwards ソフトウェアのインストール・プログラムには、電子メールや Internet Explorer でレポート出力を表示できる Adobe Acrobat Reader が含まれており、Web 上で PDF ファイルを表示できます。

フォーマットされていないテキストを選択して、クリップボードを使用する他の Windows アプリケーションにコピーすることもできます。詳しくは Adobe Acrobat Reader のオンライン・ヘルプを参照してください。

CSV レポート出力は、Microsoft Excel や Lotus 1-2-3 などのデフォルトの CSV ビューアで表示できます。

レポートの投入またはその表示方法により、レポートの保管ロケーションが確定されます。次の点に注意してください。

- PDF、CSV、OSA でレポート出力を表示した場合、ワークステーションにその出力が保管されます。デフォルトでは、これらの出力は J.D. Edwards ソフトウェアがインストールされているドライブのサブディレクトリに保管されます。システム管理者に連絡して、使用しているシステムのデフォルト・ロケーションを確認してください。このサブディレクトリから、ファイルを電子メール・メッセージに移動、コピー、添付することができます。
- AS/400 サーバーにレポートを投入する場合、PDF ファイルまたは CSV ファイルはシステム・ライブラリに保管されます。PDF ファイルは、このライブラリ中の PRINTQUEUE ファイル中の Fxxxx (xxxx はジョブ番号) というメンバに保管されます。CSV ファイルは、このライブラリの Cxxxx (xxxx は PRINTQUEUE ファイルのジョブ番号) というメンバに保管されます。

- AS/400 以外のサーバーに投入した場合、サーバーの PrintQueue というサブディレクトリに保管されます。PrintQueue サブディレクトリの場所は、システム管理者が jde.ini ファイルに設定したパスに依存します。次に jde.ini ファイルの設定例を示します。

- Windows NT サーバーの jde.ini

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

OutputPath=c:\oneworld\output\PrintQueue

- UNIX の jde.ini

[NETWORK QUEUE SETTINGS]

OutputPath=/usr/oneworld/output/PrintQueue

これらの例では、[NETWORK QUEUE SETTINGS]により PrintQueue のパスが決まります。Windows NT サーバーのフルパス設定は、c:\oneworld\output\PrintQueue です。UNIX のフルパス設定は、/usr/oneworld/output/PrintQueue です。各例で PrintQueue が存在するディレクトリは *output* です。このディレクトリには、サーバー上の有効なディレクトリを指定してください。

サブシステム・ジョブの理解

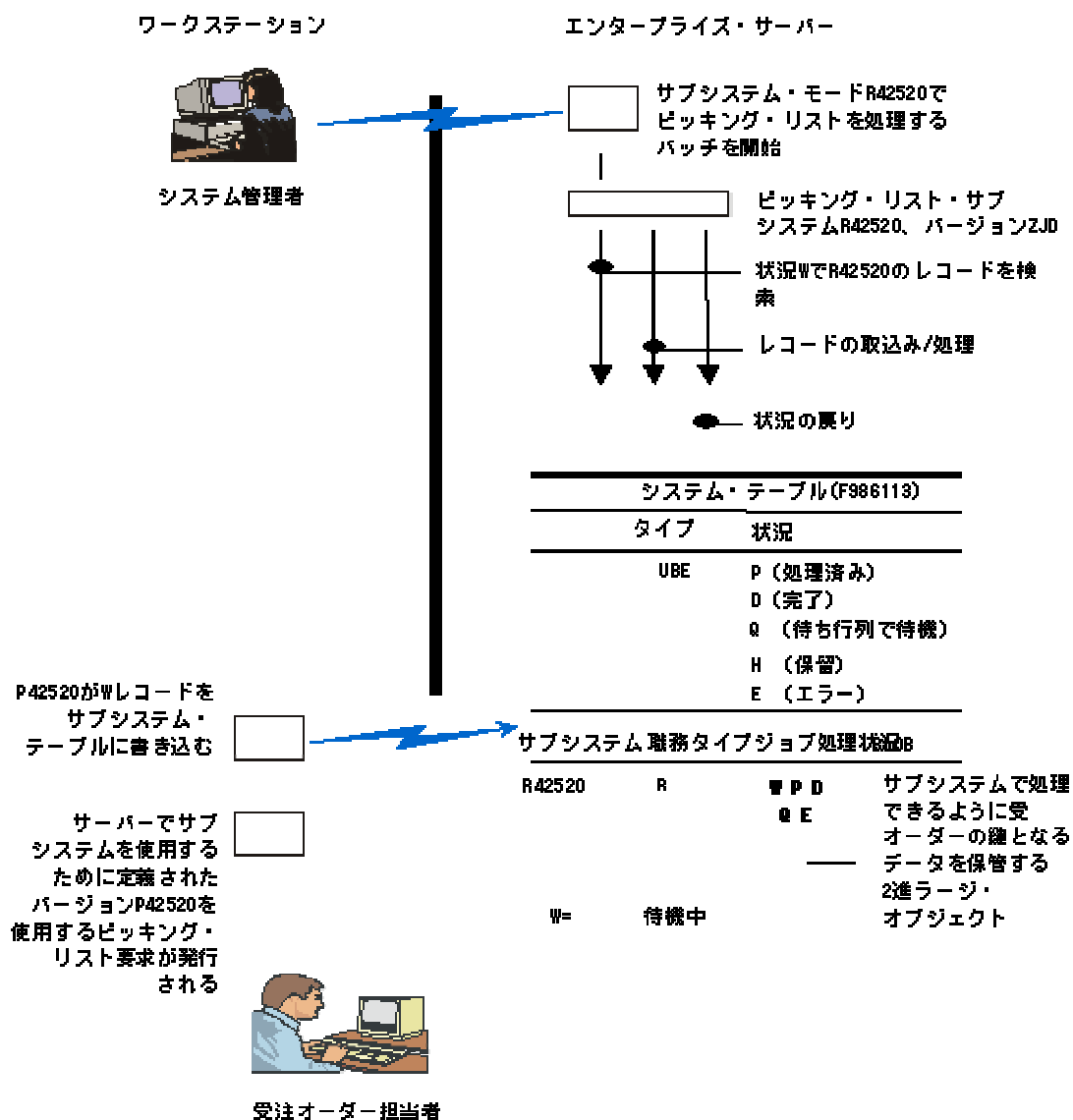
J.D. Edwards ソフトウェア内では、サブシステム・ジョブはバッチ処理であり、J.D. Edwards アプリケーションからは独立して非同期に連続実行されます。こうしたサブシステム・ジョブは、サーバー・プラットフォームに対して定義されたシステムの論理プロセスまたは待ち行列と共に機能します。1 つまたは複数のサブシステムを使用するように設定することができます。

サブシステム・ジョブは、プロセッサ・リソースをアンロードしたり、サーバー処理を保護する際に使用します。サブシステムの使用に適したアプリケーションの例としては、倉庫、在庫、受注などの流通関連処理があります。たとえば、ワークステーションで〈受注オーダー入力〉アプリケーションを実行し、すべてのオーダーが入力された段階で、自動的にピックスリップを印刷する場合などです。〈レポート・プロパティ〉で使用可能なサブシステム・ジョブ機能を持ったピックスリップのバージョンを使用している場合、その要求は、サブシステム・ジョブによって実行されます。ピックスリップ要求は、定義済みエンタープライズ・サーバーのサブシステム・ジョブに送られ、処理されます。そのため、ワークステーションに対しては、他の処理リソースは必要ありません。

アプリケーションがサブシステムで実行するジョブの要求を発行した場合、レコードはサブシステム・ジョブ・マスター(F986113)に入ります。このレコードは、サブシステム・ジョブ名およびバージョンにより認識され、状況および操作インジケータを含みます。レコードには、キー情報が埋め込まれており、これによりサブシステムは、要求を出しているアプリケーションとそれ以上対話をせずにレポートを処理することができます。連続して実行されるサブシステムは、このテーブルのレコードをモニタリングします。サブシステムは名称、バージョン、該当する状況インジケータを使用してレコードを見つけると、それを処理して状況を更新します。

次の図は、システムがサブシステムをどのように処理するかを表しています。

サブシステム処理



サブシステム・ジョブの定義

サブシステム・ジョブは、データ待ち行列からのレコードを処理する連続ジョブです。このタイプのジョブは、ジョブの終了要求が出されるまで実行されます。サブシステム・ジョブは、サブシステム・テーブルに対して一度に1レコードを読み込んで情報を取り出すことにより、各レコードに対してコンフィギュラブル処理エンジンを実行します。レコードの最後になると、サブシステム・ジョブはジョブを終了せず一定の時間待機して、各レコードに対して再び処理を実行します。各サブシステム・ジョブについて、サブシステム・テーブルに複数のレコードが存在する場合があります。

サブシステム・ジョブは、通常のバッチ・ジョブと同じように開始します。サブシステム・ジョブとバッチ・ジョブの実行方法に違いはありません。

処理の前に、特定のサーバーのサブシステム・ジョブに対する制限を超えていないかどうかを確認されます。超えている場合は、コンフィギュラブル処理エンジンはサブシステム・ジョブを処理しません。

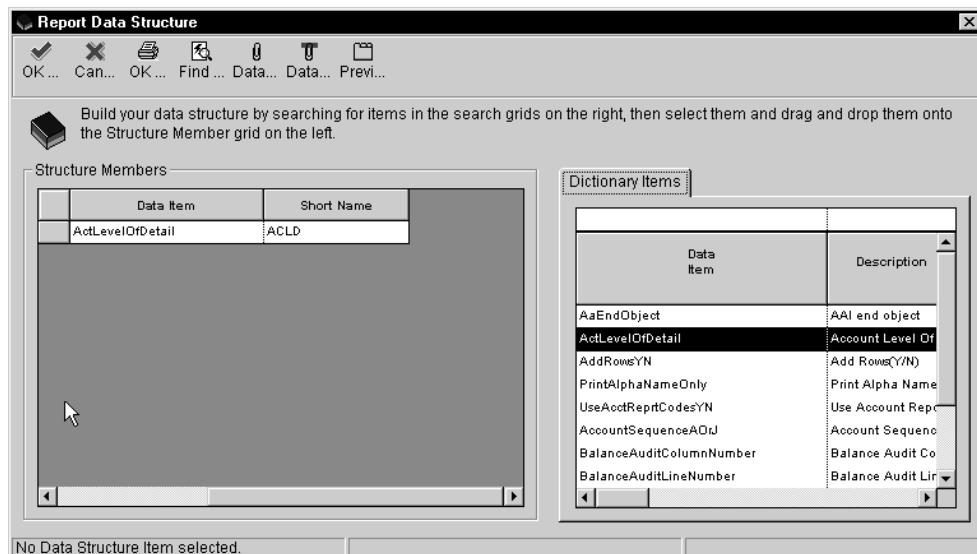
▶ サブシステム・ジョブを定義するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レポートを開いて[File]メニューから[Report Properties]を選択します。
2. 〈Properties〉の[Advanced(上級)]タブで、次のオプションを選んで[OK]をクリックします。
 - Subsystem(サブシステム)
 - Wait Time(待ち時間)(ms)

このフィールドの値は、サブシステムレポートが、サブシステム・ファイルに処理する新規レコードがあるかをチェックする時間を意味します。

3. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[Data Structure(データ構造体)]を選択します。



4. 〈Report Data Structure〉で、[Find(検索)] ボタンをクリックしてデータ項目リストを表示します。
5. [Dictionary Items(辞書項目)] から [Structure Members(構造メンバ)] へ項目をドラッグして、[OK] をクリックします。
6. 〈Report Design〉で、[File] メニューから [Report Properties] を選択します。
7. 〈Properties〉の [Advanced] タブで、[Generate(生成)] ボタンをクリックしてヘッダー・ファイルを作成します。

ヘッダー・ファイルは、Reoirt_Name.h という形式で、サブ・ディレクトリ¥B7¥\$environ¥include に保管されます。ユーザーは、サブシステム・レポートで処理するレコードを送る対話型アプリケーションで、ビジネス関数内のこのヘッダー・ファイルを使用して、サブシステム・レコードを作成することができます。

たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラム(P4210)で [OK] ボタンをクリックすると、ビジネス関数が呼び出され、このレポートのデータ構造体とシステム API(アプリケーション・プログラミング・インターフェイス)を使用してサブシステム・レポートの処理を開始するように指定できます。

サブシステム・テーブルへの API レコードの追加

サブシステム・テーブルへの API レコードを追加すると、サブシステム・ジョブとしてバッチ処理を実行できます。サブシステム・テーブルへの API レコードを追加すると、ビジネス関数が作成され、生成されたヘッダー・ファイルが Microsoft Visual C++によりビジネス関数に添付されます。ヘッダー・ファイルがビジネス関数に添付された後で、呼び出すプログラムのイベント・ルールにそのビジネス関数を添付します。

この API レコードは、キャッシュからデータ構造体およびユーザー情報を取り込みます。サーバー名が渡されない場合は、API はデータ・ソース・マスター(F98611)からオブジェクト・マップ・レコードを検索します。レコードが見つかり、API はそのレコードをサーバー上のサブシステム・テーブルに追加するという JDENet メッセージをサーバーに送ります。ただし、一時変更サーバー名が指定された場合は、JDENet メッセージはそのサーバーに送られます。

はじめる前に

- API がビジネス関数に呼ばれるように、レポート・データ構造体を使用してヘッダー・ファイルを生成する必要があります。「サブシステム・ジョブの定義」を参照してください。

例: サブシステム・ジョブ・ヘッダー・ファイル

次の例ではサブシステム・ジョブ・ヘッダー・ファイルを示しています。

```
#include <jde.h>

/*****

* Report   : R98SSUBE
* ReportId : 8123244
* DSTRId   : 380813
*
* Note:
* Do not edit the following typedef
* To make modifications, use the Report Design Aid Tool to
* Generate a revised version.
*****/
#ifndef REPORT_DS_380813
#define REPORT_DS_380813

typedef struct tagDS_RI_380813
{
    char          ProgramId[11];
} DSRI380813, *LPDSRI380813;

#define          IDERRProgramId_1          1L

#endif /* #define REPORT_DS_380813 */
#endif /* #define _R98SSUBE_H */
```

▶ サブシステム・テーブルに API レコードを追加するには

J.D. Edwards ソフトウェアで新しいビジネス関数を作成します。

1. Microsoft Visual C++でビジネス関数のインクルード・ファイルを開き、生成したヘッダー・ファイル名を追加します。

次の例では、ユーザーが入力する部分には下線が引かれています。

```
/*****
/* Table Header Inclusions
*****/

/*****
External Business Function Header Inclusions
*****/
#include <R98SSUBE.h>

/*****
* Global Definitions
*****/

/*****
* Structure Definitions
```

```

*****/
* TYPEDEF for Data Structure

*   Template Name:   Report Interconnect Data Structure
*   Template ID:      D983059
*   Generated:        Wed Oct 18 14:01:22 1995

```

2. Visual C++でビジネス関数のソース・ファイルを開き、このデータ構造体の変数を宣言し、メンバを割り当てます。

```

#include <jde.h>

/*****
* Variable declarations
*****/
HUSER hUser=NULL;
LPSTR szServer=NULL;
DSRI380813 dsRI; /* Declare the variable of type REPORT INTERCONNECT DATA STRUCTURE */
BOOL bRet=FALSE;
JDEDB_RESULT rcode;

/*****
Declare structures
*****/

/*****
Declare pointers
*****/

/*****
Check for NULL pointers
*****/

if ((lpBhvrCom == NULL) ||
    (lpVoid == NULL) ||
    (lpDS == NULL))

```

3. ソース・ファイルの中で、レコードを追加する API を呼び出します。

```
*****
Main Processing
*****/
memset(&dsRI, 0, sizeof(DSRI380813));

/* Populate the members of the Report Interconnect Data Structure */
strcpy(dsRI.ProgramId,lpDS->szString01);

/* Call Subsystem API to add the record to the Subsystem Table */
/* Note : As Environment Name is set to NULL, this API will use OCMto find the default Environment of this
UBE */
bRet=jdeAddSubsystemRecord( hUser,/* User Handle */
    "R98SSUBE", /* Name of the subsystem */
    "XJDE0001", /* Name of the Subsystem Version*/
    NULL, /* Name of the override env - not used */
    szServer,/* Name of the server */
    &dsRI); /* Subsystem Connect DS */
/*****
```

4. レコードを追加する API を呼び出した後で、実行するプログラムのイベント・ルールにそのビジネス関数を添付します。プログラムは、対話型でもバッチ・アプリケーションでもかまいません。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス関数の処理」
- 『開発ツール』ガイドの「イベント・ルール変数の処理」

レポートの印刷管理

〈プリンタ〉プログラム(P98616)によって集中的にプリンタを構成することができます。このプログラムによって、ワークステーションとエンタープライズ・サーバー用のプリンタを定義できます。これらの定義は J.D. Edwards ソフトウェアのテーブルに保存され、〈プリンタ〉プログラム(P98616)により管理されます。

レポートは自分で作成するだけでなく、J.D. Edwards ソフトウェアで準備されているレポートおよびレポート・バージョンを業務に合わせて変更して使用できます。バッチ・エンジンを使用することにより、PDF でレポートを作成します。PDF ファイルは、Adobe Acrobat Reader で表示できます。

レポートは、ユーザーの指示なしでバッチ・アプリケーションとして実行されます。レポートを投入するときは、レポートに表示するデータ選択、データ順序、処理を行うロケーション、レポート処理のログ記録、印刷するプリンタなどを選択します。

参照

- レポートの投入と印刷については「レポート用バッチ・バージョン」

印刷の理解

レポートを投入すると、バッチ・エンジンは PDF (ポータブル・ドキュメント・フォーマット) ファイルを生成します。バッチ・エンジンは、PDF ファイルを作成するのにデバイス・コンテキストを使用します。デバイス・コンテキストとは、ページ・サイズおよびページ内の印刷領域などの情報です。J.D. Edwards は、この情報をすべてのプラットフォームのプリンタ・テーブルから生成します。

レポートは Adobe Acrobat Reader でオンライン (PDF ファイル) 表示することも、直接プリンタに送ることもできます。Adobe Acrobat Reader から印刷することもできます。レポートをプリンタに送るときに、PDF ファイルを印刷するプリンタ・タイプに応じて、PCL、PostScript、ライン・プリンタの 3 つのプリンタ記述言語 (PDL) の 1 つにフィルタにより変換します。

バッチ・エンジンは、次の論理パスを使ってレポートの送り先プリンタを決定します。最初の方法により有効なプリンタ名が返ってこない場合は、バッチ・エンジンで次の方法が実行されます。

レポート投入時の処理

1. バッチ処理がレポート設計ツール(RDA)から [Do Initialize Printer] イベントを実行します。この処理により有効なプリンタ名が取得された場合は、以降の処理は行われません。
2. ユーザーがレポート投入時にデフォルト・プリンタ名を一時変更します。ユーザーが有効なプリンタ名に一時変更した場合は、以降の処理は行われません。
3. プリンタ名が RDA スペックからバッチ処理に渡されます。この処理により有効なプリンタ名が取得された場合は、以降の処理は行われません。
4. ログインしているユーザー、環境、レポートを処理するサーバーに基づいて、プリンタ定義テーブル(F98616)から有効なデフォルト・プリンタを決定します。

サーバーでのレポート実行

レポートをサーバーに投入すると、〈デフォルト事業所およびプリンタの処理〉プログラム(P400951)で定義しておいたプリンタ名が表示されます。サーバーは、イベント・ルール(ER)により一時変更されていない限り、選択したプリンタと関連付けられた設定を使って PDF ファイルを自動作成します。ただし、[プリンタ選択]ダイアログ・ボックスでプリンタ、ページ方向、PDL、用紙タイプなどの設定を変更することにより、サーバーが PDF ファイルを生成する前にサーバー上のレポート印刷を制御できます。サーバー上のレポートの表示を指示すると、PDF ファイルがサーバーからローカル・ワークステーションのディレクトリにコピーします。

注:

AS/400 クライアントを使用している場合、PDF ファイルは IFS ではクライアントに保管されます。クライアントでの PrintQueue ディレクトリの定義については、「AS/400 上での IFS (統合ファイル・システム) の処理」を参照してください。

レポートの実行時に、ログ機能をオンにすることもできます。レポート投入時に上級フォームでオンにいます。ログはワークステーションの¥b7¥PrintQueue ディレクトリに保存されます。

参照

- サーバー上の PrintQueue ディレクトリの場所については「レポート・ログの作成および取込み」

ワークステーションでのレポート実行

レポートのオンライン表示を指示すると、処理エンジンは〈Report Design (レポート設計)〉で定義したプリンタに接続しようとします。接続に失敗するか、プリンタが定義されていないと、プリンタ・テーブルで指定されているデフォルト・プリンタが使用されます。処理エンジンは、取り込んだ設定を使って PDF ファイルを作成し、Acrobat Reader で表示します。PDF ファイルは、ローカル・パス (¥b7¥PrintQueue) に保存されます。

レポートをローカル実行して直接プリンタに送る場合は、[プリンタ選択]ダイアログ・ボックスが表示されるので、ここでプリンタ、ページ方向、PDL、用紙タイプなどの設定を変更することができます。このダイアログ・ボックスに最初に表示されるのは RDA で定義したプリンタです。定義していない場合は、デフォルトのプリンタが表示されます。処理エンジンは、[プリンタ選択]ダイアログ・ボックスで指定したプリンタに接続して、関連付けられた設定を取り込みます。処理エンジンは、これらの設定と変換フィルタを使って PDF ファイルを PDL ファイルに変換し、それをプリンタに送ります。

印刷時の特徴

レポートの印刷時には一時変更オプションがあります。このオプションは、レポート投入時のプリンタ一時変更とは別のものです。投入時には、有効なプリンタであれば会社のどのプリンタを選択することもできます。ただし、印刷時には、最初のプリンタと同じプラットフォーム、PDL、用紙タイプをサポートするプリンタにのみ一時変更が可能です。これは、既にこの時点では PDF バージョンのレポートが作成されており、ここにプラットフォーム、PDL、用紙タイプに関する情報が組み込まれているためです。

ワークステーション jde.ini での印刷設定

ワークステーションの jde.ini 設定により、レポートが実行時にただちに印刷するか、また実行後にファイルを保存するかが決まります。

```
[NETWORK QUEUE SETTINGS]
```

```
PrintImmediate=TRUE/FALSE
```

```
SaveOutput=TRUE/FALSE
```

設定	記述
PrintImmediate	処理の完了時にレポートを自動印刷するかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。 TRUE レポートはサーバー上で実行され、PDF ファイル作成後、定義されたプリンタの PDL に変換されて印刷されます。 FALSE レポートはサーバー上で実行されますが、自動印刷はされません。印刷する場合は、(サーバーの処理)アプリケーションを使用します。
SaveOutput	レポートの表示または印刷後にファイルを保存するか削除するかを指定します。有効な値は次のとおりです。 TRUE レポートの表示または印刷後にファイルを保存します。 FALSE レポートの表示または印刷後にファイルを削除します。

プリンタ定義プログラムの処理

プリンタ設定は、Director (ディレクタ) インターフェイスを採用した 1 つのアプリケーションで行うことができます。これにより、新しいプリンタの追加や既存プリンタの修正を行ったり、ユーザー、ホスト、環境の組合せに対してデフォルト・プリンタを定義したりできます。プリンタ設定を追加および修正する際に、用紙タイプや、プリンタが使用するカスタム変換プログラムの追加や修正ができます。

注:

会社で使用する各サーバー・プラットフォームに関してプリンタを設定する必要があります。

参照

- レポート投入時のプリンタ指定については「印刷の理解」

▶ 新しいプリンタを追加するには

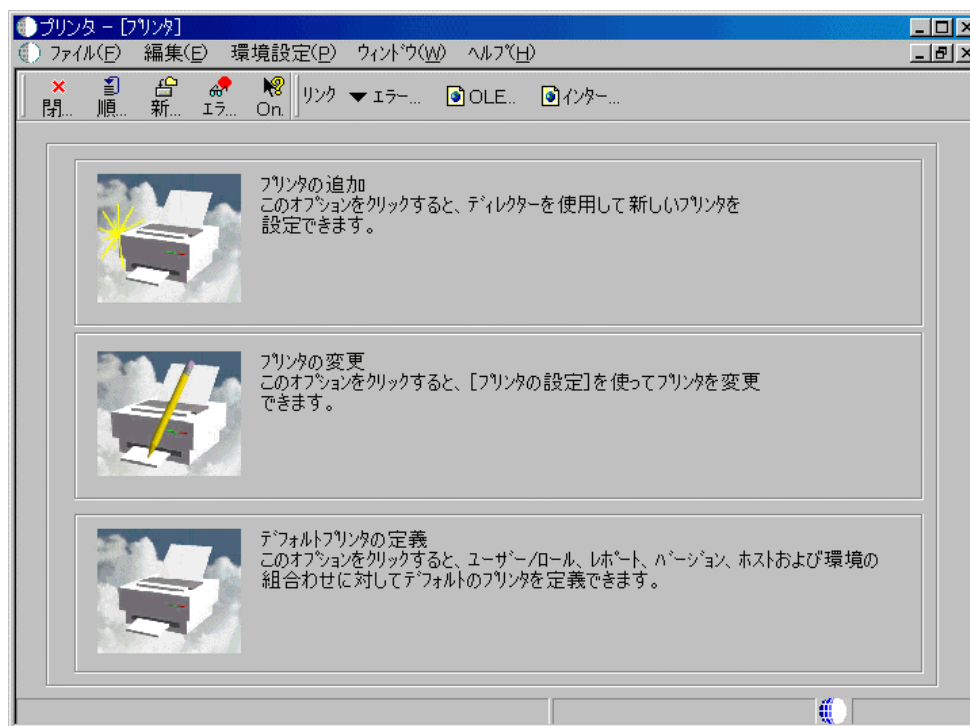
プリンタを追加する際は、ディレクタに従って手順を実行します。ディレクタの各フォームには、プリンタの追加についての説明が表示されます。次の手順については、〈プリンタ〉プログラム(P98616)のプリンタ設定ディレクタと組み合わせて行います。

プリンタを初めてインストールする場合は、このタスクを実行してから「デフォルト・プリンタを定義するには」を実行してください。

注:

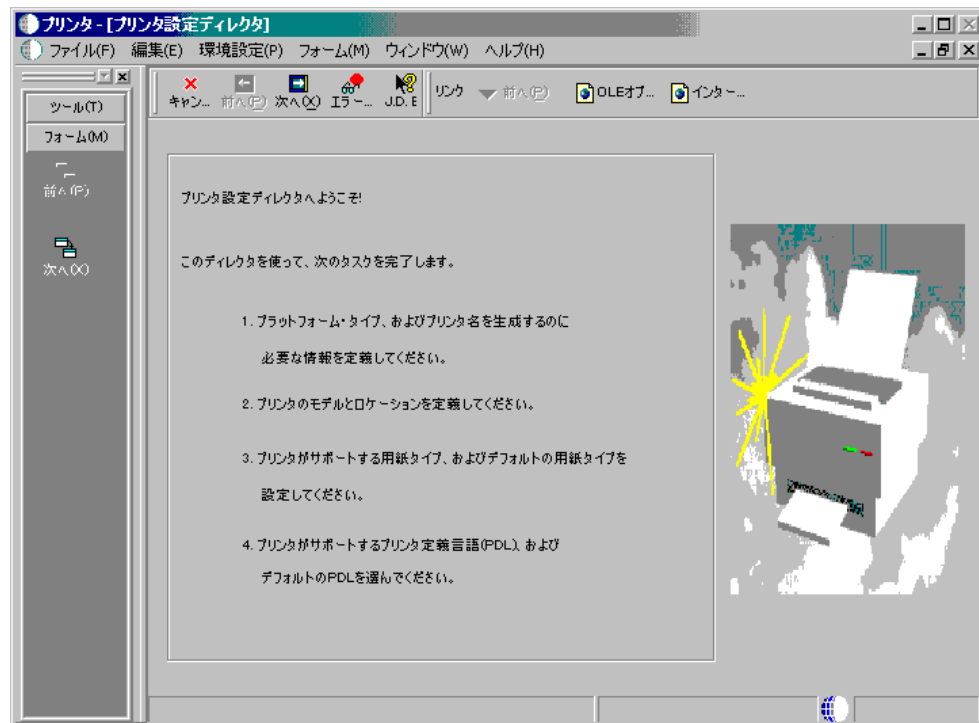
ディレクタで表示されるフォームのフィールドはすべて入力する必要があります。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。



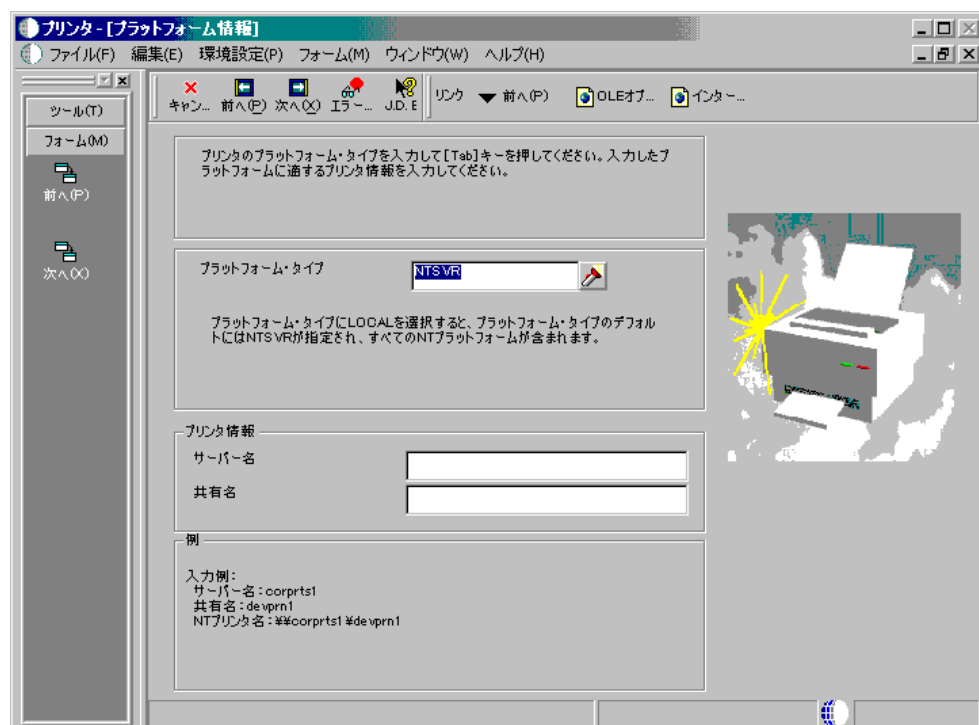
1. 〈プリンタ〉フォームで[プリンタの追加]を選択します。

プリンタ設定ディレクタの開始ページが表示されます。このフォームには、ディレクタを使って実行するタスクについての説明が表示されます。



2. 説明を確認したら[次へ]ボタンをクリックします。

[プラットフォーム・タイプ]は、稼動しているオペレーティング・システムに応じて自動入力されます。



3. 次のフィールドに値を入力し[次へ]をクリックします。

- **Print Server Name**(プリント・サーバー名)

設定しているプリンタのプリント・サーバー名を入力します。設定しているプリンタのプリント・サーバー名を入力します。このフィールドには、スペースおよび特殊文字は使えません。J.D. Edwards ソフトウェアでは、プリント・サーバー名と共有名を使ってプリンタ名を作成します。このプリンタ名は、次のフォームでグレー表示されます。

- **AS/400:**ライブラリ名/出力待ち行列名

AS/400 の場合、物理プリンタ名と出力待ち行列名は同じである必要があります。出力を保存するのにデフォルト QGPL ライブラリを使用する場合は、このフィールドには出力待ち行列名を入力するだけで済みます。このフィールドは大文字で入力する必要があります。

例: DEVDES3A

出力待ち行列名がデフォルト QGPL ライブラリ以外のライブラリに存在する場合は、このフィールドにライブラリ名と出力待ち行列名の両方を入力する必要があります。

例: QUSERSYS/DEVDES3A

注:

ライブラリ名と出力待ち行列名の両方を指定することにより、レポートが予期しない出力待ち行列に投入されるのを防ぎます。

- **Windows NT:**¥¥プリント・サーバー名¥¥プリンタ名

例: ¥¥corprts1¥docprf2

プリンタ名は小文字で入力する必要があります。

- **UNIX:**プリンタ名(スラッシュなし)

例: devprn16

プリンタ名は小文字で入力する必要があります。

ネットワーク・プリンタ以外のプリンタに出力する場合は、このフィールドは空白にします。

- **Print Shared Name**(共有名)

設定するプリンタの共有名を入力します。このフィールドには、スペースおよび特殊文字は使えません。J.D. Edwards ソフトウェアでは、プリント・サーバー名と共有名を使ってプリンタ名を作成します。このプリンタ名は、次のフォームでグレー表示されます。

[次へ]をクリックすると、〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。このフォームでは、プリンタ・モデル、プリンタの場所、プリンタ定義言語、用紙タイプ、エンコーディング選択(AS/400 のみ)などを指定します。

注:

既存プリンタの設定を変更する場合は、このフォームで行います。「既存プリンタの設定を変更するには」を参照してください。

プリンタ - プリンタの設定

環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... キャンセル... 新... 前... 次... 終... エラ... On

リンク 前へ... OLE... インター...

一般 詳細

ロケーションとプリンタ・モデルを入力してください。

プリンタ名: %test%example

プラットフォーム/タイプ: NTSVR

プリンタ・モデル:

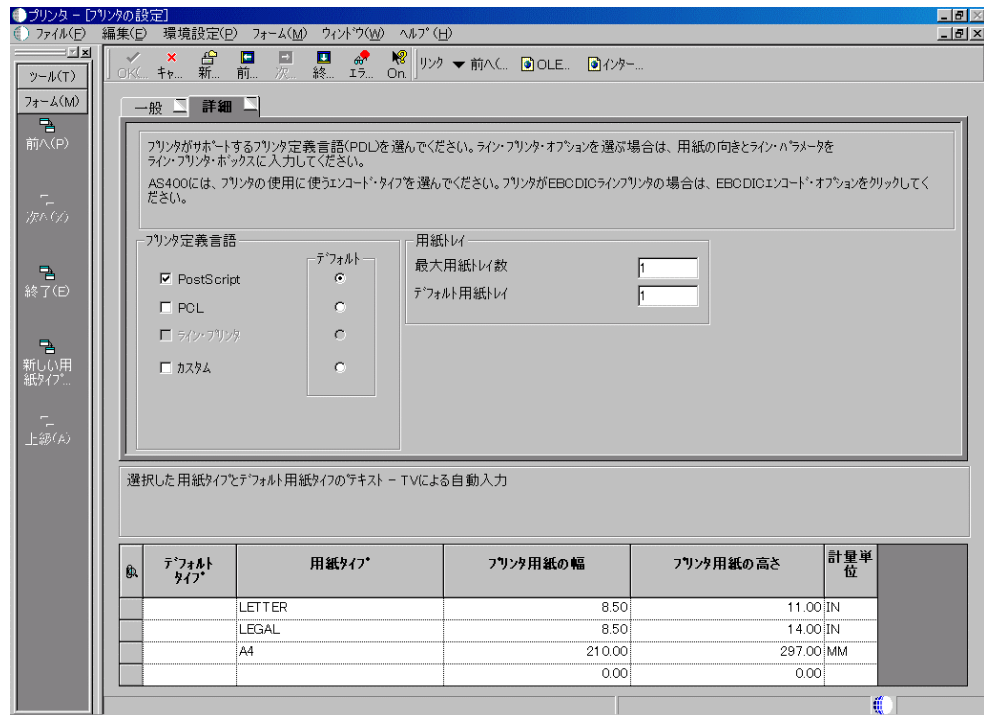
プリンタ・ロケーション:

選択した用紙タイプとデフォルト用紙サイズのテキスト - TVIによる自動入力

幅	デフォルト タイプ*	用紙タイプ*	プリンタ用紙の幅	プリンタ用紙の高さ	計量単位
		LETTER	8.50	11.00	IN
		LEGAL	8.50	14.00	IN
		A4	210.00	297.00	MM
			0.00	0.00	

0-3

4. <プリンタの設定>フォームで、[一般]タブにある次のフィールドを入力して[詳細]をクリックします。
- プリンタ・モデル
 - プリンタ・ロケーション



5. [詳細]タブの[プリンタ定義言語]で次のオプションを選択します。

- PostScript
- PCL
- ライン・プリンタ

[ライン・プリンタ]オプションを選択すると、次の処理が行われます。

3. フォーム下部のグリッドに入力できないようにされます。選択した用紙タイプはクリアされます。プリンタのデフォルト用紙タイプとして*JDE LINE PAPERが入力されます。
 4. [ライン・プリンタ]グループ・ボックスにフィールドが表示されます。用紙内の間隔や行数パラメータを指定します。このオプションは次のステップで説明します。
 5. AS/400 プラットフォーム・タイプで[ライン・プリンタ]オプションを選択すると、[AS400 のみ]グループ・ボックスにフィールドが表示されます。ここでは、使用するプリンタがサポートする AS/400 エンコーディングを設定します。このオプションは次のステップで説明します。
- カスタム

注意:

[カスタム]オプションは、プリンタ定義プログラムの上級機能を使用するので、このオプションを使用するのはプリンタのパラメータ文字列を作成する知識のあるユーザーに限定してください。このオプションは次のステップで説明します。

注:

左側の[PostScript]または[PCL]を選択すると、[ライン・プリンタ]オプションは選択できなくなります。左側の[ライン・プリンタ]を選択すると、[ポストスクリプト]または[PCL]オプションは選択できなくなります。プリンタ定義言語(PDL)は複数選択できますが、デフォルトのプリンタ定義言語は右側のデフォルト・ボックスから1つだけ指定する必要があります。このようにすると、指定したPDLがデフォルトとなります。このプリンタ定義言語は、バッチ処理の投入時に一時変更できます。

6. [詳細]タブで[PostScript]オプションを選択すると、[用紙トレイ]ボックスが表示されます。ここで次のフィールドが変更可能です。

- 最大用紙トレイ数

このプリンタが利用可能な用紙トレイの数を入力します。

- デフォルト用紙トレイ

使用する用紙トレイ番号を入力します。

7. [ライン・プリンタ]オプションを選択すると、[ライン・プリンタ]ボックスにフィールドが表示されます。用紙内の間隔や行数パラメータを指定します。次のフィールドに値を入力します。

プリンタがサポートするプリンタ定義言語(PDL)を選んでください。ライン・プリンタ・オプションを選ぶ場合は、用紙の向きとライン・パラメータをライン・プリンタ・ボックスに入力してください。

AS400には、プリンタの使用に使うエンコード・タイプを選んでください。プリンタがEBCDICラインプリンタの場合は、EBCDICエンコード・オプションをクリックしてください。

プリンタ定義言語

☐ PostScript ☐ デフォルト

☐ PCL ☐

☒ ライン・プリンタ ☐

☐ カスタム ☐

ライン・プリンタ

1インチあたりの文字数 0 1ページあたりの行 0

1ページあたりのカラム数 0 プリンタ用紙の幅 0.00

1インチあたり行数 0 プリンタ用紙の高さ 0.00

選択した用紙タイプをデフォルト用紙タイプのテキスト - TVによる自動入力

用紙タイプ*	プリンタ用紙の幅	プリンタ用紙の高さ	計量単位
LETTER	8.50	11.00	IN
LEGAL	8.50	14.00	IN
A4	210.00	297.00	MM
	0.00	0.00	

- 1 インチあたりの文字数

横 1 インチに印刷する文字数を指定します。

- 1 ページのカラム数

レポート行に表示する文字数を指定します。

- 1 インチあたり行数
縦 1 インチに印刷する行数を指定します。
 - 1 ページあたりの行
1 ページに印刷する行数を指定します。
 - プリンタ用紙の幅
このフィールドの値は、[ライン・プリンタ]ボックスに入力した数字に基づいて自動計算されます。
 - プリンタ用紙の高さ
このフィールドの値は、[ライン・プリンタ]ボックスに入力した数字に基づいて自動計算されます。
8. AS/400 サーバーで[ライン・プリンタ]オプションを選択すると、[AS400 のみ]グループ・ボックスにフィールドが表示されます。ここでは、使用するプリンタがサポートする AS/400 エンコーディングを設定します。次のいずれかを選択します。

プリンタ - [プリンタの設定]

ツール(T) フォーム(M) 前へ(P) 次へ(N) 終了(E) 新しい用紙タイプ... 上級(A)

一般 詳細

プリンタがサポートするプリンタ定義言語(PDL)を選んでください。ライン・プリンタ・オプションを選ぶ場合は、用紙の向きとライン・パラメータをライン・プリンタ・ボックスに入力してください。

AS/400には、プリンタの使用に使うエンコード・タイプを選んでください。プリンタがEBCDICラインプリンタの場合は、EBCDICエンコード・オプションをクリックしてください。

プリンタ定義言語

☐ PostScript ☐ デフォルト

☐ PCL ☐

☒ ライン・プリンタ ☐

☐ カスタム ☐

AS/400のみ

☒ ASCIIエンコーディング

☐ EBCDICエンコーディング

ライン・プリンタ

1インチあたりの文字数 0 1ページあたりの行 0

1ページあたりのカラム数 0 プリンタ用紙の幅 0.00

1インチあたり行数 0 プリンタ用紙の高さ 0.00

選択した用紙タイプをデフォルト用紙タイプのテキスト - TVによる自動入力

紙	デフォルトタイプ	用紙タイプ	プリンタ用紙の幅	プリンタ用紙の高さ	計量単位
		LETTER	8.50	11.00	IN
		LEGAL	8.50	14.00	IN
		A4	210.00	297.00	MM
			0.00	0.00	

ロー3

- ASCII エンコーディング
- EBCDIC エンコーディング

注:

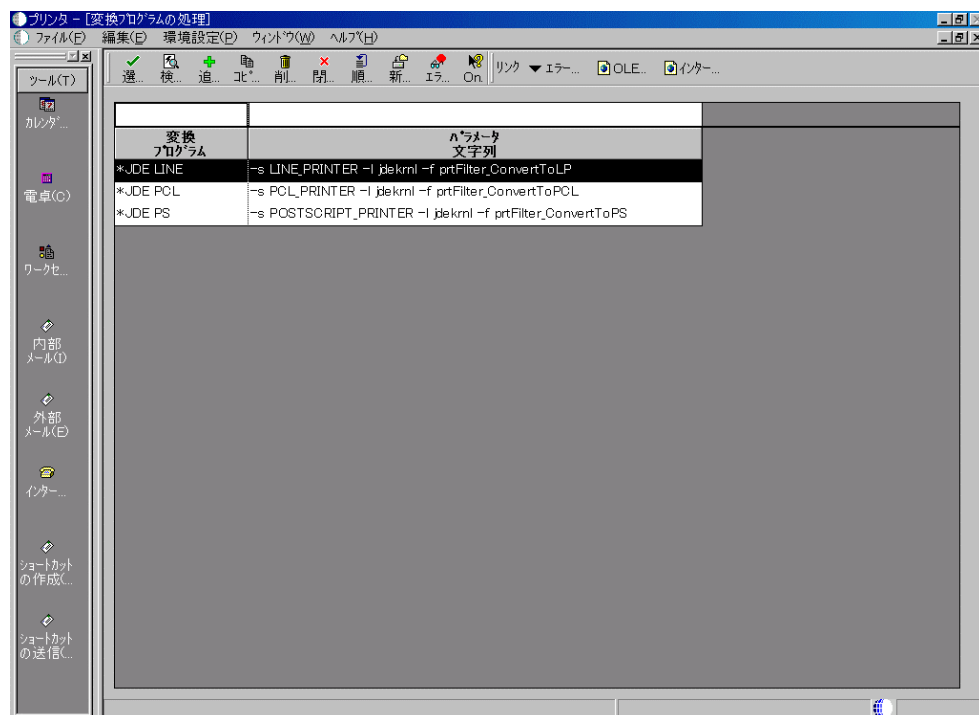
AS/400 サーバーを選んで[ポストスクリプト]または[PCL]オプションを選択すると、[AS400 のみ]ボックスは[ASCII エンコーディング]オプションが選択された状態でグレー表示になります。

9. [カスタム]オプションを使用する場合は、次のステップに従います。

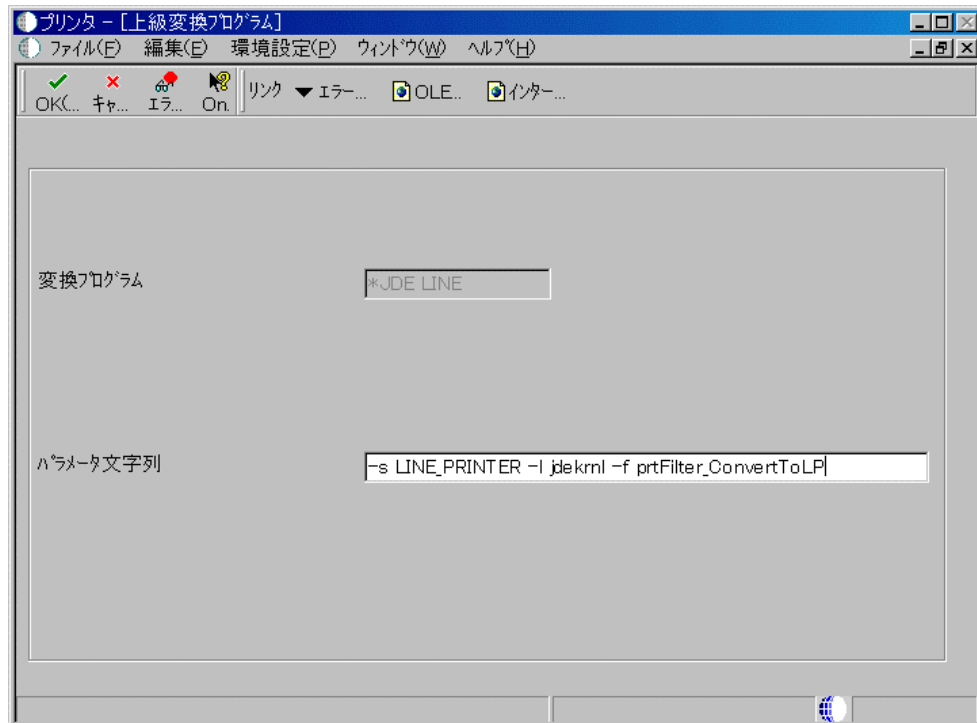
注:

[カスタム]オプションは、プリンタ定義プログラムの上級機能を使用するので、このオプションを使用するのはプリンタのパラメータ文字列を作成する知識のあるユーザーに限定してください。

- [カスタム]チェックボックスをクリックします。
[カスタム]チェックボックスの下にフィールドが表示されます。
- 使用する変換フィルタ名を入力します。
フィルタは、フィールドに直接入力することも、ビジュアル・アシストを使って選択することもできます。
- フィルタを追加または変更するには、[フォーム]メニューの[上級]を選択します。このオプションは[カスタム]チェックボックスが選択されている場合のみ有効です。



- 〈変換プログラムの処理〉フォームで、[追加]をクリックするか既存のフィルタをクリックして[コピー]または[選択]をクリックします。



- 〈上級変換プログラム〉フォームで、次のフィールドを変更して[OK]をクリックします。

- 変換プログラム

前のフォームで[追加]または[コピー]をクリックした場合は、このフィールドは入力可能になっています。追加またはコピーにより作成する変換プログラムの名前を入力します。コピーを作成する場合は、前のフォームでハイライトしたプログラムのパラメータ文字列が[パラメータ文字列]フィールドに表示されます。

- パラメータ文字列

パラメータ文字列が自動的に印刷されます。パラメータ文字列は、印刷に使用するサーバー(AS/400、HP9000 など)およびプリンタ・タイプ(ポストスクリプト、PCL、ライン・プリンタ)に基づいて自動入力されます。たとえば次のような例があります。

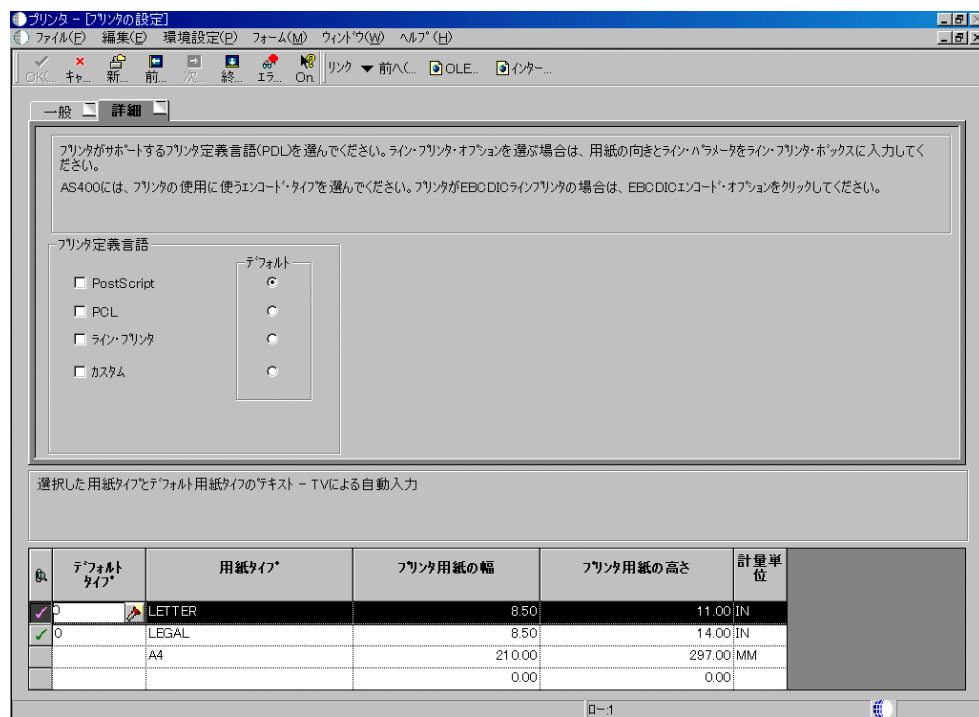
```
-s string_name -l library_name -f convertPDFToPS
```

-s は文字列名を定義します。-l はライブラリ名を定義します。L の小文字で数字の 1 ではありません。-f は関数名を定義します。

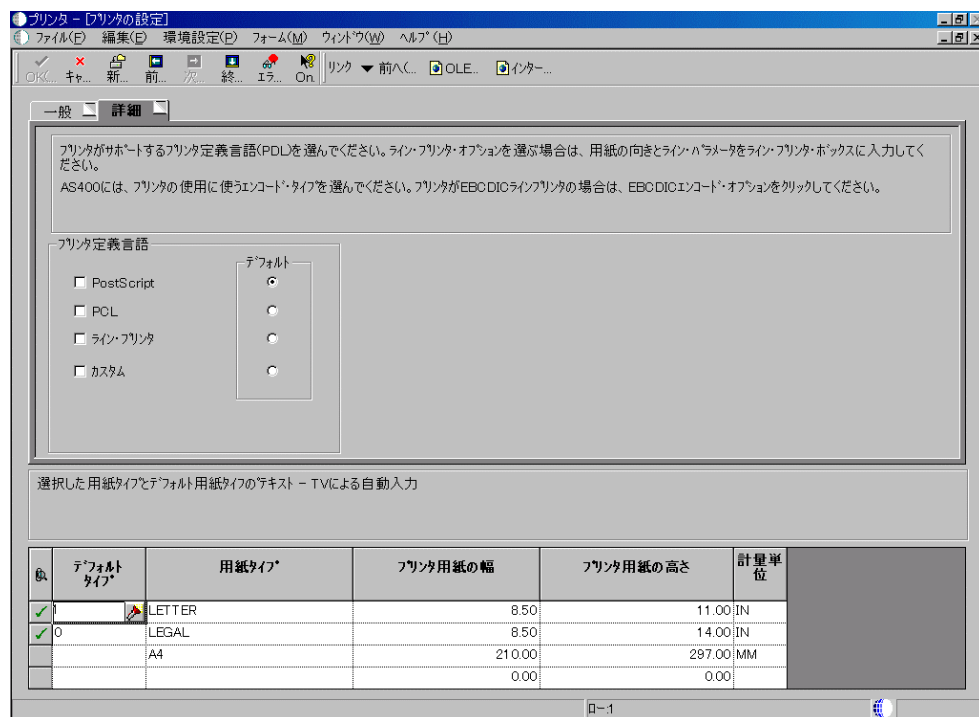
10. 〈プリンタの設定〉フォーム下部のグリッドで、プリンタがサポートする用紙タイプのロー見出しをダブルクリックします。ダブルクリックした用紙タイプ行のロー見出しには、チェック・マークが表示されます。

注:

必要に応じて、新しい用紙タイプを追加できます。説明はこのタスクの後半にあります。

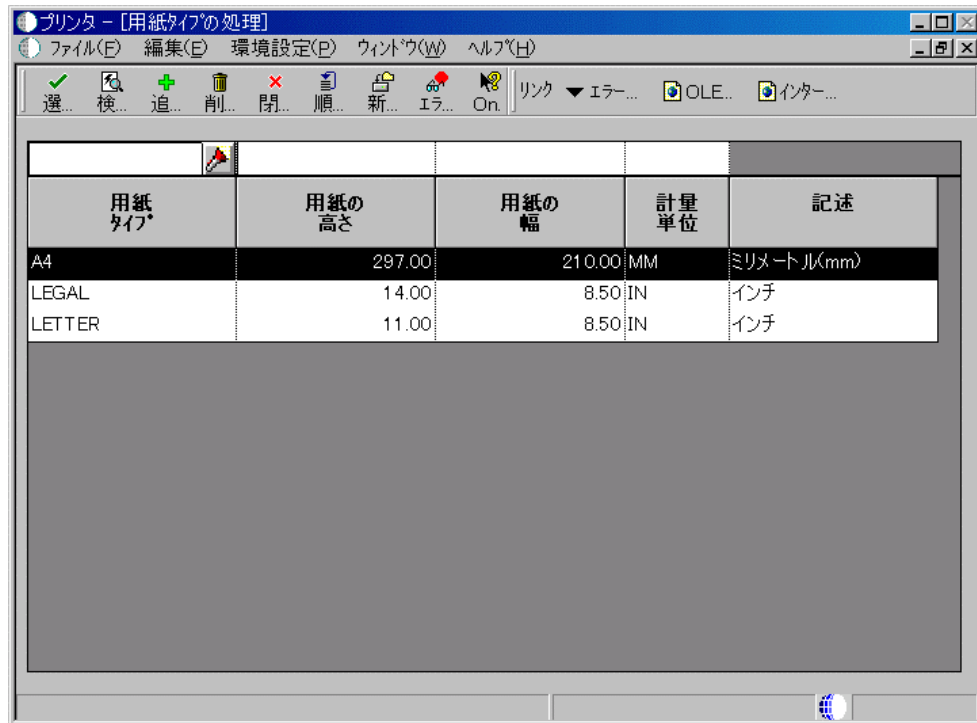


11. デフォルトとして使用する用紙タイプ行の[デフォルト・タイプ]カラムに数字の“1”を入力します。デフォルトとして選択できるのは1つだけです。バッチ処理の投入時にデフォルト用紙タイプは一時変更できます。

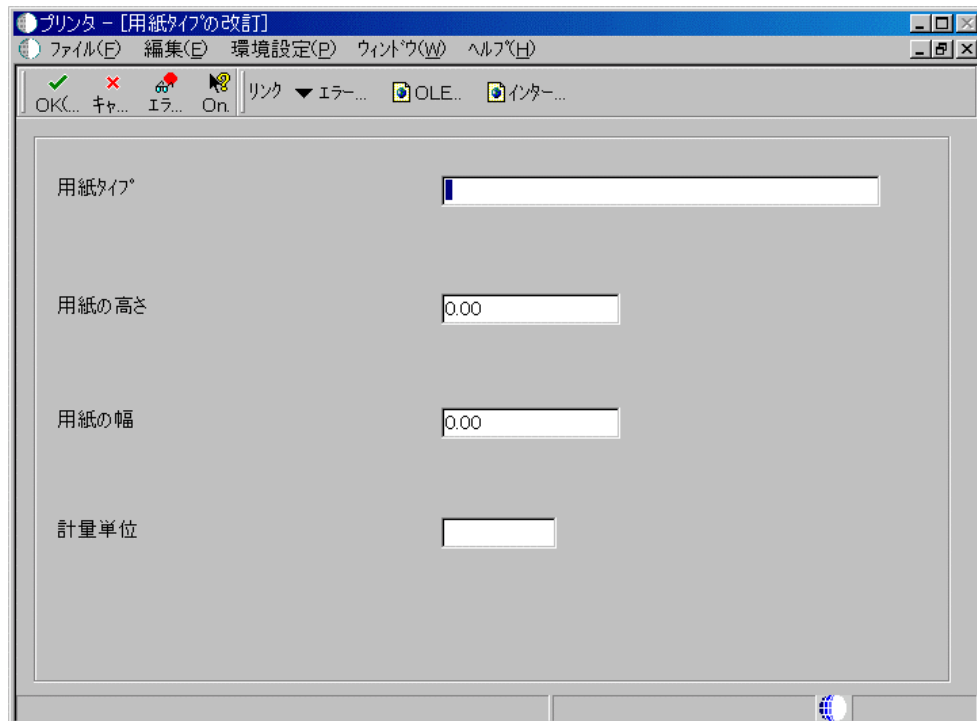


12. 新しい用紙タイプを追加するには、次のステップを実行します。

- [フォーム]メニューから[新しい用紙タイプ]を選択します。



- 〈レコード・タイプの処理〉で、[追加]をクリックします。



13. 〈用紙タイプの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- 用紙タイプ
- 用紙の高さ
- 用紙の幅
- 計量単位

新しい用紙タイプが保存され、〈用紙タイプの処理〉フォームが表示されます。〈用紙タイプの処理〉フォームを閉じると、〈プリンタの設定〉フォームのグリッドには新しい用紙タイプが表示されます。以前に選択した用紙タイプはクリアされるので、これらを再利用するためには再選択する必要があります。

14. プリンタ情報を入力したら、[終了]ボタンをクリックします。

新しいプリンタが保存され、〈プリンタ〉フォームが表示されます。

フィールド記述

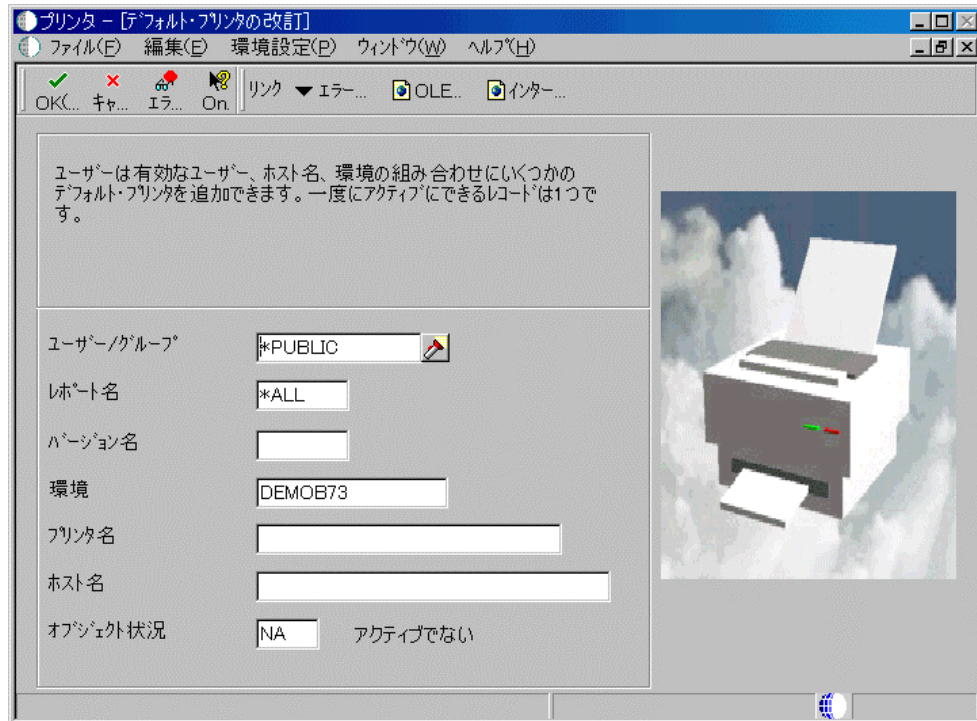
記述	用語解説
プラットフォーム・タイプ	データベースが常駐している、実際のハードウェアのタイプ
サーバー名	クライアントからドキュメントを受け取るコンピュータ名
プリンタ名	結果のレポートを印刷する印刷デバイス名
プリンタ・モデル	プリンタ性能は次のとおりです。 プリンタモデル: プリンタのモデル プリンタロケーション: プリンタが物理的に常駐する場所 エンコーディング: AS/400 のユーザーのみの機能
用紙タイプ	レターサイズ、リーガル、または A4 など、プリンタがサポートする用紙サイズ。 --- フォーム固有 --- レターサイズ、リーガル、または A4 など、プリンタがサポートする用紙サイズ。
プリンタ用紙幅	この種類の用紙の横の長さを指定する値。計量単位で指定された単位を使用します。
プリンタ用紙高さ	この種類の用紙の縦の長さを指定する値。計量単位で指定された単位を使用します。

計量単位	在庫品目の表示数量を示すユーザー定義コード(00/UM)。 たとえば、CS(ケース)や BX(箱)などです。
	<p>--- フォーム固有 ---</p> <p>用紙のサイズを入力する計量単位。</p> <p>例: IN = インチ</p> <p>MM = ミリメートル</p>
EBCDIC エンコーディング	<p>プリンタ性能は次のとおりです。</p> <p>プリンタモデル: プリンタのモデル</p> <p>プリンタロケーション: プリンタが物理的に常駐する場所</p> <p>エンコーディング: AS/400 のユーザーのみの機能</p>
カラム数/ページ	1 ページあたりのカラム数を指定するラインプリンタ・パラメータ
1 インチあたりの文字数	水平方向の印刷密度。プリンタでサポートされている 1 インチあたりの文字数
1 ページあたり行数	1 ページあたりの行数を指定するライン・プリンタ用パラメータ
1 インチあたり行数	<p>行スペースは、1 インチあたりの行数として入力してください。プリンタにサポートされている必要があります。有効な値は次のとおりです。</p> <p>4 IBM 5219、5224、5225、および 3287 プリンタのみ</p> <p>6 IBM 5224 プリンタのみ</p> <p>8 IBM 5224 プリンタのみ</p> <p>9 IBM 5225 プリンタのみ</p> <p>標準コンピュータ印刷は 6LPI および 10CPI です。8 で 1/2"X11"用紙を印刷する場合は、8LPI および 15CPI を指定してください。</p>
最大用紙トレイ数	設定するプリンタで使用可能な用紙トレイの最大数
デフォルト用紙トレイ	バッチ印刷ジョブに使用する出力トレイ

▶ デフォルト・プリンタを定義するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[デフォルト・プリンタの定義]を選択します。
2. 〈デフォルト事業所およびプリンタの処理〉で、[追加]をクリックします。



3. 〈デフォルト・プリンタの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- ユーザー/ロール

ビジュアル・アシストを使用して、特定ユーザーまたはグループ全体を選びます。ブランクにした場合は、デフォルト値 *PUBLIC が使用されます。

- レポート名

ビジュアル・アシストを使って、印刷するレポートを選びます。ブランクにした場合は、デフォルト値*ALL が使用されます。

- バージョン名

ビジュアル・アシストを使って、実行するバージョンを選びます。ブランクにした場合は、デフォルト値*ALL が使用されます。レポート名が*ALL の場合、バージョン名も*ALL になり変更できません。

- 環境

現在サインオンしている環境が自動入力されます。ユーザーによる変更は可能です。

- プリンタ名

- ホスト名

レポートを実行するサーバー(ホスト)を入力します。ビジュアル・アシストを使用すると、選択したプリンタ名に基づいて適切なホスト名が表示されます。

- オブジェクト状況

[オブジェクト状況]をアクティブにすることにより、この新しいプリンタがデフォルト・プリンタになります。エラーが発生した場合は、現在アクティブになっているデフォルト・プリンタがあることを意味します。新しいプリンタをアクティブにする前に、現在のデフォルト・プリンタを「アクティブでない」に変更する必要があります。〈デフォルト・プリンタの処理〉フォームでは複数のプリンタ状況を変更することができます。説明は、このタスクの最後にあります。

4. 〈デフォルト・プリンタの処理〉フォームでデフォルト・プリンタの状況を変更するには、[ロー]メニューから[変更状況]を選択します。

アクティブに指定されているデフォルト・プリンタが他にあると、この操作はエラーになります。現在のデフォルト・プリンタを選んで、[ロー]メニューから[変更状況]を選択することにより、現在のデフォルト・プリンタの状況を「アクティブでない」に変更します。次に、新しいプリンタをデフォルトに設定します。

▶ 既存のプリンタを変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで[プリンタの変更]を選択します。

プリンタ名	デフォルト・プリンタ定義言語	プラットフォームタイプ	プリンタモデル
¥¥dve prn1 ¥dve prn2	*JDE LINE	NTSVR	LINEPRINTER

2. 〈プリンタの処理〉で[検索]をクリックして、変更するプリンタを選んで[選択]をクリックします。

〈プリンタの設定〉フォームが表示されます。このフォームでは、プリンタ・モデル、プリンタの場所、プリンタ定義言語 (PDL)、用紙タイプなどのプリンタ情報を指定します。

No.	デフォルトタイプ	用紙タイプ*	プリンタ用紙の幅	プリンタ用紙の高さ	計量単位
0	LETTER	8.50	11.00	IN	
0	LEGAL	8.50	14.00	IN	
	A4	210.00	297.00	MM	
		0.00	0.00		

3. 〈プリンタの設定〉で、必要に応じて情報を変更して[OK]をクリックします。プリンタ名とプラットフォーム・タイプは変更できません。ライン・プリンタを選択した場合は、フォーム下部の用紙タイプ・グリッドが使用できないようになります。

新しいプリンタ情報が保存され、〈プリンタの処理〉フォームに戻ります。

▶ 既存のプリンタをコピーするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー (GH9013) から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
2. 〈プリンタの処理〉で、[検索]をクリックして、コピーするプリンタを選んで[コピー]をクリックします。

3. 〈プリンタの設定〉で、次のフィールドに値を入力します。

- プリンタ名

サーバー・パスを含むプリンタ名を入力します。たとえば、docprf2 がサーバーcorpts1にある Windows NT プリンタの場合は、¥¥corpts1¥docprf2 という名前になります。複数のプラットフォームを使用する場合、次の命名規則を使用して、各プラットフォームごとにプリンタを設定する必要があります。

- AS/400:ライブラリ名/出力待ち行列名

AS/400 の場合、プリンタ名と出力待ち行列名は同じである必要があります。出力を保存するのにデフォルト QGPL ライブラリを使用する場合は、このフィールドには出力待ち行列名を入力するだけで済みます。大文字で入力してください。

例: DEVDES3A

出力待ち行列名がデフォルト QGPL ライブラリ以外のライブラリに存在する場合は、このフィールドにライブラリ名と出力待ち行列名の両方を入力する必要があります。

例: QUSERSYS/DEVDES3A

注:

ライブラリ名と出力待ち行列名の両方を指定することにより、レポートが予期しない出力待ち行列に投入されるのを防ぎます。

- Windows NT:¥¥プリント・サーバー名¥プリンタ名

例: ¥¥corpts1¥docprf2

小文字で入力してください。

- UNIX:プリンタ名(スラッシュなし)

例: devprn16

小文字で入力してください。

- プラットフォーム・タイプ

AS/400 サーバーなど、印刷するサーバーのプラットフォームを入力します。

4. [詳細]タブで、必要に応じて情報を変更します。

▶ **プリンタを削除するには**

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
2. 〈プリンタの処理〉で[検索]をクリックして、プリンタを選択(複数のプリンタを選択する場合は[Ctrl]キーを押しながら選択)して[削除]をクリックします。

この操作によりプリンタ定義が削除されます。

▶ 用紙タイプを削除するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
2. 〈プリンタの処理〉で、[検索]をクリックしてプリンタを選んで[選択]をクリックします。
3. 〈プリンタの設定〉で、[フォーム]メニューから[新しい用紙タイプ]を選択します。
4. 〈用紙タイプの処理〉で、用紙タイプを選んで[削除]をクリックします。
5. 〈削除の確認〉で[OK]をクリックします。

削除した用紙タイプがグリッドになくなったことを確認します。

▶ 使用に適さないプリンタ・レコードを検索するには

プリンタ機能テーブル(F986163)を検索して、使用に適さないプリンタ情報を含む不完全なプリンタ・レコードをリスト表示します。B73.3.1 以前のリリースから B73.3.2 以降のリリースにアップグレードする場合は、この作業が役に立ちます。このレポートには、印刷するレコードを修正するのに役立ちます。

略式コマンドに“BV”と入力します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームの[バッチ・アプリケーション]フィールドに“R9861602”と入力し、[検索]をクリックします。
XJDE0001 バージョンが表示されます。
2. 「レポートの投入」の説明に従ってバージョンを実行します。
レポートには、論理プリンタ名を持つレポートをリストします。論理プリンタ名と物理プリンタ名は使用されないため、この情報を基に既存のプリンタ設定を変更します。
3. このレポートと「既存プリンタを変更するには」を参照して、プリンタ・レコードを検索して修正します。

▶ バッチ処理に添付されている論理プリンタを決定するには

次のバッチ処理により、バッチ処理の中にプリンタに添付されているものがあればリストされます。B73.3.1 以前のリリースから B73.3.2 以降のリリースにアップグレードする場合は、この作業が役に立ちます。

略式コマンドに“BV”と入力します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームの[バッチ・アプリケーション]フィールドに“R9861601”と入力し、[検索]をクリックします。
XJDE0001 バージョンが表示されます。
2. 「レポートの投入」の説明に従ってバージョンを実行します。
レポートには、論理プリンタ名を持つレポートをリストします。論理プリンタ名と物理プリンタ名は使用されないため、この情報を基に既存のプリンタ設定を変更します。

3. レポート設計ツール(RDA)を使って、有効なプリンタを論理プリンタに添付されたバッチ処理に添付します。

プリンタの添付は、RDA に精通したユーザーだけが行ってください。

レポート・ログの生成および取込み

レポートの実行時に、レポート・ログを作成するように指定することができます。ログとして jde.log と jdedebug.log の 2 つを作成できます。これらのログにより、レポートがサーバーでどのように処理されたかが確認できます。これらのログ・ファイルは、サーバーの特定ディレクトリに保存されます。このディレクトリの指定は、jde.ini で行います。また、プラットフォームにより、jde.ini の設定に多少の違いがあります。次に、jde.ini でのレポート・ログ保存ディレクトリの設定例をプラットフォーム別に示します。

- AS/400

[INSTALL]

DefaultSystem=B733SYS

例: B733SYS¥PRINTQUEUE

- UNIX

[INSTALL]

B733=/usr/PeopleSoft/output

例: /usr/PeopleSoft/output/PrintQueue

- Windows NT Server

[INSTALL]

B733=d:¥PeopleSoft¥output

例: d:¥PeopleSoft¥output¥PrintQueue

jde.ini ファイルで指定したディレクトリの下で PrintQueue がログ・ファイルのデフォルト・ディレクトリになります。デフォルト・ディレクトリは、必要に応じて変更可能です。

注:

処理後にレポート・ファイルが保存されるディレクトリも、これらの jde.ini 設定により決まります。jde.ini でレポート・ファイルを保存するように指定した場合、PDF ファイルはレポート出力ディレクトリ(PrintQueue)に保存されます。

▶ レポート・ログを作成するには

略式コマンドに“BV”と入力します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 – 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して[検索]をクリックします。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. 実行するバージョンを選択して、[選択]をクリックします。

〈バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。ここでは、データ選択とデータ順序の変更ができ、また〈上級操作〉フォームにアクセスできます。

3. 〈バージョン・プロンプト〉で、[フォーム]メニューから[上級]を選択します。
〈上級バージョン・プロンプト〉フォームが表示されます。ここでは、レポートを処理するロケーションの変更、jde.log の記録開始、ログ詳細レベルの変更が指示できます。
4. 〈上級バージョン・プロンプト〉で、次の情報を変更して[OK]をクリックします。

- ログの記録(JDE.log)

このオプションをオンにすると、基本的なログが記録され、バッチ処理時に発生した問題を確定することができます。

- トレース(JDEDEBUG.log)

このオプションをオンにすると、バッチ処理の詳細を含む上級 UBE ログが記録されます。

- UBE ログ記録レベル

エラー・メッセージからオブジェクト・レベル・メッセージおよび UBE 関数メッセージまでのバッチ処理ログの詳細レベル(0~6)を指定します。

注:

より技術的な情報を受け取るために高い値を選択すると、低い値に対する情報もすべて受け取ることになります。たとえば、ここに“6”(UBE 関数メッセージ)を入力すると、0~5 を指定したときに表示される情報も記録されます。

5. 〈バージョン・プロンプト〉フォームで、[投入]をクリックしてレポートを実行し、ログを作成します。

フィールド記述

記述	用語解説
ログ(JDE.log)の記録	ユーザーがサーバーで実行されたジョブに対する JDE ログを表示することを可能にするコード。サーバーがログを表示するよう既に設定されている場合は、このコードにかかわらずログが表示されます。
トレース(JDEDEBUG.log)の記録	サーバーでバッチジョブを実行する時、このフィールドはジョブの実行についてトレースが可能かどうかを表示します。トレースを実行するようにサーバーがすでに設定されている場合、このフィールドの設定に関係なく、トレースは実行されます。
UBE ログ記録レベル	<p>バッチジョブの実行時に発生するエラーログの詳細レベルを示します。次のリストでは異なるレベルを説明します。</p> <ol style="list-style-type: none">0. エラーメッセージ1. 情報メッセージおよびログ入力2. セクションレベルメッセージ3. オブジェクトレベルメッセージ4. イベントルールメッセージ5. データベースマッピングメッセージ6. UBE 内部関数コール、テキストアウト値

ヌル・パススルー印刷フィルタの設定

ヌル・パススルー印刷フィルタ機能を使用すると、プリンタ言語フォーマットに変換せずに PDF 文書を印刷待ち行列に直接送ることができます。

▶ ヌル・パススルー印刷フィルタを追加するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈プリンタ〉を選択します。

1. 〈プリンタ〉フォームで、[プリンタの追加]を選択します。

プリンタ設定ディレクトリの開始ページが表示されます。このフォームには、ディレクトリを使って実行するタスクについての説明が表示されます。

2. プリンタ設定ディレクトリの開始ページで、説明を確認したら[次へ]ボタンをクリックします。

[プラットフォーム・タイプ]は、稼動しているオペレーティング・システムに応じて自動入力されます。

3. 〈プラットフォーム情報〉で、次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。

- Print Server Name(プリント・サーバー名)
- Print Shared Name(共有名)

4. 〈プリンタの設定〉で、[詳細]タブをクリックします。

5. [プリンタ定義言語]フィールドで[カスタム]を選択します。

6. [フォーム]メニューから[上級]を選択します。

7. 〈変換プログラムの検索/選択〉で、[追加]をクリックします。
 8. 〈上級変換プログラム〉フォームで、[変換プログラム]フィールドに“*JDE PDF”と入力します。
 9. [パラメータ文字列]フィールドで、“-s POSTSCRIPT_PRINTER”と入力します。
 10. [OK]をクリックします。
 11. 〈変換プログラムの処理〉で、[閉じる]をクリックします。
 12. 〈プリンタの設定〉で、[カスタム]の下のフィールドでビジュアル・アシストをクリックしてください。
 13. 〈変換プログラムの検索/選択〉で、*JDE PDF 変換プログラムを選んで、[選択]をクリックします。
 14. 〈プリンタの設定〉で、[終了]をクリックします。
- ヌル・パススルー印刷フィルタが保存されます。

ライン・プリンタで実行するレポートの設計

ライン・プリンタにレポートを実行する場合は、情報が正しく印刷されるためにガイドラインに従う必要があります。ガイドラインには、フォント・ファミリー、フォント・サイズ、グリッド間隔、レポートのフィールド幅、用紙の大きさ、ライン・パラメータが含まれます。

ここではライン・プリンタ用のレポート設計について説明します。

参照

- ❑ AS/400、UNIX、および Windows NT サーバー上でのプリンタ設定については、『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの次のトピックを参照してください。
- ❑ AS/400 用プリンタの設定
- ❑ UNIX 用プリンタの設定
- ❑ Windows NT 用プリンタの設定

▶ ライン・プリンタで実行するレポートを設計するには

重要

〈バッチ・バージョン〉アプリケーション(P98305)で、レポートのライン・プリンタ専用バージョンを作成してください。これに次の変更を加えます。レポート・レベルでの変更は行わないでください。レポート・レベルで変更すると、レポートが他のプリンタ・プラットフォームで正しく表示されなくなることがあります。

〈クロス・アプリケーション開発ツール〉メニュー(GH902)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、対象レポートのライン・プリンタ用に変更するバージョンを開きます。
2. [Layout(レイアウト)]メニューから[Grid Alignment(グリッド配置)]を選択します。
3. 〈Alignment Grid(グリッド配置)〉で、[Vertical(縦)]フィールドを“16”にして[OK]をクリックします。

4. [File]メニューから[Report Properties(レポート・プロパティ)]を選択します。
5. <Properties(プロパティ)>の[Font/Color(フォント/色)]タブで、次のフォント・プロパティを設定して[OK]をクリックします。
 - フォントを Courier New に変更します。
Courier New フォントが最も見やすく出力されますが、固定ピット・フォントであれば、他のフォントも選択可能です。たとえば、日本語を表示するレポートであれば、固定ピッチの MS ゴシックを選択します。
 - フォント・サイズを 10 に変更します。
6. [Apply settings to all objects(この設定をすべてのオブジェクトに適用)]オプションを有効にして、すべてのオブジェクトにこの設定を反映させ、[OK]をクリックします。
7. フォント・プロパティを変更すると、フィールド幅を広げて
フィールドのタイトルがすべて表示されるように調整が必要な場合があります。レポート・オブジェクトがグリッドに表示されるように、レポートのセクションを移動します。
8. ステップ 7~10 は Group(グループ)セクションにのみ該当します。正しく整列されていないフィールドがある場合は、[Ctrl]キーを押したまま各フィールドをクリックします。
最後にクリックしたを基準に他のフィールドが整列されます。
9. [Layout(レイアウト)]メニューから[Align(整列)]を選択します。
10. <Align Objects(オブジェクトの整列)>で、[Apply To(対象)]ボックスで[Current Section(現在のセクション)]オプションを選ぶと[Top to Bottom(上下)]ボックスが有効になります。
11. [Top to Bottom]ボックスで、[Top Edges(上端)]オプションを選んで[OK]をクリックします。
12. レポートの変更が完了したら、レポート・バージョンを保存します。

▶ ライン・プリンタを設定するには

重要

ライン・プリンタの文字数と行数として設定する値について説明します。これは、「プリンタ定義プログラムの処理」で説明されているプリンタの設定ステップの補足です。

J.D. Edwards の Windows 環境では、<プリンタ処理の設定>メニュー(GH9013)から<プリンタ>を選択します。

1. <プリンタ>フォームで、[プリンタの変更]を選択します。
2. <プリンタの処理>で、[検索]をクリックします。使用可能なプリンタがグリッドに表示されます。
3. [詳細]タブで[ライン・プリンタ]を選びます。
4. <プリンタの設定>で、[詳細]タブをクリックします。
5. [ライン・プリンタ]をクリックします。

6. 次のフィールドに値を入力します。

- カラム数／ページ
- 1 インチあたりの文字数
- 1 ページあたり行数
- 1 インチあたり行数

8.5 インチ x 77 インチの用紙に印刷する場合は、次の値を使用します。

- 1 インチあたりの文字数: 10
- 1 ページのカラム数 85
- 1 インチあたり行数: 6
- (縦) 1 ページの行数: 66

注:

次の計算式により用紙サイズが決まります。

$$CPP / CPI = \text{用紙の幅} (85 / 10 = 8.5 \text{ インチ})$$

$$LPP / LPI = \text{用紙の高さ} (66 / 6 = 11 \text{ インチ})$$

7. [OK]をクリックして、設定を保存します。

▶ リモート AS/400 ライン・プリンタに複数のレポートを印刷するには

このタスクは、AS/400 ライン・プリンタの出力待ち行列で複数のレポート印刷がサポートされていない場合にのみ必要です。リモートの出力待ち行列にのみ該当します。この操作は、システム管理者が行ってください。

1. 出力待ち行列が接続されているリモート・ライターを終了します。
2. 出力待ち行列変更コマンド (CHGOUTQ) を使って、表示オプション (DSPOPT) を XAIX に変更します。
3. リモート・ライターを再スタートさせます。

これで、出力待ち行列がリモート・プリンタへの部数印刷の送信が可能になります。

バーコード・フォントを使用するためのプリンタの設定

J.D. Edwards ソフトウェアは、「BC C39 to 1 Medium」というバーコード・フォントをサポートしています。このフォントはソフトウェアにバンドルされています。プリンタを設定した後で、そのプリンタがレポートにバーコード・フォントを使用するように割り当てることができます。ここでは、プリンタがバーコード・フォント BC C39 を使用するように設定します。

注:

バーコードをサポートするプリンタは、プリンタ定義言語としてポストスクリプト(PostScript)か PCL を使用する必要があります。

▶ バーコード・フォントを使用するためのプリンタを設定するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈バーコード・フォントの改訂〉で、次のフィールドに値を入力するかオプションを指定します。
 - プリンタ名
ビジュアル・アシストをクリックすると、プリンタが表示されます。
 - ポストスクリプトまたは PCL
[プリンタ名]フィールドに入力したプリンタのプリンタ定義言語により、適切なオプションを選択します。
 - TrueType フォント
このボタンをクリックして、〈フォント〉フォームでバーコード・フォント[BCC393 to 1 Medium]を選択します。
 - プリンタ・フォント名
 - シンボル・セット ID (PCL を選択した場合のみ)
シンボル・セットの文字および文字マッピングを指定します。この情報が必要な場合は、PCL プリンタ・ベンダーに連絡してください。
3. バーコード出力が可能なプリンタの情報を入力したら、[OK]をクリックします。
情報が保存され、〈バーコード・フォントの改訂〉フォームがクリアされます。引き続き他のプリンタを設定するか、[キャンセル]をクリックしてフォームを閉じます。

▶ バーコード・プリンタ情報を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
グリッドに、バーコード・フォントを使用するように設定したプリンタが表示されます。
2. 情報を変更するプリンタを選んで、[選択]をクリックします。
3. 〈バーコード・フォントの改訂〉で、必要に応じてフォームの情報を変更して[OK]をクリックします。

▶ バーコード・プリンタ情報を新規プリンタにコピーするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
グリッドに、バーコード・フォントを使用するように設定したプリンタが表示されます。
2. 情報をコピーするプリンタを選んで、[コピー]をクリックします。
3. 〈バーコード・フォントの改訂〉で、プリンタ名を変更します。
その他の情報も、必要に応じて変更できます。
4. [OK]をクリックして、変更内容を保存します。

▶ プリンタのバーコード・サポート情報を削除するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈プリンタ処理の設定〉メニュー(GH9013)から〈バーコード・サポート〉を選択します。

1. 〈バーコード・フォントの処理〉で、[検索]をクリックします。
グリッドに、バーコード・フォントを使用するように設定したプリンタが表示されます。
2. 削除するプリンタを選んで、[削除]をクリックします。
3. 〈削除の確認〉で、[OK]をクリックします。

追加情報

このセクションでは、エンタープライズ・レポート・ライティングを使ってレポートを作成するのに便利な情報を提供します。次のサブジェクトが含まれています。

- **編集コード・テーブル**
使用可能な編集コードを説明します。編集コードは、レポートにおけるデータのフォーマット方法を決定します。
- **イベント**
レポート処理中に発生するイベントを説明します。
- **サンプル・レポート**
作成できるレポートの例、およびサンプル・レポートを作成する方法を提供します。
- **J.D. Edwards のレポート**
J.D. Edwards により提供されるレポートのリストの一部です。
- **スマート・フィールド**
スマート・フィールドの作成、データ構造体の定義、ネームド・マッピングの定義、計算の実行、データ辞書スマート・フィールド項目の作成、スマート・フィールド・テンプレートの作成、レポート・ディレクタ・テンプレートの作成、スマート・フィールドを使用した新しいレポートの作成を説明します。
- **OSA (Output Stream Access/出力ストリーム・アクセス)**
OSA (出力ストリーム・アクセス) インターフェイスを使ってレポート処理中にイベントを実行する方法を説明します。

編集コード・テーブル

J.D. Edwards ソフトウェアは、編集コードを使用してレポート用の値の表示およびフォーマット方法を確定します。レポートに属するデフォルトの編集コードは、大量の情報に関するため、注意して使用してください。

レポートに適切なデフォルトの編集コードを選択するために、次ページのテーブルの[負の値の表記法]カラムを参照して、レポートの数字表示に該当するオプションを選択してください。この結果、検索するのは4つのコードに絞られます。たとえば、負の値の表記法として、後付けのマイナス符号を選んだ場合、検索するコードは、J、K、L、M に絞られます。

〈デフォルトの編集コード〉テーブルの[ゼロ残高]カラムを検討し、ゼロ残高を印刷するかどうかを決めます。この結果、検索するのはさらに2つのコードに絞られます。たとえば、ゼロ残高を印刷することを選択すれば、検索するコードはJかLに限定されます(表を参照)。

〈デフォルトの編集コード〉 テーブルの[カンマ]カラムで、レポート上の数字にカンマを表示するかどうかを指定します。たとえば、レポート上の数字にカンマを表示する場合はJを選択し、表示しない場合はLを選択します。

使用可能なコードおよび特性は次のとおりです。

コード	カンマ	ゼロ残高	マイナス金額表記
A	Y	Y	Cr
B	Y	N	Cr
C	N	Y	Cr
D	N	N	Cr
J	Y	Y	後
K	Y	N	後
L	N	Y	後
M	N	N	後
N	Y	Y	前
O	Y	N	前
P	N	Y	前
Q	N	N	前
R	Y	Y	< >
S	Y	N	< >
T	N	Y	< >
U	N	N	< >
1	Y	Y	符号なし
2	Y	N	符号なし
3	N	Y	符号なし
4	N	N	符号なし

イベント

イベントは通常、特定の順序で実行されます。ほとんどのイベントには制約があります。イベントの中には、特定のセクションでのみ使用できるものもあります。

イベントおよびセクション・タイプ

イベントの中には、特定のセクションでのみ使用できるものもあります。次の表は、それぞれのレベルで使用可能なイベントを説明します。

- Report (レポート)
- Section (セクション)
- Object (オブジェクト)

レポート・レベルのイベント

次の表は、レポート・レベルで使用可能なイベントを表しています。X は、RDA で表示されるイベントで、O は UBE でサポートされるイベントを表します。

イベント・リスト

Do Initialize Printer (プリンタ初期化の実行)

レポート

XO

セクション・レベルのイベント

次の表は、セクション・レベルのイベントで使用可能なイベントを表しています。X は、RDA で表示されるイベントで、O は UBE でサポートされるイベントを表します。

イベント・リスト	レポート・ヘッダー	ページ・ヘッダー	カラム	グループ	表	親/カスタム (CG)	レベル区切りヘッダー	レベル区切りフッター	ページ・フッター	レポート・フッター
Advance Section (セクションの進行)			XO	XO	XO	XO	XO			
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
Before Level Break (レベル区切り前)			XO	XO	XO	XO				
Do Balance Auditor (残高)					XO					

監査の実行)										
Do Section (セクションの 実行)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
Do Tabular Break(表区切 りの実行)					XO					
End Break Section(区切 りセクションの 終了)			XO	XO	XO	XO				
End Lvl Brk Footer Section (レベル区切り フッター・セク ションの終了)								XO		
End Lvl Brk Header Section(レベ ル区切りヘッ ダー・セクショ ンの終了)							XO			
End Page Header(ペー ジ・ヘッダーの 終了)		XO								
End Report Header(レポ ート・ヘッダー の終了)	XO									
End Report Footer(レポー ト・フッターの 終了)										XO
End Section (セクションの 終了)			XO	XO	XO	XO				
Init Break Section(区切 りセクションの 初期化)			XO	XO	XO	XO				
Init Lvl Brk Footer Section (レベル区切り フッター・セク ションの 初期化)								XO		
Init Lvl Brk Header Section(レベ ル区切りヘッ ダー・セクショ ンの初期化)			XO	XO		XO	X			

Initialize Page Header (ページ・ヘッダーの初期化)		XO								
Initialize Page Footer(ページ・フッターの初期化)									XO	
Initialize Report Header(レポート・ヘッダーの初期化)	XO									
Initialize Report Footer (レポート・フッターの初期化)										XO
Initialize Section(セクションの初期化)			XO	XO	XO	XO	XO	XO		
Refresh Section(セクションのリフレッシュ)						XO				
Suspend Section(セクションの一時停止)			XO	XO	XO	XO	XO	XO		

オブジェクト・レベルのイベント

次の表は、オブジェクト・レベルで使用可能なイベントを表しています。

変数のオブジェクト

次の表では、オブジェクト・レベルで使用可能なイベントを表しています。X は、RDA で表示されるイベントで、O は UBE でサポートされるイベントを表します。

イベント・リスト	レポート・ヘッダー	ページ・ヘッダー	カラム	グループ	表	レベル区切りヘッダー	レベル区切りフッター	ページ・フッター	レポート・フッター
Column Inclusion (カラム組込み)					XO				
Do Variable (変数の実行)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
End Column (カラムの終 (将来使用))			XO	XO	XO				
End Variable (変数の終了)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
Initialize Column (カラムの初期化 (将来使用))			XO	XO	XO				
Initialize Variable (変数の初期化)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO

固定情報オブジェクト

次の表では、オブジェクト・レベルで使用可能なイベントを表しています。X は、RDA で表示されるイベントで、O は UBE でサポートされるイベントを表します。

イベント・リスト	レポート・ヘッダー	ページ・ヘッダー	カラム	グループ	表	レベル区切りヘッダー	レベル区切りフッター	ページ・フッター	レポート・フッター
Do Column Heading(カラム見出しの実行)			XO		XO		XO		
Do Constant(固定情報の実行)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
End Constant(固定情報の終了)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO
Initialize Const(固定情報の初期化)	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO	XO

使用可能なオブジェクト

オブジェクトによっては特定のイベントにのみ使用可能です。次の表では、それぞれのイベントで使用可能なオブジェクトを説明します。

- セクション・レベルのイベント
- オブジェクト・レベルのイベント
- セクション・レベルのイベントでのオブジェクトの有効期間

RV は印刷バッファとして考えてください。ユーザーが値を RV に割り当てたときに、イベントの中で実行時の値を取得します。

RV は、Do Variable(変数の実行)イベントの処理中にレポートに印刷されます。

RV の値はセクションの進行イベントを処理する前にクリアされます。現在の RV がクリアされる前に、これらの値により PV が自動入力されます。

B733 以前のリリースでは、RV が BC から生成された場合、イベント・ルール・エディタで BC のみ表示されました。表でないセクションでは、BC にアクセスすると、RV にアクセスした場合と同じ結果になります。表セクションでは、BC は RV として UBE により処理されます。RV はプリンタ・バッファを意味します。BC には、データベースから取り込まれたレコードの値が含まれています。BC/RV の差異は次のリリースで説明される予定です。

セクション・レベルのイベント

次の表では、セクション・レベルのイベントで使用可能なオブジェクトを説明します。テーブルでは次の略語を使用しています。

- BC – Business View Column (ビジネス・ビュー・カラム)
- TR – Tabular Row (表のロー)
- TC – Tabular Cell (表のセル)
- BC – Business View Column (ビジネス・ビュー・カラム)
- PV – Previous Variable (前の変数)

レポート・ヘッダー・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Report Header (レポート・ヘッダーの初期化)	x	x
Do Section (セクションの実行)	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x
End Report Header (レポート・ヘッダーの終了)	x	x

ページ・ヘッダー・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Page Header (ページ・ヘッダーの初期化)	x	x
Do Section (セクションの実行)	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x
End Page Header (ページ・ヘッダーの終了)	x	x

グループ・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC	PV
Initialize Section (セクションの初期化)		x			x
Refresh Section (セクションのリフレッシュ) (Child)		x	x	x	
Advance Section (セクションの進行)	x	x	x	x	x
Before Level Break (レベル区切り前)	x	x	x	x	x
Init Lvl Break Header Section (レベル区切りヘッダー・セクションの初期化)	x	x	x	x	
Do Section (セクションの実行)	x	x	x	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x	x	x	x
Init Break Section (区切りセクションの初期化) (条件つき)	x	x	x	x	x
End Break Section (区切りセクションの終了) (条件つき)	x	x	x	x	x
End Section (セクションの終了)		x	x	x	x
Suspend Section (セクションの一時停止) (条件つき)	x	x	x	x	x

カラム・セクション

	BC	RV 一括	RV セク ション	PC	PV
Initialize Section(セクションの初期化)		x			x
Refresh Section(セクションのリフレッシュ) (Child)		x	x	x	
Advance Section(セクションの進行)	x	x	x	x	x
Before Level Break(レベル区切り前)	x	x	x	x	x
Init Lvl Break Header Section(レベル区切りヘッダー・ セクションの初期化)	x	x	x	x	
Do Section(セクションの実行)	x	x	x	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x	x	x	x
Init Break Section(区切りセクションの初期化) (条件つき)	x	x	x	x	x
End Break Section(区切りセクションの終了)(条件つき)	x	x	x	x	x
End Section(セクションの終了)		x	x	x	x
Suspend Section(セクションの一時停止)(条件つき)	x	x	x	x	x

表セクション

	BC	RV 一括	RV セク ション	TR	TC	PC	PV
Initialize Section(セクションの初期化)							
Advance Section(セクションの進行)	x	x	x			x	x
Before Level Break(レベル区切り前)	x	x	x			x	x
Do Tabular Break(表区切りの実行)	x	x	x	x	x	x	x
Do Section(セクションの実行)	x	x	x	x	x	x	x
Do Balance Auditor(残高監査の実行) (条件つき)	x	x	x			x	x
After Last Object Printed(最後のオブジェクトの 印刷後)	x	x	x	x	x	x	x
Init Break Section(区切りセクションの初期化)	x	x	x	x	x	x	x
End Break Section(区切りセクションの終了)	x	x	x	x	x	x	x
End Section(セクションの終了)	x	x	x			x	x
Suspend Section(セクションの一時停止) (条件つき)	x	x	x	x	x	x	x

レベル区切りヘッダー・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC
Initialize Section(セクションの初期化)		x		
Do Section(セクションの実行)	x	x	x	x
After Last Object Printed(最後のオブジェクトの印刷後)	x	x	x	x
Advance Section(セクションの進行)	x	x	x	x
End Lvl Break Header Section(レベル区切りヘッダー・ セクションの終了)	x	x	x	x
Suspend Section(セクションの一時停止)(条件つき)	x	x	x	x

レベル区切りフッター・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC
Initialize Section (セクションの初期化)		x		
Init Lvl Brk Footer Section (レベル区切りフッター・セクションの初期化)	x	x	x	x
Do Section (セクションの実行)	x	x	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x	x	x
End Lvl Brk Footer Section (レベル区切りフッター・セクションの終了)	x	x	x	x
Suspend Section (セクションの一時停止) (条件つき)	x	x	x	x

ページ・フッター・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Page Footer (ページ・フッターの初期化)	x	x
Do Section (セクションの実行)	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x

レポート・フッター・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Report Footer (レポート・フッターの初期化)	x	x
Do Section (セクションの実行)	x	x
After Last Object Printed (最後のオブジェクトの印刷後)	x	x
End Report Footer (レポート・フッターの終了)	x	x

オブジェクト・レベルのイベント

次の表では、オブジェクト・レベルのイベントで使用可能なオブジェクトを説明します。テーブルは次の略語が使用されます。

- BC – Business View Column (ビジネス・ビュー・カラム)
- BC – Business View Column (ビジネス・ビュー・カラム)
- PV – Previous Variable (前の変数)

レポート・ヘッダー・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Variable (変数の初期化)	x	x
Do Variable (変数の実行)	x	x
End Variable (変数の終了)	x	x
Initialize Constant (固定情報の初期化)	x	x
Do Constant (固定情報の実行)	x	x
End Constant (固定情報の終了)	x	x

ページ・ヘッダー・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Variable (変数の初期化)	x	x
Do Variable (変数の実行)	x	x
End Variable (変数の終了)	x	x
Initialize Constant (固定情報の初期化)	x	x
Do Constant (固定情報の実行)	x	x
End Constant (固定情報の終了)	x	x

グループ・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC	PV
Initialize Column(カラムの初期化)		x			x
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x	x	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x	x	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x	x	x	x
End Column(カラムの終了)		x	x	x	x
Initialize Constant(固定情報の初期化)	x	x	x	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x	x	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x	x	x	x

カラム・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC	PV
Do Column Heading (カラム見出しの実行)	x	x	x	x	x
Initialize Column(カラムの初期化)		x			x
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x	x	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x	x	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x	x	x	x
End Column(カラムの終了)		x	x	x	x
Initialize Constant (固定情報の初期化)	x	x	x	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x	x	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x	x	x	x

表セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC	PV
Do Column Heading(カラム見出しの実行)	x	x	x	x	x
Initialize Column(カラムの初期化)					
Column Inclusion(カラム組込み)	x	x	x	x	x
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x	x	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x	x	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x	x	x	x
End Column(カラムの終了)	x	x		x	x
Initialize Constant(固定情報の初期化)	x	x	x	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x	x	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x	x	x	x

レベル区切りヘッダー・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x	x	x
Initialize Constant(固定情報の初期化)	x	x	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x	x	x

レベル区切りフッター・セクション

	BC	RV 一括	RV セクション	PC
Do Column Heading(カラム見出しの実行)	x	x	x	x
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x	x	x
Initialize Constant(固定情報の初期化)	x	x	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x	x	x

ページ・フッター・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Variable(変数の初期化)	x	x
Do Variable(変数の実行)	x	x
End Variable(変数の終了)	x	x
Initialize Constant(固定情報の初期化)	x	x
Do Constant(固定情報の実行)	x	x
End Constant(固定情報の終了)	x	x

レポート・フッター・セクション

	RV 一括	RV セクション
Initialize Variable (変数の初期化)	x	x
Do Variable (変数の実行)	x	x
End Variable (変数の終了)	x	x
Initialize Constant (固定情報の初期化)	x	x
Do Constant (固定情報の実行)	x	x
End Constant (固定情報の終了)	x	x

セクション・レベルのイベントで使用するオブジェクトの有効期間

セクション・レベルのイベントで使用するオブジェクトの有効期間は次のとおりです。

- グループおよびカラム・セクションの BC/PC
- 表セクションの BC/PC
- ロー・スタイルの表セクションの BC/PC
- RV/PV 有効期間

サンプル・レポート

レポート作成では開始時に特に時間がかかることがあります。ここでは一般的なレポートの作成方法について説明します。内容は次のとおりです。

- レポートの例
- 情報リストの印刷
- 特定フィールドでグループ化した情報リストの印刷
- 合計の印刷および数字データの監査
- レポート設計による仕訳の作成

レポートの例

このセクションでは、レベル区切りセクション、集計、隠し制御などの機能をレポートを使って説明します。各レポートを作成するステップでは、例を参照しながら、内容に応じてレポート設計の機能を説明します。

バッチ・タイプごとの仕訳入力の印刷

この例では、バッチ・タイプ K、V、W、Z による仕訳を表示するレポート、および 1000 から 3000 までのバッチを表示するレポートを説明します。

R560001		J.D. Edwards & Company Listing by Batch Type				2005/06/26 13:38:07	
バッチ・タイプ K		小切手 (自動支払)		1 の 1 ページ			
バッチ		会社	伝票 タイプ	伝票No.	元帳 日付	主科目	金額
2185		00050	FK	5002	2005/06/30	1110	27,500.00~
		00050	AE	5002	2005/06/30	4110	27,500.00
		00050	FK	5003	2005/06/30	1110	394,966.48~
		00050	AE	5003	2005/06/30	4110	394,966.48
		00050	FK	5004	2005/06/30	1110	125,000.00~
		00050	AE	5004	2005/06/30	4110	125,000.00
		K の合計: 6					
バッチ・タイプ V		伝票入力					
1028		00001	AE	1564	2005/06/30	4110	1,500.00~
		00001	FV	1564	2005/06/30	8720	1,500.00
		00001	AE	1565	2005/06/30	4110	5,000.00~
		00001	FV	1565	2005/06/30	8805	5,000.00
		00001	AE	1567	2005/06/30	4110	1,000.00
		00001	FD	1567	2005/06/30	8720	1,000.00~
		00001	AE	1569	2005/04/30	4110	4,500.00~
		00001	FV	1569	2005/04/30	8720	4,500.00
1029		00001	AE	1570	2005/06/31	4110	3,000.00~
		00001	FV	1570	2005/06/31	8720	3,000.00
		00001	AE	1571	2005/06/31	4110	2,700.00~
		00001	FV	1571	2005/06/31	8805	2,700.00
		00001	AE	1572	2005/06/31	4110	5,000.00~
		00001	FV	1572	2005/06/31	8720	5,000.00
1030		00001	AE	1573	2005/04/30	4110	1,200.00~
		00001	FV	1573	2005/04/30	8720	1,200.00
1031		00001	AE	1574	2005/06/30	4110	4,500.00~
		00001	FR	1574	2005/06/30	8360	4,500.00
1032		00001	AE	1575	2005/06/30	4110	1,000.00~
		00001	FL	1575	2005/06/30	8805	1,000.00
		00001	FL	1575	2005/06/30	8799	1,000.00
		00001	FL	1575	2005/06/30	8799	1,000.00~
1033		00001	AE	1576	2005/06/30	4110	1,500.00~
		00001	FL	1576	2005/06/30	8799	1,500.00

▶ カラム・セクションを含むレポートを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。




1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択します。
2. 〈Report Design (レポート設計)〉で、次のパラメータを指定して新しいオブジェクトを作成します。
 - レポート名: R560001
 - 記述: G/L Transaction Detail (G/L 取引明細)
 - システム・コード: 56
3. 次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。
 - Report Header (レポート・ヘッダー)
 - Page Header (ページ・ヘッダー)
 - Columnar (カラム)
4. 次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
5. 次のフィールドに値を入力して[次へ]をクリックします。
 - I'll find a Business View myself (自分でビジネス・ビューを検索する)

6. ビジネス・ビューV0911Gにある次のフィールドに値を入力して、[検索]をクリックして[次へ]を選択します。
 - オブジェクト名
7. 〈Section Layout (セクション・レイアウト)〉で、ビジネス・ビュー・カラムを次の順序で組み込みます。
 - Batch Number (バッチ番号) (ICU)
 - Company (会社) (CO)
 - Document Type (伝票タイプ) (DCT)
 - Document (伝票) (DOC)
 - Date (日付) – For G/L (DGJ)
 - Object Account (主科目) (OBJ)
 - Amount (金額) (AA)
 - Batch Type (バッチ・タイプ) (ICUT)
8. ビジネス・ビュー・カラムを次の順序で組み込んで[次へ]をクリックします。
 - Batch Type (バッチ・タイプ) (ICUT)
 - Batch Number (バッチ番号) (ICU)
 - Company (会社) (CO)
 - Document (伝票) (DOC)
 - Object Account (主科目) (OBJ)
9. バッチ・タイプでレベル区切りを含め、[次へ]をクリックしてください。
10. バッチ・タイプ K、V、W、Z、および 1000 から 3000 までのバッチ番号のみを選択するよう条件を定義し、[次へ]をクリックしてください。最初はリテラルのリスト、2 番目はリテラルの範囲が表示されます。
11. [次へ]をクリックします。

Report Director

Section Data Selection

Define the subset of data your report will use when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that your report only processes certain records.

	Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
	Where	BC Batch Type (F0911)	is equal to	"K,V,W,Z"
	And	BC Batch Number (F0911)	is equal to	"1000-3000"

< Back Next > Cancel Help

12. レポート・パラメータを定義したら、次のオプションを選択してレポート・バージョンを作成して [完了] をクリックします。

- No, I will create a Version of this report later (いいえ、このレポートのバージョンを後で作成します)

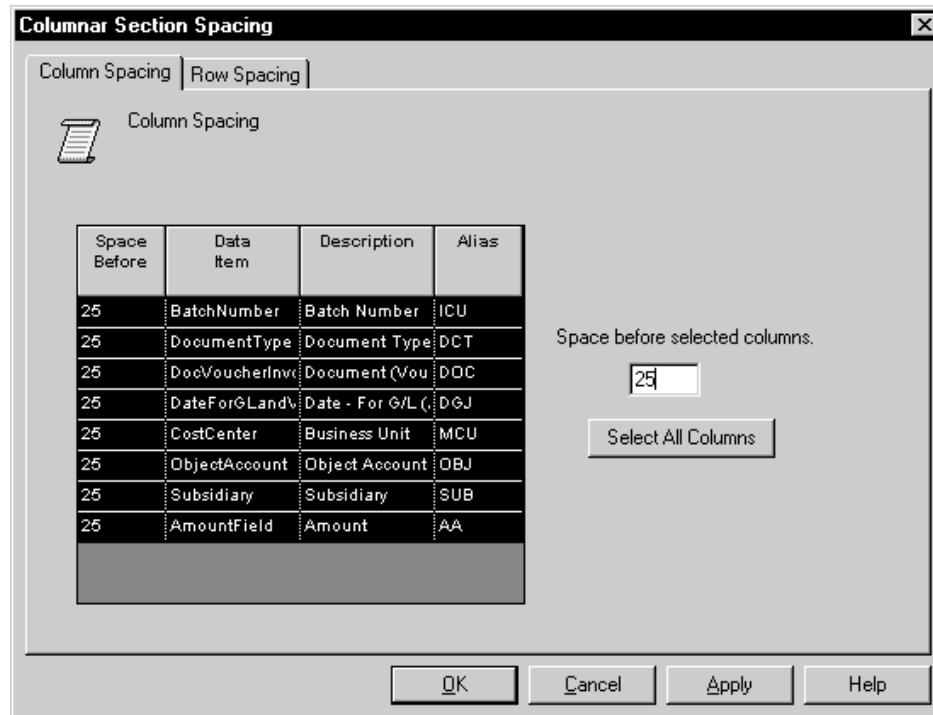
レポートが表示されます。

▶ カラム間隔を変更するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

ここでは、各カラム間に 25 ピクセルの間隔を設定して、ページに均一に表示されるようにします。さらに、最初のカラムの前には 100 スペースのピクセルを追加し、すべてのカラムを右へ移動させます。レポートの本文の左と右にある空白がバランスよく表示されます。

- 〈Report Design〉で、カラム・セクションをクリックします。
- [Layout] メニューから [Spacing] を選択します。



3. <Columnar Section Spacing(カラム・セクション間隔設定)>で、[Select All Columns(すべてのカラムを選択)]を選択します。

フォームのすべてのカラムがハイライトされます。

4. 次のフィールドに“25”を入力して、をクリックします。

- Space before selected columns(選択したカラムの前に入れるスペースの数)

5. [Batch Number(バッチ番号)]をクリックし、[Space before selected columns]フィールドに“100”と入力し、[OK]をクリックします。

- Space before selected columns(選択したカラムの前に入れるスペースの数)

▶ 重複データを表示しないようにするには

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

ここでは、データはバッチ番号によって順序が付けられています。このプロセスでは、[Batch Number(バッチ番号)]が変更された場合に、1つのグループにつき1つのバッチ番号のみ表示する方法を説明します。

1. <Report Design>で、[Batch Number]カラムの変数部分をダブルクリックします。
2. <Column Variable Properties(カラム変数プロパティ)>で、[Advanced(上級)]タブをクリックしてから次のオプションを選択します。

- Visible(可視 = デフォルト値を受け入れます。)
- Print on Change Only(変更時のみ印刷)

3. [OK]をクリックします。

▶ カラム位置揃えを変更するには

ここでは、[Batch Number]、[Document Type(伝票タイプ)]および[G/L Date(元帳日付)]カラムは中央揃えに設定されています。その他のカラムは右揃えにされています。このプロセスでは、カラムの位置揃えを変更する方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、カラム・セクションをクリックして[Columnar(カラム)]タブをクリックします。

セクションの各カラムのスペックが表示されます。

	A	B	C	D	E	F	G	H
Heading 1	Batch	Doc	Document	G/L	Business	Obj	Sub	Amount
Heading 2	Number	Type	Number	Date	Unit	Acct		
Smart Headings								
Name	Batch Number	Document Type	Document Number	G/L Date	Business Unit	Object Account	Subsidiary	Amount
Font	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial
Line Style	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline	Single Underline
Format	99999999	99	99999999	99999999	99999999999999	99999999	99999999	9,999,999,999
Font	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial	Arial
Type	Variable	Variable	Variable	Variable	Variable	Variable	Variable	Variable
Name	Batch Number	Document Type	Document (Voucher, Invoice)	Date - For G/L (and Voucher)	Business Unit	Object Account	Subsidiary	Amount
Data Item Name	DCU	DOC	DOC	DGJ	MCU	OBJ	SUB	AA
Display Length	8	2	8	6	12	6	8	15
Display Decimals	0	0	0	0	0	0	0	2
Justification	Right	Left	Right	Right	Left	Left	Left	Right
Space Before	25	25	25	25	25	25	25	25
Decimal Scaling	No	No	No	No	No	No	No	No
Data Type	Num	String	Number	Date	String	String	String	Number
Line Style	No	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines	No Lines
Visible	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Grand Total	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

2. [Batch Number]カラムで[Justification(位置揃え)]オプションをダブルクリックし、ドロップダウン・メニューから[Center(中央揃え)]をダブルクリックします。
3. 同じ方法で残りのカラムの位置揃えも変更します。
4. [Report(レポート)]タブをクリックしてレポートのレイアウト・ビューに戻ります。

▶ カラム・タイトルを変更するには

ここでは、次のようにカラム・タイトルの 2 つがデフォルト値から変更されています。

- [Do Ty(伝票タイプ)]を[Document Type]に変更する
- [Obj Acct(主科目)]を[Object Account]に変更する

ここでは、カラム・タイトルを変更する方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、カラム・セクションをクリックして[Columnar(カラム)]タブをクリックします。

セクションの各カラムのスペックが表示されます。

2. [Heading 1(見出し 1)]セルで[Do]をダブルクリックして「Document」に変更します。
3. [Heading 2(見出し 2)]セルで[Ty]をダブルクリックして「Type」に変更します。
4. 同じ方法で、[Obj Acct]のタイトルも変更します。
5. [Report(レポート)]タブをクリックしてレポートのレイアウト・ビューに戻ります。

▶ レベル区切りフッター・カラムを合計するには

ここでは、各[Batch Type]ごとにすべての項目が[Amount(金額)]カラムで集計されます。さらに、各バッチ・タイプに表示される合計が示されます。これらの値は、レベル区切りフッターで計算して、表示するようにします。レベル区切りは[Batch Type]に付いているため、このプロセスが可能です。このプロセスでは、レベル区切りフッターの作成とカラムの集合関数の表示方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. カラム・セクションをクリックします。
2. [Section(セクション)]メニューから[Create(作成)]を選択し、[Level Break Footer(レベル区切りフッター)]を選択します。
3. 〈Level Break Footer(レベル区切りフッター)〉で、[Group Section(グループ・セクション)]を選択して[OK]をクリックします。

Level Break

Select the trigger column for this level break.

Changes in the value of the selected column will cause this level break to be executed.

Use the radio buttons below to limit the list of displayed columns.

If the selected column is not already defined as a level break column, it will be added to the list of sorted columns and will be made a level break field.

Show...

☐ ... all columns

☒ ... only existing sort columns

Data Item	Description	Alias	Table Name
BatchType	Batch Type	ICUT	F0911
BatchNumber	Batch Number	ICU	F0911
Company	Company	CO	F0911
DocVoucherInvoice	Document (Voucher)	DOC	F0911
ObjectAccount	Object Account	OBJ	F0911

☒ Display selected column as part of this section.

< Back Next > Cancel Help

4. <Level Break(レベル区切り)>で、[only existing sort columns(既存のソートされたカラムのみ選択)]を選び、[Batch Type]カラムを選択して[次へ]をクリックします。

Aggregations

Define aggregations

Select operations and columns which you wish to aggregate

Operator	Operand
Total of	Amount
Count of	Batch Type

Item display style

☒ Single overline 9999

☐ Double underline 9999

☐ Reprint section at page break

< Back Finish Cancel Help

5. <Aggregations>で、[Operator(演算子)]カラムをダブルクリックし、ドロップダウン・メニューから[Total of(合計)]をダブルクリックします。
6. [Operator(演算子)]カラムをダブルクリックし、ドロップダウン・メニューから[Amount(金額)]をダブルクリックします。
7. [Operator]カラムの次のセルをダブルクリックして、ドロップダウン・メニューの[Count of(数)]をダブルクリックします。
8. [Operator]カラムの次のセルをダブルクリックして、ドロップダウン・メニューの[Document Type(伝票タイプ)]をダブルクリックします。
9. [Single Overline(一重線)]オプションを選んで[完了]をクリックします。

このサンプル・レポートには、数の変数にはオーバー行がありません。行は後でレポート・オブジェクトから削除します。

レポートの表セクションにレベル区切りフッターが表示されます。

▶ レベル区切りフッターを変更するには

このサンプルでは、各レベル区切りのカウント値の後に、Total entries for <batch type>というテキストがあります。さらに、値がゼロの場合は、勘定科目の合計値はブランクではなくゼロとなります。ここでは、レポート・セクションへのテキストの追加、値のイベント・ルールの書き方、および数値フィールドでの数字の表示変更の仕方を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、レベル区切りフッター・セクションをクリックします。

2. [Insert]メニューから[Constant Field]を選択します。

レベル区切りフッター・セクションにカーソルが置かれると、固定情報に位置していることがわかります。

3. カーソルを[Batch Type(バッチ・タイプ)]カラムに置き、固定情報フィールドを設定します。

4. 固定情報をダブルクリックします。

5. 〈Constant Properties(固定情報プロパティ)〉の[Description(記述)]タブで、次のフィールドに“Total entries for”と入力して[OK]をクリックします。

- Variable Name(変数名)

6. レベル区切りフッターで[Amount]カラムの下の合計フィールドをダブルクリックします。

7. 〈Variable Properties(変数プロパティ)〉の[Display(表示)]タブで、次のフィールドに“R”と入力して[OK]をクリックします。

- 編集コード

8. レベル区切りフッターで、[Edit(編集)]メニューから[Batch Type]コントロールの固定情報コンポーネントをクリックし、[Disconnect(切離し)]を選択します。

9. [Batch Type]コントロールで現在切り離されている固定情報コンポーネントを削除します。
変数コンポーネントが残ります。

10. 変数フィールドをダブルクリックします。

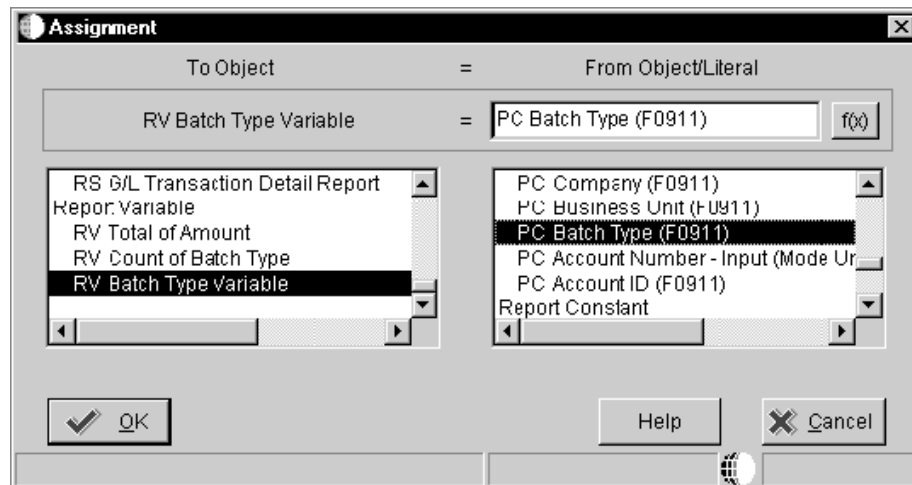
11. 〈Variable Properties〉で、[Advanced(上級)]タブの[Visible(可視)]オプションを選択解除して[OK]をクリックします。

[Batch Type]コントロールは表示させない場合でも、次のステップで作成するイベント・ルールが正しく実行されるよう、レベル区切りフッターに常駐させてください。

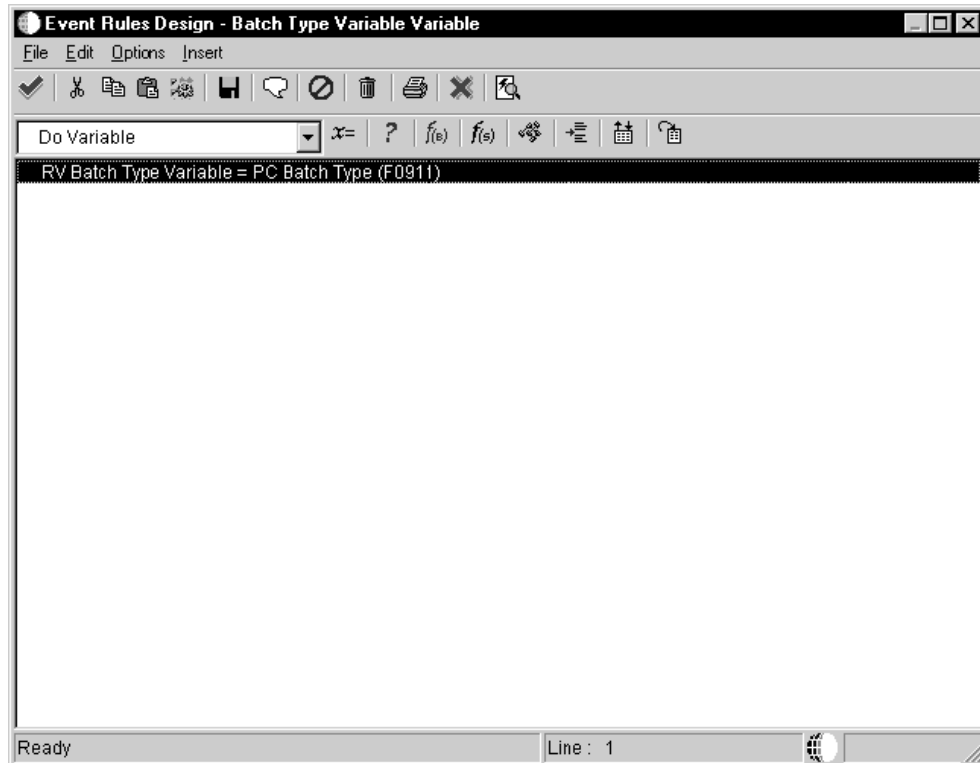
12. [Insert]メニューから[Alpha Variable(英字変数)]を選択します。

レベル区切りフッター・セクションにカーソルが置かれると、固定情報に位置していることがわかります。

13. カーソルを固定情報フィールドの[Total entries for]の右に置き、変数(英字)を設定します。
レポートの端に近いところを処理しており、変数(英字)のデフォルト長が長い場合、固定情報フィールドの右に変数を移動できないことがあります。この場合、固定情報フィールドの下に移動させ、フィールド長を短くした後に、固定情報フィールドの右に移動させてください。
14. 変数(英字)をダブルクリックします。
15. 〈Variable Properties〉で、[Description]タブをクリックして、変数名を「Batch Type Variable (バッチ・タイプ変数)」に変更します。
16. [Display]タブをクリックし、表示長を「1」に変更して、[OK]をクリックします。
必要に応じて変数の位置を変えてください。
17. レポートを保存し、[Edit]メニューで[Event Rules (イベント・ルール)]を選択します。
18. 〈Event Rules Design (イベント・ルール設計)〉で、フォームの一番上のドロップダウン・フィールドから[Do Variable (変数の実行)]を選びます。
19. ツールバーで[Assignment/Expression (割当て/数式)]をクリックします。
20. 〈Assignment (割当て)〉で、[To Object (To オブジェクト)]カラムから[RV Batch Type Variable (RV バッチ・タイプ変数)]を選択し、[From Object/Literal (From オブジェクト/リテラル)]カラムから PC バッチ・タイプを選択します。
21. [OK]をクリックします。



〈Event Rules Design (イベント・ルール設計)〉フォームが表示されます。変数は現在の値ではなく、前の値を設定してください。



22. ツールバーで[Save and Exit (保存して終了)]ボタンをクリックします。

▶ レベル区切りヘッダーを作成してオブジェクトを表示しないようにするには

ここでは、バッチ・タイプとその記述が各レベル区切りの一番上に表示されますが、レポートの本文には表示されません。ここでは、レベル区切りの追加とフォーマットの方法、およびレポート・オブジェクトの非表示の方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、カラム・セクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Create]を選択し、[Level Break Header(レベル区切りヘッダー)]を選択します。
3. 〈Level Break(レベル区切り)〉で、既存のソートされたカラムのみ選択し、[Batch Type]カラムを選択します。
4. 次のフィールドに値を入力して[完了]をクリックします。
 - 選択したカラムがセクションの一部として表示されます。

レポートの表セクションにレベル区切りヘッダーが表示されます。

5. バッチ・タイプの記述テキストを表示するには、[Batch Type]コントロールの変数部分をクリックして、[Edit]メニューから[Associate(関連付け)]を選び、[Description]を選びます。

レベル区切りヘッダー・セクションにカーソルが置かれると、固定情報に位置していることがわかります。

カラムがカラムまたは表セクションに属するように、コントロールはグループ・セクションに属します。(レベル区切りヘッダーは常にグループ・セクションです。)

6. カーソルを[Batch Type]コントロールに置き、固定情報フィールドを設定します。
7. レベル区切りヘッダー・セクションをダブルクリックします。
8. 〈Associated Description Properties(関連記述プロパティ)〉フォームで、[Font/Color(フォント/色)]タブをクリックして、[Font Style(フォント・スタイル)]フィールドから[Bold(太字)]を選び、[Size(サイズ)]フィールドを 10 に指定します。
9. すべてのオブジェクトの設定を適用して、[OK]をクリックします。

レベル区切りヘッダー・セクションのフォントが 10 ポイントの太字に変わります。オーバーラップしないようにフィールドの位置を調整する必要があります。

10. カラム・セクションで、[Batch Type]を選択します。
11. 〈Column Variable Properties(カラム変数プロパティ)〉で、[Advanced(上級)]タブの[Visible(可視)]オプションを選択解除して[OK]をクリックします。

カラムが表示されなくなります。

この操作(ヘッダーまたは変数)には、カラムのコンポーネントのどちらかを選択できます。どちらかのコンポーネントを表示しないようにすると、自動的にもう 1 つのコンポーネントも表示されなくなります。

12. レベル区切りフッター・セクションで、バッチ・タイプ・カウントを表示する変数をダブルクリックします。
13. 〈Variable Properties〉で、[Style(スタイル)]タブをクリックし、[No Lines(行なし)]を選択して[OK]をクリックします。

▶ レポートおよびページ・ヘッダーをテキストに追加するには

このサンプルでは、レポート・ヘッダーには“This report is confidential and proprietary to J.D. Edwards.”と表示されます。さらに、ページ・ヘッダーには、“Listing by Batch Type”と表示されます。ここでは、これらのテキストを追加する方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. レポート・ヘッダー・セクションで、[Insert(挿入)]メニューから[Constant Field(固定情報フィールド)]をクリックします。

レポート・ヘッダー・セクションにカーソルを置くと、カーソルが固定情報を配置できることを示します。

2. カーソルをセクションの中央に置き、クリックして固定情報を配置します。
3. 固定情報をダブルクリックします。
4. 〈Constant Properties (固定情報プロパティ)〉で、[Description] タブをクリックして [Variable Name] フィールドに次のように入力し、[OK] をクリックします。
 - This report is confidential and proprietary to J.D. Edwards.
5. 同じようにしてページ・ヘッダーに固定情報を追加し、“Listing by Batch Type” と名前を付けます。
6. 追加した 2 つの固定情報を [Shift] キーを押したままクリックし、ページ・ヘッダーの中央の 2 つのデフォルト固定情報をクリックします。

2 つの固定情報のどちらかの周辺にはボックスが表示されます。最初に作成した固定情報をクリックしてください。次のステップで設定するフォーマットは、このボックスの中のオブジェクトに対して有効となります。
7. [Layout (レイアウト)] メニューから [Align (整列)] を選択します。
8. 〈Align Objects (オブジェクトの整列)〉で、[Center (中央)] をクリックし、[Current Selection (現在の選択)] をクリックして [OK] をクリックします。

4 つの固定情報フィールドが中央揃えに設定されます。
9. ページ・ヘッダー・セクションで、ページ番号コントロールの変数コンポーネントをクリックし、削除します。
10. [Insert] メニューで [Runtime Field (実行時フィールド)] を選択し、[Page n of Total (合計ページ数)] を選択します。

ページ・ヘッダー・セクションにカーソルが置かれると、カーソルが実行時フィールドを配置できることを示します。
11. カーソルをページ固定情報の右に移動してクリックし、実行時フィールドを配置します。

このフィールドは実際には 3 つのフィールドから構成されていることに注意してください。位置を調整する場合は、3 つのすべてのフィールドを選択しているかどうか確認してください。

作業オーダー・レポートの印刷

この例では、作業オーダーとその状況を表示します。

R560002	J. D. Edwards & Company	02/09/19 11:54:52				
	Work Order Report	Page - 1				
BAD CONNECTIONS IN THEIR A/C						
工種 (Access)	S30	Order Number and Type	451741 SY	R.O. Type and Status	Y 既	資産No.
		数量			1	32021
		数量				701333
Clean and Inspect Spray Heads						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	451178 既	R.O. Type and Status	6 既	資産No.
		数量			1	31181
		数量				61583
工種 (Access)	R30	Order Number and Type	451813 既	R.O. Type and Status	6 既	資産No.
		数量			1	24820
		数量				61583
Emergency Motor Replacement						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	400004 既	R.O. Type and Status	1 既	資産No.
		数量			1	24766
		数量				701288
ENGINE NOT STARTING						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	452541 既	R.O. Type and Status	1 既	資産No.
		数量			1	24900
		数量				701288
Inspect Exhaust Fan Motors						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	451186 既	R.O. Type and Status	6 既	資産No.
		数量			1	31181
		数量				61567
工種 (Access)	R30	Order Number and Type	451792 既	R.O. Type and Status	6 既	資産No.
		数量			1	24820
		数量				61567
Install Safety Switch						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	400012 既	R.O. Type and Status	1 既	資産No.
		数量			1	24820
		数量				701211
LEAKING FLUID						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	452533 既	R.O. Type and Status	1 既	資産No.
		数量			1	24766
		数量				701211
TIGHTENING STROCK OR BUILDING						
工種 (Access)	S30	Order Number and Type	451725 SY	R.O. Type and Status	Y 既	資産No.
		数量			1	32071
		数量				701368
Lubricate Air Compressor						
工種 (Access)	R308	Order Number and Type	451180 既	R.O. Type and Status	6 既	資産No.
		数量			1	31181
		数量				61575

▶ グループ・セクションを含むレポートを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。




1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択します。
2. 〈Create New Report(新規レポートの作成)〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - レポート名: R560002
 - 記述: 作業オーダー・レポート
 - システム・コード: 56
3. 〈Report Director〉で、次のオプションを選択して[次へ]をクリックします。
 - Page Header(ページ・ヘッダー)
 - Group(グループ)
4. 次のオプションを選び、[次へ]をクリックします。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
5. 次のオプションを選び、[次へ]をクリックします。
 - I'll find a Business View myself(自分でビジネス・ビューを検索する)
6. 次のフィールドに“V1201JE”と入力して[検索]をクリックします。
 - オブジェクト名
7. [次へ]をクリックします。

8. <Section Layout (セクション・レイアウト)>で、ビジネス・ビュー・カラムを次の順序で含めてください。
 - Business Unit (ビジネスユニット) (MCU)
 - Document (伝票) (DOCO)
 - Order Type (オーダー・タイプ) (DCTO)
 - Type - W.O. (タイプ - W.O.) (TYP5)
 - Status Code W. O. (状況コード W.O.) (SRST)
 - Asset Item Number (資產品目番号) (NUMB)
 - Unit or Tag Number (計量単位またはタグ番号) (APID)
 - Units - Order/Transaction Quantity (数量 - オーダー/トランザクション数量) (UORG)
 - Item Number - Short (品目番号 - 略式) (ITM)
 - 2nd Item Number (第 2 品目番号) (LITM)
 - Description (記述) (DL01)
9. <Section Data Sequencing>で、ビジネス・ビュー・カラムを次の順序で含め、[次へ]をクリックしてください。
 - Description (記述) (DL01)
 - Document (伝票) (DOCO)
10. 記述のレベル区切りコラムをクリックして、[次へ]をクリックします。
11. 400,000 から 460,000 までの伝票の情報を表示する条件を定義します。

Report Director

Section Data Selection

Define the subset of data your report will use when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that your report only processes certain records.

	Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
	Where	BC Document (Order No, Invoice, etc.)	is equal to	"400000-460000"

< Back Next > Cancel Help

12. レポート・パラメータを定義したら、次のオプションを選択して[完了]をクリックします。

- No, I will create a Version of this report later (いいえ、このレポートのバージョンを後で作成します)

レポートが表示されます。

▶ グループ・セクションのフォーマットを設定するには

このサンプルでは、グループ・セクションのフォーマットはデフォルトのレイアウトとは次のように異なります。

- コントロールの位置
- コントロールの固定情報テキスト
- 行間隔

カラムがカラムまたは表セクションに属するように、コントロールはグループ・セクションに属します。(レベル区切りヘッダーは常にグループ・セクションです。)

ここでは、グループ・セクションを再設定する方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[Layout(レイアウト)]メニューから[Grid Alignment(グリッド配置)]を選択します。
2. 〈Alignment Grid(グリッドの配置)〉で、横の間隔を 20 に設定し、[Grid Alignment(グリッドの配置)]が有効であることを確認して[OK]をクリックします。

グリッド位置合せを有効にした状態で、グリッドに対してレポート・オブジェクトを手作業で揃えます。

3. [Unit Number(ユニット番号)]コントロールをクリックして、ドラッグして外に出します。

注:

グループ・セクションでは、変数とその固定情報を選択して移動することができます。コントロールの中央をクリックすると、両方のフィールドが同時に選択されます。

4. [Order Number(オーダー番号)]コントロールを[ビジネスユニット]コントロールの右側に移動します。
5. オーダー番号コントロールの固定情報フィールドをダブルクリックします。
6. 〈Constant Properties〉で、次のオプションを選択します。
 - Override Name(名前の一時変更)
7. [Variable Name]フィールドに[Order Number and Type(オーダー番号とタイプ)]を入力して[OK]をクリックします。

[Order Number(オーダー番号)]コントロールの変数フィールドを移動して重ならないようにすることもできます。

8. [Order Type(オーダー・タイプ)]コントロールで固定情報をクリックし、[Edit]メニューから[Disconnect(切離し)]を選択します。
9. [Order Type]固定情報を削除し、残りの変数を[Order Number and Type(オーダー番号およびタイプ)]コントロールの右に移動します。
変数との固定情報を切り離すと、変数を削除せずに固定情報を削除することができます。
10. [Type and Status(タイプと状況)]コントロールでこのプロセスを繰り返し、[Order Number and Type]コントロールの右に移動して Type コントロールでコントロール名を“W.O. Type and Status(作業オーダーおよび状況)”に変更します。
11. [Asset Number(資産番号)]コントロールを[W.O. Type and Status]コントロールの右側に移動します。
12. [Unit Number(ユニット番号)]コントロールを[Order Number and Type]コントロールの下に移動します。
13. [Quantity(数量)]コントロールを[W.O. Type and Status]コントロールの右側に移動します。
14. [Item Number(品目番号)]コントロールを[Asset Number(資産番号)]コントロールの下に移動し、“Item(品目)”に変更します。
15. [2nd Item(第 2 品目)]コントロールの固定情報フィールドを切り離して削除し、[Item(品目)]コントロールの右側に移動します。
16. [Insert]メニューから[Constant Field]を選択します。
グループ・セクションにカーソルが置かれると、固定情報に位置していることがわかります。
17. 固定情報にカーソルを置き、新しいコントロールを[Unit Number]コントロールに移動させます。
18. 固定情報コントロールをダブルクリックします。
19. <Constant Properties>で、[Description]フィールドをクリックし、テキストから[Variable Name]を削除し、スペースを 5 つ入力して[OK]をクリックします。
空の固定情報フィールドによって、各データ・セットの間にスペースが追加されます。

▶ レベル区切りヘッダーを作成してオブジェクトを表示しないようにするには

ここでは、記述タイプが各レベル区切りの一番上に表示されますが、レポートの本文には表示されません。ここでは、レベル区切りの追加とフォーマットの方法、およびレポート・オブジェクトの非表示の方法を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

1. <Report Design>で、カラム・セクションをクリックします。
2. [Section]メニューから[Create]を選択し、[Level Break Header(レベル区切りヘッダー)]を選択します。
3. <Level Break>で、[only existing sort columns]を選び、[Description]カラムを選択します。
4. セクションで選択したカラムを表示するよう選択し、[完了]をクリックします。

レポートの表セクションにレベル区切りヘッダーが表示されます。

5. [Description]フィールドの固定情報を切り離して削除します。
6. [Description]コントロールをレベル区切りヘッダーの左上に移動させ、コントロールをダブルクリックします。
7. <Variable Properties>フォームで、[Font/Color(フォント/色)]タブをクリックして、[Font Style(フォント・スタイル)]フィールドから[Bold(太字)]を選び、[Size(サイズ)]フィールドを10に指定します。
8. [Style]タブをクリックして[No Lines]をクリックし、一重線の長方形を選びます。
9. [Display]タブをクリックし、表示長を"0"に変更して[OK]をクリックします。
10. カラム・セクションで、[Description]コントロールの変数フィールドをダブルクリックします。
11. <Variable Properties>で、[Advanced(上級)]タブの[Visible(可視)]オプションを選択解除して[OK]をクリックします。

コントロールが表示されなくなります。

会社ごとの未処理残高の印刷

ここでは、未処理の金額を会社ごとに表示するレポートを説明します。すべての会社の未決済金額の合計は、レポートの終りに表示されます。

R5501		J. D. Edwards & Company			2003/06/27 13:00:32	
		Purchase Order Detail Report			Page ~ 1	
記述	オーダー タイプ	住所 No.	未決済金額	見附		
Bike Rack ~ Truck Mount	OP	4343	32.10	No approval required		
Cro-Moly Frame, Red	OP	4343	5,000.00	General Manager approval		
Cro-Moly Frame, Two Tons	OP	4344	30,000.00	General Manager approval		
Cro-Moly Frame, Green	OP	4344	75,000.00	General Manager approval		
Chain, 21d	OP	4343	650.00	Purchase Manager approval		
Suit	OP	4343	1,305.40	General Manager approval		
Mountain Bike, Red	OP	4343	614,916.00	General Manager approval		
Tire Pump	OP	4343	380.00	No approval required		
Touring Bike, Green	OP	6031	15,500.00	General Manager approval		
Commuter Bike	OP	6031	9,632.00	General Manager approval		
Lid	OP	4343	160.00	No approval required		
Bottle	OP	4343	450.00	No approval required		
Bike Accessory Kit	OP	4344	10,000.00	General Manager approval		
Helmet	OP	4343	1,197.92	General Manager approval		
Helmet ~ El Flow	OP	4343	1,800.00	General Manager approval		
Tire Repair Kit	OP	4370	625.00	Purchase Manager approval		
Clothing Pannier ~ Black	OP	4341	1,192.50	General Manager approval		
Cyclometer	OP	4343	12,000.00	General Manager approval		
Cyclometer	OP		780,730.92	General Manager approval		

▶ 表セクションを含むレポートを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[File]メニューから[New]を選択して新しいレポート・オブジェクトを作成します。
2. 〈Create New Report(新規レポートの作成)〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - レポート名: R5501
 - 記述: 購買オーダー明細レポート
 - システム・コード: 55
3. 〈Report Director〉で、次のオプションを選択して[次へ]をクリックします。
 - Page Header(ページ・ヘッダー)
 - Tabular(表)
4. 次のオプションを選び、[次へ]をクリックします。
 - 下に示すデフォルト情報がページ・ヘッダー・セクションに自動的に追加されます。
5. 次のオプションを選び、[次へ]をクリックします。
 - I'll find a Business View myself(自分でビジネス・ビューを検索する)
6. 次のフィールドに"V4311A"と入力して[検索]をクリックします。
 - オブジェクト名
7. [次へ]をクリックします。
8. 〈Section Layout(セクション・レイアウト)〉で、ビジネス・ビュー・カラムを次の順序で含めてください。
 - Order Type(オーダー・タイプ)(DCTO)
 - Address Number(住所番号)(AN8)
 - Amount Open(金額)(AOPN)
9. 〈Section Data Sequencing〉で、次のビジネス・ビュー・カラムに基づいてデータを次の順序で組み込み[次へ]をクリックします。
 - Order Company(オーダー会社)(KCOO)
 - 2nd Item Number(第2品目番号)(LITM)
10. 〈Define Sort Properties〉で、オーダー会社および第2品目番号のレベル区切りカラムをクリックして、[次へ]をクリックします。

レベル区切りは、表レポートの外観に重要な影響を与えます。一番下のレベル区切りはレポートの詳細を定義します。上のレベル区切りは小計を定義します。

11. AND 演算子を使って各条件を結合し、次のデータ選択を定義します。

- Amount Open is greater than 0(未決済金額が 0 より大きい)
- Order Type is equal to OP(オーダー・タイプが OP に等しい)
- Status Code - Next is not equal to 999([Status Code - Next]が 999 でない)
- Line Type is equal to S(行タイプが S に等しい)

Report Director

Section Data Selection

Define the subset of data your report will use when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that your report only processes certain records.

Icons: [Add], [Delete], [Move]

	Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
	Where	BC Amount - Open (F4311)	is greater than	<Zero>
	And	BC Order Type (F4311)	is equal to	"OP"
	And	BC Status Code - Next (F4311)	is not equal to	"999"
	And	BC Line Type (F4311)	is equal to	"S"

Buttons: < Back, Next >, Cancel, Help

12. レポート・パラメータを定義したら、次のオプションを選択して[完了]をクリックします。

- No, I will create a Version of this report later(いいえ、このレポートのバージョンを後で作成します)

レポートが表示されます。

▶ カラム名を変更するには

サンプル・レポートには住所番号が含まれていませんが、[仕入先番号]カラムが含まれています。実際にはデータは住所番号ですが、明確にするために名前が変更されています。この手順では、カラム名の変更の仕方を説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[Address(住所番号)]カラム見出しをダブルクリックします。
2. 〈Column Heading Properties(カラム見出しプロパティ)〉で、[Variable Name]フィールドのテキストを“仕入先番号”に変更します。
3. [Heading 1(見出し 1)]フィールドのテキストを“仕入先”に変更します。
4. [Heading 2(見出し 2)]フィールドのテキストを“番号”に変更します。
5. [OK]をクリックします。

▶ 承認カラムを追加するには

このサンプルでは、管理者の承認が必要かどうかを表すカラムを含むレポートを説明します。カラムの内容はイベント・ルールによって割り当てられます。このレポートにカラムを含める最初のステップは、カラムの作成から始めます。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[Amount Open(未決済金額)]カラムをクリックします。
2. [Column]メニューから[Create]-[Alpha Variable(変数/英字)]を選択します。
[Amount Open]の右側に新しいカラムが追加されます。
3. 新しいカラム見出しをダブルクリックします。
4. 〈Column Heading Properties(カラム見出しプロパティ)〉で[Variable Name]および[Heading 1(見出し 1)]のテキストを“Approval”に変更します。
5. [Heading 2(見出し 2)]フィールドのテキストを削除して、[OK]をクリックします。
6. [Approval(承認)]カラムの変数部分(見出しの下本文)をダブルクリックします。
7. 〈Column Variable Properties〉で、[Variable Name]のテキストを“Approval”に変更して[OK]をクリックします。

J.D. Edwards では、後のプロセスでカラムが識別しやすいように、両方のカラム・コンポーネントの変数名を変更することをお勧めします。

▶ カラムに合計を表示しないようにするには

表セクションは自動的にすべてのカラムを合計します。数値でないフィールドには、データ辞書により合計を表示しないよう指示されない限り、最後のビジネス・ビューが表示されます。ここでは、[Amount]カラムで合計値のみ表示します。ここでは、カラムに合計値を表示しない方法について説明します。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、[Description]カラムの変数部分(見出しの下本文)をダブルクリックします。
2. 〈Column Variable Properties(カラム変数プロパティ)〉の[Advanced(上級)]タブで、次のオプションを選んで[OK]をクリックします。
 - Visible(可視 = デフォルト値を受け入れます。)
 - Suppress At Totals(合計の非表示)

3. このようにして、[Amount Open]カラム以外のすべてのカラムの合計を印刷しないようにすることができます。

▶ イベント・ルールを定義して追加するには

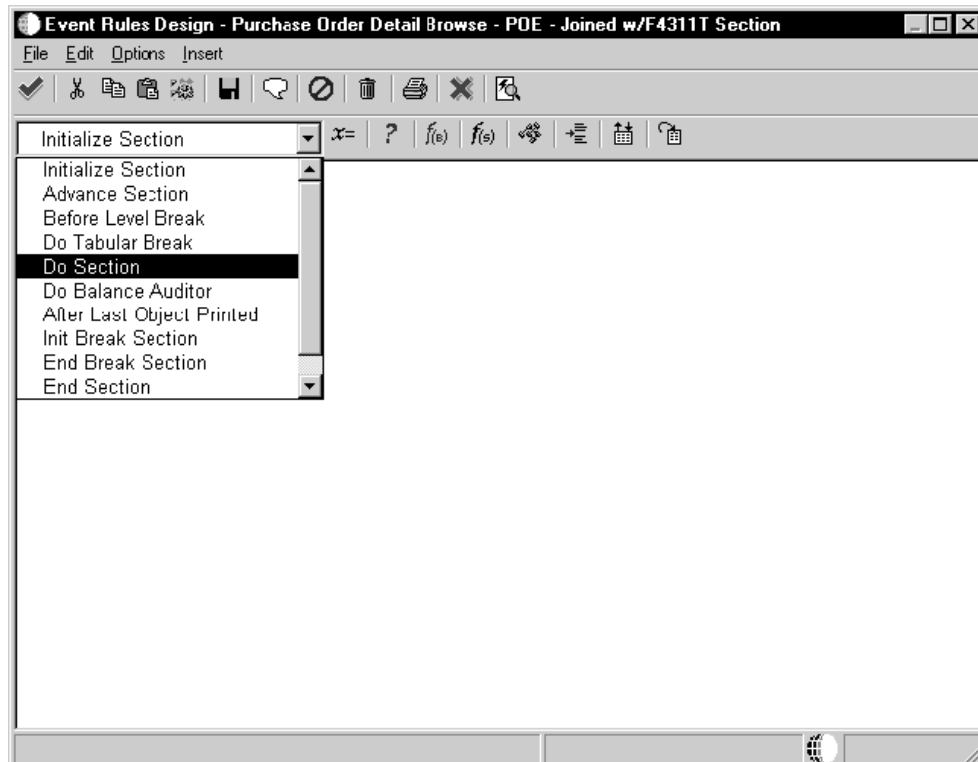
このサンプルでは、未決済金額が 1000 を超えた場合は[Approval]カラムが General Manager approval(一般管理者承認)を、500 から 999 の間の場合は Purchase Manager approval(購買管理者承認)を、500 より少ない場合は No approval required(承認の不要)を読み取ります。このプロセスは、各レポート行に適切なテキストを表示するイベント・ルールの定義および添付方法を示しています。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、表セクションをクリックします。
2. [Section(セクション)]メニューから[Text Variables(テキスト変数)]を選択します。
3. 〈Text Variables(テキスト変数)〉で、このプロセスの始めに示した 3 つのフレーズを入力して[OK]をクリックします。

各フレーズの間に[Add(追加)]をクリックしてカーソルを次のグリッド行に移動してください。

4. [File]メニューから[Save(保存)]を選択します。
5. 表セクションをクリックしてセクションのカラムがどれもアクティブでないことを確認し、[Edit]-[Event Rules]を選びます。

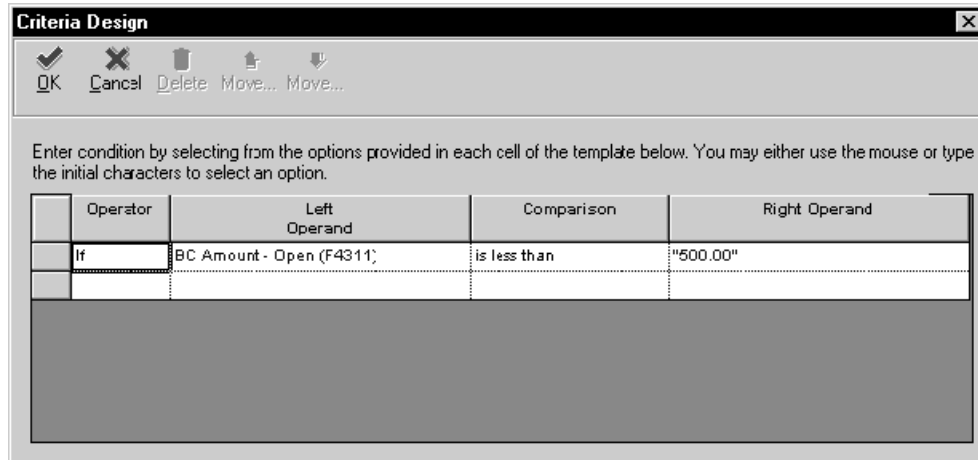


6. <Event Rules Design>で、イベント・リストから[Do Section]イベントを選択します。

各レポートのローがレポートに表示される前に、次のステップで作成するロジックを各レポートに適用する必要があります。Do Section イベントは、各レポートが取り込まれた後すぐに実行されますが、レポートに書き込まれる前に実行されます。

7. [If/While] ボタンをクリックします。

タイトルを確認するには、ボタン上でカーソルを置いたままにします。



The Criteria Design dialog box contains a table for defining conditions. The table has four columns: Operator, Left Operand, Comparison, and Right Operand. The first row is populated with 'If', 'BC Amount - Open (F4311)', 'is less than', and '"500.00"'. Below the table is a large empty text area.

Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
If	BC Amount - Open (F4311)	is less than	"500.00"

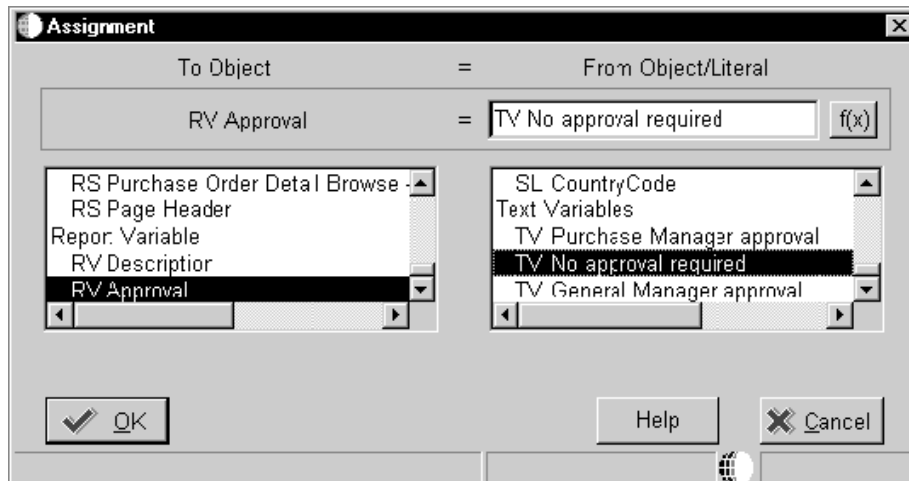
8. <Criteria Design(条件設定)>で、次のイベント・ルールを追加し、[OK]をクリックします。

- If BC Amount – Open is less than 500

BC は Business Column (ビジネス・カラム) の略です。

ルールは、If/Then フレームワークで<Evenr Rules Design>フォームに表示されます。

9. [If BC Amout – Open is less than 500] の行をクリックして、[Assignment/Expression] ボタンをクリックします。



The Assignment dialog box shows the assignment of a value to a variable. The 'To Object' field contains 'RV Approval'. The 'From Object/Literal' field contains 'TV No approval required'. Below these fields are two lists of objects. The left list includes 'RS Purchase Order Detail Browse', 'RS Page Header', 'Repor. Variable', 'RV Descriptor', and 'RV Approval'. The right list includes 'SL CountryCode', 'Text Variables', 'TV Purchase Manager approval', 'TV No approval required', and 'TV General Manager approval'. The 'TV No approval required' item is selected in the right list. At the bottom are buttons for 'OK', 'Help', and 'Cancel'.

10. <Assignment(割当て)>で、[TO Object(To オブジェクト)]リストから[RV Approval(RV 承認)]を選択します。

11. [From Object/Literal(From オブジェクト/リテラル)]リストで[TV No manager approval(TV 管理者承認不要)]を選びます。

RV は Report Variable(レポート変数)の略、TV は Text Variable(テキスト変数)の略です。
RC Approval(RC は Report Constant/レポート固定情報)ではなく RV Approval を選択していることを確認してください。固定情報はカラムの見出し部分、変数はカラムの本文部分を表します。

12. [OK]をクリックします。

該当する Then 条件文がイベント・ルールに追加されます。

13. Else 行をクリックして[If/While]ボタンをクリックします。

14. <Criteria Design(条件設定)>で、次のイベント・ルールを追加し、[OK]をクリックします。

- If BC Amount – Open is greater than or equal to 500
- And BC Amount – Open is less than 1000

ルールは、If/Then フレームワークで<Evenr Rules Design>フォームに表示されます。

15. 作成した行をクリックし、[Assignment/Expression]ボタンをクリックします。

16. <Assignment(割当て)>で、[To Object list(To オブジェクト・リスト)]から[RV Approval(RV 承認)]を選択します。

17. [From Object/Literal(From オブジェクト/リテラル)]リストで[TV Purchase manager approval(TV 購買の管理者承認)]を選び、[OK]をクリックします。

該当する Then 条件文がイベント・ルールに追加されます。

18. Else 行をクリックして[If/While]ボタンをクリックします。

19. 次のイベント・ルールを追加し、[OK]をクリックします。

- If BC Amount – Open is greater than or equal to 1000

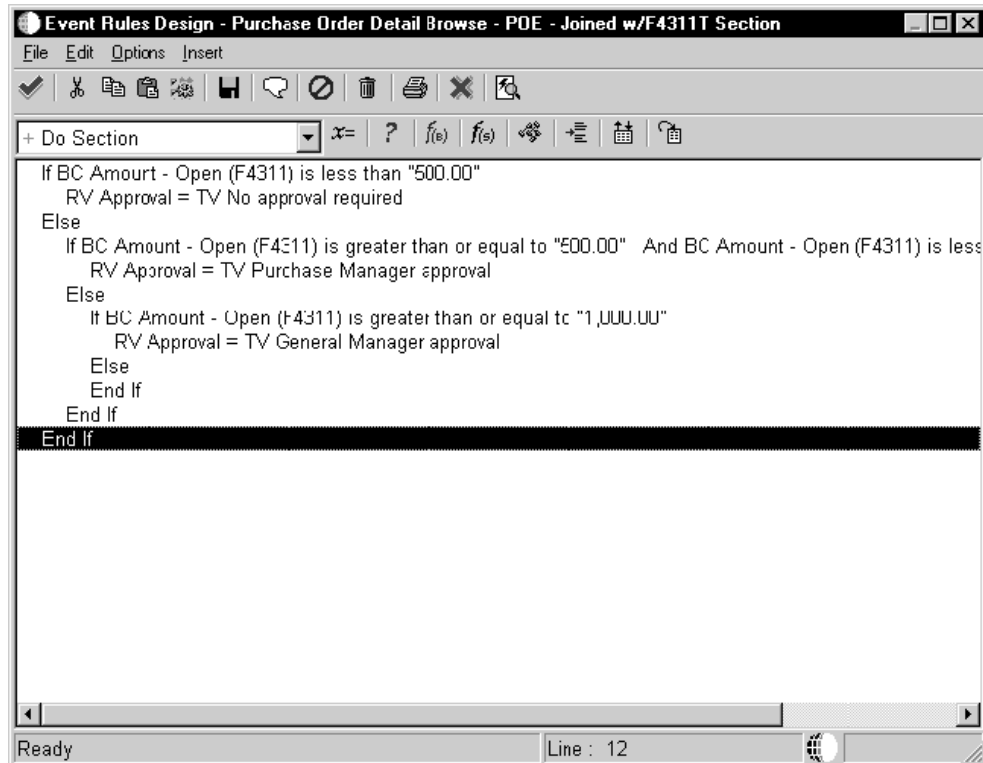
ルールは、If/Then フレームワークで<Evenr Rules Design>フォームに表示されます。

20. 作成した行をクリックし、[Assignment/Expression]ボタンをクリックします。

21. [To Object]リストから[RV Approval]を選択します。

22. [From Object/Literal]リストで[TV General manager approval(TV 一般管理者承認)]を選びます。

該当する Then 条件文がイベント・ルールに追加されます。



23. ツールバーで[Save and Exit (保存して終了)]ボタンをクリックします。

情報リストの印刷

情報リストを表示するために作成するレポート・タイプには次のものがあります。

- 会社に関するビジネスユニットと記述
- 在庫タイプ別の在庫品目リスト
- カード・ファイル・フォーマットによる住所録情報
- 従業員リスト

▶ ある会社の全ビジネスユニットと記述を印刷するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、「会社/ビジネスユニット/記述リスト」という名称のレポート・オブジェクトを作成します。
2. グループ・セクションとカラム・セクションのどちらを作成するか選択します。

グループ・セクションを使用すると、フィールドを再配置できるので便利です。これにより、レポートに表示される時点のフィールド位置を制御することができます。カラム・セクションを選択した場合、データ・フィールドの上に位置するカラム見出しのフォーマットを変更することはできません。

3. [V0006D – Business Unit Setup(ビジネスユニットの設定)]ビジネス・ビューを添付します。
4. 次のフィールドをレポートに組み込むよう選択します。
 - Company(会社)
 - Business Unit(ビジネスユニット)
 - Description 01(記述 01)
5. 次のフィールドでレポートの順序を設定します。
 - 会社
 - Business Unit(ビジネスユニット)
6. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。たとえば、会社 00050 より下の番号を持つ会社すべてに対するビジネスユニットを表示する場合、データ選択は “Where Company is less than 00050” となります。
7. 〈Report Design〉で、外観を整えるためにレポートのフォーマットを設定します。

▶ **在庫タイプ別に在庫品目のリストを印刷するには**

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、「在庫品目」リストという名前のレポート・オブジェクトを作成します。
2. グループ・セクションとカラム・セクションのどちらを作成するか選択します。
3. [V4101A – Item Master Browse(品目マスターの表示)]ビジネス・ビューを添付します。
4. 次のフィールドをレポートに組み込むよう選択します。
 - Stocking Type(在庫タイプ)
 - Description(記述)
 - 2nd Item Number(第 2 品目番号)
5. 次のフィールドでレポートの順序を設定します。
 - Stocking Type(在庫タイプ)
 - Description(記述)
6. これら 2 つのフィールドを昇順にソートします。
7. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。

▶ **カード・ファイル・フォーマットで住所録情報を印刷するには**

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、「住所録情報」という名称のレポート・オブジェクトを作成します。
2. グループ・セクションを作成します。
3. [V0101B – Address Book One-Line report(住所録一行レポート)]ビジネス・ビューを添付します。

4. 次のフィールドをレポートに組み込むよう選択します。
 - Name - Alpha(名称)
 - Address Line 1(住所行 1)
 - City(市)
 - State(州/都道府県)
 - Postal Code(郵便番号)
5. 次のフィールドでレポートに番号を付けます。
 - Name - Alpha(名称)
6. このフィールドを昇順でソートします。
7. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。
8. <Report Design>で、最初の行には[Name(名称)]、2 行目に[Address(住所)]、3 行目に[City(市)]、[State(都道府県)]、[Postal Code(郵便番号)]が印刷されるように配置します。
9. [Name(名称)]、[Address(住所)]、[City(市)]、[State(都道府県)]、[Postal Code(郵便番号)]固定情報をその変数から切り離してから削除し、レポートに変数情報のみを印刷します。

▶ 従業員リストを印刷するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

1. <Report Design>で、「従業員リスト情報」という名称のレポート・オブジェクトを作成します。
2. カラム・セクションを作成します。
3. [V060116A - Employee Master(従業員マスター)]ビジネス・ビューを添付します。
4. 次のフィールドをレポートに組み込むよう選択します。
 - Name - Alpha(名称)
 - Business Unit - Home(所属ビジネスユニット)
 - Pay Class (H/S/P)(支払クラス)
 - Date - Original Employment(雇用開始日付)
 - Rate - Salary, Annual(年棒)
5. 次のフィールドでレポートの順序を設定します。
 - Business Unit - Home(所属ビジネスユニット)
 - Name - Alpha(名称)
6. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。たとえば、レポートに全従業員のリストを表示するには、データ選択は“Where Search Type is equal to E”となります。

特定フィールドでグループ化した情報リストの印刷

特定のフィールド別に情報リストを表示するレポート・タイプの例としては、次のようなものがあります。

- 在庫タイプ別の在庫品目リスト
- 会社あたりのビジネスユニット数の集計

▶ 在庫タイプ別に在庫品目のリストをグループ化するには

[在庫タイプ]のような特定フィールドによって情報をグループ化する場合、レポート上の情報リストを印刷するとわかりやすくなる場合があります。グループまたはカラム・セクションにレベル区切りヘッダーを追加すると、特定フィールドによって情報をグループ化できるようになります。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で〈Inventory Item List(在庫品目リスト)〉という名称のレポートを開きます。
2. レベル区切りヘッダーを添付する詳細セクションをクリックします。
3. [Section]メニューから[Create]を選択し、[Level Break Header(レベル区切りヘッダー)]を選択します。

[Section]メニューで[Level Break Header]の選択項目がグレー表示されている場合は、詳細セクションをクリックしなかったことを意味します。

4. 〈Level Break〉で、[Show(表示)]見出しから次のオプションを選択します。
 - only existing sort columns(既存のソート・カラムのみ)このオプションを選択すると、詳細セクションを作成する際にデータ順序設定フィールドとして選択したフィールドが表示されます。
5. [Stocking Type(在庫タイプ)]フィールドを選択して、レベル区切りフィールドであることを示します。
レベル区切りヘッダーのセクション・プロパティを修正することにより、別のフィールドをレベル区切りフィールドとして指定できます。
6. [Display selected column as part of this section(選択したカラムをこのセクションの一部として表示する)]オプションをオンにします。
7. [完了]をクリックします。
8. レベル区切りヘッダー・フィールドの変数部分をクリックします。
9. [Edit]メニューから[Associate] - [Description]を選びます。
カーソルが変わり、レベル区切りヘッダーに記述を追加できるようになります。
10. レベル区切りヘッダー内の任意の位置に[Description]フィールドを置きます。他のフィールドと同様、このフィールドも新しい位置にドラッグできます。
11. このフィールドのプロパティを変更するには、フィールドをダブルクリックしてください。

12. 〈Associated Description Properties (関連記述プロパティ)〉フォームの詳細セクションで、レベル区切りフィールドの変数またはカラム変数部分をクリックします。
13. 〈Variable Properties (変数プロパティ)〉または〈Column Variable Properties (カラム変数プロパティ)〉で、[Visible (可視)] オプションをオフにします。
このフィールドを再表示させるには、[Visible] オプションをオンにしてください。

参照

次のトピックを参照してください。

- レベル区切りについては「レベル区切りヘッダーを作成するには」
- レベル区切りヘッダーに対する記述フィールドの追加については「記述とレベル区切りヘッダーを関連付けるには」
- レベル区切りフィールドが両方のセクションに表示されないようにする方法については「詳細セクションのレベル区切りフィールドを非表示にするには」

▶ 会社あたりのビジネスユニット数を合計するには

重要な情報を提供するためにリストを集計することができれば、情報リストを印刷することに意味がでできます。たとえば、会社のすべてのビジネスユニットやその記述を印刷したり、特定の会社に対するビジネスユニット数を合計する場合があります。レベル区切りフッターをグループまたはカラム・セクションに追加すると、このような操作ができます。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、「会社/ビジネスユニット/記述リスト」という名前レポートを開きます。
2. レベル区切りフッターを添付する詳細セクションをクリックします。
3. [Section (セクション)] メニューから [Create (作成)] を選択し、[Level Break Footer (レベル区切りフッター)] を選択します。

[Section] メニューで [Level Break Footer] の選択項目がグレー表示されている場合は、詳細セクションをクリックしなかったことを意味します。

4. 〈Level Break Footer (レベル区切りフッター)〉で、[Level Break Footer] で、次のオプションをクリックしてから、[OK] をクリックします。

- Group Section (グループ・セクション)

5. 〈Level Break〉で、[Show (表示)] 見出しから次のオプションを選択します。

- only existing sort columns (既存のソート・カラムのみ)

このオプションを選択すると、詳細セクションを作成する際にデータ順序設定フィールドとして選択したフィールドが表示されます。

6. [Company (会社)] フィールドを選択して、レベル区切りフィールドであることを示します。

レベル区切りフッターのセクション・プロパティを修正することにより、別のフィールドをレベル区切りフィールドとして指定できます。

7. [Display selected column as part of this section (選択したカラムをこのセクションの一部として表示する)] オプションがオフになっていることを確認します。

8. [次へ]をクリックします。

集計オブジェクトとは、他のフィールドにある値の計算結果を含むオブジェクトのことです。
たとえば、特定の会社に対するビジネスユニットの総数を調べるときなどに使用します。

Operator	Operand
Average of	
Count of	
Maximum of	
Minimum of	
Total of	

Item display style

☐ Single overline 9999

☐ Double underline 9999

☐ Reprint section at page break

< Back Finish Cancel Help

9. <Aggregations>で、[Operator]に対して次のオプションを選択します。
- Count of(数)
10. [Operand]に対して次のオプションを選択します。
- Business Unit(ビジネスユニット)
11. [Item display style(項目表示スタイル)]見出しの下にあるオプションから 1 つ選んでクリックします。
- Single overline(一重上線)
 - Double underline(二重下線)
12. 必要に応じて、[Reprint section at page break(ページ区切りでセクションを再印刷する)]をクリックします。
- このオプションを選択すると、前のページの最終行が次のページの 1 行目として印刷されます。
13. [完了]をクリックします。

後になって、レベル区切りフッターをクリックして[Section]メニューから[Add Aggregates(集計を追加)]を選択することにより、集計オブジェクトを修正することができます。

14. レベル区切りフッター・セクションをクリックします。
15. [Insert]メニューから[Constant Field]を選択します。
16. オブジェクトを表示するレベル区切りフッターをクリックして、固定情報フィールドを挿入します。
17. 固定情報をダブルクリックします。
18. <Constant Properties(固定情報)>フォームで、[Name]フィールドをわかりやすい名称に変更します。

参照

- レポートに対するレベル区切りフッターの追加については「レベル区切りフッターを作成するには」
- 記述を加えてレベル区切りフッターをわかりやすくする方法については「レベル区切りフッターに記述を挿入するには」

合計の印刷および数字データの監査

販売コミッション構造を会社で採用するため参考とするレポートが必要だとします。このレポートには、すべての現行受注オーダーに対して支払われる販売コミッションの見積りを表示する必要があります。標準コミッションは、合計価格の 5%です。大口の受注に対しては、さらに 1%のボーナスが支払われます。次に示す図は、表セクションを使用して合計を表示して数字データを監査したレポートの一例です。

▶ 合計を印刷し、数字データを監査するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、<レポート・ライター>メニュー(GH9111)から<レポート設計ツール>を選択します。

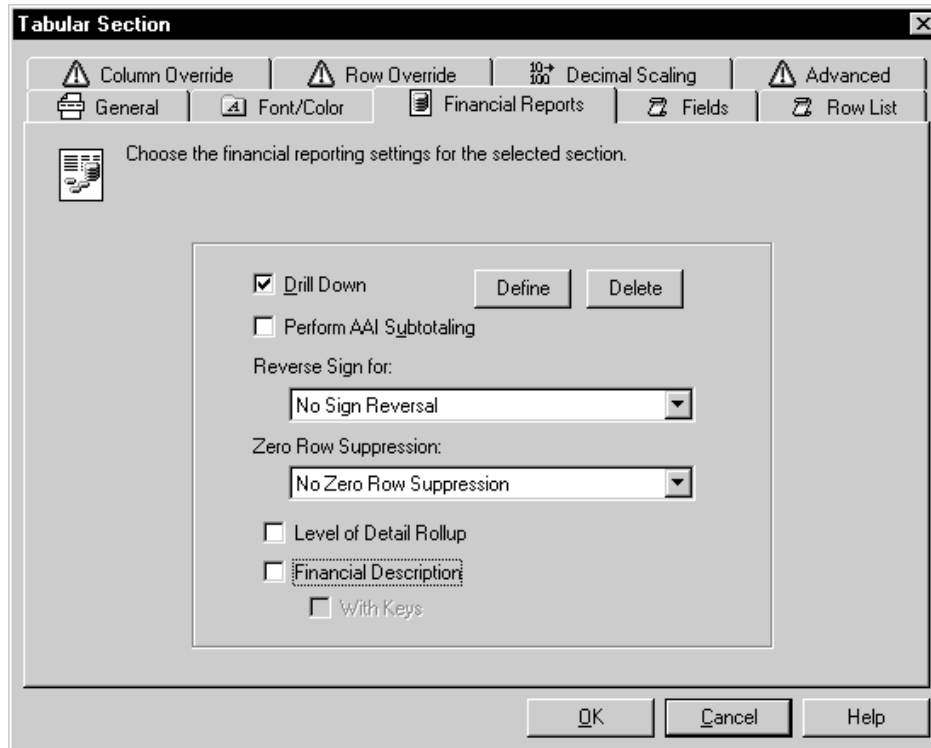
1. <Report Design>で、「受注オーダー明細」という名前のレポート・オブジェクトを作成します。
2. 表セクションの作成を選択します。

表セクションでは、数値を持つすべてのフィールドに対して自動的に合計が計算されます。合計に意味がない場合、変数の上級オプションを使用して合計を非表示にする場合もあります。表セクションでは、合計計算に加えて、アプリケーションを呼び出して、レポート上の問題データのソースを表示することができます。

3. [V4201C - Sales Order Header to Sales Order Detail - All(受注オーダー見出しから明細 - すべて)]ビジネス・ビューを添付します。
4. 次のフィールドをレポートに組み込むよう選択します。

- [Description]フィールド(自動的に追加)
レベル区切り項目として選択した各フィールドの記述を印刷します。
- Date - Order/Transaction(オーダー/取引日付)
- Quantity Shipped(出荷数量)
- Amount - Extended Price(合計価格)

5. 次のフィールドでレポートの順序を設定し、レベル区切り項目として選択します。
 - Original Order Number(当初オーダー番号)
 - 2nd Item Number(第 2 品目番号)
6. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。たとえば、カラム・セクションで使用される各フィールドに「greater than Zero(ゼロより大きい)」という条件を適用します。
7. 〈Report Design〉で、レポートに 3 つの[Numeric Variables(数字変数)]を挿入し、これから行う計算を表示するカラムを作成します。
8. カラムに次のように名前を付けます。
 - コミッション 5%
 - 大口受注 1%ボーナス
 - コミッション合計
9. 5%のコミッションと、大口受注 1%ボーナス、コミッション合計を定義するためのイベント・ルールを添付します。
10. ドリルダウン機能を使用可能にする表レポート・セクションに焦点を当てます。
11. 次のいずれかを実行します。
 - レポート・セクションをダブルクリックする
 - [Section]メニューから[Section Properties]を選択します。



12. 〈Tabular Section〉で、[Financial(財務)]タブまたはディレクタ・テンプレートと関連したタブ ([Financial Report(財務レポート)]など)をクリックします。
13. 次の項目をクリックしてから[Define(定義)]をクリックします。
 - Drill Down(ドリルダウン)
14. 〈アプリケーションの処理〉で[検索]をクリックします。

このフォームには、使用可能なアプリケーションがすべてリストされます。QBE に検索条件を入力すると、検索対象を絞ることができます。
15. アプリケーションを選んで[選択]をクリックします。

レポートから呼び出されるアプリケーションを選択します。これが、残高を調べる際に起動するアプリケーションとなります。この例では〈受注オーダー入力〉プログラム(P4210)を選びます。
16. 〈フォームの処理〉で、フォームを選んで[選択]をクリックします。

J.D. Edwards のアプリケーションの多くは、複数のフォームで構成されています。ドリルダウン機能でアプリケーションを起動する場合は、表示するフォームを選択してください。この例では、〈受注明細の改訂〉フォーム(W4210A)を選びます。

フォームおよびアプリケーションに複数のバージョンが存在する場合、〈バージョンの処理〉フォームが表示されます。
17. 〈バージョンの処理〉で、次のいずれかを実行します。
 - バージョンを選んで[選択]をクリックします。

この例では、バージョン ZJDE0001 の〈Sales Order Entry – SO Order Type(受注オーダー入力 – SO オーダー・タイプ)〉を選びます。
 - 特定のバージョンを指定しない場合は、[閉じる]をクリックします。
18. 〈Form Interconnections〉で、[Available Objects(使用可能なオブジェクト)]カラムから、[Value(値)]カラムに送るオブジェクトを[Available Objects]リスト上でダブルクリックします。

渡される値は、ドリルダウンで指定したフォームによって決定されます。フォームにアクセスすると、どのフィールドに自動入力してグリッドでデータを表示するかがわかります。この値がフォーム・インターコネクトのデータ構造体を含める値です。
19. [Directional(方向)]矢印が、右向き矢印アイコン(データがソースからターゲットに送られることを示す)に切り替わるまでクリックし、[OK]をクリックします。
20. 〈Tabular Section〉で、[OK]をクリックして〈Report Design〉フォームに戻ります。
21. 〈Report Design〉で、次のフィールドでレポートの順序を設定します。
 - Company(会社)
 - Business Unit(ビジネスユニット)
22. データ選択を使用して、レポートに表示されるレコードを確定します。たとえば、会社 00050 以下の番号を持つ会社すべてに対するビジネスユニットを表示する場合、データ選択は “Where Company is less than 00050” となります。
23. 〈Report Design〉で、外観を整えるためにレポートのフォーマットを設定します。

参照

- レポート上のデータ詳細の表示については「監査証跡の検討」

レポート設計による仕訳の作成

〈Report Design〉では、仕訳を作成するレポートを作成できます。作成される仕訳は一般会計システムを使って総勘定元帳に転記することができます。たとえば、予算作成を目的として仕訳を作成する場合を例にとります。

レポート・バージョンはテスト・モードでも最終モードでも投入できます。いずれのモードでもレポートは作成されます。ワーク・センターに関するエラー・メッセージが作成される場合もあります。最終モードでは、エラーが検出されないと、総勘定元帳に転記可能な F0911 レコードが作成されます。これらの仕訳は必要に応じて、転記する前に一般会計システムで削除することができます。

▶ レポート設計で仕訳を作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Report Design〉で、財務レポートを作成して次の計算を実行します。レポートのバージョンを必ず作成してください。
2. レポートの表セクションをクリックし、[Columns(カラム)]メニューから[Create]-[Smart Field(スマート・フィールド)]を選択します。

既存のカラムのいずれかをクリックすると、新しいスマート・フィールド・カラムが既存のカラムの右側に設定されます。そうでない場合は、新しいスマート・フィールド・カラムはレポートの最後のカラムの右側に表示されます。

3. 〈Create New Smart Field(新規スマート・フィールドの作成)〉で、データ項目(FINRPTJE - Create Journal Entry)を選び、[次へ]をクリックしてください。
4. 〈Smart Field Name(スマート・フィールド名)〉で、[Select Report Variable(レポート変数の選択)]フィールドのドロップダウン・メニューで、仕訳の基準とするレポートのカラムを選択して[次へ]をクリックします。

仕訳入力のカラムは別のカラムを基にしてください。このため、仕訳入力カラムはレポートに表示されないよう、非表示に設定されています。

5. 〈Smart Field Parameters(スマート・フィールド・パラメータ)〉で、必要に応じて選択し、[次へ]をクリックして次のタスクに進みます。このディレクトリによって、スマート・フィールドの設定に必要なステップを実行していきます。

レポートの結果は、残高カラムとして選択したカラムの変数に基づいて 2 つあります。手形を振り出した方の勘定科目には残高の金額に基づいて借方入力され、ターゲットとなる勘定科目には残高の金額を貸方入力されます。たとえば、担当者の入力ミスで、100(米)ドルを収益勘定 61.5100 から勘定科目 63.5100 へ振り替えたとします。仕訳の結果は、次のようになります。

61.5100	63.5100
100.00	0.00
100.00DB	
	100.00CR
0.00	100.00

- 最後の画面で[完了]をクリックします。

完了フォームに表示される値は、スマート・フィールドの機能の仕方とは関係ありません。

作成したカラムは表セクションに表示されます。

- 保存して終了します。

▶ 仕訳入力のスペックを入力するには

仕訳入力のスペックを入力する前に、〈Report Design〉で仕訳入力を作成しておいてください。

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

- 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、必要に応じて次のフィールドに値を入力して[検索]をクリックします。

- バッチ・アプリケーション

- 仕訳入力のスペックを入力するバージョンをハイライトして、[ロー]メニューから[処理オプション]を選択します。

- [JE Creation(JE の作成)]タブをクリックしてください。

- 次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。

- 仕訳作成モード

どちらのモードでもレポートおよびワーク・センターのエラーを作成します。最終モードでは、エラーが検出されないと F0911 レコードが作成されます。

- 仕訳 G/L 日付

この値は、レポートが基準としている日付とは異なる場合があります。

- 逆仕訳入力
- 仕訳伝票タイプ

レポート・ライターが作成する仕訳には、特定のユーザー定義伝票タイプを使用してください。このようにすると、レポート・ライターで作成した仕訳が簡単に識別できます。

- 仕訳摘要
5. レポートをテストまたは最終モードのいずれかで投入します。
レポート・ライターで仕訳が作成されたら、一般会計システムで仕訳帳に転記する必要があります。仕訳は転記する前に削除することもできます。
 6. 最終モードでレポートを投入すると、ワークフローの Report Writer JE Batches フォルダをチェックして仕訳を確認することができます。

フィールド記述

記述	用語解説
仕訳作成モード	レポートをテストモードで実行するか最終モードで実行するかを指定します。 有効な値は次のとおりです。 ブランク(デフォルト) 仕訳を照合し、エラーがあればワークセンターへ送信します(仕訳は作成されません) 1 仕訳を作成し、作成したバッチのバッチ番号をワークセンターへ送信します
仕訳 G/L 日付	作成する仕訳に割り当てる元帳日付。ブランクの場合、処理する会社の財務報告日付が使用されます。
逆仕訳入力	逆仕訳を作成するかかどうかを決定します。このフィールドを使用すると、次の期間の逆仕訳入力が作成されます。有効な値は次のとおりです。 R 逆仕訳する ブランク 逆仕訳しない
仕訳伝票タイプ	このレポートで仕訳を作成するために使用する伝票タイプ
仕訳摘要	仕訳の作成時に使用する摘要。ブランクの場合、摘要には「レポートライターで作成」と記載されます。

J.D. Edwards のレポート

J.D. Edwards では、次のようなレポートを提供しています。

- 一般会計
- 人事管理および給与管理
- 在庫管理
- 製造データ管理 - 組立製造

これらのレポートは、そのまま使用することも修正して使用することもできます。

一般会計

一般会計システムのレポートは次のとおりです。

R00640: データ・タイプ別補足データ

R00650: ビジネスユニット別補足データ

R007011: 未転記バッチ

R007021: 取引とバッチ見出しの整合性

R007031: バッチと明細

R09130: 残高調整テーブルの再作成

R09301: 仕訳帳(バッチ別)

R093021: インデックス計算および印刷

R093022: 変数配賦の計算および印刷

R09311: 仕訳帳(勘定科目別)

R09321: 取引仕訳

R09410: 試算表

R094121: 試算表(主科目別)

R09415: 通貨勘定評価

R09420: 総勘定元帳(ビジネスユニット)

R09421: 総勘定元帳(主科目別)

R09470: 総勘定元帳(カテゴリ・コード別)

R09472: 借方/貸方(カテゴリ・コード別)

R097001: 貸借一致の会社

R097011: 貸借一致の会社間勘定レポート

R097021: 勘定マスターなしのトランザクション

R097031: 勘定科目マスターなしの勘定残高

R09705: 取引の勘定残高の比較

人事管理および給与管理

人事管理および給与計算ファンデーション・システムのレポートは、次のとおりです。

R051450: 人事考課係数のデータ

R05229: テスト仕訳バッチ

R053001: 時間/給与入力レジスタ

R058515: EE0-1 雇用データ

R064011: 従業員名簿

R064021: 賃金付き従業員管理表

R080400: データ・タイプ別従業員データ

R080410: 従業員補足データ・レポート

R080423: 従業員履歴ログ

R080424A: 従業員給与履歴分析

R080430: 従業員人事異動

R080435: 労働力分析

在庫管理

在庫管理システムのレポートは次のとおりです。

R094121: 主科目別試算表

R09421: 総勘定元帳(主科目別)

R41410A: 循環棚卸リストの印刷

R41411: 棚卸品目の選択

R41510: 価格表

R4152: 購買担当者

R41530: 在庫状況コード

R41543: 品目元帳/勘定科目整合性

R41544: 品目残高/元帳の整合性

R41560: 品目マスターのディレクトリ

R41580:数量原価警告

R41590:在庫評価分析

R4164:ABC 分析

R41700:在庫費用/価格比較

製造データ管理 – 組立製造

製造データ管理システムのレポートは次のとおりです。

R30450:かんばんサイズの計算

R30460:部品表印刷

R30520:使途先の更新

スマート・フィールド

スマート・フィールドとは、ビジネス関数の添付されたデータ辞書項目のことです。ビジネス関数には、ビジネス関数データ構造体の各パラメータのソースをマッピングするネームド・マッピングが含まれます。このため、特定機能を持つデータ項目の選択が容易にできます。使用するビジネス関数や渡すパラメータを知らなくても、これらの情報を既に持っているデータ項目を選択するだけで済みます。スマート・フィールドを使うと、レポート設計ツールでカラム見出しを取り込んだり、レポート・セクションに値を入力したりできます。

スマート・フィールドは、イベント・ルールでビジネス関数を使用しているだけなので、再利用が可能です(用語解説グループは K)。スマート・フィールドに添付されたビジネス関数は計算などを行います。

たとえば、期間 1～3 の売上高合計を計算してレポートの第 1 四半期カラムに表示するスマート・フィールドを作成できます。この計算は、レポートに取り込まれたデータを基にビジネス関数によって行われます。このようなスマート・フィールドを作成しておく、いつでも同じ計算を行うことができます。レポート設計ツールは、スマート・フィールドの値を自動的に計算します。

スマート・フィールドを使うと、第 1 四半期の売上高を表示するのに 1 つのカラムで済みます。スマート・フィールドを使わない場合は、4 つのカラム(各期間に 1 つと合計用に 1 つ)が必要になります。さらにこの場合、各期間を合計して四半期カラムに書き込むイベント・ルールを作成する必要があります。各四半期の合計を表示する場合は、イベント・ルールを 4 つ作成する必要があります。

スマート・フィールドは、どの種類の詳細セクションにも作成できます。ビジネス関数は、レポート実行の時点で有効なすべてのイベントに対して作成できます。スマート・フィールドそのものを定義するだけでなく、カラム見出しとデータ選択も定義する必要があります。

適切なスマート・フィールドが存在する場合、スマート・フィールド・テンプレートを作成して、スマート・フィールドを整理することができます。たとえば、J.D. Edwards スマート・フィールド・テンプレートは、財務レポート、固定資産、52 期間会計の用途別に整理されています。

各スマート・フィールドを適切なスマート・フィールド・テンプレートに整理すると、そのテンプレートにあるすべてのスマート・フィールドに対して構成ディレクタが作成されます。構成ディレクタを使用すると、レポート処理オプション、ビジネス・ビュー、表セクションのドリルダウン機能を定義することができます。この構成ディレクタの情報により、これらの関連付けられたスマート・フィールドを使ってレポート作成が行われます。スマート・フィールドと構成ディレクタを使うと、スマート・フィールドを整理して、〈Report Design (レポート設計)〉で使いやすく表示することができます。

ここでは、前述の四半期合計の例を使って、次の項目を作成する方法を説明します。

- スマート・フィールド
- スマート・フィールド・テンプレート
- レポート・ディレクタ・テンプレート
- スマート・フィールドを使った新規レポート

この結果、〈Report Design〉でアプリケーション・レポートを使って、四半期合計カラム付きのレポートを作成することができます。

スマート・フィールドの作成

ユーザーが〈Director (ディレクタ)〉でスマート・フィールドを使用できるようにするために必要な最初のステップは、スマート・フィールドの作成です。ここでは、期間 1～3 の売上高合計を計算してレポートの第 1 四半期カラムに表示するスマート・フィールドを作成します。スマート・フィールドの名前は、「四半期金額」とします。

スマート・フィールドの基本要素は次のとおりです。

- データ辞書項目 (ユーザー・プロンプト)
- データ構造体
- ネームド・マッピング
- ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数
- スマート・フィールド・データ項目

データ辞書項目の作成

スマート・フィールドに必要な最初の要素は、ユーザー・プロンプトに使用するデータ辞書項目です。これは、用語解説グループ D の標準データ辞書項目である必要があります。このデータは、レポート作成時のプロンプトとして使用されます。四半期金額スマート・フィールドを使うと、レポート作成時にどの四半期の合計を表示するかを聞かれます。

第 1 四半期の金額カラムを表示するように指定した場合は、そこに期間 1～3 の合計が表示されます。さらに第 2 四半期の金額カラムを追加した場合は、期間 4～6 の合計がスマート・フィールドに表示されます。

このデータ辞書項目を使用すると、〈Director〉でのレポート作成時にどの四半期を表示するのかを尋ねるプロンプトが表示されます。〈Report Design〉では〈Smart Field Parameters (スマート・フィールド・パラメータ)〉フォームで、このプロンプトが表示されます。要求されているデータ項目名は、フォームおよび用語解説ヘルプに表示されます。

ユーザー・プロンプトに使用されるデータ項目を作成または修正した場合は、データ項目の目的などを用語解説テキストとして入力してください。この内容は〈Report Design〉使用時に〈Smart Field Parameters〉フォームに表示されます。ユーザーはこの記述に従って入力フィールドに値を入力します。

▶ データ辞書項目を作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈クロス・アプリケーション設計ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、新しいデータ辞書項目を追加するプロジェクトをハイライトして[追加]をクリックします。
2. 〈J.D. Edwards オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[データ項目]を選んで[OK]をクリックします。
3. 〈データ辞書項目タイプ〉フォームで、[いいえ]をクリックします。
4. 〈Data Item Specifications〉で、次のフィールドに指定の値を入力します。

- データ項目
QuarterlyAmount
- エイリアス
QUAMT
- 用語解説グループ
D
- 記述
四半期金額
- システム・コード
55
- データ・タイプ
9
- サイズ
1
- 表示小数点以下桁数
0
- コントロール・タイプ
4
- 記述
四半期金額

- カラム・タイトル
 - 1 段目: Quarterly (四半期売上)
 - 2 段目: Amount (金額)

オブジェクト管理ワークベンチ - [データ項目のスペック]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... キャンセル... エラー... On

リンク ▼ ウィンドウ... OLE... インター...

項目スペック 項目用語解説 デフォルト値 ビジュアル・アシスト 編集ルール 表示ルール 自動

データ項目: QuarterlyAmount エイリアス: QUAMT

用語解説グループ: 0 主要データ要素 項目 - 親

一般情報

記述: Quarterly Amount システム・コード: 55

システム・コード・レポート: 83

データ・タイプ: 9 数字 サイズ: 1 ファイル表示小数点

クラス: 表示小数点以下桁数: 0

制御タイプ: 4 汎用編集 発生項目数

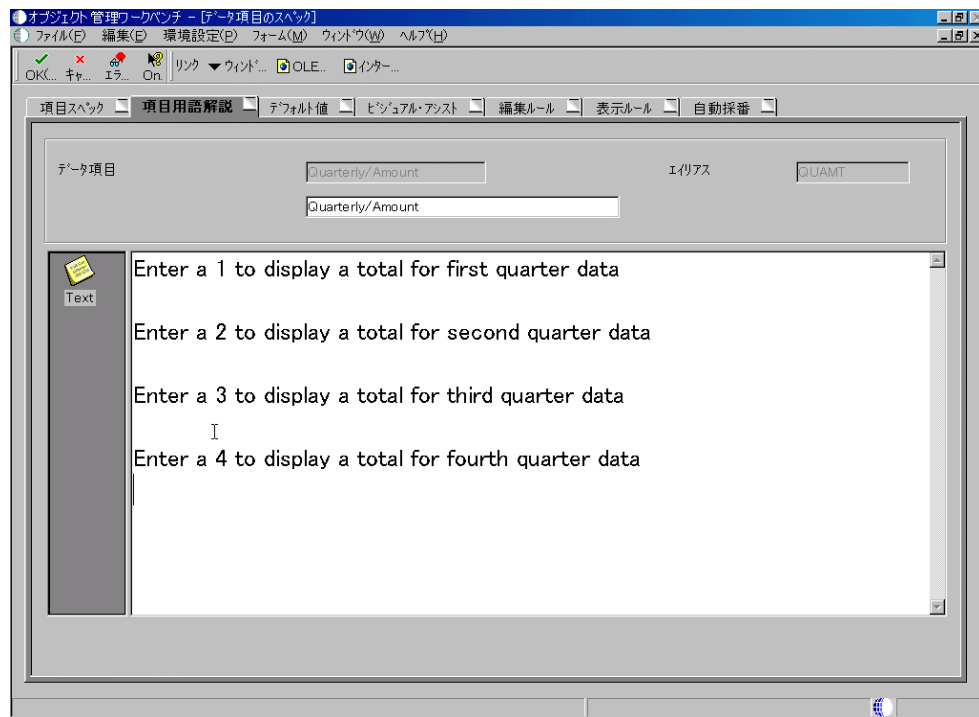
ロー記述: Quarterly Amount

カラム・タイトル: Quarterly

Amount 検索記述

☐ 大文字のみ ☐ ロー・セキュリティ ☐ ブランク使用可能 ☐ 自動インクルード ☐ 合計しない

5. [項目用語解説]タブをクリックして、次の4行を入力します。
 - 第1 四半期の金額カラムを表示するには“1”を入力します。
 - 第2 四半期の金額カラムを表示するには“2”を入力します。
 - 第3 四半期の金額カラムを表示するには“3”を入力します。
 - 第4 四半期の金額カラムを表示するには“4”を入力します。



ここで入力したテキストは、〈Report Design〉の〈Smart Field Parameters〉フォームに表示され、レポート作成者に有効な入力値を指示します。

6. [OK]をクリックします。

参照

- データ項目の作成方法については『開発ツール』ガイドの「データ項目の定義」

データ構造体の定義

スマート・フィールドに必要な 2 番目の要素は、データ構造体です。データ構造体とは、レポートからデータベース・テーブルに渡すパラメータ・リストで、スマート・フィールドが機能するのに必要なデータ項目がすべて含まれます。四半期金額スマート・フィールドには、各四半期金額の計算に 12 の期間レコードと、各四半期金額を保持する戻り値が必要です。データ構造体には、これらのデータ項目をすべて追加する必要があります。

データ構造体に追加するデータ項目は、すべて同じビジネス・ビューに存在する必要があります。必要なデータ項目がすべて同一のビジネス・ビューにない場合は、それらをすべて含むビジネス・ビューを作成する必要があります。

参照

- ビジネス・ビューについては『開発ツール』ガイドの「ビジネス・ビュー設計」
- データ構造体の作成については『開発ツール』ガイドの「データ構造体」

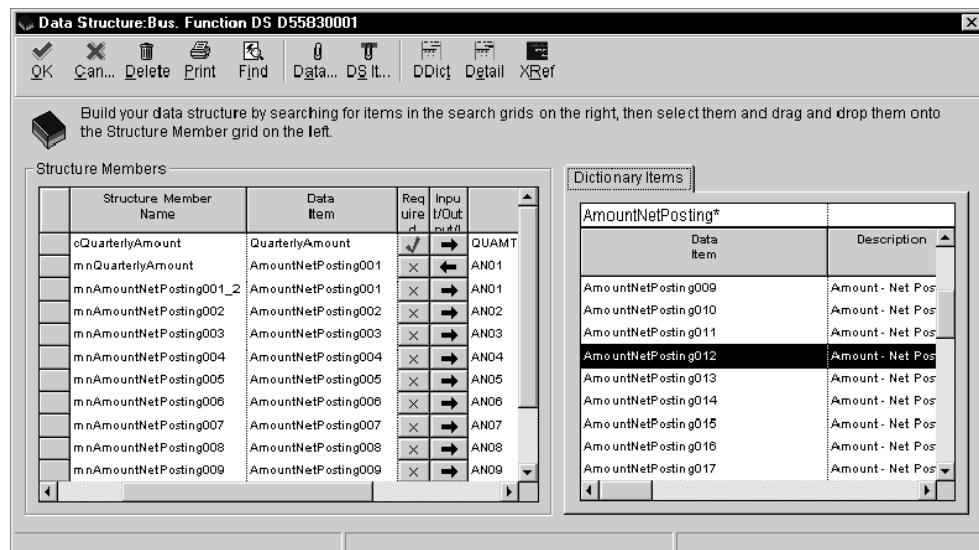
▶ データ構造体を定義するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈クロス・アプリケーション設計ツール〉メニュー(GH902)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、データ構造体を定義するプロジェクトをハイライトして[追加]をクリックします。
2. 〈J.D. Edwards オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[データ構造体]を選んで[OK]をクリックします。
3. 〈オブジェクトの追加〉で、D55830001 という名前のデータ構造体を作成して[OK]をクリックします。
4. 〈データ構造体の設計〉で、[設計ツール]タブを選択して[データ構造体設計]をクリックします。
5. データ構造体設計ツールの[Dictionary Item]セクションで、QuarterlyAmount というデータ辞書項目を検索します。
6. データ辞書項目 QuarterlyAmount を左側のグリッドにドラッグして、[Structure Member Name(構造体メンバ名)]を cQuarterlyAmount に変更します。
7. cQuarterlyAmount を必須フィールドに設定(チェックマークが表示される)し、[Input/Output(入出力)]フィールドを右矢印になるまでクリックします。
8. [Description(記述)]フィールドに"AmountNetPosting*"と入力して、データ辞書項目を検索します。

アスタリスクを必ず付けてください。

9. データ辞書項目 AmountNetPosting001 を左側のグリッドにドラッグして、[Structure Member Name(構造体メンバ名)]を mnQuarterlyAmount に変更します。
10. [Input/Output]フィールドを左矢印になるまでクリックします。
11. データ辞書項目 AmountNetPosting001～012 を左側のグリッドにドラッグして、各[Input/Output]フィールドを右矢印になるまでクリックします。



[Required(必須)]フィールドには、Quarterly Amount データ項目についてユーザーに入力を求めるためのチェック・マークがあります。

データ辞書項目 AmountNetPosting001 は 2 つ転記されます。最初の AmountNetPosting001 の構造体メンバ名を変更したのは、計算した四半期金額を保持する戻り値として使用するためです。他の AmountNetPosting データ項目は、各四半期金額の計算に必要な各月または期間の売上高です。

12. [OK]をクリックします。

ネームド・マッピングの定義

ネームド・マッピングとはデータ構造体の一部であり、スマート・フィールドにのみ使用します。ネームド・マッピングはデータ構造体の各データ項目を定義します。また、ネームド・マッピングにはビジネス関数が使用するデフォルト値を定義すると、レポート設計ツールに値を渡す必要がなくなります。

ネームド・マッピングは、データ構造体の各パラメータ(データ項目)のソースをマッピングするのに使用します。たとえば、プロンプト、テーブル、戻り値のソースを定義できます。データ構造体データ項目のソースには、次の項目を指定できます。

リテラル	データ項目に特定の値を割り当てるのに使用します。たとえば、計算に使用する税率を入力します。
プロンプト	プロンプトとして使用するデータ項目を指定します。四半期金額の例では、四半期金額データ項目がプロンプトです。〈Report Design〉では、レポートで計算する四半期を入力するように要求(プロンプト)されます。
テーブル	テーブルから取り込まれるデータ項目を指定します。テーブル名を検索し、データ構造体のデータ項目をテーブルのデータ項目と関連付けます。
データ辞書項目	処理オプションからデータ構造体にデータを渡す必要がある場合にこのオプションを使用します。スマート・フィールドで使用する値の中には、ユーザーが入力しなくてもビジネス関数に渡せる場合があります。たとえば、計算する会計年度や期間は処理オプションで指定されているので、それをデータ構造体に渡すことができます。この場合は、データ項目はデータ辞書項目として定義し、ネームド・マッピングで処理オプションを指定します。
システム値	データ項目のソースとしてシステム値を選択し、適切なシステム値を[Browse(参照)]をクリックして選択します。システム日付などのシステム値は、どのシステムからでも使用できます。システム値は、変数テーブル(F98VAR)から取り込まれます。

▶ ネームド・マッピングを定義するには

データ構造体を作成すると、〈データ構造体設計〉フォームが表示されます。

1. [設計ツール]タブで[ネームド・マッピング]をダブルクリックしてください。
2. 〈Named Mapping(ネームド・マッピング)〉で、[Add(追加)]をクリックして、四半期金額の例で作成したデータ構造体 M5583001 をネームド・マッピング・リストに追加します。

3. cQuarterlyAmount を選んで、[Origin Types (元タイプ)] 欄の [Prompt (プロンプト)] ラジオ・ボタンをクリックします。

これで、四半期金額の例のデータ構造体の最初のデータ項目 QuarterlyAmount のネームド・マッピングが「プロンプト」になります。プロンプトにするデータ項目は、ネームド・マッピングでこの操作を行うことで「プロンプト」として指定する必要があります。ユーザー・プロンプトにするデータ項目は、データ構造体で「必須」に設定されている必要があります。

Structure Member Name	Data Item	Req	Input/Out
cQuarterlyAmount	QuarterlyAmount	✓	→
mnQuarterlyAmount	AmountNetPosting001	X	→
mnAmountNetPosting001_2	AmountNetPosting001	X	→
mnAmountNetPosting002	AmountNetPosting002	X	→
mnAmountNetPosting003	AmountNetPosting003	X	→
mnAmountNetPosting004	AmountNetPosting004	X	→
mnAmountNetPosting005	AmountNetPosting005	X	→
mnAmountNetPosting006	AmountNetPosting006	X	→
mnAmountNetPosting007	AmountNetPosting007	X	→
mnAmountNetPosting008	AmountNetPosting008	X	→
mnAmountNetPosting009	AmountNetPosting009	X	→
mnAmountNetPosting010	AmountNetPosting010	X	→
mnAmountNetPosting011	AmountNetPosting011	X	→
mnAmountNetPosting012	AmountNetPosting012	X	→

Named Mapping List: M55830001 [Default] [Add] [Delete]

Data Item Origin

Origin Types

☐ Literal

☒ Prompt

☐ Table

☐ Data Dictionary Item

☐ System Value

Optional

☐ All

☒ Literal

☐ Business View Column

☐ Previous Bus. View Column

☐ Report Variable

☐ Previous Report Variable

☐ Report Constant

☐ Processing Option & Report Interconnect

Value: [] [Browse...]

Table: []

☐ Required ☒ Return Value

[OK] [Cancel]

4. mnQuarterlyAmount を選んで [Return Value (戻り値)] フィールドを選択して、mnQuarterlyAmount が戻り値であることを指定します。

注:

[Required] フィールドは自動的に選択済みになっています。戻り値として使用するデータ項目の場合、[Required] フィールドは無効にできません。

Named Mapping

Named Mapping List: M55830001 ☒ Default

Structure Member Name	Data Item	Req uire	Input/Out
cQuarterlyAmount	QuarterlyAmount	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnQuarterlyAmount	AmountNetPosting001	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="←"/>
mnAmountNetPosting001_2	AmountNetPosting001	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting002	AmountNetPosting002	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting003	AmountNetPosting003	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting004	AmountNetPosting004	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting005	AmountNetPosting005	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting006	AmountNetPosting006	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting007	AmountNetPosting007	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting008	AmountNetPosting008	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting009	AmountNetPosting009	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting010	AmountNetPosting010	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting011	AmountNetPosting011	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>
mnAmountNetPosting012	AmountNetPosting012	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="button" value="→"/>

Data Item Origin

Origin Types

☐ Literal

☐ Prompt

☐ Table

☐ Data Dictionary Item

☐ System Value

Value:

Table:

☒ Required ☒ Return Value

5. mnAmountNetPosting001_2 を選んで、[Required]フィールドをオンにします。
6. データ項目を選んで[Origin Types]の下の[Table(テーブル)]オプションを選び、mnAmountNetPosting001_2 のソースがテーブルであることを指定します。
7. [Browse]をクリックして、〈Select a Table(テーブルの選択)〉フォームを表示します。
8. テーブル F0902 を選んで[次へ]をクリックします。

この操作によって、データ項目が存在するテーブルが指定されます。四半期金額の例にある最後の 12 個のデータ項目はテーブル F0902 に保管されています。

9. AmountNetPosting001 を選んで[完了]をクリックします。

Select a Column

Data Item	Description	Alias	Table Name
Company	Company	CO	F0902
AmtBeginningBalancePy	Amount - Beginning Balance/PYE Form	APYC	F0902
AmountNetPosting001	Amount - Net Posting 01	AN01	F0902
AmountNetPosting002	Amount - Net Posting 02	AN02	F0902
AmountNetPosting003	Amount - Net Posting 03	AN03	F0902
AmountNetPosting004	Amount - Net Posting 04	AN04	F0902
AmountNetPosting005	Amount - Net Posting 05	AN05	F0902
AmountNetPosting006	Amount - Net Posting 06	AN06	F0902
AmountNetPosting007	Amount - Net Posting 07	AN07	F0902
AmountNetPosting008	Amount - Net Posting 08	AN08	F0902
AmountNetPosting009	Amount - Net Posting 09	AN09	F0902
AmountNetPosting010	Amount - Net Posting 10	AN10	F0902
AmountNetPosting011	Amount - Net Posting 11	AN11	F0902
AmountNetPosting012	Amount - Net Posting 12	AN12	F0902
AmountNetPosting013	Amount - Net Posting 13	AN13	F0902
AmountNetPosting014	Amount - Net Posting 14	AN14	F0902

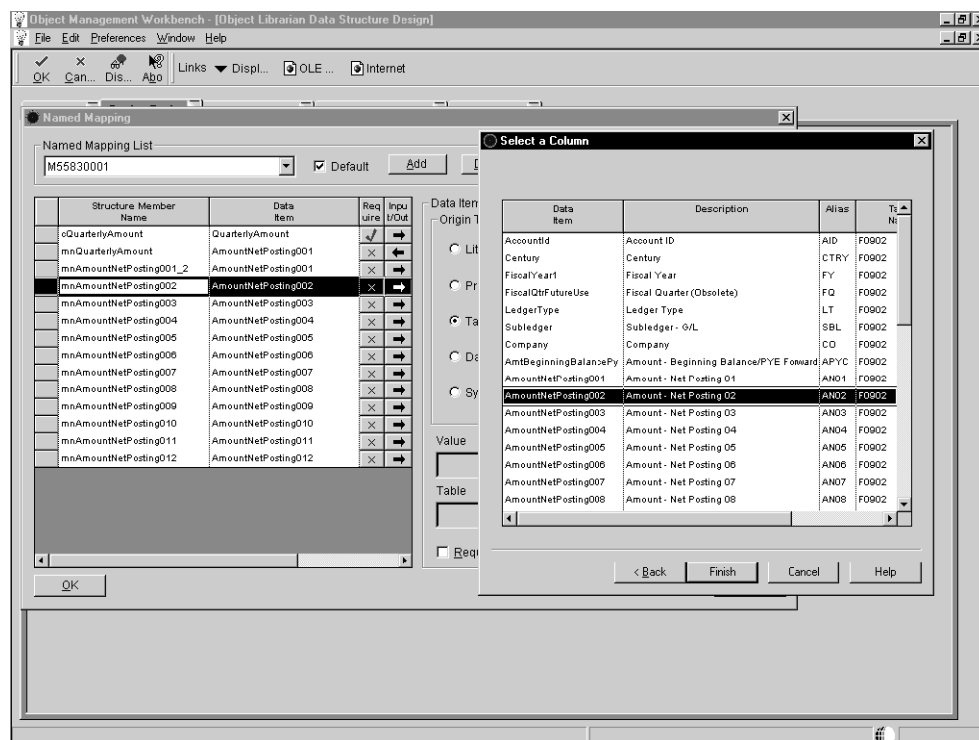
< Back Finish Cancel Help

〈Select a Column〉フォームでは、どのテーブルのデータ項目をデータ構造体のデータ項目の基にするかを指定します。[Required]フィールドをクリックして、これらのデータ項目を必須と定義します。

- その他の 11 個のデータ項目に関して、ステップ 5～8 を実行します。つまり、データ構造体項目 mnAmountNetPosting002 をテーブルのデータ項目 AmountNetPosting002 に、データ構造体項目 mnAmountNetPosting003 をテーブルのデータ項目 AmountNetPosting003 というようにマッピングします。

ヒント:

次の画面のようにフォームを並べると、現在処理されているデータ項目がわかりやすくなります。



ビジネス関数およびイベント・ルール・ビジネス関数を使用した計算

スマート・フィールドの条件を設定するのに、ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数を使用することができます。ビジネス関数は C 言語を使用して作成し、イベント・ルール・ビジネス関数は J.D. Edwards がソフトウェアで提供するツール・セットのスクリプト言語を使用して作成します。

ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数は、再利用できるので便利です。コードを 1 度書けば、複数のイベントおよびレポートで使用することができます。四半期金額の例では、イベント・ルール・ビジネス関数を使わない場合、4 つのカラム (各期間に 1 つと合計用に 1 つ) が必要になります。さらに、各期間を合計して四半期カラムに書き込むイベント・ルールを作成する必要があります。各四半期の合計を表示する場合は、4 つの異なるイベント・ルールを作成する必要があります。イベント・ルール・ビジネス関数を使用すると、条件を 1 度書けば、四半期金額を表示する 4 つのカラムに使用することができます。このイベント・ルール・ビジネス関数は、他のレポートでも使用することができます。

四半期金額の例の次のステップは、スマート・フィールドの計算を行うイベント・ルール・ビジネス関数を作成することです。イベント・ルール・ビジネス関数を作成するときは、データ構造体に関連付けます。四半期金額の例では、四半期金額データ構造体をこのイベント・ルール・ビジネス関数に関連付けます。

▶ イベント・ルール・ビジネス関数で計算を実行するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈クロス・アプリケーション設計ツール〉メニュー(GH9111)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、イベント・ルール・ビジネス関数を追加するプロジェクトをハイライトして[追加]をクリックします。
2. 〈J.D. Edwards オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[ビジネス関数]を選んで[OK]をクリックします。
3. 〈オブジェクトの追加〉フォームで、以下のフィールドに値を入力し、[NER]を選んで[OK]をクリックします。
 - オブジェクト名
 - 記述
 - システム・コード
 - 製品システム・コード
 - オブジェクト使用
4. 〈ビジネス関数設計〉フォームの[設計ツール]で、[ビジネス関数設計ツールの起動]をクリックします。
5. QuarterlyAmount という関数を作成し、四半期金額データ構造体を関連付けます。
QuarterlyAmount がイベント・ルール名になります。
6. イベント・ルール・ビジネス関数を入力します。

四半期金額の例では、イベント・ルール・ビジネス関数は次の計算により四半期金額を計算します。

Sales for Period 1 + Sales for Period 2 + Sales for Period 3
--

イベント・ルール・ビジネス関数では、まずユーザー入力値の使用方法を定義します。たとえば、ユーザーがプロンプトで“1”を入力した場合には、第1四半期の売上が合計されるようにします。そのためには、イベント・ルール・ビジネス関数で If/While ステートメントを記述します。次のような If ステートメントをイベント・ルール・ビジネス関数に追加します。

If <user prompt> is equal to a 1

Sales for Period 1 + Sales for Period 2 + Sales for Period 3
--

Else

データを表示するための各オプションの関連情報も使用できるようにする必要があります。次のような情報をイベント・ルール・ビジネス関数に追加します。

If <user prompt> is equal to a 2

Sales for Period 4 + Sales for Period 5 + Sales for Period 6
--

Else

If <user prompt> is equal to a 3

Sales for Period 7 + Sales for Period 8 + Sales for Period 9
--

```

Else
If <user prompt> is equal to a 4

    Sales for Period 10 + Sales for Period 11 + Sales for Period 12

End If

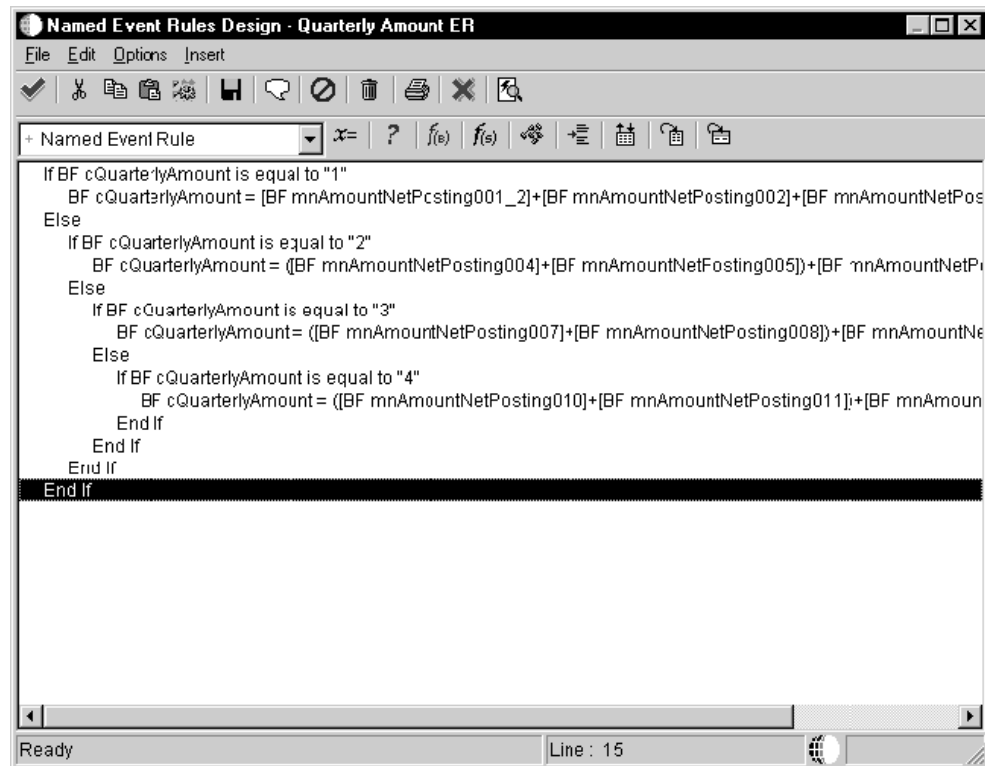
End If

End If

End If

```

入力が完了すると、イベント・ルールは次のようになります。



7. イベント・ルールを保存して[OK]をクリックします。
8. <Object Librarian Business Function Design (オブジェクト・ライブラリアン・ビジネス関数の設計)>で[Design Tools (設計ツール)]タブを開いて、[Build Business Function (ビジネス関数の作成)]をクリックします。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「ビジネス関数」
- ビジネス関数およびイベント・ルール・ビジネス関数については『開発ツール』ガイドの「イベント・ルール・ビジネス関数の作成」

データ辞書スマート・フィールド項目の作成

スマート・フィールドに必要な最後の要素は、データ辞書スマート・フィールド項目です。このデータ項目は、ビジネス関数またはイベント・ルール・ビジネス関数、およびスマート・フィールドに関連付けられた指定マッピングを定義します。他のデータ辞書項目と異なり、スマート・フィールド・データ辞書項目は用語解説が K であり、[Smart Field(スマート・フィールド)]タブの情報があります。

はじめる前に

- スマート・フィールド・データ辞書項目を作成する前に、データ構造体をチェックインします。これは、指定マッピングを検索できるようにするためです。

▶ データ辞書スマート・フィールド項目を作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈クロス・アプリケーション設計ツール〉メニュー(GH9111)から〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を選択します。

1. 〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で、新しいデータ辞書項目を追加するプロジェクトをハイライトして[追加]をクリックします。
2. 〈J.D. Edwards オブジェクトをプロジェクトに追加します〉で、[データ項目]を選んで[OK]をクリックします。
3. 〈データ項目タイプ〉フォームで、[いいえ]をクリックします。
4. 〈Data Item Specifications〉で、次のフィールドに指定の値を入力します。

- データ項目
QuarterlySales
- エイリアス
QSALES
- 用語解説グループ
K
- 記述
四半期売上
- システム・コード
55
- データ・タイプ
9
- サイズ
15
- クラス
CURRENCY

- 表示小数点以下桁数
2
- コントロール・タイプ
4
- 記述
四半期売上
- カラム・タイトル
1 段目: Quarterly (四半期売上)
2 段目: Sales (売上)

オブジェクト管理ワークベンチ - [データ項目のスペック]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... キャンセル... エラー... On

リンク ▼ ウィンドウ... OLE... インター...

項目スペック 項目用語解説 デフォルト値 ビジュアル・アシスト 編集ルール 表示ルール 自動

データ項目: QuarterlySales エリアス: QSALES

用語解説グループ: K スマートフィールド 項目 - 親:

一般情報

記述: Quarterly Sales システム・コード: 55

システム・コード・レポート: 83

データ・タイプ: 9 数字 サイズ: 15 ファイル表示小数点:

クラス: CURRENCY 表示小数点以下桁数: 2

制御タイプ: 4 汎用編集 発生項目数:

ロー記述: Quarterly Sales

カラム・タイトル: Quarterly

Sales 検索記述:

☐ 大文字のみ ☐ ロー・セキュリティ ☐ ブランク使用可能 ☐ 自動インクルード ☐ 合計しない

5. [フォーム]メニューから[スマート・フィールド]を選んで、〈スマート・フィールド基準〉フォームを表示します。
6. QuarterlyAmount ビジネス関数(前のトピックで作成したイベント・ルール・ビジネス関数)をスマート・フィールドと関連付けます。
7. [イベント名]カラムで、スマート・フィールドを呼び出すイベントを指定します。

四半期金額の例の Quarterly Amount スマート・フィールドは、財務レポートの表セクションでよく使用するので、カラム組込みイベントを使用するのが適切です。

8. [指定マッピング]カラムで、以前に指定したマッピングをスマート・フィールドに関連付けます。

このフォームでの最後のステップで、このスマート・フィールドが使用する指定マッピングを関連付けます。

9. ユーザー・プロンプト・データ辞書項目と同様、このスマート・フィールド・データ項目の[項目用語解説]タブでヘルプ・テキストを入力します。

参照

- データ項目の作成方法については『開発ツール』ガイドの「データ項目の定義」

スマート・フィールド・テンプレートの作成

スマート・フィールド・テンプレートは、スマート・フィールドを1つの構成可能ディレクタ(レポート作成時にデータを要求する)にグループ化するのに使用します。スマート・フィールド・テンプレートでは、ビジネス・ビューやその他のレポートおよび処理コンポーネントもこの構成可能ディレクタで定義し、スマート・フィールドも同じように定義して共有します。たとえば、スマート・フィールド・テンプレートS09001に含まれる財務レポートスマート・フィールドは、すべて同じビジネス・ビュー、処理オプション、データ順序を使用し、同じ構成可能ディレクタを使用します。

▶ スマート・フィールド・テンプレートを作成するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈スマート・フィールド・テンプレート〉を選択します。

1. 〈スマート・フィールド・テンプレートの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈スマート・フィールド・テンプレートの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - スマート・フィールド・テンプレート
[スマート・フィールド・テンプレート]フィールドに“S55830001”と入力します。
 - 記述
記述は「四半期スマート・フィールド」とします。
3. 次のフィールドに“QSALES”と入力して[OK]をクリックしてください。
 - データ項目

スマート・フィールド・テンプレート - [スマート・フィールド・テンプレートの改訂]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... 検... 削... キヤ... 新... エラ... On... リンク ▼ テンフ... OLE... インター...

スマート・フィールド・テンプレート S55830001

記述 Quarterly Smart Fields

データ項目	記述
QSALES	Quarterly Sales

レコードの削除 1-2

4. <スマート・フィールド・テンプレート基準の改訂>で、[データ項目]フィールドに次のデータを入力し、スマート・フィールド・データ選択で要求するデータとして指定します。
- 会計年度(FY)
 - 元帳タイプ(LT)
 - 主科目(OBJ)

データ項目	記述	表示順序	範囲値
FY	会計年度	1.00	0
LT	元帳タイプ	2.00	0
OBJ	主科目	3.00	0

四半期金額の例では、会計年度、元帳タイプ、主科目の値の入力が要求されるようにします。会計年度と元帳タイプは範囲値を必要としないので、[範囲値]フィールドは“0”(ゼロ)にします。主科目には範囲を指定することがあるので、[範囲値]フィールドは“0”にする必要があります。

これら3つの値は、レポート作成時に〈スマート・フィールド・データ選択〉フォームで表示されている順序で要求されます。

注:

〈Report Design〉では、事前に選択されたデータ選択を一時変更できます。

5. [OK]をクリックして変更内容を保存します。

参照

- スマート・フィールド・テンプレートの作成については「スマート・フィールド・テンプレートの処理」

レポート・ディレクタ・テンプレートの作成

レポート・ディレクタ・テンプレートは、スマート・フィールドを使ったステップを通じてレポート作成を進めるディレクタを作成するのに使用します。このディレクタは、簡単なカラムまたはグループ・レポート・テンプレートを作成するのに使用する(Director)に似ています。

▶ レポート・ディレクタ・テンプレートを作成するには

〈上級レポート設定〉メニュー(GH9141)から〈レポート・ディレクタ・テンプレート〉を選択します。

1. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。

- レポートテンプレート/記述

新しいスマート・フィールド・テンプレート S55830001 を作成します。記述は「四半期スマート・フィールド」とします。

J.D. Edwards 命名規則では、レポート・ディレクタ・テンプレートにはスマート・フィールド・テンプレートと同じ名前を使用します。このレポート・ディレクタ名は、〈Report Design〉でレポートを作成するときに〈Report Design Director(レポート設計ディレクタ)〉の〈Welcome(ようこそ)〉フォームにある[Application Reports(アプリケーション・レポート)]ドロップダウン・リストに表示されます。記述は、レポート・テンプレートの作成時に〈Business View Selection Options(ビジネス・ビュー選択オプション)〉フォームに表示されます。

3. [ブロックの作成]タブをクリックして[セクション・タイプ]フィールドに“46”と入力して、このスマート・フィールドを表セクションで使用することを示します。

- セクションタイプ

レポート・ディレクタ・テンプレートを設定するときにはどのタイプの詳細セクションでも使用することもできますが、四半期金額の例では表セクションを使用します。

4. 次のフィールドに“V8300001”と入力します。

- ビジネス・ビュー

スマート・フィールドに関連付けられているデータ構造体で使用されているすべてのデータ項目を含むビジネス・ビューを選択する必要があります。このビジネス・ビューは、〈Report Design〉で〈Director〉を使用して、[I'll use the pre-defined business view(事前定義済みのビジネス・ビューを使用する)]オプションを選択した場合に使用されます。

5. 次のフィールドに“S55830001”と入力します。

- スマート・フィールド・テンプレート

6. [デフォルトの順序およびレベル区切り]グリッドに次のデータ項目を追加します。

- Company(会社)(CO)
- Business Unit(ビジネスユニット)(MCU)
- Object Account(主科目)(OBJ)

このグリッドのデータ項目は、〈Director〉の〈Data Sequencing Help (データ順序設定ヘルプ)〉フォームに表示されます。このグリッドに入力した最初の2つのデータ項目は、表セクションを使用する際にレベル区切りとして使用されます。他のフィールドは、レポート・データの順序設定に使用されます。これらの選択は一時変更でできます。

四半期金額の例のレポート・テンプレートでは、データ順序設定に会社、ビジネスユニット、主科目を使用します。会社とビジネスユニットがレベル区切りになります。

レポート・ディレクタ・テンプレート - [レポートディレクタ・テンプレートの改訂]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... 消し... キャンセル... 新規... エラー... On...

リンク ▼ スマート... OLE... インター...

レポートテンプレート/記述 S55830001 Quarterly Smart Fields

ブロックの作成 プロパティ トリルダウン

セクションタイプ 46 TABULAR (表) セクション

ビジネスビュー V8300001 Financial Reporting (F0901 / F09)

処理オプション

スマートフィールド・テンプレート S55830001 Quarterly Smart Fields

デフォルトの順序およびレベル区切り

データ項目	記述	表示順序
CO	Company	1.00
MCU	Business Unit	2.00
OBJ	Object Account	3.00

7. [プロパティ]タブをクリックして、次のオプションを選択します。

- 財務記述の使用
- 詳細レベルの表示
- 調整サインの表示
- 非表示ゼロ・ローの表示
- 財務データ条件の表示

データ項目	記述	表示順序
CO	Company	1.00
MCU	Business Unit	2.00
OBJ	Object Account	3.00

これらの多くは財務レポートに特有の項目です。財務レポートのディレクタ・テンプレートを作成している場合でも、これらのオプションをすべて使用可能にする必要はありません。たとえば、[詳細レベルの表示]オプションをオフにすると、Directorを使用したレポート作成時にこのオプションが使用不可になります。セクション・プロパティのオプションもグレー表示されます。このため、レポート作成時にレポートの詳細レベルを制御することはできなくなります。

このタブは、表セクションと同時にのみ使用できます。

8. [ドリル・ダウン]タブをクリックしてから次のオプションを選択します。
 - ドリルダウン
9. 〈アプリケーションの処理〉で、[オブジェクト名]フィールドに“P83001”と入力して[検索]－[選択]をクリックします。
10. 〈フォームの処理〉で、W83001A フォームを選んで[選択]をクリックします。
11. 〈バージョンの処理〉で、XJDE0001 が表示されているグリッド行を選んで[選択]をクリックします。

レポート・ディレクタ・テンプレート - [レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂]

ファイル(F) 編集(E) 環境設定(P) フォーム(M) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

OK... 消し... キャンセル... 新... エラ... On... リンク ▼ スマ... OLE... インター...

レポートテンプレート/記述 S55830001 Quarterly Smart Fields

ブロックの作成 フォハティ **ドリルダウン**

☒ ドリルダウン

ドリルダウン APPL/フォーム/VERS P83001 W83001 A XJDE0001 定義

デフォルトの順序およびレベル区切り

データ項目	記述	表示順序
CO	Company	1.00
MCU	Business Unit	2.00
OBJ	Object Account	3.00

ドリルダウン機能は時間とリソースを消費します。レポート作成時には、ドリルダウンを有効にする必要はありません。ただし、ドリルダウンが要求された場合は、これらの値がデフォルトのドリルダウン値になります。

[定義]ボタンを押すと、アプリケーション、フォーム、バージョンを選択するフォームが表示されます。実際のフォーム・インターコネクト・マッピングは、レポート・テンプレートそのものの作成時に行う必要があります。

このタブは、表セクションと同時にのみ使用できます。

12. <レポート・ディレクタ・テンプレートの改訂>で、[OK]をクリックします。

参照

- スマート・フィールド・テンプレートの作成については「スマート・フィールド・テンプレートの処理」
- ドリルダウンの用法については「ドリルダウン機能の処理」

スマート・フィールドを使用した新規レポートの作成

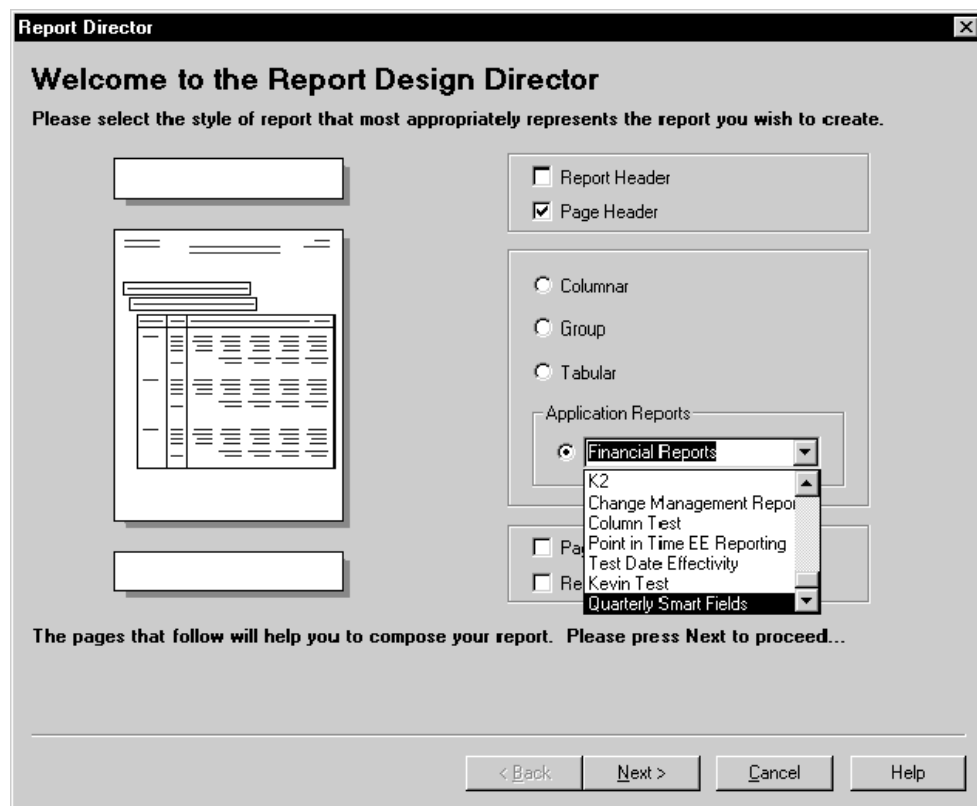
このプロセスの最後のステップとして、テンプレートをテストします。この例では、レポート作成時に情報が〈Director〉でどのように表示されるのかに注目してください。これにより、データがどこから来るのか、またこの時点までに行ったオブジェクト設定に関する選択がレポート作成時にどのように影響するのかがわかります。

▶ スマート・フィールドを使用して新規レポートを作成するには

J.D. Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈Create New Report(新規レポートの作成)〉で、次のフィールドに値を入力してから[OK]をクリックします。

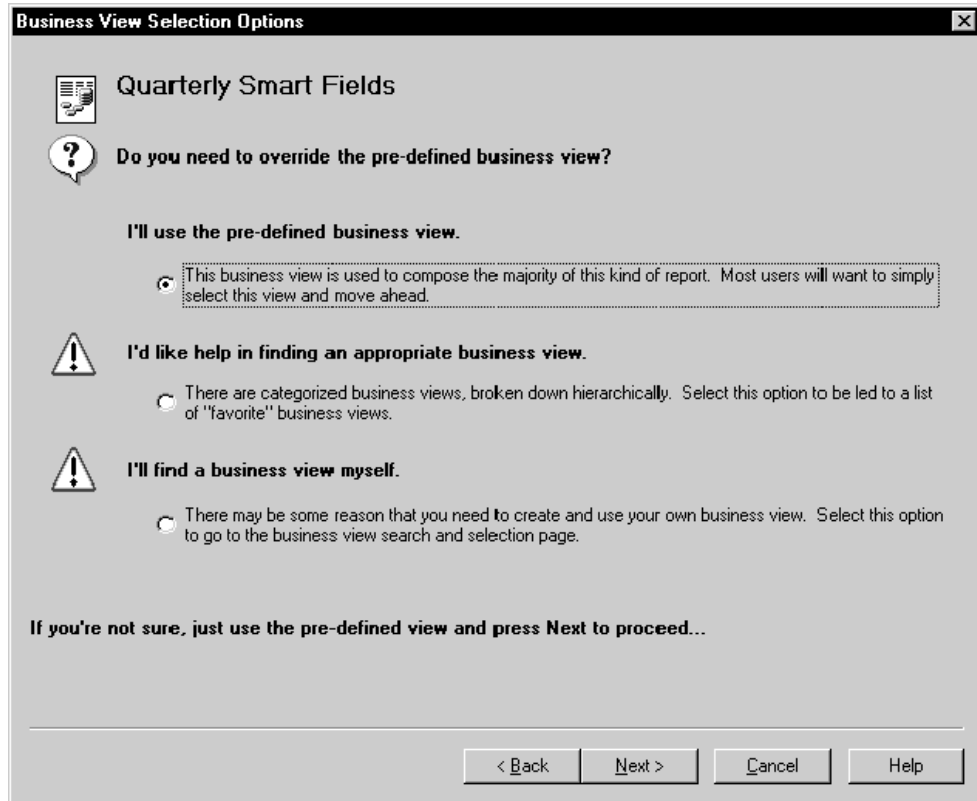
- Report Name(レポート名)
- Description(記述)
- System Code(システム・コード)



2. 〈Report Director〉で、[Application Report(アプリケーション・レポート)]の[Quarterly Smart Fields(四半期スマート・フィールド)]を選択して[次へ]をクリックします。

リストの最後に、作成した Quarterly Smart Fields レポート・ディレクタ・テンプレートがあります。この名前は、レポート・ディレクタ・テンプレートを作成したときに入力したものです。

3. 〈Page Header Details(ページ・ヘッダー詳細)〉で、デフォルトのまま[次へ]をクリックします。



The image shows a dialog box titled "Business View Selection Options". At the top, there is a section labeled "Quarterly Smart Fields" with a document icon. Below this, a question mark icon is followed by the text "Do you need to override the pre-defined business view?". There are three radio button options, each with a warning triangle icon to its left. The first option is "I'll use the pre-defined business view." and is selected. Its description states: "This business view is used to compose the majority of this kind of report. Most users will want to simply select this view and move ahead." The second option is "I'd like help in finding an appropriate business view." and its description states: "There are categorized business views, broken down hierarchically. Select this option to be led to a list of 'favorite' business views." The third option is "I'll find a business view myself." and its description states: "There may be some reason that you need to create and use your own business view. Select this option to go to the business view search and selection page." At the bottom of the dialog, there is a line of text: "If you're not sure, just use the pre-defined view and press Next to proceed...". Below this text are four buttons: "< Back", "Next >", "Cancel", and "Help".

4. 〈Business View Selection Options〉で[I'll use the pre-defined business view]を選択して、[次へ]をクリックします。

作成したレポート・ディレクタ・テンプレートの名前が、〈Business View Selection Options〉フォームの1行目に表示されています。

このフォームには、ビジネス・ビューの選択に関する3つのオプションが示されます。オプションの1つは、事前定義済みのビジネス・ビューを使用する方法です。これは、レポート・ディレクタ・テンプレートの[ブロックの作成]タブで入力したビジネス・ビューV830001を使用することを意味します。それ以外に、下の2つのオプションを選ぶことにより、このデフォルトを一時変更することも可能です。

レポート作成時に事前定義済みのビジネス・ビューを使用すると指定した場合、レポート・ディレクタ・テンプレートを作成したときに指定したビジネス・ビューV830001が使用されます。レポート作成時に別のビジネス・ビューを選択することもできます。

Select Columns

Drag and drop columns from the list of available smart fields on the left to the selected columns list on the right. The selected columns will be included in the report section you are defining.

Available Smart Fields

Data Item	Description
QuarterlySales	Quarterly Sales

Columns in Report Section

Data Item	Description	Alias
Description	Description	DESC

◀ ◻ ▶
◀◀ ◻ ▶▶
◀ ◻ ▶
◀◀ ◻ ▶▶
◀ ◻ ▶
◀◀ ◻ ▶▶

Define Calculation
Define Smartfield

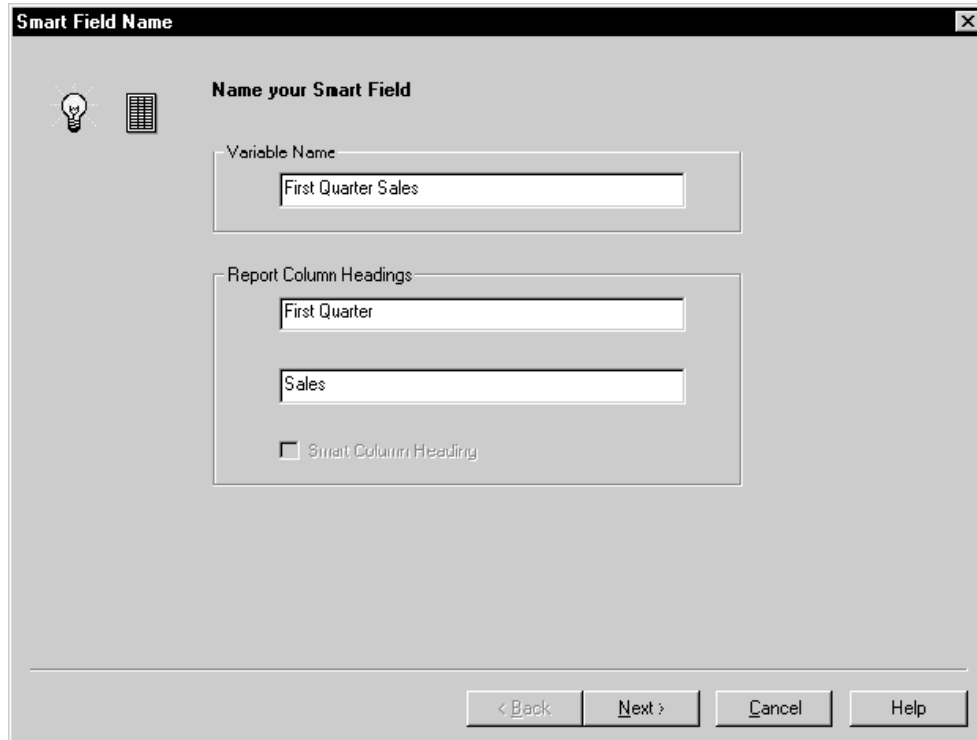
< Back
Next >
Cancel
Help

5. 〈Select Columns(カラムの選択)〉で、[QuarterlySales]スマート・フィールドを[Available Smart Fields(使用可能なスマート・フィールド)]セクションから[Columns in Report Section(レポート・セクションのカラム)]にドラッグします。

このリストは、レポート・ディレクタ・テンプレートと関連付けたスマート・フィールド・テンプレートから来ています。QuarterlySales は、作成してテンプレートに関連付けたスマート・フィールドの名前です。スマート・フィールドは 1 つしか作成していないので、QuarterlySales だけが表示されます。

スマート・フィールド・ディレクタにより、〈Smart Field Name(スマート・フィールド名)〉フォームおよびそれに続くフォームが起動されます。

6. [Variable Name(変数名)]フィールドを First Quarter Sales に、最初の[Report Column Headings(レポート・カラム見出し)]フィールドを First Quarter に変更します。



The image shows a dialog box titled "Smart Field Name". It contains two main sections: "Variable Name" and "Report Column Headings". In the "Variable Name" section, there is a text input field containing "First Quarter Sales". In the "Report Column Headings" section, there are two text input fields: the first contains "First Quarter" and the second contains "Sales". Below these fields is a checkbox labeled "Smart Column Heading" which is currently unchecked. At the bottom of the dialog, there are four buttons: "< Back", "Next >", "Cancel", and "Help".

スマート・フィールドの作成時にデフォルト変数名とカラム名を設定します。

〈Smart Field Parameters(スマート・フィールド・パラメータ)〉フォームが表示され、カラムの四半期の入力を要求します。

7. フィールドに“1”を入力して、[次へ]をクリックします。

この入力、データ辞書項目 QuarterlyAmount がユーザー・プロンプトであるため要求されます。このデータ項目は、このスマート・フィールドの最初の要素としてユーザー・プロンプトとして作成しました。さらに、データ辞書項目の作成時に入力した項目用語解説テキストがここに表示されます。

8. 売上データを持つ2つの勘定科目(売上製品クラス1と売上製品クラス2)の元帳タイプAAの2005年の結果を表示するには、[Fiscal Year(会計年度)]フィールドに“05”、[Ledger Type(元帳タイプ)]フィールドに“AA”、[Object Account: From(開始主科目)]フィールドに“5100”、[Object Account: To(終了主科目)]フィールドに“5200”と入力します。
9. [完了]をクリックします。

このフォーム上の項目は、スマート・フィールドを添付してデータ選択フィールドを定義したスマート・フィールド・テンプレートによるものです。スマート・フィールド・テンプレートには、最大5つまでのデータ項目を含めることができます。主科目は範囲値として設定したため、このフォームではデータ項目2つ分のスペースを必要とします。

また、このスマート・フィールドは、トレンド情報の表示にも使用できます。たとえば、レポートに今年の各四半期を表す4つのカラムではなく、4年間の最初の四半期を表す4つのカラムを表示することもできます。

注:

各スマート・フィールド・カラムに同じデータ選択を使用する場合は、このフォームはブランクにして、レポート全体のデータ選択だけを指定することができます。

カラムごとにデータ選択を指定する必要はありません。損益計算書ではスマート・フィールドを1つだけ設定するか、このタイプのスマート・フィールド・カラムがすべて同じデータ選択を使用する場合は、この時点ではデータ選択をブランクにしておき、後でレポート全体に対してデータ選択を指定の方が効率的です。たとえば、各カラムに同じ年度、元帳タイプ、勘定科目の各四半期を表示する場合などがあります。

〈Select Columns〉フォームが再び表示されます。新しいスマート・フィールドごとにステップ6～8を繰り返すことにより、四半期売上カラムを追加することができます。

10. レポートへのカラムの追加が完了したら、[次へ]をクリックします。

Data Sequencing Help

We'd like to help you sequence your report...

The grouping that you choose for your report determines what is output.

Report Grouping

☒ Company
Select the primary grouping

☒ Business Unit
You may want to specify a secondary grouping

Report Detail

Object Account

Advanced

☐ I'd like to setup the sequencing and level breaking myself.

< Back Next > Cancel Help

11. 〈Data Sequencing Help〉で、[次へ]をクリックします。

〈Data Sequencing Help〉フォームには、レポート・ディレクタ・テンプレートで定義したデータ順序とレベル区切りが表示されます。会社とビジネスユニットは、レポート・ディレクタ・テンプレートのグリッドで入力した最初の2つのフィールドで、このレポートのレベル区切りになります。3つめのフィールド(主科目)は、レポート・ディレクタ・テンプレートで入力されたもので、これも順序設定に使用されます。[Object Account]をクリックすることにより、主科目をレベル区切りとして定義できます。クリックすると現在表示されているボックスの上のフィールドに[Object Account]が表示されます。

事前定義済みのデータ順序およびレベル区切りを一時変更する場合は、[Advanced(上級)]ボックスの [I'd like to setup the sequencing and level breaking myself(順序およびレベル区切りを自分で設定する)] をオンすると、<Section Data Sequencing(セクション・データ順序)>フォームが表示されるので、自分でデータ順序とレベル区切りを設定することができます。[Available Columns(使用可能なカラム)] セクションに表示されているフィールドは、事前定義済みのビジネス・ビューから来ています。この例では、事前定義済みのビジネス・ビューは V8300001 です。

12. <Help with Section Data Selection(セクション・データ選択のヘルプ)>で、損益計算書を作成して、自分のデータ選択を追加するように選んで[次へ]をクリックします。

レポート・ディレクタ・テンプレートの [Properties(プロパティ)] タブで会計基準を表示することを選択したので、次のフォームではどの会計データを表示するかが尋ねられます。

1 行のデータ選択を持つ <Section Data Selection(セクション・データ選択)> フォームが表示されます。

13. <Section Data Selection(セクション・データ選択)> で、既存行の右オペランドを "5100-5200" に変更して、次の行を追加します。

- And Fiscal Year is equal to 5
- And Ledger Type is equal to AA
- And Company is equal to 60

Report Director

Section Data Selection

Define the subset of data your report will use when reading records from the database. In other words, filter the incoming data so that your report only processes certain records.

Icons: [Delete] [Add] [Refresh]

	Operator	Left Operand	Comparison	Right Operand
	Where	BC Object Account (F0901)	is equal to	"5100-5200"
	And	BC Fiscal Year (F0902)	is equal to	"5"
	And	BC Ledger Type (F0902)	is equal to	"AA"
	And	BC Company (F0901)	is equal to	"00060"

< Back Next > Cancel Help

損益計算書内の同じスマート・フィールド・カラムに対するデータ選択が同じ場合は、スマート・フィールド・カラムに対してデータ選択を指定する必要はありません。各カラムに対してデータ選択を指定しない場合は、ここで説明するようにデータ選択を指定する必要があります。レポート全体に対してデータ選択を指定したレポートは、各スマート・フィールド・カラムに対して指定したレポートよりも効率が良く、実行速度も上がります。

14. 〈Additional Properties (追加プロパティ)〉で、[Reverse Sign (符号反転)]に[Revenue+]と[Expense-]を表示するように指定して[次へ]をクリックします。

この設定により、レポートの売上データにマイナス符号が表示されなくなります。

15. 〈Finish (完了)〉フォームで、[完了]をクリックしてレポートを保存し、プレビューします。

レポートの理解

スマート・フィールドのイベント・ルールを検証すると、作成したオブジェクトがレポートでどう実装されているかが確認できます。〈Report Design〉で[Report]タブをクリックして、スマート・フィールド・カラムの変数部分をクリックします。[Edit (編集)]メニューから[Event Rules (イベント・ルール)]を選択して、Column Inclusion (カラム組込み) イベント・ルールに注目します。このイベントは、Quarterly Sales スマート・フィールド・データ辞書項目を作成したときに書いたものです。

Quarterly Amount ER テキストをダブルクリックして、データ構造体を表示します。データ構造体名とイベント・ルール・ビジネス関数の情報が、〈Business Functions (ビジネス関数)〉フォームの左上に表示されます。フォームの右下の[Data Structure (データ構造体)] セクションに完了したマッピングがすべて表示されます。

最初のデータ項目 (Quarterly Amount) がユーザー・プロンプトであり、1 にマップされていることに注目してください。これは、レポート作成を開始して、最初のスマート・フィールド・カラムを追加したときに入力した数字です。1 は第 1 四半期データを表示することを意味します。

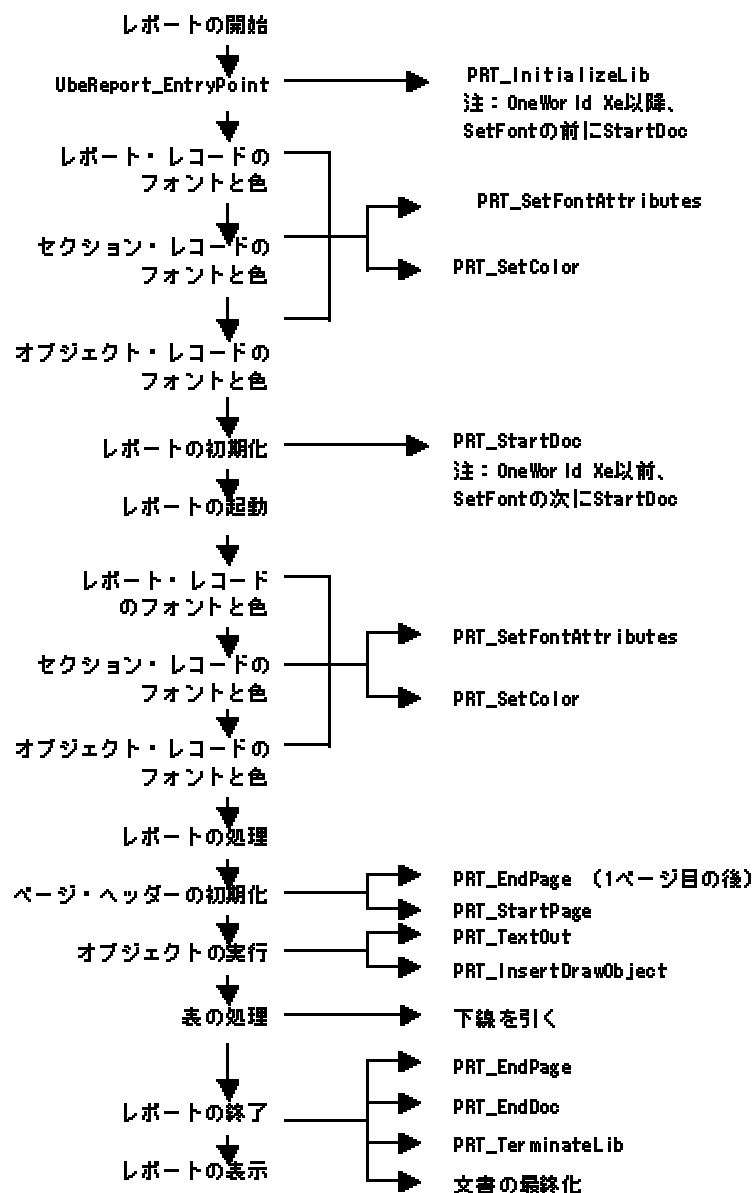
他のパラメータは指定マッピングに従って渡されるので、レポート作成時に〈Report Design〉でマップする必要はありません。スマート・フィールドを使わない場合は、レポート作成時に、使用するビジネス関数および値の渡し方を指定する必要があります。

OSA(Output Stream Access/出力ストリーム・アクセス)

UBE アプリケーションは通常、コンポーネントを特定の順序で実行します。実行中に、OSA(Output Stream Access/出力ストリーム・アクセス)インターフェイスを通じてイベントを実行することができます。

下の図では実行ポイントを説明しています。

実行ポイントのフロー・チャート



PRT_InitializeLib および PRT_TerminateLib を除いては、実行中のどの時点でも OSA 関数を呼び出すことができます。関数は作成することも、既存の XML ライブラリやその関数を使用することもできます。

OSA インターフェイスの作成と関連付け

OSA を使ってレポートを出力する前に、インターフェイスを定義してください。通常は 1 度設計すると、OSA は目的のレポートまたはバージョンに関連付けられます。このデフォルト OSA は投入時に一時変更できます。選択した OSA によって結果は異なりますが、投入時に定義済みの OSA を使ってレポートを出力することもできます。OSA は、デフォルト・プリンタの割当てと同じようにして、環境、ホスト、ユーザー、およびグループに関連付けることもできます。OSA インターフェイスとオブジェクトの関連付けは任意です。

必要に応じて、複数のインターフェイスを定義する場合もあります。

▶ OSA インターフェイス定義を作成するには

〈プリンタ〉メニュー(GH9013)から〈OSA(出力ストリーム・アクセス)の設定〉を選択します。

1. 〈OSA(出力ストリーム・アクセス)の設定〉で、出力ストリーム・アクセス・セットアップの定義を追加または変更するボタンをクリックします。
2. 〈出力ストリーム・アクセス・インターフェイスの定義の処理〉で、[追加]をクリックします。
3. 〈出力ストリーム・アクセス・インターフェイス定義の改訂〉で、[出力ストリーム・アクセス・インターフェイス名]フィールドに名前を入力します。
 - 出力ストリーム・アクセス・インターフェイス名

注:

J.D. Edwards の OSA インターフェイスは“JDE”で始まるため、ユーザーが使用するインターフェイスには“JDE”を使わないことをお勧めします。

4. イベントを実行する各実行ポイントで、関連するローに関数名を入力します。
関数の関連付けられていない実行ポイントは、OSA インターフェイスの実行時に無視されます。
5. 完了したら[OK]をクリックします。

▶ オブジェクトと OSA インターフェイスを関連付けるには

〈プリンタ〉メニュー(GH9013)から〈OSA(出力ストリーム・アクセス)の設定〉を選択します。

1. 〈OSA(出力ストリーム・アクセス)の設定〉で、出力ストリーム・アクセス・インターフェイス使用スペックを追加または変更するボタンをクリックします。
2. 〈出力ストリーム・アクセス・インターフェイスの使用の処理〉で、[追加]をクリックします。
3. 〈出力ストリーム・アクセス・インターフェイス使用の改訂〉で、関連付ける OSA インターフェイス名を次のフィールドに入力します。
 - 出力ストリーム・アクセス・インターフェイス名

インターフェイス名はビジュアル・アシストを使って検索することもできます。

4. インターフェイスをオブジェクトに関連付け、[OK]をクリックします。

優先順位の解決方法

次のテーブルでは、インターフェイスに 1 つ以上のオブジェクトに関連付ける場合、優先順位が衝突したときの解決方法が示されています。

デフォルトの OSA 曖昧性解消、優勢順位

ユーザー/グループ	レポート	バージョン	環境	ホスト・タイプ
username	report	version	environment	hosttype
	report	version	environment	*ALL
	report	version	*ALL	hosttype
	report	version	*ALL	*ALL
	report	*ALL	environment	hosttype
	report	*ALL	environment	*ALL
	report	*ALL	*ALL	hosttype
	report	*ALL	*ALL	*ALL
	*ALL	*ALL	environment	hosttype
	*ALL	*ALL	environment	*ALL
	*ALL	*ALL	*ALL	hosttype
	*ALL	*ALL	*ALL	*ALL
groupname	report	version	environment	hosttype
	report	version	environment	*ALL
	report	version	*ALL	hosttype
	report	version	*ALL	*ALL

	report	*ALL	environment	hosttype
	report	*ALL	environment	*ALL
	report	*ALL	*ALL	hosttype
	report	*ALL	*ALL	*ALL
	*ALL	*ALL	environment	hosttype
	*ALL	*ALL	environment	*ALL
	*ALL	*ALL	*ALL	hosttype
	*ALL	*ALL	*ALL	*ALL
*PUBLIC	report	version	environment	hosttype
	report	version	environment	*ALL
	report	version	*ALL	hosttype
	report	version	*ALL	*ALL
	report	*ALL	environment	hosttype
	report	*ALL	environment	*ALL
	report	*ALL	*ALL	hosttype
	report	*ALL	*ALL	*ALL
	*ALL	*ALL	environment	hosttype
	*ALL	*ALL	environment	*ALL

OSA ライブラリの作成

ライブラリは関数の集まりです。関数は使用する前にライブラリに含める必要があります。関数およびライブラリは必要に応じて作成できます。

J.D. Edwards では、ソース・コードと共にこのライブラリを提供しているため、OSA ライブラリを作る際に参考とすることができます。以下に紹介する情報は、独自のライブラリを作成する開発者用のものです。

関数シグネチャ

OSA 関数は、JDEOSA ファイルで定義された関数ポインタを使用して呼び出されます。したがって、OSA 関数は同じパラメータを使って定義し、値を返す必要があります。

```
void MyStartDoc (POSA_REPORT_INFO);
void MySetFont (POSA_REPORT_INFO, POSA_FONT_INFO);
void MySetColor (POSA_REPORT_INFO, unsigned long int);
void MyStartPage (POSA_REPORT_INFO);
void MyTextOut (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyDrawObject (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyUnderline (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyEndPage (POSA_REPORT_INFO, POSA_LINK_INFO, unsigned long);
void MyEndDoc (POSA_REPORT_INFO, POSA_PAGEOF_INFO, unsigned long);
void MyFinalize (POSA_REPORT_INFO);
void MyStartDoc (POSA_REPORT_INFO);
void MySetFont (POSA_REPORT_INFO, POSA_FONT_INFO);
void MySetColor (POSA_REPORT_INFO, unsigned long int);
void MyStartPage (POSA_REPORT_INFO);
void MyTextOut (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyDrawObject (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyUnderline (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
void MyEndPage (POSA_REPORT_INFO, POSA_LINK_INFO, unsigned long);
void MyEndDoc (POSA_REPORT_INFO, POSA_PAGEOF_INFO, unsigned long);
void MyFinalize (POSA_REPORT_INFO);
```

定義ファイルの構造体

ここでは次のファイル構造体について説明します。

- レポート情報の構造体
- セクション情報の構造体
- 項目情報の構造体
- オブジェクト情報の構造体
- フォント情報の構造体
- リンク情報の構造体
- ページ情報の構造体

レポート情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。レポート処理の最初にロードされ、ポインタによってすべての OSA 関数に渡されます。外部データ・ポインタ・メンバは、関数呼出し間のレポート・レベル・データを保持して渡すために OSA 関数によって使用されます。外部アプリケーションは、ログ・メッセージおよびメッセージの重大度を返して、それを UBELogMessage 関数に送ることもできます。

```
struct tagOSA_REPORT_INFO
{
char szReport[11];
char szVersion[11];
char szMachineKey[16];
char szEnhv[11];
char szUser[21];
char szOneWorldRelease[11];
char szReportTime[12];
char szDateToday[11];
unsigned int nLocalCodePage;
unsigned int nRemoteCodePage;
int nLocalOperatingSystem;
int nRemoteOperatingSystem;
char szPrinter[256];
unsigned long ulPageSizeVertical;
unsigned long ulPageSizeHorizontal;
ulong ulNumberOfCopies;
ulong ulPaperSource;
```

```

unsigned short nPageOrientation;
unsigned short nPrinterLinesPerInch;

unsigned short nPrinterCharactersPerInch;
unsigned short nPrinterDefaultFontSize;
char szPDLProgram[11];
char szDecimalString[2];
char cThousandsSeparator;
char szDateFormat[5];
char cDateSeparator;
char *szReportTitle;
char szCompanyName[31];
unsigned long ulJobNum;
unsigned long ulCurrentPageNumber;
unsigned long ulActualCurrentPageNumber;
char szUBEFileName[300];
char szOSAFileName[300];
unsigned long ulNumberOfSections;
OSA_SECTION_INFO *pOSASectionInfo;
void *pExternalDataPointer;
unsigned short *pnLogMessageSeverity;
char szLogMessage[256];
char szFutureUse[256];
};

```

セクション情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。この構造体の配列は、レポート処理の最初にロードされ、配列ポインタとカウンタは OSA レポート情報構造体の一部として保管されます。外部データ・ポインタ・メンバが含まれ、関数コール間のレポート・レベル・データを保持して渡すために OSA 関数によって使用されます。

```

struct tagOSA_SECTION_INFO
{
char *szSectionName;
char szSectionType[50];
char szBusinessViewName[11];
unsigned long idSection;
unsigned long idParentSection;

```

```

unsigned long ulNumberOfObjects;
OSA_OBJECT_INFO *pOSAObjectInfo;

void *pExternalDataPointer;

char szFutureUse[256];

};

```

項目情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。各 OSA オブジェクトの情報構造体に対して、1 つの OSA の項目情報の構造体が Text Out (テキスト・アウト) や Insert Draw Object (描画オブジェクトの挿入) などのオブジェクト・レベルの実行ポイントの前にロードされます。

```

struct tagOSA_ITEM_INFO
{
    unsigned long ulOccurenceCount;
    unsigned long ulRecordFetchCount;
    unsigned long ulNumPDFLines;
    unsigned short nReprinting;
    unsigned short nUnderlineThickness;
    unsigned short nUnderlineMargin;
    unsigned long int ColorRef;
    OSA_FONT_INFO zFontInfo;
    unsigned short nPointSize;
    unsigned short nDisplayStyle;
    float fObjectHorizontalPosition;
    float fObjectVerticalPosition;
    float fValueHorizontalPosition;
    float fValueVerticalPosition;
    float fValueEndingHorizontalPosition;
    float fValueEndingVerticalPosition;
    char *szValue;
    char *szFullText;
};

```

オブジェクト情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。各セクションには、レポート処理の開始時にこの構造体の配列がロードされます。各 SectionInfo 構造体には、配列に含まれる要素の数を示すメンバと、ObjectInfo (オブジェクト情報の)

構造体の配列に対するポインタが含まれます。ただし、実行ポイントによっては、各 ObjectInfo 構造体は、関連付けられた OSA 関数にポインタによって渡されます。各 OSALtemInfo(項目情報の)構造体には、オブジェクト・レベル・データを動的に暗号化する OSALtemInfo 構造体が含まれます。外部データ・ポインタ・メンバは、関数コール間のレポート・レベル・データを保持して渡すために OSA 関数によって使用されます。

```
struct tagOSA_OBJECT_INFO
{
    char szDataDictionaryAlias[41];
    char szObjectName[31];
    unsigned long idObject;
    unsigned long idSection;
    unsigned long idRow;
    char szObjectType[3];
    unsigned short nLength;
    unsigned short idEverestType;
    char cDataType;
    OSA_ITEM_INFO zOSAItemInfo;
    POSA_SECTION_INFO pOSASectionInfo;
    void *pExternalDataPointer;
    char szFutureUse[256];
};
```

フォント情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。この構造体は、OSA 関数の実行前にロードされ、ポインタとして関数に渡されます。

```
struct tagOSA_FONT_INFO
{
    long int lfHeight;
    long int lfWidth;
    long int lfEscapement;
    long int lfOrientation;
    long int lfWeight;
    unsigned char lfItalic;
    unsigned char lfUnderline;
    unsigned char lfStrikeOut;
    unsigned char lfCharSet;
```

```

unsigned char lfOutPrecision;
unsigned char lfClipPrecision;

unsigned char lfQuality;

unsigned char lfPitchAndFamily;

unsigned char lfFaceName[32];

unsigned short nPointSize;

char szAdobeFontName[100];

};

```

リンク情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。この構造体の配列は自動入力され、[End Page(ページ終了)]実行ポイントで送信されます。

```

struct tagOSA_LINK_INFO
{
float fLowerLeftHorizontal;
float fLowerLeftVertical;
float fUpperRightHorizontal;
float fUpperRightVertical;
char szApplication[11];
char szForm[11];
char *szParms;
};

```

ページ情報の構造体

この構造体の定義は、外部アプリケーションでできるように共通のヘッダー・ファイルとして準備します。この構造体の配列は自動入力され、[End Document(文書終了)]実行ポイントで送信されます。

```

struct tagOSA_PAGEOF_INFO
{
unsigned long ulBeginPage;
unsigned long ulEndPage;
unsigned long ulTotalPage;
};

```


関数パラメータ

次の関数パラメータを定義します。

- 文書の開始パラメータ
- フォントの設定パラメータ
- 色の設定パラメータ
- ページの開始パラメータ
- テキスト・アウト・パラメータ
- 描画オブジェクトの挿入パラメータ
- 下線パラメータ
- ページの終了パラメータ
- 文書の終了パラメータ
- 文書の完了パラメータ

文書の開始パラメータ

[Start Doc(文書の開始)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo
OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo

フォントの設定パラメータ

[Set Font(フォントの設定)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo,
OSA_FONT_INFO *pOSAFontInfo

色の設定パラメータ

[Set Color(色の設定)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo,
unsigned long int zColorRef

ページの開始パラメータ

[Start Page(ページの開始)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo

テキスト・アウト・パラメータ

[Text Out(テキスト・アウト)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo, OSA_OBJECT_INFO *pOSAObjectInfo

描画オブジェクトの挿入パラメータ

[Draw Lines(下線)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo, OSA_OBJECT_INFO *pOSAObjectInfo

下線パラメータ

[Draw Lines(下線)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo, OSA_OBJECT_INFO *pOSAObjectInfo

ページの終了パラメータ

[End Page(ページの終了)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo, OSA_LINK_INFO *pOSALinkInfo, unsigned long ulNumberOfLinks
--

文書の終了パラメータ

[End Document(文書の終了)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo, OSA_PAGEOF_INFO *pOSAPageOfInfo, unsigned long ulNumberOfPageOf
--

文書の完了パラメータ

[Finalizet Doc(文書の完了)]実行ポイントに関連付けられた OSA 関数は、次のパラメータで呼ばれます。

OSA_REPORT_INFO *pOSAReportInfo

OSA 文書の取込み

外部アプリケーションを使って OSA 関数で作成したファイル名を、OSAReportInfo 構造体内の szOSAFileName メンバとして指定できます。同じ名前のメンバは、UBEVar 構造体に追加されます。[End Document]実行ポイントが処理されると、OSAReportInfo メンバ構造体の szOSAFileName 値が、対応する UBEVar メンバにコピーされます。ジョブの完了時点で、UBEVar 構造体はジョブの制御状況マスター(F986110)の中で更新されます。

インクルード・ファイル

OSA を通してインターフェイスをとる関数に必要な構造体および関数の定義は、JDEOSA.H ファイルに含まれます。このファイルは ERP の system¥include ディレクトリにあります。このファイルの内容は次のとおりです。

```

/*****
Header File Description
* JDEOSA.H Header file to support Output Stream Access functions
*
*****/
*
Copyright (c) 1999 – 1999
J.D. Edwards & Company
*
This material is proprietary to J.D. Edwards & Company.
All rights reserved. The methods and techniques described herein are considered trade secrets
and/or confidential. Reproduction or distribution, in whole or in part, is forbidden except by express
written permission of J.D. Edwards & Company.
*
*****/
#ifndef JDEOSA_H
#define JDEOSA_H
/** Page Of Information Structure **/
struct tagOSA_PAGEOF_INFO
{
    unsigned long ulBeginPage;
```

```

unsigned long ulEndPage;
unsigned long ulTotalPage;

};

typedef struct tagOSA_PAGEOF_INFO OSA_PAGEOF_INFO, *POSA_PAGEOF_INFO;

/** Link Information Structure */
struct tagOSA_LINK_INFO
{
float fLowerLeftHorizontal;
float fLowerLeftVertical;
float fUpperRightHorizontal;
float fUpperRightVertical;
char szApplication[11];
char szForm[11];
char *szParms;
};

typedef struct tagOSA_LINK_INFO OSA_LINK_INFO, * POSA_LINK_INFO;

/** Font Information */
struct tagOSA_FONT_INFO
{
long int lfHeight;
long int lfWidth;
long int lfEscapement;
long int lfOrientation;
long int lfWeight;
unsigned char lfItalic;
unsigned char lfUnderline;
unsigned char lfStrikeOut;
unsigned char lfCharSet;
unsigned char lfOutPrecision;
unsigned char lfClipPrecision;
unsigned char lfQuality;
unsigned char lfPitchAndFamily;
char lfFaceName[32];
unsigned short nPointSize;
char szAdobeFontName[100];

```

```

};
typedef struct tagOSA_FONT_INFO OSA_FONT_INFO, * POSA_FONT_INFO;

/** Item Information */
struct tagOSA_ITEM_INFO
{
    unsigned long ulOccurenceCount;
    unsigned long ulRecordFetchCount;
    unsigned long ulNumPDFLines;
    unsigned short nReprinting;
    unsigned short nUnderlineThickness;
    unsigned short nUnderlineMargin;
    unsigned long int ColorRef;
    OSA_FONT_INFO zFontInfo;
    unsigned short nDisplayStyle;
    float fObjectHorizontalPosition;
    float fObjectVerticalPosition;
    float fObjectEndingHorizontalPosition;
    float fObjectEndingVerticalPosition;
    float fValueHorizontalPosition;
    float fValueVerticalPosition;
    float fValueEndingHorizontalPosition;
    float fValueEndingVerticalPosition;
    char *szValue;
    char *szFullText;
};

typedef struct tagOSA_ITEM_INFO OSA_ITEM_INFO, * POSA_ITEM_INFO;

/** Object Information */
struct tagOSA_OBJECT_INFO
{
    char szDataDictionaryAlias[41];
    char szObjectName[31];
    unsigned long idObject;
    unsigned long idSection;
    unsigned long idRow;
    char szObjectType[3];

```

```

unsigned short nLength;
unsigned long idEverestType;

char cDataType;

OSA_ITEM_INFO zOSAItemInfo;

void *pOSASectionInfo;

void *pExternalDataPointer;

char szFutureUse[256];
};

typedef struct tagOSA_OBJECT_INFO OSA_OBJECT_INFO, * POSA_OBJECT_INFO;

/** Section Information Structure **/

struct tagOSA_SECTION_INFO
{
char *szSectionName;
char szSectionType[50];
char szBusinessViewName[11];
unsigned long idSection;
unsigned long idParentSection;
unsigned long ulNumberOfObjects;
unsigned long ulRecordFetchCount;
OSA_OBJECT_INFO *pOSAObjectInfo;
void *pExternalDataPointer;
char szFutureUse[256];
};

typedef struct tagOSA_SECTION_INFO OSA_SECTION_INFO, * POSA_SECTION_INFO;

/** Report Information Structure ***/

struct tagOSA_REPORT_INFO
{
char szReport[11];
char szVersion[11];
char szMachineKey[16];
char szEnhv[11];
char szUser[21];
char szOneWorldRelease[11];
char szReportTime[12];
char szDateToday[11];
};

```

```

unsigned int nLocalCodePage;
unsigned int nRemoteCodePage;

int nLocalOperatingSystem;
int nRemoteOperatingSystem;

char szPrinter[256];

unsigned long ulPageSizeVertical;
unsigned long ulPageSizeHorizontal;
unsigned long ulNumberOfCopies;
unsigned long ulPaperSource;
unsigned short nPageOrientation;
unsigned short nPrinterLinesPerInch;
unsigned short nPrinterCharactersPerInch;
unsigned short nPrinterDefaultFontSize;

char szPDLProgram[11];
char szDecimalString[2];
char cThousandsSeparator;
char szDateFormat[5];
char cDateSeparator;
char *szReportTitle;
char szCompanyName[31];
unsigned long ulJobNum;
unsigned long ulCurrentPageNumber;
unsigned long ulActualCurrentPageNumber;
char szUBEFileName[300];
char szOSAFileName[300];
unsigned long ulNumberOfSections;
OSA_SECTION_INFO *pOSASectionInfo;
void *pExternalDataPointer;
unsigned short *pnLogMessageSeverity;
char szLogMessage[256];
char szFutureUse[256];
};

typedef struct tagOSA_REPORT_INFO OSA_REPORT_INFO, * POSA_REPORT_INFO;

/** Execution Point Identification Numbers */
#define OSA_EXP_N_START_DOC 1

```

```

#define OSA_EXPN_SET_FONT 2
#define OSA_EXPN_SET_COLOR 3

#define OSA_EXPN_START_PAGE 4

#define OSA_EXPN_TEXT_OUT 5

#define OSA_EXPN_DRAW_OBJECT 6

#define OSA_EXPN_UNDERLINE 7

#define OSA_EXPN_END_PAGE 8

#define OSA_EXPN_END_DOC 9

#define OSA_EXPN_FINALIZE_DOC 10

/** OSA Function Prototypes */
typedef void (*FP_OSA_START_DOC) (POSA_REPORT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_SET_FONT) (POSA_REPORT_INFO, POSA_FONT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_SET_COLOR) (POSA_REPORT_INFO, unsigned long int);
typedef void (*FP_OSA_START_PAGE) (POSA_REPORT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_TEXT_OUT) (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_DRAW_OBJECT) (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_UNDERLINE) (POSA_REPORT_INFO, POSA_OBJECT_INFO);
typedef void (*FP_OSA_END_PAGE) (POSA_REPORT_INFO, POSA_LINK_INFO, unsigned long);
typedef void (*FP_OSA_END_DOC) (POSA_REPORT_INFO, POSA_PAGEOF_INFO, unsigned long);
typedef void (*FP_OSA_FINALIZE_DOC) (POSA_REPORT_INFO);

#endif

```

ファイルのロケーションと名前

UBE では、次のステップを実行して OSA ライブラリをロードします。

ライブラリ名が OSA インターフェイス定義テーブル(F986169)で定義されているようにピリオド(.)が含まれる場合、UBE はピリオドとその後続く文字を無視します。

UBE では、UBE を実行するプラットフォームに応じて次のように接頭辞、拡張子、またはその両方を追加します。

プラット フォーム	拡張ライブラリ名
PC	libname + ".dll"
HPUX	"lib" + libname + ".sl"
AIX, SUN	"lib" + libname + ".so"
AS/400	libname

UBE は、LoadLibrary 関数に結果となるライブラリ名を渡します。標準検索方法を使ってライブラリを検索するのに使います。

OSA ファイル名

OSA ファイルをサーバーから取り込む場合、OSA ファイル名はあるフォーマットを想定して付けられます。AS/400 の場合、ファイル名は「LIBRARY/FILE(MEMBER)」というフォーマットで保管され、「MEMBER.FILE」という名前クライアント・マシンにファイルが保管されます。NT サーバーの場合は、DIRECTORY.EXT として保管されます。その他のすべてのプラットフォームの場合は、DIRECTORY/FILE.EXT として保管されます。

OSASample ソース・コード

OSASample は 3 つのコンポーネントで構成されています。

- *OSAStruct.h*
- *OSASample.h*
- *OSASample.c*

OSAStruct.h

```
#ifndef OSASAMPLE_DEF_HPP
#define OSASAMPLE_DEF_HPP

#define chAmpersand '&'
#define chOpenAngle '<'
#define chCloseAngle '>'
#define chDoubleQuote '"'
#define PAGEOF_TYPE "TP"

typedef struct tagOSASAMPLE_STRUCT
{
    unsigned short nCount;
    FILE *fpOutput;
```

```

} OSASAMPLE_STRUCT, *POSASAMPLE_STRUCT;
#endif

```

OSASample.h

```

#ifndef __OSASAMPLE_H_
#define __OSASAMPLE_H_

#include <string.h>
#include <assert.h>
#include <stdio.h>
#include <jdeos.h>

#if defined (_WIN32)
#undef CDECL
#define CDECL _cdecl
#endif

#if defined(IAMOSASAMPLE)
#define APIEXPORT __declspec(dllexport)
#else
#define APIEXPORT __declspec(dllimport)
#endif

#define CDECL
#define APIEXPORT

#define CLASSEXPOR APIEXPORT
#undef EXTERNC
#if defined(_cplusplus)
#define EXTERNC extern "C"
#else
#define EXTERNC
#endif

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_StartDoc(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_SetFont(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_FONT_INFO pOSAFontInfo);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_SetColor(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo, unsigned
long int zColorRef);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_EndDoc(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_PAGEOF_INFO pOSAPageofInfo,
unsigned long ulNumberOfStructs);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_StartPage(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo);

```

```

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_EndPage(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_LINK_INFO pOsaLinkInfo,
unsigned long ulNumberOfLinks);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_TextOut(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_DrawObject(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_DrawUnderLine(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo);

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_FinalizeDoc(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo);

#endif

```

OSASAMPLE.c

```

/* Author: Kevin Reitz */
/* Date: 10/05/99 */
#include "OSASample.h"
#include "OSAStruct.h"

/*-----
* Function Name: OSA_ReportInfoOut
* Parameters: OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* OSA_REPORT_INFO * Pointer to Report Info structure
* Exceptions: None
* Return Value: None
* Description: Output data from the Report Info structure
*----- */

void OSA_ReportInfoOut(OSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct, POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo)
{
/* Check for valid parameter values. If pointers are void, return. */
if (!pOSAStruct || !pOSAStruct->fpOutput || !pOSAReportInfo)
{
return;
}

/* Print values to the output file */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "***** REPORT INFO *****\n");
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Report: %s\n", pOSAReportInfo->szReport);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Version: %s\n", pOSAReportInfo->szVersion);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "MachineKey: %s\n", pOSAReportInfo->szMachineKey);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Environment: %s\n", pOSAReportInfo->szEnhv);

```

```

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "User: %s\n", pOSAReportInfo->szUser);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Release: %s\n", pOSAReportInfo->szOneWorldRelease);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Time: %s\n", pOSAReportInfo->szReportTime);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Date: %s\n", pOSAReportInfo->szDateToday);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Local Code Page: %d\n", pOSAReportInfo->nLocalCodePage);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Remote Code Page: %d\n", pOSAReportInfo->nRemoteCodePage);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Local Operating System: %d\n", pOSAReportInfo->nLocalOperatingSystem);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Remote Operating System: %d\n", pOSAReportInfo->nRemoteOperatingSystem);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Printer: %s\n", pOSAReportInfo->szPrinter);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Page Height: %d\n", pOSAReportInfo->ulPageSizeVertical);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Page Width: %d\n", pOSAReportInfo->ulPageSizeHorizontal);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Number Of Copies: %d\n", pOSAReportInfo->ulNumberOfCopies);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Paper Source: %d\n", pOSAReportInfo->ulPaperSource);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Orientation: %d\n", pOSAReportInfo->nPageOrientation);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Lines Per Inch: %d\n", pOSAReportInfo->nPrinterLinesPerInch);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Default Font Size: %d\n", pOSAReportInfo->nPrinterDefaultFontSize);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Printer Type: %s\n", pOSAReportInfo->szPDLProgram);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Decimal Separator: %s\n", pOSAReportInfo->szDecimalString);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Thousands Separator: %c\n", pOSAReportInfo->cThousandsSeparator);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Date Format: %s\n", pOSAReportInfo->szDateFormat);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Date Separator: %c\n", pOSAReportInfo->cDateSeparator);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Report Title: %s\n", pOSAReportInfo->szReportTitle);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Company Name: %s\n", pOSAReportInfo->szCompanyName);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Job Number: %d\n", pOSAReportInfo->ulJobNum);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Current Page Number: %d\n", pOSAReportInfo->ulCurrentPageNumber);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Actual Page Number: %d\n", pOSAReportInfo->ulActualCurrentPageNumber);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "UBE File Name: %s\n", pOSAReportInfo->szUBEFileName);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "OSA File Name: %s\n", pOSAReportInfo->szOSAFileName);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Number of Sections: %d\n", pOSAReportInfo->ulNumberOfSections);

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** END REPORT INFO *****\n");

return;
}

/*-----

* Function Name: OSA_SectionInfoOut
* Parameters: OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* OSA_SECTION_INFO * Pointer to Section Info structure
* Exceptions: None

```

```

* Return Value: None
* Description: Output data from the Section Info structure

*----- */

void OSA_SectionInfoOut(POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct, POSA_SECTION_INFO pOSASectionInfo)
{
    /* Check for valid parameter values. If pointers are void, return. */
    if (!pOSAStruct || !pOSAStruct->fpOutput || !pOSASectionInfo)
    {
        return;
    }

    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n\t***** SECTION INFO *****\n\n");
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tSection Name: %s\n", pOSASectionInfo->szSectionName);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tSection Type: %s\n", pOSASectionInfo->szSectionType);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tBusiness View Name: %s\n", pOSASectionInfo->szBusinessViewName);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tSection ID: %d\n", pOSASectionInfo->idSection);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tParent Section ID: %d\n", pOSASectionInfo->idParentSection);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tNumber of Objects: %d\n", pOSASectionInfo->ulNumberOfObjects);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\tRecord Fetch Count: %d\n", pOSASectionInfo->ulRecordFetchCount);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n\t***** END SECTION INFO *****\n\n");

    return;
}

/*----- */

* Function Name: OSA_ObjectInfoOut
* Parameters: OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* OSA_OBJECT_INFO * Pointer to Object Info structure
* unsigned short int Flag to control output of Item Info
* Exceptions: None
* Return Value: None
* Description: Output data from the Object Info and Item Info structures

*----- */

void OSA_ObjectInfoOut(POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo,
unsigned short int nPrintItemInfo)
{
    /* Check for valid parameter values. If pointers are void, return. */
    if (!pOSAStruct || !pOSAStruct->fpOutput || !pOSAObjectInfo)
    {
        return;
    }

```

```

}
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n\t\t***** OBJECT INFO *****\n\n");
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tData Dictionary Item: %s\n", pOSAObjectInfo->szDataDictionaryAlias);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject Name: %s\n", pOSAObjectInfo->szObjectName);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject ID: %d\n", pOSAObjectInfo->idObject);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tSection ID: %d\n", pOSAObjectInfo->idSection);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tRow ID: %d\n", pOSAObjectInfo->idRow);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject Type: %s\n", pOSAObjectInfo->szObjectType);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject Length: %d\n", pOSAObjectInfo->nLength);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tOneWorld Data Type: %d\n", pOSAObjectInfo->idEverestType);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tGeneral Data Type: %c\n", pOSAObjectInfo->cDataType);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n\t\t***** END OBJECT INFO *****\n\n");

/* Only output Item Info if the parameter indicates to do so */
if (nPrintItemInfo)
{
    POSA_ITEM_INFO pOSAItemInfo = &(pOSAObjectInfo->zOSAItemInfo);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n\t\t***** ITEM INFO *****\n\n");
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tOccurence Count: %d\n", pOSAItemInfo->ulOccurenceCount);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tRecord Fetch Count: %d\n", pOSAItemInfo->ulRecordFetchCount);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tNumber Of Lines: %d\n", pOSAItemInfo->ulNumPDFLines);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tReprinting: %d\n", pOSAItemInfo->nReprinting);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tUnderline Thickness: %d\n", pOSAItemInfo->nUnderlineThickness);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tUnderline Margin: %d\n", pOSAItemInfo->nUnderlineMargin);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tColor Reference: %d\n", pOSAItemInfo->ColorRef);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tFont Face Name: %s\n", pOSAItemInfo->zFontInfo.lfFaceName);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tFont Point Size: %d\n", pOSAItemInfo->zFontInfo.nPointSize);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tAdobe Font Name: %s\n", pOSAItemInfo->zFontInfo.szAdobeFontName);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tDisplay Style: %d\n", pOSAItemInfo->nDisplayStyle);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject Start X: %f\n", pOSAItemInfo->fObjectHorizontalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject Start Y: %f\n", pOSAItemInfo->fObjectVerticalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject End X: %f\n", pOSAItemInfo->fObjectEndingHorizontalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tObject End Y: %f\n", pOSAItemInfo->fObjectEndingVerticalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tValue Start X: %f\n", pOSAItemInfo->fValueHorizontalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tValue Start Y: %f\n", pOSAItemInfo->fValueVerticalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tValue End X: %f\n", pOSAItemInfo->fValueEndingHorizontalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tValue End Y: %f\n", pOSAItemInfo->fValueEndingVerticalPosition);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tValue Text: %s\n", pOSAItemInfo->szValue);
    fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\t\tFull Object Text: %s\n", pOSAItemInfo->szFullText);
}

```

```

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "%n\t\t***** END ITEM INFO *****\n");
}

else
{
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "%n\t\t***** No Item Info At This Point *****\n");
}

return;
}

/*-----
* Function Name: OSA_LinkInfoOut
* Parameters: OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* OSA_LINK_INFO * Pointer to array of Link Info structures
* unsigned long The number of elements in the Link Info array
* Exceptions: None
* Return Value: None
* Description: Output data from the Link Info structures, if any.
*----- */

void OSA_LinkInfoOut(OSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct,
POSA_LINK_INFO pOSALinkInfo,
unsigned long ulNumberOfLinks)
{
unsigned short i =0;

/* Check for valid parameter values. If pointers are void, return. */
if (!pOSAStruct || !pOSAStruct->fpOutput)
{
return;
}

/* Check for valid parameter values. If pointer is void or array is empty,
output a message and return. */
if (!pOSALinkInfo || !ulNumberOfLinks)
{
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "%n** No Link Information **\n");
return;
}

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "%n***** LINK INFO *****\n\n");
for (i=0; i<ulNumberOfLinks; i++)
{
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Lower Left X: %f\n", pOSALinkInfo[i].fLowerLeftHorizontal);

```

```

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Lower Left Y: %f\n", pOSALinkInfo[i].fLowerLeftVertical);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Upper Right X: %f\n", pOSALinkInfo[i].fUpperRightHorizontal);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Upper Right Y: %f\n", pOSALinkInfo[i].fUpperRightVertical);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Application Name: %s\n", pOSALinkInfo[i].szApplication);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Form Name: %s\n", pOSALinkInfo[i].szForm);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Parameter String: %s\n\n", pOSALinkInfo[i].szParms);
}

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** END LINK INFO *****\n");

return;
}

/*-----
* Function Name: OSA_FontInfoOut
* Parameters: OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* OSA_FONT_INFO * Pointer to Font Info structure
* Exceptions: None
* Return Value: None
* Description: Output data from the Font Info structure
*----- */

void OSA_FontInfoOut(OSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct,
OSA_FONT_INFO pFontInfo)
{
/* Check for valid parameter values. If pointers are void, return. */
if (!pOSAStruct || !pOSAStruct->fpOutput || !pFontInfo)
{
return;
}

fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** FONT INFO *****\n\n");
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Font Face Name: %s\n", pFontInfo->lfFaceName);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Font Point Size: %d\n", pFontInfo->nPointSize);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "Adobe Font Name: %s\n", pFontInfo->szAdobeFontName);
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** END FONT INFO *****\n");

return;
}

/*-----
* Function Name: OSA_OpenOutputFile
* Parameters: OSA_REPORT_INFO * Pointer to Report Info Structure
* OSASAMPLE_STRUCT * Pointer to OSA Sample Structure
* Exceptions: None

```



```

* Return Value: None
* Description: Create the file which will contain the sample output
*----- */

void OSA_OpenOutputFile (POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct)
{
/* Formulate the output file name based on information from Report Info. */
strcpy(pOSAReportInfo->szOSAFileName, pOSAReportInfo->szUBEFileName);
#if defined JDENV_AS400
/* On AS/400, the UBE file name is of the form LIBRARY/PRINTQUEUE(F99999),
where 99999 is the job number. We will just switch an O for the F to
indicate an OSA file. */
pStrPtr = strrchr( pOSAReportInfo->szOSAFileName, 'F' );
*pStrPtr = 'O';

#else
/* On platforms other than AS/400, just replace the PDF file extension with OSA. */
if( !strstr( pOSAReportInfo->szOSAFileName, ".pdf" ) )
{
/* If there is no .pdf extension, just tack on a .osa extension */
strcat( pOSAReportInfo->szOSAFileName, ".osa" );
}
else
{
sprintf( strstr( pOSAReportInfo->szOSAFileName, ".pdf" ), ".osa" );
}
}
#endif

/* Open the OSA file for output. */
pOSAStruct->fpOutput= fopen(pOSAReportInfo->szOSAFileName, "w+b");
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
/* If the file could not be opened, send an error message back to the UBE log */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = 1;
}

sprintf(pOSAReportInfo->szLogMessage, "Could not open OSA file: %s\n", pOSAReportInfo->szOSAFileName);

```

```

return;
}

return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_StartDoc */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Open the output file, */
/* Output Report, Section and Object */
/* properties. */
/*----- */
EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_StartDoc(OSA_REPORT_INFO* pOSAReportInfo)
{
    POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;
    POSA_SECTION_INFO pOSASectionInfo = NULL;
    POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo = NULL;
    char *pStrPtr = NULL;
    unsigned long i = 0;
    unsigned long j = 0;
    if(!pOSAReportInfo )
    {
        return;
    }
    /* Allocate memory to hold severity value.
    Deallocated in OSASample_EndDoc */
    if (!pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
    {
        pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity = malloc(sizeof( unsigned short));
    }
    if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
    {
        pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity[0] = 0;
    }
    /* Create the common structure for passing values between functions,
    if it has not been created before this point. */
    if (!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)

```

```

{
pOSAStruct = malloc(sizeof( OSASAMPLE_STRUCT));
if (pOSAStruct)
{
memset(pOSAStruct, 0, sizeof(OSASAMPLE_STRUCT));
}
else
{
strcpy(pOSAStruct->szLogMessage, "OSA: Could not allocate External Data Pointer.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAStruct->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAStruct->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
}
/* Record the pointer as the external data pointer in Report Info. */
pOSAStruct->pExternalDataPointer=pOSAStruct;
}
/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAStruct->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAStruct->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at End Doc.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAStruct->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAStruct->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}
pOSAStruct=pOSAStruct->pExternalDataPointer;
/* Create output file if it has not been created yet */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
OSA_OpenOutputFile (pOSAStruct, pOSAStruct);
if (pOSAStruct->pnLogMessageSeverity[0] > 0)
return;
}

```

```

}
/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "***** START DOC EXECUTION POINT *****\n\n");
/* Output Report Info to file. */
OSA_ReportInfoOut(pOSAStruct, pOSAReportInfo);
/* Output Section Info to file. */
if (!pOSAReportInfo->pOSASectionInfo || !pOSAReportInfo->ulNumberOfSections)
{
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = 2;
}
sprintf(pOSAReportInfo->szLogMessage, "No Section Info present.\n");
return;
}
pOSASectionInfo = pOSAReportInfo->pOSASectionInfo;
for (i=0; i<pOSAReportInfo->ulNumberOfSections; i++)
{
OSA_SectionInfoOut(pOSAStruct, pOSASectionInfo);
/* Output Object Info to file. */
if (!pOSASectionInfo->pOSAObjectInfo || !pOSASectionInfo->ulNumberOfObjects)
{
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = 3;
}
sprintf(pOSAReportInfo->szLogMessage,
"No Object Info present for Section %s.\n",
pOSASectionInfo->szSectionName);
return;
}
pOSAObjectInfo = pOSASectionInfo->pOSAObjectInfo;
for (j=0; j<pOSASectionInfo->ulNumberOfObjects; j++)
{
OSA_ObjectInfoOut(pOSAStruct, pOSAObjectInfo, 0); /* Do not print Item Info at this time. */
pOSAObjectInfo++;
}
pOSASectionInfo++;
}

```

```

}
}

/*----- */
/* Name: OSASample_EndDoc */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_PAGEOF_INFO*, unsigned long */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Open the output file, */
/* Output Report, Section and Object */
/* properties. */
/*----- */
EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_EndDoc(OSA_REPORT_INFO* pOSAReportInfo,
OSA_PAGEOF_INFO* pOSAPageofInfo,
unsigned long ulNumberOfStructs)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;
/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}
/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at End Doc.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}
/* Close Output File */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** END DOC EXECUTION POINT *****");

```

```

if (pOSAStruct->fpOutput)
{
fclose (pOSAStruct->fpOutput);
}

/* Delete the structure created to hold the external data */
free (pOSAStruct);
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
free(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity);
pOSAReportInfo->pExternalDataPointer = NULL;
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_StartPage */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Report Info to output file. */
/* */
/*----- */
EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_StartPage(OSA_REPORT_INFO* pOSAReportInfo)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;

/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at Start Page.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
}
}

```

```

return;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;

/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Start Page.\n");

/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** START PAGE EXECUTION POINT *****\n");
OSA_ReportInfoOut(pOSAStruct, pOSAReportInfo);
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_EndPage */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_LINK_INFO*, unsigned long */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Report Info and Link Info */
/* */
/*----- */

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_EndPage(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_LINK_INFO pOSALinkInfo,
unsigned long ulNumberOfLinks)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;

/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

```

```

/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at End Page.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at End Page.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** END PAGE EXECUTION POINT *****\n");
OSA_ReportInfoOut(pOSAStruct, pOSAReportInfo);
/* Output Link Info */
OSA_LinkInfoOut(pOSAStruct, pOSALinkInfo, ulNumberOfLinks);
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_SetFont */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_FONT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */

```



```

/* Description: Output Font Info */
/* */

/*----- */

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_SetFont(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_FONT_INFO pOSAFontInfo)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;

/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

/* Allocate memory to hold severity value.
Deallocated in OSASample_EndDoc */
if (!pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity = malloc(sizeof( unsigned short));
}

if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity[0] = 0;
}

/* Create the common structure for passing values between functions,
if it has not been created before this point. */
if (!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
pOSAStruct = malloc(sizeof( OSASAMPLE_STRUCT));
if (pOSAStruct)
{
memset(pOSAStruct, 0, sizeof(OSASAMPLE_STRUCT));
}
else
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: Could not allocate External Data Pointer.¥n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
}
}
}

```

```

}
}

/* Record the pointer as the external data pointer in Report Info. */
pOSAReportInfo->pExternalDataPointer=pOSAStruct;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Create output file if it has not been created yet */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
    OSA_OpenOutputFile (pOSAReportInfo, pOSAStruct);
    if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity[0] > 0)
        return;
}

/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
    strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Set Font.\n");
    /* Set the correct severity to error message severity */
    if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
    {
        *(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
    }
    return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** SET FONT EXECUTION POINT *****\n");
OSA_FontInfoOut(pOSAStruct, pOSAFontInfo);
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_SetColor */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, unsigned long int */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Color Reference Number */
/* */
/*----- */

```

```

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_SetColor(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
unsigned long int zColorRef)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;

/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at Set Color.¥n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Set Color.¥n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "¥n***** SET COLOR: %d *****¥n", zColorRef);
return;
}

```

```

}
/*----- */
/* Name: OSASample_TextOut */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_OBJECT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Font Info */
/* */
/*----- */
EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_TextOut(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;
/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}
/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at Text Out.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}
/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Text Out.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */

```

```

if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}

return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** TEXT OUT EXECUTION POINT *****\n");
OSA_ObjectInfoOut(pOSAStruct, pOSAObjectInfo, 1);
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_Underline */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_OBJECT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Font Info */
/* */
/*----- */

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_DrawUnderline(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;

/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at Draw Underline.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
}
}

```

```

}
return;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Draw Underline.\n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "\n***** DRAW UNDERLINE EXECUTION POINT *****\n");
OSA_ObjectInfoOut(pOSAStruct, pOSAObjectInfo, 1);
return;
}

/*----- */
/* Name: OSASample_DrawObject */
/* Parameters: OSA_REPORT_INFO*, OSA_OBJECT_INFO* */
/* Exceptions: None */
/* Return Value: None */
/* Description: Output Font Info */
/* */
/*----- */

EXTERNC APIEXPORT void CDECL OSASample_DrawObject(POSA_REPORT_INFO pOSAReportInfo,
POSA_OBJECT_INFO pOSAObjectInfo)
{
POSASAMPLE_STRUCT pOSAStruct = NULL;
/* If OSA does not provide the needed parameter (Highly unlikely), then return */
if(!pOSAReportInfo )
{
return;
}

```

```

/* If the external data pointer does not exist execution
cannot go on. Set severity to the highest value, assign a message for the
log and return */
if(!pOSAReportInfo->pExternalDataPointer)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No External Data Pointer at Draw Object.%n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Output Report Info */
pOSAStruct=pOSAReportInfo->pExternalDataPointer;
/* Check for valid file pointer */
if (!pOSAStruct->fpOutput)
{
strcpy(pOSAReportInfo->szLogMessage, "OSA: No Output File pointer at Draw Object.%n");
/* Set the correct severity to error message severity */
if (pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity)
{
*(pOSAReportInfo->pnLogMessageSeverity) = (unsigned short)1;
}
return;
}

/* Identify the Execution Point */
fprintf(pOSAStruct->fpOutput, "%n***** DRAW OBJECT EXECUTION POINT *****%n");
OSA_ObjectInfoOut(pOSAStruct, pOSAObjectInfo, 1);
return;
}

```

